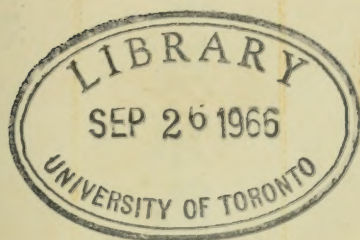
日本戲曲全集
第十九卷
化政度京阪仇討狂言集
東京
春陽堂版
R. Saito

日本戯曲全集　第十九巻　目次

文化文政京阪仇討狂言篇

隨御勸　再讐討繰返　盆狂言榮
閏月遲滯成

是は此度の新板めづらしき次第先々よりの御評判は矢よりも早き早瀨兄弟が心は張弓的は名におふ槍の達人しかも樫柄の敵の家元東間某それにはあらで一つ家に鬼玄蕃が若黨の安達彌助が噂もきのふ京屋萬助子供喧嘩の扱ひに當つて碎く人形屋が細工は流々

一騎當千晴業見惠襷
臨兵鬪射瑳速群集菱

敵討天下茶屋聚

四番續

表のカタリには、この狂言が初めて江戸で上演された、天保六年七月の中村座の番附に現はれたものである。隨つて、上方狂言ではあるが、江戸化した文章になつてゐる。三重襷、九字菱なぞといふ紋がよみ込んであるのは、この時の俳優、三津五郎や彦三郎の替へ紋である。下掲の凸版は、同じく天保六年七月中村座所演の折の櫓下番附である。ゴツチヤになつてゐるからお解り憎いかも知れぬ。
本文に挿入した錦繪は、いづれも後年上演の折に發行されたもの、複雑だからその箇々について説明を入れて置いた。

敵討天下茶屋聚

口明

愈伽山の場

役名　浮田千里姬。神主、國定。浪川新六。玉江正之進。石田又右衞門。大山丹平。黑井官八。茶道、珍齋。中老、鷹の尾。腰元・道柴。同、鎗梅。同、みどり。同、糸萩。乳人、淺野。早瀨源次郞。妹、葉末。姉、染の井。浮田中將秀秋。岡船岸の頭。下部、林平。奴、腕助。東間大藏。

造り物、平舞臺、見附け奧深に草土手、見切り垣、上手に石の鳥居つゞき、玉垣、石燈籠、舞臺一面の枝垂れ櫻、所々に床几、下手、澤瀉蝶の紋附き、白張り幕。すべて備前の國、愈伽大權現馬場先の模樣、幕の內より千里姬の子役、さゝげ附きの襠補にて、眞中の床几に腰をかけ、次に淺野、着附け襠補、櫛出し帽子、守り刀を差し、乳母の拵らへにて、短册に歌を書いてゐる。道柴・腰元にて、硯箱を差出しゐる。上手の床几に、みどり、糸萩、振り袖、屋敷娘の形にて、鷹の尾、中老の形にて短册を持ち、立つてゐる。下手に鎗梅、腰元の姿にて、振りよき枝へ短册を附けてゐる。三味線入り、やはらかな神樂にて幕明く。

鎗梅　申し〳〵、糸萩さま、どの枝に致しませう。

糸萩　サア、みどりさまのお短册と、一緒の枝へ附けて下さんせ。

鎗梅　アイ〳〵、斯うでござりますかえ。

ト短册を附ける。

糸萩　アイ、お慮外でござりまする。

道柴　申し、姬君樣、此マア見事な花を御覽じて、お氣をお晴らし遊ばしませいなア。

千里　たんと花があるので、自らも喜ばしいわいなう。

鷹尾　イヤモウ、お姬樣もお喜びなさるゝ筈。この鷹の尾も、このお社へ、ついぞ參詣を致した事がござりませぬによつて、マア初めてのやうなもので、外恥かしいやら怖いやら、いかう案じてゐましたが、此マア花盛りを見

ましては、いつそ心もしよぎ〳〵と致しまする。申し、淺野さま、まだお硯は明きませぬかいなア。

ト筆を持ち、歌を案じてゐて

淺野　オヽ、せわし。鷹の尾さんとした事が、其やうにイライラと仰しやりますないなア。

鷹尾　イヽサア。わたしや何も、イラ〳〵とは致しませねど、皆さんはもうちやんとあのやうに、お歌を遊ばして、櫻の枝へ附けさんしたゆゑ、わたしやいかう氣が急きますわいなア。……どうでござんす。まだかえ。

淺野　其やうに云うて下さんすな。マア、待つて下さりませいなア。

ト矢張り案じてゐる。

鷹尾　それでも、其やうに隙がいりますと、折角この鷹の尾が浮かみました、天晴れ腰折れの腰が折れますわいなア。

トいろ〳〵あせる。淺野、浮かみしこなしにて、サラサラと書き

淺野　サア、もうようござりまする。ちやつと鷹の尾さんへ。

鈴梅　ハイ、畏まりました。

ト鷹の尾へ持ちゆき

ハイお硯。

ト差出す。

鷹尾　エヽ、悔りするわいなア。

ト筆を取り、口の中にてちよつと歌を考へて見て

サア〳〵、こりやひよんな事した、忘れたわいなア〳〵。

ハテ、何とやら

ト思案する。淺野、短册の歌を讀み下し見て

淺野　申し、皆さん、恥かしながらわたしが心、ちよつと聞いて見て下さりませいなア。

道柴　淺野さんのお歌なれば、サア、みどりさん

鈴梅　定めてお見事でござりませう。

淺野　「霞かと見紛ふ空も花の山、一際まさる神の御愛樹」。

鷹尾　ソレ出たわいなア。

糸萩　鷹の尾さん、出たとは何が

皆々　出ましたぞいなア。

鷹尾　イヤ、待たしやんせえ。

ト短册へ書き

サア、わたしが秀吟、聞いておくれ。

淺野　鷹の尾さんのお歌なら、お優しいお歌でござりませ

う。

鈴梅　わたしらも早う

糸萩　承りたうございますわいなア。

ト短册を持ち前へ出て

鷹尾　サア、お聞きなされや。「樂しみはさゝへ提げ重取ひろげ、花の下にてさぞ鼻の下」。

道柴　ホ、、、、。ほんに鷹の尾さんのお歌のお心は、けうといお心でござりますなア。

鷹尾　わたしや花より團子の方でござりますわいなア。

糸萩　鷹の尾さんの笑止な事ばかり。

みど　ようひよかすかと

鈴梅　仰しやるわいなア。

ト神主國定、狩衣、刺貫の形にて出て來て

國定　ハツ、お知らせに依つて當社の神職國定、お迎ひに罷り出ましてござりまする。

淺野　すりや、あなたが當社の神職、國定どのでござりまするか。

鷹尾　早速のお出迎ひ、御大儀に存じまする。

國定　ハツ。これは姫君樣をはじめ、お女中樣方にも、遠路のところ、御苦勞の御參詣。

淺野　今日の御參詣は、國家安全、御武運長久の祈り、ならびに、これなる千里姫さまには、御神社へ初めての御參詣、殊に御幼年の姫君さま、延命長壽の御祈念、國定どのにはお心得でござりませう。

國定　成る程、御大切なる今日の御祈念。御神前に五色幣をならべ、四つの鉾を四神に供へ、榊には注連を掛け、清淨に致し置きましてござりまする。

鷹尾　なんと皆さん、結構な御祈念を受けまするとは、有り難いお供ではござりませぬか。

淺野　左樣でござりまする。この淺野とても、外珍らかな今日のお供、殊には見事に咲く神のお庭、花の眺めも、一しほに存じまする。

糸萩　みどりさんも、この糸萩も、お供がなくば、この眺めはござりませぬ。

みど　ほんに、うらゝかな春の景色。

鷹尾　その景色より私しは、早うお辨の御趣向が、眺めたうござんすわいなア。

糸萩　アレ、また其やうなさもしい事を

皆々　仰しやるわいなア。

千里　コレ淺野、早う參詣がしたいわいなう。

道柴　ほんに姫君さまには、さぞかし御退屈にござりませう。この上は御神前へ、御拜禮を致しませう。

千里　皆も、おぢや。

國定　イザ、御案內仕りませう。

淺野　姫君樣には、まづ

皆々　お入りあられませう。

ト三味線入りの神樂になり、一作靜々と鳥居の中へ入る。葉末、振り袖、屋敷風の娘。跡より染の井、同じ形にて、奴一人供して出る。

染井　これいなう妹、もそつと靜かに歩きやらんかいなう。今日はお姫さまが、瘉伽山へ御參詣なされて、結構な國家安全の御祈念があるによつて、兄弟づれで御參詣がてら、お姫さまお迎ひに行て來いとて、いつにない父さんのお許し。

葉末　サア、それでわたしや嬉しいゆゑ、足も早うござりまする。姉さんは何ぢややら、道草ばかりなさるゆゑ、それでお隙がいりますのぢやわいなア。

染井　あの妹の、あんな事云やるわいなう。殿達と違うて、つい出らるゝものではなし、さうして今日の御祈念とやらは、わたしらが精出して行て、お構ひ申さいでも大事ないわいなう。いつも父さんのお側では、堅苦しいによつて、今日は方々を歩いて遊びや。その代り、お屋敷へ歸つてから、ちつとは叱らるゝと思うてゐたがよいわいなア。

葉末　アノ姉さんとした事が、それを云ふ事かいなア。心の中で思うてゐやしやんしたがよいわいなア。

染井　ほんになう。

ト奴の頭を叩く。

奴　これは又、迷惑なお供を云ひつけられた事だ。何ぢややら、走つたり、ベタ／＼になつたり。マア、ちつとお休みなされませぬか。

染井　ほんに、さうせうわいの。幸ひあれに設けもあり、サア妹、マア行きやらんか。

葉末　アイ／＼、姉さん、お先へ。

ト入れ代らんとするを。

染井　なんの、遠慮しやる事がある。マア先へ行きやいなう。

葉末　そんならお免しなされませえ。

染井　サア、行きや／＼。

ト本舞臺へ來て

されや。コレ、其方は暫らくどこへなと行て、後に迎ひに來て下

奴　アイヤ、申しそれでは。

染井　ハテ、大事ないわいなう。

奴　左樣なれば

染井　行きや／＼。

奴　ハツ。

ト橋がゝりへ入る。

染井　コレ妹、其方、今の物、落しやしやらんか。

葉末　イエ／＼、爰に持つて居りますわいなう。

ト封じ文を出す。

染井　わしも隨分氣は附けて居るけれど、其方も氣を附けてたもや。

葉末　早瀨さまのお中間、彌助どのとやらに、渡したらよいのでござりまするかえ。

染井　さいなう。伊織さまには、坂本へお越しなされ、お便りが無いゆゑ、その文でお尋ね申すのぢやほどに、其方が彌助どのに渡してたもや。

葉末　さうして、彌助どのわえ。

染井　さいなう。今日は父御の、玄番さまの御名代に、伊織さまの弟御、源次郎さまが御參詣なさるゝ節、お供は定めし彌助どの。

葉末　そんならアノ、弟御の源次郎さまは、この宮へ御參詣なされたのかえ。

染井　さうぢやわいなう。

葉末　申し／＼姉さん、わたしやアノ、源次郎さまに。

染井　どうぞしやつたかなう。

葉末　わたしや急に姉さんに、尋ねにやならぬ事がござんすわいなア。

染井　エヽ、改まつて、何ぢやぞいなう。

葉末　アノ、外でもござりませぬが。

ト云はうとして

オヽ恥かしい。

染井　エヽ、何ぢやぞいなう。

葉末　コレ、姉さんいなア。

染井　ヤア。

葉末　姫御前が殿達を思ひ込んだら、どのやうなものでござりますえ。

染井　オヽ、葉末とした事が、あんな事を云やるわいなう。ほんに、姫御前が殿達を思ひ込んだら、立つても居

ても、どうも斯うもならんものぢや

ト葉末を見て

といなう。この姉は、まだ殿達に惚れて見た事が無いによつて、知らぬわいなう。

葉末　イエ、姉さん、わたしや惚れてゐるわいなア。

染井　なんぢや、わが身も惚れてゐる人があるかや。

葉末　アイ。

染井　がをれ。其方はマア姉さんより、味をやりやるわいなう。さうして、その殿御のお名はや。

葉末　サア、それはな。

染井　どなたぢやぞいなう。

葉末　アノ、早瀬の御子息さん。

染井　ヤア。

ト聞き咎める

葉末　弟御の

染井　源次郎さまかいなう。

葉末　アイ。

染井　オヽ、出かしやつたよう。マア惚れてたもつたなう。

葉末　姉さんの手前、恥かしい事ながら、わたしや惚れてゐるけれど、どうも直には云はれませぬ。これから姉さんの云うてぢや事は、何に依らず聞きまする程に、どうぞその代り、お前さんがわたしのお世話を。

染井　この姉に取持つてくれと云やるのか。オヽ、出かしやつた、ようマア惚れやつたなう。外ならぬ其方の事、取持つてはやりませうが、最前の姉が頼みを。

葉末　そりや、わたしがよいやうに。

染井　してたもるか。コレ妹、有やうは早瀬の兄御、伊織さまに、この染の井は……疾から惚れてゐるによつて、文使ひやら何かの事を、頼まうと思うてゐましたけれど其やうなみだらな事、姉の口から妹に頼むは、ほんに道ならぬ事と、差扣へてゐましたが、ようマア其方も殿達に、惚れてゐやつた事ぢやわいなう。

葉末　さうして、もうこれへ、お越しなされてござるのかいなア。

染井　サア、お便りが聞きましたいけれど、神前の方へ行て、ひよつと家中の衆に見附けられたら、結局逢はれまいかと、それで案じてゐるわいなう。

葉末　そんならマア、暫らく爰に待ち合して居るうちに、お便りがござりませう。

染井　ハツとモウ辛氣な……姉の心を推量しや。

葉末　姉さん、わたしが心も推量して下さりませいなア。

ト三味線入りの神樂になり、向うより源次郎、着附け振り袖、袴羽織にて出る。跡より林平、着附け袴、法被にて、三寶に色紙の箱を載せ出る。

源次　林平、見や。花物云はねど春を知り、皆一樣に盛りを爭ふは、なんと麗しき眺めぢやないか。

林平　左樣でござりまする。分けて當山の櫻は、花色もまさり、ア、、見事な事でござりまする。

源次　オ、、もうあれがお鳥居先、最早聞ゆる祈念の調べ。こりや、甚だ遲刻いたしたと見ゆる。林平、供しや。

林平　サ、、ござりませ。

ト本舞臺へ來るうち、染の井葉末見て、いろ／＼こなし。染の井、葉末を突きやる。葉末、染の井の手を取つて引合ひ、源次郎の行く先へ立ち、顏見合せ

葉末　あなたは早瀨源次郎さま。

染井　只今お越しでござりまするか。

ト源次郎是非なく立ちどまる。林平見て、こなし。

源次　どなたかと思へば、刑部さまの御息女御姉妹。

林平　さては、あなたさま方にも、御參詣なされてでござりまするか。

二人　ハイ。

トこなしあつて、行く先を塞ぎしゆゑ、源次郎困る體にて

源次　某が遲刻、お待ちかねてはござりませぬか。

二人　アイ。

ト顏見合せ、こなし。

林平　ハツ。

ト源次郎行きかけるゆゑ、是非なく入れ違ひ

染井　コレ申し、林平どの。

ト染の井、林平の袖を引く。葉末は源次郎の袖を引く。兩人顏見合せて、双方を振り切り、始終神樂のいけ殺しにて、靜々と鳥居の中へ入る。染の井、葉末、辛氣なこなしにて、見送り

葉末　折角お目にかゝつたものを、つツとモウ姉さんのもどかしい。

染井　何を云やるぞいなう。其方こそもどかしい。いつそこれから其方が、直々にお側へ行て

葉末　源次郎さまのお目にかゝり

染井　心の丈を云やいなう。

葉末　そんなら姉さん。
染井　サア、ちやつと行きやいなう。
　ト少し行きかけて
葉末　アノ、わたし獨り行くのかえ。
染井　知れたこと云やるわいの。
葉末　それでもわたしや。
染井　早く行きやらぬかいの。
　ト是非なく葉末、上手へ慕ひ入る。始終神樂いけ殺し。
ほんにマア、油斷も透きもなる事ぢやない。ちやんと殿達を慕ふやうになりやつたわいなう。
　ト見送りゐる。橋がゝりより大藏、着流し、浪人の形にて出かけゐる。
それはさうと妹が、あの林平どのに、文を屆けてたもるかしらん。ドレ、わたしが直に行て逢うてこうか。
　ト行かうとする。大藏、ズッと向うへ出て
大藏　染の井どの、待たつしやれ。
染井　ヤ、こなたは大藏どの。
大藏　染の井どの、こなたはまだ大藏といふ名を覺えてござるか。まだしもぢやわい。そりやハヤ、今では浪人。漂泊の身の上なれども、浮田の御家中では、一二を爭ふ東間三郎右衞門が肉身の弟。東間大藏。然し當國お構ひの身分、武者修行なぞに出まして、他國へ入り込んでは、有りつきの口もあらうが、そこを堪へて、當國にへちまうてゐるは、こりや何の爲でござる。染の井、皆こなたに執心ゆゑでござるぞ。これまでいろ／＼と、手を替へ品を替へ口說いても、云ひ號けの伊織に心中を立つて、身共が云ふ事、聞入れて下さらぬは、つれなくござるぞや。今日は姫君、この愈伽山へ御參詣と承り、大方お越してあらうと、ちやつと先へ仕掛けて參つたのぢや。なんと、よう凝つたものでござらうがや。勤めて居つた時分は、よい首尾はたま／＼の事。今は浪人者の氣散じ、差合ひ無しの我まゝ氣儘。なんと染の井どの、最早伊織が事は思ひ切つて、この大藏に色よい返事を
　ト云つても染の井、知らぬ顏して行くゆゑ
どこへ／＼。どうぢやぞいの／＼。
染井　伊織さまといふ殿御のある身。無禮な事仰しやつたら、あなたのお爲になるまいぞえ。
大藏　オ、、こりや怖い事ぢやなア。爲にならうがなるまいが、素寒貧の天竺浪人、主も無ければ親は猶無し、一家もなければ緣者もなし、一本立ちのこの大藏。斯う顏

は四角四面でも、女にかけると、それは〳〵可愛がるぞや。どうぢや〳〵、染の井どの、あまり憎うはあるまいがの。

ト抱きつきにかゝる。

染井　滅多な事さしやんしたら、免しませぬぞえ。

ト手を振り上げる。

大藏　イヤモウ、その手で叩かれたらば、この大藏、浮かみ上がる。叩きなされ、サア、叩き〳〵。叩いておくれ。

ト抱きつくを、振り放して逃げようとする。床几を中にいろ〳〵ある。この時、腕助、奴の形、刀を風呂敷に包み、差して出て、大藏を見て、ツイと寄る。染の井逃げる。はずみに大藏、腕助を引寄せ、いやらしきこなし。腕助恟りして

腕助　エ、、何をなされますぞい。

ト突き放す。

大藏　ヤア、わりや腕助か。

腕助　あなたは大藏さま。

大藏　そんなら今のは。

腕助　大藏さま、ちとお嗜みなされませ。下郎めが爰へ來かゝれば、染の井さまを追ひ廻してござるゆゑ、何でも爰らが御加勢どころぢやと、手傳ひかけてゐるものを、矢庭に捕へて。

大藏　エ、コレ、折角鹽梅ようやつたものを、また取逃がしてのけたわい。エ、、いま〳〵しい。

腕助　併し小男は油斷がならぬと、あなたのその勢ひでは大抵の女は逃げますわい。

大藏　エ、、何を馬鹿な。して、其方がこれへ參りしは、何ぞ兄貴からの用でもあつてか。

腕助　イエ〳〵、お旦那の御用ではござりませぬ。今日この所へ參りしは、岸の頭さまの御用につきまして。

大藏　ナニ、岸の頭さまが、この大藏に。

腕助　サア、お頼みの儀につき、あなた樣にお目にかゝらんと、これへ參りしものを、矢庭にひんだかへて、ひどい目にお合はせなされ、今だに恟りが止りませぬ。

大藏　ハテ變つた。岸の頭どのよりの御用とは、如何やうな儀ぢや、火急な事か。

腕助　いかにも左樣。今日は當社にて、國家安全の御祈念がござる。それにつき、早瀬玄蕃が預かり居る、浮田家の什物、貫之の色紙を。

大藏　コリヤ、密かに云やれ。

腕助　ハツ。その色紙を早瀬源次郎めが、この所へ持ち參るは必定。何卒かの色紙を、こなたに加勢を頼み、人知れず盜み取り、立歸れよと、岸の頭さまが密かのお頼みでござりまする。

大藏　ムウ。すりや、早瀬源次郎が、この所へ持參いたせし色紙、人知れず掠め取り

腕助　岸の頭さまへお渡し申せば、一廉の御褒美。

大藏　その位ゐな事は、いと易い事。後方までに、首尾よく仕負ふせ、汝に渡すワ。

腕助　どうでも餅屋は餅屋ぢや。ちやんと極まつた。

大藏　併し、其方がこれに居らば、身も頼んで置く事がある。

腕助　して、お前のお頼みは。

大藏　コリヤ。

ト引寄せ、囁く。

腕助　左樣ならば、今の染の井どのを。

大藏　いま一度口說き落して、手に入らぬ時は、今云うた通り、其方も共々に。

腕助　成る程、ひツかたげて退くとは、手ひどい遣りやう。

大藏　まだ何かと話しもあれど

腕助　爰は人目を憚るゆゑ

大藏　幸ひ地内の煮賣り屋にて

腕助　世話代に立てなんすか。

大藏　また身共に引つくかい。

腕助　ハテ、世話役は、これが附け目ぢや。

大藏　ハテ、慾の無い奴なア。

腕助　そんなら大藏さま。

ト神樂の打あげにて、兩人上手へ入ると、向うより雁一羽、引き糸にて來る。トセイ向うより秀秋、黑木綿の絆纏、ぶツ裂き、紫の股引、菅の一文字笠にて半弓をかいこみ出る。跡より珍齋、茶坊主にて、着附け羽織、澤瀉蝶の紋附きにて、刀を持ち出る。跡より新六、正之進、又右衛門、各々絆纏、股引、半弓や吹矢筒を持ち出て、キツと雁に目を附け

秀秋　飛行の雁は連なるべきに、斯く一鳥の風をよぎり、雲間はるかに飛び廻る。

新六　離れ去る雁は彼所に現はれ

正之　宮居の側を飛び廻るは

又右　心得ざるこの有様。
秀秋　その審かしき雲間の雁も、予が弓勢にて神へのかけ
　鳥、これを見よ。
　ト切つて放つ。鳥、本舞臺へ落ちる。
皆々　さてこそお手柄。
秀秋　皆々來やれ。
　トつか／＼と本舞臺へ來る。新六、右の雁を取上げ。
新六　兩羽を縫ひとめ、斯くの通り。
　ト差出す。秀秋、ニッコリと笑ふ。
正之　誠に通しの御射術。
又右　我れ／＼どもが、及ばぬ事。
新六　今日のお手柄
皆々　恐れ入りましてござります。
　ト秀秋、半弓を渡し、床几へかける。橋がゝりよりバ
　タバタにて丹平、官八、雉子に矢二筋刺し通したるを
　引合ひ出て
丹平　ハツ、殿にはこれにお渡りあるか。
官八　丹平どの、お放しなされい。
丹平　イヤ、貴殿こそ放さつしやい。
官八　こりや何か、人の手柄を横取り召さるか。
丹平　官八どの、默らつしやれ。
新六　御兩所とも、殿の御前。
正之　何ゆゑのその爭ひ。
又右　鎭まり召され。
　トこれにて兩人、下にゐる。
丹平　ハツ、この丹平が射とめし得物、これなる官八どの
　が無法の横取り。
官八　これはしたり丹平どの、人の手柄を貪るやうな官八
　ではござらぬ。慥かな證據は、射とめしこの矢。
丹平　拙者も證據はこの矢柄、どこまでもこの雉子は、身
　共が得物。
官八　官八が手柄に相違ござらぬ。
秀秋　兩人待て。
新六　殿のお詞、兩人とも鎭まらつしやれ。
兩人　ハ、ハツ。
秀秋　汝等が爭ひは、一羽の雉子に二筋の、矢を射こみし
　ゆゑか。
丹平　ハツ、それゆゑにこそ
官八　この爭ひ。
秀秋　これへ持て。

兩人　憚りながらお取次。
ト兩人して手を掛け、差出す。珍齋つッと寄つて受取り、秀秋へ持ち行く。秀秋見て、二筋の矢を引拔き
秀秋　兩人とも、近う參れ。
兩人　ハ、ハツ。
ト少しにぢり寄る。秀秋、二筋の矢を差出し
秀秋　各自が矢、覺えがあらう。
丹平　この丹平が矢柄は、鏑矢に大文字のたがねめ。
ト取る。
官八　この官八が矢柄は、無銘の尖り矢。
ト取る。
秀秋　それで我が矢柄が解りしか。
兩人　ハツ。
秀秋　この得物は、その矢柄にて解つたぞよ。
兩人　ハ、ハツ。
秀秋　大山丹平、其方が得物なるぞよ。
丹平　エ、有り難う存じまする。
官八　アイヤ殿、恐れながら一羽の雉子を、縫ひとめし矢は二筋。
秀秋　さればサ、大山が鏑矢は、片羽を縫ひ通し、汝が矢は脊より射込む。甲の矢、乙の矢の證據は暗からず、論ずるに物なし。併し互ひに、遺恨をさしはさむまじきやう、只今これにて、予が射とめしそれなる雁、官八に讓りくれう。汝が得物に致してよからう。
官八　すりや、殿樣の御得物を。
珍齋　早くお請け申されよ。
官八　有り難う存じ奉りまする。
トのつとになり、この時上手より腕助出かけ、丹平と顔見合せ、丹平「惡い」と仕方するゆゑ、是非なく隱れる。
秀秋　方々、あの調べは。
新六　ハツ、千里姫さま、御社參によつて、當社の祈念。
正之　彼の鼓は神樂の調べ。
又右　殿樣にも、御參詣のほど
皆々　願はしう存じまする。
秀秋　すりや、千里姫には當社へ參籠。折に幸ひ、予も參詣いたさん。
皆々　然らば、我が君。
秀秋　方々、參れ。
皆々　まづ、お入りあられませう。

ト始終神樂にて、一件上手へ入る。丹平殘り、こなし。

腕助出て、小聲になり

腕助　丹平さま。

丹平　コリヤ、密かに……して、岸の頭さまの御内意、いよいよ其方、村正の一腰を、これへ持參いたしたか。

腕助　成る程、岸の頭さま重々の御用につき、われでなくばと擢出され、小鳥狩の跡に附いて、見え隱れに、是非なくこれまで。

丹平　して、その業物は。

腕助　人目立つては、下郎めが身の上でござりますゆゑ、斯樣にいたし、持參仕りました。

ト風呂敷包みにしたる刀を出す。

丹平　出かした。暫時それに扣へて居れ。

腕助　イヤ申し、丹平さま、何か岸の頭さまには、下郎をお呼びなされ、譯も仰しやらずとこの刀を、大山丹平に渡して參れとばかり御意なされたが、全體その村正の刀を、どうなさる御分別でござりまする。

丹平　されば、かねて岸の頭さまと申し合せ、斯く計らふは、深き所存あつての事。即ち殿、秀秋公には、至つて優美のお生れつき。この村正の刀の奇瑞は、短慮なる者が帶せば、その人優雅となり、勇氣ある人この劍を帶すれば、却つて短慮となる稀代の業物。

腕助　成る程、それで樣子がサラリと解りました。その刀を殿が帶し、御短慮つのつて、多くの人をお手討あらば

丹平　その虚に乘つて、備前美作の兩國、押領せん岸の頭さまの計らひ。

腕助　ほんに、何から何まで拔け目の無い、お計らひでござりまする。

ト珍齋、秀秋の刀を抱へ出て、うそ〳〵こなし。

珍齋　丹平どの。

丹平　殿のお首尾は。

珍齋　大極上々の首尾。

丹平　して、お差替は。

珍齋　即ちこれに。

ト差出す。

丹平　手ツ取り早う、この刀を。

ト村正の刀を摺りかへる。

珍齋　入れ替へ置くが品玉の種。

丹平　互ひに差替へ

珍齋　斯うして置けば

丹平　我々が日頃の望み。
珍齋　追ッつけ成就いたすでござらう。
丹平　して、この刀は。
　ト秀秋の刀を持つて云ふ。
珍齋　鍵を入れて當社へ奉納。
丹平　幸ひこの御用、腕助、其方に申し附ける。
腕助　すりや、その刀を神前へ。
丹平　必ず人に氣取られな。
腕助　お氣遣ひなされまするな。さすもんではござりませぬ
　ト受取る。
珍齋　また申し合す密事もあれど
丹平　身に暇なき野外のお先。
珍齋　萬事は歸館いたした上
丹平　然らば腕助、隨分ぬかるな。
腕助　心得ましてござりまする。
珍齋　丹平どの、お先へ參る。
丹平　まづ、ござりませ。
　ト上手へ入る。腕助、刀を持ち、向うへ出て
腕助　どうやら斯うやら一色方附いたら、また跡へこんな事を云ひ附けられ……併しマア、御繁昌でよいわい。彼方からも腕助、此方からも腕助と、金儲けの蔓ぢや。ドリヤ、これもしくじらぬやうに、やつてくれうか。
　ト刀を抱へ、上手へ入る。神樂になり、鷹の尾出て
鷹尾　ヤレ／＼、面白うない國家安全の御祈念で、ほつと退屈したわいなう。それはさうと、今ちらりと見た早瀨源次郎どの。ほんに／＼、可愛らしい前髪さん。あんな美しい、水の出るやうな前髪さんと、なうコレ、朝日さすまで、ほんに寢たうござるわいなう。どうぞ仕樣はあるまいかいなう。
　トいろ／＼思案する。上手に人音するゆゑ
ヤア／＼、あれへござんすは源次郎さん。オ、辛氣、お連れがあるわいなア。どうぞよい首尾が……オ、もう爰へござんすわいな。オ、さうぢや、マア、あの幕の中へ隱れて居て……さうぢや／＼。
　ト下手の幕の中へ入る。上手より染の井、源次郎を連れ出る。跡より葉末出る。源次郎、三方に色紙を載せ、持つてゐる。
源次　染の井さま、こりや何れへ參るのでござります。
染井　イエ／＼、たんとお隙は取らせませぬ。マアこれへ、

源次　お越しなされて下さりませ。染の井さま、して、この源次郎に何の御用で、これへお呼びなされたのでござります。
染井　サア、その御用事と申しまするわナ。
源次　如何やうな事でござりまするな。
染井　コレ〳〵、妹、其方、爰へ來て、ちやつと云やらんかいなう。
源次　すりや、妹御が、拙者へ御用とな。
染井　ハイ、左様ぢやさうにござります。
源次　サア、御用事とあらば承りませうが、今日は父上様の仰せを受け、これ御覽なされ、斯く大切なる貫之の色紙を、寶藏より取出し、これへ持參仕り、御祈念の内は神前へ飾り、勤番いたさねばなりませぬ。さしてもの御用でござりませぬなれば、また承りまする折もござりませうほどに、今日はマア、御容赦にあづかりませう。
ト行かうとするを捕へ
染井　ア、申し、それではこの妹が。
源次　左様ござらば、早く仰せられませう。
染井　サア〳〵妹、早くあなたへ、申し上げやいなう。
葉末　サア、あなたへ申し上げます事、たんとござりますれども、あなたのお顏を見まするると、お恥かしうてナ。
染井　エ、、氣の叶はぬ。其やうな事では埒が明かぬわいの。ツイ斯う〳〵でござりますと、其方の口から、云やつたがよいわいの。
葉末　ほんに姉さん、それ程に思うてなら、ツイ側から、云うて下さんしたがよいわいなア。
染井　それぢやと云うて其方の心に、どのやうな事思うてゐやるやら、それをわたしが知つた事かいなう。妹、斯うしや、わたしは御地内へ來て、林平どのに話しもあり、なんぼう兄弟でも、差合ひがあつては氣も張らう。其方と二人差向ひで、とつくりと源次郎さまへの御用事を、
葉末　それでも、大事ござりませぬかえ。
染井　其やうな事云ふ者が、此やうなこと仕出すものかいなう。サア、そんならこの姉は行くほどに、必らずともに
ト源次郎を見て、
左様なら源次郎さま。妹があなたへ御用事、何によらず承つてやつて下さりませ。ドリヤ、私しは林平どのに逢うて來ませうわいなう。
ト神樂になり、染の井、いろ〳〵こなしあつて入る。

跡なまめいた合ひ方。

葉末　コレ申し、姉さんいなア。わたし一人では否でござりますわいな。コレイナア。アノ姉さんとした事が、わたしたつた一人、爰に置いてから。

ト源次郎と顔見合せて、ちやつと顔隠す。

源次　イヤ／＼、コレ、葉末どの、この源次郎、只今も申しまする通り。殊の外の心急き。御用事もあらば承りませう。

葉末　左様なら私しが用事、聞き届けて下さりますかえ。

トそろ／＼側へ寄る。

源次　いかにも。ちやつと仰せられて下され。

葉末　サア、その用と申しまするはナ。

源次　如何やうな儀でござるぞ。

葉末　サア、それはアノ、マア、斯うでござりますわいなア。

トちつと手を取り、床几へ腰かけさす。源次郎、振り拂ひ、こなし。この時大藏出かけ、この體を見てチヤッとこなし。

源次　これはしたり葉末どの、嗜み召され。

葉末　イエ／＼、嗜みますまいわいなア。誰れに遠慮もない云ひ號け、いつ沁み／＼のお話しさへもならぬ仲、幸ひのこの首尾、せめて優しいお詞を。

ト此うち大藏、色紙の箱を此方へ取つて來て、袱紗を解き、箱を出し、跡へそこにある硯箱へ蓋をしてソッと入れ、元のやうに袱紗を結び、色紙の箱を戴き、入る。兩人これを知らず

源次　サア、たとへ云ひ號けにもせよ、今日は大切ない父上樣の御名代。こなたもお姫樣のお供ぢやござらぬか。もし斯ういふ所へ、家中の衆でも參らば、互ひの身の上でござります。

ト此うち下手より鷹の尾出て窺ひゐて、ソッと床几の後へ隱れる

葉末　それぢやというて、願うてもない今日の逢ふ瀬、幸ひあの幕の內。

源次　滅多な事を……そんな事したら惡いわいなう。

鷹尾　惡い／＼、ずんど惡うござんすぞえ。

ト鷹の尾、床几の下よりヌツと顏出す、兩人恟りして、ちやつと別れて顏隱す。

なんの、其やうに懼ふ事はない。わしぢや、イヤ、わしぢやない、鷹の尾でござんすわいなア。

兩人　エ、。

ト鷹の尾を見て

鷹尾　アイ、鷹の尾でござんす。あまりけなりいによつて、あなたは鷹の尾さま。ひツかけに出たのぢやわいなア。

葉末　そりや何をえ。

鷹尾　イヤサ、その、ひツかけに出たと云ふは。

源次　何をでござります。

鷹尾　オヽ、さうぢや、葉末どのを呼んで來いてゝ、姫君様の召しますぞえ。

葉末　そんなら、わたしを召しますかえ。

鷹尾　左様々々。しかも急な用ぢやげな。

トこれにて源次郎、葉末、いろ／＼こなしあるを見て

これはしたり、何をしてぢやぞいなア。早う行かんせいなア。

葉末　ハイ／＼、只今參じます。ほんに、アタ好かん事ではある。

ト入る。

源次　この源次郎もお側へ‥‥鷹の尾さま、これにゆるりとお出でなされませ。

ト三方を持ち、行かうとする。この時腕助出かけ、この體を見て窺ふ。

鷹尾　待たしやんせ。

源次　御用かな

鷹尾　アイ、御用でござんす。お姫様からの御用でござんす。

源次　お姫様の御用とはな。

鷹尾　しかもお姫様が直々の御用。

源次　して、その御用とは、如何やうな儀でござる。

トこの時、腕助、いろ／＼見廻し、下手の幕の中へ入り、重箱を持ち出で　色紙の箱と入れ替へ、元のやうにして下手の幕へ入る。

鷹尾　外の事でもない、この鷹の尾を、女房にして下さんせ。

源次　エ、。

鷹尾　コレ、源次郎さん、わたしやお前に惚れました。

源次　エ、。

鷹尾　ぢやに依つて、幸ひのあの幕の中、ツイ、ちよこちよこと。

ト手を取るを振り放し

源次　お年に似合はぬ事を仰しやりまする。左様な事は存

じませぬ
鷹尾　知らんと云はしやんしても、無理やりに据ゑ膳するる。コレ、女子の据ゑ膳たべぬ者は、男の中ではないわいなア。
源次　エヽ。知りませぬわいなア。
鷹尾　そのツンとした所が、猶どうもならぬ。源次郎さん、どうぢやぞいなア。
ト手を取るを振り放す。鷹の尾、猶もしなだれかゝる。これにて源次郎、いろ／＼振り拂ひ、鷹の尾を突き飛ばし、ちやつと床几を隔てにして
源次　鷹の尾さま、後程お目にかゝりませう。
ト唄になり、三方を持ち、ツイと上手へ入る。鷹の尾起上り
鷹尾　コレ、源次郎さん。そりやあんまり胴慾でござんすわいなア。さうしてマア邪慳な。姫御前を突きこかして……こちや否々。
ト追ひかけて同じく入る。腕助下手より、そろ／＼出かけ……
腕助　しめたわい。然しマア、この大藏さまは、どこにうろついてござるのぢやしらん。全體、貫之の色紙々々と、皆が大切に云ふが、どんなもんぢやしらん。
ト此うち大藏出かけゐる。腕助、硯箱を明けながらマア、何ぢやあらうと、盗み物は半分の主ぢや。この間にちよつと拜見……ヤア、こりや硯箱ぢや。併し、貫之の色紙といふは、硯箱の替へ名かしらん。
大藏　イヤ、その本體は、これに座します。
腕助　ヤア、あなたは大藏さま。そんなら色紙は。
ト林平出かゝり、窺ふ。
大藏　てまへより先へ廻って、着服いたし置いたわい。
腕助　それはマア忝ない。
大藏　一時も早う、岸の頭さまへ。
腕助　心得ました。
大藏　早く／＼。
ト前へ出て
林平　色紙の盗賊、そこ動くな。
ト惘りして
腕助　ヤア、わりやア林平。
大藏　すりや、この樣子を。
林平　オヽ、とつくりと睨んだ。
兩人　そりや何を。

林平　ものした色紙、此方へ渡せ。
大藏　面倒な。腕助、ぬかるな。
腕助　合點だ。
ト勇ましき神樂になり、奪ひ合ひの立廻り樣々あつて、色紙は大藏の手へ渡る。腕助、林平立廻りのうち、花道へ摺りぬける。林平、腕助を投げちらし、大藏を追ひかけ、中程にて引ッ捕へ、腕助起上がつて追ひかけ、三人花道にて立廻りしい〳〵、入れ違ひ〳〵向うへ入る。チョン〳〵にて
黑幕切つて落す。上手、掛け稻、板松。東西窓蓋を下ろし、本釣り鐘、小鳥笛になる、
ト上手より新六、正之進、松明を照らし出る。秀秋、次に珍齋、附添ひ出る。次に丹平、官八、又右衞門、皆々松明を照らし
新六　御歸館の時刻、存じの外遲刻に及びましたれば
正之　殿には路次の御用心。
又右　いづれも御油斷なさやうに。
皆々　心得ましてござりまする。
秀秋　ハテ、われ達は、愚かな事を申す者どもぢや。武士は常に亂を忘れずといへば、たとへ夜に入るとても恐るゝ事のあるべきや。深山幽谷とても、何程の事あらん。その勢ひを以て、岸田光成と心を合せ、予はこれより出陣なさん。
丹平　ナニ、御出陣とな。さある時には我れ〳〵とて、眞先かけて乘り出し、手柄の程を御覽に入れん。
新六　斯くなる上は、少しも早く。
正之　御出陣あらせられませう。
秀秋　云ふにや及ぶ。歸館の上にて、急ぎ用意いたせ。
皆々　心得ました。
官八　アイヤ我が君、これまで度々御諫言申し上げしところ、お用ひありしに又ぞろや、今日御出陣あつては、幼君のお賴み、水の泡とも相成りますれば、何卒御出陣の儀は、平にお止まり下さりませう。
秀秋　いらざる留め立て、聞く耳ないわい。
官八　そこを何卒。
秀秋　たつてと申さば、手討ちに致すぞ。
官八　お手討ち合點。出陣ばかりはおとゞめ申す。
トきつと云ふ。珍齋こなしあつて、秀秋の手許へツッと刀を差附ける。秀秋、刀が手に觸りしゆゑ、短氣

に引抜き、官八をポンと切る。

皆々　これは。

ト珍齋、丹平、顏見合せてこなし。秀秋、血刀を差出す。新六、血を拭く。珍齋、鞘をあてがふ。シヤンと納める。珍齋引取る。秀秋、心の落ちつくこなしあつて、官八の死骸を見て、

秀秋　不便の最期……方々、參れ。

ト本釣り鐘、小鳥笛にて、一件向うへ入る。小鳥笛シヤンとやむ。合ひ方、上手の掛け稻を押分け、岸の頭、好みの忍びの形にて、小筒を構へ、ツッと出て、松明のあかりに目を附け、ツカ〳〵と出て、キッと見る。この時、橋がゝりより大藏出て、筒先へ行きあたる。岸の頭、悔りして、大藏を引退け、火繩を吹き、向うを見込むと、腕助、色紙の箱を持ち、下手より出る。跡より林平追ひかけ出て、腕助を捕へる。腕助、振り放す。大藏、岸の頭に取附く。腕助、林平を振り切り、逃げる。大藏と入れ替つて、この時腕助を蹴のける。これにて腕助、箱を取落す。林平、大藏を締めあげ、懷中を探す。色紙を持つてゐぬゆゑ、突き放す。岸の頭、筒先を向うへ向ける。林平猶も探る。大藏、岸の頭の筒先へ行く。腕助、岸の頭の後より引戻す。大藏色紙の箱を取上げ、下手へ逃げ出す。林平ちよつと捕へ、鼻の先へ岸の頭、小筒を差出す。林平叩き落す。岸の頭いらつて探る。腕助は岸の頭へかゝる。林平は大藏を引ッ捕へ、色紙の箱を引ッたくり、撫でゝ見る。此うち腕助、小筒を拾ひ、岸の頭へ打つてかゝるを引ッたくり、双方一時のキッカケにて、チヨンと木の頭、岸の頭、腕助を引敷き、向うを見込む。林平は大藏を締めあげ、色紙を戴く。よろしく

幕

大序

浮田館の場
大手先の場

役名——早瀨伊織。片岡造酒頭。早瀨源次郎。信樂道齋。山口新吾。黑塚金藏。廣見傳之丞。最上軍兵衞。岩淵半馬。浮田中將秀秋　岡船岸の頭。東間大藏。安達彌助。早瀨玄蕃頭。東間三郎右衞門。安達元右衞門。

造り物、平舞臺、向う一面の金襖。浮田家大廣間の

體、眞中に秀秋、着附け、長𧘕𧘔、拔き身を振り上げ、キッとなつてゐる。これを新吾、着附け、上下。軍兵衞・平馬、傳之丞、金藏、いづれも着附け、上下にて留めてゐる。この前に諸士一人、手討ちとなり倒れゐる。下手に源次郎、着附け、上下にて、諫言の心にて留めてゐる。諸士。茶坊主・小姓など同じく留めてゐる。大バタ〳〵にて幕明ける。

皆々　先づ〳〵、お止まりあられませう。

源次　たとへお手討ちになるとても、御諫言仕るまでは、いつかなこの座を動きは仕らぬ。

トこなしあつて云ふ。秀秋キッとなる。向うより三郎右衞門、ツカ〳〵と出て留める。

秀秋　そちや東間三郎右衞門。妨げ致すか。

三郎　イヤ、全く以て三郎右衞門め、殿に向つて妨げは仕らぬども、名智の君にも御一失とやら。たつた一言申し上げたき儀もござれば、まづ〳〵御短慮は偏へに。

秀秋　イヤ〳〵、若輩の源次郎、予に向つて諫言立て。それぢやによつて。

ト又キッとなるを、三郎右衞門よろしくあつて

三郎　ハツ、恐れながら、君を諫め奉るは臣のお役目。拙者思ふ仔細ござれば、君には、先づ〳〵

ト本舞臺へ押し戻す。源次郎下手へ扣へる。三郎右衞門こなしあつて

お止まり下さりませう。

ト秀秋こなしある。茶道、高足の茶臺に湯呑を載せ差出す。秀秋取つて飲む。三郎右衞門こなしあつて

ソレ、お佩刀を。

ト新吾、殿の刀を取つて鞘に納めるうち、諸士、角盥、湯桶なぞ持ち出る。これにて秀秋手を洗ひ、鼻紙臺に小杉を載せ持つて出るを、取つて手を拭くこなしある。この間に源次郎、平伏してゐる。三郎右衞門、秀秋こなしあつて

三郎　ハツ、御立腹は御尤もには候へども、彼れが父、早瀬玄蕃頭は、勇氣絶倫の侍ひ、その悴をお手討ちあらば、君を恨み奉り、いかなる變心あらんも知れず、さある時には大亂の基。その儀を計つて、三郎右衞門が諫むるは、これ忠なり。いま源次郎を庇ふは、朋友の信なり。

ト源次郎にこなしあつて

お聞濟みこれ無きに於ては、下し置かるる八百五十石を

差上げ、お國を退去仕り、山林に身を隱さん、所存一決仕る拙者が諫め……恐れながら御賢慮なし下さらば、有り難う存じまする。

秀秋　憎くき源次郎なれども、三郎右衞門が詞に免じ、免しくれる。

三郎　ナニ、御免なし下されんとな。ハ、ア、有り難く存じ奉りまする……早く御前へ。

新吾　源次郎どの。

ト少し前へ出て手を突き

源次　重々の不調法、眞平御免下さりませう。

三郎　源次郎どの、とくと御機嫌の納まり奉るまで、詰め所にてお扣へなされ。

源次　ハツ。左樣なれば、三郎右衞門どの。

三郎　後刻。

ト源次郎下手へ入る。秀秋こなし。

秀秋　三郎右衞門

三郎　ハツ。

秀秋　後に逢はう。

ト唄になり、氣短かにぶうてツイと入る。跡より小姓、諸士、新吾、茶道附き入る。三郎右衞門、軍兵衞、平馬、傳之丞、金藏殘る。向うにて

呼び　岡船岸の頭出仕。

三郎　岸の頭さまの出仕でござる。いづれも出向ひ召され。

四人　心得ました。

ト三郎右衞門、四人の諸士、見得よく並び出迎ふ。太皷謠ひになり、向うより岸の頭、着附け、上下、燕手にて出る。跡より諸士二人附添ひ出る。花道よき所にてとまる。三郎右衞門こなしあつて

三郎　岸の頭さまには、只今

四人　御出仕でござりまするか。

岸頭　三郎右衞門を始め、諸士の面々、出迎ひ大儀。

四人　まづ〱。

ト矢張り太皷謠ひにて、岸の頭、本舞臺へ來て、上手よき所へ直る。諸士二人は引ッ返して入る。三郎右衞門下手へ、諸士四人は後へ並び、この時諸士二人、大火鉢を持ち出て眞中へ直して入る。三郎右衞門こなしあつて

三郎　御家老岡船岸の頭さまには、今日の御出仕

四人　御苦勞千萬に存じまする

ト皆々を見てこなし

岸頭　三郎右衛門始め諸士の方々、して、殿には御機嫌如何でござる。
軍兵　イヤモウ、今も今とて例の御短慮。
平馬　守山丹下を御手討ち。
金藏　東間どのゝ計らひにて、御短慮も納まり
傳之　奥御殿にて御休息。
岸頭　イヤモウ、この岡船岸の頭が温なしいゆゑ、殿の我まゝ、これには殆んど困るてや。
軍兵　仰せの通り、岸の頭さまがござらずば
平馬　浮田の家は空屋同然。
金藏　お國は暗闇。
傳之　今の御威勢
四人　なか／＼恐れ入りましてござりまする。
ト諸士皆々追從ごゝろにて云ふ。三郎右衛門こなしあつて
三郎　これはしたり各々方、そりやモウ申さいでも知れた事。同じ家老の中も岸の頭さまは、第一筋目が違ひまする。千島家には仁色武藏、奥州にては板倉小十郎、當家にては岡船岸の頭、俗に三家老と申すでないか。これを今更改めて申さるゝは、どうか諂ひのやうに聞えて、見苦しいではござらぬか。
四人　これは恐れ入りましてござりまする。
ト岸の頭、こなしあつて
岸頭　ナニ諸士の方々、身は三郎右衛門に用事もあれば、殿のお側へ相詰められよ。
軍兵　仰せに隨ひ我れ／＼は
平馬　殿のお側へ相詰めませう。
傳之　左樣ござらば、御家老
四人　岸の頭さま。
岸頭　方々。
四人　後刻御意得ませう。
ト序の舞になり、諸士皆々入る。あと合ひ方。岸の頭。三郎右衛門殘る。後に道齋出て扣へゐる。
岸頭　坊主々々。
道齋　ハアツ……御用でござりまするかな。
岸頭　身はこれに用事もあれば、この所へ誰れも參らぬやう、心を附けよ。
道齋　畏りました。
岸頭　行け／＼。
道齋　ハア。

ト入る

三郎　先づ何かは差置き、捨て置き難きは都の大變。岸田光成が頼みに應じ、幼君は御味方あるか。但し北條どのの命に隨ひ、青野ヶ原へ御出馬あるか。二つ一つが當家の存亡。

岸頭　その儀について、密々に申し談ずる仔細ぞあり……苦しうない、近う〳〵。

三郎　然らば御免下さりませう。

ト合ひ方になり、三郎右衛門、火鉢の側へ寄る。岸の頭、こなしあつて

岸頭　別儀でもない。かねて其方と心を合せ、殿を亡きものとなし、家國を押領し、その虚に乘つて

三郎　イヤ、その後は。コレ。

ト火鉢の灰をならし、密事を書く。岸の頭も又書き、双方二三度づつあり。この間よろしき仕組み。書きしまふと、灰をならし、思ひ入れ。

岸頭　先達て大江どのへ頼みの密書、差遣はし置いたれども、今に何の返事もなく、心がかりはこれ一つ。

三郎　イヤ、その儀も先達て、坂本の城内へ、間者を遣はし置いたれば、大老たる大江どのにも、異變はござるまい。一家中も大半味方。心憎きは

岸頭　早瀬玄蕃頭、老ぼれなれども油斷はならず、その上、兄弟とても手ごはき若者。

三郎　惣領の伊織は、近國に隱れなき無双の勇士。弟源次郎とても、年に似合はぬ烏滸の者。

岸頭　なれども、汝が弟、大藏に申しつけ、盜ませし貫之の色紙。

三郎　すりや、拙者が勘當いたした、大藏めに仰せつけられ

岸頭　奪ひ取りは取つたれども、又もや伊織が家來、林平とやらに奪ひ返され

三郎　イヤ、苦しうござらぬ、その色紙は似せ物。

岸頭　ナニ、色紙を似せ物とは。

三郎　モシ……これが即ち、誠の色紙。

ト懷中より色紙の箱を出して見せる

岸頭　天晴れ出來た。我れも先達て奪ひ取りし、お家の白旗。

ト懷より旗を出して見せる。

三郎　謀計は密なるを以て善しと申せば、わざと其許樣にも、深く秘したる拙者が密計。

岸頭　某とても、事成就するまでは、何事も包むが肝要。
三郎　今日只今御自分樣へ、お手渡し仕るが、二心なき拙者の誓ひ。
　ト色紙を差出す。
岸頭　汝が心底見る上は、奪ひ取りし白旗、其方へ預け置く。色紙と斯う取替へ置けば、いよ〳〵勝を固むる某が心。
　ト旗と色紙を互ひに取替へる。この時向うにて
呼び　坂本よりの御上使。
岸頭　ナニ、坂本よりの上使とな。
三郎　折も折とて
岸頭　コレ……お上使のお出迎へ。
三郎　ハ、ア。
呼び　御上使のお入り。
　ト太鼓謠ひになり向うより、造酒頭、肩衣附け、長上下にて靜々と出てくる。岸の頭、三郎右衞門出迎へる。奧より以前の諸士四人出て、見得よく居並ぶ。
岸頭　坂本城より御上使は、思ひがけなき片岡どの。
三郎　造酒頭さまには遠路のところ、御苦勞千萬に
皆々　存じまする。

　ト皆々平伏する。造酒頭、向うを見渡し
造酒　岡船岸の頭、家中の面々、出迎ひ大儀。
岸頭　ハ、ア。
　ト思はず平伏する。
三郎　御上使樣には、イザまづこれへ。
皆々　お通りあられませう。
　ト矢張り太鼓謠ひにて、造酒頭悠々と本舞臺へ來り、眞中にて合引にかゝり、岸の頭上手へ扣へる。三郎右衞門下手に、皆々後へ並ぶ。造酒頭、皆々を見渡し。
造酒　して、中將秀秋どのには。
岸頭　主人中將秀秋、病氣につき、家老たる岡船岸の頭、お出迎ひ。
造酒　すりや、秀秋どのには病氣とな。
岸頭　上意の趣き、仰せ聞けられ下さりませうなれば。
皆々　有り難く存じ奉りまする。
造酒　上意。
皆々　ハ、ア。
　ト合ひ方になり
造酒　上意の趣き餘の儀に非ず、先將軍賴朝公の御仁政によつて、四海一統に萬歲を謳ふところ、この度岸田光成

鎌倉北條家の權威を嫉み、幼君賴家公の嚴命と僞はり、諸大名を味方に引入れ、時政どのを亡ぼさんと、江州青野ヶ原に陣を構へて、いま合戰の眞只中。

岸頭　ハテナア。

造酒　これ正しく幼君を楯につき、四海を呑まんと岸田が謀叛。然らば賴朝公に恩顧の諸大名、いづれか謀叛の兆あらんと、關東より坂本への疑ひも理り。京鎌倉確執の、色を現はす今この時、さるによつて、この度のお咎め。

岸頭　すりや、當浮田のお家にも、岸田に同意の

皆々　お咎めとな。

造酒　サア、その疑ひを晴らさんには、先達て賴朝公より三十六大名へ、下し置かれし歌仙の色紙、差上ぐるに於ては、別心なき神文を認め、都より程近き、住吉の社に奉納。まつた家の重寶白旗もろとも、內見いたし參れとある、卽ち鎌倉よりの嚴命。坂本の執權、片岡造酒頭　承つて、上意の趣き、斯くの如し。

岸頭　すりや、色紙といひ、白旗もろともに

四人　御內見とな。

造酒　いかにも。

ト岸の頭と諸士、皆々顏見合せ、こなし。三郎右衞門、下手より少し前へ出て

三郎　アイヤ、恐れながら、元來岸田は匹夫の倅、幕下には致すとも、彼れらが下知に隨ひませうや。岸の頭を始めとして、數多ある家來の中にも、武道の恥を知つたる者もござる。主家の恥辱と相成る儀は、且以て仕らぬ。恐れながら御上使樣には、ちと御非言かと存じまする。

造酒　賢くも申したり。其方は何者なるぞ。

三郎　番頭を相勤むる、東間三郎右衞門と申す者でござりまする。

造酒　すりや、番頭を勤むる、東間三郎右衞門とな。

三郎　ハア。

造酒　愛い奴〳〵。サア、岸の頭、色紙白旗もろとも、內見せうか。

岸頭　イヤその儀は。

造酒　內見に供へぬは、いよ〳〵野心があるか。

岸頭　全く以て。

造酒　家中の者ども、返答いたさぬか。

四人　サア、それは。

造酒　岸の頭、申し分は。

岸頭　サアそれは。

造酒　三郎右衛門、其方返答あるか。
三郎　サア。
造酒　二品とも紛失いたしたか。
皆々　サアそれは。
造酒　申し分あるか。
皆々　サア／＼
造酒　返答は、なんと。
　ト向うにて
玄蕃　待つた。その御返答、早瀬玄蕃頭、それへ參つて、申し譯仕らん。
岸頭　ナニ、玄蕃頭が。
三郎　いづれも。ソレ。
　ト早舞ひになり、傳之丞、金藏「ハツ」と向うへ走り入る。直ぐバタ／＼にて、玄蕃頭、着附け、上下、白髮、鎌髭、赤面、頑丈なる拵らへにて、大小さし、傳之丞金藏を兩脇に、首筋を掴み、出て、花道よき所にて
玄蕃　御上使の御前をも憚らず、立騷いで尾籠千萬。扣へ召され。
　ト兩人を本舞臺へ投げやる。兩人これにて扣へる。あと序の舞になり

これは岡船岸の頭どの始め、いづれも。
岸頭　早瀬玄蕃頭どの。
四人　お早い御登城。
三人　御苦勞千萬に存じまする。
玄蕃　イヤモウ、御上使お入りと聞くと其まゝ、早速登城いたせしところ、御上意の趣き、お次にて承る。御上使片岡造酒頭さまには、遠路のところ、御苦勞千萬に存じまする。
　トこれにて下に居る。造酒頭、玄蕃を見て
造酒　珍らしや早瀬玄蕃頭、昔に變らぬ頑丈者、無事の體、めでたい／＼。最早年は幾歳に相成る。
玄蕃　今年で七十五歳になりまする。
造酒　年に合せては、眼中の健かさ。
玄蕃　まだマア、二十町向うに何があるまで見えまする。
造酒　して、耳は。
玄蕃　蟻の囁くまで聞えまする。齒ぶしは、石臼も嚙み斷りまする。
造酒　して、食物は。
玄蕃　日に三升づつ喰べまする。只今も登城の參りしな、好物の蕎麥、二十五六膳、したゝかにやつて參りました。

軍兵　ても、恐ろしい齒ぶしぢやなア。
平馬　鬼玄蕃とは、よく附けたものぢや。
金藏　驚き入りましてござりまする。
造酒　鬼よ、近う〳〵。
玄蕃　然らば御免下さりませう。
ト矢張り序の舞にて玄蕃、衣紋直して、悠々と本舞臺へ來て、よき所に扣へる。岸の頭こなしあつて
岸頭　して、御上使への御返答は。
玄蕃　ハテ、鎌倉どのゝ嚴命なれば、差上げずばなるまい。
岸頭　すりや貴殿にも、當家の色紙。
玄蕃　差上げまする。白旗もろとも、御内見に供へまする。
岸頭　イヤ、さうは成りますまい。
玄蕃　なぜ成りませぬ。
岸頭　先將軍より下し賜はる逢坂の色紙は、紀の貫之が直筆。鎌倉の指圖を受け、家の寶をウカ〳〵と、奉納なぞは末代の瑕瑾。この岸の頭、甚だ不承知。
玄蕃　すりや、貴殿には不承知とな。
岸頭　別心なき云ひ譯なれば、仕樣は樣々。
玄蕃　ハテ、異な事を御意なさるゝ。色紙奉納の儀は、亂を好まぬ心の潔白、これ卽ち京鎌倉和睦の種、廻り廻つて四海の爲。當家に限らず、色紙頂戴の諸大名、何れも別心なき云ひ譯。差上げんとある歌仙の色紙、富浮田のお家ばかり、差上げぬで相濟みませうか。
岸頭　すりや、こなたには鎌倉の下知を
玄蕃　受けるが順道。
岸頭　とは何ゆゑに。
玄蕃　賴朝公御遺命に依つて、當家にてのお預かり、下知を背くは家の滅亡、そこを計つて坂本の執權、片岡造酒頭さま、今日の御上使ならずや。
岸頭　イヤ、理非は格別、お家の重寶、差上ぐる儀は
玄蕃　是非とも御不承知か。
岸頭　こなたには、いよ〳〵以て。
玄蕃　差上げまするぞ。
軍兵　ハ、、、、、名にしおふ岡船早瀬と、一二を爭ふ御家老が
平馬　子供遊びの水掛け論。
金藏　何の役にも立たぬ問答。
傳之　ハテ、氣の毒千萬。
玄蕃　何がどうした。

三郎　イヤサ、差上げるの、上げまいのと、御意なさるゝその色紙といひ、白旗もろとも、紛失いたした。
玄蕃　何がなんと。
三郎　疾より紛失いたしてござる。
玄蕃　すりや、二品ともに……ホイ。
ト當惑する。この時、ゴロ／＼と雷の音する。これにて慄へ、耳を押へ
ア、折惡いゴロ／＼ゆゑ、この音を聞いては……アア、苦しい。桑原々々。
ト耳を押へるこなしある。諸士、この體を見て
四人　玄蕃頭どのゝ、この體は。
岸頭　鬼玄蕃とも云はるゝ勇士が、見苦しい有樣は、ハテ、氣の毒千萬。
造酒　イヤ、名將勇士も間々ある事。孔明は鼠に恐れ、樊噲は常に蛇を嫌ふ。玄蕃頭が、雷に恐るゝも理り。
玄蕃　イヤモウ、百萬の軍勢も、恐れぬ玄蕃なれども、このゴロ／＼どのに逢うては、三歳の子供同然、面目次第もござらぬ。
ト岸の頭、三郎右衛門、顔見合せてこなし。雷やむ。
岸頭　紛失なしたる二品の寶の、申し譯はござるかな。

玄蕃　思ひよらざる寶の紛失。この盜み手も、大方それと
ト兩人を見て、こなしあり。
造酒　今暫らくのうちに詮議仕出し差上げませう。暫時の間猶豫いたすも上使の情。
玄蕃　すりや、御猶豫下されんとな。エヽ、有り難く存じ奉りまする。
岸頭　御上使樣には、奧殿へお越しあつて、暫時御休息あられませう。
造酒　詞に隨ひ、暫時休息。
三郎　ソレ、御上使おもてなしの用意、申しつけ召され。
四人　畏つてござりまする。
造酒　然らば玄蕃頭、岸の頭、諸士の方々。
玄蕃　御上使樣には先づ
皆々　入らせられませう。
ト唄になり、造酒頭、小姓、諸士の面々附添ひ、奧へ入る。跡に三人殘る。岸の頭、三郎右衛門、ちよつと氣味合ひあつて
岸頭　白旗の行くへ。
三郎　色紙の在所。
兩人　詮議仕らう……玄蕃どの、後刻。

ト岸の頭は奥へ、三郎右衛門は橋がゝりへ行きかゝる。
この時、玄蕃頭こなしあつて

玄蕃　兩人待て。

ト呼びとめる。これにて兩人、こなし。聞かぬ體にて
行きかける。
岸田に一味の岡船岸の頭。色紙の盜賊東間三郎右衛門。

兩人　ヤ、なんと。

玄蕃　イヤサ、詮議がある。マア〱待て。

トきつと云ふ。兩人顏見合せ、こなしあつて、ツカツカと戻り、双方より玄蕃頭に詰め寄り、キッとなつて

岸頭　早瀨玄蕃、イヤサ玄蕃頭、この岸の頭を岸田に一味なぞとは、何を以て、何を證據に。ア、、なにか、こりやこの岡船が、二ケ國の政治を拒み、痕形もなき一味呼ばはり。この岸の頭に向ひ、あまりの廣言。今一度云うて見よ、その舌の根、切つて切り下げるぞ、玄蕃頭。

トきつと云ふ。三郎右衛門も詰めかけ。

三郎　麒麟も駑馬に劣るの譬へ。いまだ老衰といふにはあらねども、餘ほど刃金が裏へ廻り、ア、、氣の毒千萬。岸の頭さまの出頭を嫉み、三郎右衛門の羽振りの好きをうとみ、無實の罪にとつて落し、我れ〱を退け、御自分一人、兩國の政道を握らんとは、日頃に似合はず、むさい、穢ない。

岸頭　いま一言が生死の境。

三郎　返答ぶて。

兩人　ド、、どうだ。

ト双方よりキッと云ふ。玄蕃、兩人をヂッと見て、苦笑ひのこなしあつて

玄蕃　蚊とんぼどもが耳の側で、ブウ〱とやかましい。コリヤヤイ、殿の御恩を蒙むりながら、岸田の謀叛に一味合體、その枝葉たる東間三郎右衛門。知るまいと思ふか。寶藏へ忍び入り、お家の重寶、色紙を奪ひ取りしその科を、倅に塗りつけんとは極重惡人‥謀叛に一味の岡船岸の頭、色紙の盜賊東間三郎右衛門、この玄蕃が睨んだからは、最早のがれぬ、白狀いたせ。

岸頭　云はせて置けば樣々のたわ言。

三郎　三寸の舌頭を以て

岸頭　我れ〱を詐らんとは

三郎　武士に似合はぬ

兩人　卑怯であらう。

玄蕃　コリヤ、如何やうにあらがうても、遁れぬ證據は、

「東間どのへ、岡船より」。
ト狀を出して見せる。兩人ギックリして
兩人　ヤア。
玄蕃　これでもわいら、覺えは無いか。
兩人　サアそれは。
玄蕃　但し讀み上げうか。まつたその上に、寶藏に落ち散りありし、この小柄が慥かな證據。
兩人　サアそれは。
玄蕃　サア。
兩人　サア。
玄蕃　サア〳〵〳〵。
玄蕃　最早遁がれぬ。兩人、一々白狀々々。
兩人　この上は、玄蕃頭、覺悟いたせ。
ト双方より切つてかゝる。ちよつと立廻つて、よろしくとめて
玄蕃　コリヤ、朝鮮國まで鳴り渡つた鬼玄蕃、わいらの刃物が身に立たうか。何を馬鹿な事
ト三郞右衞門を下手へ突飛ばし、岸の頭「何を」と切り込む刀を叩き落し、ちよつと當てる。これにて岸の頭、タヂ〳〵と跡へ寄る。ベツタリとへたる。三郞右衞門切り込むと、立廻つて三郞右衞門を引附け
玄蕃　コリヤヤイ、殿樣より高祿を戴きながら、惡事の段段。祿を貪ぼる極惡人。色紙の在所・御旗の行くへも、一々白狀ひろげ。
ト突き放す。三郞右衞門、こなしあつて
三郞　シタリ、流石は玄蕃頭、よく見顯はした、が、よく聞けよ。……中將秀秋は元來愚將。良禽は木を見て棲むと、良將へ仕ゆるは戰國の習ひ、珍らしからず。俗に云ふ行きがけの駄賃、いかにも色紙は奪ひ取つた。さりながら、左分利流の極意を傳へ、劍術は云ふに及ばず、槍術一通りに於ては、中國西海に鳴り響いたる、この東間三郞右衞門。とても の事に手練のほど、後學の爲、見て置かつしやれ……誰れかある。三郞右衞門が持ち槍持て。
近習　ハア、。
ト近習、鎗を持つて出て、三郞右衞門に渡して下手へ入る。三郞右衞門鎗を持ち、これを扱き、キツとなつて
三郞　祿を貪るか、貪らぬか、三郞右衞門が日頃の手練、立ち碎きと名けし構へ、受けられるものなら受けて見よ。

トきつとなり、構へる。玄蕃頭居直り、鎗先に胸を差附け

玄蕃　蔚山の合戰に、十萬騎の大敵を、睨み殺せし鬼玄蕃、うぬらの鎗が身に立たうか。サア、爰を突けよ。爰を。

ト胸先を突きつける。三郎右衛門突いて行く。これより兩人、よろしく立廻りあつて

どうぢや、突きとめて見ぬか。動かるゝならば動いて見ぬか…及ばぬ事を。

トいろ／＼跪いて

三郎　とめて見せう。

ト振りほどき、また突きかける。立廻つて、鎗を叩き落す。直ぐに刀を抜き、切つて行くを、これも叩き落し、ちよつと當てる。三郎右衛門へたる。ヂロリと見て、落しある刀を持つて、岸の頭の腹へ突き立てる。岸の頭心附き

岸頭　こりや身共を、手にかけたなア。

玄蕃　健氣な最期、出かされたり…お上使、お聞きあられましたか。

造酒　殘らず見聞いたしました。

ト奥より造酒頭、次に秀秋、小姓近習、三人附き出る。

秀秋　今に始めぬ玄蕃が忠義、天晴れ／＼。

ト玄蕃こなしあつて、岸の頭が持ちし白旗を取出し、また東間が持ちし色紙を出し

玄蕃　お家の重寶、御旗と色紙、相揃ふ上からは、何卒御前體よろしく。

ト二品とも秀秋に渡す

造酒　ナニサマ、二品とも揃ふ上は、君の御前はこの造酒頭が、よきに計らふであらう。

秀秋　この御旗は寶藏に納め、まつた色紙は玄蕃頭、其方に預け置く。大切に致せ。

ト色紙を玄蕃に渡す。玄蕃受取り

玄蕃　委細畏まつてござります。

造酒　事納まる上は、最早歸國いたさん。

秀秋　某とても、船場までお見送り。

玄蕃　御上使のお立ち。

内に　ハ、ア。

ト所地入りになる。造酒頭先に秀秋、近習、皆々花道へ並び

秀秋　玄蕃頭、老體の心遣ひ、過分なぞよ。

造酒　油斷ならざる、家中の心…玄蕃頭、承知か。

玄蕃　ハア、。
秀秋　イザ、御上使樣。
造酒　中將どの
秀秋　まづ〳〵。
ト矢張り所地入りにて、皆々向うへ入る。玄蕃頭殘り、岸の頭苦しみゐるを見て、また三郎右衛門心づき「うぬ」と立たうとしても、總身痛むこなし。玄蕃思ひ入れあつて
玄蕃　コリヤ、よく聞けよ。われが親、東間將監どのとは、竹馬の朋友、其方が惡黨ゆゑ、勘當なさんとありしをなだめ、將監どの死去の後、名跡を立てさせ、東間三郎右衛門と名乘り、高祿を戴き居るは誰れが庇。それに引かへ、色紙を盜み、預かり主の忰伊織を、科人にせんとする、云はうやうない人非人めが。
ト突き放すと、ゴンと本釣り鐘鳴る。玄蕃、空を見て
最早暮合ひ、定めて忰どもが待つて居らう。ドリヤ、下城仕らうか。
ト花道へ行き、立ちどまり
三つ子の心百までと、疊の上の臨終は、心許ない……ままよ。

ト衣紋つくろと、唄になり、悠々と向うへ入る。跡に三郎右衛門、玄蕃の入るを見て、無念のこなし。岸の頭、苦しみながら、これも見送つて無念のこなし。
岸頭　三郎右衛門。
三郎　なんだ。
岸頭　口惜しい。
三郎　道理だ。
岸頭　年來仕込みし我が謀叛、老ぼれめに見顯はされ、彼れが手にかゝるといひ、御旗と色紙まで取返されしは、我が運命の盡きるところ、この無念を晴らしてくれよ。
三郎　氣遣ひ召さるな。こなたの無念は三郎右衛門が、晴らしてくれるぞ。
岸頭　して、玄蕃を討取る場所は。
三郎　彼奴が歸りは大手先に續く、月見の馬場、松のしげみ、先へ廻つて、たつた一突き。
岸頭　イ、ヤ、彼奴も名におふ鬼玄蕃。
三郎　鬼であらうが、蛇であらうが、諺に云ふ騙すに手なし。
トこの時雨車、雷きびしく鳴る。こなしあつて
アレ〳〵、あの如く、頻りにはためく雷は、玄蕃を討

取る天の助け。
岸頭　雷にあうては死人同然。
三郎　透を窺ひ、たんだ一突き。
岸頭　その詞を聞く上は、最早心殘す事なし。イザ、介錯。
三郎　心得た。
　ト　つか／＼と上手へ廻り、刀を振りあげる。岸の頭、首さしのべて兩手を合す。三郎右衞門、首打落す。この時奥より、軍兵衞、平馬、傳之丞、金藏出て。
四人　三郎右衞門どの、我れ／＼も加勢。
三郎　いづれも御苦勞。コレ、各々方には月見の馬場へ。
四人　然らば、我れ／＼は。
三郎　先へ驅けぬけ、萬事の驅引き。
四人　時も黄昏、これも屈竟。
三郎　さう云ふうちも道の遲れ。
四人　裏道傳ひに。
三郎　早くござれ。
四人　合點だ。
　ト　四人凜々しく向うへ入る。この時奥より道齋出かけてゐる。雷頻りに鳴る。三郎右衞門、鎗をしごき、キッとなる。

三郎　篠を亂せる雨、雷、闇はあやなし玄蕃の自滅。
道齋　すりや玄蕃さまを。
　　悔りして
三郎　大事を知つたる信樂道齋。
道齋　こりや堪らぬ。
　ト　逃げようとするを、鎗にて突き廻し、脇腹を突く。
三郎　玄蕃を討取る、血祭り坊主。
　ト　鎗を引拔く。見事にかへる。「さうだ」と鎗を引ッさげ、向うへ走り入る。チョン／＼にて淺黄かぶせる。
　始終雨、雷にて、向うより以前の四人の諸士、傘をかむり走り出て
軍兵　いづれも、お早うござる。
平馬　三郎右衞門どのゝ加勢を仕らん爲、取る物も取りあへず、直さまこれへ。
傳之　かねて覺えの手練にて、懸命に戰ひなば
金藏　鬼と呼ばれし玄蕃なりとも、相手は一人、味方は多勢。
平馬　左右に別れて突き伏せ、切り伏せ、手柄は仕勝ち。
軍兵　首尾よく參れば、三郎右衞門どのは元より、我れ／＼

も立身出世。
傳之　兎かう申すうち、三郎右衛門どのもお越しでござらう。いづれも、月見の馬場へ。
三人　心得申した。
平馬　ござれ。
ト始終雨車にて、皆々上手へ入る。淺黃切つて落す。
造り物、大手先、東西より城の角矢倉、中遠見、向う城の書割り、眞中に松の大木、一面に松の吊り枝下がる。この松の木裂ける仕掛けあり、矢張り雨車、雷の音にて道具納まる
ト向うより三郎右衛門、鎗を持ち、バタ〳〵にて駈けて出て、舞臺へ來る。上下より諸士二人づゝ出て
四人　三郎右衛門どの。
三郎　いづれも、御大儀々々々々。
四人　して、玄蕃頭は。
ト向うを見て
三郎　慥かにあの提灯が玄蕃頭。
四人　然らばこれにて。
三郎　忍ばつしやれ。

トこれにて皆々小隱れする。向うより玄蕃頭、着附け袴、合羽にて、傘をさし出る。先に奴一人、箱提灯を持ち、跡より若黨、中間、供廻りいづれも合羽出立ち、跡より元右衛門、酒に醉ひたる體にて、中間二人の肩によりかゝり出て、皆々花道よき所にて
玄蕃　思はざる今の大雨、今が晴れ間。して元右衛門は。
若黨　イヤ、何か例の、よたん坊でござりまする。
中一　ヤイ〳〵、元右衛門、お旦那には仔細あつて急の御用、お供廻りも輕々しう。
中二　大切な今宵のお供、酒をくらふといふ事があるものか。
元右　なんぢや、大切なお供ぢや。大切なお供ぢやによつて一杯ひツかけた。
若黨　此奴、困つた奴ぢや。
玄蕃　ハテ、人毎に一つの癖はあるものを、此奴も酒をくらふが癖サ。
ト本舞臺を見て
最早向うが月見の馬場。屋敷にても待つて居らう。サヽ、供いたせ。
皆々　ハヽア。

ト皆々本舞臺へ來る。この時三郎右衛門出て、奴の持つた提灯を切り落す。

玄蕃　狼藉者。

皆々　なにを。

ト諸士四人出て、供廻りを追ひ散らす。玄蕃、刀を抜き合せ、五人を相手に立廻る。元右衛門、其まゝ城の側へ餘念なく寢てゐる。立廻りの間へ雨車、雷頻りに鳴る。三郎右衛門鎗にて突いてかゝる。玄蕃、透かし見て

玄蕃　ヤ、うぬは東間。

三郎　なにを。

トこれより大タテになり、玄蕃、金藏傳之丞を切り殺す。軍兵衛、平馬、逃げる。これにて三郎右衛門、氣遅れしたこなしにて、鎗にて突いて行く。玄蕃、疊みかけて切り伏せ、鎗を叩き落し、刀を振りあげる。既に三郎右衛門危ふき時、雷頻りに、松の樹へ雷落ちし心にて、本鐵砲の音、掛け焔硝立つ。松の樹裂ける。これにて玄蕃恐れ、悶絶する。三郎右衛門起上がり、鎗を取つて玄蕃の脇腹へ突ッ込む。これにて玄蕃心附き

玄蕃　騙し討ちとは卑怯な奴な。

三郎　こま言吐かずと、くたばつてしまへ。

ト鎗にて抉る。玄蕃苦しみながら、刀にて鎗の穂先を切り取る。これにて三郎右衛門、刀を抜き、切り附ける。ト玄蕃を切り伏せ、乘りかゝり

日頃の鬱憤、思ひ知つたか。

ト止めを刺し、玄蕃の持つてゐる色紙を取出し

うぬが預かりの色紙も、廻り／＼て又ぞろや、この東間さまの手に入るは、天道人を殺さずぢやなア。

ト戴く。この時、大藏走り出て

大藏　兄者人か。

三郎　弟大藏。

大藏　して、玄蕃頭は。

三郎　物の見事に、たつた一突き。

大藏　お出かしなされた。して、色紙は。

三郎　大切なる品ゆゑに、汝へ預け置く。合點か。

ト色紙を渡す。

大藏　慥かに預かりました。

三郎　人の見ぬ間に、この場を早く。

大藏　そんなら兄貴。

三郎　逃げれ。

大藏　合點ぢや。

ト大藏、色紙を持つて下手へ入る。三郎右衞門見送り、こなしあつて、向うへ行きかける。戸屋の内より人音するゆゑ、小戻りして忍ぶと、向うより源次郎、着附け上下。若黨、箱提灯を持ち出る。三郎右衞門、俵をかむり、花道にて摺れちがひ、一散に向うへ入る。源次郎、合點のゆかぬこなしにて、本舞臺へ來て、上手へ行きかける。若黨、提灯の灯にて死骸を見て

若黨　これに人が倒れて居りまする。

源次　なんと。

ト駈けより見て、愕りして

こりやコレ、親人樣が。

若黨　ヤヽ。

源次　何者の仕業…親人樣いなう。

トうろ〳〵して

この由を兄者人へ、さうぢや。

ト花道へ行きかける。この時向うより伊織、着附け上下。彌助、着附けぶツ裂き、股立ち取り、箱提灯を持つて、兩人氣の急く心にて出て來て、双方花道中程に行きあひ

伊織　源次郎ではないか。

源次　兄者人か。

彌助　して、親旦那樣は。

源次　その親人には。

伊織　なんと。

源次　お討たれなされた。

伊織　ヤア。…ドレ。

ト皆々本舞臺へ來て、玄蕃の死骸を見て愕り。三人顏見合せ、思ひ入れあつて

伊織　親人樣、伊織めでござりまする。

源次　弟源次郎でござりまする。

彌助　安達彌助めでござりまする。

伊織　最早、縡は切れたか。

三人　ホイ。

トこなし。

伊織　たとへ百萬騎にて圍むとも、討たれ給ふ親人にはあらねども、御禁物の雷に附け入り、事を計つてこの有樣。

源次　せめて某か彌助なりとも

彌助　お側に附き添ひ居たなれば
伊織　この御最期は見まじきものを。
源次　兄者人。
伊織　弟。
彌助　若旦那。
三人　チエ、、口惜しい。
ト三人愁ひのこなし。伊織、玄蕃の死骸を改め見て、
切り取りし鎗の穂先を見て
伊織　敵の證據は鎗の穂先
トよく／＼見て
左分利流に用ふるもろしのぎ。
トきつと見込む。
彌助　家中の内なる、左分利流は。
伊織　即ち東間三郎右衛門。
源次　すりや、敵といふは。
彌助　三郎右衛門で
三人　あつたよなア。
トきつとなる。この時、倒れゐたる元右衛門「ウン」
と寢返る。これにて恟りして彌助、あたりを見て元右
衛門を見附け、ツカ／＼と行つて引起し

彌助　こなたは兄元右衛門どの。
ト胸ぐら取つて
親旦那樣に附き添ひながら、酒にくらひどれて。
元右　なんぢや、飲んだらなんぢや。飲んだによつて醉つ
たのぢや。
ト他愛なきこなし。
彌助　エ、、主の横死も夢うつゝ。
ト胸ぐら取つて振り廻す。この時伊織、鎗の穂先を見
詰めゐて、キットなつて
伊織　御無念殘る穂先の血汐、敵東間三郎右衛門、天を翔
り、地を潜り
トきつとなつて
源次　唐天竺まで駈け行くとも。
伊織　兄弟心を一つにして
源次　倶不戴天の父の仇。
伊織　やはか本意を
二人　遂げいで置かうか。
ト兩人キッと見込む。彌助は元右衛門に愛想の盡きし
こなしにて
彌助　おきやアがれ。

ト元右衞門の顏を毆る。元右衞門また寢る。この拍子に伊織、源次郎、彌助、三人顏見合せ、伊織は穗先を戴く。チョンと木の頭。よろしく

幕

二つ目　龜崎別莊の場

役名——腰元、小霜。同、小百合。正木宮內妹、みどり。田川齋宮妹、糸萩。早瀨源次郎。妹、葉末。姉、染の井。玄蕃妻、操。早瀨伊織。田の字組足輕、彥藏。同、關內。同、丁作。同、角助。同、傳八。同、岩助。奴、鴈助。安達彌助。茶道、典齋。最上軍兵衞。岩淵平馬。安達元右衞門。花形刑部。

造り物、二重舞臺、向う金襖、上手高二重、前側障子、下手屋敷塀、いつものところ紙張りの門、上手に紅白咲分けの椿、舞臺前に夏草、正面長押に長刀、木太刀を掛け、よき所に鎧櫃を飾り、すべて龜崎別莊の體。幕の內より右二重下の方に典齋、茶臼にもたれ居眠つてゐる。みどり、糸萩、屋敷風の振り袖娘にて、本をせり合うてゐる。小百合、小霜、腰元の形、手桶にて卯の花へ水を打つてゐる。この見得、琴唄にて幕明く。

みど　糸萩さま、あなたの見てござるのは、何の本でござりますえ。

糸萩　これは曾我物語といふものでござりまする。

みど　ドレ、わたしにもお見せなされませ。

ト取らうとする。

糸萩　エヽ、つツとモウ、まんがちなみどりさま、そこに何册もある內を、どれなと御覽じたがよいわいなア。

みど　それでも、一から見ねは解りませぬ。お見せいなア。

ト又た取らうとする。

糸萩　お待ちいなア。

ト双方手をかけ、せり合ふ。

小霜　ア、申し、お二人樣、お靜かになされませ。大切な奧樣の御病氣。

小百　隨分何事も密かにと、御新造樣の云ひつけ。いかに

お年がゆかぬというて、お嗜みなされませ。
みど　それ御覽じませ。叱られてよい氣味の。
糸萩　なんのお前が。
みど　へ、、、、。
　ト小霜こちらへ來て
小霜　オ、、典齋どのが又眠るのか。えらいものぢやなア。
　トこれにてみどり、小撚りをして、典齋が鼻へ入れる。
典齋　ハツクシヨイ。ムニヤ〳〵、
　トまた眠る。合ひ方になり、奧より染の井、振り袖、屋敷娘の形、天目臺に錦手の茶碗に黑塗りの蓋をせしを持ち出て
染井　これは宮内さまのお妹御、みどりさま。齋宮さまのお妹御、糸萩さま、ようこそお出で遊ばしましたわいなア。
糸萩　染の井さま、操さまのお煩らひ、ちとお快うござりまするか。みどりさまをお誘ひ申して、お見舞に上がりましてござりまする。
染井　忝なうござりまする。同じ事でござりまする。
　ト典齋を見て

これはいかな。典齋が、また居眠つて居やるか。
小霜　コレ、典齋どの。
　ト脊中を叩く。典齋目を覺まし、悔りして
典齋　ヘイ〳〵、私しは中々居眠りは致しませぬ。兩眼とも斯くの通り。
　ト目を剝く。
小百　エ、、負け惜みな。たつた今まで。
典齋　茶道典齋、根氣が違ふ。目玉も違ふ。そんなぢやないぞ。
　ト滅多無性に茶臼をクル〳〵廻す。染の井、中二階へ向ひ
染井　申し、母樣、お加減のお藥、上がりましてござりまする。
操　「我れ見ても、久しくなりぬ住吉の、岸の姬松、幾世經ぬらん」。
　ト鼓の調べになり、中二階の障子引拔く。操、髮は立涙に、病ひ鉢卷、衣裳褊襠にて、廣き褥に坐り、脇息にもたれ、石臺の枯れ木の松を見てゐる。
糸萩　操さま、お心持ちは
染井　よろしうござりますかえ。

操　夫早瀬玄蕃どの、住吉明神を御信心深く、岸の姫松の實生を取寄せ、移し植ゑたる、この石臺。昨日までも青々と、綠の色を持ちたる松の、一夜のうちに枯れたるは、凶事か、吉事か。ハテ、審かしい。
染井　ほんに、舅御樣が御寵愛の松が、いつの間にやら此やうに。
操　イヤ、さして氣にかける事でもない。近いためしは先武將、眞柴大領久吉公、常世の松を御所望あつて、お庭にこれを植ゑられしが、只一夜に枯れたるゆゑ、君の御機嫌以ての外、曾呂利新左衛門お側にあつて、「御秘藏の常世の松は枯れにけり、我が齢をば君に捧げて」と、一首の狂歌に壽を申し上げしと、夫の話し。物は祝ひからといへば。
典膳　曾呂利流に私しが、ちよつと祝ひ直しませう。斯うもあらうか。「梅は梅、櫻は櫻世の中に、何とて松は枯れなかるらん」、皆々喜べ、典膳お腹がマ、空つたわやい。
染井　エヽ、何をマア譯もない。
典膳　ドリヤ、茶漬してやらうか。
ト逃げて入る。
染井　それはさうと、母樣の此度の御病氣は、痰咳心をまどふとやら申して、いかう大切な御病氣と、眞島法眼さまに承りまして、あまり心なりませぬゆゑ、父上にお願ひ申して、御介抱のため參りましたが、この程よりお食は元より、お藥さへ捗々しう、召上がられぬ御病中、それにマア其やうに、お髮をお揃へ遊ばしましては。
操　さればいなう。大人參の藥力にて、やう／＼命をつなぐ身が、髮かたちを結ぶ氣力ならねど、卯の花月の今日が卯の日、住吉樣の御緣日、夫玄蕃どの御下城あらば、急にそもじと忰伊織が、內祝言の取結びを。
染井　エヽ、なんと仰しやるえ。
操　御家中多きその中にも、そもじの父御花形刑部さまと、玄蕃どのは別しての入懇。此方には男子二人、刑部さまには女子お二人。惣領のそもじを、兄伊織が妻に申し受け、弟の源次郎を、妹御の葉末どのに娶合はせ、早瀨花形兩家の相續、殿樣の御媒介にて、結納引出も取交し、直ぐに婚禮と思ふところで、折惡い久吉さまの御他界。三ケ年がその間は、愼しむが武士の冥加と、今までは延び／＼になりしが、この程より眞實の、介抱にあづかるといひ、そもじの心を推量して、表向きの披露目は追つて。急に杯の取交し。その用意召されたがよいぞや。

染井　そんなら今宵、内祝言を。
操　女ども、あらましは調うたか。
小霜　お書附けの通り
小百　調ひましてござりまする。
糸萩　染の井さま、さぞ
女四　お嬉しうござりませうな。
染井　これが嬉しうなうて何と致しませう。云ひ號けの伊織さま、殿振りといひ武藝といひ、婚禮の日を指折り數へ、待ち焦れた二世の結びも、上様のお物忌みで、延び延びになつたと聞き、辛氣に思うて居りましたが、降つて湧いた今宵の祝言、これといふもあなたのお庇。エヽ、有り難う存じまする。
ト操を拜み、イソ〳〵する。
操　喜びは道理こそ。父御が内意のお使ひに、坂本の城内へ行きやつた伊織も、今日は是非とも歸る筈。源次郎に安達彌助が、今朝、夜の内から迎ひに出たれば、追つけ皆打揃うて、御下城に程もあるまい。其方は部屋で、その用意を。
染井　ハイ〳〵。
トこなしあつて

今宵祝言いたしますれば、明日は顏も直し、この吹髷もあなたのやうに、丸髷に結び直せば、玄蕃さまも眞の父樣同然。
操　孝行にしてたもや……みどりさま、糸萩さま、今宵はめでたい折から、奧へ參つて共々に、お取持ちを賴みまする。
兩人　畏まりましてござりまする。
操　染の井どの、奧の間へ御案内して下され。
染井　アイ〳〵。サア、斯うお出でなされませ。
糸萩　後ほどお目に
兩人　かゝりませう。
ト染の井先に糸萩、みどり、腰元附いて奧へ入る。
操こなしあつて
操　氣は張り詰めても必死の大病、ア、苦しい。
トしつぼりとした合ひ方。
昨日御登城の折から、細々仰せありし、お國の治まり、殿樣のお身の上、今に於てお下がりないは、もしや
と松を見て
神木のあやしみといひ、ア、、心ならぬ事ぢやなア。
ト唄になり、障子閉める。この唄をかかりて向うより平

馬、軍兵衞、若侍ひの拵へ、羽織袴、鴈助。草履を持ち、附添ひ出て

軍兵　イヤ〱平馬どの、暫らくお待ちなさい。

ト花道にとまる。奴下座する。

最早これが龜崎の別莊でござる。何かとくと相談いたした上。

平馬　御尤も……コリヤ鴈助、何者ぞ參るか、心を附けい。

鴈助　ネイ。

ト合ひ方になり、鴈助、戸屋の方を向き、キツと睨んでゐる。兩人かゝんで

平馬　軍兵衞どの、三郎右衞門どのは、最早餘ほど落ちのびたでござらう。

軍兵　かれこれ國境までは逃げられたでござらう。

鴈助　アレ〱、何者か參りまする。

軍兵　烏でないか。

鴈助　イヤ、お茶子でござりまする。

軍兵　何を馬鹿な。

平馬　時に、斯うでござる。兩人早瀨が屋敷へ參り、伊織をはじめ一族の者、敵は東間三郎右衞門と存じ居るか。但しは知らぬか。とくと實否を探つた上

軍兵　我れ〱加勢いたせし樣子を、もし氣取られた體なれば、伊織、源次郎は申すに及ばず、安達彌助を始めと致し、家來の奴等一々に、眞向立割り車切り、或ひは袈裟がけ、唐竹割り、館に死人の山を築き……

平馬　さう仰山に云はしやつても、名におふ鬼玄蕃の悴ども、中々手には負へますまい。

軍兵　拙者も左樣存ずるゆゑ、田の字組の足輕どもへ、とくと申しつけて置いたれば、屋敷の四方に埋伏いたし、暮れを合圖に忍び入り、力を合すかねての手筈。

平馬　天晴れ手負ひ、事危しと見るなれば

軍兵　跡は彼奴等に振り向けて

平馬　尻に帆かけて

軍兵　逃げるが奥の手。

平馬　先づそれまでは何事も

軍兵　知らぬ顏の

平馬　軍兵衞どの。

軍兵　平馬どの。

平馬　鴈助、供せい。

ト本舞臺へ來り

其方は、コリヤ。

ト囁く。

鷹助　畏まつてござりまする。

平馬　行け〳〵。

鷹助　ネイ。

ト下手へ入る。

軍兵　頼みませう。

典齋　ドウレ。

ト奥より出て

どなたでござりまする。

平馬　岩淵平馬。

軍兵　最上軍兵衛。

典齋　これは御兩所、お通りなされませ。

平馬　許し召され。

ト兩人二重へ上がる。

軍兵　して、玄蕃どの御親子には。

典齋　うろたへた稲荷樣。

軍兵　何の事だ。

典齋　まだお下がりにござりませぬ。

平馬　今日我れ〳〵參つたは、奥方のお見舞ひやら、また早瀬氏御親子へ、内々御意得たい儀もござつて。

典齋　追つけ歸らるゝでござりませう。それまでは奥へござつて、五つばかり、足にやいとを。

軍兵　エヽ、御きうそくか。洒落た奴な。イザ、平馬どの。

平馬　イヤ、拙者はこれにてナ。

ト樣子を窺ふといふこなしあつて

まづお先へ。

軍兵　然らば平馬どの。

典齋　米麥粟黍稗。

ト口早に云ふ。

軍兵　ごこく御意得ませう。

ト唄になり、軍兵衛奥へ入る。平馬あたりを見廻し〳〵、平舞臺へ下り

平馬　時に典齋、最早誰や彼へは取りおいて

典齋　これから眞劍でお話しを。

平馬　かねて身共が頼み置いたる

典齋　藥の非さまの儀でござりまするか。

平馬　君の音締めは、どうか〳〵。

典齋　お喜びなされませ、上首尾でござりまする。

平馬　そりや、誠かいやい〳〵。

典齋　少々、爰に一つの難儀といふは。
平馬　云ひ號けの伊織めが、邪魔いたすか。
典齋　イヤ、若旦那樣は染の井さまを、お嫌ひなされてござるゆゑ、いつその事面當てに、御相談は出來よいが、まだ外に惚れ手があつて、いろ〳〵口說く奴がござりまする。
平馬　ハテサテ、憎くい奴。して、其奴は何者ぢや。
典齋　サア、その口說いてゐる奴は……イヤ〳〵、これは申すまい〳〵。
平馬　なぜ〳〵。
典齋　その相手を明らさまに申しては、朋友仲の遺恨になります。迂濶には申されぬ。
平馬　染の井を口說く奴は、身が爲に戀の敵、隱し置くほど聞きたい。コリヤ。
ト紙入れより小判壹兩取出し、紙に載せて差出し
どうぞ云うて聞かせてくれろ。
ト取つて懷へ捻ぢ込み
典齋　先づは着服。
平馬　して、その相手は。
典齋　必らずお腹立てられますな。何を隱しませう、只今御同道なされた
平馬　ヤア、最上軍兵衞めが。
典齋　イヤモウ、それは〳〵大抵の惚れやうぢやござりませぬ。その上、何者が告げ居つたやら、あなたが御執心の樣子を悟り、あの平馬どのが亡きならば、染の井を靡けんものと、闇討ちにするかねての巧み、必ず御油斷なされますな。
平馬　オ、、よく知らせてくれた。表は入懇に見せかけて騙し討ちに致さんとは、卑怯至極の最上軍兵衞。うぬ、安穩に置くべきか。
ト此うち奥より小霜出て
小霜　平馬さまお出での樣子、御新造樣がお聞きなされ、密かにお目にかゝりたいとの、仰せでござりまする。
平馬　ナニ、染の井どのが密々に。
典齋　ソレ、うまいぞ〳〵。
小霜　奥の圍ひまで、お出でなされませ。
平馬　ナニ、圍ひとは、いよ〳〵有り難い。
典齋　サア、平馬さま。
小霜　斯うお越しなされませ。
ト小霜先に、平馬、典齋附いて奥へ入る。あと琴唄に

なり、向うより伊織、源次郎、彌助、三人とも前幕の
形にて、しほ〳〵として出で來り、花道よき所にて、
伊織向うを見て、こなしあつて

伊織　コレ、源次郎、道々も申し聞かせし通り、今をも知れぬ母人の御大病、御最期の由をお聞きあらば忽ちに。

トこなしあつて。

せめて一日半時なりとも、お命がとりとめたい。必らず共に家内の者に、嘆きの色目を悟られぬやう、彌助、其方も萬事に心を附けよ。

彌助　畏まりました。

源次　兄者人の仰せなれども、母人様には御病氣、その上に、現在親人のお果てなされたを、なんで泣かずに居られませうぞ。

伊織　オヽ、嘆きは理り、さりながら、胤腹一つの兄と弟、其方一人悲しうて、この伊織は無念にあるまいか。そこをヂツとくひしばり、色目を見せぬが母への孝行。

彌助　お道理でござりまする。この彌助めも幼少より、お側にて召使はれし旦那樣、お果てなされた樣子をば、染の井さまや葉末さまが、お聞き遊ばしたら、さぞやお嘆きなさらうと、思へばこの胸が一杯に。

ト云ひさして愁ひのこなし。

伊織　鬼玄蕃と呼ばれし勇士の倅、家來でないか。

源次　左樣仰せ下されましても

彌助　これが泣かずに居られませうか。

伊織　女童同然に、めろ〳〵と何ほへる。

源次　泣きや致しませぬ。

伊織　涙が未來の手向けになるか。

彌助　ヘイ。

伊織　未練であらう。

兩人　泣きや致しませぬ。

伊織　オヽ、出かす〳〵……ナニ彌助、其方はいつもの通り、無事に下城の體にもてなし

彌助　畏まつてござりまする。

ト兩人に目禮して、本舞臺へ來り

御兩所の御下城。

トこれにて奥より染の井出で來り、住ふ。伊織、源次郎は二重へ通り、座に附く。彌助は下手へ扣へる。

染井　お二人樣には御下城遊ばされ、おめでたう存じまする。

伊織　染の井どの、我れ〳〵が留守中、母人の御介抱、一

染井　しほ御大儀に存ずる。
母様も今日は、御氣分がよいと仰しやつて、御機嫌
よろしうございますわいなア。

伊織　先づは安心。痰咳、咽喉の道をふさぎ、薬力五臓へ
めぐらねば、必死の病氣と法眼の醫薬、暫時も油斷はな
らず。何にもせよ、御病床へ。

染井　只今はスヤ〳〵と

伊織　お寢つてござるか。

染井　ハイ。

伊織　ムウ。それもよし。

染井　それはさうと父様は、まだ御下城は遊ばしませぬか
いなア。

源次　その親人様には。
打消して

伊織　イヤ〳〵、親人様には、我が君の急御用につき、坂
本へ使者のお役目、城内より御發足。

染井　お隙のいる事でございますかえ。

伊織　されば、御歸宅の程は、ナウ、彌助。

彌助　ヘイ、旦那様の御歸宅は、いつまで待つても。

源次　申し、兄者人、私しは奥へ參つて、香花なりと。

伊織　ア、成る程〳〵、薬の力屆かぬ時は、神佛へ祈念
をかけ、利生を願ふより外はない。
ト外へ散らして
彌助、其方も草臥れたであらう。部屋へ下がつて休息い
たせ。

彌助　ヘイ。

伊織　拙者も母人の御機嫌を

源次　伺ひに參じませう。

伊織　そんなら染の井どの。

染井　伊織さま。

彌助　まづお越し遊ばしませ。
ト唄になり、伊織源次郎顔見合せ、こなしあつて悄々
と奥へ入る。彌助も下手へ入る。染の井思ひ入れあつ
て

染井　何やらお二人様が、わたしにお隱しなさるやうな素
振り。もしや御殿で何事か……母様の御容體といひ、心
にかゝる事ぢやなア。
トしいをり思ひ入れ。唄になり、向うより刑部、老け
たる親仁、羽織袴にて、振り袖なりの葉末を連れ、跡
より若黨一人、挾み箱を擔ぎ、出て來り、直ぐに門口

へ來て

刑部　頼みませう〳〵。

ト云うても、染の井思案の思ひ入れにて聞えぬこなし。

染井　どうも合點がゆかぬわいの。

刑部　取次ぎは居らぬか。コリヤ、頼まうぞよ。

ト大きな聲で云ふ。

染井　エ、恟りした程に の……案内がある。誰ぞおぢや。

葉末　さう仰しやるは、姉樣ぢやござりませぬかいなア。

染井　オヽ、父上、葉末、ようこそおぢやつたなう。

ト平舞臺へ下りる。

刑部　彌平次、その挾み箱これに置き、歸りを待て。

若黨　畏まつてござりまする。

トよき所へ挾み箱を直し、橋がゝりへ入る。刑部は二重へ通る。奧より源次郎出て

源次　これは〳〵刑部樣、久々お目にかゝりませぬ。

刑部　オヽ、源次郎か。今朝は操どのより、細々との御書面。身も日々に老耄いたせば、此方も氣が急く内祝言。姉の相伴に、妹めもおてまへと、杯をいたさせ、大領御遺言の御法事終らば、早速屋敷に引取つて、元服を致させ、家督を讓り、身は隱居いたすつもり。近頃押つけがましけれども、それゆゑ、葉末を同道いたした。もそつと早く參らうと存じたれど、イヤ、髮を上げるの、湯に入るのと、女と申すものは形ばかりに、なか〳〵埒の明くものぢやない。身共が性急の生れに、因果と二人ながら女の子。姉染の井は、人にすぐれて悠長者、何をさせても、べたら〳〵と。聟伊織は烈しき若者、其やうな事ぢや氣に入らぬぞや。ムウ、こりや意見やら祝言やら、盆も彼岸も一緒になり申した。して、奧方の御病氣は、ちと快い方か。コリヤ、なぜ源次郎に挨拶をせぬ。エヽ、鈍な奴ではござるわい。

葉末　それでもあなたがお一人で、何もかも仰しやつてござるもの。

刑部　こればかりは尤もぢや。ナニ源次郎、奧深草は、この葉末を産後の惱みに、程なく相果て、この父親が手しほにかけ、育て申した妹なれば、どうで氣には入るまいが、行く末長く面倒を見てやつて下され。頼み申す。

源次　これは痛み入つたるお詞。身不肖の源次郎を、御懇望下さるといひ、殊に殿樣のお目鏡によつて、花形の家名をお讓り下されんとは、武士の冥加に叶ひし仕合せ、忝なう存じまする。

刑部　さう思うてたもれば身も安堵。さて操どのは御病中、先づ伊織にお目にかゝり、何か談ずる仔細もあり。コリヤ姉、何をうつかり。伊織の居間へ案内いたせ。
染井　畏まつてござりまする。
葉末　姉さん、わたしはどう致しませうぞえ。
刑部　ハテ、これに殘つて源次郎と
染井　父樣、この子は
葉末　どう致すのでござりまする。
刑部　ハテ知れた事だ。ソレ…どうなりと勝手にしをれ。
ト唄になり、ツイと奧へ入る。染の井こなしあつて、續いて奧へ入る。葉末、源次郎の側へ寄らうとしても、源次郎手を組み、思案してゐるゆゑ、つぎほなきこなし。幕明きの本を見て、さうぢやトいふ心にて膝を打つ。これをキツカケに、琴ばかりの浪花獅子の合ひ方になり
葉末　申し、この本は何でござりますえ。
ト尻目に見て
源次　それは曾我物語ではござらぬか。
葉末　ほんに左樣でござりまする。可愛らしい繪も入つてあり…お慰みに御覽じませ。

源次　イカサマ。
ト見て
ア、思へば曾我兄弟も、父河津を工藤に討たれ、年來の鬱憤は、さぞ。
ト向うを見て、ハラ／＼と泣く。葉末、恟りして
葉末　申し…申し、あなたはなんで其やうに。
源次　ヤア。
葉末　お目一ぱいに涙を持つて。
源次　イヤサ、曾我兄弟の人々は、千辛萬苦の無念を忍び、父の敵を討つたるは、天晴れ冥加、荒人神、弓矢の家に生れし身は、誰れも斯くこそありたきもの。
葉末　思ひ過しを遊ばして
源次　不覺の落涙、面目なうござるわいの。
ト兩人顏見合せて思ひ入れ。恥かしきこなし。奧にて聲する。
平馬　染の井どのはいづれにござる。
葉末　ヤア、あの聲は。
源次　岩淵平馬…葉末どの、ござれ。
ト唄になり、源次郎に葉末附いて奧へ入る。引違へて平馬出て

平馬　ハテ面妖な。座敷の隅々、庭木の隈々、どこを尋ねても行くへが知れぬ。ハテナア。

ト軍兵衛下手より出て

軍兵　平馬どの、伊織が部屋へ參り、何くはぬ顔で探り見ましたところが、コレ

ト囁やかうとする。平馬飛びのき

平馬　どこへ〳〵。騙し寄つて討たんとは、岩淵平馬その手はたべぬ。何を小癪な。

軍兵　そりや何を云はしやる。朋友の數多ある中にも、おてまへと身共は別しての入魂と油斷させ、一刀にグツサリ。ヤア、知るまいと思ふか、天眼通は得ざれども、御身が胸中見拔いて居るわい。

軍兵　これはまた怪しからぬ。人にこそよれ、拙者に限り。

平馬　イヤサ、如何やうに陳じても、遺恨重なる戀の敵、手短かに、うぬ。

ト拔討ちに切つてかゝる。飛び退き

軍兵　早まるまい。待つた〳〵。

平馬　なにを。

ト疊みかけて切りこむゆゑ、有りあふ莨盆取つて投げ

軍兵　こりや堪らぬ。

ト逃げて入る。

平馬　うぬ、いづくまでも

ト追ひ駈けようとする。この前より刑部出てゐて、ツト寄つて突き廻し

刑部　平馬、待ちやれ。

平馬　貴殿は花形刑部どの。

刑部　如何なる遺恨か存ぜぬが、殿より知行を下し置かるる最上軍兵衛、私しに手にかけ、後日の云ひ譯、如何召さるゝ。

平馬　ヤア。

刑部　エヽ、馬鹿な男ではござるわい。

ト突き放す。

平馬　イヤ、彼奴殺しても大事ござらぬ。

ト行かうとするを、突き飛ばして

刑部　エヽ、まだ〳〵申すか、馬鹿侍ひめ。

ト睨めつける。平馬拦となる。この模樣、よろしく道具廻る。

造り物、九尺の屋體、軒づら伊豫簾上げ下ろし、網代

塀、手水鉢、下草あしらひ、上の方椿の立ち樹、すべて結構なる數寄屋の模樣よろしく、早舞にて道具納まる。

ト本釣り鐘。獨吟のかゝりになる。

〽八千代とは、聞くも嬉しき玉椿、落ちて見よとはあれ憎らしいひぞり言。

トよろしく合ひ方になり、伊豫簾卷き上げる。爰に以前の染の井、上下を疊みゐる。伊織、手紙を見てゐる。

染井　いつにない御下城が遲いゆゑ、殊たうお案じ申しました。常は格別、今宵はめでたい‥‥ホヽヽヽ。おめでたうござりまする。

トいそ〳〵としたる思ひ入れ。伊織思ひ入れあつて

伊織　最前より何やら、そは〳〵と嬉しさうに。して、何がめでたいと云はるゝのぢや。

染井　ハイ、おめでたう存じまする。

伊織　これはいかな事、譯も申さず、そりや何が。

染井　サア、母樣の仰しやりまするには、今宵伊織源次郎兄弟と、私しども二人の者を、表向き御祝言なさるゝとて。

伊織　ナニ、俄に改め、婚姻の取結びを。

染井　アイナア。

伊織　アノ祝言を‥‥ア、お痛はしや母上には、今日の樣子を。

染井　エ、。

伊織　イヤサ、年寄りといふものは、何事によらず心急かれて。ハヽヽヽヽ、なんの今宵に限つた事でもあるまいに。

染井　それぢやと申しまして。

伊織　其方に用事はない。

染井　ハイ。

伊織　これはしたり、ござれと申すに。

染井　ハアイ。

トこなしあつて、悄々と立ち、入る。これを二の句になる。

〽人の心も白玉の、風待つ枝も恨み顏。

トこの文句のうち硯を出し、卷紙に書置を認め

伊織　武士のあるまじき、敵の名さへしらぬひの、心づくしの甲斐もなう‥‥譬へいづくに忍ぶとも、尋ね出して武士の本懷。併し病苦の母の介抱、弟源次郎へ跡の始末を、オヽ、さうぢや。

〽 拗ねて情を汲む袖も、ほころびやすき仇名草。

トまた書きかゝる。この時うしろへ染の井、茶臺へ茶碗をのせ出て

染井　ハイ、お茶おあがりなされませ。

ト恟りして卷紙を隱し

伊織　オヽ、必らず氣遣ひ致されな。

染井　あなたはいかうお顏色が

伊織　惡いと云はるゝか。思ひ内にあれば、色外に現はるゝと、包むにあまる胸の中。

染井　すりや、忍ぶ文字摺り戀衣、もしや餘所に増す花の、色香に知れてそれぞとも。

伊織　目ざすは一人、現在敵の

染井　エ。

伊織　イヤサ、堅くろしい母の長煩らひ、心長う介抱いたしてくりやれ。

染井　それもあなたに盡すと思へば。

伊織　サヽ、ござれと申すに。

染井　でも御用が。

伊織　ハテ、無いと申すに。

染井　どうか御用が、ありさうなものぢやなア。

トつんとこなしあつて下手へ入る。思ひ入れにてちよつと小隱れする。伊織、件の書置を懷中する。

〽 青葉の山の影深く、照らさぬ宵の朧月。

トこの文句の内、鋏を持ち、庭下駄を穿き、上手咲分けの椿を切り取り、また二重へ上がり、盆が欲しいといふ思ひ入れ。この時、染の井、丸盆を出す。伊織心附かず、幸ひといふこなしにて花を置く。花活が欲しいといふ思ひ入れ、染の井、また花活を出す。よろしくあつて唄一ぱいに顏見合せ

伊織　又これへござつたか。

染井　ハイ。

伊織　木石ならぬ伊織が心底。この咲分けの花の一枝、其方は何と思はるゝ。

染井　サア、其やうに改めて仰しやるを、申すもお恥かしうござりますが、玉椿の八千代までと、喜びまして女夫の仲にたとへ、大抵めでたい花と存じまするわいなア。

伊織　成る程、筒に水を保つて活け置かば、千代と壽く玉椿。活けたるまゝで水をも注さず、其方へ遣はす伊織が心底。

染井　樣子ありげなそのお詞、八千代とこめし玉椿、たと

へ手活けになさるゝとても、水を注さねば萎るゝが花の習ひ。憚りながら、わたしが心は。

ト思ひ入れあつて水注しを取りに行く。

〽濁らぬ水の底清き、流れの末の末かけて、深き思ひを人よ知れ。

ト水を注さうとするを、伊織とめて

伊織　ア、コリヤ、水を注すには及ばぬ。此まゝ其方に贈り物。

染井　活けるに甲斐なきこの花を、悟りかねたる詞の謎。

伊織　解けねば父の刑部どのへ、其方の手より送つてくりやれ。

染井　畏まりました……とは云へどうやら、心にかゝりまして。

ト花活を引寄せろ。この時椿一輪落ちる。

ヤア、一輪散つて

伊織　花もの云はねど、心の葉末その通り。

染井　そんなら、わたしを。

伊織　大概そこらで、察して置きやれ。

〽濡れてや軒に鶯の、ともに啼きつれ歸る雁。

トこの時奥にて

刑部　離縁の娘。受取り申した。

ト出てくる。

染井　お前は父さん。

伊織　刑部さま。

刑部　會者定離の習ひ、祝うて活けたる玉椿、水の縁なく去られし娘、殘る色香に捨ても置かれず、欲しがる方へ緣附けん。娘も左樣思うてゐやれ。

染井　イエ〳〵、去らるゝ覺えはござんせぬ。深い緣しのあればこそ、親と親とが云ひ號け、夫婦といふは名ばかりにて、まだ祝言さへせぬうちに、わしや外へ嫁入りする事は否。聞えぬは伊織さま、これぞといふ科もなく、離別せうとはあんまりな。そりや胴慾でござんすわいなア。

刑部　これはしたり、其方も武士の娘でないか。未練な繰り言、伊織どのゝ手前もあるに。

染井　でも、こればかりは。

刑部　ハテ、嗜なみめされ。イヤナニ伊織、善惡の心底は知れねども、咲分けの花の謎、解き分けし詞の文、緣にしがらむ妹の葉末、此方より暇を取り連れ歸る。某が武士の潔白。偏屈親仁とお笑ひなく、左樣思うておくりやれ。

伊織　弟の心は知らず、葉末どのを連れ歸るは、御兩所のお心任せ。拙者は染の井、慥かにお渡し申す。

刑部　受取り申すも刀の手前、未練はござらぬ。

染井　云うて返らぬ事ならば、身はそぎ尼の佛門に

伊織　入狹の月の弓取りは、誰が爲にこそ名を惜しみ。

刑部　身より果敢なき武士の

伊織　打明けられぬ

兩人　交はりぢやなア。

刑部　伊織どの、餘事は後刻。

伊織　然らば兄御。

染井　アレ、そんなら矢ツ張り。

ト嬉しきこなし。

伊織　イヤ、舅にあらぬ刑部どの。

染井　アレまた。

ト辛氣なこなし。

刑部　ハテ、娘、來やれと云ふに。

トこの見得、唄、時の鐘にて、道具ぶん廻す。

造り物、三間の二重、貼り交ぜ。上手、高二重。前側、障子。落間、柴垣。いつもの所に枝折り戸。隨分綺麗なる數寄屋建て。誂らへの獨吟にて道具とまる。

ト向うより元右衞門、侍ひの形にて悄れながら出て花道にて

元右　ハテ、合點が行かぬ。昨夜御城内の中間部屋で、どつちりと呑んだ所へ、旦那がお下がりと云うたゆゑ、お提灯を持つて、お供したまでは、うつすりと覺えて居るが、それから後は夢現。雷が落ちた時、吃りして矢ツ張り夢中。フツと今朝、曉方に目が覺めて見たところが、月見の馬場。いま／＼しい、また旦那の前をやらかしたわい。いつもお詫をして下さる、奧樣は御病氣なり、佛の顏も三度と云へば、何ぼう慈悲深いお旦那も、今度は滅多に、御免はあるまい。ア、情ない事をしてのけたわい。

トまた唄になり、元右衞門、詰まらぬこなしにて、本舞臺へ來て、上の方へ行き、怖々奧の方へ覗き、こなし。奧より彌助出て

彌助　イヤ／＼、うつかりして居る所でない、船場の方を尋ねたならば、何ぞ又、手掛りを聞出すまいものでもない。さうぢや／＼。

ト花道の方へ行かうとする。

元右　コリヤ／＼、コリヤ、弟ぢやないか。彌助／＼。

彌助　ト彌助、振り返り
元右衛門か。兄と云ふも穢らはしい。こなたに交す詞はないわい。
ト又行かうとするを、ツカ〳〵と寄つて袖捉へ
元右　サ、尤もは尤もぢやが、てまへまでがさう云うてくれては、おらが身のたゝずみがない。兄弟のよしみ、お旦那へ、われがお詫の取次を。
彌助　ヤア〳〵。
元右　餘り度々の事なれば、なか〳〵一應や再應で、お聞届けは下さるまいが、いま御主人に見放されたら、その日から直ぐに乞食ぢや。人間一人助けると思うて、どうぞ旦那へお詫びの訴訟を。この通り、兄が手を下げ、幾重にも頼む〳〵。
ト彌助こなし。
彌助　何と云ふ。お旦那へ詫びを願ふは、こなたはまだ目が覺めぬか。但し、氣でも違つたか。
元右　サア、その氣違ひ水に心とろけ
彌助　昨夜月見の馬場の騒動。
元右　ナニ、騒動とは。
彌助　すりや、こなた、まだ
元右　何にも知らぬ。
彌助　アノ、實に知らぬか。
元右　面目次第もない。
彌助　ムウ、ちよつとござれ。
ト手を取り、向うへ連れて出て
彌助　兄貴、潔よく腹切らつしやれ。
元右　なんと。
彌助　こなたが昨夜お供召された旦那は、月見の馬場で人手にかゝり、敢へなくお討たれなされたぢや。
元右　ヤア〳〵。
彌助　エヽ、こなたはなう。
ト鼓入りの合ひ方になり
彌助　コレ、今更改めて云ふではなけれど、我れ〳〵兄弟は、お家に重代、母者人の腹の内から、御知行で育つて五倫五體。情ないその酒亂、親仁樣御存命のうちも、度々大事の御用を缺いて、もう今度は勘當する、今度は叩き出して仕舞ふと、御內意を伺へば、アヽよいわい、幼少より身が側で、召遣うた元右衛門め、勘當して路頭に立てば、酒でその身を亡ぼすであらう。料簡を致してやれと、家來の忰をお主樣が、影になり日向になり、こなた

をお庇ひ下された事、よもや忘れはさつしやるまいがの。その大恩ある御主人が、横死の場所へお供しながら、酒に呑まれて前後も知らず、寢て居ると云ふやうな、腑甲斐ない事があるものかいなう。恥を思へば潔よく、追ひ腹切つて未來の主人へ、死んで冥土の奉公召され。小身なれども苗字帶刀、二字を頂く安達が悴、先祖の名まで穢すとは、不孝と云はうか、不忠と云はうか。エヽ、情ない所存ぢやなう。

トいろ／＼こなしあつて云ふ。此うち元右衛門、向うを見たり、いろ／＼口惜しきこなしあつて

元右　エヽ、口惜しいわい／＼。今てまへが云ふ通り、おりやどうした因果者ぢや。又しても／＼、喰ひどれ、しくじつたその後では、世にしみ／＼と旦那の御意見、骨身に應へ、有り難うて、フツ／＼呑むまい、やめませうと、覺えて居るうちは思つても、友達どもが集錢出し、旨さうにやるを見ると、どうも堪へられぬやうになつて來て、腹の蟲めがグウと吐かす。イヤ、一杯は大事あるまい、壹合位ぢや醉ひもせまいと、呑めば段々呼出し酒、いげちないのが病か、業か、揚句の果には、あらう事か、三代相恩の御主人が、人手にかゝり、やみ／＼と、お討たれなさるゝも知らず、どぶさつて居たかと思や、あんまりで呆れ返り、我れと我が手にこの體に、愛想もこそも盡き果てた。この上は、おめ／＼と長らへて居る心はない。弟、介錯してくれ、頼むぞよ。

彌助　何と云ふ。すりや、武士らしく追ひ腹を。

元右　オヽ、切る。切らいでは。酒で腐つたこの腸、なんの命が惜しからうぞい。

彌助　オヽ、出かさつしやれた。天晴れ覺悟。こりや斯うありさうなものぢやわい。

元右　これまでの不行跡は

彌助　今さら悔んで詮ない事。

元右　この世で忠義の仕始め、仕納め。

彌助　最期ばかりは、せめて立派に。

元右　さうだ。

トすらりと拔いて、突ッ込まうとする。此うち伊織、出かけ居て、ツカ／＼寄つて、その手を押へ

伊織　元右衛門、待て。

元右　若旦那か。

伊織　エヽ、殉死ばかりを忠義と思ふか。

元右　それぢやと申して。

伊織　ハテ、待てと申さば、マア／＼待て。

元右　すりや、死ぬにも死なれませぬか。ハア、。

伊織　誤まつて改むるに、憚る事勿れ。死ぬる命を長らへて、頼み少なき母人の、御先途を見屆けてはくれまいか。

元右　なんと仰しやりまする。

彌助　若旦那樣の仰せではござりますれど、そりやハヤ、酒氣の醒めた時は、本心は違はねども、呑めば忽ち亂るる魂ひ。大切な奧樣を、御介抱は心元ない。

元右　ナニサマ、尤もだ。

ト元右衞門、硯箱を取出し、誓紙を書き、小指を切り、血判を捺して、伊織の前へ持ち行き

元右　若旦那、御覽なされて下さりませう。

伊織　生涯禁酒の事、右相背くに於ては、忽ち佛神の御罰を蒙むり、この世にて逆磔の刑に行はれ、未來無間の業請くべきなり、仍て誓紙件の如し、安達元右衞門。

彌助　オ、出かした。

ト大きな聲にて云ひ、愡りして口を押へる。

伊織　所存あれば、この誓紙は、彌助、其方に預ける。

ト差出す。

彌助　ハツ。

ト元右衞門へ膝摺り寄せ

兄貴、この文言、いつまでも、必らず忘れて、下さるなよ。

元右　云ふにや及ぶ。この上は、元右衞門が魂ひは金鐵だわい。

彌助　忝ない。

伊織　兩人、近う。

彌助　ハツ。

伊織　其方も、コリヤ。

ト囁く。

元右　すりや、先刻より入込み居る

彌助　軍兵衞、平馬、兩人の侍ひ。

彌元　引ツ捕へて一詮議。

トきつとなる。

伊織　事荒立てゝは何かの妨げ。必らずともに、ぬからぬやうに。

彌元　心得ました。

ト兩人息込む。

伊織　密かに／＼。

元彌　ハツ。

ト唄になり、兩人、双方へ別れ入る。後に伊織、こなしあつて、懐より袱紗包みし鎗を出し

伊織　この穂先をよく〳〵見れば、眞海と銘を打ち、左振流に用ゆるしのぎ。いま當家一家中に、鎗術學ぶ者多しといへども、左振流の鎗術は、東間三郎右衛門ならで外になし。さすれば敵は……東間と思へども、これぞと云へる慥かな證據なくては、迂濶にそれともなしがたし。ハテ、何としたものであらうなア。

トこなし。此うち上手屋體、障子引拔くと、操、以前の形、脇息に凭れ居て

操　伊織、それに居やつたか。

ト伊織、鎗の穂先を物にて隠し、居直つて

伊織　あなたは母上。して、御病體は、如何でございまする。

操　ずんと清しい。ナニ伊織。

伊織　ハツ〳〵。

ト拔入りの合ひ方になり、操、膝立て直し

操　父の仇には、倶に天を戴かず。何ゆゑ發足を延引するぞ。

伊織　すりや、親人の御身の上、よく御存じでございまするか。

操　病み勞れても玄蕃が妻、夫の御最期、我が子の悲しみ、知らいでなんとせうぞいなう。迂濶に様子を語らねば、母が病の障りとも、母への孝は父御へ不孝、なんと違ひはあるまいがの。

伊織　ハ、ア、御存じの上は包んで益なし。一通りお聞き下され。

ト合ひ方になり

このたび京鎌倉の確執は、坂本の侫臣、岸田民部、幼君頼家公の御名を借つて、北條どのを亡ぼさんと、濃州桑山に立籠り、我意に募るは謀叛の企て。かねて岡船岸の頭、東間三郎右衛門なんど、家中に一味を打語らひ、主人中將秀秋どのを、わざと岸田へ一味を勸め、密かに北條家へ内通し、この虚に乘つて家國を押領せん彼れ等が企み。親人、疾よりお察しあつて、坂本の御城中へ、この伊織を密事のお使ひ。造酒頭どのと申し合はせ、捕者はわざと引下がり、歸ると其まゝ當城の道筋、藪ケ小路に續いたる、月見の馬場に差かゝれば、草葉は血汐皆紅ゐ、何事なるぞと立寄り見れば、こは淺ましや親人に

は、惣身朱に數ヶ所の深手。側には彌助、源次郎。とくと御死骸を改めれば、肝のたばねを貫きし、諸口しのぎ鎗の穗先。

ト鎗を操に見せ

流石は鬼と呼ばれし親人、最期に鎗の穗先を切り取り、後の證據を殘されし武勇、末代朽せぬ賜もの、直ぐに追ひ掛け討取らんと、驅け出せしが、ア、イヤ／＼、君より預かり奉る、貫之の色紙紛失、殊には又母の、今をも知れぬ御大病、父の最期を聞し召さば、などお命の續かんや。つゞまるだけは隱さんと、源次郎彌助に申し付け、仇討の願書を御用番まで差出し、愁ひに沈む弟を、詞荒く叱りつけ、泪一滴こぼさぬ苦しさ、五臟六腑は裂け破れ、皮肉はズタ／＼に離るゝばかり。一晝夜がその間、今までヂツと喰ひ縛り、堪へ／＼し溜め涙。母人、御免下されい。

ト取亂し、大泣きに泣き落す。

操　おゝ、さもあらん、妾が爲にも夫の敵、兄弟に力を添へ、討つて未來へ手向けんものと、心は矢竹に逸れども、胸を貫く癪の惱み。この母に構はずとも、片時も急いで門出の用意を。

伊織　お詞を返すではござらねども、父には別れ、天にも地にも、親と申すは母一人、産みの御恩に幼なきうちは、御懷に抱かれて、乳房をふくめ給はりし、昔を思ひ出されて、なんと此まゝ。

操　その未練な魂ひでは、所詮、敵はえゝ討つまい。母と思ふな、子と思はぬ。

伊織　餘りと申せば、お情ない。

操　最早、詞は交さぬぞ。

伊織　エ、……この上は、ソレ。

ト撞と下に居る。これをキッカケに亂拍子の一調子になる。上の柴垣より以前の捕り手一人、窺ひ出て、物をも云はず打つてかゝる。伊織、身を開き、ポンと投げる。又、下手より一人出て打つてかゝる。居ながら取つて投げ、柔術のタテよろしくあつて、トヾ二人切つて來るを、幕明きの稽古長刀を取つて、キッと留める。これより太鼓大小にて、祈りの鳴り物にて、六人を相手に花々しきタテあつて、トヾ花道へ逃げ出す。追つて行き長刀を突き、キッと見得。奥より刑部出て

刑部　者ども、引け。

捕手　ハア、。

刑部　ヤレ待て伊織。一期の怒りに、過ちすな。

伊織　こなたは舅、刑部どの。

刑部　上使。

ト伊織、ツカ〳〵と立戻りて

伊織　それへ參り、御上意の趣き、承るでござりませう。

ト合ひ方になり、操、差添を差し、刀を杖に突き、源次郎に介抱せられ、二重の下手へ坐る。刑部、鎧櫃へ腰掛ける。源次郎、平舞臺へ下り、伊織の次へ平伏する。

刑部　上意。今朝卯の刻、この刑部を御前へ召され、近習小姓を遠ざけ給ひ、密かに身共へ仰せあるは、玄蕃頭が不慮の横死、妻子の歎きさぞあらん、用番柾木宮内を以て、仇討ちの願ひを出せしにより、早速許しくれたれども、先君より預け置かれし、貫之の色紙紛失、その誤まりなきにしもあらず、尤も直則存生のうち、詮議の日延べを願ひ置くとも、他人を以て計らはゞ、本意を失なふ事もあらんと、婿たる其方へ、この役目申し付くる、早瀬兄弟が力となり、盗賊の手掛り、敵の實否、内々にて事を糺せ、予も幼少より玄蕃が膝に抱かれて、軍學武藝の指南を受けし者、馴染みの直則が最期を、一入殘念に思ふぞと、仰せも敢へず御双眼に、ハラ〳〵と御落涙。

ト三人顔見合せ、ハッと平伏して泣く。刑部も泪を拂ひ

御内意の次第、あらかじめ、斯くの通りでござる。

操　兄弟とも、承はつたか。

伊織　仁心深き上意の趣き、心魂に徹し

三人　エヽ、有り難う存じ奉りまする。

伊織　親人の最期の體、多勢を以て騙し討ちと相見え、惣身數ケ所の刀疵、胸板へ、突き貫きし鎗の穂先は。

ト口明の切尖を刑部へ見せる。

操　御覧なされ。この如く、眞海と銘を打つたる、左振流の諸口しのぎ。

伊織　さすれば、父の當の敵は、正しく東間三郎右衛門と、推量は致せども、盗賊の手掛りとても。

元右　お氣遣ひなさるゝな。刑部どのゝお力にて。

彌助　敵の實否、盗賊の手掛り

元右　慥かな證據を

元彌　捕へてござる。

ト云ひ〳〵軍兵衛平馬に縄掛け、引立て出る。

伊織　東馬が組下、最上軍兵衛、いま一人は岸の頭に、日

頃一味の岩淵平馬。
元右　サア、最前の通り今一度、僞はらずと白狀ひろげ。
軍兵　イヤ、何にも存じませぬ。
平馬　白狀する覺えはござらぬ。
彌助　云はぬか。吐かさにや。
元彌　カウ。
ト鐺を突ッ込みしめる。
軍兵　アイタ……。申します〳〵。何を隱さう、貫之の色紙は、岸の頭どのに頼まれ、盜み取つたは三郎右衛門どのゝ弟、東間大藏といふ浪人でござりまする。
平馬　何遍云うても同じ事。早瀨どのを討つた敵は、矢ツ張り東間三郎右衛門。私し共はほんの側杖。
軍兵　斯う白狀いたすからは、我が身替りに、その平馬が首を切つて。
平馬　何吐かす。この平馬が名代に、軍兵衞めを獄門に。
軍兵　何をおのれ。
平馬　イヤうぬを。
元右　やかましいわい。
彌助　兄貴、ソレ。
元右　合點だ。

ト兩人、紙硯を取つて來て、兩人が繩を解く。
軍兵　有り難い。
平馬　こりや、助けて下さりまするか。
彌助　サア、今白狀いたした通り
元右　一字一點違はぬやう
彌助　二人とも口書きせい。
平軍　エ、。
彌助　エ、とはうぬ、書きやがらぬか。
元彌　芋刺しだぞ。
平軍　ハイ〳〵〳〵、書きます〳〵。
ト双方、サラ〳〵と書いて
兩人　これでようござりまするか。
ト彌助元右衛門、刑部へ持ち行き
彌助　お指圖の證據の口書き。
元右　とくとお改め下さりませう。
刑部　出かした〳〵。
ト取上げる。
この上は改めて。
ト懐より立文を出し
即ち敵討の御免の墨附、立寄つて頂戴召され。

平馬　ナニ、敵討の免し文。
軍兵　それを。
　ト行かうとするを、元右衛門、彌助、ポン〳〵と當て
る。伊織、ツカ〳〵と寄つて、扇で受け、後に寄つて
伊織　御印書、慥かに頂戴仕りましてござりまする。
刑部　これまでは役目の表。
　ト下に居り、合ひ方。
　これからは聟舅。
操　互ひに重縁、一家のよしみ。
刑部　兄弟とも、何を愚闘々々。操どの〻介抱は、刀に掛
けて受合うた。サヽ、用意しやれ〳〵。
伊織　ハヽア、有り難き主君の慈悲心。舅どの〻お志し、
この上は。
　ト最前の手箱を取つて來て、操の前へ置き
後々萬事の片付けは、あらまし書付けに相認め、この手
筥に納めござれば、よろしくお取計らひ下さりませう。
操　大事を前に置きながら、物に動せぬ大勇の振舞ひ。流
石は父御の子程ある。めでたい門出に杯せん。ソレ、
腰元、嫁女達を伴へ。
腰元　畏まりました。

　ト鼓入りの合ひ方になり、葉末、染の井、白小袖、帽
子にて、小百合長柄。小霜、みどり、土器二組みの島
臺を、よき所へ直す。
源次　各々のこの姿は。
操　何國を目當、いつを限りと果しなき旅の空、後に殘り
し二人の嫁女、あまり心根がいとしさに、取急ぐこの場
の杯。
刑部　三々九度も場所による、夫婦の固め、親子の杯、門
出の祝儀も一時に。エヽ、娘ども、何を愚闘々々。早う
飲んで聟達へ。
染葉　アイ〳〵。
　ト謠になり、染の井、葉末、双方にて杯を取上げ、
みどり注ぐ。兩人飲んで三方に置く。小百合、みどり、
源次郎伊織へ持ち行く。兩人取上げる。又注ぐ。
操　伊織が杯はこの母へ。
刑部　源次郎は手早く身共へ。
源次　ハツ。
　ト飲む。刑部謠にて
相に相生の
　ト伊織、操へ、源次郎、刑部の前へ三方直す。

操　首尾よう敵の首取つて
刑部　やがて歸國を
ト双方にて土器取つて、謠にて
めでたい／＼。
操　伊織、源次郎、近う。
伊源　ハツ。
ト側へ來る。操、大小を兩手に持ち
操　この大小は操が形見、備前國光、對の業物、妾が出立する心。其方達へ讓るほどに、敵三郎右衞門に巡り逢ひ、討ち勝つた後の身體を、この二腰でズタ／＼に、この身の恨みを晴らしてくれ。賴むぞよ。
ト刀を伊織、差添を源次郎へ差出す。
伊織　ハ、、有り難き御賜物。
源次　御辭退申さず
ト兩人取つて
伊源　頂戴仕りまする。
ト頂く。
操　伊織、近う。
伊織　ハツ。
ト襟首に掛けたる守を外し

操　この守は、日頃信心奉る、住吉四社の御守、伊織源次郎、これを大切に首に掛け、出立しや。たとへ如何なる劍難の場所にても、免かれん事疑ひなし。また源次郎、其方はこの封狀を、鵤幸右衞門と云ふは、城外伏見深草のほとりにて、土人形を商ふとの噂。それに逢つて手渡しせよ。
源次　畏まつてござります。
伊織　彼の建久のその昔、富士の裾野の狩場に於て、兄弟本意を達せし吉例。
操　オ、、勇ましい／＼。改めて餞別しませう。
伊織　御餞別とは。
操　さうぢや。
ト鎗の穗先を咽喉へ突ッ込む。皆々恟り。
伊織　ヤ、、。こりや母人には、何ゆゑに
皆々　御生害。
ト駈け寄るを
操　アヽ、寄るまい／＼。唐土漢の王陵が母は、まツ此やうに命を捨て、我が子に忠義を進めしと聞く。人に勝れて兄弟とも、孝心に深き心から、まさか敵に出合ふとも母に心を引かされて、もしや刄金も鈍らうかと、思ひ過

してこの自害。定業と云ひながら、これも矢ツ張り東間ゆゑに捨つる命。父といひ、母の仇、たとへ敵に出合ふとも、刃鋭く、首尾よう本意を遂げさせんと、勇みをつけん爲ばかり。兄弟ともに、息あるうちに出立せよ。

伊織 ハツ、有り難き御教訓。この上歎かば却つて不孝。父上ばかりの敵にあらず、母の爲にも命の敵。

源次 敵東間三郎右衛門、天を翔り地を潜り、鐵壁の内に籠るとも、討取つて手向け申さん。

伊織 その吉左右を、父母諸とも

源次 草葉の蔭にて

伊源 お待ちなされい。

ト泣く。

刑部 未練の歎き、時刻を移す。敵の間者に圍まれては、臍を噛むとも甲斐あるまじ。

伊織 母の最期を見捨てるも

源次 是非に及ばぬ、弓矢の習ひ。

元彌 イザ、お立ちあられませう。

軍兵 われをやつては

ト かゝるを立廻つて、伊織、源次郎、兩人を切る。

伊織 敵の荷擔人。

源次 門出の血祭り。

刑部 オ、出かした〳〵。

ト兩人、血刀を差出す。元右衛門彌助、三尺にて血を拭ふ。しやんと鞘に納める。

行きやれ。

伊織 おさらば。

ト伊織、源次郎、元右衛門、彌助、花道へかゝる。ジヤンジヤン、九つの鐘。

染葉 アレ、母さまの御臨終。

元右 最早、亥の刻。

彌助 今宵の知死期。

葉末 祝言の白小袖が

染井 直ぐに此まゝ野邊送り。

伊源 この世の門出。

刑部 冥土の旅立ち。

トこの時、破風口より時鳥啼いて向うへ飛び行く。

染葉 アレ、時鳥か。

伊織 啼く音血を吐く

ト源次郎、戻らうとするを伊織留める。染の井、葉末行かうとするを、刑部引廻す。この途端、一時にチヨ

ンと頭。
思ひぢやわやい。
ト皆々ハア、と泣く。キザミにて、源次郎、泣き入る
を伊織、諫めるこなしにて、皆々向うへ入る。幕。

三つ目　天王寺の場

役名━東間三郎右衛門。同弟、大藏。早瀬伊織。
早瀬源次郎。安達彌助。安達元右衛門。奴、腕助
伊織妻、染の井。源次郎妻、葉末。坂田庄三郎。
造り物、平舞臺、上手天王寺西門の體。向う筋塀。
眞中に占ひ店。爰に大藏、笠をかぶり、易者の體。
次に白酒店。橋がゝり葭簀圍ひの茶店。よき所に茶
屋床几直しあり、一面櫻の吊り枝。淸搔の鳴り物に
て幕明く
ト參詣の仕出し大勢行違ふ事あり、仕出し皆々、茶
屋の床几に腰かける。
仕出　なんと、ちと休まうぢやあるまいか。
同　イカサマ、この床几にて一服せうか。
同　おれは又、この白酒一杯やりませう。
茶店　どなたもお休みなされませ。
仕出　休めと云はいでも休む所ぢや。
ト云ひ／＼床几に腰を掛ける。茶店の亭主、茶碗を持
ち行く。
仕出　コレ、白酒十文がところ下され。
白酒　ハイ／＼。
ト白酒を茶碗に入れて持つて來る。
仕出　おれは占ひ屋に見てもらはう。
同　なんと、天王寺はいつでも賑はしい事でござりまする
同　イヤ又、春になると、殊の外參詣人も多く出ます。時
に、もうソロ／＼行きませうか。
同　これから生魂の方から、高津の湯豆腐で一杯入れませ
う。
同　オイ、茶店の。茶錢は爰に置きます。
茶店　マア、ようござります。
皆々　サア、どなたも行きませう。
ト矢張り淸搔になり、仕出し皆々入る。白酒屋、占ひ
店に向ひ
白酒　時に、占ひの。ちよつと内へ去んでくる間、店を賴

みますぞや。
大藏　オイ〳〵。
白酒　ドリヤ、ちよつと去んでかうか。
ト走り入るト向うより染の井、葉末、旅姿にて出て來
て
染井　ナウ妹、お二人樣のお跡を慕ひ、出る事は出ても、
いづくを當に大坂の、馴れぬ旅路に、さぞや其方は、便
りなう思やらうなう。
葉末　姉樣の仰しやる事わいなう。伊織さまや又、源次
郎さまに巡り逢ひ、舅御さまの敵を討たうと思ひますれ
ば、心がイソ〳〵致しまするわいなア。
染井　コレ、その敵は云はぬ事。向うの伽藍が天王寺であ
らう。ソロ〳〵行きませう。
葉末　マア、お先へ。
染井　妹、おぢや。
ト矢張り清搔にて本舞臺へ來て、あたりを見廻す。こ
の時占ひの店の大藏、兩人を見て愕り。染の井葉末こ
れを知らず
聞きしにまさる御寺の結構、願ひある身は、たゞ神佛樣
にお賴み申すより外はなし。

葉末　左樣でござりまする。お二人樣のお身にお怪我のな
いやうに、太子樣へ參詣いたしませう。
染井　さう仕りませう。
葉末　そんなら姉さん。
染井　サア、葉末、行きませう。
ト矢張り清搔にて、兩人こなしあつて、門の內へ入る。ト
占ひ店より大藏出て、兩人の入りし跡を、トックリ見
て
大藏　今のは慥かに伊織が女房染の井、今一人は、妹葉末
彼れら二人が參り居るからは……何でも葉末を引ツ攫ひ
日頃の本望。さうぢや〳〵。
ト思ひ入れあつて門內へ入る。辻打にて、向うより三
郎右衞門、黑の着附け、大小、深編笠にて出て來る。
後より百姓總代に、百姓大勢附き出て來る。
總代　ヘイ〳〵、お代官樣へお願ひ申しあげます。私しど
も村方一同、お願ひ申しあげの儀
百姓　お聞濟み下さりませうなれば
皆々　有り難う存じまする。
トこれにて三郎右衞門、合點のゆかぬ思ひ入れにて舞
臺へ來る。

總代　ヘイ〳〵、お聞濟みの儀を
皆々　お願ひ申しあげまする。
ト云ひながら附いて來る。三郎右衛門、床几に腰をかける。皆々、舞臺に手を突き
總代　今日お屋敷へお願ひにあがりましたるところ、御遊興にお出でなされましたと承りましたゆゑ
百姓　お跡を慕ひ、お願ひに參つたは、村方百姓一統の
皆々　お願ひでござりまする。
トこれにて三郎右衛門、何を云ふトいふ思ひ入れ。
總代　先達てより申しあげまする通り、村方一統、水損の儀につきましてのお願ひでござりまする。
トこれにて三郎右衛門、そんな事は知らぬトいふ思ひ入れにて、頭を振る。
左樣仰せ下さりますと、村方の者ども、難儀に及びまする。この儀ばかりは
皆々　ヘイ〳〵、お願ひでござりまする。
ト無性に辭儀をする。三郎右衛門、迷惑する思ひ入れ。此うち總代、心附いたる思ひ入れにて、三郎右衛門の顏を覗き見る事あつて、驚ろき
總代　これサ〳〵、違つた〳〵。

百姓　違つたとは、そりや何が。
總代　あのお侍ひ樣は、お代官樣ではござらぬわいの。
百姓　何と云はつしやる。お代官樣でないとは。
ト百姓二三人、覗き見て
ヤ、ほんに、お代官樣ではない。
總代　ソレ、見やしやれ。最前から違うたやうだと云うてゐるに。
百姓　それでも、形恰好といひ、お代官樣に生寫しぢや。
總代　何にしろ、人違ひの詫びをせねばならぬ。
百姓　さうしませう。
ト皆々、三郎右衛門の側へ來て
總代　ヘイ〳〵、先程よりお代官樣と存じまして、いろいろのお願ひ
百姓　私しどもが不調法。
皆々　眞平御免下さりませう。
ト辭儀する。三郎右衛門、うなづく。
總代　左樣なら、御料簡下さりまするか。
皆々　エ、、有り難うござりまする。
總代　ア、、嬉しや〳〵……でもマア、お代官樣に生寫し。
百姓　サア〳〵、これからお代官樣を尋ねませう。

總代　左様なら、お侍ひ樣、これに御ゆるりなされませ。
百姓　ヤレ〳〵、嬉しや。
總代　サア〳〵、行きませう〳〵。
ト　わや〳〵云うて、皆々、橋がゝりへ入る。三郎右衛門、あと見送り、奥へ行かうとする時、門の内より大藏出て、三郎右衛門に行き當り、恟りして
大藏　これは〳〵、心が急きましたゆゑ、御免下され〳〵。
ト云ひながら、三郎右衛門の顔を覗き
ヤ、こなたは兄貴、三郎右衛門どの。
三郎　コレ。
ト思ひ入れ。大藏、あたりへ思ひ入れあつて
大藏　誠に兄者人、迂濶にお名を…併し、今は往來の途絶え。申しあげる事がござります。
ト側へ寄り
外の事でもござりませぬが、最前この所へ、早瀬伊織が妻の菜の井、妹葉末もろとも、これなる門の内へ入りしゆゑ、店に居つて見附けしゆゑ、跡を慕ひ尋ねしが、かいくれ行くへを見失ひました。彼奴ら二人が、この所へ來るからは、兄者人を敵と覘ふ、早瀬兄弟の奴等も、此あたりにへちまひ居るに相違ござらぬ。必らず御油斷なされまするな。
トこれにて三郎右衛門、大藏へ囁く。
すりや、拙者は今一應、兩人の者を尋ね、騙し寄つて人知れず…心得ました。
ト思ひ入れあつて
左様なれば兄者人には、事の實否を糺すまで、拙者が占ひ店にて…サ、、斯うお越しなされませ。
ト三郎右衛門に大藏附いて、占ひ店へ入る。向うより伊織、旅形。源次郎、同じ拵らへ。彌助、着附け、手甲脚絆にて、三度笠と風呂敷包みを持ち出て、花道よき所にて、伊織、向うを見て
伊織　誠に佛法最初の當山の太子樣、稀れの開帳とあつて、拜禮をとげんと、貴賤老若の群集。殊に大坂は繁華ぢやなア。
源次　なんと彌助、國とは又違ひ、賑はしさ諸人の入込み。船着きの賑はしさ。
彌助　御意の通り、大坂は殊ない賑はしさ。その上、天王寺は大堂伽藍の地なれば、參詣人も櫛の齒を引くが如く。
それはさうと旦那樣には、お休みなされませぬか
伊織　成る程、其方達は身が心急きの様子、合點が行くま

い。幸ひ向うに休息所。然らばあれにて勞れを休めう。

彌助　御兩所樣、お越しなされませ。

ト矢張り淸掻にて本舞臺へ來て、床几に腰かけ

伊織　コリヤ〳〵、彌助、其方も暫らく荷物を下ろし、ゆるりと休みやれ。

彌助　左やう仕りませう。コリヤ〳〵、茶店の御亭主、茶を一つ下されい。

茶店　ハイ〳〵。

ト茶を三つ汲み、持ち出る。

お茶上げませう。莨盆はこれにござりまする。御酒でも上げませうか。

彌助　イヤ〳〵、酒は望みにない。暫らく床几を借用申す。

茶店　御ゆるりとお休みなされませ。

ト云ひ〳〵入る。

彌助　時に、この兄貴は、今朝早く出られたが、今にござらぬが、立つた後へ歸られたら、大方宿から、この天王寺を敎へるであらうが、道が違はねばよいが。

伊織　イヤ〳〵、何も案じる事はない。元右衞門に申し付けし用事と云ふは、夜前泊りし合ひ宿の旅の客が、襖一重の物語り、明日は早く泉州堺へ赴き、大切の色紙の質請けを致さんとの話し。もしや我れ〳〵が尋ね求める、一品にてはあるまいかと、その客に心を付けるに、旅商人と見え、今朝夜深に立ちしゆゑ、元右衞門に詳しく語り、その者の跡をつけさせたのぢや。

源次　申し、兄者人、元右衞門が安否によつて、もし手掛りでもあらば、彼の地へ今日參り、とくと實否を糺したう存じまする。

伊織　ナニサマ、樣子によると、左やう致さずばなるまい。

彌助　左樣な儀でござりまするか。兄貴の事なら、とくと糺して歸るでござらうが、もう歸りさうなものだなア。

ト向うを見て、こなし。

モシ、御覽なされませ。向うへ參る深編笠の浪人者、下郎めが思ひなしの所爲か、三郎右衞門に相違ござりませぬ。

ト伊織、源次郎も向うを見て

伊織　ナニサマ、東間に似寄りの形かたち。

源次　あれに違ひござりませぬ。

彌助　然らば、これに待ち受けて

伊織　とくと實否を糺した上

源次　我れ〳〵どもが日頃の本望。

彌助　左樣なら、御兩所樣。

伊織　兩人とも、支度しやれ。

兩人　ハツ。

ト三人、身拵らへする。壬生の鳴り物になり、向うより庄三郎、深編笠、黑羽二重、朱鞘の大小、三郎右衞門と同じ拵らへにて出て、花道中ほどまで來ると、彌助、向うを見て思ひ入れ。伊織、合點のゆかぬといふ思ひ入れにて、双方へ囁く。これにて三方へ忍ぶ事。庄三郎、悠々と本舞臺へ來ると、彌助、向うへ立ちふさがる。これにて庄三郎、合點のゆかぬ思ひ入れにて、上手へ行きかける。源次郎、また摺れ違うて入れかはる。この時。伊織、それト聲かけながら双方より切りかける事よろしくとまる。この時、彌助、顏を見ようと割つて入り、よろしくあつて双方引張りの見得。この時、彌助、下より見上げ、愕り思ひ入れ、惡い〳〵ト仕方するゆゑ、二人も心附き、下手へ來り、氣の毒なる思ひ入れ。庄三郎、三人を見て、思ひ入れあつて衣紋を直し、門の内へ入る。三人、顏見合せ、こなしあつて

彌助　ひやいな事でござりました。

伊織　イヤモウ、天晴れの骨柄。東間と思ひ、直ぐに斯うよと思ひしが

源次　料簡強いお侍ひにて

彌助　お怪我もなうて

兩人　重疊々々。

ト三人、思ひ入れ。向うより元右衞門、着附け、手甲、脚絆、三度笠を持ち出る。中間一人、酒に醉ひたる體にて

中間　濟まないぞ〳〵。

トやかましう云うて出る。元右衞門、胸倉取られながら、酒臭いと云ふ思ひ入れにて、詫を云ひ〳〵出る。

元右　最前から、あやまつて居るではないか。

中間　イヤ、聞かぬ。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。舞臺の三人は元右衞門ぢやと云ふこなし。元右衞門、思ひ入れあつて、三人へ物云ふと惡いと仕方するゆゑ、三人は扣へて居る。中間、元右衞門に凭れかゝる。

元右　サア、この通り土べに手を突いて詫び言して居るから、もう料簡さつしやれ。

中間　コリヤ、おれを誰れだと思ふ。おらは坂本のお中間

だぞ。其やうにあやまる事なら、料簡してやらう。何を
鼻けちめ。
ト悪口云ひ〳〵、ヒョロ〳〵として、この時鑑札を落
して入る。元右衛門、跡を見送り、こなしあつて
元右　イヤモウ、酒呑む奴は、臭うて〳〵堪へられぬ。
彌助　兄貴、酒といふものは、悪いものぢやなア。
元右　ハ、、、、、。
伊織　元右衛門、いま歸つたか。
元右　やう〳〵只今に相成りました。後にて今の中間に出
合ひ、殆んど困り入りました。
彌助　兄貴、酒と云ふものは、悪いものぢやなア。
元右　只今にては、酒屋の門を通るも、かざが致すと、胸
が苦しうて〳〵なりません。
彌助　兎角云ふ奴には、除けて通すがよい。
伊織　時に元右衛門、夜前の合ひ宿せし、旅人の噂はどう
ぢや。
元右　さればでござりまする。夜前の合ひ宿の話し、泉州
堺へ參り、吟味いたしたところ、抜群の相違でござりま
する。それゆゑ立歸りましてござりまする。
伊織　いらざる事には餘程の心勞。我れ〳〵は當伽藍の諸
堂々へ參詣のその間、暫らくこれにて休息しやれ。
彌助　イヤナニ、この彌助めは、御兩所のお供いたして、
太子様へ參詣いたしませう。その間兄貴は、これにて休
息するがよい。
元右　そんたら御參詣のその間、おらは爰にて一服やらう
か。弟、隨分御兩所に心を付けるがよい。
源次　左様なれば兄者人、彌助。
伊織　さらば參詣いたさうか……兩人とも、來やれ。
彌助　先づお越しなされませ。
ト三人入る。
元右　ヤレ〳〵、殆んど草臥れた。ドリヤ、爰で一服すべ
いか。
ト腰かけ
茶店の。火を一つ借りませう。
ト莨入れを出し、こなし。これより合ひ方になる。
思ひ出せはお家の成行き。親旦那様お討たれなされてよ
り、御兄弟の憂き艱難、今に於て敵の行くへの知れぬと
云ふは、ハテ、どうしたものであらうなア。
ト小首傾むけ、思案のこなし。これより清掻になり、
向うより腕助、着付け、海鼠襟の合羽、一本差しにて、

駕籠に乘つて出て、花道よき所にて駕籠舁き、杖して

駕籠　申し、旦那、極めの天王寺でござりまする。

腕助　ムウ、向うが門前か。向うまでやつてくれ〳〵。

駕籠　へイ〳〵、畏まりました。

ト本舞臺へ來る。元右衞門、莨盆引寄せ

元右　エ、いま〳〵しい。こりや、火がない。儘よ。

ト火を打ち、のむ。

駕籠　サア〳〵、駕籠賃はどうでござりまする。

腕助　忙しない奴ぢや。

ト二朱出して

ソレ、取つて置け。

駕籠　こりやア二朱。つりを上げませうか。

腕助　酒手ぐるめ取つて置け。

駕甲　それは有り難うござりまする。

駕乙　左樣なら、もう歸りませうか。

腕助　イヤ〳〵、待て〳〵。事に依らば、歸りに乘せてお供をせねばならぬお方があれば、暫らく待ち合してくれまいか。

駕甲　へイ〳〵、戻りがあらば、ナウ、相棒。

駕乙　その間、開帳へでも參つてかうか。

腕助　オ、、さうしやれ〳〵。

駕舁　そんなら、來い〳〵。

ト門の内へ入る。

腕助　ヤレ〳〵、ついぞ乘つた事がないが、餘ツぽどしんどい物ぢや。

ト欠伸して、奴が落せし鑑札を拾ひ

ア、滅相な。こんな物を

トちよつと元右衞門を見て

さらば一服と出かけようか

ト莨盆を引寄せ

なんだ。こりや火の用心のよい莨盆だ。……コリヤ〳〵若い者、無心ながら火を一つ貸しやれ。

元右　サア〳〵、安い御用ぢや。吸ひつけさつしやれ。

ト煙管啣へながら云ふ。

腕助　そんなら、許さつしやれ。

元右　サア〳〵、爰へ〳〵。

ト互ひに摺り寄り、吸ひつけ、思はず顏見合せ

元右　ヤア、わりや腕助か。

腕助　さう云ふわれは、早瀨の中間元右衞門か。

元右　腕助か……イヤ、〆めた。

ト胸倉取つて引据ゑる。

腕助　コリヤ、待て〳〵。わりやアおらをなんとする。

元右　おのれがこの邊にへちまうて居るからは、敵三郎右衛門も、此あたりに居るであらう。よい奴に出ツくはしたわい。

腕助　悪い奴に出ツくはせた。元右衛門、マア放せ。

元右　なにを。

ト立廻つて、キツと締め上げる。

腕助　ア、、コリヤ〳〵、ゆるめてくれ〳〵。

元右　うぬが主の三郎右衛門が、手掛りを求めんと、主従がこの年月の艱難辛苦。この所でうぬに逢ひしも、正しく御佛のお引合せ。サア、早く三郎右衛門が在所を云へ。

腕助　サア〳〵、云ふ〳〵。云ふは云ふが、さう締めては何にも云はれぬ。ちよつと爰ゆるめてくれい。

元右　そんなら、ほざくか。

腕助　サア、云ふ〳〵。

元右　サア、有やうに吐かし居ろう。

ト放す。

腕助　ヤレ〳〵、術なや〳〵。すんでの事に、佛さんを潰さうとした。こりやマア、滅相なものぢやわい。

元右　サア、早う吐かせ。

腕助　サア、さう云ふは尤もぢや。心の急くは尤もぢやがわりや目當が、違うたぞよ。

元右　なんで違うた。

腕助　さればいやい。おりやモウ、東間の家來ぢやないわい。

元右　さう吐かして外さうとは、うぬ、太い奴ぢや。吐かさにや、うぬ。

ト又締めにかゝる。

腕助　待て〳〵。マア、おれが云ふ事聞いてくれ。

元右　サア、ほざけ。

腕助　コリヤ、元右衛門、急くな〳〵。おらが旦那東間どのは、玄蕃さまを殺してから、行くへを尋ねうにも、どうせうにも雲を霞。詮方つきて、この大坂の知るべへ便り、今では坂本の城中で、以前に變らぬ中間奉公ぢや。

元右　ムウ、そんならモウ、東間に仕へて居らぬか。

腕助　サア、仕へようにも、どうせうにも、かいくれに行くへが知れもせぬもの。

元右　すりや、いよ〳〵東間に仕へて居らぬか。

腕助　これは又、氣の悪い。以前は一杯酒も呑んだ仲ぢや

なんの嘘をつかうぞい。
元右　それには何ぞ證據があるか。
　ト腕助、最前の鑑札を出して
腕助　オヽ、證據がある……これを見い。
　ト元右衛門、取つて
元右　坂本城内片岡内入江組足輕一人。違ひ矢筈の燒き印
造酒頭さまの合ひ印。
腕助　其お屋敷の中間ぢや。
元右　ムウ、造酒頭さまは御仁心なと噂に聞けば、迂亂が
ましい者をお置きなされうやうはない……ハテナ。
と思案のこなし。
腕助　なんぢや、小首を傾げて。大概に人を疑へ。酒を呑
めば氣さくでよいが、素面な時には、とんと話せぬ男ぢ
や。
　ト田樂店を見て
オヽ、幸ひの煮賣り店。元右衛門、久し振りぢや、一丁
入れるか。
元右　身共は禁酒ぢや。
腕助　何を云ふぞい。
　ト伸び上がり、店の内を覗き

コリヤ、肴は何でもよい。二三合つけて爰へくれんか。
茶男　ハイ／＼。
腕助　早うぢやぞよ……さてマア、何かの話しは後へ廻し
て、おてまへは、きつい達者でよい。して、弟の彌助
はどうぢや。變る事もないか。
元右　隨分達者な。
　ト始終腕助に目をつけて居るこなし。茶店の男、田樂
と銚子持つて出る。
茶男　ハイ、申し、御酒上げませうか。
腕助　オヽ、大儀ぢや／＼。
茶男　御用があるなら、手を鳴らして下さりませ。
　ト男入る。
腕助　承知ぢや／＼……なんぢや、田樂か。久しいもんぢ
や。先づ主役に毒味仕らう。
　ト倚茶碗にて呑む。元右衛門、こなしあつて、酒のか
ざを除ける。
オヽ、よい燗ぢや。サア、元右衛門。
　ト茶碗を元右衛門にあてがふ。
元右　エヽ、おらは禁酒だと云ふに。
　ト押し戻す。

腕助　なんぢや、禁酒ぢや。變つた事があるものなア。
ト又注いで呑む。元右衞門、尻目に見る。腕助、呑んで
キユツとおいでた。よい酒ぢや。
ト頭を叩く。元右衞門、茶碗を覗き、腕助と顔見合せ、ちやつと素知らぬ顔する。
時に元右衞門、てまへは、おらが國元に居つた時分、度度斯う差向ひで、やつた事があるが、騒動の折から別れ別れ。
ト始終注いで、呑み〳〵する。元右衞門、堪へるこなし。
このマア元右衞門は達者なか。彌助は無事かと案じ居つたが、命あればぢやなア。マア、めでたう、ちよつと一杯。
ト元右衞門へ茶碗をさしつける。
元右　エヽ、香臭くさへ胸が惡い。
ト鼻を抓んで茶碗を戻す。
腕助　ハヽア、おてまへはちよつともいけぬか。
元右　一雫もいけない。
腕助　折角久し振りで呑み合はうと思うたに、一雫もいけいでは詰まらぬ。いつそ、おらが獨り旅ぢや。
ト注いでは呑みする程に、懐より密書を落す。元右衞門、ちやつと拾ひ
元右　こりやコレ密書……大江氏より東間どのへ。
腕助　南無三、それを。
ト慌てゝ立ちかゝる。
元右　さてこそ手懸り。
腕助　なにを。
ト取らうとする手を拂ひ退け。ちよつと腕助を當てゝ狀の封じを切らうとする。この前より門の内より三郎右衞門出かけ居て、元右衞門の狀を引ッたくり、ちよつと當てる。これにて元右衞門へたる。直ぐに腕助に活入れる。腕助、心付くと、ちよつと囁く、腕助心得、こなしあつて、ツイと入る。三郎右衞門、こなしあつて、占ひの店へ忍ぶ。茶店より亭主出て、元右衞門が倒れしを見て、悄りして側へ行き、引起しても生根つかぬゆゑ、どうしたらよいかと、うか〳〵するうち、三郎右衞門、酒店の酒入れある酒の桶を柄杓を附け、ソツと亭主の横の方へ出して置き、又占ひの店へ忍ぶ。亭主、慌てゝ酒を水と思うて、やたらに柄杓

にて存ます。

茶亭　こりや一向徭償ぢや。誰れぞ呼んで來ねばならぬ。

ト占ひ店の横へ寢さし、誰れぞ呼んで來ねばならぬと入る。門の内より染の井、葉末出て

染井　コレ、妹、いま地内にて摺れ違うた侍ひは、慥かに敵三郎右衞門。

葉末　これへ來るに違ひござりますまい。

染井　爰に待ちうけ、舅御樣の敵を……妹、用意しや。

葉末　心得ました。

ト兩人、用意する。門の内より庄三郎出て、悠々と向うへかゝる。兩人、双方より

兩人　舅御の敵、覺悟しや。

ト双方より切つてかゝる。庄三郎、兩人をあしらひ、ちよつと立廻つて、よろしく留め

庄三　何奴なればこの狼藉。敵と云はれる覺えはないぞ。

トきつと云ふ。兩人、合點のゆかぬこなし。

兩人　どうやら醒が

トよく／＼見て、悔り飛びいき

染井　これは／＼、どなた樣かは存じませぬが、ツイ心が急きましたゆゑ

葉末　思はず知らず、粗相を致しましてござりまする。

染井　女子の事でござりますれば、どうぞ

兩人　御料簡なされて下さりませ。

庄三　いかにも、人違ひとあらば、料簡いたすでござらうが、拙者なりやこそよけれ、大事を抱へし身の上にて、餘人に斯樣な粗忽あつては相濟まぬ。とくと實否を糺した上、兎も角も致すべきに……ア、さはさりながら、若き女の二人連れ、舅の敵討たんとは、健氣なる心底。その志しに愛で、助太刀いたしくれたけれども、今日は忍びの遊興。人立ち多きこの境内。必らずともに油斷召さるな。

染井　御料簡遊はすのみならず、初めてお目もじ致せし私しどもへ、御教訓の其お詞。

葉末　なんとお禮を申しませうやら。

兩人　エヽ、有り難う存じまする。

庄三　その禮には及ばぬ事。隨分ともに心を附け、首尾よく本望遂げられよ。

兩人　有り難う存じまする。

染井　左樣なれば、お侍ひ樣。

庄三　御緣もあらば又重ねて。

兩人「お別れ申しまする。
ト唄になり、兩人、思ひ入れあつて向うへ入る。庄三郎、見送り
庄三「最前の仕儀といひ、今の二人の女の有樣。何にもせよ、忍んで樣子を……ソレ。
トきつと思ひ入れあつて、下手へ忍ぶ。なかしみの合ひ方にて、元右衛門、酒に醉ひたる體にて、いろ／＼あつて、あたりを見廻し
元右「まだ爰にも酒がある。さらば手酌でやりませう。
ト店へ掛り、柄杓にて呑む。また桝にて掬ひ、桝の隅から呑む事ある。この時、白酒屋、溜め桶を提げ出て、この體を見て悔りして
白酒「ヤア／＼、錢も置かずに酒を喰ひさらすがな。
元右「呑んだら、なんぢや。
白酒「エヽ、殘りをおこしやアがれ。
ト摑みかゝる。これにてちよつと立廻つて、徳利にて白酒屋の頭を割る。徳利割れる。これにて頭より血流るゝ。
白酒「おれが頭を割り居つた。皆來てくれ／＼やアい。
トどん／＼になると、これにて下手より町人大勢、棒、割り木など持ち出る。ワヤ／＼云ふ。これより元右衛門、白酒店の道具抛りつけ、いろ／＼あつて、店にて皆々を追ひ廻す。この時、彌助、走り出て來て、この中へ入り、留めても留まらぬこなし。元右衛門、皆々を追ひ込む。彌助、隙を見て取つて押へ
彌助「こりや、こなた、又呑んだなア。イヤサ、呑ましやつたな。
元右「呑んだらなんぢや。呑んだによつて、たべたのぢや。
ト他愛なう横に寢ると、胸倉取り、引起し
彌助「エヽ、茲な人非人め。又しても／＼病ひ酒。御主人の横死の場所で、醉ひ倒れして身を悔み、我れと我が手に發起して、神文書いて誓ひに立て、一生禁酒と云はしやつた時のその嬉しさ。それを功に今度のお供。大事を忘れ、例の大酒。こなたのやうな人は、御兩所への申し譯。いつそ一討ちに。
ト切らうとする。この前より伊織、源次郎、出かけ、見て居て、この時
伊織「ヤレ待て、彌助、早まるな。
彌助「イヤ、お留めなされますな。不忠の兄貴
伊織「始終の樣子見屆けた。誓紙を破る上からは、主でな

安政元年五月河原崎座所演
河原崎権十郎の葉末　坂東しうかの染の井

大谷友右衛門の元右衛門　　市川小團次の彌助

い、家來でないぞ……彌助、汝も共にその通り。兄弟の因みを切れ。

彌助　それぢやによつて、一思ひに。

ト切らうとするを留めて

伊織　ハテ、人外でも兄は兄、弟の身を以て、向ふ刃はあるまいがの。

源次　然らば拙者が

ト切らうとする。

伊織　弟待て。

源次　それぢやと申して。

伊織　ハテ、人畜を手に掛けなば、刀の穢れ。

源次　でも。

伊織　ハテマア、扣へい。

ト兩人を留め、元右衛門の側へ行き、首筋取つて引据ゑ

コリヤ、元右衛門、性根あらば、よく聞けよ。主たる者は親の如く、家來は即ち子の如く、主は家來を憐れみ、家來は又主を尊とむ。これ皆世の習ひ。それになんぞや、主なる者の詞を用ひず、亂酒に魂ひを蕩かし、その身分を忘るゝとは、人外とや云はん、獄卒とや云はん。うぬを折檻はこの扇。即ち骨の數は十本、十度打たば百本、百杖の數に同じ。以後の見せしめ、カウ〳〵〳〵。

ト扇にて、てう〳〵と叩き

弟源次郎、其方も早く打て。

源次　ヤア、元右衛門の人外め。意見の百杖、カウ〳〵カウ。思ひ知つたか。

ト扇にて又てう〳〵と打つ。

彌助　コレ、兄貴、いまお二人のお詞も、耳へは入るまい。これからは主なし。主なしのこなたの身の上、御兩所はこの彌助がお供する。兄弟の血筋を斷ち切る引導。

ト切り掛ける。

伊織　コリヤ、待て彌助。

ト留めて

我れ〳〵が見放せば、風來者の元右衛門。そちや風來者の由緣の者か。

彌助　なんと御意なされまする。

伊織　元右衛門は風來者ぢやよな。

トこなし。

彌助　成る程、その風來者に、御主人の御定紋のこの着物、着せて置くべきいはれはない。キリ〳〵脱がつしやれ。

ト彌助、元右衛門の帶を解き、脱がす事、しか〳〵あつて

元右　脱がせ〳〵。取れ〳〵。褌も取れ〳〵。どうなとせい〳〵。

ト　だらけ者のこなし。彌助、脱がして

彌助　詞交すもこの身の穢れ……あの態わえ。

伊織　アヽ、兄弟は他人の始まり。此まゝこれにて見捨て歸るも、彼れが身の爲。

彌助　風來者にお構ひなく、もうそろ〳〵と、お越しなされませんか。

伊織　イカサマ、日も傾けば泊りを急がん……同じ兄弟と云ひながら、弟彌助は修羅の道連れ。見捨てる兄は酒といふ、焰と沈む餓鬼同然。

彌助　心の鬼が、その身を責むる。

源次　親しみあれば悲しみあり。

伊織　只何事も定まる業因。

彌助　サア、ござりませ。

源次　思へば〳〵。

伊織　アヽ、不便な奴なう……風來者ぢやわい。

ト　唄になり、伊織、源次郎、後より彌助、荷物と元右衛門の大小着物一つに抱へて、向うへ入る。

ト　下手より腕助、駕籠を吊らせ出て、皆々入りし跡を見て、こなしあつて、駕籠の垂れを上げ、醉つて居る元右衛門を無理に駕籠へ乘せる。元右衛門、醉つて居るゆゑ、駕籠より落ちると、腕助、困つたといふこなしにて、又乘せ、紐にて駕籠を括りて、駕籠舁き向うへ入る。後より腕助、附添ひ入る。この時、本釣り鐘鳴る。ト占ひ店の內より、三郎右衛門、ツカ〳〵と出て、向うを見込むこなしあつて、花道へ行きかける。茶店の內より庄三郎、ツカ〳〵と出て、立ち塞がり、これより兩人、氣味合ひあつて、三郎右衛門、花道際へ行く。庄三郎、刀の鐺を持つて引戻す。これにて兩人、立廻りよろしくあつて、双方へ別れる。木の頭入る。双方、編笠を上げ、互ひに顏見合す。これにてキザミよろしく

幕。

四つ目

東寺貸座敷の場

役名――早瀨伊織。早瀨源次郎。安達彌助。安達

元右衞門。佐竹新十郎。庄屋、藤作。鳥羽の牛藏。井筒屋伊三郎。同姉、お吉。尼、妙閑。醫者、慶庵。小道具屋利兵衞。惡侍ひ、曾平。同、丹藏。

伊織妻、染の井。

造り物、向う黑幕、眞中に大池。竹垣、四尺程破る仕掛け。この池の側に殺生禁斷と書いたる高札建てある。下手、芦原。蟲の聲。しんとしたる合ひ方にて幕明く。

ト向うより牛藏、襦袢一つにて走り出て、本舞臺へ來て、戸屋の方を見て、よしといふ心にて、池の竹垣を破り、丸裸になり、飛び込むと、ゴンと本釣り鐘鳴ると、向うより彌助、襦袢の上へ海鼠形の合羽袖ちぎれる仕掛け、手桶を提げ、打ち網を持ち、頰かむりにて走り出て、花道よき所にて

彌助　最早八ツ過ぎ、人も寢入る丑滿時、夜更けて恐ろしい殺生禁斷の場所へ來りしも、若旦那源次郎さまの、御眼病癒すには、この池に棲む河鹿の血汐を、秘藥に合せ服ますれば、忽ち病氣平癒と慶庵さまの仰せ。惡い事とは知りながら、禁斷の場所へ網を入れるも、お主の爲……申し、天道樣、お赦しなされて下さりませ。

トちよつと空を拜み、いろ／＼あつて

人の見ぬ間に、さうぢや／＼。

ト本舞臺へ來て、あたりを窺ひ、網を摑き、池の側の垣が破れあるを幸ひといふ心にて、網を打込む。この途端に内より

藤作　禁斷の場所へ、網を入れる曲者。詮議あれ。

大勢　ハツ／＼。

トこれにて、ドン／＼になる。彌助、南無三といふ心にて網を手早く手繰り、河鹿を拾ひ集め、手桶の中へ入れる。この時、池より牛藏も這ひ上がり窺ふ。彌助、頰冠りして手桶に網を押し込み、向うへ行きかける。この時、牛藏、帶際へ手をかけ引戻す。彌助、さてはトいふ心にて振り拂ふ。これより兩人、ちよつと暗がりの立廻りあつて、よき時分に、下手芦原押し分け、藤作出て、三人暗がりの立廻りよろしくあつて、彌助が合羽を牛藏、立廻りにて切る。この途端に藤作、牛藏の着たる合羽の袖を引ちぎる。牛藏は彌助が眞入れを取る。三人、引ッ張り。彌助は向うへ走り入る。ト牛藏は眞入れ、藤作は片袖、兩人向うを見込む。三人

引ッ張りよろしく　幕

造り物、平舞臺、上手折廻し障子屋體。向う納戸口續き、上手押入れ。下手平舞臺、造り壁に勝手元の書割り。この上に天窓、これより人、棚を足場にして下りる事あり、舞臺一面の屋根、この上へ人上がる事あり、屋根の上に一面の藤の棚、見事に花咲く。下手、隣り座敷、出入りあり、いつもの所に門口、下手に藤の木あり、これより人登る仕掛け。上手、床の所、隣りの二階にして障子締めある。これも同じく人下りる事あるべし。妙閑、着付け、でんち羽織、隨分嫁らしき拵らへ、舞臺の眞中に混爐にて、藥鍋かけ、團扇を持ち煽ぎ、藥煎じて居る。棚廻りこ小桶、摺鉢。よき所に丸盆。山姥のチラシにて、幕明く。

妙閑　隣りの淡へ講で、やかましい事ではあるぞ。それはさうと、藥も大方よいが、源次郎さまは、今スヤ〳〵と寢て居やしやんす。縦から見ても横から見ても、水の垂れるやうな前髪樣、息子の方の世話はせいでも、爰の内の事なら、張込んでも世話がしたいが病。此方思ひの彼方は、何ともないぢや。

ト嫁らしきこなしにて、團扇をバタ〳〵さす。この時、下手より慶庵、藥箱を懐へ入れ、仔細らしく咳拂ひして、門口から家來と二人前の心にて

慶庵　ものも。

妙閑　どうれ。

慶庵　慶庵お見舞ひ。

妙閑　どなたかと思うたら、慶庵さまかいなア。こちや否いなア。

慶庵　主と家來と二人前でござる。ハ、、、。通りまする。

ト上手へ通る。

妙閑　いつもながら、お手傳ひぢやなア。何ぞ心當てがあると見えるわい。

妙閑　慶庵さま、遢てゝおくれないなア。お免しおやなア。

トこの時、バタ〳〵にて、向うより彌助、口幕の形にて、手桶綱を持ち出て

彌助　誰れも見咎めはせなんだわい。嬉しや〳〵。何は兎もあれ、この品を、源次郎さまへ、さうぢや〳〵や。

ト内へ入り

これは慶庵さま、ようこそお見舞ひなされて下さりまし

たなア。
妙閑 彌助どの、戻らんしたかいなア。
彌助 妙閑さま、毎度のお手傳ひ、有り難う存じまする。
妙閑 アレ、他人がましう、なんのお禮に及ぶ事かいなア。
慶庵 時に源次郎さまは、今日は如何でござるな。
妙閑 變りました事もござりません。
慶庵 して、件の物は、手に入りましたか。
彌助 お喜び下されませ。やう／＼手に入りました。
慶庵 重疊々々。
ト右の手桶を持ち、また手盥を前に置き、網より河鹿を取出す。飛びあがるを捕へ、盥へ入れ、丸盆にて蓋をして、こなしある。上手障子の内より
源次 彌助々々。
トこれにて彌助、こなしあつて
彌助 若旦那、お目が覺めたさうな。
妙閑 オヽ、源次郎さまのお聲ぢや。
彌助 妙閑さま、ちよつとお頼み申しまする。
妙閑 ドレ／＼、手傳うて上げませう。
ト彌助、障子明ける。妙閑、兩人して上手よき所へ連れて出て、蒲團の上に直す。

源次 これは慶庵さま、毎度御苦勞に存じまする。
慶庵 どうぢや、心持ちは如何でござる。
源次 お庇を持ちまして、この頃は
慶庵 ちとようござるか。
源次 ハイ。
慶庵 それは嬉しうござる。時に、彌助どの、右の品に、この藥を合せ服ますれば、忽ち平癒。時刻を待つて忘れぬやうにさつしやれ。
彌助 心得ました。
トこの時、向うより伊三郎、着附け羽織にて出て來て
伊三 彌助どの、内に居らるゝか。
ト内へ入る。彌助見て
彌助 これは井筒屋伊三郎どの、ようお出でなされました。
伊三 今よい事を聞いたゆゑ、ちよつと知らせに來ました。
彌助 ナニ、よい事とは耳寄りな。何事でござるな。
伊三 日頃伊織さまが、お尋ねなさるゝ色紙の事。いま風呂屋での話しには、室町通りの道具屋が、質に取つて流れしゆゑ、賣りたいとの事。して伊織さまにはお内にか。
彌助 イヤ、只今お留守でござりまする。
源次 ナニ、色紙の在所が。して／＼、その道具屋は、ど

の邊でござりまする。
伊三　サア、今申す通り、室町邊と聞いたれども、しかと
　內は
彌助　御存知はござりませぬか。
源次　兄者人がござるならば、御同道申して、その道具屋
へ。
伊三　イヤ、斯うしませう。これから私しは室町へ行て、
道具屋を尋ねて見ませう。もし道にて伊織さまにお目に
かゝつたら、お供して參ります。
彌助　左樣なら、さうなされて下さりませ。
慶庵　私しも室町へ見舞はねばならぬ病人もあれば、連れ
立つて行きませう。
源次　それは御苦勞に存じまする。
伊三　これも日頃から懇ろだけ。
慶庵　そんなら二人の衆。
彌助　ようござりました。
　ト唄になり、兩人、捨ぜりふにて向うへ入る。あと三
　人殘る。妙閑こなしあつて
妙閑　トツト大水の出た後のやうな。して、わたしやどう
せうな。

彌助　これは、先程よりお構ひも申しませず、毎日〳〵お
世話になり、忝なう存じまする。
妙閑　なんのいなア。爰の內ならいつまでも、斯うして居
たいが……サア、一體爰の內は、よう人出入りのある內
なア。
源次　時に妙閑さま、男ばかりのその上に、私しがこの眼
病、何に付けても御深切の段、忘れは置きませぬ。
妙閑　オヽ、イヤ、その禮を受けうとて、お世話はしませ
ぬ。これには、ちとやそつと世話しても、大事ない譯か。
　ト嫌らしきこなし。この時、向うバタ〳〵にて、染
　の井、旅形にて走り出て、花道中程にて
染井　今の二人の侍ひ、いろ〳〵と無體の有條。難儀の場
所へ、よいお侍ひ樣のお庇で、やう〳〵爰までは逃げて
來た事は來ても。
　ト向うを見て
幸ひ、あのお內をお賴み申さん。それ〳〵。
　ト本舞臺へ來て
ちとお賴み申しませう。
彌助　どなたぢや。此方へお入りなされませ。
染井　左樣なら、御免なされて下さりませ。

ト云ひ〳〵入る。この時、彌助、染の井の顏見て

彌助　あなたは伊織さまの奧樣ではござりませんか。

染井　さう云やるは安達彌助。

源次　誠にお聲は、兄嫁の染の井さま。

染井　あなたは源次郎さま。

彌助　先づ〳〵これへ。

ト眞中へ染の井、よき所にて下に居る。妙閑、こなしあつて

妙閑　そんならあなたが、兄御さまの嫁御かいなア。

ト染の井、傍らを見て

染井　何から尋ようは、伊織さまには御機嫌はよいかえ。どこにござる。早う逢はしてたもいなう。

彌助　伊織さまは、隨分御機嫌はよろしうお渡りなさるゝが、今はちと手懸りの筋あるとて、他行なさる。併し、最早お歸りには間もござるまい……あなた樣にお尋ね申したいは、妹御の葉末さまにも、御同道なされましたか。

染井　サア、その妹の葉末は、大坂天王寺とやらいふ所で、群集に紛れ、見失ひ、それから姉妹離れ〳〵の獨り旅。

彌助　すりや、お妹御葉末さまには。

源次　大坂天王寺にて、アノ群集に紛れ……彌助。

彌助　若旦那。

兩人　ホイ。

妙閑　マア、お茶なと召上がりなされませ。

トばた〳〵にて、向うより、伊織と曾平、丹藏出て

二人　待て。キリ〳〵と出せ。

伊織　最前より申す通り、拙者は存ぜぬ事。

曾平　存せぬ者が、なぜ妨げを

二人　ひろいだ。

伊織　これはハヤ迷惑千萬。全く妨げは致さねど、惡い所へ參りかゝり、お邪魔になつたも存ぜぬ。左樣ならばお詫び申す。御容赦を。

丹藏　イヤならぬ。然しながら、斯うして料簡して遣はさう。

ト双方より伊織の胸ぐらを取りにかゝるを、程よく留め

伊織　ハテサテ、しつこい。何者とも知れぬ旅の女、殊に日暮の薄暗がり、いづくへ逃げ去つたやら、身共が知らうやうがござらぬ。

ト双方へ突き放す。兩人ヒヨロ〳〵として

曾平　サア、無いわ〳〵。

丹藏　何が無い〳〵。

曾平　身共の紙入れが無い〳〵。

丹藏　今まで有つたのではないか。

曾平　今まで有つた紙入れ、しかも中に金拾兩。

伊織　なんと。

曾平　ハア、くすねたな。取つたな。

伊織　コリヤ、身共を盜賊に致すのか。

二人　知れた事だ。

伊織　もう料簡が。

ト刀の柄に手をかける。兩人、飛び退き、慄へ〳〵

曾平　なんぢや。物を取りながら、切る。面白い、切つて見され。

二人　切つてもらはう〳〵。

ト兩人、體を突きつける。伊織、大事の身の上とこなしあつて

伊織　武士たる者に盜賊の惡名、眞二つとは思へども、大望を抱へし身なれば、この場の無事を思ふがゆゑ。見す見す騙りと知りながら

ト紙入れより十兩出して

この金は、うぬらにくれる。キリ〳〵持つてうせう。

ト抛り出す。兩人、うまいと云ふ思ひ入れにて

曾平　持つて歸らいで。おらが金だ。丹藏どの、取つて下され。

丹藏　おてまへの金でないか。貴殿取らつしやれ。

曾平　成る程、さうだ。この曾平が金取るのに、誰れが何と申す者もござらぬ。

ト云ひ〳〵、怖々ちよつと取る。伊織、キツとなる。

なんぢや〳〵。身共が物を身共が取るのだ。ナウ、丹藏どの。

丹藏　さうとも〳〵。既の事に、危ふい加減。ナウ、曾平どの。

伊織　こま言吐かさず、とつとゝうせう。

二人　うせう〳〵……とは云ふものゝ。

ト寄らうとする。伊織、キツとなるゆゑ。兩人、氣味合ひあつて、戸屋の方へ走り入る。後見送つて、こなしあつて

伊織　ハテ、由なき事に思はぬ障り。さぞ弟が待ち兼ねて居らう。一足も早く歸らう。

ト矢張り合ひ方にて、本舞臺へ來る。この間、舞臺、藥を源次郎に服ましたり、染の井、旅の拵らへしまうたり、捨ぜりふよろしくあるべし。

彌助、歸つたぞよ。

ト内へ入る。彌助、源次郎、こなし。

彌助　これは若旦那伊織さま、只今お歸りでござりまするか。

染井　ヤア、伊織さま、逢ひたうござりました〳〵わいなア。

源次　兄者人、先程よりお待ち申して居りました。

ト取付き泣く。伊織、恟り。彌助、引取り

彌助　申し、染の井さまでござりまする。

伊織　誠に染の井どの、どうして爰へ。

染井　これには段々樣子のある事。マア、あなたにも御無事で、こんな嬉しい事はござりませぬわいなア。

伊織　ムウ、さては先程東寺の門前にて、惡者どもに取卷かれ

染井　エヽ、その時お世話になつたお侍ひさまは、あなたでござりましたかえ。

伊織　オヽサ、あぶれ者に取圍まれ、危うい所へ戻りかけて、見るに忍びず

染井　エヽ、その時には、怖い〳〵に心の轉倒、お顏を見る間もあらばこそ、その場をやう〳〵逃げ延びて、思はず爰へ逃げ込んだも

伊織　世に亡き父母の導きなるか。

染井　伊織さま。

伊織　染の井どの。

染井　逢ひたうござりましたわいなア。

伊織　ハテ、思ひがけない。

彌助　久し振りでの御對面。

伊織　これはしたり。

ト皆々こなしあつて、彌助、思ひ入れ。

彌助　早速ながら申しませうは、井筒屋伊三郎どのがわせられて、よい事があると仰せられしゆゑ、何事と尋ねましたところ、兼ね〴〵尋ね求むる彼の色紙、確か室町の小道具屋どのが持つて居るとの事聞き出し、知らせに參られしところ、あなた樣がお留守ゆゑ、これより室町へ尋ねに參り、もし道にてお目にかゝらば、御同道にて行くと申されしが、それはさうと、お茶漬はどうでござりまする。

伊織　イヤ〳〵、只今久世橋の饂飩屋で、强か支度を致して居るうち、かけ違うたものであらう。氣の毒千萬。ナニ、源次郎、身共が留守中、何も變つた事はないか。

源次　イヤ、別に變りし事はござりません。あなた樣には似寄りの者があると、心當りにもならんとお越しなされましたが、相知れましたか。

伊織　折角詮議に立越えたれども

源次　相知れませぬか。

伊織　尤も、年の頃面體恰好、少し似寄つた所もあれど、敵東間三郎右衞門とは拔群の相違。無駄骨を折つたわい。

源次　それは御苦勞に存じます‥‥此やうに兄弟家來ども心を碎き、敵の在所を尋ぬるうち、この源次郎はこの眼病。兎かう云ううち、もし敵三郎右衞門病死せば、誰れを敵と‥‥こればかりを案じ過しに。

伊織　これはしたり、又思ひ出して述懷か。佛神が無くばいざ知らず、手懸りだに相知れなば、兄が肩衦に掛けて、敵の止めは刺さす程に、必らずとも案じぬがよい。キナ〳〵と思ふは病の毒。コリヤ、伊織といふ兄が居るわい。それに何ぞや‥‥エヽ、馬鹿な者ではあるわい。ハヽハヽ。

源次　サア、其やうに仰せられますれど、もしもの事があつた時には。

彌助　これはしたり、どうでござりまする。兄御伊織さまの仰せの通り、今でも相知れなば、この下郞めが一番に駈け付け、御本望は遂げさしまする。左樣にキナ〳〵思す程、御病氣の妨げになります。

伊織　イカサマ、病人の側で長話し、退屈させては養生にならぬ。ドレ、身共は退きませう。

彌助　ナニ、旦那樣、定めてお草臥れなされましたらう。奧へござつて、お休みなされませ。

染井　コレ、彌助、わたしも奧へ行ても大事ないかいなう。

伊織　こなたも奧へござるのか。

染井　參りましたら、惡うござりますかいなア。

伊織　イヤ、惡いでもなし、好いでもなし。ナウ、彌助。

彌助　エヽ、お久し振りぢや。御一緒に。

伊織　源次郎、風ひかぬやうにしやれ。

ト唄になり、奧へ入る。

彌助　源次郎さまにも、お寢間へござつて、お休みなされませ。

妙閑　ドレ〳〵、私しがお手を取つて上げませう。

ト妙閑、源次郎を介抱して上手へ入る。

彌助　オヽ、さうぢや。慶庵どのが云はしやつた一藥。この間に。さうぢや〳〵。

ト河鹿を料理にかゝると、妙閑出て

妙閑　して、私しはどうせうぞ。

彌助　イヤ、こなた樣には、段々御苦勞。内へお歸りなされて、お休みなされて下さりませ。

妙閑　そんならわたしも去んで寢んねこせう。後方に參上。

彌助　今日も大きに御苦勞に存じまする。

妙閑　そんなら去ぬる程に、用があるなら呼んでおくれえ。

彌助　又お賴み申しまする。

妙閑　ドリヤ、去なうか。

ト唄になり、隣の内へ入る。後、合ひ方になり、彌助殘り、あたりを片付け、煙盆提げ、よき所へ坐り

彌助　日がな一日、フタフタ〳〵。それはさうと、最前慶庵どのが云はれた時刻は

ト指を折り、こなしあつて

これもよし。時に、染の井さまも久し振りでの御對面。それには引替へ、妹御葉末さまは、どこにどうしてござるやら、源次郎さまの御病氣、お聞きなされたら、定めてお案じ。それにつけても、兄元右衛門どの、病とはいひながら、酒を吞めば亂心同然、それゆゑ御主人方の御勘當。心柄とはいひながら……まゝよ。あんな兄貴があつては、忠義の妨げ。思ふまい〳〵。この間に、右の一儀を付けて置かうか。

ト合ひ方になり、右の河鹿を取つて來て、血を絞り、鉢へ入れたり、いろ〳〵あるうち、向うより元右衛門汚れたる單物を着て、坊主頭に淺黃の頭巾をかぶり、草履を穿き、竹の先に鈴を付け、杖にして盲目のこなしにて出る。

元右　按摩けんびき〳〵。

ト笛を吹き出る。本舞臺へこなしあつて、矢張り笛を吹きながら門口へ來て

旦那樣、按摩はようござりますかな。

彌助　幸ひぢや、一つやつてもらひませう。

元右　それは有り難うござりまする

ト彌助、何心なく門口へ來て戸を明け

彌助　此方へ入らつしやれ。

元右　ハイ〳〵、御免下さりませ。

ト入り、草履を脱ぎ、杖に通し、盲目のこなし。この

問、彌助、よく〳〵形と恰好を見て

彌助　こなたは兄元右衛門どのではないか。

元右　さう云ふ聲は、弟の彌助か。面目ない。

卜門門へ出ようとする。彌助、引留め、門口ピッシャリ締めて、吐息つく。元右衛門、袖にて顏隱し

面目ない〳〵。

卜下に居て、いろ〳〵こなし。彌助、奥へ心遣ひのこなし。合ひ方。

彌助　コレ、兄貴、この態はなんでござる。イヤサ、この身になつたる元は、こなたの心柄。今更改め云ふではないが、親旦那玄蕃頭さまお果てなされたその砌り、誓紙を書いた事を打忘れ、天王寺での有條。御主人方に勘當同然の身の成り果。武士らしい身持ちか。非人乞食見るやうな態をして、コレ、この彌助は……この身を碎き、こなたと二人前の御奉公。忠義を盡す其うちも、この兄貴はどうさつしやれたかと思うてやるも、眞實の兄弟だけ。御主人方の罪ばかりぢやござらぬ。天道樣が見てござる。弟の罪ぢやとて、當らぬとは云はれぬぞや。酒に性根を奪はれ、大事を忘れろといふ事が。エ、見下げ果てたる心ぢやなア。

卜いろ〳〵身を跪き泪を流し、愁ひのこなしにて云ふ。元右衛門も涙を流し、手を合せ、身を慄はせ

元右　尤もだ〳〵。よく云うてくれた。今更云ひ譯するではないが、一通り聞いてくれ、國元を立退く砌り、誓紙の誓ひ、一生酒は飲むまいと、心の內で願籠めして、御兄弟方のお供して、來る道々も、酒屋の內へは目もやらず、御主人方を大事々々と、お供して來た天王寺、東間が下郎腕助めは出ツくはし、これぞ敵の在所の手懸りと、締め上げて詮議の上、東間より岸田へ送る密書の名宛、披き見んと思ふうち、何者とも知れず眞の當。正氣を失ひ苦しむうち、氣付けに呑ませてくれたは有あふ酒、思はず知らず、呑めば忽ち正氣を失ひ、亂心同然。御主人の大事もなんのその、儘よ〳〵は酒の業。其まゝ倒れし後は夢現。酒が醒めれば又例の、酒のしくじりかと悔んで見ても後の祭り。一日々々身に堪へ、たうとうこの態になり果てしも、御主人の罰。それに引替へ、其方の忠義、せめては敵東間が在所を訊ね出し、それを功にお詫び申さんと思ふうち、主人の罰で目が潰れ、思うた事は鵙の嘴、生きて甲斐なきこの體。御主人方への申し譯に腹切らうにも刃物はなし、首でも縊らうか、イヤ〳〵、

淵川へ身を投げんと、はまつた所が目の見えぬ悲しさは、淺瀬と知らぬ因果のつくばい。うろ／＼するうち、ヤレ乞食坊主が川へはまつた、助けてやれと引上げられて、忝たいと禮云うても、心の內は死にたいばかり。死ぬるにも死なれぬかと、一日暮らしに日を送り、思ひ付いたる按摩けんびき。ウロ／＼歩くうち、もしや敵の在所でも聞出さうか、もしや此まゝ朽ち果てなば、未來で御主人に、なんと申し譯せう。弟彌助、この元右衞門が心の內、推量してくれ。おりや死にたい、死にたいわいやい。

ト淚を流し、いろ／＼身悶えして云ひ譯する。彌助、淚を拂ひ

彌助　その心なら、折を見合せ、御兄弟へお詫びして進ぜう。

元右　なんと云ふ。そんならこの身になつたこの元右衞門を、兄と思うてくれろか。

彌助　ハテ、指が穢ないとて、切つては捨てられぬわいなう。

元右　よう云うてくれた。嬉しいぞ／＼。

ト泣き

もう去にませう。

彌助　そんなら、隨分煩らはぬやうにして、後でござれ。

ト云ひ／＼形を見て

この形では。待たんせ。

ト納戶口へ入る。此うち元右衞門、探り／＼立上がり門口へ行きかゝると、彌助、風呂敷包み持ち出て

この風呂敷の中に、おれが寢卷の袷と、これなと着やんせ。

ト手に渡す。元右衞門、兩手に受け

元右　なんと云ふ。そんなら、この着物まで。忝ない。

ト泣き／＼戴く。

そんなら去にませう。

ト門口へ出ようとする。向うに足音するゆゑ、彌助、こなしあつて、元右衞門を引留め、ちよつと囁き、押入れに隱す。向うより新十郎、着付け、ぶツ裂き、野袴、陣笠、十手差し、夜廻りの拵らへ、家來四人、同じ拵らへ。銘々龕燈を持ち出る。ト下手より藤作、口茶の形にて出る。花道の新十郎に向ひ

藤作　これは新十郎さま、御苦勞に存じまする。

新十　して、安達彌助が宅は。

藤作　即ちこの家でござりまする。

新十　案內いたせ。

藤作　ハツ。

ト矢張り合ひ方にて、本舞臺へ來て、藤作、門口を叩き

彌助、内にか。

彌助　オイ／＼、誰れぢや／＼。

藤作　藤作ぢや。ちよつと明けて下され。尋ねたい事がある。

彌助　明日の事にしてくれんかい。

ト云ひ／＼門口明けると直ぐに捕り手

捕手　御上意。

トばら／＼と入り、彌助を取卷く。

彌助　これは。

新十　者ども、引け。

捕手　ハツ。

ト皆々扣へるとズツと上へ通り、合ひ引にかゝる。彌助これを見て

彌助　お役人樣には、何科あつてこの有樣。

新十　其方夜前、殺生禁斷の場所へ網を入れしを、それなる藤作が訴人に依つて、召捕りに參つた佐竹新十郎。

彌助　すりや、夜前殺生禁斷の場所へ、網を入れし者があつて、その御吟味にお越しなされましたか。

新十　その網を入れしは、彌助、其方であらうがの。

彌助　これは思ひも依らぬ、恐ろしいアノ禁斷の池へ

藤作　イヤ、われが入れしに違ひないといふ、證據はこの片袖。

ト以前の合羽の片袖出して見せる。彌助、恟りして

彌助　イヤ、覺えない。この片袖は、私しのではござりませぬ。

トこの前より牛藏、口幕の袖の切れし合羽着て、門口に聞いて居て、この時、ズツと入り

牛藏　その片袖が、われので無くばないとしてやらう。まだ外に證據といふは、この莨入れ。しかもわれが所持の、彌の字の書いてあるは、慥かな證據。なんと動きは取れまいがな。

彌助　こりや證據にはなるまい。

牛藏　現在、われが名の書いてある、この莨入れを、證據にならぬとは。

彌助　サア、彌の字の書いてあるに依つて、證據にならぬ。

牛藏　とはなぜ。

彌助　世間に彌助の彌の字は、おればかりか。

牛蔵　ヤア。
彌助　サア、彌左衛門彌兵衛彌三郎彌右衛門彌作に彌吉。
牛蔵　ヤア。
彌助　彌の字の付く者は、幾人といふ事はない。ぢやに依つて、おれが莨入れと、押付けた詮議立て。
牛蔵　ムウ。
ト詰りたるこなし。
こりや、さう云やア、彌の字は證據にならずば、マア、こいつは役に立たぬケ。そんなら矢ツ張りその片袖。
彌助　如何やうに證據呼はりしても、覺えないこの合羽の片袖。
藤作　それでも、池のほとりにて、手に入りしこの片袖の、片しを證據。
トこの間に新十郎、牛蔵に目を付け居る。
新十　その片袖、これへ。
藤作　ヘイ／＼、これが即ち、彌助が合羽の片袖に違ひはございません。
ト藤作、片袖を新十郎の側へ持ち行く。新十郎、こなしあつて
新十　すりや、これが網を入れし科人の證據とな。

藤作　左様でございまする。
新十　牛蔵とやら、其方もこれを證據と申すぢやな。
牛蔵　ハイ、彌助に違ひがございません。
新十　しかと左様か。
牛蔵　この牛蔵が睨んだら、違ひはございません。
新十　其方が着せし合羽の片袖。
牛蔵　エ、。
ト見て、恟りする
新十　すりや、禁斷の池へ網を入れしは、鳥羽の牛蔵、遁がれはあるまい。
牛蔵　エ、、滅相な。違うた／＼。この合羽は、矢ツ張り彌助の合羽でございまする。
ト脱いで抛る。
新十　人の物を着いたせば、其方は盗賊同然。
牛蔵　滅相な。
新十　但し其方、網を入れしか。
牛蔵　なんのマア。
新十　盗賊か。
牛蔵　サア。
新十　サア。

兩人　サア／＼／＼。
新十　我が科を人に塗りつけんとする鳥羽の牛藏。彌助。
彌助　ハツ。
新十　彼れに繩打て。
牛藏　こりや堪らぬ。
ト逃げようとするを、彌助、引留める。立廻つて取つて押へる。家來、捕り繩を渡す。彌助、手早く牛藏に繩をかける。
新十　出來した／＼。
彌助　すりや、私しへのお疑ひは。
新十　禁斷の池へ網を入れしは、鳥羽の牛藏。
藤作　そんなら彌助と思ひしに、牛藏の仕業でござりましたか。
牛藏　なんの事ぢや。譯が解らん。
新十　彌助とやら。蔭ながら聞き及ぶ忠義の魂ひ。この新十郎、感心いたして、この場の裁き。
彌助　すりや、主人の身の上、御存じあつて。
新十　人多き、人の中にも人はなし、人に爲せ人、人となれ人……科人を引立てい。
家來　科人、立たう。

ト唄になり、新十郎、彌助にこなしあつて、悠々と向うへ入る。後より牛藏、括られながら、引立てられ、ぼやき／＼入る。後に彌助、皆々を見送りこなし。この時、元右衛門、ソロ／＼出て
元右　彌助、ひやいな事であつたなう。
彌助　新十郎さまのお情で、助かるといふも、矢ツ張り主人のお庇。
元右　さうとも／＼。時にわしはもう去にませう。
彌助　そんなら、ソロ／＼と、怪我せぬやうに。また折あらば。
元右　尋ねに來ませう。
ト探り、杖を取つて門口へ出て
弟、門口を、よう締めてたもや。
ト探り／＼、花道へ行きかゝると、彌助、後見送り、こなしあつて。
彌助　心柄とは、いひながら、見すぼらしい、あの身の廻り。
トほろりとする。氣を替へ
ドリヤ、伊織さま御夫婦へ、御機嫌を伺はうか。
ト唄になり、奧へ入る。後、しんとなる。この間に元

右衛門、悄々と花道中程まで行き、よき所にて、本釣り鐘鳴る。この時、元右衛門、杖を捨て、キッとなつて、目を開き、ソロ／＼と後戻りして、門口を明けようとして、いろ／＼惡いといふ思ひ入れにて、あたりを見廻し、藤の蔓を傳ひ、屋根へ上がり、忍び込むと、向うより、伊三郎走り出て

伊三　彌助どの、一遍と尋ねました。伊織さまは戻つてござるか。

ト内へ入る。

伊織　それへ參つて御意得ませう。

ト云ひ／＼、奥より伊織、染の井、彌助も共に行燈提げ出る。

伊三　これは伊織さま、あなたの留主の間に、聞き出した色紙の話し。室町の小道具屋と聞いたゆゑ、尋ね當つた所に、また耳寄りな話しがござる。

伊織　毎度ながら御苦勞でござつた。して、耳寄りな話しとは。

伊三　イヤ、外の事ぢやない。片木原に東間大學と申す名があると聞いたゆゑ、知らせに戻りました。

伊織　ナニ、東間大學とは。

トこの時、障子明け、源次郎聞いて居て

源次　申し、兄者人、東間と聞けば、どうか耳寄り。

伊織　彌助、それに身が脚絆甲掛け、提灯の用意もせい。

染井　申し、伊織さま、身拵らへして、どちらへお越しなされますゑ。

伊織　ハテ、知れた事。その片木原といふ所へ、實否を糺しに參るのぢや。

彌助　左樣ならば、拙者もお供いたしませう。

トこの間に染の井、彌助、兩人して脚絆提灯に火を灯し、いろ／＼あるうち、伊織、拵らへして

伊織　イヤ／＼、其方は、いつもの通り介抱いたせ。

伊三　左樣ならば私しが、御案内いたしませうかな。

伊織　御親切の段、忝ないが、品に依つては、踏ん込んで吟味いたすこともあらう。されば何かの妨げ。

源次　申し、兄者人、大事のお身の上。

染井　お怪我のないやうに。

伊織　やがて本望を達するまでは、伊織の五體は金鐵ぢや。

ト出ようとする。この時、最前の侍ひ一人、窺ひ、刀振り上げて居る。伊織、ちよつとこなしあつて、門口へ出る。侍ひ、切り込むを、身をかはし、見事に切り

彌助　返す。この途端、門口ピッシャリ締める。彌助こなし。
伊織　今の物音は。
彌助　イヤ、なんでもない。彌助、よう留守せい。
伊織　ト早き唄になり、伊織、向うへ入る。後に皆々こなしあるうち。下手より小道具屋利兵衞、色紙持ち出て
利兵　御免下さりませう。內方に井筒屋伊三郎さまは、お出でなされませぬか。
伊三　これは利兵衞どの、ようこそ來て下さつた。して、右の色紙はな。
利兵　お前樣のお頼みゆゑ、爰に持つて居りまする。
彌助　すりや、こなさんが色紙の賣り主、小道具屋利兵衞どのでござるかな。
利兵　伊三郎さまのお頼みゆゑ、持つて參りました。
彌助　それは御苦勞でござりまする。して、代物は、幾らでござりまする。
利兵　この代物も樣子あつて、高う質に取つたれども、その置き主は逐電して、流れ込んだ損物ゆゑ、元金利息とも、三百兩に負けて進ぜませう。
彌助　すりやアノ、三百兩に。
利兵　高いと思はつしやるなら、まだ外に買ひ手のある代物。
彌助　滅相な。人手に渡つてはならぬ色紙。どうぞ此方へ。
利兵　賣らうと思つて、持つて來た代物。
彌助　是非とも此方へ買ひ取るからは、明日まで、お待ちなされて下さりませ。
利兵　イヤモウ、今まで持つて居たこの色紙、一日二日のめかりはござらぬ。
彌助　そんなら明日まで
利兵　間違はぬやう、手附けなりとも。
彌助　去んで後にござれ。
利兵　左樣なら、ドリヤ、明日の日を待たうか。
ト唄になり、利兵衞、橋がゝりへ入る。後に彌助、染の井、源次郎、顏見合せ
源次　尋ね求むる色紙は知れても
彌助　大枚の金、せめて手附けなと入れ置いて、取留めるが近道。明日と云うても今宵一夜さ。こりや、なんとしたものであらうなア。
ト源次郎、彌助、當惑のこなし。染の井、思ひ入れあつて
染井　コレ、彌助、わたしや其方に、頼みたい事があるわ

いなア。

彌助　ナニ、私しにお頼みとは。

染井　料紙持ちや。

彌助　ハツ。

ト彌助、硯箱を持ち來る。染の井、よろしく扇に歌を書き

染井　わたしが頼みは、コレ、この通りぢやわいなう。

彌助　ハツ……「山川の瀧に流るゝとちからも

染井　身を捨てゝこそ浮む瀨もあり。」

彌助　そんならあなたは。

染井　たとへこの身を沈めても

彌助　すりや、苦界の勤めをなされても

染井　御兄弟のお爲ぢやわいなう。

彌助　よく仰しやつた。お出かしなされた。と云ふものゝ、當所不案內のこの彌助。

伊三　オツト、その儀なら蛇の道は蛇、幸ひ今日、此方の浚へ講ゆゑ、祇園町の姉貴も來て居らるゝ。ちよつと呼んで

ト門口へ出ようとして

イヤ／＼、廻らうより、屋根續き、あの二階が、此方の奧座敷。

ト上手へ行き

姉貴々々。

ト呼ぶ。床の所よりお吉、障子明け

お吉　オヽ、弟伊三郎、けたゝましい、なんぞ用でもあるかいなう。

伊三　用がある段か、ちと話し合ひあれば、ちよつと下りて下んせんか。

きち　そんなら、表へ廻つて行きませう。

伊三　イヤ／＼、廻つて來る道で、人に逢うたら暇がいる。幸ひ爰に九ツ梯子、これを掛けて、下りて下んせ。

ト梯子を屋根へ掛ける。

きち　そんなら、しつかりと持つて居てたも。

ト下りる。

どうやら、グラ／＼して氣味が惡い。

伊三　洞庭の秋の月。

ト裾を持つ。

きち　姉を捕へていろ／＼の事。

ト下へ下りて來て

これは、どなたもお許しなされませ。

ト下に居る。

わたしを呼んで、何ぞ用か。

伊三　外の事でもない、爰に居るこの娘御。ちと金のいる事があるに依つて、急に奉公せねばならぬ。なんとお前相談して下んせんか。

きち　それは、親の爲、夫の爲、勤め奉公はまゝある慣ひ。ちよつと見ても、どこへ出しても恥かしからぬ……成る程、私しが抱へませう。

彌助　すりや、なんと仰せらるゝ。アノ、お抱へ下さるとな。

きち　して、金はなんぼ程の事。

彌助　なんぼと申したら……三百兩ばかりの入用でござりまする。

きち　先づ三年と極め、三百兩出しませうが、今日は弟の淀へ詣に來て、持ち合せの百兩。また明日證文の上、後金は渡しませう。して、親判、請け判とも。

彌助　成る程、親判はこの彌助。

伊三　オツト、請け人は、この伊三郎が請け込んだ。

きち　そんなら、先づ百兩は手附け。邪魔ながら、手附け證文に、彌助どのとやら、お前の判を捺して下んせ。

彌助　畏まりました。

ト硯箱を取つて來る。この間お吉、百兩包みを財布より取出す。この前より屋根の上へ元右衛門、ソロ／＼出て、樣子を聞いて、百兩の金欲しいと云ふこなし、この間に彌助、手附け證文認め、渡す。お吉、取つて見て

きち　これでよし／＼。ソレ、百兩。後金は明日早々渡しませう。

彌助　段々のお世話。申し、染の井さま、ちやつとお禮を。

染井　この上ながら、よいやうにお頼み申します。

きち　イヤ又、色町へ來て見やしやんせ。小町と逢うて又、面白い事があるわいなア。そんなら直ぐに爰から、連れ立つて去にませうか。

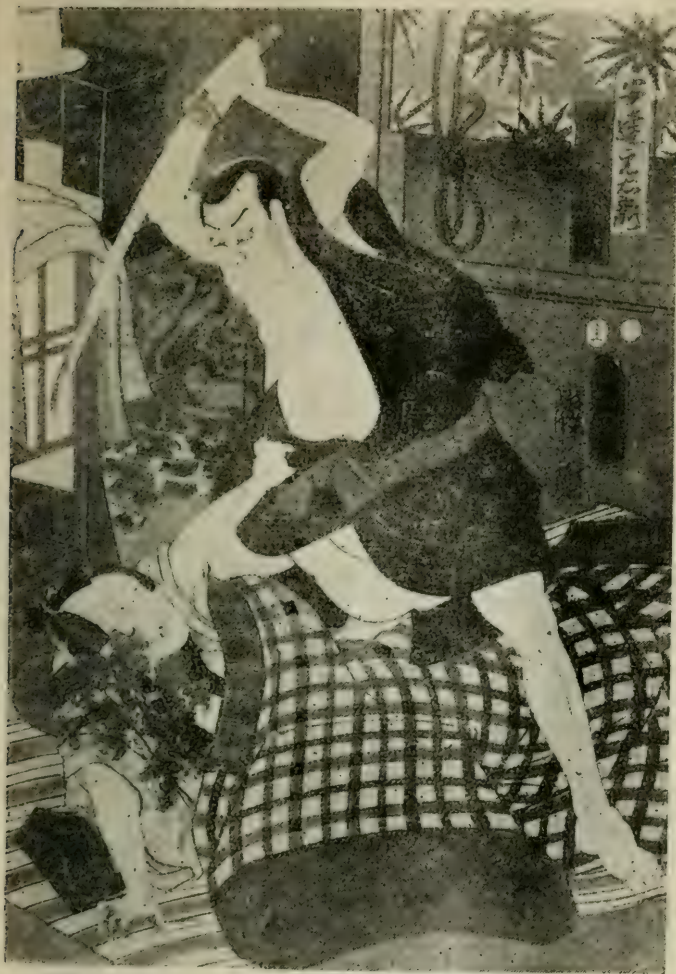
染井　もう參りますのかえ。

きち　どこでも水離れが悪いものぢや。幸ひ弟の駕籠もあれば、伊三郎、其方の所まで

染井　コレ、彌助、申し、源次郎さま。伊織さまがお歸りなされたら、よいやうに仰しやつて下さりませ。

源次　はる／＼尋ねて來て、逢ふと其まゝに勤め奉公。

彌助　もし旦那樣がお尋ねあらば

安政元年五月河原崎座所演　大谷友右衛門の元右衛門

市川小團次の彌助　　嵐璃寛の伊織

染井　國元へ去んだと云うてたも。
彌助　隨分酒の過ぎぬやう。
染井　伊織さまに、氣を付けてたもや。
彌助　お氣遣ひなされますな。御辛抱も今暫し。お煩らひの出ぬやうに。
染井　こなたも無事で……おさらば。
ト泣き顏隱し、ツイと小早く走り入る。
きち　オヽ、あの子とした事が。そんなら彌助どの、伊三郎、去にませう。
伊三　ドレ、私しも連れ立ちませう。
彌助　左樣ならお二人樣。
きち　また明日逢ひませう。
彌助　ようござりました。
ト唄になり、お吉伊三郎、連れ立ち、染の井の後を追うて入る。彌助、見送り、こなしあつて
彌助　申し、若旦那源次郎さま、今日はいろ／＼の事、御病氣の上にてお聞かせ申しました。もう餘程夜も更けてござりますれば、お休みなされませ。
源次　きいたう。其方の心遣ひといひ、染の井さまにも憂き勤め。これといふも、敵東間が爲す業。思ひ廻せば廻す程、味氣ないこの身の病。
彌助　また其やうな事を仰しやりまする。結句御病氣の障りともなります。伊織さまがお歸りなさるゝまで、マア、お休みなされませ。時に、最前のお藥を。
ト最前の血汐合せし藥を持ち行き
このお藥は、お醫者樣の加減の藥。一番煎じ。上がりませ。
ト差出す。
源次　そんなら、これが右の一藥。
ト服む。彌、側へ來る事ある。
彌助　申し、彌めがお伽を致しまする。時に、只今の百兩、財布に入れた儘、爰に置きます。
源次　其方も兄者人のお歸りまで、休んだがよい。
彌助　左樣仕ります。お金は爰に置きました。
ト財布を源次郎の側に置く　この間、屋根より見て居る。よし／＼とするこなし、彌助一間の障子締めて、此方へ來て
先づ、これでよし。時に、門口も斯う締めて置いて。
ト門口を締めて
旦那樣がお歸りなさるゝまで、斯う突ツ張つても居られ

まいし。何かと宵からモヤ／＼で、殆んど草臥れた。矢張り寢て待たう。

ト納戸より蒲團を取つて來て、よろしく敷いて

マア、枕もこれでよしと。斯う氣の揉める時には、一つ呑んで寢るがよい。

ト德利と茶碗を取つて來て

この酒ゆゑに、兄貴の流浪。又この彌助は、一つ呑むのが命の洗濯。

ト茶碗に酒を注ぐ。此うち元右衛門、覗き居て、呑みたいといふこなし。彌助、一口呑んで

甘露々々。よう／＼この茶碗に半分程が、惣身に沁み渡り、どうも堪へられぬやうになつた。この辛い物を兄貴が、どうして好くぢや知らん。

ト此うち屋根、メキ／＼音するゆゑ、彌助、上を見て

また隣の猫めぢやなア。

ト棕梠箒にて、屋根を叩き、シイ／＼と追ふ。元右衛門、猫の物眞似して居る。

矢ツ張り猫めぢやなア。隣の三毛めは、どうもなる奴ぢやない。

ト云ひ／＼蒲團の上へ上がり

思ひ出せば、味氣ない身の成行き。染の井さまは、浮川竹の勤め奉公。源次郎さまには御眼病。また旦那伊織さまには、夜晝とも敵の御詮議。それに家來の身にて、內にばかり……申し、旦那様、お免しなされて下されませ。

ト向うを拜み、いろ／＼こなしあつて

ドリや、お歸りまで、お暇を頂きませうか。

ト蒲團をかぶり、寢ると、しんとなり、方々にて割り竹、鈴の音する。暫らくあるうち、屋根の元右衛門、時分はよしと天窓より、ソロ／＼と下へ下り、棚より竈を足代として、やう／＼下へ下り、あたりを見廻し、彌助が刀を取つて來て、行燈にて拔いて見て、よしといふ心意氣。これより彌助が寢息を考へ、馬乘りになつて咽喉へ突き立てる。彌助、一思ひに突き殺され、元右衛門、抉りながら刀を拔かうとする時、彌助、死んだ儘縋り、元右衛門が着物の端を捉まへて居る。元右衛門、エ、面倒なと刀にて腕を切り落す。元右衛門の腰に切つた腕取付きある。これより障子屋體へ行き、敷居へ小便して、音のせぬやうに障子を明け手を挿込み、右の金を取る。この時、狆鳴き／＼飛び付く。刀にて切り拂ふ。これにて狆、奥へ逃げて入る。この時

向うより伊織、氣の急く儘走り出て

伊織　怪しからぬ胸騷ぎ。心元ない。

ト本舞臺へ來るうち、元右衛門は拔き身を振り上げ、源次郎を切らうとする時

彌助々々、戾つたぞよ〳〵。

ト門口を叩く。これにて恟りして、行燈を消し、壁際へ忍ぶ。源次郎、表を叩く音にて目を覺まし

源次　彌助々々。兄者人がお歸りなされた。彌助々々。

ト此うち心得ぬこなしにて

伊織　返答せぬは心得ぬ。エヽ。

ト戶を蹴破り、入る。灯なきゆゑ

南無三、明しを。

ト探り入る。この時元右衛門、拔き身を提げ、逃げんとする。このはずみ、伊織の高股を切る。伊織へたる。この間に元右衛門、花道中程まで逃げて來る。伊織、切られながら

源次　さてこそ盜賊。

トこの聲にて源次郎、門口まで走り出で、向うを見込む。元右衛門、ベツタリ寢る。伊織も見込む。三人、引ッ張りよろしく　幕。

幕の外、元右衛門、いろ〳〵こなしあつて向うへ入る。

五つ目　福島天神の森の場

役名——東間三郎右衛門。早瀨伊織。早瀨源次郎。安達元右衛門。京屋萬助。人形屋幸右衛門。奴腕助。非人頭、傳吉。非人、すた〳〵の八。同、やれもさの次郎。同、とんとこの頓兵衛。同、天滿の市。

造り物、平舞臺、向う黑幕。眞中少し小高くして一間の非人小屋、この前に莚かけある。後に落ちる仕掛け。この側に石の竈、土の釜など掛けある。いろいろ世帶道具並べある。上手に一間の草土手。よき所に石の地藏。これも後に地藏ばかり取るやう、臺ばかり入用。人上がる事。下手は川端の水打よせ、空一面松の吊り枝。花道よき所に一間程なる水の溜り。すべて福島天神の森の體。在鄕唄にて幕明く。

トすた〳〵の八、天滿の神子の市、やれもさの次郎、

八・　とんとこの頓兵衛、橋がゝり臆病口と花道よりと三方より非人の拵らへにて出て、本舞臺へ皆々來て

八　オヽ、皆戻つたか／＼。

市　今日は貰ひが好いかして、早い戻りぢやぞよ。

頓兵　イヤ／＼、もう大した事はないわい。おれより、すた／＼の八、どうであつた。

八　それいやい。この寒い時分に丸裸で、朝の夜から走り歩く天滿神子。すた／＼寒曝しになつて、どこも彼も獲物は少ない事いやい。

次郎　まだもましなは、顎の三、海道の人を張つて、やつとんやつとんとこまかせが、遙かましぢや。

市　その代り、やう／＼しやべつた所が、七十文か八十文の端た錢で、女房子が養へさうなものかえ。

頓　おツ付け米が廉うなつたら、そんな物ぢやない。

ト皆々話し合ひ居る所へ、顎の三、面桶袋提げ出て來て

三　オヽ、皆、爰に居るか。

四人　オヽ、三よ、今か／＼。

上るり〽秋の千草に置く露の、月の光も物凄く、そよそよ風が福島の、堤に續く非人小家、誰が住む庵ぞ味氣なき、世を憂しと見る早瀬兄弟、親の敵をうつゝにも、夢路を辿る旅はうき、兄をば脊に弟が、便り求めん事もなく、是非も難波の足曳や、山鳥ならぬ友千鳥、塒尋ねて辿り付く。

トこの淨瑠璃にて、向うより伊織、非人の形、頰冠り、竹杖を差し、蓑を着て、源次郎、着流し、脚絆にて、伊織を脊中に負うて出て、花道よき所にて、こなしあつて

伊織　源次郎、病後と云ひ非力の其方、取分け今日は餘程の道。この邊へ身共を下ろし、おぬしもちと休息召されい。

源次　左樣ならば、向うの堤まで參りまして、暫らく下ろしまして、あの所にてお休みなされませう。

伊織　オヽ、さうしませうわい。

〽いたはる兄へ孝行の、道捗らぬ雨上がり、歩み惱みて堤際、何とかしけん蹈み辷り、横にどつさり驚ろく弟。

トこの淨瑠璃にて、源次郎、伊織を負ひ、溜り水を飛び越え、本舞臺へ來る、思はず石に蹴躓き、膝を突く。これにて伊織、下に居る。源次郎惘りして

源次　これは大きに、不調法仕りましてござりまする。

伊織　大事ない〳〵。おれが身に障りはないが、蹈み挫きはせなんだか。

源次　イヤ、どこも怪我は致しませぬ。

伊織　怪我が無うて、重疊々々。

源次　眞平御免下さりませう。

ト氣の毒餘り目に涙、いつの間にやら所の非人、ばらばらと追取り卷き。

トこの時四人、兩人を取卷き

八　ついに見なれぬ二人の若者。

市　斯う見た所が、新米と見えるわい。

頓兵　コリヤ、爰らは、おいらが寢所同然。

次郎　仲間入りするなればよし、さもなくば爰らに置かぬ。

四人　キリ〳〵立つてうせう。

トやかましう云ふ。これにて伊織、こなしあつて

伊織　イヤ、お身達は當所の非人とな。見らるゝ通りの足の大疵、歩行叶はぬ躄同然。これなる弟の肩にかゝり、爰まで參つたれども、日が暮れて甚だ迷惑。料簡を以て一宵一夜さ。

四人　イヤ、さうはならぬ。半夜もならぬ。

伊織　然らば暫らく休息旁々、支度をする間。

四人　ならぬ〳〵。行かずばおいらが立たしてやらう。

ト皆々寄つて兩人を引立てようとする。腕切り傳吉、非人の拵らへにて、走り出で、この中へ入る。

傳吉　マア〳〵、待て〳〵。

ト皆々を留めて顏見合せ

市　こなたは親分の傳吉どの。

頓兵　こなさん、なんで留めるのぢや。

傳吉　ハテマア、おれが留めるから、マア、待たんかい。

ト皆々を宥めて

斯う見た所が、腹からの非人とも見えぬ。落ちぶれたといふには、何ぞ樣子がごんせう。

伊織　なんと云うて下さる。

傳吉　サア、話しに依つたら、力になるまいものでもない。ナウ、皆の者。

四人　それ〳〵、憎さ餘つて可愛さが百倍。

傳吉　その樣子を云うたが好い。

伊織　段々の御深切、忝なう存ずる。何をか隱さう兄弟とも、若氣の誤り身を持ち崩し、親の不興を受けての流浪。用意の路銀も遣ひ果し、難儀の者。斯くの如く盜賊の爲に左の高股へ、強かなる疵を受け、その疵口より風

を引込み、破傷風といふ病になり、いよ〳〵痛みが右へ移り、兩足ともに足なへ同然。夜に入れば惡寒發熱、加はるばかりに落ちぶれても、只情なきは命一つ。人の剩り物貰つてなりとも、露の命だに繋ぐならば、外に望みはござらぬ。ナウ、弟、さうでないか。

源次　只今兄者人の申されます通り、親どもに見離され、便り少ない二人の身の上。あなた樣のお仲間へ、お入れなされて下さりませうならば、忝なうござりまする。

傳吉　オヽ、さう見える〳〵……なんと皆の者、不便な衆達ではないかいなう。

四人　オイナウ。

ト皆々しいたりとなる。

傳吉　時に二人の衆や。最前からの話しを、聞けば聞く程涙がこぼれる。若い體して非人になるも、前生からの約束事。たとへ如何やうに落ちぶれても、時節さへ來ればどういふ身にならうも知れぬ。人の身の上浮き沈み、七度と云へば、何も案じる事はない。又足の痛みが癒るまで……幸ひ、小家が明いてある。爰へ入つて、又花咲く春を待つたがよい。

〽虱殺しの割り口說き、通るも非人一疋なり。

伊織　先程より段々との、有り難いお詞。暫しの間お詞に隨ひ、この家を、ナウ弟。

源次　御深切な各々樣方。たとへこの身はどのやうになりましても、忘れは置かぬ廣大の御恩と存じまする。

〽口には云へど胸の內、思ひやる身ぞ切なけれ。

ト此うち腕助、ツカ〳〵と皆の中へ出る。愕りして

腕助　エヽ、こりや何ぢや。

傳吉　川太郎之助。今までわりや、どこに居た。

腕助　おらは裏町の方を働らいて居たが、これから新地の方を廻る積りぢや。

四人　ハテ、きめ細かに働らくなア。

腕助　ドリヤ、一稼ぎやつて來うか、

〽見返り〳〵走り行く。

源次　して、あの者は、何でござりまする。

傳吉　あれが川太郎之助と云うて、彼奴もこの頃から爰へうせた、新米の乞食でごんす。

伊織　何ぢや知らぬが、思ひ顏して私し二人を、見い〳〵向うへ行かれました。ハテ、さま〴〵の世渡りぢやなア。

傳吉　時に、二人の衆へ、宿入りの代物を出して渡さぬかいやい。

四人　オツト合點ぢや。
〽軒に垂れたる荒菰や、襤褸さすてふ虫つきの、面桶の緣も箍切れて、水さへ呑めぬ破れ茶碗。
ト兩人、面桶茶碗を持ち出て
頓兵　おいらが爲には、神器同樣。
〽石の竈に土の釜、片しの火箸が一膳なり。
ト兩人、土の釜、片し火箸持ち出て
次郎　これで揃うた。どえらい出世をしたがよい。
傳吉　時に、まだ有る。
ト水の音になり、古き下駄一足取つて來て
コレ、向うの道は、雨が降れば水溜り、往來の人が大きに難儀する。その時、この下駄を貸して、一文二文の合力を貰うたがよい。
ト渡す。伊織、取つて
伊織　何から何まで、忝なうござります。
傳吉　斯う何もかも渡したれば……サア、皆の者、小家へ行て、せぶらんかい。
四人　さうしやせう。
源次　左樣なら、いづれもには、もうござりまするか。
五人　また、明日逢ひませう。

〽三方四方へ別れども、おのがさまぐ散りて行く、跡に二人が顏見合せ、暫し詞も無かりしが。
伊織　エヽ、思へば口惜しやなア。
ト合ひ方。
國元出立の折からは、兄弟主從四人連れ、この年月の艱難辛苦、憎いは元右衞門め。我れ／＼を侮つて、誓紙を破り酒を飲み、その場より行くへ知れず。
源次　忠義第一の安達彌助は、盜賊の爲に無慘の最期。
伊織　長の年月兄弟が、千辛萬苦も誰れゆゑぞ、敵東間がなせる業。
源次　たとへ天に跨り、地の底に忍ぶとも、尋ね出してこの恨み、やはか晴らさで置くべきか。
トきつと思ひ入れ。
伊織　オヽ、勇ましい。それに引かへ、足なへとなりし口惜しさ。今にも敵に出合ふとも、身體自由にならぬと思へば、無念な、口惜しいわい。
トこなしあつて泣く。
源次　お氣遣ひなされまするな。三郎右衞門に出合ひなば、首尾よく敵を討ち負うせ、兄者人の喜び顏を見るが樂しみ……とは云ふものゝ、幾年月を隔つうち、萬一敵が病

死せば、兄者人、悲しうございますわいの。
〽思ひ廻せば廻す程、腑甲斐ないこの身の上。
伊織　これはしたり、弟、神佛が無くばいざ知らず、やがて討取る時節があらう。
源次　ぢやと申して、心が急きますわいの。
ト愁ひの思ひ入れ。伊織、こなしあつて
伊織　病後の上に身が介抱、愁ひはその身の害となる。必らず嘆くな。
源次　ハイ。
伊織　泣くな、
源次　泣きや致しません。
伊織　未練であらう。
〽詞立派に心根を思ひやる程猶涙。
ト源次郎涙を拂ひ
源次　申し、兄者人、今日大坂の町にて承りましたは、上町とやらに、西國方の浪人者が、劍術の指南いたし居るとの事。もしやそれが、三郎右衛門ではありますまいか。
伊織　イカサマ、燈臺元暗しの譬へ。却つてこの大坂に、隱れ居まいものでもない。

源次　これより私し參り、とくと樣子を糺して參りませう。
伊織　イヤ、夜分と云ひ、土地不案内、覺束なくと思へども、所詮さう云ひ出すからは、留めても留まるまい。
源次　どうぞお遣りなされて下さりませ。
伊織　然らば、當地繁華の事なれば、あぶれ者などに出合ふとも、必らず短氣を出すまいぞ。
源次　大事を抱へたこの體、よう合點いたして居ります。
伊織　源次郎。
源次　ハツ。
伊織　顏を上げい。今宵は滅多に遣りともない。どうぞ明日の事に召されぬか。
源次　イヤ、どうも明日までは待たれませぬ。
伊織　成る程、それも尤も。左樣に思ふ事なら、達てというて留めもせぬが、隨分早く歸つてたもや。
源次　ツイ行て參りまする。
伊織　餘り氣を急いで、怪我せまいぞや。
源次　左樣ならば、兄者人。
伊織　夜の更けぬうち
源次　行て參りませう。
〽跡に心を置く露、草踏み分けて夜の道、見返り／＼

出て行く、長きこの世の別れとは、後にぞ思ひ知られたり、影見ゆるまで見送りて。

トこの淨瑠璃のうち源次郎、後を見返り〳〵、双方氣味合ひあつて、源次郎、向うへ入る。後に伊織、こなしあつて

伊織　ア、もう行たか。弟があのやうに氣をいらつも無理ではない。親人お討たれなされてより、當年は早七回忌。今に敵の在所も知れず

〽草葉の蔭の父母にも、さぞ腑甲斐なく思されん。

いま目前、敵三郎右衞門に出合うたりとも、この深疵では、なか〳〵以て、討取る事覺束ない。如何なる過去の因緣にて

〽弓矢神にも佛神にも、見放されたる淺ましやと、不覺の淚に暮れけるが、稍あつて淚を拂ひ。

誤つたり〳〵。漢帝に從ふ蘇武といふ者、兩脚を斷られたれども、時到つて召されて歸り、學士の位に昇りし例し。心柄こそ身は卑しけれ。思ふまい〳〵。久しう煙管にお目にかゝらぬ。先づ一服いたさうか。

〽燧取出しこち〳〵と、ほくちのしめり濡るゝ、道、在所廻りの萬歲が、二人連れ立ち歩み來る。

ト在鄕唄になり、萬歲二人、連れ立つて、米袋を持ち、一人は鼓を打ち出て

萬歲　コレ〳〵才六、もう日も傾むいた。日の暮れるは早いものぢやが、くれぬものは米ぢやてな。

才六　成る程、こなさんの云はんす通り、毎日々々、べれべんや〳〵と、誠にうるさう候らひける。ハヽヽヽ。

萬歲　これから早う宿へ歸つて、熱燗でキユツとやらかして休むのが樂しみ。早う來い〳〵。

〽と息急き水の溜りへ來て。

サア、水の溜りぢや。儘のかは、渡つて越さう。

ト兩人ぼやき〳〵渡る。伊織、見て思ひ入れ。

伊織　イヤ、道端狹き所を塞ぎまするは、此方の不調法。踏み越えてお通り下されい。

萬歲　そんなら通りまする。許さつしやれ……見た所が、年若な非人どの、どうか足の痛さうに見えまするなう。

才六　男振りと云ひ、襤褸を着てござれども、どこやら卑しからぬ形。定めし不自由にござりませう。わしら二人が足の癒るやうに、まだなうて進ぜませう。

ト袋を下に置き鼓を構へる。

〽德若に御萬歲と、御代も榮え壽きて、誠にめでたう

たつたりける。
　トちよつと舞ふ。
伊織　なか／＼氣輕な萬歳どの。斯く浪々は致せども、望みある身の上なれば、行く末祈つて下され。萬歳どの、頼みまする。
才六　なんぢや。望みあるなら、子寶もうけ。
〽年ようて世がようて、穗に穗が咲いて民の竈、賑はしかりける次第なり、父とがかち杵お嚊が臼、おへるぞ／＼、はや岩田帶青梅酢いぞ／＼。
こりやモウ、しきりが來た。
〽オツと心得後から、腰を抱へて、ソレ氣張れよ／＼。
まだぢや／＼／＼。
萬歳　そりやこそ出たワ。
〽玉のやうなる男の子、易々誕生まし／＼たる、お家はめでたう榮えける、べれべんやべれべんや／＼べれべんやと納まりける。
ト仕舞ふ。
ハヽヽ。必らず笑うて下さるなや。
伊織　イヤ、なか／＼面白い舞ひの姿で。暫しの憂を晴らしました。キツと御禮も致したけれど、御覽じらるゝ通りの身の上なれば。
萬歳　イヤ／＼、禮物はいらぬ。もう行きまする。
伊織　ござりまするか。
萬歳　さらばでござる。
〽次の村へと急ぎ行く。折柄後へ大聲上げ。
鈴太　とふかみゑみたみ、拂ひ給へ、清め給へ。
トこれより壁のメリヤスになり、上手より神道者、鈴を振り出て來る。
〽御幣の先で竈の清め、拂うて通る神道者、古い頭の鈴太夫、それと見るより立ちどまり。
コレ、非人どの、斯う見た所が、こなたも病人と見えるが、さうか。
伊織　お見掛けの通り、足の惱みでこの業病。どうぞお祈りなされて下され。
鈴太　病を拂うて進ぜませう。
〽鈴振りたてゝ。
とふかみゑみたみ、拂ひ給へ清め給へ。病も拂ひ給へ清め給へ。
〽鈴打鳴らし、天の浮橋逆鉾の、雫を探る女神樣、あの鶺鴒の鳥さへも、女夫事を教へたり、うなじ乙女が

顔見れば、あら面白う、天の岩戸の神樂の太鼓、拍子を揃へて出したり。

どろつく／＼すつてん／＼。

ト庭神樂になり

〽戀の根締めを小男鹿の、耳を振り立て聞こし召せと拂ひけり。

伊織　これは／＼、忝なう存じまする。

ト紙に十文包み、出して

〽ひん捻ぢ紙の十二銅、差出せば押戻し。

心ばかりのお初穗。

鈴太　こなた樂に禮物取る氣はない。これはマア。

〽しゆみ神道者と思はんすなよ。

ト首に掛けたる箱より錢百文出して

これは此方から進ぜます。取つて置いて下され。

伊織　これは却つて迷惑。お慈悲深い神道者どの。

鈴太　ハテ、慈悲事らに

〽鈴おツ取つて打ち鳴らし。

南無三えらい水溜り。

ト鈴振り／＼向うを見て

伊織　申し、これ穿いてお出でなされまし。

ト伊織、下駄を出す。鈴太夫、下駄を取つて

鈴太　そんなら、これを借りまする。

〽下駄押ツ取つて打渡り。

ソレ、戻しまする。

ト下駄を舞臺へ拋る。

〽しやべり返して急ぎ行く、後へぽか／＼田舍武士、通りかゝりし水溜り。

トこの淨瑠璃にて、向うより田舍めいたる侍ひ、大小、無器用に差して出て來て、水の溜りを見て、ウヽ／＼と啞のこなしにて、足が濡れると難儀ぢやといふこなしにて、渡りかけては後へ戻り、モヂ／＼する。この侍ひを伊織見て、さては啞ぢやと心得て、手招ぎして、下駄を出して、これを穿いて行けと仕方すると、頷きながら下駄を穿き、水を渡り、本舞臺へ來て、下駄を脫ぎ、伊織の前へ拋りやり、上手へ行きかゝるゆゑ、伊織、侍ひの袖を引き、下駄貸したゆゑ錢をくれいと仕方して、手を出す。侍ひ、ウヽ／＼と云うて睨み付け、ツイと上手へ入る。伊織、呆れしこなし。この間始終、躄のメリヤス。

伊織　これは貸し損であつた。ハヽヽヽ。いづくの人か

知らねども、優しい詞を聞く時は、身に沁み／＼と、浮世に鬼はないものぢやなア……夜も更ける。最早往來もあるまい。源次郎が歸るまで斯うしても居られまい。小屋へ入つて一休み。

〽杖を力にたよ／＼と、躄りながらに小屋の內。

さらば夢でも結ばうか。

〽菰を敷寢の草枕、月影漏るゝ荒菰の、風こう／＼と更け渡る、遠寺の鐘の子の刻過ぎ。

ト本釣り鐘。

〽堤傳ひにうそ／＼と、腕助先に元右衞門。

ト向うより腕助、火繩を振り出る。後より元右衞門、着付け大小、江戸頭巾にて出て、花道よき所にて

元右　腕助、いよ／＼早瀨兄弟の奴等は。

腕助　日暮れ前からこの堤へ、ウロ／＼迷うてうせたのを頭の傳吉めがいぢらしがつて、この小屋へ取込んだを、とつくりと頑張つて置きました。

元右　ムウ、よし。併し、風を喰ひはせぬか。

腕助　おれがちよつと

ト とつくと窺ひ立戻る。

元右　コレ、靜かに。

〽小鮎をねらふ鷺の足。

腕助　源次郎めは、けつからぬ。伊織めは、スヤ／＼と

元右　どぶさつて居るか。

腕助　いつそ爰へ引摺り出して。

元右　イヤ、そりや惡い。彼奴らが手並は知つて居る。足腰が立たいでも、目が覺めたらウツカリと、手に合ふやうな奴ぢやない。何がなしに寢込みをグツサリ。

腕助　手短かでそれもよからう。して、おらが旦那は。

元右　用意の小船に川筋から。人が見るか。頑張れ／＼。

腕助　合點だ。心得た。

〽謀し合せて兩人が、月に煌めく氷の刃、伊織が寢姿これなんめりと、窺ひ濟まして突ツ込んだり。

ト元右衞門腕助、小屋の双方より拔き身を突ツ込む。

伊織　ヤア／＼。

〽五躰も朱に拔き刀、よろぼいながら駈け出る伊織。

寢込みへ踏ん込み、騙し討とは卑怯な奴なう。

〽卑怯々々と身構へたり。

元右　誰れでもない。安達元右衞門さまだ。

伊織　ヤ、うぬは家來の元右衞門。現在主のこの伊織を。

元右　コリヤ、主とは何事。天王寺にて、うぬに勘當受け

安政元年五月河原崎座所演　市川小團次の三郎右衛門

嵐璃寛の伊織

たれば、主從の緣は切れてあるぞよ。一本立ちの元右衞門。コリヤ、よく聞けよ。うぬに付添ひ居らば、飲みたい酒もえゝ飲まず、堪え〳〵しあの日から、主なしとなつたを幸ひ、東間どのに隨ひなば、榮耀榮華は心のまゝ、好きな酒は飲み次第。まつたこの腕助に申し含め、非人仲間へ入れ置き、うぬら兄弟の在所を探せしゆゑ、今月今宵、うぬらを討つて捨て、東間どのゝ憂ひの根を斷ち切り、弟源次郎も後からやるワ。

伊織　ヤア〳〵、なんと。

元右　まだある〳〵。コリヤ、忠義立てする弟彌助も、おらが手にかけたが、けうといものか。

伊織　ヤア〳〵、すりや彌助を手にかけたも、うぬが仕業であつたよな。

元右　なんと、ようしたものなア。

伊織　すりや、いつぞや東寺の暗紛れ

元右　月は出づれど

伊織　朧にて

元右　差出す提灯切り落し

伊織　曲者やらじと留むる戸口。

元右　こりや叶はじと拔討ちに

伊織　無念や切尖、高股へ

元右　貫きながら、その場を逐電。

伊織　すりや、その夜の曲者は

元右　この安達元右衞門さまぢや。

伊織　うぬであつたか。

元右　躄になつたる。

伊織　チエ、。

元右　ハレ、不便やなア。

〽飽くまで惡口雜言に、伊織は無念さ口惜しさ。

伊織　人非人とも畜生とも、云はうやうなき元右衞門め。彌助が恨みもさぞあらん。母が與へし備前國光、彌助が形見の差添にて、おのれを討つが、家來の手向け。

〽よろぼひながら立上がる、ひるまぬ兩人付け入るを、心得たりと拔き合せ、いざりながらも手練の早瀨、ハツと受け留むその折柄、強引ちぎり立出るは、思ひがけなき三郎右衞門。

腕助　ヤア、あなたは東間三郎右衞門どの。

三郎　コリヤ。

トこの淨瑠璃のうち、伊織、兩人を切らんとする。元右衞門腕助、双方より切つてかゝる。伊織、いざりな

がら立廻りにて、小屋の側へ寄る所を、後より脇腹へ突き立てる。この途端にて前の莚落ちる。内より三郎右衞門・拔き身を持ちながら出るを、伊織見て、キッとなつて

伊織　ヤア、うぬは東間三郎右衞門。

三郎　珍らしや早瀬伊織。われが爲めには父の敵。年月の無念、さぞあらん。疾よりこれへ參り居る。サア、立上がれ。尋常の勝負を致しくれん。併し、身共が武勇を恐れ、顏出しもせず逃げ隱る卑怯者。然るにこの所へ、兄弟の者さまよひ來りしと、家來の腕助が知らせに依つて、直さま罷り越す、この三郎右衞門。サア、立上がれ。エエ、立たぬか。勝負いたしくれん。サア、尋常に勝負いたせ。

ト三郎右衞門、詰つて云ふ。伊織、無念のこなしあつて

伊織　ヤア、口と心は天地雲泥。人畜の元右衞門を語らひ、騙し討とは卑怯至極の三郎右衞門。たとへ薄手は負うたりとも、日頃の恨み、討ち果さいで置かうか。

ト立たんとしては撞とこけ、起きんとしては又轉び、無念の涙に暮れ居たる、東間は側へ立寄つて、土に顋をにじり付け。

三郎　ヤイ、素丁稚め、さては足が叶はぬな。ハテ、不便な奴。コリヤ、よく聞けよ。玄蕃頭と呼ばれし、うぬが親直則さへ、手もなく討取る東間が武勇、躄同然の態をして、親の敵なぞとは、身の程知らぬ獄卒め。

ト立ち蹴にはつたと蹴飛ばして、あたりに有りあふ石地藏、臺座の上に閻魔王、冠り落せし如くなり、憎しと思ふ一心に、ヂリ／＼と這ひ寄つて、右の肩口四五寸ばかり、只一刀に切り付けたり。

トこの間に三郎右衞門、いろ／＼あつて、石の地藏を足にて飛ばし、臺座へ腰掛ける。此うち伊織、にじり寄り、飛びあがつて三郎右衞門の肩へ切り付ける。これにて三郎右衞門驚ろき、キッとなつて

三郎　アイタ……こりや途方もない事ひろいだなア。

元右　なんとなされた／＼。

三郎　足腰立たぬと油斷して、肩口强か

腕助　ヤア／＼、えらい事さらしたなア。

ト手拭にて腕を括る。

三郎　コレ、ヤイ／＼元右衞門、うぬは以前主從の、よしみを思ひ手引きして、身共を伊織めに討たさうと思ふか。

元右　イヤ、滅相もない事仰しやりませ。何しに左樣な：
：これが彼の、啞の一聲、鬢の一立ちと申すのでござり
ませう。

三郎　何を馬鹿な。

元右　エヽ、いま〳〵しい、この鬢め、うぬ、とても叶は
ぬ癖に、いろ〳〵の事をひろいで、この元右衛門さまに
無實の難をかぶらせ居るわい。この上は元右衛門さまの
刀で、引導取らしてくれう。くたばり居らう。

〽走りかゝつて元右衛門、眞向二つに切り付けると、
かい潜つてしつかと受け留め。

伊織　うぬら如きに討たれんや。主罰天罰思ひ知れ。

〽鬢りながらも手馴れの早業、切りまくられて度を失
ひ、右往左往に逃げ惑ふ、後の方より伊織が腕、斜に
すつぱと切り落せば、ワツと魂消る聲諸とも。

ト腕を三郎右衛門切り落す。

口惜しや、心を碎きし父の仇、たま〳〵廻り逢ひながら、
扶持を與へし家來が手引、却つて敵の手にかゝり、返り
討に討たるゝか。エヽ〳〵、無念なわやい。

〽無念々々とばかりにて、五臟六腑を揉みあげ〳〵、
血汐あらそふ血の淚、哀れといふも愚なり。

せめてこの場に源次郎が有り合さば、斯くやみ〳〵とは
討たれまじきに。弟やい…源次郎やアい。

〽片手を突いて這ひ廻る。

源次郎やアい。

〽呼べど叫べどその甲斐も、松吹く嵐水の音。

ト泥頭。

三郎　やかましいわい。弟の源次郎も後からやる。冥土
の道で待つて居れ。

〽云ひつゝ又も腕はつたり、鳩尾へぐつしやり止めの
刀、敢へなく息は絶えにけり、死骸を足にて蹴返し
蹴返し。

ト又左の腕を切り、直ぐに止めを刺す。伊織、苦しみ
死ぬる。

親子とも、よい態〳〵。ハテ、心地好くくたばつたなア。

元右　三郎右衛門さま、さぞ御安心でござりませう。

三郎　これといふも元右衛門、其方が第一の働らき。

元右　この上ながらお約束通り、拙者めが身の納まり。

三郎　伊織さへ討取らば、直さま坂本の執權、大江氏へ仕
官する身共。この三郎右衛門が家老職サ。

元右　有り難う存じまする

ト七ツの本釣り鐘。

腕助　ありやモウ山寺の七ツの鐘。

元右　夜明けては人目も如何。

三郎　立歸りたくは思へども、心がゝりは弟の源次郎め。

腕助　その儀は氣遣ひあられますな。かねてこのあたりの非人どもに、少し宛の金子を遣はし、味方に引入れ置きますれば、後は下郎にお任せあつて。

三郎　出かした。行け。

ト時の鐘。

必らずぬかるな。

腕助　なか〳〵油斷は仕らぬ。

三郎　愛い奴〳〵。サア、元右衛門、歸らうか。

元右　お供仕るでござりませう。

〽始めて開く愁ひの眉。

三郎　今ぞ夕山の雲霽れて、月澄み登るおばしまの

ト月の出。

元右　心にかゝる山の端もなし。

三郎　ハヽヽヽ。

元右　サア、お急ぎあられませう。先づ。

〽打連れてこそ立歸る。

トこれにて三郎右衛門、腕の疵の痛むこなしにて、悠悠と、元右衛門付添ひ、向うへ。腕助、下手へ入る。

〽行く空の、早月魄も山の端に、傾むく運と白露の、道を急いで源次郎、歸る堤は皆紅ゐ、草葉も朱に染めなす血汐、心悪しくも透し見て。

トこの淨瑠璃にて源次郎、戻り、小屋の側へ行き

源次　申し、兄者人、只今歸りました。申し〳〵、兄者人

兄者人

〽見やる傍に伊織が死骸、ハツとばかりに氣は半亂、駈け寄つてしがみ付き。

こりやコレ兄者人のお死骸。申し、源次郎でござりまする。氣を慥かにお持ちなされて下さりませ。申し、兄者人いなう……何者の仕業なるぞ。

トうろ〳〵して

もう縡が切れたか。

〽餘りの事に涙も出でず、呆れ果てたるばかりなり。

申し、弟かと一言、もの云うて下さりませ。申し、兄者人いなう。

〽死骸にひしと抱き付き、天に憬がれ地に轉び、泣入り〳〵居たりしが、歎きのうちに心付き。

この温もりのあるといひ、手にかけし曲者は、遠くは行くまい。ソレ。

〽駈け出せしが。

此まゝ置かば犬の餌食。せめてお體を。さうぢや〳〵。

〽泪ながらに亡骸を、抱き上げ舁き上げ悄々と、落ち散る腕拾ひ上げ、繼ぐに繼がれぬ血筋の切れ目、冥土を照らす螢火の、我れから焦す胸の闇、亡骸埋む道野邊の、小石拾うてこと〳〵と、印の塚もはかなきは、無慘なりける次第なり、小蔭をウソ〳〵以前の非人。

トこの淨瑠璃のうち、源次郎、有り合ふ鍬にて上手の土を掘り、伊織の死骸を抱き上げ、埋め、また腕を拾ひ集めて、一つに埋め、砂をかけて、竹の筒を取つて、樒を上へ印に立て、小石積み、よろしくある所へ、腕助、以前の非人連れ出て來て

頓兵　うぬが戻りを待つて居たのぢや。

八　兄と一緒に殺してしまふのぢや。

皆々　覺悟さらせ。

源次　すりや、兄者人を殺せしも、うぬらが仕業よな。兄の敵、覺悟いたせ。

皆々　エ、、こま言吐かさず、くたばつてしまへ。

ト皆々、薪ざつぱにてかゝる。

〽打つてかゝるを拔き合せ、前後左右を薙ぎ立て切り立て、千變萬化の働らきは、目覺ましかりける次第なり。隙を窺ひ腕助が、鍬押ツ取つて諸腰を、ハツシと打てば堪り得ず、轉ぶ所を起しも立てず、大勢寄つて滅多打ち、骨も碎けと打ち据ゑ〳〵。

ト腕助、鍬にて源次郎の腰を打つ。これにて倒れる。非人大勢寄つて叩く。源次郎、悶絶する。皆々見て

腕助　オツト、よし〳〵。この死骸を、この川へ流れ灌頂ぢや。

皆々　オツト合點ぢや。

〽大勢寄つてだんぼらぼ、川の深みへ、水煙り。

腕助　斯うしてしまへば跡腹病めず。皆、大儀であつた。これからわい等に褒美ぢや。皆來い〳〵。

〽飛ぶが如くに。

ト三重になり、腕助、非人皆々を連れ入る。チヨンチヨンにて返し。

造り物、向う遠見の浪の書割り、但し三段の手摺り、前通り川の打寄せ、これに川柳大分あり、すべて綱

島天神、前川の飾り付け。これにて道具とまる。
ト木遣りになる。上手下手向うより、仕出し大勢出て
來て入る。
〽こなたの岸より源次郎、息吹き返し柳に取付き、這
ひ上がり、一息ふツとあたりを眺め。
ト川柳を力に源次郎、川より眞中へ出て
源次　爰は福島の川下……この身に凶事のなかりしは、ハ
テ、合點のゆかぬ。正しく非人に打擲せられ、命を捨
てしと思ひの外。さるにてもこの身の上、これまでの艱
難辛苦も、兄者人と敵首尾よく打たんと心の樂しみ、力
に思ふ家來に離れ、たつた一人の兄者人に死別れ、誰
を便りに敵の行くへ。斯くまで武運に盡き果てし、この
行く先も覺束ない。やみ／＼路頭に野垂れ死をせんより、
潔よく腹切つて、兄者人と冥土のお供。エ、、さぞや草
葉の蔭から父母も、腑甲斐ないと思されん。お免しされ
て下さりませ。
〽不覺の涙に沈みしが、氣を取直し心を締めて。
ハア、我れながら後れたり。さうぢや／＼。
トこなしあつて、腹切る拵らへ、いろ／＼あつて、こ
の前より京屋萬助、着付け半合羽、旅形、脇差さし、
三度笠持ち出て來て、空を眺め
萬助　ホウ、山の根が白んで來たわい。
ト本舞臺へ來て、源次郎を見て、合點の行かぬこなし。
ヂツと窺ひ居る。
源次　さうぢや。南無阿彌陀佛。
ト腹切らうとする。萬助、恟りして留めて
萬助　マア／＼、待つた／＼。待たつしやりませ。
源次　イヤ、放して殺して下され／＼。
萬助　ハテサテ、マア／＼、待たつしやりませ。見れば卑
しからぬお若いの。命を捨てうとまで思はつしやる心底、
よく／＼の事であらう。ハテ、死んで花實は咲かぬわい
なう。様子に依つては、お力にもならうが、命を捨てる
様子、話さつしやれ。
源次　どなた様か、見ず知らずの拙者をば、御深切の段は
忝ないが、所詮生き甲斐なき身の上。見捨てゝ殺して
下さりませ。
萬助　ハテサテ、惡い合點。命さへ全うすれば、ハテ、樂
もあるもの。若氣の一筋、短氣は損氣。マア、譯を話さ
つしやれ。わしも男ぢや。様子に依つては、及ばずなが
らお世話もせう。マア、氣を鎭めて様子を云はつしやれ。

此やうな所へ來合すも、何ぞの因緣、マア／＼、樣子を明かさつしやれ。

トこれにて源次郎、ヂッとなつて

源次　事を分けての御深切。所詮命はなきものと、覺悟極めしこの體。今は何をか包まん、我れは浮田中將の家臣、早瀨玄蕃頭が悴にて、同苗源次郎と申す者。七ケ年以前、父玄蕃頭を人手に討たれ、その無念止む事を得ず、兄伊織と申す者同道にて、敵を討たんと國を立退き、艱難辛苦の其うちに、忠義の家來を失ひ、兄弟とも浪々のうち、兄伊織は盜賊の爲に疵を受け、歩行叶はず、非人と姿をやつし、この福島へ來りしも、我が留守中に兄伊織、人手にかゝつて敢へない御最期。この身の行く末も、誰れを力と敵の在所。空しく路頭に朽ち果てんより、潔く腹切つて、兄諸ともに冥土の道連れ。放して殺して下さりませ。

ト此せりふのうち萬助、一々恟りする事あつて、猶もシツカリ留め

萬助　ヤア／＼、そんならあなたは、玄蕃頭さまの御子息、源次郎さまか。

源次　如何にも。

萬助　これは／＼、知らぬ事とて、ひやいな事の、左樣ござらば、いよ／＼以てお留め申さにやならぬ仕儀。私しとてもあなた方お二人の、お行くへを尋ねまする者でござりまする。

源次　ウム、我れ／＼が在所を左程まで、尋ねらるゝ其許は。

萬助　ハツ、何をか包まん、元私しは、あなた方お二方の舅御、花形刑部さまに召使はれし、家來萬助。樣子あつて主人刑部さまより暇賜はり、方々と流浪のうちに、運に叶ひ、只今では伏見に於て、町人なれども人に知られし京屋の萬助と申し、有德の暮らしも主人の大恩、朝夕忘れぬこの年月。所に四ケ年以前、主人よりあなた方お二方の御身の上、詳しく書面に承り、力を添へよとお頼みゆゑ、忍び／＼に御行くへを、尋ねさまよふ今月今宵、只今計らずお目にかゝるといへど、兄御伊織さまには敢へない御最期と、聞いて恟り、心の當惑。この上は、あなた樣のお身の上、共に敵の在所を探し出し、お討たせ申す拙者が所存。何卒一先づ拙者が宅へ、お入りなされて、事を計らば、よも討ち得ぬ事あらんや。その上あなたにお逢はせ申す方もある。何を申すも、最早明

け方、人目に立つ。委細は道々。一先づ拙者が方へお供申さん。サア、御用意なされませ。

源次　ハヽア、誤まつたり。兄の最期に一時の當惑。今こそ本心に立返り、敵の首を提げいで置かうか。

萬助　ハア〳〵、お出來しなされた。然らば、暫しも早く御用意々々々。

源次　計らず逢うた其許の深切。この上は好きに頼む。

萬助　お氣遣ひなされますな。及ばずながら、お力を添へませう。サア〳〵、お出でなされませ。

ト本釣り鐘、明け六ツ。方々にて鳥啼く。

ありや最早東雲。ほんに、見ればお衣服が、どこもかも裂け破れ。其まゝでは見苦しい。幸ひ私しがこの合羽。

ト我が合羽を脱いで、源次郎に着せ、手拭を頬冠りにさして

萬助　サア〳〵、お出でなされませう。

ト木遣りにて、方々に鳥啼くと、向うより、橋がゝり、上手より、百姓の仕出し、何れも鍬を擔ぎ出る。或ひは旅人、六部など、思ひ〳〵の仕出し大勢出て、花道にて行き合ひ、源次郎先に萬助付いて、いろ〳〵花道へかゝる。知らせなしに本舞臺、道具、上手へ引く。

松原の堤になり、遠見の吊り物、村々の景色になる。此うち向うより幸右衛門、旅形、半合羽、三度笠にて出て、花道中程にて、源次郎萬助に行き合ひ、摺れ違ひの模様にて、どうやらをかしいと、見送りながら又萬助に行き合ひ、互ひに氣味合ひにて摺れ違ふ。但しこの間、仕出しに隔てられし體にて、源次郎萬助は向うへ入る。仕出しも皆々、方々へ入る。幸右衛門、合點のゆかぬこなしにて、本舞臺へ來て、血汐に辷り、ヒヨロ〳〵とすると、土手より腕助、ツカ〳〵と出て、幸右衛門に行き當り、うろたへて

腕助　うぬ、源次郎め。

ト打つてかゝるを、幸右衛門、恟りしながら、見事に投げ、血に辷り、ヒヨロ〳〵として下を見て

幸右　エヽ、えらい血なア。

トこなし、よろしく

幕

六つ目

伏見人形屋の場

京屋の場

役名――京屋萬助。人形屋幸右衛門、同女房。お

時。萬助女房、お德。伊織妻、染の井。源次郎妻、葉末。京屋番頭、善八。同手代、久七。同、嘉介。同、佐兵衞。奴、腕助。丁稚、長松。小道具屋藤兵衞。幸右衞門一子、幸松。萬助一子、萬吉。早瀨源次郎。

造り物、通しの二重舞臺。向う一間の納戸口、これに續き上戸、店戸棚、呉服物の書割り。下手、帳簞笥、帳面の書割り、注文帳差かけあり、眞中に、番頭善八、天秤に金を掛けて居る。この側に、錢金入れ五ツ六ツ、ある、次に手代嘉介、帳箱の前に坐り、十露盤を置いて居る。下手に手代佐兵衞、皆々に小拂ひして居る。平舞臺の下手に、丁稚二人、錢差を撚つて居る。上がり口に掛取り三人、腰掛けて居る。錢卅七貫ばかり、並べある。反物卷き物、大分取散らしあるべし。伏見呉服店の飾りつけ、手鞠唄にて幕ひらく。

ト酒屋、帳へ受取り書いて居る

佐兵　米屋、貴樣の所はなんぼぢや。

米屋　ハイ、三百七十目でござります。

佐兵　番頭どの、米屋は三百七十目でござります。

善八　ソレ三百七十目、受取つて置かんせ。

ト掛けて渡す。米屋受取書いて

佐兵　後は誰れぢや。

駒木　駒木屋でござります。

佐兵　貴樣は。

駒木　ハイ、十六貫二百でござります。

善八　貴樣の所は金で二兩一歩。

駒木　有う難うござります。

善八　酒屋は、拂うたのか。

酒屋　貰ひましてござります。

薪米　時に、あちら町の、人形屋幸右衞門の所へ行きませうか。

酒屋　わたしも一緒に、參りませう。

駒木　左やうなら、三人連れにて行きませう。

三人　こりや有り難うござります。よい年をお取りなされませ。

ト三人、捨ぜりふにて、橋がゝりへ入る。

善八　拂ひも大方、片付いたといふものぢや。コリヤ、長松、三太郎、もう、片付けてしまへ。

丁稚　オツトせう。
ト丁稚、片附ける。
善八　時に、嘉介、佐兵衞、一服せうか。
嘉介　今朝から、ホツとした。佐兵衞、どうぢや。
佐兵　一服せう。
ト三人、居ながら、莨吸ひ付け、よろしくあつて
善八　ナア、嘉介、その帳面、ちよつと貸しや。
嘉介　これか。
ト帳面を渡す。善八、帳を見て
善八　時に、石川さまへの貸附けが、七百五十兩。津間屋の利銀の殘りが凡そ、二百五十兩、先月、西國のお屋敷へ、出限が二千五百兩。斯う見渡した利銀で、大枚の事、それに呉服店の仕入れ金から、入銀と、また出銀も、途方もないものぢや。おれがこの位精通してさへ、なかなか口で云ふやうな事ではない。先づこれは斯うやつて、置いて……これはこれでよいが、嘉介、佐兵衞、何と思ふ。こちの旦那、この夏頃は、祇園町へばかり篏り込んで居られたが、たうとうその白人を引かせて、内へ連れて戻り、入れて置くといふは、どんな心ぢや知らん。
嘉介　コレ、番頭さん、そりや知れてある。
善八　そりや、どうして。
嘉介　外に置くと、物入りが多いによつて、そこで、内に置くのぢや。
善八　イヤ又、お家もお家ぢや。我が男を女郎に取られ、外に置く事か、内に一緒に居るといふも、これも結構ぢや。
佐兵　それも知れてある。
善八　どう、知れてある。
佐兵　そこぢやなア。外に置くと、旦那は内には寢ぬワ。さすれば、内にはお家一人ぢや。所で、内に一緒に居ると、三度に一度は廻つてもらはれる。それをかすりに、一緒に居るのぢや。
善八　そこもあれば、蓋もある。
三人　ハ、、、、
ト笑ふ。合ひ方になり、納戸より、萬助、着附け、莨盆提げ、出て
萬助　どうぢや。
善八　ヘイ、あらまし片付きました。
萬助　佐兵衞、隣り町の、家賃銀は來たか。
佐兵　イヤ、まだでござります。

萬助　そんなら、一遍、廻つて來い。
佐兵　畏まりました、……。ドリヤ、行て來うか。
　　ト橋がゝりへ入る。
萬助　嘉介、帳合ひはどうぢや。
嘉介　帳面殘らず引合せ、算用は合うてます。
萬助　善八、掛けはどうぢや。
善八　得意先がよいゆゑ、大方寄りました。
　　トこの時、久七、着付け羽織にて、橋がゝりより、出て
久七　只今戻りました。
萬助　久七、戻らんしたか。
久七　五條の堺屋から、直ぐに、室町の吉野屋へ參りましたところ、利右衞門さまはお留守ゆゑ、暫らく見合せて居りましたので、大きに隙が入りました。やう〳〵爲替の百兩、受取つて歸りました。
　　ト財布より百兩包みを出し、萬助の前へ置く。
善八　イヤモウ、今日の日になつて、百兩は出し憎いものぢや。
萬助　それは大儀で有つた。この金は帳簞笥の、抽出へ入れて置いてたも。後の寄り金は、一緒に藏へ入れます。

久七　畏まりました。
　　ト久七に渡す。久七、受取つて
　　ト久七、百兩包みを、抽出へ入れる。この時、善八、ちよつと尻目に見て居る。奥より、お德、子役に上下を着せ、染の井諸とも出て
とく　旦那樣、これにお出でなされますか。
萬助　オヽ、お德、お染か。
とく　申し、旦那樣、坊を只今氏神樣へ、年參り致さしませうと存じます。
萬助　それはよう氣が付いた。
久七　坊さん、立派に出來ましたなア。
子役　申し、お父樣、參つて參じませう。
とく　誰れを附けてやつたものであらうぞ。
染井　常から氣に入りの、三太郎がようござります。
とく　コリヤ、三太郎、わが身付いて行きや。
三太　お供して參るのか。しめた〳〵。
長松　三太郎どん、お前、うまい事さんすな。
とく　コリヤ、三太郎、十二銅上げるのぢや。
　　ト渡す。
善八　コリヤ、その中で、三文あげて、九文で買喰ひさら

すな。

三太　お前と同じやうに。

善八　何吐かすのぢや。

三太　サア〱、坊さん、お出で〱。

ト子役を連れて向うへ入る。

とく　コレ、怪我さすまいぞや。體が大きいばかりで、どうもなるものぢやない。

久七　長松、旦那樣のお側へ、火鉢持つて行かぬか。

長松　オツトセウ。

ト火鉢を萬助の側へ持つて行く。善八、三人を見て

善八　嘉介、見や、旦那樣は、右と左に月と花ぢや。

嘉介　お前、けなりいか。

善八　知れた事。

ト捨ぜりふにて皆々入る。

萬助　コリヤ、阿房口、叩かずと、そこらを片付けて、臺所へ行て休んだがよい。久七も定めて草臥れたであらう。風呂へでも行つて休んでたも。

久七　左やう仕りませう。

善八　行きなんせ。長松も來い。

ト唄になり、久七、善八、長松も納戸へ入る。後に三人殘り

萬助　店を預ける頼もしい、番頭どのではあるわい……店はおれが番して居る程に、誰れも來る事はならぬぞよ。

トあたりを見廻し、こなしある。お德も共に氣味合ひあつて、兩人して、染の井を上座に直し

兩人　先づ〱。

トこれにて、合ひ方になる。萬助、こなしあつて

萬助　今更改めて申しあげるではなけれども、早瀨のお家には、恩あるこの萬助、この度用事について京都へ參り、祇園樣へ參詣の歸るさ、思はずお目にかゝつたあなた樣、樣子を聞いて恟り、内へ歸り、女房お德に樣子を語り

とく　あなた樣のお身の身抜けを致し、内へお伴ひ申しましても、内外の者の手前と云ひ、世間の聞えもあれば、表向きは、萬助どのゝ妾分。内證は、御介抱申さんが爲でござります。

染井　二人の衆の深切。それにつけても、思ひ出すも涙の種。御兄弟のお跡を慕ひ、妹諸とも國を出て、さまよふうちに、大坂天王寺にて、妹葉末を見失ひ、獨り當途もなくうちに、彌生の頃、東寺とやらの貸座敷にて、

思はず伊織さまのお目にかゝり、積る話しの其うちに、寶の質請け、金のたんぞく。彌助一人が心遣ひ。見るに忍びずこの身をば、苦界の勤め。思ひがけなう、萬助どのに巡り逢ひ、この身の苦患は遁がれても、思ひ出すは伊織さま、妹葉末も、どこにどうして居やるやら。案じらるゝ事ぢやわいなう。

トしいなりなると、萬助、お德、顏見合せて

萬助　其やうにお案じなさるゝ事はござりませぬ。お妹御葉末さまを尋ね出し、御兄弟にお逢はせ申し、伊織さまの事は、……マ、これもお話し申す折もござりませう。ナウ、女房ども。

とく　さうでござんす。それはさうと、御寮人さま、あなた、この月が、御臨月ぢやござりませんか。

染井　さいなう。伊織さまのお胤を身に宿して、本意ないお別れ。

萬助　左やうならば、いつ知れぬこぼれもの。お德、隨分氣を付けたがよいぞや。

とく　そりや合點でござんす。

萬助　時に、お德、內の者どもが氣取つては、お身の大事ゆゑ、わが身は、悋氣するがよいぞや。

とく　そりや、呑み込んで居りまする。

トこの時、善八、嘉介、納戸より出る。これにて三人、思ひ入れ。

萬助　エヘン。

善八　申し、旦那、お風呂をお召しなされませんか。店は嘉介が、番して居りまする。

萬助　コリヤ、お染、われも奧へ行て、床の間の掛け物も掛け替へて、花も活けて。

染井　アイ〳〵。

トこなしあつて入る。萬助、悋氣せぬかと仕方する。お德、合點のゆかぬこなし。萬助、呑み込みの惡い、悋氣する事と、また仕方する。これにて、お德、呑みこみ

とく　オヽ、さうぢや……お前さんは〳〵、滅多無性に、何でも、お染々々と、用を云ひつけさんすが、腹が立つて〳〵ならんわいなア。

萬助　此奴が〳〵。いろ〳〵の事を吐かすな。

ト胸倉取れと仕方する。お德、呑み込み。善八、嘉介、始まつたとこなしする。

とく　コレ、旦那どの。

萬助　男の胸ぐら取つて、どうするのぢや。用云ひ付けたらどうした。

とく　其やうに贔屓になさるゝが、腹が立つ……、さうさうしてどうぢやえ。

ト何ぞ打ちつけいと仕方する。お德、うなづき、嘉介、反物取つて來て、打ちつける。

腹が立つて〳〵ならぬわいなア。

萬助　おのれは〳〵、男に投打ちさらすな。おれも負けはせぬ。

ト巻き物を打ちつける。これにて兩人、中へ入り

兩人　マア〳〵、ようござりまする。

とく　エヽ、邪魔しやるないなう。

ト引退け、十露盤、反物、巻き物を互ひに取つて打ちつける、仕打ちの女夫喧嘩。善八、嘉介、誠と思ひ取さへる事あつて、善八を寄つてかゝつて、巻き物や十露盤などにて。叩く。これにて。皆々爭ひながら奥へ入る。跡に善八、這々にて、腰を抱へながら

善八　何の事ぢや。女夫喧嘩の相伴で、どえらい目にあうてのけた、……時に、叩かれても大事ない。最前、久七が入れて置いた百兩の金。どうぞせしめたいものぢやが。

トこれにて、合ひ方になる。善八、あたりを見廻し、帳箪笥の抽出へかゝり、煙管にて、こぢ放し、百兩を出して

マア、してやつた。時に、この金持つて居たら危ないもの。どこぞ隱し所がありさうなものぢやが。屑籠と鴨居の上は、いつもあるやつよ。

トいろ〳〵隱し所の、こなしあつて、長松、出て、これを見て、小隱れする。これを知らずに、善八、火鉢を見付け、幸ひよい隱し所ぢやと、あたりを見い〳〵、火鉢の中へ金を埋め、灰をならして

斯うして置けば、マアよし。春になつたら先づこの金で墨染の小雪を引かせ、妾にして圍うて置いて、三月頃には、二人連れにて、手に手を取つて、桃山の花の夕の

ト鼻唄唄ふ。この時、長松、後より

長松　盗賊見付けた。そこ動くな。

ト箒を持つて居る。これにて悸りして、二重より善八、轉び落ちて、慌てゝ手をつかへて

善八　ヘイ〳〵、何も盗んだ覺えはござりません。どうぞお免しなされて下さりませ。左樣な不埒の番頭善八では

ござりませぬ。
ト云ひながら顏を上げ、長松を見て
エヽ、おのれ、悴くりさし居つた。爰に用はない。奥へ
行け〳〵。
長松 イヽヤ、行かんわい。
善八 なんで、行かん。
長松 番頭さん、ちよつとごんせ…見たぞえ〳〵。
善八 コリヤ、見たとは、何を見た。
長松 お前が火鉢の中へ、隱した物を。
善八 シイ〳〵、何と云ふ。そんなら最前から
長松 見て居たけれど、云はんぞえ〳〵。
善八 コリヤ、わりや、賢い者ぢや程に、誰れにも云ふ事
は、ならぬぞよ。
長松 云はんからには、おれにも下んせ。
善八 何吐かすぞい。われに遣つてよいものか。
長松 下んせねばこの通り、旦那さんへ注進。
ト行かうとするを留めて
善八 マア〳〵待て。それ云うて堪るものか。
長松 そんなら、下んすか。
善八 遣るぞ〳〵。

ト紙入れより、貳朱一ツ出して
善八 これで饅頭など買へ。
長松 たつた貳朱か。貳朱位なら、注進。
トまた行かうとする。
善八 待つてくれ〳〵。遣る〳〵。
ト一兩出して
善八 小判で一兩遣るぞ。これ取つて置け。
長松 一兩位なら、矢ツ張り注進。
ト行かうとする。
善八 まだ遣る〳〵。
ト十兩出して
善八 今度は飛んで、十兩ぢや。
長松 よいわい。十兩なら、負けてやれ。
善八 負けてくれるか。エヽ、嬉しや。コリヤ、その代り、
誰れにも云ふなよ。
長松 誰れにも云やせん。巧くいた祝ひに一ツ打たうか。
二人 ヤア、シヤン〳〵。マア、シヤン〳〵。祝うて三ツ
善八 コリヤ。
ト押へる。長松、尻まくり、善八にあてがふ、善八、
鼻つまみ、兩人引ツ張りよろしく

返し

造り物、二重舞臺。見付け納戸口に續き押入れ。上手、折廻し障子屋體。下手に、人形店。伏見人形、いろ〳〵飾りあり、いつもの所に、門口。掛乞ひ三人、上がり口に腰掛け、やかましう云うて居る。葉末、着付け振り袖にて、これを事分け云うて居る。在郷唄にて、道具とまる。

米屋　どうぢや〳〵。くれるかくれぬのか、どうしてくれるのぢや〳〵。
葉末　マア、お待ちなされて下さりませ。只今は姉様も留守なり、また後方でも。
駒木　イヤ、ならぬ〳〵。後方々々も度々の事。
酒屋　今日は大晦日の事ゆゑ、是非とも
米屋　譯附けて貰はねばならぬのぢや。
葉末　御尤もでござりますれど、何を云うても、姉さんがお留守ゆゑ、どうぞ戻らしやんすまで、お待ちなされて下さりませ。
米屋　とても埒の明かぬ事、云うて居やうより、百貫目の抵當に編笠一蓋と云ふ事もあり、この娘の着物なと、取つて歸りませう。
酒屋　そりや、いつちよい料簡ぢや。
駒木　今までの腹癒せ、さうなと致しませう。サア、お娘キリ〳〵と、脱がんせ。
葉末　どうぞお免しなされて下さりませ。
ト泣いて、詫び言云ふ。
米屋　その涙が氣にくはぬ。そんなら奥に居て、留守を遣ふのか。
葉末　なんのマア。
トこの間に向うよりお時、さんすいなる、着付け昆布籠を提げ、子役の手を引いて出る。
三人　サア〳〵、どうぢや。
幸松　コレ、母様、正月には、よいべゝ着せると云はしやんしたが、早う着せて下されや。
とき　コレ、この子とした事が、お正月は、まだ明日の事。今日からは、まだ着物ぢやないわいなう。
幸松　それでも此やうな。汚ないべゝ着て居ると、友達が貧乏人の子ぢやと云うて、寄せてくれぬわいなう。
とき　オヽ、可哀さうに、……何と云うても大事ない。追ツつけ父様がお歸りなされたら、此方も買うてやるわいな

う。

幸松　父さんが歸らしやられたら、金持ちになるのかや。嬉しい〳〵。

とき　葉末さまがお待ち兼ね。早う內へ歸りませう。

　ト本舞臺へ來て、門口にて、內を見て居る。

米屋　どうで、甘う云うては埒が明かぬ。

駒木　さうぢや。手荒くゆきませう。

　ト三人寄つて、葉末を脫がさうとする所へ、お時、悔りして、中へ入り、三人を引退け

とき　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。

　ト皆々を留める。これにて、三人、お時を見て

米屋　こなたはお內儀。

皆々　お時どの。

とき　お腹立ちは御尤もに存じます。御存じの通り、夫幸右衛門どのは、永々の旅立ちと云ひ、その上、母樣が御病氣の上、たうとう、遂には、……何を申すも女の手一つ。その日送りがカツ〳〵の世渡り。今にも、夫が歸られたら、あなた方の只今までの滯りは、お禮申して持つて參ります。暫らくの所、どうぞお待ちなされて下さりませ。

葉末　どうぞ、お待ちなされて下さりませいなア。

駒木　なんと、米屋どの、をかしいものになりました。

米屋　あのやうに云ふと、氣の毒にもある

酒屋　どうも仕樣もございませぬ。待ち次手に、待つてやりませうか。

米屋　こなたの心に免じて、待つてやらう。

とき　そんなら、お待ちなされて下されまするか。エ、有り難う存じます。

米屋　コレ、その代り、幸右衛門どのが戻られたら

三人　違はぬやうに賴むぞや。

とき　キツと持つて參ります。

三人　そんなら、お內儀。

とき　ようお出でなされました。

　ト唄になり、掛乞ひ三人、橋がゝりへ入る。後に、兩人、顏見合せ、こなし。二重へ上がると、合ひ方になり、葉末、帶を締めかける。お時、こなしあつて

とき　これは葉末さまには、いろ〳〵の事お聞かせ申し、お免しなされて下さりませ。

葉末　お時どの、御挨拶、痛み入ります。さうして、今日は、お早うございますなア。

とき　定めしあなたお一人ゆゑ、お淋しからうと存じまして、心は急けど子供の足、やう〳〵只今になりました。見ますれば、何を縫うておいでなされまする。

葉末　さいなう、わたしが、上げ括りの古いのを、幸松が帶にしてやらうと存じて、それで絎けて居りまする。

とき　それは御深切に、有り難う存じます……いつぞや幸右衛門どの、大坂にてあなたにお目にかゝり、お供して戻らしやんして、直ぐに旅立ち。後にて、あなた樣を私しが妹にして、お隱まひ申すも、世間を憚かり、お身を大事と、思ふゆゑ。

葉末　それにつけても、わたしが身の上。姉さん諸とも國を立出で、お二人樣に巡り逢はんと、連れ立つて出た甲斐もなく、大坂天王寺とやらで姉樣にはぐれ、便りない身を、幸右衛門に巡り逢ひ、この家へ伴はれ、お前のお世話になるにつけても、姉さんは無事でござるか、二つには源次郎さま、いづくにござるやら、風の便りなと聞きたうござるわいなう。

　トちよつと泪ぐんで云ふ。お時も涙ぐみ

とき　御尤もでござりまする。やがて幸右衛門どのが御兄弟、また染の井さま諸とも、お供して戻られませう。何にも、お案じなさるゝ事は、ござりません。其やうな事、お案じなされて、御病氣でも出れば惡うござります程に、氣をワサ〳〵とお持ちなされませ。

　トこの時、幸松、お時の膝を枕にして寢て居る。お時、こなしあつて。

オヽ、この子とした事が、わたしが膝を枕にして寢てからに。

葉末　オヽ、可哀さうに。わしが奥で寢さしてやりませうわいなう。

とき　それは憚りでござりまする。

葉末　ドレ、寢さしてやりませうか。

　ト唄になり、葉末、幸松を抱き上げ、こなしあつて、奥へ入る。後に、お時、こなしあつて、下へ下り、向う見て、しいたりと成る。合ひ方。

とき　浮世ぢやなア。何につけても、思ひ出すは、お國の事。御主人達が御流浪なさるにつけ、案じらるゝは幸右衛門どの、寶の詮議と家を出やしやんしたは、五つ年も以前。案じるうちに母樣の御病氣。お留守のうちは、猶大事と御介抱も、どうせうか、斯うせうかと、思うた所へ去年の春、戻らしやんした、その嬉しさと、思ふ間も

なく、一ツある物まで路銀とし、直ぐに旅立ち。後にて母樣に、御不自由な目はさすまいと、一錢二錢のさもしい商ひ、お買ひなされて下さりませと突きつけ賣り。二つには葉末さまに案じさすまい爲、人に賴まれての賃仕事。心を碎くこの身より、夫の艱難辛苦。今にても戻らしやんしたその時に、母樣は、斯う〳〵と、お聞かせ申したら、定めて力を落しなさんせうかと、思へばこの身が、碎けるやうなわいなア…わたしとした事が、マアあたりに人が居ればこそ、いろ〳〵の事を思ひ出してから。こんな事は思ふまい。山へ行け〳〵。ドリヤ、お茶でも沸かして、御膳でも上げませうか。

ト唄になり、こなしあつて、納戸へ入る。あと在鄕唄になる。向うより幸右衛門、前幕の形にて、小道具屋藤兵衛、着付け羽織にて、連れ立つて出て、花道にて

藤兵　幸右衛門どの、もう晝前でもござりませうか。

幸右　左やうなものでござりませう…時に、藤兵衛どの、昨夜舟でお話しの、彼の貫之の色紙、そこに持つてござりますか。

藤兵　爰に持つて居ります。これから京へ歸り、買ひ手があるか尋ねて見まする。

幸右　藤兵衛どの、外を尋ねるまでもない。どうぞその色紙は、私しに賣つて下さるまいか。

藤兵　こなた、これ買うて、どうさつしやりまする。

幸右　有やうはこの四五年、長い老舖の人形店、女房に任せて、打ツちやつて、旅挊ぎというて駈け歩くは、大切なる、古主の行くへ、二ツには、その色紙の在所を、聞出し求めたいばかりに、艱難をしますのでござりまする。

藤兵　サア、わしも早う賣りたいものなれど。

幸右　なんぞ賣られぬ譯でもござりまするか。

藤兵　あまり高値の物ゆゑに。

幸右　それはとんと出ない御遠慮。親子の中でも商賣づく。

藤兵　値段は、負け引きなしで、二百兩ぢやぞや。

幸右　さつぱり二百兩に買ひませうか。

藤兵　そんなら、賣りませうが、どうも掛けには。

幸右　そりや金子と引替へ。

藤兵　違ひはせぬかや。

幸右　じゞむさいせりふするやうな、幸右衛門ぢやごんせぬわいの。

藤兵　そんなら、今夜、夜半までに出來まするか。

幸右　エ、…出來まするとも。今宵中に拵らへまする。

して、こなさんは。

藤兵　撞木町に用事もあれば

幸右　そんなら必らず。

藤兵　後方、持つて來るぞや。

幸右　かた〴〵待つて居りますぞや。

藤兵　ドリヤ、行て來うか。

ト唄になり、藤兵衞、引返し入る。幸右衞門、後見送り、こなしあつて、合ひ方。

幸右　エヽ忝ない。御主人方の御行くへは、今に定かならねども、紛失の色紙が手に入れば、幸右衞門が歸參の大功。これといふも、神々樣のお引合せ。エヽ、有り難い。時に、衣服衣類は元より、手に當る諸道具、諸品まで賣り代なし、後に殘した僅かな金で、家内が丁度四人口、どのやうに引延しても、取續かうやうがない。それと云ひ、これと云ひ、ハテ、どうしたものでヽあらうなア。……イヤ〳〵、斯う門中で立ちはだかつて、思案の附かうやうもない。先づ去んで見た上で。さうぢや。

ト本舞臺へ來て、爰ぢや〳〵と云ふこなしにて

嬉しや、爰に、まだ居るさうな。

ト門口より

女房ども戻つたぞよ。お時〳〵。

とき　アイ〳〵。どなたでござりまする。

ト云ひ〳〵出ろ。此うち、幸右衞門、内へ思ひ入れ。お時、見て、悔くり。

ヤア、こちの人かいなア。

トいろ〳〵、見て

よう戻つて下さんした。

幸右　サア待つてたであらう。道理〳〵。其方も無事で、

マア嬉しい。

ト云ひ〳〵、上がり口へ腰をかけ

ちよつと濯ぎを取つてたも。

とき　アイ〳〵。

ト嬉しさうにして、手盥に水を入れ、持つて來る。幸右衞門の前から、眺めたり、横から、詠め、いろ〳〵あつて

矢ツ張りこちの人ぢや〳〵〳〵。何から話しせうやら、うろ〳〵するわいなア。マア、お飯も溫かに、風呂も焚かうし、つツとモウ、今朝から髮も梳かうと思うても、ツイあたふたと。風呂もいつ入つたなりやら。

ト紙出し、顏拭いたり、所體つくらうて居る。この間、

足洗ひ、立ちあがり

幸右　さうして坊主めは。

とき　ほんに、わたしの云ふ事ばつかり、…幸松、お父樣がお歸りなされたぞや。幸松々々。

ト奥より、幸松出て手をつかへ

幸松　お父樣、お歸りなされましたかいなア。

幸右　オヽ、坊主めには丸二年見ぬうち、ても大きうなつたなア

幸松　お父樣、お土産下され。

幸右　よし〱。追ツつけ荷が戻つて來ると、いろ〱のよい物がある。それはさうと、お時、母者人は、お變りもないか。

トこれにて、お時、しをりとなる。合ひ方。

とき　その母さんはな。

幸右　寺參りでもなされて、お留守か。

とき　母さんは、御病氣にて

幸右　ヤア。

とき　遂にこの世を、去年の秋に。

幸右　ムウ…敢へなうお果てなされたか。

とき　アイナア。

幸右　南無阿彌陀佛々々々々々。

とき　母さんは、お果てなさるし、今際の際までも、お前の事ばつかりを

幸右　さうであらう。忠義ゆゑとはいひながら、天にも地にも掛替へのない、たつた一人の母者人、御病氣の御介抱、末期の水さへ取らぬ不孝。お免しなされて下さりませ。

ト愁ひのこなし。門口へ萬吉、三太郎を連れ、子供、大勢、出て來て

大勢　幸ぼん、内にか〱。遊びにお出でんか。

幸松　母さん、遊んで來る。この牛下されや。

とき　遣ります程に、怪我せぬやうに行ておちや。

子供　サア〱、お出で〱。

とき　コレ、丁稚どの、頼んだぞや。子供衆、皆せり合ふまいぞや。

ト子役。皆々ドヤ〱云うて。入る。奥より葉末出て

葉末　孝右衛門どの、戻らしやんしたかいなア。

幸右　これは葉末さま、留守中は悴が事、母の病氣、何かにつけ、さぞ御厄介でござりませう。有り難うござりまする。

葉末　さうして、伊織さま、源次郎さまに、逢ひやつたかいなう。
幸右　イヤ伊織さま、源次郎どの、お二方とも今に於て。
　ト云ひ憎さうに云ふ。
とき　まだ逢はしやんせぬかいなア。
幸右　葉末さまの思し召しも、面目ない仕合せ。
葉末　すりや、お二方ともに巡り合はず。そんなら、國元の樣子は。
幸右　御主人玄蕃頭さま御最期は、指折り數へて早七年以前、風の便りを承はると、取る物も取り敢へず、お國元へ駈けつけて、誠の樣子を承はれば、奥樣にも御生害、御兄弟の若旦那は、彌助、元右衛門を召連れて、御發足なされたあとゆゑ、口惜しいとも殘念とも、元來、幸右衛門は先祖代々、早瀨家、御名代を勤める身分。女房時は奥樣の、召使はれし腰元。若氣の誤まり、不義顯はれ、成敗は武家の掟、夫婦諸とも、幼少より、お側で育つた有り難さ、御不便も一入、命代りの御不興蒙むり、まだその上に、金銀衣類も手道具諸とも、諸品に至るまで殘る方なき奥樣の、御恩は船にも車にも積めぬ程‥‥母の故郷へ身退き、昨日は今日とくれ竹の、伏見の町に侘び住居。商賈の道に疎ければ、何を世渡る活計にと、フト思ひついたる土細工。
　ト店にある葛家鳩、西行の人形、子を抱いて居る人形お山人形、二ツ子を負うて居る人形出して
コレ、體は土に塗れても、汚れぬは昔の魂ひ
　ト葛家を取つて
たとへ月洩る茅屋にも
　ト子抱いて居る人形を持ち
親子三人、此やうに、命全う暮らすのは、一方ならぬ古主の大恩。
　ト鳩ばかり取つて
この鳩でさへ、三枝の禮。コレ、見やれ、今一度歸參の功を立てんと、思ふに甲斐なきお家の斷絶。この上は御兄弟の、若旦那方に力を添へて、目差す敵の首取つて、冥土の主人へお詫びの種と、東國、北國、四國、九州、五年が間
　ト西行の人形を持ち
西行の杖と笠が道しるべ、眞黒になつて尋ねても、お目にかゝらず、よく〳〵武運に盡き果てたと、思へば思ひ廻す程、口惜しいわい。無念なわい〳〵。

トいろ〳〵身を慄はし、よろしくある。

とき　道理でござんす。尤もでござんす。たとへ親子三人の身が、どのやうになつても、お二人様を尋ね求め、お力になつて、親旦那様の敵討つてこそ、誠の忠義でござんすぞえ。

幸右　成る程。

ト子を負うて居る人形を取つて

負うた子に淺瀬の譬へ、生き變り死に變り、本意を遂ぐるが誠の忠義。またも神佛のお引合せにや、思ひがけなう戻り道で、聞き出した。色紙の在所。

とき　なんと云はしやんす。アノ寶の色紙の在所が知れたかえ。すりや、いづくにござんすえ。

幸右　貫之の色紙が手に入られば、たとへ敵に巡り逢ひ、首尾ようお討ちなされても、早瀬の家は末代埋れ木。殊に浮田の相續にも係はる寶。

兩人　そんなら、その寶が知れても。

幸右　サ、それとても大枚、價の金子は二百兩。

兩人　エヽ。すりや、その金の出來ぬ時には。

幸右　今宵中に才覺せねば、色紙は外へ手渡しすると、裏打返した詞の詰め。

兩人　何と云うても、大枚二百兩といふ金。

幸右　路銀は殘らず、遣ひ捨て、爰には僅ばかり。二百兩はさておき、二分の工面も差當り、石で手詰めた今の難儀。世に譬へに云ふ、四百四病の病より、貧ほど苦しいものはないわい。

ト身を揉み、いろ〳〵こなしあつて泣き落す。お時、葉末も諸共に涙ぐみ、兩人、こなしあつて、双方より

葉末　幸右衛門どの、わしや其方に、願ひがあるわいの。

幸右　なんと仰しやります。

とき　コレ、こちの人、わたしもお前に、願ひがござんす。

トこれにて幸右衛門、双方へ、こなしある。

幸右　葉末さまといひ、女房どもまで、改めて願ひとは。

兩人　その願ひといふは、これでござんす。

ト兩人、お山人形を取上げ、幸右衛門の側へ置く。

幸右　こりやコレ、お山人形。

とき　お主の爲。

葉末　夫の爲。

幸右　すりや、その身を苦界に沈めても

兩人　色紙の價。

とき　コレ、この子持ちの人形を
幸右　元の士に練り返し
とき　及ばずながら
葉末　お山人形と
幸右　つくねる思案は
とき　貞女を破つて
葉末　貞女を立つる
幸右　イヤ、あなたを苦界へ
とき　そんなら、わたしが
幸右　女房まで
とき　夫の爲には
兩人　士に成つても
幸右　忠義の仕やうは
兩人　まツこの通り。
ト兩人、人形を割る。
幸右　オ、出來した。
ト感心のこなし。この模樣、よろしく、チョン〳〵。
返し。
元の、京屋になる。萬助、二重の眞中に坐り、吟味して居る。善八、箒を振り上げ、久七を叩かうして居るを、佐兵衞、嘉介、これを見て留めて居る。パタパタにて、道具とまる。

嘉佐　番頭さん、マア〳〵、ようござりまする。
ト留めるを振り拂ひ
善八　何もわいらが知つた事ぢやない。サア、われが盗んだに違ひない。キリ〳〵出しさらせ。
久七　コレ、善八どの、そりや何を云ふのぢや。わしが預かつて、あの抽出へ入れて置いたに違ひはない。たとへ盗んだにもせよ、我れが預かつた金を、我が手に盗み、科を受ける白痴があるものかいな。
善八　云ふない〳〵。そこぢやてな。われが預かつて、入れたその金、抽出の鍵をわれが持つて居るのぢやないか。また金に足でもあつて出たと云ふのか。また何ぞ證據があると云ふであらうが、證據といふは、ソレ今、われが鍵持つて居るが、慥かな證據ぢや。
久七　そりや番頭、無理といふものぢや。
善八　イ、ヤ、この番頭は無理も云はん。吐かすなよ、云ふなよ。吐かしやがると承知せんぞ。
トかゝるを、萬助とめて

萬助　善八、待て。
善八　イヤ、白狀させまする。
萬助　おれが待てと云ふなら、待ち居らぬか。
善八　ヘイ。
萬助　この金は、久七ではない。
善八　そりや又、なぜでござりまする。
萬助　さればいやい。いま久七が云ふ通りぢや。我れが預つた金を我が身に盜み、その科をよもや受ける者は、あるまいが。こりや芝居で、なんぼもあるやつぢや。
善八　そんなら外に。
萬助　こりや歷とした。盜人が、その金を
長松　オヽ、隱した。その有る所は、よう知つて居る。
萬助　なんぢや、われが知つて居るか。
善八　ヤイ〳〵、長松、とぼけて、何吐かすのぢや。すツ込んでけつかれ。
長松　イヤ、すツ込んでは居まいわい。
萬助　われが知つて居るなら、早う云へ。
善八　ヤイ〳〵、埒もない事吐かしたら、どえらいぞよ。
長松　旦那、その金は
萬助　どこにある。

長松　その火鉢の中に。
萬助　そんなら、この火鉢の
ト引寄せて取らうとする。善八、悧りして、火鉢の上へ乘ると、股倉を火傷して
善八　アツ、ヽヽヽ。
ト云うて其まゝ倒れる。これにて、久七、火鉢の中を改め見て、百兩包みを出して
久七　この火鉢の中に、燒けもせず、封の儘。
ト百兩包みを、萬助の側へ、持つて行く。萬助、改め見て
萬助　恙なうして、めでたい〳〵。
ト橋がゝりより、三太郞、萬吉を負うて、走り出て
三太　大事ぢや〳〵。
萬助　三太郞、大事とは何事ぢや。
トこの時、お德、奧より出て
とく　ムウ、今戻りやつたか。
三太　コレ、アノ、人形屋の幸坊が、牛を持つて居たら、此方の坊さんが貸せと云うたら、幸坊が否ぢやと云うたら、牛を引ツたくり、幸坊の頭をカチンと割つた。それで、大事ぢや〳〵。

萬助　そんなら、アノ幸右衞門どのゝ子の頭を、萬吉が割つたのか。
三太　オイナウ。
萬助　そりや、大抵な事ぢやないなう。
とく　申し、旦那どの、挨拶にやらざなりますまい。
久七　誰れ彼れと云はうより、私しが參りまして、斷わりを云うて參りませう。
とく　そんなら、其方が。
　ト久七、羽織着て
久七　一走り行て參りませう。
萬助　オゝ、大儀ぢやなう。
　ト久七、向うへ走り入る。　返し。
元の人形屋になる。上手に葉末、鏡臺に向ひ居る。お時、髪を撫でつけて居る。下手に幸右衞門、莨盆を扣へ居る。合ひ方にて道具とまる。
幸右　以前の人形屋幸右衞門ならば、二百兩や三百兩に、手支へもせぬ身代なれども、これも今更返らぬ繰り言。前生からの約束と、諦めやうより外はないわい。

とき　また其やうな事。葉末さまも、わたしも、よう得心いたして居りますわいなア。
　トしいたりとなる。この時、橋がゝりより。駕籠に腕助を乘せ、舁いで出る。腕助、縛られてあるべし。
駕籠　申し、幸右衞門さま、駕籠、これへ下ろしませうかな。
幸右　オゝ、大儀々々。サ、爰へ〳〵。
駕籠　申し、慥かにお渡し申しましたぞえ。
幸右　サア、よいわい。駄賃も酒手も、先へ渡して置いたれば。
駕籠　左樣なら、もう歸ります。サ、出やんせ。
　ト中より出して
ドリヤ、去んで休まうか。
幸右　オゝ、大儀であつた。
　ト駕籠舁き、捨ぜりふにて入る。
幸右　コレ、爰はおらが内ぢや。マア、此方へ入らつしやれ。
　ト腕助の首筋取つて、内へ抛り込む。腕助、内へ入り葉末を見て、恟りして
腕助　ヤア、われは葉末。

葉末　其方は。

腕助　こりや、ひよんな所へ。

　ト逃げようとするを、幸右衛門門口ピツシヤリ締めて

幸右　そんなら此奴は、御存じでござりまするか。

葉末　東間が家來、奴腕助と云ふ者。

幸右　おのれが慥かにさうであらうと、推量に違はず、敵の手掛り。

腕助　ヤア〱、この下郎めは、其やうな、曇り霞みのあるやうな者ぢやござりません。

幸右　その曇り霞みのない者が、葉末さまが顏見て、ひよんな所とは、どうして吐かした。

腕助　ア丶、云うたかいなア。

幸右　三郎右衛門が身の行くへ、うぬが知り拔いて居らうがな。と斯う云へば角が立つ。ハテ、知らぬなら、知らぬにして

腕助　去なしてくれるか。

幸右　貴樣が去ぬといふ家はあるまいがな。

腕助　ほんにさうぢや。

幸右　コレ、手足伸してゆつくりと、此方で逗留するがよい。

腕助　それは大きに御馳走。

　トばた〱にて、子供大勢出て

子供　コレ、小母さん、大きな喧嘩ぢや〱。

とき　子供衆、どうしたのぢやぞいなう。

幸松　母さん、爰が痛いわいなう。

　トお時、見て吃りして

とき　可哀さうに、誰れが此やうにした。

子供　これは斯うぢや。爰な幸坊が、牛を持つて居たを、京屋の萬さんが、この牛を寄越せと云うたら、幸坊が否ぢやと云ふ。

子供　この牛で幸ぼんの頭をカチと割つたのぢや。

幸松　母さん、痛いわいなう。

とき　可哀さうに〱。

皆々　おいらは知らんぞ〱。

　ト子供皆々、向うへ走り入る。

とき　あの京屋の子は、どうもかうもなる子ぢやない。

　ト云ひ〱此方へ來る。

幸右　何ぢや。どうした〱。

幸松　痛いわいなう。

　ト泣く、幸右衛門見て

幸右　この位の事で、泣くやうな男があるか。わりや、父の子ぢやないか。吠えな〳〵。

幸松　それでも、痛いわいなう。

幸右　其やうな、だゝ泣味噌ぢやと、人が笑ふぞよ。

幸松　そんなら、泣きはしませぬ。

ト この間に腕助、そろ〳〵逃げようとする。幸右衛門繩の端を持つて

幸右　ドツコイ、取逃がしてつまるものか。申し、葉末さまこの奴を奥へ引摺つて行て、押入れへ打込んで置いて下さりませ。

葉末　それでも、どうやら氣味の惡い。

幸右　懷手て羽掻〳〵めに縛り上げて置きましたれば、どうもする事ぢやござりません。

腕助　何ぢや。葉末と一緒ぢや。こりや有り難い。

ト 行かうとする。

幸右　なにさらす。

ト 引付け、首筋取つて納戸へ抛り込む。葉末、繩の先を持ち、後より入る。これにて、幸右衛門、二重へ上がり、莨盆扣へる。お時、幸松を抱き上げ、とも〳〵二重へ上がり、こなしあつて

とき　可哀さうに、此やうに疵つけるといふ事があるものか。

幸右　ハテ、よいわい。

とき　いかに子供同士ぢやとて、あんまりぢや。

幸右　ハテ、もうよいと云ふに。

とき　一體、あの京屋の子は、甘やかしてあるゆゑ、面妖、子供をせぶらかして、揚句の果には此やう。

幸右　子供のせり合ひを、親が取上げ腹立てると、大人氣ない程に。悧り蟲が出やうも知れぬ。ちつとの間、寢さしてやりや。

とき　アイ〳〵。

ト 幸松の頭を撫き、いろ〳〵して、抱いて横になり、添へ乳して居る。合ひ方にて、向うより久七、悄々として出て、門口へ入りかゝるこなしあつて

久七　お宿にお出でなされまするかな。

幸右　ハイ、どれからござりました。

久七　イヤ、私しでござります。

ト 内へ入り、幸右衛門を見て

オヽ、幸右衛門さま、お歸りなされましたか。

ト この間、口立ていろ〳〵の件あり。

幸右　オヽ、京屋のお手代、久七どの。私しも今の先

久七　それは御機嫌よう、お歸りなされ、おめでたう存じまする。

幸右　お前も變り無うて。して、何ぞ用かな。

久七　私しが今日參りましたは、外の事でもござりません。只今私しの所の萬吉さまと、內方の幸松さまと、何かせり合ひなされ、幸松さまの頭を……それゆゑに親達が、大きに案じられまして、私しに參つて、お斷わり申して來いとござりますゆゑ、ちよつと御挨拶に參りましてござりまする。

幸右　これは〳〵御挨拶。どちらも同じやうな頑是なし。怪我といふも珍事ちうようは、いくらもある事でござります。

久七　其やうに仰しやつて下さりますと、却つて迷惑に存じます。

　トこの時、お時、頭を上げ、こなしあつて

とき　申し〳〵、京屋のお手代樣、お前樣の所の子はナ、この伏見中で、いつちどうもならぬ子ぢやぞえ。お前樣の所は、いゝ衆ぢやとて、貧乏人の子を、其やうに、只取つたやうにしておくれなさんなと、わたしが云うて居ると、云うておくれ。アタ阿房らしい。

　ト腹立ち聲にて云ふ。久七、モヂ〳〵して居る。

幸右　これはしたり、何を女の小差出た。默つて居れ。久七どの、其許、お歸りなされて、御念の入つたお人にあづかります。高が子供の惡あがき、必らずお心にかけられなと、よろしう申して下され。

　ト橋がゝりより使ひ出て

使ひ　人形屋幸右衞門さまは、內方でござりまするか。

幸右　ハイ、私しでござります。

使ひ　左樣でござりまするか。私しは言づかつて參りました。小道具屋藤兵衞どのが、追ツつけそれへ行く程に、間違はぬやうにと、仰しやつてござりました。

幸右　すりや、追ツつけ見えまするか。

使ひ　左樣でござりまする。待つてお出でなされませ。私しは、もう歸ります。

　ト云ひ捨て入る。あと幸右衞門、こなしある。鐘鳴る。

幸右　夜半と云うても、僅かのうち。

　ト二人の身の上の事を思ひ、こなしあつて

これとても今云うて今。ムヽ。

トこなし。久七、モジ〳〵して

久七　もう私しは、お暇申しまする。

幸右　久七どの、待たつしやれ。おれが今のやうに云うたを、よい氣で云うたと思はつしやるか。

トきつと云ふ。久七、下に居る。

うぬの所の小倅を、此方の坊主が頭割つたら、今のやうに云うて濟ますかい。よもや濟ましやせまいがな。

久七　それゆゑ二人の親達が、案じられまして、私しに挨拶に行て來いと、申し付けられましたゆゑ、それで此やうに。

幸右　やかましいわい。此方にも思案があると、去んで萬助めに、さう吐かせ。

久七　左樣ではござりますれど、そこをどうぞ御料簡を。

幸右　エヽ、キリ〳〵と去にやがれ。

トきつと云ふ。久七、悔くりして、一散に逃げて入る幸右衞門、久七が入りし跡を見て、思案を極めし思ひ入れ。

幸右　さうぢや。

ト幸松を抱き起し、額の疵を見る。お時、こなしあつて

とき　なんとマア、可哀さうに此やうに。

幸右　幸ひのこの疵。

とき　ひどう痛みはせぬかや。

幸右　コリヤ、坊主よ、わりや人形屋の子ぢやによつて、忠義といふ事知るまいな。

幸松　よう知つて居りまする。

幸右　アノ、われが。

幸松　脇差二本、差いて見たうござりまする。

幸右　出かした。そんならわれも、侍ひになりたいか。

幸松　アイ。

幸右　侍ひにならうと思へば、術ない目せにやならぬぞよ。

幸松　アイ。

幸右　オヽ、よう云うた。父が子ぢや。今侍ひにしてやるワ。ヂツとして、辛抱せい。

ト愁ひ心にて、幸松を小脇にひん抱き、牛を振り上げる。これにて、お時悔りして

とき　お前はこの子を、何としやんすぞいなア。

幸右　倅の命は、色紙の價。

ト振り上げると、留めて

とき　エ……。マア〳〵待つて下さんせ。
幸右　忠義を磨くは
ト牛にて幸松の頭を割る。
爰ぢやわやい。
返し。
また京屋の場になる。矢張り、善八、倒れ居る。これにて道具とまる。
トばた〳〵にて、腕助、縛られたまゝ走り來て、善八に爪づく。これにて善八、氣が付き、起き上がりて
善八　ヤレ〳〵、えらい目に出合うた。
ト腕助、善八を見て
腕助　わりや善八ぢやないか。
善八　善八も益體ぢや。金に切れが出來た……貴樣は腕助ではないか。貴樣も人に物を云ふのに、懷手で云ふことがあるものか。
腕助　なに吐かすぞい。聞いてくれ。何か幸右衞門に出ツくはして、たうとう縛られた。所で、折を考へ、裏から逃げて來た。この繩を解いてくれんか。
善八　おりや手が放されぬ。また貴樣に話しがある。コリヤ
ト囁く。
腕助　すりや、この家に、源次郎が
善八　シイ。
ト押へる。
善八　まだ話しもあれば
腕助　何かは、裏の細合ひで
善八　云うたり。
腕助　聞いたり。
善八　矢ツ張り貴樣は其まゝで
腕助　うですの懷手。
善八　サア、來なさい。
腕助　參りませう。
善八　オヽ、アツ、。
ト合ひ方になり、兩人、奧へ入ると、向うより、バタバタにて、久七、一散に走り戻つて、吐息つく。この時奧より、萬助、お徳、嘉介、佐兵衞、出て
久七　旦那樣。
萬助　どうぢや〳〵。料簡して下さつたか。
久七　どうの斯うのと、一向益體ぢや。

皆々　どうぢや。

久七　何か、段々詫び言したれば、始めの程はよかつたが、中程から風が變つて來て、一向亂騷ぎでござりまする。

とく　さうして、どうぢや／＼。

久七　サア、それから何を云うても聞入れず、其方の子の頭割つたらよいか。料簡するかと云うて。

萬助　こりや、云ひさうなものぢや。

皆々　して、どうぢや／＼。

久七　この通りを、內へ去んで萬助めに吐かせと、大腹立ちでござります。

萬助　何が、元は侍ひの幸右衞門どの、此まゝに斷わりばかりでは濟まぬ。コリヤ、長松よ、その肴を、臺に乘せて、持つて來い。

長松　オイ／＼。

ト大きな鯛二枚、臺に乘せ、持ち出る。この間にお德卷き物を包む。

とく　この卷き物を持つて行きや。

萬助　時に、此まゝでは惡い。わしの上下を取つて來い。

嘉介　畏まりました。

ト嘉介、上下を取つて來る。

萬助　久七、大儀ながら、この上下を着て、この品を持つて、ま一度行てたも。

久七　畏まりました。今度は嘉介どの、佐兵衞どのも來てたも。

ト捨ぜりふ云ひ／＼、上下を着る。嘉介、佐兵衞、卷き物と肴を兩人持つて

三人　そんなら旦那さま、參じまする。

ト三人連れ立ち、捨ぜりふ云ひ／＼、向うへ入る。萬助、お德、跡を見て

萬助　お德。

とく　旦那どん。

萬助　子を持つと、これが嫌ぢや。

ト兩人ベツタリ、二重へ腰掛ける。

返し。

また元の人形屋へ戻る。幸松の側でお時、蒲團着せて泣いて居る。二重眞中に、幸右衞門、キツとなつて居る。この見得にて道具とまる。

ト向うより久七、嘉介、佐兵衞、右の品を持つて出て門口へ來て、入らうとして、幸右衞門を見て、氣味の

悪いこなしにて、互ひに後じさりして、トゞ久七、思
ひ切つて

久七 へ、、、。ハ、、、、。
ト云ひ〳〵、内へ入り、兩手を突き
また參りましてござりまする。さて歸りまして、主人萬
助に申し聞かせましたが、御立腹の段御尤も。この儀は
幾重にも、お斷わり申して參れと。
ト嘉介、佐兵衞に、その品を早う、幸右衞門の側へ持
つて行けと仕方する。これにて兩人、怖々幸右衞門の
前へ持つて行く。久七、おれが側に引ッ附いて居てく
れといふこなし。慄へ〳〵
この品は、麁末なる物なれど、坊さんにお上げなされて
下さりませ……コリヤ、わいらも共々に、お詫び申さん
か。
トこれにて兩人、怖々手をつかへ

嘉助 お腹立ちでもござりませうけれども、子供同士と思
し召されて

佐兵 どうぞ御料簡下さりませうならば

三人 有り難う存じます。
ト三人、頭を下げ詫びする。この時、幸右衞門キッと
なつて、蒲團を捲くり

幸右 この疵を見居らう。

久七 へイ〳〵。坊さん、定めし痛うござりませう。
ト云ひ〳〵、側へ行き、見て惘り。

三人 ヤア、こりやア
ト三人、慄へて居る。幸右衞門、こなしあつて

幸右 追ッつけ息を引取る悴。

三人 エ、。

幸右 これまでは、伏見の職人、人形屋幸右衞門。
ト大小、取つて差し
大小挾み、元の武士に立返つた。これより萬助宅へ參つ
て、悴が下手人、取らにや置かん。

三人 エ、。

幸右 いま其方へ踏み込んで、悴めを眞ッ二ツ。よく暇乞
ひして置けと、萬助夫婦に云ひ聞かせよ。いま〳〵しい
この進物。キリ〳〵持つて歸り居らう。
ト進物を足にて蹴る。これにて三人あわてゝ一散に向
うへ逃げて入る。幸右衞門こなしあつて

幸右 女房ども、おれが嗜みの紋付き、袴、よもや内には
あるまい。

とき　何から何まで賣り代なせど、御主人樣の、拜領ばかりは。

幸右　殘してあるか。

とき　ハイ。

幸右　それ出してたも。

とき　ハイ。

ト泣き〳〵、葛籠より着付け袴を出し、幸右衛門に着せる。幸右衛門よろしくあつて

幸右　今宵といふ今宵、久し振りで、昔に返る幸右衛門。

とき　そんならお前は、京屋へ行て

幸右　思ふ坪へ落ちれば重疊。

とき　もし行かぬ時は

幸右　是非に及ばぬ。絶體絶命。

とき　エ、。

幸右　何も案じる事はない。

とき　隨分、首尾よう。

幸右　行て來るぞや。

ト向うへ行きかける。また向うより久七、引返し走り來て、幸右衛門が血相を見て、恐れながら、共にチリチリ、跡じさりして戻る。お時は幸松に取りついてこなし。幸右衛門、戸屋へ入ると、ぶん廻す。

返し。

また京屋になる。バタ〳〵にて、嘉介、佐兵衛、逃げて戻り、ウロ〳〵して居ると、直ぐに向うより、久七、後じさりして出る。幸右衛門出て、本舞臺へ來る。合ひ方。

幸右　主萬助、どれにお居やる。幸右衛門、御意得に參つた。キリ〳〵出さつしやい。

トこの時、納戸の内にて

萬助　萬助それへ參つて、お目にかゝりませう。

ト萬助、着付け、羽織にて出る。

これは幸右衛門どの、變る事もなうて、めでたい〳〵。

幸右　その挨拶はいつでも相成る。仔細具さに云ふに及ばぬ。悴萬吉とやら、これへ出さつしやれ。

萬助　サア〳〵、その御立腹は、申さうやうもござりませぬ。子持つた者は相互ひ。

幸右　默らつしやれ。

萬助　推量は致して居りまする。殊に手前の悴は、義理ある奴で

天保六年七月中村座所演　坂東彥三郎の幸右衞門

坂東三津五郎の萬助　小佐川常世のおとく

幸右　默れ。
萬助　忰を下手人にお取りなされたとて、幸松どのゝお爲にも相成らず、そこを御料簡下されば、善根功德にも相成りますれば
幸右　默れ。
萬助　どうぞ、お聞入れ下さりまして
幸右　默らう、此奴、云はせて置けば、ずばら〳〵と、素町人の魂に引くらべ、善根功德望みにない。浪人なれども鵤幸右衛門、今まで通りの土人形の、職人と思うたら當が違ふ。コリヤ、この刀が目に見えぬか。何を馬鹿な。
萬助　すりや、こなさんが、鵤幸右衛門どのか。
幸右　如何にも。
萬助　アノ、こなさんが……ハテナア。
幸右　以前は錆鎗の一筋も突かせたる幸右衛門。うぬら風情の子忰に、我が子の面體へ疵を受け、武士が相立たうか。下手人の忰相渡すか、但し踏ん込み、搔き首にせうか。
萬助　サア。
幸右　サア〳〵、返事はド、どうだ……ムウ、それ。

ト奥へ行かうとするを、萬助、よろしく留めて
萬助　成る程、下手人、お渡し申しませう。
幸右　ヤア、。
萬助　マア、待たつしやれ。この萬助を切らつしやれ。
幸右　なんと。
萬助　右申す通り、義理あるあの忰萬吉。サア、忰が代りに、この萬助を、切るなりと突くなりともして、こなさんの武士道を立てゝ下され。
ト萬助、思ひ切つたるこなしにて云ふ。
幸右　ムウ。
ト思案のこなしあつて
斯く大小差せば、浪人鵤幸右衛門。
ト大小を抜き、前に置いて
萬助どの、扱はつしやれ。
萬助　なんと云はつしやる。
ト合ひ方。
幸右　さればサ、いま兩腰を投げ出せば、伏見の町人、人形屋幸右衛門、忰が疵の養生代、扱かうて濟ましませう。
トこれにて、萬助、久七、皆々、顏見合せ、嬉しき思

ひ入れ。
萬助　すりや、扱ひにて、お濟まし下さるとな。コリヤ、久七。
久七　ヘイ〱。
萬助　奥のおれが革文庫を取つて來い。
久七　ヘイ〱。
ト久七、奥へ入る。
皆々　エヽ、有り難うござります。
ト皆々喜ぶ。この間に久七、文庫を取つて來る。
久七　これでござりまするか。
ト萬助の側へ置く。萬助、文庫の中より、百兩包み十ばかり出して、幸右衛門の側へ並べ
萬助　僅かなこの金子、御子息幸松どのゝ養生代、入用ならば如何ほどでも。マア、これをお取りなされて下さりませ。
ト幸右衛門、氣の毒なこなしにて、千兩のうち二百兩取つて
幸右　これは〱、其やうに、澤山には要りませぬ。金の入用は二百兩。左樣ならば此うちを、申し兼ねたが二包み。

萬助　左樣でござれども、これは矢張り、お納めなされてまだ御入用ならば、如何ほどなりとも。
久七　左樣でござりまする。旦那樣が氣休めでござりますれば、矢張りお納めなされて下さりませ。
ト八百兩を又、幸右衛門の側へ突きやる。これにて幸右衛門、迷惑なこなしにて
幸右　滅相な。この儀は平に。
ト突き戻す。
萬助　左やう仰しやる事なら、そんなら六百兩お取りなされて下さりませ。
幸右　益體もない。
萬助　そんなら、せめて五百兩。
幸右　眞平御免下され。
萬助　其やうに仰せなれば、お心任せになされませ。
幸右　お手代衆、ちよつとお硯を。
嘉介　畏まりました。
ト硯箱を幸右衛門の側へ持つて行く。幸右衛門、半紙にサラ〱と證文を認め
幸右　これお取りなされて下されい。
ト證文を、萬助の前へ置く。萬助、取上げ見て

萬助　こりやコレ、金の預かり一札、此やうな物取つては。

幸右　仔細あつて手詰めの金子、是非に及ばず斯くの仕合せ。非道でないといふ拙者が潔白。二百金に利足を添へ重ねてキツと、返濟いたす。

ト證文を萬助に渡す。

萬助　お預かり申すもお氣休め。

皆々　有り難う存じまする。

ト證文を久七に渡す。久七取つて奥へ入る。

幸右　イヤナニ、萬助どの、大金の借用、過分に存する。何かと心も急きますれば、最早拙者はお暇申す。忝なう存ずる。

ト金を懐へ入れ、大小差し、向うへ行きかける。この時、萬助、こなしあつて

萬助　幸右衛門どの、待たつしやれ。

幸右　用事がござるか。

萬助　こなた様、金子より外にまだ、受取つて歸らねば、ならぬ品がござらうがな。

幸右　何と云はつしやる。

萬助　女房ども、その客人を、これへお伴ひ申しや。

とく　畏まりました。サア、お越しなされませう。

ト　お徳、源次郎を、伴ひ出る。これにて幸右衛門、源次郎を見て

幸右　この若者は。

萬助　早瀬玄蕃頭どのの御子息、伊織さまの御舎弟、源次郎さま。

ト　つか〱と戻り、源次郎の、顔を、つく〱と見て

幸右　ナニ、若旦那……誠に御兄弟とて、兄伊織さまに生寫し。私し事は御家來、鵤幸右衛門めでござります。五ケ年がその間、お二方様の御在所を、尋ね廻りし千辛萬苦、その甲斐あつて今月今宵。

源次　主從初めて、優曇華の

幸右　花、待ち得たる御對面。

源次　すりや、其方が、鵤幸右衛門であつたか。

幸右　源次郎さま。

源次　なつかしかつたわいなう。

幸右　よくも御無事で、ござつて下さりましたなア。

とく　幸右衛門どのには、源次郎さまにお逢ひなされ、さぞお嬉しうござりませうがな。

幸右　早速ながら、お尋ね申しあげたきは、御舍兄伊織さまには、いづれにお出でなされまする。
源次　その兄上には。
幸右　いづれにお出でござりまする。
源次　一昨夜、大坂福島天神の森にて
幸右　なんと仰しやる。
源次　家來元右衞門が手にかゝつて、敢へなき御最期。
　ト幸右衞門聞いて、大悧り。
幸右　エ、／＼。御主君といひ、伊織さままで、人手にかけたる元右衞門。重ね／＼憎くい奴。
　ト向うを見て、キツとなる。
源次　某とても危ふい所を、この家の萬助に助けられ、夫婦の衆が心遣ひ。
幸右　かゝる事とは露聊か、存ぜぬ事とて、無禮過言、眞平御免下されい。
　ト手を突き、こなしある。源次郎、懷中より狀を取出し。
源次　國元を出立の砌り、母が與へし、この書面。幸右衞門に巡り逢はゞ、この遺書を渡せとある、くれ／＼の仰せ。
　ト差出す。幸右衞門、取つて
幸右　ナニ、奥樣の御遺書とな。
　ト開き見て、口の中にて、讀み
幸右　鵤幸右衞門どのへ、操より‥‥この遺書を見るにつけ、御在世の折からの御恩、今更思ひ出されて、エ、勿體ない。
萬助　奥樣の御遺書といひ、源次郎さまを、幸右衞門さまにお手渡しすれば、萬助が心の安堵‥‥して、幸右衞門どのには、敵の手掛りでもござりますか。
幸右　いま源次郎さまの御意なされし、伊織さまの御最期の、場所も月日も同じ日に、思はず捕へし敵の下郎、腕助と申す奴、何か怪しく存ぜしゆゑ、引立て歸りしところ、風を喰つて取逃がせしは、近頃以て殘念至極。
　トこの時、バタ／＼にて、奥より久七、腕助を引立て出て
久七　何か胡亂な奴。裏をうろつく所を引ツ捕へて參りました。
源次　これこそ、東間が下郎腕助。
萬助　そんならこの奴も敵の片割れ。
幸右　如何にも／＼。うぬ、いつの間にこの家へは。

腕介　最前、折を見て逃げて出て、この内へ來ても、矢ツ張り此ざま。
トバタ〳〵にて、奥より長松出て
長松　申し〳〵、お家さん、お染さまに產氣が附いて、亂騷ぎでござりまする。
萬助　それ、大事の御身。ちやつと奥へ〳〵。
とく　合點でござんす。
トお德、奥へ入る。
幸右　さては染の非さまにも御安泰とな。
ト思ひ入れ。
萬助　コリヤ、久七、其奴を責めて、敵の在所。何もかも云はせてしまへ。
久七　畏まりました。
ト腕助を前へ出し、棒を持ち、幸右衛門も責める。
コリヤ、嘉介佐兵衛、わいらも、手傳へ。
嘉佐　合點ぢや。
久七　サア、斯うなつたら叶はぬ。何もかも
兩人　云うてしまへ。
腕助　そんな事は、おりや知らぬ。
久七　吐かさぬな。云はぬか。サア、斯うして。
ト三人して叩く。
腕助　ア、云ふ〳〵。
三人　キリ〳〵吐かせ。
腕助　斯う取卷かれたら、どうで云はすであらう。この間大坂福島の、天神の森にて伊織めを……イヤサ、伊織さまを返り討にしたも、東間どの。その砌り、伊織が飛びかゝり、右の肩先を一太刀、切りつけなされてござります。
幸右　して、敵三郎右衛門が在所は。
腕助　これも次手に云うてしまはう。その三郎右衛門どのは、坂本の大老、大江どのへ取入り、今の名は、伊藤將監といふ。なんど明白なものか。
久七　オ、よう吐かした。
源次　すりや、敵東間三郎右衛門は
萬助　伊藤將監と名を替へ
幸右　坂本の城中に
皆々　忍び居るとな。
トバタ〳〵にて、藤兵衛、色紙の箱を持ち出て
藤兵　オヽ、幸右衛門どの、こなたの内へ行たところが、爰へ來てござるとあるゆゑ、それゆゑ爰まで。

幸右　オヽ、藤兵衞どの、待ち兼ねた。約束の色紙は。
藤兵　即ち爰に。
ト幸右衞門に渡す。
幸右　イザ、源次郎さま。
ト源次郎へ渡す。源次郎改めて見て
源次　誠に貫之の色紙。エヽ、忝ない。
幸右　ソレ、代金、二百兩。
藤兵　忝ない。
トいそ／＼入る。バタ／＼にて、お時、幸松を抱き、葉末、諸とも走り出る。
久七　こなたは幸右衞門どのゝお内儀。
嘉佐　お時どの。
とき　幸右衞門どの、お前の跡を慕うて。
幸右　女房喜べ。寶も手に入り。敵の在所も相知れたぞ。
萬助　即ち源次郎さまもこれに。
ト葉末を見て
葉末　源次郎さま、お懐かしうござります。
源次　こなたは、葉末どの。
幸右　敵の在所知る上は、片時も猶豫すべきにあらず。
源次　色紙手に入る上からは、親の敵、兄の仇。

幸右　追ツつけ討つて、未來の妄執。
源次　晴らすは、やがて
幸右　エヽ、喜ばしや
源次　嬉しやなア。
とき　コレ、こちの人、可哀や幸松が
幸右　今が最期か。
とき　ハアヽ。
ト泣き落す、内にて赤子の笛。
久七　そりやこそ、産れた。
萬助　歎きの中の、お喜び。
幸右　エヽ、忝ない。伊織さまの忘れ形見、平産ならばお家の礎。悴が一命は元より覺悟。女房泣くな、悲しむな。
とき　現在我が子を、手にかけて
幸右　殺すは家來の討死同然。
トちよつと愁ひのこなし。氣を替へて
幸右　ヤア、吠えなと云ふに。
とき　ハイ／＼。
ト泣く。この時、奥より、お德、赤子を抱き出て
とく　申し、お喜びなされませ。玉のやうな男のお子でご

ざりまする。
幸右　ナニ、御男子とな。
　ト ちよつと見て
眼中成あつて、天帝開き、ハテ、よいお子だなア。
　ト 餘念なきこなし。
久七　して、この奴を一思ひに。
幸右　イヤ、其まゝ生け置き、敵の犬。
萬助　ハテ、命冥加な
腕介　おれ樣ぢやなア。
　ト 七ツの鐘。
とく　あの鐘は、はや七ツ。
幸右　明くれば元日、年の始め。
源次　月の始め、日の始め。
萬助　勢ひを增す、寅の一天。
幸右　此まゝ發足。
源次　おさらば。
　ト 内にて
老戎、若戎。
　ト てんどん〳〵の唄になつて、橋がゝりより、禮者出て
禮者　樫木屋勝右衛門、お禮申しまする。
嘉佐　忝なうござりまする。
　ト 禮者入る。
萬助　禮者の名前も
久七　時の吉左右。
幸右　敵に勝つとは、起緣もよし。
源次　直さまこれより。
幸右　イザ、お越しなされませう。
　ト お德、葉末、三方に、熨斗昆布、蓬萊を持ち出て
とく　申し、敵に勝栗。
萬葉　熨斗昆布。
　ト 差出す。源次郎、幸右衛門取つて
源幸　こりや、出來た。
皆々　左やうなれば、幸右衛門どの。
源次　めでたく出立。
皆々　御兩所さま。
幸右　何れも永日。
皆々　ト 幸右衛門、膝を叩く。チヨンと木の頭。
　御意得ませう。
　ト 皆々、辭儀する。引張り。

よろしく　　　　幕。

大切

坂本城内の場
天下茶屋仇討の場

役名——片岡造酒頭春元。大江入道東元。三浦之助義村。早瀬源次郎。鵜幸右衛門。伊織妻、染の井。源次郎妻、葉末。坂田庄三郎。川田郷介。細川林蔵。柾木主税。荒川権蔵。大村丹下。内田忠太。坂間大助。伊藤将監實ハ東間三郎右衛門。

造り物、高二重、欄間通り半御簾。東西も御簾屋體この前、青竹にて手摺り、舞臺一面、櫻の吊り枝、見事。この二重の上手に、大江入道、着付け、長絹長袴にて、合ひ引にかゝり、次に、片岡造酒頭、着附け素袍大紋にて、立て烏帽子、同じく合ひ引にかかり、平舞臺上手に、権蔵、丹下、下手に、忠太、大助、皆々、着附け上下にて扣へる。皷入り、角力の合ひ方にて幕明く。

ト平舞臺の眞中に、郷介、林蔵の兩人、着附け上下、股立ちを取上げ、角力取つて居る。行司は主税、着附け上下、股立ち取り唐團扇を持ち、エイ〱掛け聲にて、よろしくあつて、林蔵と團扇を上げる。林蔵、郷介こなしあつて。

林蔵　これは不調法、仕りました。

郷介　これは御挨拶。

ト兩人、辭儀して、双方へ扣へる。主税、こなしあつて

主税　次は荒川権蔵、内田忠蔵どの、立合ひ召され。

忠蔵　イヤ〱、権蔵どのは、なか〱。この儀は御免下されい。

権蔵　左やう仰せられな。角力は又、格別なものでござる。

忠蔵　然らば、お立會ひ申さうか。

権蔵　お相手に成り申さうか。

ト兩人よろしく身拵らへして、双方より眞中へ出て造酒頭、入道にちよつと目禮して立合ふ。これより兩人、いろ〱角力の手事あつて、権蔵を投げる。主税、忠蔵へ團扇を上げる。双方別れ、扣へる。

林大　また東の方が勝になりました。

入道　造酒頭どの、貴殿の組下は、けうといもの。自慢さつしやれ。

トこの間、入道、いろ〳〵こなし。

造酒　これは〳〵入道どの、御挨拶にあづかります。

入道　この上は、身が召抱へし新参の、伊藤將監をこれへ呼び出して、今一勝負。ソレ、呼び出し召され。

ト丹下、向うへ出て

丹下　ハツ……、伊藤將監、早く御前へ。

三郎　ヘ、ア……。

ト誂らへの鳴り物にて、向うより三郎右衞門、着付け上下にて出て、花道よき所に留まる。

お召しに依つて伊藤將監、罷り出でましてござります。して御用の儀はな。

入道　將監、待ち兼ねた。苦しうない、近う〳〵。

三郎　ハツ。何れも、御免下さりませう。

ト矢張り右の鳴り物にて、本舞臺へ來て、よき所に扣へる。造酒頭見て

造酒　すりや、其方が、伊藤將監とな。

三郎　大江どのゝ、お見出しにあづかりました、伊藤將監めでござりまする。

造酒　ハテ、將監ぢやよなア。

トこなしある。序の舞になり

入道　いま太平の御代と申せども、京鎌倉と別れござれば、いつ何時が知れませぬ。そこを存じて、よき味方、一人なりとも存じ、鎗術の達人たる伊藤將監、召抱へ置きました。

三郎　イヤモウ、斯樣申せば異なものなれども、日本廣しと雖も、鎗術ばかりでござらぬ、武藝一通りに於ては、身共に楯突く者一人もござらぬ。そこを御存じあつて、大老たる大江どののお呼出しは、この身の大慶と申すものでござる。ナウ、いづれも。

鄉介　左やう〳〵。この坂本の城中にも、相手になる者、一人もござらぬ。

權藏　イヤ〳〵、坂本ばかりでない、日本國、イヤ〳〵、唐天竺にもマアござるまい。

丹下　三國無双の將監どの。

三郎　これは何れも、知れたる事を、御意なさらぬがよい。へ、、、、。

造酒　驚き入つたる伊藤將監、人は一言で敵を取ひしぐ。今の一言、大老入道には、よい御家來を持たれたなア。

入道　これは〳〵、御挨拶にあづかりまする。某が家來には、ちと過ぎた將監でござるてや。
三郎　鎗術劍術の外、何に依らず、お望みならば、どなたなりども、お相手になりませうか。
　トうかめたこなし。造酒頭もこなしあつて
造酒　ナニサマ、この上は、力量を試すには、この座に於て角力の勝負。大江どの、如何でござる。
入道　角力よからう。最前より此方が組下、恥辱を取つたるゆゑ、呼び出したる將監。
造酒　すりや、大老職にも、心に叶ひましたかな。
入道　ずんと叶ひました。將監、早く角力の用意いたせ。
敵役　早く〳〵。
三郎　イヤ、その儀は拙者
　ト腕の疵にて取られぬと、入道の方へ仕方する。入道、成る程と思ひ出し、呑み込んだるこなしにて
入道　ムウ、成る程、成る程、こりや將監が辭退は尤も。
造酒　なぜ〳〵。
入道　ハテ、鎗術劍術の勝負とは違ひ、何ぞや一人に敵たふ角力は。
造酒　イヤ〳〵、力試しの角力も即ち、武術の一つ。
入道　ぢやと、云つて。
造酒　たつた今、其方の組下の仰せには、三國無双と、自慢の御家來。その上、將監が詞、劍術の外、何によらず相手にならうと、云うたは虛言か。
三郎　何しに以て。
造酒　然らば、角力に立合ふか。
三郎　サア。
造酒　サア。
二人　サア〳〵〳〵。
造酒　將監、なんと。
　トきつと云ふ。東間、せう事がないといふこなしあつて、入道と顏見合せ。
三郎　せう事がない。お望みあらば兎も角も。角力の相手は、お組下かな。
造酒　その相手は。
　ト組下の諸士を見る。これにて、三人、跡へ寄る。
立役　イヤ、なか〳〵、我れ〳〵は。
造酒　然らば、其方の相手は、何者に致さう。
　トこの時向うより
庄三　いづれも暫らく。力試しの角力の相手。これに扣へ

居るぞ。

三郎　ナニ、角力の相手と、聲を掛けしは

六人　何者なるぞ。

庄三　當家の郎等、坂田庄三郎。それまで推參、御免下されい。

ト花やかなる合ひ方にて、庄三郎、着付け上下、凜々しき形にて、ツカ〳〵と出て、花道よき所にて、下に居る。三郎右衞門、思ひ入れあつて

三郎　相手は坂田庄三郎とな。

ト庄三郎を見て、どうやら、見たと思ふこなし。

どうやら、其方は。

トこれにて、庄三郎、三郎右衞門を見て

庄三　こなたも、どうやら。

三郎　いつぞや津の國天王寺。

庄三　西門通りに於いて

三郎　互ひに出會うた、浪人者

庄三　すりや、その時の浪人は

三郎　其方であつたか。

庄三　こなたであつたか。

トちよつと兩人、氣味合ひあつて

兩人　ハテナア。

ト庄三郎、こなしあつて。

庄三　何は兎もあれ某は、生れついた角力好き。力業ならまつかせと、何でも相手はえゝ嫌はぬ、四十八手の裏表、九十六手を、揃へた腕骨、摩利支天でも、仁王でも、一番捻つてお目にかけう。

立役　庄三郎どのには、先づ〳〵これへ。

庄三　いづれも御免。

ト矢張り。右の鳴り物にて、本舞臺へ來る。よき所にて、下に居る。造酒頭こなしあつて

片岡　庄三郎、大儀々々、……將監、角力、承知であらう。

三郎　辭退は一旦。お望みとあらば。

造酒　この角力に勝を取らば、武藝は日本一の勇士。

入道　その時こそは、御母公宇治の御方さまへ、この入道が、目見得取次ぎ致してくれう。

三郎　有り難う存じ奉りまする。

トちよつとこなし、あつて

イザ、此まゝに。

主税　イヤ角力の勝負に其まゝは、如何。貴人の前でも、角力は裸身、御免なるぞ。

三郎　イヤ、すは戰場の組討に、鎧兜を脱ぎ捨てませう
か。角力とても武道の一つ。
敵役　これも御尤も。
庄三　投げられても、痛うない用心か。
立役　これも尤も。
庄三　然らば身共は、此まゝにて。
ト大肌脱ぎ、身拵らへする。
主税　行司は矢ツ張り、この柾木主税。
兩人　御苦勞、千萬……イザ、參らうか。
ト双方、二重へ目禮あつて、眞中に直り、ヤッと云う
て、庄三郎は突き掛るを、三郎右衞門、こなしあつて
三郎　ハテ急きやるな。存分に先を取らすわい。
トこれにて、主税、團扇を取る。
主税　片や、伊藤將監。こなた坂田庄三郎、……互ひに面
を見合して、卑怯せまいぞ。
庄三　サア／＼。
主税　エイ。
ト團扇を引く。白雉子にて、兩人、いろ／＼角力の手
事あるべし。
敵役　ソレ、將監どの、そこぢや／＼。

立役　庄三郎どの、ぬかるまいぞ。
庄三　こりや思ひの外、實があるわい。
三郎　ハレ、餘程の力量。
庄三　コリヤ／＼。
ト押して行く。
敵役　ドッコイ、殘つた。
立役　ソレ、後がない／＼。
ト兩人、いろ／＼、揉み合ひあつて、トゞ、庄三郎、
東間の腕の疵を見ようとする。見せまいとする仕組み
にて、程よく東間が右の腕を捲り、疵を見て
庄三　この疵は。
三郎　なにを。
ト庄三郎、疵見る途端に、東間、庄三郎を見事に、投
げる。三郎右衞門に團扇上がる。
三郎　この通り、何でもない。
トうかめたこなしにて扣へる。
敵役　見事々々。
入道　天晴れ弓取り。オヽ、出かした／＼。
ト皆々譽める。庄三郎こなし。
庄三　エヽ、いま／＼しい。マア今一度。

ト行かうと、かゝるを、主税、押へて

主税　コリヤ、勝つも負くるも時の運。

庄三　ぢやと申して。

主税　行司の詞、反古にするか。

庄三　エ、、けたいの悪るい。

ト下に居て、手を組み、思案する。東間、衣紋直して

三郎　この上は、御母公宇治の方さまへ、お目見得の程、願ひ奉りまする。

入道　成る程、何かと秀でし伊藤将監、お目見得いたさせいでならうか。片岡どの、イヤ造酒頭どの、見られたる将監が力量、もう申し分はござるまい。……イザ将監、諸士の方々、これより御前へ。

三郎　先づ、ござりませう。

ト唄になり、入道の後より、三郎右衛門、敵役三人、こなしあつて、奥へ入る。後に、造酒頭、庄三郎、立役の諸士残る。矢張り、庄三郎俯向き居る。造酒頭、こなしあつて下へ降り、庄三郎の側へ行く。

造酒　コリヤ、坂田庄三郎、今のは何ぢや、何の態ぢや。力自慢に名乗り出て、諸士の満座の中にて、将監に勝を取られては、いよ〳〵募る大江の入道。其方ばかりの恥と思ふか。この片岡が恥辱と相成るわい。うぬがやうな奴は、カウ〳〵。

ト扇にて、てう〳〵と叩き

云はうやうなき、コナ、うぢ虫めが。以後の見せしめ。まツかう。

ト眉間を割る。血流れる。庄三郎ヂツとなつて、こなし。

斯様な奴は、見るもなか〳〵穢らはしい。何れも、下城仕りませうか。

四人　左やう仕りませう。

造酒　然らば何れも、主税。

主税　造酒頭さま。

造酒　お先へ参る。

四人　先づ〳〵。

ト序の舞になり、造酒頭先に、後より皆々付き添ひ、向ふへ入る。庄三郎は、額を押へて血を流れるを見て、無念のこなしあつて、向うを見て

庄三　チエ、…日頃から、出頭を鼻にかけ、出る儘の悪口雑言。その上に扇にて打ち打擲。武士たる者の面體に疵まで受けるのみならず、恥辱を與へし造酒頭、此まゝ

に置かうか。
ト身繕ひして
ソレ。
ト向うへ駈け出す。この前より、三郎右衛門、出かけ
居て、この時、聲をかけ
三郎　庄三郎、いづくへ參る。
庄三　ハテ、知れた事。片岡に追ツついて
三郎　討取る所存か。
庄三　云ふにや及ぶ。
三郎　イヤ、彼れを討取る時節があるぞ。
庄三　なんと。
三郎　待てと云はゞ、マア／＼待て。
庄三　チエ、。
トこなしあつて、後へ戻り
いま討取るべき片岡を止めしは。
三郎　誠討取る所存ならば、一味いたせ。
庄三　なんと。
三郎　其方が魂ひ、見拔きし上は、我が所存云ひ聞かせん
先達て、岡船岸之頭と心を合せ、浮田家を押領せんと計
りしに、事成らずして玄番頭に見現はされ、やむ事を得
ず、玄番を討取り、立退く某。然るにこの度、大江の入
道どのに取入りしは、折を窺ひ、京鎌倉を討取り、四海
を押領せん我が計らひ。その時こそは、貴殿の恨み晴ら
させてくれん。
庄三　して、貴殿の本名は。
三郎　伊藤將監とは假の名．本名は浮田家に仕へし時は、
東間三郎右衛門。
庄三　ホ、オ、その心底を聞く上は、某も貴殿と心を合せ
三郎　京鎌倉を討取り
庄三　六十餘州を手に握り
三郎　四海に威名を輝がさん。さりながら
庄三　謀り事は、密なるを尊ぶ
三郎　事成就までは
兩人　隱密々々。
庄三　我れはこれより何かの手配り。
三郎　必らずぬかりなきやう。
庄三　心得た。
三郎　ござれ。
庄三　合點ぢや。
ト早き舞になり、庄三郎、一散に向うへ入る。三郎右

衛門、後を見送りて、こなし。

三郎　これも、よし〳〵。

ト よろしく、巧いといふ思ひ入れ。合ひ方になり、上手より、三浦之助義村、好みの上下衣裳、三方の上に御書を載せ出で來り

義村　伊藤將監、これにござつたか。

三郎　あなたは三浦之助義村さま。

義村　其方が武勇の程、上にもお聞き及びあつて、殊の外の御喜び。さるに依つて新參の奉公始めに、住吉へ奉幣祈念の御役目、申し附くるとある、御母公よりの祈念の御書。イザ、頂戴いたされてよかろう。

三郎　すりや、拙者めに、住吉社參の儀を、仰せ付けられまするとな。ハツ、有り難く御書頂戴仕るでござりませう。

ト 御書を受取り、懷中する。この時、奥より、大江入道、諸士三人附き、出で來り

入道　伊藤將監、さぞ滿足であらうな。

三郎　ハ、ツ、この身の面目、諸士方への外聞、旁々大慶に存じまする。

義村　これと申すも、大江公のお執成し、疎かに思はれな。

三郎　いつの世にかはこの御恩、忘却仕りませう。

入道　御書到來の上からは、少しも早く、社參の用意を。

三郎　委細承知奉る。

入道　身も屋敷まで同道なさん。

三郎　お供いたすでござりませう。

諸士　我れ〳〵どもゝ、路次の警衞。

入道　然らば歸館いたさうわえ……三浦どの。

義村　大江公には、先づ〳〵。

入道　然らば將監。

三郎　御同伴仕りまする。

入道　ドリヤ、參らうわい。

ト 唄になり、入道先に將監、諸士附いて向うへ入る。義村、後を見送り

義村　泰山を脇挾んで、北海を越ゆるの大望、なんぞ天道ゆるし給はん。既に伊藤が積惡顯はれ、片岡どのゝ計らひにて、住吉への社參の役は、忠孝全き早瀨が本望。さぞ滿足にあらうわい。

ト よろしくこなし。この時、下手より、侍ひ一人出で來り

侍ひ　申し上げまする、片岡さまには、最早お出であられますれば、三浦さまも早々場所へ、お越しあるやうとの儀でござりまする。
　ト引返し入る。
義村　ナニ、最早造酒頭どの、お越しとあれば、早馬にて道を急がん。
　ト下手へ向ひ
三浦が家來、馬曳け。
　ト下手にて
大勢　ハア、。
　ト轡の音する。
義村　心も勇む
　ト立上がるを、知らせ。
幸先ぢやなア。
　トこの見得よろしく、淺黄幕を、振り落す。
幕外、大坂放れての唄になり、左右より仕出し、出る事。
　造り物、向う淺黄幕、眞中に、松の大木、但し、この木へ人登る事あり、この松の兩脇、芦原、松の吊り枝、見事にあるべし。すべて、住吉海道、松原の體、所知入りにて道具とまる。
　ト上手より、乘り物一挺、供廻り大勢付添ひ出る。この時、下手より幸右衞門、着付け、輕衫にて出で、乘物見付け、小腰を屈め
幸右　お乘り物暫らく、お待ち下さりませう。
侍ひ　ヤア、御主人樣のお乘り物を止めしは、狼藉いたすか。
　トきつとなる。幸右衞門、こなしあつて
幸右　全く狼藉は仕らぬ。それへ渡らせらるゝは、三浦之助義村どのと見受けしゆゑ、お目見得旁々、唯一言。
侍ひ　今日は住吉御社參の御供先。叶はぬ〳〵。
幸右　所を、推して。
侍ひ　妨げいたす狼藉者。いづれも。
中間　ハア、……キリ〳〵立たう。
　ト中間二人、双方より幸右衞門を引立てにかゝる。
幸右　譬へ五體は碎かれても、拙者が、胸中に存ずる仔細申しあげぬ其うちは。
　ト双方へ、ポン〳〵と投げる。
滅多にこの場は動きや致さぬ。

侍ひ 此奴、手向ひか。

ト とん〳〵下に居る。

義村 者ども、乘り物立てい。

ト皆々キッとなる、この時乘り物の內より

皆々 ハア、、。

義村 浮田の家臣早瀨が家來、鵤幸右衞門。

幸右 ハ、ア〳〵。

ト平伏する。義村出て、床几にかゝる。

義村 この義村が乘り物と知つて、止めしは、其方が主人玄蕃頭が敵、東間三郞右衞門が敵討、早瀨源次郞の助太刀を願ふ所存か。

幸右 ハア、、天晴れ名智の御眼力。御指圖の如く、古主玄蕃頭さま、即ち東間三郞右衞門が爲に橫死を遂げ、相續いて總領伊織、當國福島の堤に於て、返り討に相成り相果てしその無念、骨髓に徹し、舍弟早瀨源次郞を守り立て、兄の恨み、古主の仇を、報せんと存ずるゆゑ、主從樣々に心魂を碎き、敵の在所を尋ねしところ、大江どのの御取持ちにて、伊藤將監と改名し、坂本の御城中に罷り在りと承り、御中老住の井どのとは、拙者聊かの由緣あつて、宇治君さまへ取入つて、具さに言上仕り、幸ひなる、今日の御社參。君還御の途中にて、多年の本意を達すべき由、御內意は蒙むれども、三郞右衞門をお閣まひある、坂本の御老職、萬一敵に御加勢あらば、寡は衆に敵すべからず、何卒御仁心をもちまして、お助太刀なし下さりませうならば、生々世々の御厚恩、いかばかりか、有り難く存じ奉りまする。

ト平伏して云ふ。義村こなしあつて

義村 ホ、オ、神妙なる其方が願ひ、先達て宇治君より御內意を以て、片岡どのと申し合せ、早瀨一類に敵討させんものと、かねての契約。まつた今日、住吉御社參を幸ひに誘き出し、社參終りなば、本望遂げさせん爲、供廻りに仕立て、召連れたり……ヤア〳〵、源次郞、これへ參れ。

源次 ハア、。

ト源次郞供廻りに紛れて、この時、前へ出る。幸右衞門、見て嬉しきこなし。

源次 幸右衞門、三浦之助さま片岡さま、御兩所のお情にて、今日といふ今日、敵東間を討取ると思へば、此やうな嬉しい事はない。ちやつとお禮を申してたもいなう。

幸右 エ、、廣大の御厚恩、いつの世にかは忘れ申さん。

幸源　有り難う存じまする。

ト兩人平伏して、喜ぶこなし。この時、向うより

庄三　何れも樣へ、坂田庄三郞が手土產。それへ引立て御覽に入れん……うせろ〳〵。

ト元右衞門に長き繩かけ、引張り出て

三浦之助さま、これにござりまするか。片岡どのゝ下知に依つて、元右衞門を引ツ捕へ、これまで引据ゑましてござりまする。

義村　今に始めぬ坂田氏。お手柄〳〵。

トこの間に元右衞門、花道へ、ソロ〳〵逃げうとするを庄三郞、繩を引き戾す。これにて元右衞門、後へ引戾される。源次郞見て

源二　うぬは家來、元右衞門め。

幸右　ヤイ、元右衞門、古傍輩の鵤幸右衞門、よも見忘れは致すまい。

元右　ほんにあなたは幸右衞門どの、お久しうござりまする。

トなまだれて、云ふ。幸右衞門、キッとなつて

幸右　うぬ、よくも敵の犬となつて、彌助を殺すのみならず、三代相恩の若旦那樣を、三郞右衞門に手引きして、よくも〳〵返り討に討たせたな。こな、人非人め。

元右　アノ幸右衞門さまの仰しやる事わい。弟彌助を殺し、また伊織さままで、なんの私しが、左樣な事を致しませう。とんと存ぜぬ事。

幸右　すりや、うぬは存ぜぬとな。

元右　そんな事、夢にも知りませぬ。

幸右　この期に及び、又僞り。この上は、うぬが目を覺ましてくれん。腕助、これへ來やれ。

腕助　ハア。

ト腕助、着付け上下にて、走り出る。元右衞門、恟りして

元右　ヤア、わりや腕助。そんなら、われは。

腕助　幸右衞門さまの理解によつて、本心に立返つたこの腕助。元右衞門、もう叶はぬ。何もかも云うてしまへ。

元右　われが立役めかしても、知らぬ事は云へぬわい。

腕助　いゝワ、知らすば、おらが云うて聞かさう。斯うでござりまする。天王寺の失敗から按摩になり、東寺の貸座敷へ行き、弟の彌助を殺したも此奴。惡い奴なア。又、染の井さまの身の代百兩、盜んだも此奴。その上、福島の堤にて、三郞右衞門を手引きして、伊織さまを返り討

にさせたも、元右衛門が仕業でござりまする。
庄三　コリヤ、われが如何やうに隠しても、腕助が返り忠
にて、何もかも顯はれたれば、覺悟さらして、念佛でも
こづき出せ。
元右　そんならもう叶ひませんかいなア……ハア、、、。
義村　事明白に顯はれし上からは、主を殺した成敗は、竹
槍が定法。木の空へ吊しあげ、苦痛を致させい。
皆々　畏まりましてござりまする。
元右　すりや、どうあつても助からぬかいなア……へ
ア、。
ト泣く。これにて庄三郎、幸右衛門、家來皆々寄つて
木の空へ、縛りつける。
源幸　幸ひこれに。
ト竹を取つて來て、先を削ぎ、源次郎、幸右衛門、双
方よりキツと構へる。
源次　兄者人の敵。
ト上手より竹槍を、元右衛門の脇へ突ッ込む。
幸右　彌助が恨み、カウ。
ト下手より突ッ込む。これにて、元右衛門苦しむ。東
西より、水蘇黄、鐵砲にて掛ける。

源次　兄の仇。
幸右　主の罰。
兩人　思ひ知つたか。
ト双方より止めを刺す。これにて元右衛門、落入る。
義村、庄三郎こなしあつて
義庄　出かした〱。
トこれにて、源次郎、幸右衛門、よろしくあつて扣へ
る。
義村　この上は、三郎右衛門が歸館を以て
庄三　殿下茶屋村にて、討取り召され。
幸右　御兩所さまの御仁心。
源幸　エ、、有り難う存じまする。
庄三　その禮は後での事。一時も早う。
幸右　然らば仰せに隨ひ、彼所の森に待ち受け
源次　日頃の本望。
義村　急げ〱。
幸源　ハア、、、。
トきつとなつて、一散に向うへ入る。義村、こなしあ
り。侍ひ一人走り出て
侍ひ　申し上げまする。造酒頭どのゝ仰せには、敵討の場

所もしつらひござれば、義村さまにも御立ち下されませうとの、仰せでござりまする。早々殿下茶屋村へ、お越しあられませう。

義村　すりや、片岡どのにも、早、殿下茶屋村へ……庄三郎、來やれ。委細は道々。

庄三　お供仕りませう。

義村　者ども、續け。

皆々　ハア。

ト義村先に、庄三郎、供廻り皆々、附添ひ、橋がゝりへ入る。トまた所知入りにて、向うより乘り物、行列の供廻り大勢出て、本舞臺へ來て上手へ通り、入る。

返し。

造り物、一面の松原、向う住吉、四社の宮。反り橋高燈籠なぞ見せ、取合せよろしく、所々に、桐の紋付きし高提灯立てあり、上手床几に造酒頭、義村、腰掛け居る。眞中に三郎右衞門、着付け上下、立ち身にて居る。後に大勢の供廻り扣へ居る。下手に腕助皆々並みよく並ぶ。これにて道具納まる。

ト庭神樂のあと、皷の調べになる。

造酒　今日の御社參、首尾よく相濟み

義村　伊藤氏には御苦勞千萬に存じまする。

三郎　これは〳〵御挨拶、痛み入りましてござる。これと申すも將監が、現はれ出ましてござればこそ、住吉の御社參も、何事なう相濟むと申すもの。左樣ではござらぬか。

造酒　左樣でござる……それにつき、伊藤氏へ申し上げたき儀がござるが。

三郎　何か〳〵。

造酒　外の儀でもござらぬ。この度手前召抱へし者ども、將監さまお役目相濟まば、執權職とおなりなされば、お目見得叶ひますまい程に、お目見得の程を願ひ居りまするが、この儀は如何でござりませうな。

三郎　何事かと存じたら、何か貴殿が抱へさつしやつた、新參の者どもが、この將監に、目見得を願ひ居りまするか。

造酒　なか〳〵。

三郎　そりや、心易い事。目見得いたしくれう。

造酒　すりや、お聞き屆け、下さりませうとな。ソレ、者ども、これへ呼び出せよ。

天保六年七月中村座所演　松本幸四郎の三郎右衛門

中山みよしの染井

岩井粂太郎の源次郎

侍ひ　ハア、……、願ひの者ども。
　ト下手に、向ひ
御前のお召し、急いでこれへ。
三人　ハア、……。
　ト下手より、源次郎、染の井、葉末、三人とも白裝束にて、出る。後より、幸右衞門、懷に乳呑子を抱き出る。
仰せに隨ひ、罷り出ましてござりまする。
　ト皆々下に居る。三郎右衞門、見て、恟りして
三郎　ヤア、うぬらは、早瀨源次郎、染の井、葉末。こりやどうぢや。
造酒　なんと、よい家來でござらうがな。
源次　サア、親の敵。
染井　夫の敵。
葉末　舅御の仇。
幸右　和子の爲には、祖父樣の敵、親の仇。
四人　尋常に、勝負々々。
三郎　待て〳〵……片岡どの、三浦どの、こりやどうでござる。
　ト碎けて云ふ。

義村　不審な尤も。其方、大江入道に取入り、坂本の城中へ來りし折柄、合點の行かぬと思ひしに。
造酒　御母公さまより、我れ〳〵兩人へ、まツかう〳〵との御内意を以て、御社參終らば、殿下茶屋村に於て、早瀨一類の者どもに、勝負いたさせよとの御上意。
義村　まつた將監とは假の名、誠は東間三郎右衞門であらうがな。
三郎　イ、ヤ、如何やうに、仰せあるとも、身共は、伊藤將監。
庄三　その證據は、これにあり。
　ト下手より、庄三郎出る。三郎右衞門を見て
三郎　わりや庄三郎。うぬも裏返つたなア。
庄三　恟りすまい。うぬに一味と見せたればこそ、何もかも明かせし上、おのれが本名、東間三郎右衞門と、うぬが口から、自身の白狀。
三郎　ヤア。
庄三　馬鹿な奴わい。ハ、、、、、。
　ト東間こなしあつて
三郎　この敵討は、なるまい〳〵。
庄三　そりやなぜ。

三郎　浮田家の寶、色紙紛失、手に入らぬうちは。
幸右　愚かや三郎右衞門、我れ一人の愛子を殺し、手に入れた色紙は、先達て御兩所の方へ差上げ置いた。
三郎　如何やうに云うても、御社參御免の御書、頂戴いたし居れば、我が君も同然。
義村　コリヤ、最前渡したは、敵討御免の御書。さうとも知らず、大事にかけたは、うぬが天命。開いて見居らう。
三郎　ナニ、この御書が。
　　ト開き、見て悄り。
　　ヤア、こりやどうぢや。
造酒　斯く露顯の上は、最早遁がれぬ、この所にて
義村　勝負いたしてよからう。
三郎　是非がない。勝負いたしてくれう。
義村　ソレ、用意いたせ。
　　トこれにて、三郎右衞門、身拵へする。この間に家來三方に土器四ツ乘せ、持ち出る。眞中に直し置く。三郎右衞門、眞中にて、いつもの水杯あつて、双方へ別れ、皆々こなしあつて
源次　如何に東間三郎右衞門、其方が討つて立退きし、早瀨玄蕃頭が悴、同苗源次郎。
染井　伊織が妻染の井。
葉末　源次郎が妻葉末。
幸右　家來鵜幸右衞門が、懷にお供せしは、伊織さまの忘れがたみ、早瀨鬼松さま。
源次　最早遁がれぬ。
四人　覺悟々々。
三郎　うぬら一々、返り討だ。觀念ひろげ。
　　トこれにて、敵討の鳴り物にて、東間三郎右衞門。三人を相手に、さま／＼、立廻りあつて、三人、危くなる。この時、幸右衞門、子を抱きながら切り込む。これにて三郎右衞門、こなしあつて、よろしく留めて
三郎　コリヤ、うぬが助太刀ひろぐか。
幸右　イヤ、助太刀ぢやない。和子樣のお太刀ぢや。主人の敵と二人前ぢや。
　　トこれにて、又立廻り。トゞ源次郎、染の井、葉末、切つて行く。さま／＼大タテあつて、トゞ三郎右衞門を切り伏せる。
源次　親の敵。
染井　舅御の仇。

幸右　祖父様の敵。

ト子役に、止めを刺す。

四人　思ひ知つたか。

造義　オヽ、手柄々々。

四人　段々のお情。

造酒　禮には及ばぬ。御上聞に達せし敵討。

義村　首尾よくこの場は

トこなしあつて

造酒　お立ち〳〵。

トめでたく、打出し。

幕。

お家元祿曾我復讐榮
世話

世界は花の名にしおふかたき石井に濡衣もおらいに迷ふ水右衛門悟らぬ戀の闇討に心關助藤兵衛が忠義は重き旅葛籠明けて云はれぬ新關に彌十郎が情の槍先それも篠つく雨あがり汚名を烏眼の兵助が敵に巡り大井川流れ〳〵て世を忍ぶ八ツ橋村の隠れ家に師弟の緣と皺腹を切りも切つたろ又四郎が哀れを三木の十左衛門泪を隠す空生醉おらんに別れの盃もちよつと一口助太刀に岡野半次郎が本望のしかもその日は雨社の祭禮

茲に揃蝶鵆艶浴衣

花菖蒲浮木龜山

九株

表のカタリは、この狂言を弘化三年七月、江戸の河原崎座で演じた時の物である。篠田瑳助の筆らしい。下掲の凸版は、江戸での初演、文化二年四月、市村座興行の時の折に發行されたもので、筆者は初代豐國。この時代はまだ豐國の善い所がハッキリ出てゐるので、面白く見られる。

本文に挿入した錦繪には、それ〴〵說明を附けてある。同じく挿入した凸版は、表のカタリと同じく、弘化三年河原崎座に興行した時の繪本で、各幕毎に分けて入れて置いた。

花菖蒲浮木龜山

發端

勢州磯邊太神宮の場

役名——庄屋、治部之進、年寄、源右衞門、酢ケ島の宗右衞門。常磐村の蒲右衞門。志ケ崎の權次兵衞。曾根次太夫。飯田由兵衞。

本舞臺は三間の間、正面黒幕、上の方、鳥居。下の方、一面の杉林、幕の内より、庄屋治部之進、年寄源右衞門、百姓大勢、簑笠にて扣へ居る。ドンチヤンにて幕明く。

ト治部之進、矢立と帳面を出し

治部　日野村、酢ケ島、志ケ崎まで、觸れ狀を出されたれば、皆々當所へ詰める筈でござる。

源右　それ〳〵、幸ひ暦も天赦日、今日この磯邊太神宮へ勢揃ひをなし、軍の掛引き。

百姓　おいらが組は、都合味方が三十八人。

治部　その組頭は。

百姓　酢ケ島の太郎右衞門。

治部　よし〳〵。

ト帳面へ記す。

源右　また志ケ崎の組頭、權次兵衞も來さうなものだが。

治部　ア、遲い〳〵。ソレ、知らせの法螺を吹くがよい。

ト百姓、法螺を口へ當て、吹き立てると、またドンチヤンになり、花道より權次兵衞、宗右衞門、蒲右衞門、簑笠にて走り出て來て

三人　ヤレ〳〵、皆早うござつた。ソレ、帳面へ記して下さい。

治部　サア、知れた事でも、軍令は背かれぬ。面々に名を云うた〳〵。

權次　合點々々。ソリヤ、今到着したのは、志ケ崎の權次兵衞。

治部　よし〳〵。

ト帳面へつける。

宗右　その次は、酢ケ島の宗右衛門。
治部　よし〳〵。ト帳面へ付ける。
源右　それから後が、常磐村の蒲右衛門。
治部　よし〳〵。ト帳面へ付ける。
先づこれで、五手の大將分は揃つた。これからは最寄へ集まる手勢、先づ今日この社へ會合なす、その企ては。
源右　元の起りは、當領主飾間家の代官、曾根次太夫より起る事。一味の輩よく聞かつしやい。一體、この志摩は小國にて、一郡は伊勢へ入つて、田數四千九百十七丁。
宗右　定式の年貢より外、上納はない筈なるに、近年になつて、山の年貢、海の運上。
權次　鳥羽の城の普請金を集めるとて、日一文づゝの取立ても、この國の百姓獵師まで、面々へかゝはる事、微塵積れば山の譬へ。
蒲右　よい海苔から魚油まで、會所を立て、運上とは、あんまり慾の摑み取り。
治部　慥かに飾間の殿には御存じなく、次太夫が私慾の計らひ。
源右　この上は、我れ〳〵一揆を企て、皆代官の横領ゆゑ、國の困窮、彼の曾根次太夫を打ち殺し、飾間家へ込み入り、時の武將の差配を受けるが國の爲。百姓一揆の發頭人は、村司の治部之進と、この源右衛門だぞ。
宗右　なに、庄屋年寄の難儀にばかりかけませう。大勢の人の爲。
蒲右　それ〳〵、その志摩の國は野も山も
權次　みんな命を捨てものでござる。
治部　サア、これからは手勢は差措き
源右　太神宮の神前にて
宗右　誓ひの神水。
蒲右　一味の固めは
權次　午王に血判。
治部　先づ神前へ引取らうか。
源右　めでたく勝利の幸先祝うて
治部　鬨をあげたり〳〵。
皆々　エイ〳〵オウ〳〵。
トどんちやんになる。治部之進、先に源右衛門、權次

兵衛、宗右衛門、蒲右衛門、百姓皆々、下座へ入ると、直ぐに向うより、由兵衛、半合羽、股引、大小にて、菅笠を持つて出て來て、花道にて

由兵　これは怪しからぬ、騷々しい事。世の常の喧嘩口論とは違ひ、一方ならぬ騷動。何事やら實否を尋ねたいものぢや。イヤ、騷動と云へば國元で、一千兩の御用金紛失より、兵助さまには御勘當。義理ある仲ゆゑと、おらいさまの御苦勞。何卒一千兩紛失の手懸り、又は兵助さまの御歸參を願はんと思ひ、立願を掛けてこの旅行。先づ太神宮へ參詣なさん。それ〳〵。

ト舞臺へ來ると、またドンチヤンになり、花道より、簑笠を着た百姓大勢、竹槍を持つて、アリヤ〳〵と出て來るゆゑ、由兵衛ちよつと小隠れする。皆々出て來て

百姓　サア〳〵、今日の勢揃ひは、遲くなつた〳〵。

同　ア、また大將分の治部之進どのや、源右衛門どのが、焦れて居られう。

同　何でも近々飾間家へ、押寄せる手筈ゆゑ

同　磯邊さまにて勢揃へ。

同　これと云ふも代官が、惡いから起る事だ。サア〳〵

行きやれ〳〵。

トどんちやんになり、皆々下座へ入る。由兵衛、下座より出て來て

由兵　全く、百姓の一揆に相違ない。分けて當國は我れ我れが殿樣と、御縁ある飾間家の領分。この鳥羽に一揆起るといふは、安からぬ事。さして此方にさし構ひはなけれども、根を考へれば一家の事。先づ〳〵、何は差措き、參詣いたした上の事。それ〳〵。

ト神樂になる。由兵衛、思ひ入れあつて、下座へ入ると、百姓花道より先拂ひにて、後より次太夫、野袴。ぶッ裂き羽織の形にて出て來る。後より供侍ひ、白股引、絆纏、あげ荷の兩掛けを擔ぎ出て來て、皆々舞臺へ來る。

次太　この程より百姓一揆、起らん事を察せしゆゑ、わざわざこの度、殿の上意を受け、罷り上つた。一揆に凝り固つた百姓ども、我れ〳〵に理不盡いたさんも計り難し。隨分麁相のないやうに、案内いたせ。

百姓　畏まつてござりまする。

次太　先づ、直さま磯邊太神宮へ參詣なさん。

百姓　それがよろしうござりまする。

次太　早う參れ〳〵。
　ト百姓案内す。次太夫、供を連れ、鳥居の内へ入ると下座にて法螺を吹き立て、ドンチャンになる。此うち由兵衞、下座より走り出て來て
由兵　とつくりと樣子を聞くに、百姓一揆に相違ない。これより直ぐに韋駄天走り、御主人、兵衞さまへ、この趣を。
　ト行かうとする。この後より簑笠の百姓一人出て
百姓　怪しい侍ひ。うぬを。
　トかゝるを立廻りあつて投げのけ、ドン〳〵になり、由兵衞、一散に向うへ入る。またドンチャンになり、以前の治部之進、源右衞門、宗右衞門、蒲右衞門、權次兵衞、その外百姓皆々竹槍を持ち、次太夫を取り卷く。次太夫、荒々しく先へ走り出で、懐中より免狀を出して
次太　待つた〳〵。聊示いたすな。事の仔細を聞いた上、所存に落ちずば如何やうとも致せ。理不盡な事があつては、却つて其方達の爲になるまい。殿より免狀を持つたる某、手向ひはせぬ。鎭まれ〳〵。
百姓　ヤア、この期に及んで卑怯な次太夫。

皆々　ぶち殺せ〳〵。
　トかゝらうとする。次太夫、大小投げ出し
次太　待て〳〵。卑怯でない、未練でない。今日我れ〳〵到着せしは、當國のこれまでの運上は勿論、課役金は今日向御免なさるゝ免狀なるぞ。
　トこれにて皆々扣へる。
治源　ナニ、そんなら今までの運上は
皆々　お免しなさるゝとや。
次太　志摩鳥羽の運上は、この曾根次夫夫が私慾の計らひと云ひ觸らせしは、相家老三木十左衞門と云ふ者。我れを拒みなしたる僞はり。何がな殿へ媚び諂ひ、鳥羽の運上數多勸めしも、三木十左衞門。その運上ゆゑに當國の騷動。某一人腹掻き切つても、運上御免を申し上げ、命にかけて願ひしゆゑ、斯くの如くの免狀。この上は氣遣ひなし、喜べ〳〵。
治部　エ、有り難い。さうとは知らず既の事に
源右　次太夫さまを
皆々　危ない事であつたなア。
權次　誠に斯うなつて見れば
二人　命の親と云ふは次太夫さま。

蒲右　これで波風なく、妻子を育みまする。
皆々　エ、有り難うござります。
ト次太夫、思ひ入れあつて
次太　然らば、この次太夫を、命の親と思ふか。
治部　イヤモ、命の親どころか、太神宮様より有り難うござりまする。
次太　然る上は。
ト懐中より連判狀を出し
庄屋治部之進を始め、殘らずこれへ血判を致せ。
皆々　エ、。
次太　兼ねて腹惡しき三木十左衞門、それを用ゆる殿の大たわけ。この虚に乘つて飾間の家を、横領なさん我が計略。一味同心なすならば、その面々の功により、武士に取立て武將家へ、飾間の舊惡直訴なし、立身出世は身が請合ひ、サア、一味同心いたすか。なんと〳〵。
源右　何がさて、命の親の次太夫さまなれば。ナウ、庄屋どの。
治部　それ〳〵、運上免りたも、あなたのお庇。その上、武士にお取立てとは、この上もない仕合せ。この庄屋年寄得心の上は
蒲右　浦々村々殘らずお味方いたしませう。
皆々　何がさて、爰は端近。この連判は日和山の國分寺。
次太　寄せ集まる大庄屋。
治部　先驅けは米田村の源右衞門。
源右　面白い〳〵。幸ひ今日勢揃ひ、皆一同に
次太　いよ〳〵、お味方〳〵。
皆々　皆々、來やれ。
次太　ト次太夫、眞中に皆々よろしく、ドンチャンにて
幕。

序　幕　　天龍川の場

役名――石井兵衞妻、おらい。同娘おとき。香川半次郎。門弟、野田藤四郎。磯田八之丞。戸倉運八。赤堀水右衞門。

本舞臺、三間の間、一面の堤。下の方に上り下り、堤の下、芦原。下の舞臺先より花道へかけて、杜若

盛り。眞中に簾をかけたる屋根船。すべて、天龍川の道具。幕の内より屋根船の船頭、岸へ漕ぎつけて居る。琴の唄にて幕明く。

船頭　ソリヤ、當りますぞ〱。

ト堤の際へ飛び下り、芦原へ船をもやい居る。合ひ方になり、船より、おらい、おとき、出る。後より腰元出る。後より藤四郎、着流し大小にて、風呂敷包みを持ち出る。船頭、おらい、おとき、腰元の手を取り、皆々上へ上がる。

藤四　サア〱。爰で一服おあがりなされませ。

らい　それがよいわいの。コレ、娘、あれ見やれ。この天龍河原の杜若、今を盛り。また春は櫻草が見事ぢやさうな。アレ、あの向うに見ゆるが、遠江灘かいなう。

藤四　左樣でござりまする。此方の方が海道筋。アレ、あそこに見えますが池田の宿。あの又、熊野の櫻が、春はとんだようござります。

とき　ほんに、どちらを見ても、飽かぬ眺めでござります。ほんに母樣、今日は好い慰みでござりますわいなう。

らい　それ〱、今日の遊山も、氏神鷺坂八幡樣へ、夫の代參を云ひ立てのこの催ほし。先達て志摩の鳥羽にて百姓騷動、それゆゑに評定の折柄、罪なき我が夫兵衞さまを讒言なし、遂に閉門仰せつけられたを、何事なく御赦免ありしも、これ全く氏神樣の應護と、今日の代參一つには、晴れても晴れやらぬ殿の御用金紛失ゆゑ、越度となつたる兵助の事。御勘當はなされたれど、どこにどうして居ることやら、これも願掛け。どうぞ無難に元々通り、何事なう濟むやうにと、夫の機嫌を伺ひ、訴訟はすれど堅いお氣質。只寢ても覺めても兵助が事、義理あるゆゑ……わしとした事が、役にも立たぬ事。今日は遊山に出て居ながら、ホヽヽ。さぞや其方も退屈ぢやなかつたか。

とき　どう致しまして、退屈いたしませう。これから又、あなたも、ちと何や彼やをお捨てなされて、御保養なされませい。

腰元　左樣でござります。これからは又、琴も御酒もおやめなされまして、何ぞよいお慰みがありさうなものでござりますなア。

とき　サア、わしもさう思うたゆゑ、香の道具も持つて來たわいなう。

ト袱紗包みの香の箱を出して

なんと、これから母樣をお客にして、十種香はどうであらうぞいの。

腰元　ほんに、それがようござりませうわいな。

らい　そんなら其方、あの船から香箱を持っておぢやいなう。幸ひ、爰に床几もあり。

腰元　サア〳〵、マア、お掛け遊ばしませいなア。

藤四　時に私しは、斯やう致して居るうちも、稽古が怠りますれば、先づ一旦歸りまして、また馬籠川まで迎ひに參りませう。

らい　成る程、そんなら、さうしておくれなされませ。

船頭　この又茶屋めは、どこへ行きやアがつた。ドレ、茶屋を呼んで參りませうか。

藤四　左樣なら、もう參りますでござります。

ト行かうとする。

らい　アヽ、モシ〳〵、藤四郎さま。

藤四　ハイ〳〵、御用でござりますか。

らい　お前、屋敷へ歸つてなら、旦那どのへも、必らずお案じなさらぬやう、暮れには戻りますると、云うておくれなされませ。

藤四　畏まりましてござりまする。左樣ならばおときさまゆるりとお遊びなされませ。

ト合ひ方になり、藤四郎、花道へ入る。船頭下座へ入る。

腰元　ほんにマア、藤四郎さんも、よう稽古に御精が出ますなア。

とき　ちよつと遊山の間も、稽古の怠りますとは、よいお心掛けでござりますなア。

らい　イヤモ、外々の門弟衆と違うて、內弟子のあの藤四郎どの、物云ひまでを心づけたがよいぞや。

腰元　左樣なら、あの藤四郎さまは、お內弟子とやら申しますのかえ。

らい　さうぢやわいの。サヽ、娘、そんなら、その香をききませうの。

とき　畏まりました。

ト誂らへの合ひ方になり、これよりおとき、香道具を出して、香をつぐ。おらい、取つてよろしく香をきく事あつて

らい　成る程、香をきいて昔を忍ぶとは、よう云うたものぢやなア。ほんに、それにつけても、おときや、この間

中より其方へ云ふ通り、其方の身の上は、石井家を相續せねばならぬ程に、どうぞ其方の氣に入つた、よい聟を持たしてやりたいわしが心…ぢやに依つて、其方も定めて、あのやうな人を…とサア、いふやうな事はあるまいけれど、もしや其やうな事もあらば、何も遠慮しやる事はない程に、なんなりとも、わしに云つたがよいぞや。

とき　ほんに嬉しい…有り難い仰せではござりますが、アノ私しは…殿御を持ちます事は、どうも。

らい　これはしたり、常から兵衞どのゝ仰しやる通り、桃のよう／＼たる、その葉しん／＼たり、この子爰に嫁ぐと、一日も早うよい聟取つて、可愛い嬰兒の顔を見するが、親への孝行ぢや。殿御を持つ事は、どうも…なぞと其やうな事、云うて濟むものかいなう。

とき　それでも。

ト恥かしき思ひ入れにて、香を取つて紛らかし、おらいは辛氣がるこなし。此うち合ひ方よい程に、下座より、半次郎、袴、羽織の形にて出て來る。後より奴、才助出て來る。

才助　若旦那、今日は天氣もよろしいので、夥しい人の出やうでござりまするぞ。

半次　それ／＼、今日は濱松の領主より、鷺坂八幡宮へ騎射十番の御奉納。某社參の次手に、見物いたしたが、成る程、曠れ業も武の譽れ。其方も見る通り、きらびやかな事ではないか。

才助　左樣でござりまする。一合取つても武士とは申しますれども、なか／＼及びもない事でござりまする。イヤ、兎や斯う申すうち、日も傾きましたれば、渡し場より船を借りまして、一走りにやりませう。

半次　それがよい／＼。

トこの時、才助、フツとおときを見て

才助　モシ／＼、若旦那々々々、アレ、向うの、あの杜若を御覽じませ。なんとマア、見事な美しい花、莟の杜若でござりまする。

ト半次郎の袖を引きて云ふ。此うちおとき、半次郎とフト顏見合せ、おときはハツと嬉しきこなしあつて

とき　モシ、母樣、私しは急に殿御が持ちたうござりますわいなア。

らい　なんぢや、急に殿御が持ちたい。そりや又あんまり急な事ぢやが。マア／＼、嬉しい／＼。

腰元　ほんに、こりや、おめでたい事でござりますわいなア。

らい　して又、其方の持ちたいといふ殿御は、どのやうな男ぢや。

ト　おとき、半次郎に見惚れて居る。

らい　コレ、娘‥‥コレ、おとき、これはしたり。

ト　おとき、愕りして

とき　アイ。

ト　香箱を落す。

らい　エヽモウ、この子わいなう。わしにばつかり物云はせ、どうぢやぞいの。その殿御は、どのやうな殿御ぢやぞいの。

とき　サア、その殿御と申しますわな‥‥色白で。

ト　云ひながらフツと半次郎を見て、こなし。

らい　オヽサ。其方の殿御ぢやもの。定めてよい男であらうぞいの。

ト　云ひながら、半次郎を見て、こなしあつて

オヽ、知れた〳〵、知れました。でもマア、強い思ひ込みやう。ほんにこれが、とんと渡りに船、誠に八幡様のお引合せであらう。ア、コレ、どうぞ仕様がありさうなもの。

ト　いろ〳〵考へ、こなしあつて

オヽ、それ〳〵、ほんに見事な杜若、河原傳ひにわしや見て來る程に、ソレ、腰元達、しつかり娘が側を離れまいぞ。ドリヤ、河原を見て來ようか。

ト　合ひ方になり、おらい、心を殘して下座へ入る。半次郎、ソロ〳〵堤へ下りて來る。腰元、これを見て

腰元　アレ〳〵、おときさま、あつちへお出でなされます。ちやつと早うお止めなされませいなア。

半次　才助、遲なはる。早う參れ。

才助　ヘイ〳〵、アヽ、惜しいものを、あの美しい。

腰元　モシ〳〵、奴さん、美しいとは、何の事でござりますえ。

才助　サア、美しいと申したは。

半次　コリヤ〳〵。才助、何をてんごう申すのぢや。イヤ、只今家來が美しいと申したは、コレ〳〵、この杜若の事でござる。餘り美しいに依つて、そこらあたりが花の香りで、何やら夕日眩ゆうござりまする。

腰元　モシ〳〵、御無心ながらこの杜若を、土產に致したうござりまするが、刃物がござりませぬゆゑ、切られま

せぬ。どうぞ一本、お切りなされて下さりませいなア。

半次 成る程、お心安い事。そんなら切つて進ぜませうか。

ト柵の側へ來て、小柄を抜く。此うちおときあちら向いて、恥かしきこなし。腰元、思ひ入れあつて

腰元 アレ、あなたが杜若をお切りなされますから、眩いと仰しやつたに依つて。

ト船の日傘を取つて來に、おときへさしかけてお上げなされませ。

トおとき、半次郎へ傘をさしかける。半次郎、杜若を切る。

とき モシ、半次郎さま。

ト恥かしき思ひ入れあつて

その杜若は、見事な花でござりまするなア。

半次 其方様のお望みゆゑ、一本切りましてござりまする。

腰元 お土産に切つておもらひ申しました。

才助 若旦那、あなたもお土産にお切りなされませい。

腰元 ハテ、心の多い。其やうに切つては、ほんの仇花になりますわいな。

とき モシ、半次郎さま、その花、御覧じましたかえ。

半次 こりや、杜若の今を盛り。

とき 仇に咲く、入江の沼の杜若、袖のつまへり色ことに見む。

半次 すりや、仇花の杜若、アノ紫の

とき サア、わたしや人目の、朱を奪うて。

トこなしあつて寄添ふ。半次郎、こなしあつて

半次 由縁求めん紫の

とき サア、色外に現はるゝと、思ひ焦れた心の内を。

半次 待ち侘びて暮らせる宵の時鳥、聞かぬ限りは疑ん方もなし。

とき そんなら眞實

半次 刀にかけて

とき エ、。

ト嬉しき思ひ入れあつて、才助、腰元が方へ心遣ひあつて

ア、申し。

ト半次郎が側へ寄り、日傘にて兩人顔を隠す。腰元、才助、思ひ入れ、此うちよき程に下座より、おらい、出て來り、咳拂ひする。これにて兩人別れる。

らい ほんに、見事な杜若であつたわいの。

オ助　イヤ、どこもかしこも見事な杜若でございまするる。
とき　お早うお歸りなされましたな。
半次　ヤア、おらいさまでござりましたか。
らい　オヽ、半次郎さまでござりまするか。
オ助　イヤ、若旦那も、只今便船を願ひませうと、存じ居られまする所でござりました。
らい　ほんに、それ〳〵、外に誰れも遠慮はなし、私しどもと御一緒に、便船をなされませ。
半次　それは有り難うござりまするが、女中ばかりのお船へ、便船いたしまするもどうやら。
らい　ハテ、大事ござりませぬ。サア〳〵、直ぐにお乘りなされませ。サア、娘、歸りませうぞや。
とき　ハイ〳〵、お先へお召しなされませ。
らい　それ〳〵、又ソワ〳〵して、怪我せまいぞ。
ト合ひ方になり、薄き浪の音になる。オ助、皆々の手を取り、船へ乘せて、もやいを解き、船へ乘つて。
オ助　この又船頭めはどこへ行つた知らぬ、委細構はず乘り出してやらう。
ト船を出さうとする。此うち花道より、水右衞門、八之丞、運八、齊流し大小に尻を端折つて、吸ひ筒杯を持つて出て來る。この體を見て
三人　その船、待つてくれ〳〵。
八之　何やら、びらしやらとした奴が乘つたその船。顏が見たい〳〵。
水右　船を止めたは外でもない。持ち合せの相が、賴みたい〳〵。
八之　船を止めろ〳〵。
運八　合點でござる。
ト流れろもやい綱を取る。
八之　滅多に、この船は逃がさないぞ。
水右　コレサ、武士に物を云ひかけさせ、返事もせずに逃げるとは、無禮緩怠。待て〳〵、この杯の相をせずば、此方から船へ乘らうか。
三人　どうだ〳〵。
ト腰元、船より顏を出して
腰元　どなたか知らぬが、女ばかりと侮つて、滅多な事をなさると許しませぬぞ。
ト怖々云ふ。水右衞門、思ひ入れあつて
水右　その女中ばかりの船へ、なぜ男を乘せた。
八之　但し、杯の相をするか。

三人　どうだ〳〵。

　トこれにて、おらい、日傘にて顔を隱くし、船端へ出て

らい　數なりませぬ私しどもを、御酒のお相手とは、忝なう存じますが、見ますればお三人のお相、何れから先へ致しても、恨みつらみがござりましては、却つてお氣の毒でござりますれば、不躾ながら、この香箱を、それへ投げまするから、どなた樣なりと、お拾ひなされたお方のお相を、それへ參つて致しませうわいな。

三人　こいつは好い思ひつきだわえ。

八之　暮れ方といひ、日傘で顔は知れねども、どうやら、ぼつとり者の風俗だわえ。

水右　然らば、その香箱で、相をさせますぞ。

運八　後で否應云はしませぬぞ。

らい　そんなら、それへ投げまするぞえ。

三人　オツト、爰へ〳〵。

　トおらい、以前の蒔繪の香箱を、船より投げると、三人、これをせり合うて居る間に、才助、棹をさして、一散に屋根船は下座へ入る。このせり合ひのうち、水右衛門、香箱を拾ひ、三人、船を見て

八之　南無三、船をツン逃がしたか。エ、、すつかり一杯やらかされた。エ、、いま〳〵しい。

運八　憎くい女め、堤傳ひにぼツついて。

水右　ア、コレ〳〵、止めるに及ばぬ。もうよい〳〵。

運八　でも、餘りと云へば。

水右　イヤサ、身共が戀は叶ひました。

八之　して、その譯はな。

水右　コレ、思はず手に入る香箱の、蒔繪は井筒に菊唐草こりや

八之　そんなら、今の船の女は。

水右　日傘で顔は隱したなれど

八之　矢ツ張りおらいであつたか。

水右　この香箱を囮にして、日頃の思ひを。

八之　その時こそは身共もおときを、口說き落して。

兩人　兵衛が宅へ押しかけて。コリヤ。

　ト兩人、下に居る。水右衛門、香箱を戴く。よろしく拍子。

幕。

二幕目

石井屋敷百物語りの場

役名＝石井兵衞。同妻、おらい。同娘、おとき。同門弟、野田藤四郎。同下部、關助。茶道、珍齋。香川半次郎。石尾鄕兵衞。戶倉運八。山淵官六。磯田八之丞。赤堀水右衞門。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、上の方障子屋體、見附け唐紙の襖。平舞臺、枝折り戶、すべて綺麗なる石井屋敷の道具、好みの通りに仕立て、幕の内より、舞臺上の方に、八之丞、運八、官六、鄕兵衞、上下にて、順に並び居る。珍齋、皿を持つて給仕して居る。關助、奴の形で酌をして居る。舞臺に銚子、杯、硯蓋鉢、肴、いろ〳〵取散らし、序の舞にて幕明く

珍齋　サア〳〵、お替へなされませ〳〵。

關助　サア、只今お燗も熱う直しました。お中酒に一つおあがりなされませ。

八之　さて〳〵、存じよらず殊の外下された。併し、此やうにお膳を食べた上では、御酒といふものは、ゆかぬものでござりますて。

皆々　左樣でござります。イヤまた、此うちにも、ちと色めいたものでもあらうならば、ナア、何れも。

運八　左樣々々、また食べ過す事もござらうが、何を申すも、生野良ばかりでは冴えぬものでござるて。

官六　これは、冴えぬとは、どうでござる。今日は兵衞どのゝ御趣向で、呼ばれて冴えぬとは、餘り無遠慮。時に我れ等が所へ參つた杯は、ちやつと御茶道の珍齋どのへ進ぜませうか。

珍齋　ヤ、これは有り難い。然らば頂戴仕りませう。

　ト杯を取り、關助つぐ。珍齋、グッと飮んで

然らば、これは鄕兵衞さまへ、ちと差上げませうか。

鄕兵　拙者かな。イヤ、これは有り難た迷惑。御茶道の杯を受けては、脚氣の藥にでも致さうか。

四人　ハヽヽヽヽ。

八之　イヤまた、兎角たぼでなければ、座は持てぬものでござる。その又、たぼと云ふうちにも

　ト云ひ兼ねる思ひ入れ。

鄕兵　成る程、承知いたして居る〳〵。

運八　そのたぼと申すは：。ソレ、彼の

ト八之丞、こなしあつて

八之　エヘン〳〵。

關助　モシ、そのたぼと申すは、何れのたぼでございまする。

八之　サア、たぼと申したは。

關助　たぼと仰しやつたは。

八之　イヤ、外でもない。この家の娘おときどの、氏と申し、育ちと申し、褄はづれから、どこに一つ申し分ない、おときどの。流石兵衞どのゝお育て方と申し、思へば思ふ程、身共、恥かしながら、至つて執心。何卒斯樣な席でなりとも、おときどのゝ御酒のお相手なりとも、致したいと存じ、それゆゑツイ流行り詞の、たぼと申したちや。

關助　エヽ、左樣なら、おときさまの事でございましたか。そのおときさまへ

八之　恥かしながら身共

關助　あなたが……アレ、お顏に似合はぬ事でございますワ。

八之　默れ、下郎め、顏に似合はぬとは、身共を嘲弄いたすか。

關助　イエ〳〵、どう致しまして、あなたを嘲弄いたしませう。色戀の道ばかりは、堅い顏をなされても、女さへ承知いたせば、外から見ましても、とんと知られぬものでございまするゆゑ、御仁體に似合はぬ、しをらしいお心と申す事でござりまする。

八之　すりや、この八之丞が、おときに心あるを、しをらしいと申するか。

關助　左樣でございます。おしをらしうお見えなされます。

八之　成る程、さうしをらしう思はるゝなら、關助、この戀を取持て。

關助　どう致しまして、物堅い旦那に奉公いたして、左樣な淫らな事が、どう致して申し出されませう。

八之　すりや、ならぬと申すか。

關助　ひよつとこの事、旦那のお耳へ入つて御覽じませ。忽ちバツタリと。オヽ、怖やの〳〵。

八之　ハヽヽ。流石は下郎め、命が惜しいか。その筈その筈。この上は折を見合せ、兵衞どのへ、直々に申し合せて。

三人　それがよろしうござる。

鄕兵　時に、大分話しが沈んで參りました。今のたぼ話しに、もつれかゝつたこの杯、これは差詰め八之丞どのへ差上げませう。
八之　これは迷惑、餘り性急。マア〳〵、お押へ申す〳〵。
鄕兵　先づ〳〵お心祝ひに、これはおあがり下されい。
八之　オヽ、何かは存ぜず、心祝ひとあれば、頂戴いたさうか。
鄕兵　それは忝なうござる。
八之　然らば。
ト杯を取上げる。關助、つぐ。八之丞、グツと飲み干し
この杯は、關助、其方へ遣はさう。
關助　これは存じよりませぬ、有り難い、お杯頂戴仕りませうが、ちやつとこれはお押へ申しませうか。
八之　何ぢや。コリヤ、身共がさした杯は受けぬと申すか。
關助　イエ〳〵、左樣ではござりませぬが、餘り眞直なお杯も、興がござりませぬゆゑ、ちよつとお押へ申したのでござります。
八之　ヤア、奇ッ怪なる下郞め。最前といひ、今また身共がさしたる杯を、押へるとは不屆き千萬。その上さわりと申したは、身共が願ひの幸先を、挫く下郞め。その分には差措かれぬ。おのれ、眞ッ二つに。
ト立ちかゝる。皆々止める。關助、素知らぬ顏して居る。此うち障子の內より
兵衞　そのお相は、主兵衞が仕るでござらう。
ト合ひ方になり、兵衞、袴、羽織の形にて、三方に厨子入りの觀音を載せ、持つて出て來る。これにて皆々座につく。八之丞も扣へる。
八之　これは、今日は種々お心遣ひ千萬
三人　忝なう存じまする。
八之　殊に御叮嚀なるお料理、數獻たべまして、思はぬ高聲、御容赦下されませう。
兵衞　これは〳〵、何か樣子は存せねども、只今あれから承れば、下郞めが不調法仕つた樣子。何分申さば下人の儀、または今晩の儀でござれば、何事も御容赦なされ遣はされい。
八之　イヤ、これは痛み入つた御挨拶。畢竟彼れこれ申したが、お耳へ入つたも御酒の上。ハヽヽヽ。役にも立たぬ儀を申し立てまして、氣の毒千萬に存じまする。こ

りや、この座切りになされて下されいサ。
兵衞　それは早速御承知、忝なう存じまする。コリヤ、關助、重ねて麁相のないやうに、隨分ともに心がけて、御挨拶申せ。
關助　畏まつてござりまする。
八之　時に、それは格別、早速承らうには、兵衞どのには、殿の御用金一千兩紛失。尤も御子息兵助どの丶越度ではござりますれども、畢竟貴殿のお勤め方よろしきゆゑか、この上のお慈悲にては、差構ひはないと申すもの丶、少しは御遠慮もあるべき筈を、斯様に日待なぞと申し立て、大勢を呼び寄せられ、御馳走は、何ぞ御内々に、お心祝ひでもござつての儀てござるかな。
兵衞　成る程、御不審は御尤も。拙者儀門弟の內にも、昨今の方は御存じない筈。いかにも殿の御用金の儀は、忰兵助越度ゆゑ、勘當いたせど、某お差構ひなきとは申しながら、様々詮議には心勞仕り居りまする。また今晩各々方をお招ぎ申したは、外でもござらぬ。その仔細と申すは、これでござる。
ト三方に載せたる觀音を出して
この尊像を御覽下されい。この尊像の儀は、その古へ、織田信長公、武將宣下の功に依つて、東大寺の蘭奢待を申し受けし、その例にならひ、後年時の武將久吉公、南天竺の伽羅木を取寄せ、時の佛師に作らしむ。即ち久吉公より、當濱松の淺山家へ下され、殘りの伽羅木は播州飾間家へ下さる。この靈像の不思議には、その殘りの木を焚く時は、その煙不思議にも、觀音います方へ慕ふ。さるに依つて連理香と名けてござる。勿體なくもこの觀世音は、淺山家に隱れなき尊像なれども、主人の目鏡を以て、石井兵衞が預かり、守護いたすも家の譽れ。差當つてこの節、志摩の鳥羽にて、百姓一揆を企てたるより事起り、既に御一家の事ゆゑ、打捨て置かれず、評定にか丶りしところ、計らずも拙者、その一揆に與したりなぞと、不時の災難、讒訴なしたる者ござつて、某は押籠め閉門蒙り居つたれど、元より明白なる某ゆゑ、早速閉門を赦されしも、全くこの像のお庇。
ト懷中より一卷を出し
この一卷こそ、某家に傳はる神影の奧儀の秘書。日向の國鵜戸の窟。即ち鵜戸權現の神勅にて、授かりし神影の秘書、鵜の丸の一卷。石井の先祖これを授かり、例年當夜には鵜戸權現の祭禮、即ち流儀の祭でござれば、日

待と申し立て、各々方をお招き申すも、この觀世音の儀とこの一卷、お目にかけるは例年の儀でござる。兎角武を尊ぶ者は、萬事心掛けが肝要でござる。

八之　イカサマ、兩樣ともに有り難い品でござる。これを思ひますれば、我れ〳〵も貴殿の御運に、あやかりたうござりまする。

鄉兵　これから拙者どもゝ、藝道上達いたすやう。

官六　左樣でござる。惡事災難參らぬやう、立身出世を致さねばならぬでござる。

ト皆々、兵衞が持つた儘にて禮拜する。直ぐに兵衞、二品とも懷中する。

兵衞　サア、これから又、奧座敷にて、一獻申し付けませう。その節は又、今晩の趣向、拙者が自慢のお肴がござるで、ソレ、珍齋、關助、お杯を濟まして、奧へ持つて參れ。

兩人　ハツ。

ト兩人、銚子杯その外持つて入る。

八之　まだこの上に御趣向の、お肴とござれば、何でござらうな。

運八　定めて何か風流な、御趣向を思ひ附かれて

官六　我れ〳〵を困らせる、御作意でござるかな。

兵衞　イヤ〳〵、趣向と申して外の儀でござらぬ。今晩奧庭の森にて、皆々の剛膽試しに、奧座敷にて、百物語りを申しつけてござる。諸國の怪談にて、百筋の燈心を、次第々々に滅じて、剛膽の心試しが拜見いたしたうござる。

三人　イカサマ、これはよろしうござりませう。

トこの時珍齋、ツカ〳〵と皆の前へ、茶を持つて出て來り

珍齋　ハイ、お茶を上がりませ。

トべつたり坐る。皆々恟りして

八之　オヽ、茶道の珍齋か。

三人　恟りしました。

兵衞　ハヽヽヽ、時に、今宵の珍客、水右衞門どのは如何召されたな。

鄉兵　水右衞門どのには、この間、病氣で引込み居られれども、今宵はこなた樣よりお招きなさるゝゆゑ、病中ながら長髮の御容赦にあづかり、是非參るとの事でござりました。

官六　こりや慥かに、香川半次郎どのゝと、御同道と申す

やうな事でござらう。

運八　なんぼ病中と申しても、今晩始めての事でござれば、ちつとは男の拵らへに、手間取りませうて。

兵衞　ハヽヽヽ。なにサ、長髪でも苦しうござらぬに、もう見えさうなものぢやが。

ト此うちに、鄕兵衞、八之丞の袖を引き

鄕兵　イヤ、八之丞どの、よき折柄でござるが、なんと最前のナ、ソレ、彼の貴殿思し召しの事を、兵衞どのへ、申し出してはどうでござらう。

ト八之丞、思ひ入れあつて

八之　成る程〳〵。イヤナニ、兵衞どの、申さば今晩は、めでたい折柄でござれば、拙者申し出でまする儀がござるが、なんとお取上げ下されうや。

兵衞　これは改まつた仰せ。何かは知らず、拙者の心に叶ひまする儀でござらば。

八之　先づ以て忝ない。然らば申し出でませうが、外の儀でもござらぬ、何卒貴殿のお娘御おときどの、御器量と申し、甚だ身共執心でござる。何卒拙者が申し受けたう存ずる。小身者の八之丞でござれば、貴殿のお心には叶ひますまいなれども、拙者面押し拭ひ、斯樣に申し出すからは、仇になされても下さるまい。是非とも所望仕りたい。兵衞どの、願ひと申すは、この儀でござる。早速に返答が承りたい。

兵衞　これは〳〵、何かと存じたれば、身不肖なる娘の事でござるか。先づ以て御懇望の段、千萬忝ない。別して其許樣事は、部屋住みとは申しながら、元は殿の御一家、數ならぬ娘を御所望は大慶なれども、緣談ばかりは親々の自由にも相成らぬもの。先づとくと愚妻なぞとも相談仕り、その上にて如何やうとも、御挨拶いたすでござらう。

八之　イヤ〳〵、兵衞どの、この事に限り、御家內へ御相談では、出來る事も相出來ませぬ。こりや只管、貴殿御一人の御料簡で、偏へに相願ひまする……とサ申したとて、只今早急に御返答も相出來まい。何卒追つて、よろしい御返事相願ひまする。

兵衞　成る程、幸ひ今日は、愚妻も當所の氏神、五所明神へ、拙者が代參に遣はしてござれば、歸りましたる上……何は兎もあれ、何事もお慰みと存じ附いた一趣向、門弟中の劍術、大抵業は達しても、魂が据らねば、まさかの時役に立たぬもの。一つは武士の心掛け。百筋ある

灯火を、次第々々に灯も暗くして、心細くなる折柄、人の強弱の知れるもの。分けて手前屋敷は、家中一の大庭、皚々と生え茂り、狸なぞも、いつの頃よりか棲みますれば、そこが何れもの膽試し。サア、某が御案内。

八之　イカサマ、またお座敷を變へて、御馳走にあづかりませうか。

三人　然らば、我れ〳〵も

兵衛　サア、ござらつしやりませう。

ト時の鐘、唄になり、八之丞、先に郷兵衛、官六、運八、兵衛附いて奥へ入ると、この唄のうち向うより、野田藤四郎、初幕の形にて、留守居提灯を持つて、出て來る。後よりおらい、着流しにて出て、花道にて

らい　もう大方、お客の最中であらう。思ひの外遲うなつたので、心が急かれる。さぞやお待兼ねなされてゞあらうわいなア。

藤四　左樣でござりませう。定めて御家中若い方々、日頃のお弟子、今宵は御馳走でござりませう。

らい　また其やうなさもしい事。早う歸つて、御挨拶を申しませうわいの。

ト行かうとする。藤四郎、思ひ入れあつて、おらいを止め

藤四　モシ〳〵、ちよつとお待ちなされませ。道にも申し上げましたが、彼の水右衛門さまの事、お返事はどうなされて遣はされまする。私しもひよんな事を頼まれまして、此やうな迷惑な事はござりませぬ。

らい　コレ、藤四郎さま。お前は私しを何と思うて、其やうな事を云はしやんすぞ。門弟衆も多いうち、分けて内弟子といふものは、譯のあるものぢやござりませぬか。それに何ぞや、師匠の女房に不義の取持ち。マア、師匠が大事か、他人が大事か、とつくりと考へて見たがよい。この身に限つて、どうして其やうな、道に背いた怖らしい事がなりませう。重ねて其やうな事を聞くと、キツと主へ云ひますぞえ。

ト此せりふを云ひながら、そろ〳〵舞臺へ來て、内へ入る。藤四郎、思ひ入れあつて

藤四　イエサ、私しも、師匠が大事大切と存じますゆゑ、ツイ斯樣な事を申し出しました。ひよつとあなたの、つれない御挨拶でもなされた時は、また無法な水右衛門さま、どのやうな事を致さうも知れませぬ。そこを案じまして、斯樣に幾度も〳〵申しますではござりませぬか。

ハテ、人さへ知らずば、後のへる物ではなし、どうぞして遣はされませ。

らい　エ、モウ、又しても〳〵、云はして置けばどこまでも、其やうな事。この上押して其やうな事云やると、その分にして置かぬぞ。

ト行かうとする。藤四郎、裾に取りついて

藤四　モシ〳〵。

ト引きとめようとする。おらい、振り切つて

らい　茲な恩知らずめが。

ト唄になり、ツイと奥へ入る。藤四郎、ムツと立ち、思ひ入れあつて

藤四　おきやアがれ。悉皆おれが口説くやうだ。成る程、悪堅い嬶アめだ。どうぞ柔らかに、クル〳〵と、くるめる仕様が、ありさうなものだがなア。

ト思案して居る。唄になり、花道より中間、提灯を持つて出て來る。後より、水右衛門、袴、羽織にて出て來る。後より、半次郎、同じく袴、羽織にて出て來る。花道にて、水右衛門と辭儀合ひあつて

水右　これは〳〵半次郎どの、拙者は兵衛どのゝ屋敷へは、今晩始めてゞござれば、よろしくお願ひ申すでござらう。

半次　これは〳〵。然らば御案内旁々、お先へ參るでござりませう。

ト舞臺へ來て、枝折り門の外へ來て

これが兵衛どのゝお構へでござりまする。

水右　赤堀水右衛門

半次　香川半次郎。

兩人　參上いたしてござる。

トこれを聞いて、藤四郎、出て

藤四　これは〳〵、ようこそお出で下されました。先づ先づお通り下さりませう。

水右　然らば、半次郎どの。

半次　先づ〳〵お先へ。

ト舞臺へ通る。半次郎も續いて入る。藤四郎、水右衛門、思ひ入れあつて

藤四　分けて水右衛門さまには、今宵の珍客と承りましたが、ようこそお入りなされました。

水右　イヤ、今宵は只管兵衛どのゝお招きゆゑ、病中ながら押して參つた。

藤四　それは一入の事でござりまする。イヤ、それはさうと、兼ねてお頼みの彼の

ト云はうとする。水右衛門、咳拂ひして、半次郎が居るから、云つては惡いと云ふ思ひ入れ。藤四郎呑み込み

オヽ、それ〳〵、左樣なら早速奥へ參つて、水右衛門さま半次郎さま、お出での樣子を、ドリヤ、お取次ぎ致さうか。

ト合ひ方になり、藤四郎、下座へ入ると、引違へて奥より、八之丞、出て、水右衛門を見て

八之　これは〳〵、水右衛門どのでござるか。よい所でお目にかゝつた。この八之丞が武士は廢りましたわい。

水右　それは、如何やうな儀でござる。

八之　イヤ、兼ねて貴殿へも申して居つた、おときの事でござる。何でも今晩の日待をしほに、貰ひかけうと存じ望みかけました所が、それも叶はず、餘りの無念に存ずるゆゑ。この上は彼の印可の

ト云ふを水右衛門、目まぜで、半次郎へ思ひ入れ。これにて八之丞、こなしあつて

ハヽ。拙者と致した事が、今晩の百物語りで血の道をあげ、半次郎どのへ、御挨拶も致さぬ失禮の段。半次郎どの、眞平々々、御免下されい〳〵。

半次　これは御挨拶。八之丞どのには、お早うお出でゞござりましたなア。

八之　拙者もお先へ參つて、大きにたべ醉ひまして、何かモウ、胸が搔きむしりたうござる。

ト此せりふのうち、バタ〳〵になり、下座より郷兵衛官六、運八、走り出て來て、官六、矢庭に水右衛門へ行き當り、バッタリとこける。皆々介抱する。官六、驚ろき

官六　オヽ、これは水右衛門どのでござるか。今晩兵衛どのゝ趣向、百物語りの怪談に、燈心を一筋づゝ減らして

ト　ふる〳〵慄へながら話すゆゑ

水右　何ぞ怪しい妖怪にでも、出合ひ召されたか。

官六　サア、逢ひました〳〵。何か物凄い〳〵と存じて、フツと庭を見ますと、古井戸より眞青な火が、ボカリボカリと、出ましたに依つて、おのれ妖怪ござんなれと、眞ツ二つに切り捨てゝ參つた。

水右　それに又、貴殿の額の疵は、如何召されたのぢや。

官六　サア、これは何でござる。思はず後へ飛びしさる時ツイ柴垣で引ツ搔きましたのでござる。

郷兵　なんの事だ。ちと嗜まつしやるがよい。

ト半次郎、思ひ入れあつて
半次　ハテ、合點のゆかぬ。兵衞どのゝ屋敷に、怪しき事のあらう筈がございませぬ。いづれ兵衞どのへお目にかかり、見屆けまして參りませう。何れも方、御免下されい。水右衞門どの、お先へ參りまする。
　ト半次郎、刀を取つて奧へ入る。八之丞、思ひ入れあつて
八之　なんと水右衞門どの、奧庭の妖怪、なんとも合點參らぬではござらぬか。
水右　ハテ、何も合點のゆかぬ事はござらぬ。その妖怪もコリヤ。
　ト囁く。八之丞、呑み込んで
八之　ハ、ア、成る程、それで讀めた。そんなら、彼の
　ト云はうとして、皆々を見て、外へ散らし
イヤモウ、最前より皆、貴殿のお出でを、今や〳〵と待ち兼ねてござるが、サア、水右衞門どの、奧へお出でなされぬか。
水右　成る程、左樣いたさう。併し、百物語りでござらば樣々恐ろしい話しも、出ましたでござらう。拙者なぞは怪談なぞは一向存ぜず、その上に不辯でござれば、お話しは一向出來ませぬ。併し、不辯と申す內にも、どうか斯う面白い、奧ゆかしい戀話しならば、お話し申す心もござれど、畢竟子供騙しのやうな百物語りなぞは、餘り口元の事。これを思へば、兵衞どのは、結構人かと存ぜられますわえ。
八之　左樣でござる。兎角當世は、柔らかな戀話しでなければ冴えませぬ。なんと、ちと心の浮かれる色話しが、
　承りたいな〳〵。
鄕兵　左樣でござる。ちと奧の話しも滅入つたやうでござれば
運八　何なりとも一つ二つ、互ひにお話しなされぬか。
官六　また水右衞門どのゝ風流では、面白い色話しがござらうてな。
八之　サア、水右衞門どの、兵衞どのへお逢ひなされぬうち、ちよつと爰でお話しなさるも、また一興でござる。サア、是非とも
三人　承りたい。
水右　然らば日待の口切りに、これにてちよつと、戀話しを致さうか。
四人　サア〳〵、こりや、聞き事であらう〳〵。

水右　お聞きなされい。しかもまだ生々しい、四五日以前の事でござるて。

八之　それは珍らしい事でござるな。

水右　さればサ、折節その日、非番でござれば、天龍川へ川狩に參つた所が、その爪音色音といふものは、誠に鬼神も取ひしぐべき琴の唱歌、しかも屋根船にて、その聲の麗しさ、面白さ、陸に居つた者は、皆々ドツと褒めてばかり居つて、歸る方角を失ふ程の事でござつた。

四人　ハテナ。

水右　時に、暫らくあつてその船より、出ました女の、今を盛りの女房振り、色白で中肉、脊はスラリとして、どこに一つ云ひ分のない、しやんとした屋敷風。先づ物に例へて云はゞ、役者に取つては小佐川常世といふ代物ゆゑ、サア、何か此方の方から、是非その爪音を今一曲、お聞かせなされいといふ、陸からは酒の相を頼むと云ふ一向盆體ゆゑ、その女も持てあましたと見えて、その女の申すには、私しが只今陸へ向けて、抛ります物がございます、それをお拾ひなされたお方のお杯を、受けませうと云ひさまに、ホイと、抛つてたところが、コレ、御覽下されい。

ト以前の香箱を出して見せる。皆々、ぞく〳〵するこなし。

八之　イヤ、面白くなつて來たわえ。そこで〳〵。

水右　サア、爰が肝心の所。その香箱を待つて居て、拙者を、その船の中へ入れましたワ。

八之　ヤア、乘つたか〳〵。

水右　何か船へ乘ると、彼の女房が、拙者の手を取りまして、サア、云ふに云はれぬ風情があつて、其方此方抓つたり何かするうちに、端に居つた腰元やら女やら、粹を通して、どうか致したはずみ、燭臺を打ちこかすと、サア眞暗。サア、これで御推量下されい。

三人　エヽ、堪らぬわえ〳〵。

八之　して、その女房を。

水右　たうとう手も濡らさずに、しつかりと契りました。

三人　こいつは堪えられぬ。

ト官六、水右衞門へかぢりつく。鄕兵衞は八之丞へ抱きつく。此うち兵衞、障子屋體に聞いて居て、この時ズツと出る。この途端、一緒に運八は兵衞へ抱きつく兵衞、振りのけるゆゑ、これにて皆々顏見合せ、悔りして

二人　これは先生。
郷兵　不調法なるこの構へ。
兵衞　そりや、何流でござらう、ハヽヽヽ、時に水右衞門どの、先刻よりお待ち申したに、ようこそ御入來、忝なう存じまする。
水右　これは〳〵、今晩は珍らしい御趣向、新參の拙者までお招き下され、千萬忝なう存じます。
兵衞　イヤ〳〵、今晩の上客は、其許が第一。また近頃から手前の國へありつき召され、日を追つての御立身、誠に侍ひのあやかり者。每度役所にて御意得まするばかり、ツイに沁み〳〵お話し申さねば、それゆゑ見苦しくとも、手前屋敷へお招き申すも、この上ながら、內外とも御別懇に申したいと存じ、今宵の仕儀、萬事お心置きなくお話し下されい。
水右　これは〳〵。併し、拙者は媚び諂ひます事が、きつい嫌ひでござれば、御覽の通りの不束者、餘りお構ひ下さるゝな。併しながら、斯樣に殿のお見出しに與り、當家へ有りついた拙者、兵衞どのには、最早御老年と申し世俗に申す通り、麒麟も駑馬に劣るとやら……ハヽヽ、イヤ、必らずお心にさへられな。
兵衞　イヤ、これは水右衞門どのゝ大丈夫なお詞。某、感心いたしてござる。サア、これからは百物語りの致し殘し、または御酒一獻差上げたい。爰は端近、先づ〳〵奧へ。ソレ、何れも方、御案內。
皆々　水右衞門どの。
水右　然らば御免下されい。
兵衞　サア、ござりませう。

ト唄になり、水右衞門、先に、八之丞、郷兵衞、官六運八、奧へ入る。この時水右衞門、わざと見物へ見せるやうに香箱を置いて入ると、兵衞殘り、思ひ入れあつて

日頃噂に聞いた、水右衞門の不敵。彼奴、殊に色好みの高話し、武士の風上にも。

ト云ひながら、フッと落しある香箱を取上げて

この香箱は、井筒に菊唐草の蒔繪。こりや、慥か女房が所持の香箱。すりや、今の話しの女といふは、正しく女房。併しながら、日頃より貞節といひ、よもやとは思へども、人の心の底は知れぬ。ハテナア。

トいろ〳〵思ひ入れして居る。合ひ方になり、奧よりおらい、出て來る。これにて兵衞、香箱を懷中して、

素知らぬ顔にて、煙草をのんで居る。

らい　オヽ、これにお出でなされましたか。いま奥にはお話し最中。あなたをお呼ひなされてゞござりましたわいな。

兵衛　オヽ、その筈〳〵。イヤ、水右衛門にも見えられたが、身が宅へは初めてなれば、其方にも引合はさうと思ふうち、朋輩衆も見えられて、たつた今行かれたて。

らい　エヽ、そんなら今奥で、フツと見ましたが、慥か大柄な男が、水右衛門でござりまするか……エヽ、思ひ廻せば。

トこなし。

兵衛　おらい、そちや何を其やうに申すのぢや。

らい　エヽ。

兵衛　そちや、水右衛門を存じて居るか。

らい　どう致しまして。

兵衛　でも、何か存じて居るやうな其方が振舞ひ。悪推ではなけれども、得ては人目堤傳ひに乗つて、焦るゝ船の中なぞで……サア、ツイ近付きになる事ぢやて。

らい　エヽ、わつけもない。どう致しまして、アノ、意地悪さうな。

兵衛　そちや、水右衛門の意地の悪いと云ふ事を、よう存じて居るな。

トおらい、ハツと思ひ入れあつて紛らし

らい　イヽエ、人はちよつと見まして、好いと悪いは知れるものでござりまするわいな。それは格別、ちとあなたに、お願ひがござりまするわいな。

兵衛　改まつた願ひとは。

らい　外の事でもござりませぬ。總領の兵助、胤腹分けたお子とては、兵助どのと、あのおとき。その兵助は御用金の紛失ゆゑに御勘當。どこにどうして居る事やらと、後先思ひ廻しますれば、家を立つべき總領は、どこまでも兵助、どうぞ御思案なされて、御用金紛失の手懸り、もしや知れてもあらうならば、御勘當もお許しなされて、元々通りに致したい、わたしが願ひ。義理ある仲ゆゑ、それなりに致しましては、どうも済みませぬ。爰の道理をお聞分けなされて

トせりふのうち

兵衛　エヽ、これサ奥、役にも立たぬ事、もう捨てゝ置きやれ。御用金紛失いたせし科ゆゑに、勘當いたしたればいづくに居らうとも、又のたれ死いたさうとも、なに構

はぬ事、捨てゝ置きやれ〳〵。アヽ、その子供の事で思ひ出した。其方へも相談いたさにやならぬ仕儀と云ふはアノ今晩奥に來て居らるゝ、磯田八之丞、何卒娘おときを妻にくれいと、取りしきつての所望ゆゑ、身は遣はす存じ寄りぢやが、其方はどうぢや。

　トおらい、愕りして

らい　エ、モウ、あなたも滅相な。今では一人の大事の娘。どうぞ、あの子の好いた男でなければ。

兵衞　ムウ、すりや、好いた男が、どこぞにあるか。

らい　イエ〳〵、男はなけれども、どうして、アノ、可哀さうに、あの子の夫に、八之丞さまが、氣に入りませうぞいな。

兵衞　氣に入らぬと云うて相濟まうか。

らい　何は兎もあれ、兵助どのは御勘當、跡を立つべき娘なれば、外へ遣はさるゝ事は、マア、成りますまい。

兵衞　して、娘が氣に入つた男があれば、其方が世話して持たすぢやまで。

らい　ハテ、一生連れ添ふ男なれば、せめてあの子のこれぞと云ふ、殿御を持たせてやるが、親の慈悲でござりますわいな。

兵衞　成る程、子を持つて知る親心、人前作る表面には、我が子大事大切と、口と心は裏表。

らい　エ、。

兵衞　サア、裏表あるこの扇。

　ト出して開き

これを見やれ。扇面は水に漂ふ捨て小舟、流れ渡りと思ふうち、身に振りかゝる寸善尺魔、これ程に切り削り合せた、竹も人の手に渡り、摺り磨けばこそ艶もあり、棘も立たず、貴人高位の手にも觸るゝ。さればこそ、淸く心を淸淨に磨き上げ、左右よりしつかり挾む親骨の、心が肝心、大事の要。サア、なんぼ見目よき扇でも、この要のゆるぐ時は、元の白地になり、遂にはその身の妻くれない、子骨も離れ〳〵。

らい　サア、その詞の出ぬうちにと。

兵衞　川船の、深きよどみにさす棹の、及ばぬ中を何か恨みん。娘持つ身の親心、武士の面を汚さぬやう。

らい　エ、。

兵衞　とつくりと、云ひ聞かしやれ。

　ト唄になり、兵衞、思ひ入れあつて奥へ入る。おらい思ひ入れあつて

らい　心あり氣な夫の詞。また天龍川の侍ひが、水右衛門であらうとは、夢に知らぬ事とはいへど、今の夫の詞では、これも氣がゝり。どうぞ罪ないこの身の潔白、晴らす仕樣がありさうなもの。それに又、可哀や、あの娘、思ひ合うた仲と云ひ、今宵のうちにどうぞして、日頃の思ひが晴らさせてやりたい。彼れと云ひ、これと云ひ、この身に迫る夫の心。ハテ、よい思案が、ありさうなものぢやなア。

ト思案する。時の鐘、唄になり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、眞中九尺の屋體、下の方、柳の大木、一面に小笹垣茂りたる體。下の方に草井戸、柴垣、石燈籠、仕掛けあり、うしろに築山、この道具、時の鐘にてとまる。

ト下座より、珍齋、頬かむりにて、濱燒の鯛を引ッ抱へ出て來り、あたりを窺ひ

珍齋　まんまと盜んだ鯛の濱燒、後でゆつくりしてやらうと思つて、すつかりとやらかしては來たが。

ト無性に鯛を食ひながら

エヽ、一時にも食はれない。ちつとのうち、どこぞへ忍ばせて、また後の樂しみにしたいものだが。

ト方々を見て

よし／＼、よい所があるて。幸ひの燈籠、それ／＼、あの中へおツ隱くして置きやア、誰れも氣の附く事ぢやアない。それ／＼。

ト燈籠の中へ隱す。この時、下座より、バタ／＼の音するゆゑ、珍齋、愕りして奥へ入る。誂らへの合ひ方になり、下座より、半次郎、庭下駄にて、手燭を持ち出て來り、思ひ入れあつて

半次　如何にしても心得ぬ皆々の話し。妖怪の出るといふ草井戸はこれならん。あはれ妖怪に出ツくはさば、手取りになさんものと思ひしに、その樣子もなきは、イカサマ、人の心の迷ひ、正法に不思議なしとは、ハテ、よう云うたものぢやなア。

ト思ひ入れ。ドロ／＼、寢鳥になり、下座より一寸法師、一つ目の大頭の化け物にて出て來る。半次郎、これを怪しみ、切り拂ふ。ドロ／＼になり、下の植込みの邊へ消える。又ドロ／＼になり、大きな下駄の化け物出て來る。半次郎、切り拂ふと、これも植込みのあたりへ消える。又ドロ／＼、雨車、化け物の合ひ方に

なり、珍齋、八丁笠をかぶり、徳利を持つて、チョロチョロと出て、合ひ方に合せて、牛次郎、切り拂ふと、また植込みの中へ消えると、これより薄ドロ〳〵、誂らへの合ひ方になり、上の藪垣より、燒酎火燃ゆる。これにて、牛次郎、キツと思ひ入れあつて、身拵らへすると、藪垣、ザワ〳〵と音して、垣を押分け、おとき、振り袖、白無垢、かつぎにて額を隱し、出る。後より、關助、ソツと出て窺ひ居る。牛次郎、キツと目を附ける。

とき　モシ〳〵。

ト恥かしき思ひ入れ。關助、聲が小さい、大きな聲でと仕方する。

それでもどうも。

關助　エヽ、もどかしい。そんなら、わたしが代つて申しませう。

ト關助、思ひ入れあつて、作り聲して

モシ〳〵、牛次郎さま〳〵。

ト呼ぶ。牛次郎、こなしあつて

牛次　ヤア、我が名を呼びしは、正しく怪性のもの、尋常にその正體を顯はすまいか。

關助　エヽ、牛次郎さま、何を其やうに怪しいものぢやござりませぬ。わたしやお前に迷うて居る、幽靈でごさんすわいなア。

牛次　何にもせよ、狐狸の所爲ならん。その正體を。

トまた切り拂ふ。關助、これを止めて

關助　モシ、牛次郎さま、お待ちなされませ。私しはお草履取りの關助でござります。何も怪しい者ではござりませぬ。この有樣も、未來で浮み兼ねて居さつしやる幽靈を、今連れて參ります。どうぞ浮ましてやつておくれなされませ。卽ちその幽靈は、コレ、爰に。

トおときを突きやる。牛次郎、悃りして

牛次　ヤア、おときどのか。

とき　牛次郎さま。

ト寄り添ふ。この時、關助、手ばしこく手燭を消して直ぐにおときを抱かす。

關助　ソレ、爰でドロ〳〵寢鳥。

トどろ〳〵、寢鳥の合ひ方になる。

牛次　こりや、明りを消しておときどのを、どうするのでござるぞいの。

とき　サア、今宵日待に門弟衆の、剛臆の心を引き見る百

物語り、それ幸ひに幽靈になつて、半次郎さまに日頃の思ひを晴らせよと、母樣の粹なお情。二つの年、誠の母樣に死別れ、今の母樣は繼しい仲でも、ほんの母樣よりも不便がつて下さりまする有り難さ。どうぞこの上半次郎さま、表向から入つて、女夫になつて下さりませいなア。

關助　それ〳〵、幽靈の白無垢は婚禮の白小袖、百物語りの怖い所を取つて置き、これからが色直し。サア、半次郎さま、斟酌なしに、御返事々々々々。

半次　それぢやというて、親の許さぬ事と云ひ……さりながら、それ程までに思うて下さる事なれば。

關助　御承知かな〳〵。

半次　マア、返事仕りませうわいの。

關助　ヤレ〳〵、それで心が落ちつきましたわえ。

半次　それはさうと、心得ぬは、柳の梢に燃え立つ心火と云ひ、また今の動搖、最前の妖怪は。

ト下座の方より

珍齋　その狂言の作者は、この珍齋でござりまする。

ト差し金その外、いろ〳〵の道具を持つて出る。

皆云ひ合せにて、この戀を取持たんと、ヒユウドロ〳〵は鼻の赤い、權兵衞を頼んで打たせ、心火と見えたは、差し金附きの燒酎火、米屋の文太を騙して、傳授してもらひました。また狸小僧の雨夜の酒買ひは、頭役の茶道の珍齋でござりまする。

ト八丁笠、德利を出す。

また下駄の化け物と見せましたは、尾張町の俎板屋で、俎板を借りて、江戸橋の鼻緒屋の看板をすげての化け物。また一つ眼の坊主頭は、茶屋町の鶴屋の米でござりまする。

關助　なんと、よくした化け物でござりませうがな。

半次　されば師匠の仰せにも、その正體を見屆けて、討つて捨てよとあるゆゑに、最前切り拂ひしも、嚇しの爲とは云ひながら、危ない事であつたなア。

關助　サア、斯うなるからは、ちつとも早く切りあげて、諸事はお二人しつぽりと、お話しなされませ。

半次　それぢやと云うて。

關助　サア、色直し〳〵。

ト關助、無理に半次郎、おときの手を取り、眞中の圍ひへ入れ、障子をさして

サア、これから骨休めに一杯やらかさう。サア、來やれ

來やれ。

ト合ひ方になり、兩人立つて、下の方へ入ると、時の鐘になり、おらい、手燭をかざし、窺ひ／＼出て來る。

らい　先刻奥で斯う／＼せいと、關助にも云ひ含めては置いたが、首尾した事やら、これも苦勞ぢや。

トそろ／＼圍ひを窺ひこなし。この後へ、水右衞門、ツツと出て來て、おらいが袖を取つて

水右　おらいどの、水右衞門でござる。

トおらい、これを聞き、恟りして

らい　水右衞門さま、あなたはこれへ、何しにお出でなされました。

水右　イヤ、拙者これへ參つたは、外でもござらぬ。矢ツ張り其方樣に逢ひたさゆゑ、後を慕うて參つてござる。なんとおらいどの、この程よりお弟子の藤四郎を以て、申し入れ置いたが、お聞き下されたか。コレ、おらいどの、是非御返事が、承りたうござる／＼。

トしなだれる。

らい　成る程、お志しは隨分有り難うはござりますれども、私しには、兵衞と申しまする、立派な夫がござりまする。

水右　成る程、それ合點。主のある事存じて惚れた花。この間天龍川で、無體を申したも、承知して致した事。サア、一命捨てゝ申し出した事でござる。サア、おらいどの、色よい返事が承りたい。

トおらい、默つて居る。水右衞門、思ひ入れあつて

斯樣に申しても御挨拶のないは、御不承知か。否でござるか。ようござる。武士たる者が一大事を申し出し、承知ないと云つて、それなりに致し置かうや。この上は水右衞門、恩を仇なる思案をお目にかけう。

トずつと立つて、圍ひへかゝらうとする。おらい、あわてゝ留める。

らい　マア／＼、お待ちなされて下さりませ。

水右　イヤ／＼、水右衞門が見屆けたは圍ひの內の不義者お家の法度を背く大罪人。いま引摺り出すは易けれども一人の娘が可愛いと思はゞ、不義者になつて水右衞門が心に

ト引寄せる。

從ふ心はないか。

トおらい、これにて思ひ定めて

らい　成る程、お心に從ひませう。
水右　いんにや／＼、あんまり早い／＼。その手で行く水右衞門ぢやアない。この場を拔けて手盛りを食はさうと思つても、そんな古手な淺い事ぢやア呑み込まぬ。
トおらい、所詮といふ思ひ入れあつて、水右衞門が差添を拔いて、バツタリと指を切る。合ひ方になり、水右衞門、思ひ入れあり、おらい、こなしあつて指を取つて、水右衞門が前へ出し
らい　サア、夫へ預けた女子の體、斯う疵つけたらば不義は遁がれぬ。お前も覺悟でござんせうがな。
水右　成る程、疑ひ晴れた。その心底を見たからは、長く爰に足は留められぬ。兵衞が目にかゝらぬうち、今宵のうちにこの所を逐電、いづくの浦でも誰れ憚らず。
らい　そんならこの場を。
水右　コレ、今宵の日待を幸ひに、よい時分に摺りぬけて出合ふ所は城下の出外れ、小松原。
ト懷中より百兩包みを出し、おらいに渡す。おらい、取つて
らい　このお金は
水右　旅の路用。

らい　そんならこれを
水右　水右衞門が變ぜぬ心。
らい　しつかりと預かりました。
水右　必らず人に覺られぬやう、合點か。
らい　合點でござんす。
ト時の鐘になり、水右衞門、下座へ入る。おらい、金を出し、手燭にて改めて
エヽ、忝ない。この金こそは慥かに覺えの極印。ちつとも早うこの事を、兵衞どのへ。
ト行かうとして
イヤ／＼、水右衞門が目を附けて、心を殘したこの圍ひ人目にかゝらぬ其うちに、早う二人を。さうぢや。
ト圍ひの障子を明ける。此うちに兵衞、袴にて莨盆を扣へ、莨のんで居る。おらい、恟りして
ヤア、あなたはいつの間に。
兵衞　そちや、何しに參つた。
トおらい、思ひ入れあつて
らい　サア、私しがこれへ參りましたは、オヽ、それ／＼今宵の百物語り、怖い／＼と存じまして、たべつけぬ御酒をたべましたゆゑ、ちつと酒の醉を醒まさうと存じま

二番目
大でき

して。

兵衛　身もたべ醉うたゆゑ、これで鬱散いたさうと存じ居つた。併し、酒の氣を借りて、心を丈夫にせうとは、根が臆病ゆゑぢや。

らい　サア、その臆病な癖に、怖い話しを聞きたうござりまするわいな。

兵衛　成る程、然らば身共が、眞に怖い話しを致して聞かさうか。

ト合ひ方になり、平舞臺へ下り來る。おらいも思ひ入れ。

さて、聞きやれ。さる屋敷の妻が、川狩に出た所が、その船へ侍ひが乘り合せて、その妻に樣々戲むれたといふ話しがある。

トおらい、ハッと思ひ入れ。

其方は、何を其やうに驚ろくのぢや。

らい　サア、その女子の心が思ひやられて。

兵衛　サア、女といふ者は、弱いやうな丈夫な者で、その侍ひと肌身を穢し、また逢ふまでの印なぞと、秘藏した香箱を、侍ひに渡したところが、聞きやれ、不思議にもその香箱が、身が手に入つたぢや。

らい　エヽ。

兵衛　しかもその香箱は、井筒に菊唐草、なんと覺えがあらうがな。

らい　成る程、もう〳〵斯うなつた上からは、隱しても隱されぬ。御推量の通り、如何にも不義いたしました。その證據は香箱よりも、これ御覽じませ。

ト指を見せる。兵衛、思ひ入れあつて

兵衛　すりや、指まで切つてな。

らい　サア、この身に取つて詮ない事ながら、兎角兵助おときの事を。

兵衛　ヤア、性根の腐つたおのれの口から、いらざる世話立て。先づそれよりは、不義者の覺悟。

ト切りつけるを、立廻りあつて、おらい、兵衛を止めて、水右衛門より受取りし金を出し

らい　モシ、これ御覽じて下さりませ。

ト兵衛、取つて見て

兵衛　すりや、この金子、水右衛門より受取つたか。

らい　サア、その金あなたへお見せ申すが、誠の不義ではない證據。こりや悴兵助どの、その夜に奪ひ取られし一千兩の金子、松と云ふ字の館の極印。すりや、盜賊は水

右衞門。
兵衞　なんと。
らい　サア、とてもわたしは覺悟の前。あの水右衞門が見附けたる、娘が不義の身代りに。
兵衞　ヤ。
らい　身は穢さねど長らへては、お前の武士の立たぬ譯。死んだ後ではその金の、極印證據に詮議して、義理ある我が子兵助が、勘當許して下さりませ。これがこの世の願ひぢやわいなア。
兵衞　出かした女房、よく不義した。女の操立て通し、娘が不義の‥‥サア、不義したゆゑにこの金の、手に入つたるは、身共へ深切とは云へ、最前水右衞門、この香箱を證據になし、彼れが口から密通せしと申すからは、其方を助け置く時は、女房に迷ひ助けしと、人の口には戸が立てられぬ。どこまでも不義者の、汝が首打ち水右衞門めに鼻明かせ、その上にては金子の詮議、盜賊出れば其方が願ひの通り。
らい　あの兵助が勘當も
兵衞　ハテ、赦さいでなんとせう。
らい　親子一世の娘が顏も

兵衞　未練な不義者。
らい　二世の夫へが
兵衞　未來で再緣。
らい　待つて居りまする。
兵衞　天晴れ貞女。
らい　そのお詞が
兵衞　この世の名殘。
らい　死んでも本望。
兵衞　不義者、うせう。
ト引立て、二重舞臺へ、ツカ／＼と上がり、障子を引立て、內にて「エイ」と首打つ。障子へサッと血煙り立つ。時の鐘になり、下座より、八之丞、股立ちにて鎗を持つて、窺ひ／＼出ると、誂らへの燈籠、段々に歩いて出る。これにて、八之丞、恟りして鎗をしごき、構へて、木燈籠の動き歩くを突き止めて
八之　皆々、出合ひ召されい／＼。礒田八之丞。變化を突きとめてござる。出合ひ召され／＼。
ト呼ぶ。鄕兵衞、官六、運八、出てくる。
鄕兵　さて／＼、お手柄でござる。
官六　流石は八之丞どの。

運八　お氣性の程

三人　感心いたしてござる。

八之　なんと何れも、よつく見られよ。ソレ、その如く木燈籠に、手足が出來まして、これまで歩き來るぢや。さてこそ、御參なれと、拙者がためらひ居るとも知らばこそ、次第々々に踊り歩きますゆゑ、妖怪に相違なく、只一鎗に突き止めましてござる。最早これにて、妖怪も根を絶つたでござらう。

官六　成る程、イカサマ、狐か狸の業でござらう。

運八　とてもの事に、正體を見ませう。

郷兵　それがようござらう。

　ト官六、立ちかゝつて、木燈籠を改め見ると、燈籠の内に、猫、以前の鯛を咬へ、殺されて居る。

官六　ハヽヽヽ。化け物の正體を見ましたが、誰れやら魚を燈籠の中へ隱し置いたを、猫めが目掛けて動きましたを、變化とは

三人　ハヽヽヽ。

八之　イヤサ、何れも笑ひ召さるゝな、これは猫にも致せ、最前より、彼の半次郎が見えませぬ。しかも幽靈の正體を見屆けんなぞと申したが、何れへ參つたやら、一向見えませぬ。これも不思議。

郷兵　それ〳〵、もしひよつと、そこらに目でも廻して居るかな。

三人　探し召されい〳〵。

　ト云ふうち。水右衞門、出て來て

水右　これサ、何れも、その變化の正體。この水右衞門が見屆けてお目にかけう。

　ト手燭を取つて、八之丞に囁く。八之丞、皆々へ囁き

八之　すりや、兼ねての手段を。

水右　コレ。

　ト明りを吹き消し、思ひ入れこれにて、皆々東西へ忍ぶと、時の鐘、蛙の聲、凄き合ひ方になり、水右衞門探り〳〵圍ひの障子を開けると、仕掛けにて簞笥の上へ、髮振り亂したるおらいが本首出て居る。水右衞門探り〳〵手に當るゆゑ。よく〳〵探り、持つて恟りして

　こりや、生々しい女の首。

　ト云ふ時、兵衞、手燭を持つて現はれ

兵衞　その首とつくり見よ、水右衞門。

　ト水右衞門、首を見て

水右　こりや、おらいどのゝ首。

兵衛　サア、間男の水右衛門、覺悟なせ。

　ト切りつける。水右衛門、大小投げ出し

水右　待つた〳〵。手向ひは致さぬ。兵衛どの、お急きなさるな。早まるまい。最前落せし香箱が、此方の手に入りしは、包んで益なき一通り、申し開き仕らん。これは全く間違ひと申すもの。この程天龍川での醉ひ紛れに、枕交した不義したと、油を乘せて話しましたは、皆拙者めが誤り。侍ひの身のあるまじき不義密通。決して毛頭覺えはござらぬ。とくと聞分け下されて、疑ひ晴らして下されい。

兵衛　ヤア、武士にあるまい卑怯の一言。然らば女房の不義の申し譯は、先づそれにも致し置かうが、殿の御用金一千兩、盜み取つた事白狀いたせ。

水右　默らつしやい、兵衛どの。御自分の女房の事で血迷うて、樣々な戯れ事。殿より高祿を頂戴いたす、赤堀水右衛門、何が不足で御用金を盜み取つたなぞとは、その分に差置かれぬ。

　ト大小を取つて差し

　サア、今一言云つてお見やれ。その座は立たさぬぞ。

兵衛　盜人猛々しいと、先達て御金番は悴、その砌り一千兩紛失、合點ゆかずと心を附けるに、磯田八之丞が、身分不相應なる女狂ひの放埒。その同類は水右衛門と、サア、尋ねの通り白狀いたせ。最前女房が色香に迷ひ、路銀と渡せし百兩の金子に、松と云ふ極印、サア、かゝる證據の出る上は、遁がれはあるまい。なんとこれでも爭ふか。

　ト疊みかけて云ふ。水右衛門、落ちついて

水右　成ろ程、さう顯はれた上からは、何も隱すに及ばぬ。この上は毒を喰はゞ皿の譬へ。

　ト拔く手も見せず手燭を切り落す。これにて兵衛惆りして立ち、身拵らへする。

兵衛　ヤア、騙し討とは卑怯な奴の。

　トこの聲を知るべに後より、八之丞、兵衛を一太刀切る。兵衛、アツと思ひ入れ。これより水右衛門、上の方に窺つて居る。官六、郷兵衛、運八、兵衛へかゝる。けはしき立廻りあつて、皆々切り倒される。此うち水右衛門、莨をのんで見て居る。また八之丞と立廻りあろうちに、八之丞、危ふくなる所へ、藤四郎、走り出て來て、兵衛が足へ切りつける。これにて兵衛、

弱つて無念なることなしあつて
兵衛　すりや、水右衛門が荷擔人の者どもぢやな。
藤四　オヽ、荷擔人も荷擔人、師匠を見替へて、水右衛門さまへ奉公始め。
水右　そんなら藤四郎も
藤四　これで疑ひ晴れましたかな。
兵衛　ヤア、今まで養ひ置いたる、師匠を見替へる不忠者めが。
藤四　不忠でも鞠子でも、風浪のよい方へ附くのが當世。
八之　とてもくたばる者だから云つて聞かさう。この八之丞も、おときをくれない意趣晴らしだわえ。
兵衛　エヽ、徒黨を以て騙し討とは、水右衛門の人非人めが。
水右　人非人が今知れたか。大べら坊め。とてもの事に、早く往生遂げさせてやるがよい。
皆々　合點だ。
ト八之丞、藤四郎、兩方より切つてかゝる。兵衛、弱りながらけはしき立廻りになつて、藤四郎を引敷き、八之丞へ一太刀浴びせる。この時、水右衛門、側にある鎗を取つて、居ながら、兵衛を突き止める。兵衛、苦しむ。これより兵衛をなぶり殺しにして、八之丞を引き起し、以前の金を八之丞、藤四郎に分けて與へ
水右　人目にかゝらぬうち、早く〳〵。
八之　水右衛門どの、して、兵衛めが息は。
ト水右衛門、刀を拔いて止めを刺し
水右　今が止め。月の出汐に間もあるまい。二人はこの場を、早く〳〵。
兩人　心得ました。
ト奥にてバタ〳〵の音する。
水右　早く〳〵。
ト藤四郎、ヨロ〳〵する八之丞を介抱しながら向うへ入る。水右衛門、兵衛が懷中より以前の尊像を出して
水右　これが伽羅佛の觀音。忝ない。何も落したものはなかつたか知らぬ。
ト方々を見て、大小を差し、懷中をよく改め、觀音をしつかりと懷中して、よしといふ思ひ入れ、此うち下座よりバタ〳〵の音するゆゑ、水右衛門、ちよつと下座へ小隠れする。下座より關助、提灯を持つて出て來る、あたりを見て驚ろき
關助　算を亂せしこの體。ムウ。

ト兵衞の死骸を見て、恟りして

こりや、お旦那兵衞さまのこの體。エヽ、殘念なる事をしたなア。もしやあたりに。

ト提灯を持つて方々見る。此うち水右衞門、ツツと花道へかゝる。關助、いろ／＼こなしあつて、

慥かに敵は。

ト向うを提灯にて見る。水右衞門、提灯へ礫を打つ。關助、思ひ入れ。水右衞門一散に向うへ走り入る。この途端、よろしく拍子

幕。

三幕目

飾間屋敷出立の場

役名──飾間多門之助。同妹、撫子姫。斯波左京之進。曾根次太夫。龜島權太郎。大倉瀬平。香川牛次郎。同若黨、中野藤兵衞。奥女中、美の尾。腰元、明石。同、龍野。同、鳴戸。十左衞門妻、岡野。三木十左衞門。

本舞臺。三間の間、二重舞臺、金襖。すべて飾間屋敷の體、幕の内より次太夫、老けたる拵らへにて、着付け麻上下。權太郎、同じく着附け麻上下、奥女中美の尾、腰元明石、龍野、鳴戸、いづれも出迎ひの見得。時の太鼓にて、幕明く。

ト向う揚げ幕にて

呼び　上使。

ト大太鼓謠になり、向うより左京之進、着附け上下、侍ひ付添ひ出て來て、花道にとまる。

次太　御上使樣には遠路の所御苦勞千萬。イザまづあれへ

皆々　お通りあられませう。

左京　上使なれば罷り通る。

ト本舞臺へ來て、床几にかゝる。

次太　早速御上使さまへ、申し上げまする。

左京　多門之助どのゝ儀でござらう。この程所勞の由、武將家への屆け、承知いたした。して、老體の其方は。

次太　當家の家老、曾根次太夫。

權太　主人多門之助の近習役を相勤むる、龜島權太郎。

美の　私し事は、奥を勤めまする、美の尾と申しまする者。

明石　私しどもヽ取敢へず
腰元　お上使さまのお出迎ひ。
美の　恐れながら、御上意の趣き
皆々　仰せ聞けられ下さりませう。
左京　上使の趣き餘の儀にあらず。當飾間家の領分、志摩の國鳥羽表にて、百姓一揆相起り、國中の動亂。一旦靜まりしと雖も、又ぞろ百姓ども徒黨をなす由、隣國より訴へ。これ偏に領主の執政惡しきゆゑ。尤も多門之助どのには、病中の事ゆゑ。重役たる者相計らふべき筈。早早政治を相改め、取鎭めよとの嚴命。上使の趣き、斯くの通り。
　ト次太夫、こなしあつて
次太　御諚の趣き、委細承知仕つてござりまするが、志州鳥羽は、當飾間家の飼馬領、先達て執權たるこの次太夫、士卒三百騎を從へ、國中を相鎭め、罷り歸りてござれども
權太　又ぞろ一揆相起り、それゆゑこの度は、當家の用人役、三木十左衛門、その役目を蒙むりながら、今に出立とてもなく
　ト云はうとする。美の尾、こなしあつて

美の　アイヤ、憚りながら、御家老の次太夫さま。お指圖ではござりませねども、云はゞ大切なる一國の騷動。御所勞にてはありながら、殿樣へ申し上げ、十左衛門さまとも、とくと御相談の上にて。
左京　イカサマ、尤も。斯くいふ斯波左京事は、多門之助どのとは譜代の列。殊に昵懇なれども、役目は重き武將の上使、一應も再應も、多門之助どのへ對談の上御返答。
權太　先づそれまでは、御饗應の間
左京　然らば案內。
皆々　先づ、入らせられませう。
　ト唄になり、左京先に次太夫、權太郎、奧へ入る。美の尾、明石、龍野、鳴戶、殘る。この唄にて、向うより岡野、着流し、抱へ帶、綿帽子にて、小さな文箱を持ち、中間を連れて出て本舞臺へ來る。
美の　どなたかと思うたれば、十左衛門さまのお內方の岡野さま。
明石　曾根の天神樣へ、姬君樣の御代參と承りましたが
鳴戶　只今お歸りでござりましたかえ。
岡野　今日は、曾根の天神樣へ御代參、殿樣のこの程の

御所勞、其お祈りの護符を戴いて、よう拜んで參りました。

ト文箱を出す。美の尾、取つて戴き

美の　殿樣の御病氣、最早御全快なれど、よい上にもよいやうにと、姬君樣のお賴みにて、御家中のお內方樣を、代り代りの御代參。

明石　その御信心のお庇にやら、この程の御全快。

皆々　私しどもゝ、お嬉しう存じまする。

美の　姬君にも、お前のお歸りをお待兼ね。ちつとも早う、殿樣へ御符を上げて

龍野　また爰で昨夜のお夜詰のやうな、歌かるたを取らうではないかいなア。

美の　そんなら岡野さま、お前もお奥へ。

岡野　わたしは、これでちつと休息して、さうしてお奥へ上がりませう。

美の　成る程、それもさうかいなア。

腰元　そんならお奥へ

美の　岡野さま、お先へ上がりまするでござりませう。

ト唄になり、美の尾、文箱を持ち、明石、龍野、鳴戶、奥へ入る。この唄にて、向うより十左衞門、麻上下、生醉ひの思ひ入れにて出る。此うち岡野、舞臺にて、帽子を取つて、抱へを下ろしたりして居る。十左衞門、花道にて謠をうたひながら

十左　寺と宇治との間にて、關路の駒の隙もなく、宮は六度まで御落馬にて。ハ、、、、、、。源三位も、いらぬ謀反を起して、負け軍に疲れ、眠い紛れに六度の落馬。きつい身知らずぢや。兎角浮世は色と酒。死なざやむまい三味線枕。

ト鼻唄にて本舞臺へ來る。岡野、恟りして

岡野　ほんにマア、あられもない。今日は御用の事にて、加古川の御陣屋まで行かしやんしたが、そりやマアお前、なんの眞似でござりますぞいなア。

十左　こりや、なんの眞似でもない。播州飾間家の用人役を相勤むる、三木十左衞門ぢやが、なんとした。コリヤコリヤ、女房ども〳〵、しつこいものでは呑めぬから、あつさりとした物で、吸ひ物〳〵。

ト岡野、こなしあつて

岡野　お前もマア、好い加減がよいわいなア。

十左　好い加減は、いつもの鹽梅の吸ひ物がよいわい。

岡野　何を仰しやりますやら。爰は、殿樣のお館でござり

ますぞえ。
十左　お館なら、吉野丸か川一丸か。そんなら猶よい吸ひ物があらう。サア、來いよ〳〵。
　ト云ひ〳〵手を叩く。
岡野　なんの事ぢやいなア。滅多に吸ひ物〳〵と仰しやるが
　ト思ひ入れあつて
此やうに酔うて、他愛なう仰しやる事。吸ひ物なら莨の事であらうも知れぬ
　ト莨盆取つて、莨を吸ひつけて
モシ、お前のお好みの、お吸ひ物はこれかえ。
　ト莨を出す。十左衞門取つて
十左　オツト、この事〳〵。其方の付けざしで、この吸ひ物を吸ふぢや。
　ト莨をのむ。
岡野　なんの事でござりますぞいなア。
　トこなしあつて
モシ、十左衞門どの。
十左　なんぢや〳〵。
岡野　わたしやどうも合點が行かぬ。ついにない、お前のこの酔ひやう。殊には大切な鳥羽表の、百姓一揆の鎭め方の、お役目を蒙むりながら、その御出立も延引といひ、この仕儀は
十左　どう見ても、生酔と見えるか。
岡野　さうしてマアわたしが。
　トあたりこなしあつて
遠州の妹おとき、父樣母樣にも、末々は女夫にせうと、仰しやつた香川半次郎、父樣の横死に依つて、實父香川五左衞門どのに暇を受け、この度中野藤兵衞を供に連れ、はる〴〵參りましたも、わたしが同胞の縁に依つて、お前を便りに、親石井兵衞さまの敵、わたしが爲には實の親兵衞さま、半次郎藤兵衞が話しを聞いて、口惜しうて〳〵
　トぢつと思ひ入れあつて
おのれやれ、女でこそあれ親の敵。
　ト云はうとして
とサア、氣は張り弓、引く方の心も甲斐なき、お前のこの體。折角便りに思ひ思うて來た二人を、殿の御用が大切ゆゑ、敵討つどころではないと、捨て置かしやんすゆゑ、お上の事なればと、詮方なうも思ひまするに、そ

の百姓一揆の鎭め方の、御用にも御出立なされぬは、定めて御家中の衆中や、重役の次太夫どのは、お前を卑怯未練にも云うてゞあらうと、思へば悲しく、一つには門弟ながらも、義理ある半次郎へわたしが、何と云ひ譯がござりませう。神佛より便りにして、はる〴〵來たも、お前を敵討の助太刀に

ト云はうとするを、十左衞門、また散らして

十左　エヽ、助けの杯なら、また吸ひ物を取替へて、其方も呑みや〳〵。

ト岡野、十左衞門を見て

岡野　ほんにマア、一向他愛もない、あんまりの事で

十左　呆れて物が云はれぬか。

岡野　アイナア。

トつんとしたこなし。

十左　そんなら默つて、扣へて居い〳〵。

トこなしあつて合ひ方になり、奧より撫子姫、振り袖着流しにて、美の尾、明石、龍野、鳴戶、歌かるたの箱を持ち、出て來て

撫子　これは岡野、そこに居やつたかいなう。

岡野　姫君樣てござりまするか。

撫子　今日は曾根の天神樣への代參、大儀でござつた。皆の衆の信心で、兄上多門之助さまには、段々とお心よく、自らも嬉しうござるわいなう。

美の　岡野さま、見ますれば、十左衞門さまも、お上がりでござりましたなア。

ト岡野、氣の毒なる思ひ入れあつて

岡野　御覽じませ、今日は加古川の御陣屋まで、參られましたが、どれでたべましたか、此やうにマア、醉ひまして。

美の　ついにない事でござりまするなア。

明石　申し、姫君樣のお慰みに、爰で歌がるたお取り遊ばされませぬか。

撫子　そりや、よからうわいなア。

美の　岡野さま、お前も爰で。

岡野　姫君樣のお相手に。

ト合ひ方になり、皆々歌かるたを並べる。十左衞門、こなしあつて

十左　歌がるた、ようござりませう。拙者も取りませう。

ト撫子姫が方へ思ひ入れ。岡野こなしあつて

岡野　お前マア、其やうに醉うてから、不躾な。姫君樣の

お相手に、男は成りませぬ。
明石　それが、ほんの女子の中の、豆煎りぢやわいなア。
十左　なんの豆煎りであらう、百人一首の中にも、小町もあれば喜撰法師、蟬丸の盲目も坊主も、交つて居るではないか。
龍野　サイナア。昨夜のお夜詰めに、お取りなされた歌がるた、殿樣の御病氣をお案じなされて、御苦勞に遊ばすを、人はいざ心も知らず故鄕は。

ト上の句を讀む。

明石　花ぞ昔の

ト下の句を取つて

明石　サア、始めの通りに御本腹。
美の　それから矢ツ張り、菅家、この度は幣もとりあへず
撫子　すら／＼との御全快も、誠に曾根の天神樣の御利生。
明石　シタガ、此方の殿樣は、お大名のうちでも評判の殿振り。
龍野　どこの女中方も、ツイ思ひを懸けられませうが、奧樣も滅多に御油斷は、ナア
美の　奈良の都の八重櫻。

ト上の句を取る。

今日九重に、つい男の悋氣いたしましたわいなア。

ト下の句を取る。十左衞門、思ひ入れあつて

十左　そりやモウとんと違ひなし。この十左衞門などは、花の色うつりけりな。

ト撫子姬の側へ行つて手を取る。撫子姬、恟りして

撫子　何をしやるぞいなう。

ト皆々驚ろきたる思ひ入れ。

岡野　惡戲らしい十左衞門どの。あらう事かあるまい事か、まだお年もゆかぬ姬君樣を捉へて、慮外と云はうか。
十左　ハテ、戀に上下の隔てはござらぬ。コリヤ、其許にも疾から身共が

ト美の尾を捉へる。美の尾退いて

美の　何を惡戲な。モシ、皆樣が。

トこなしある。

岡野　こりやまた、あんまりで／＼。

トきつとなる。

十左　腹が立田川か。道理で顏が、三室の山の紅葉葉ぢや。ハ、、、、、。

岡野　エヽヽ。
　トこなしある。
十左　花より外に知る人もぢやわい。
　トまた撫子姫に抱きつくを、次太夫出懸けて居て、十左衛門を引退け
次太　イヤ、十左衛門どの、何をおしやる。
十左　こなたは次太夫どの。
次太　最前から見て居れば、まだお年もゆかぬ姫君を捉へ申して、戀に上下の隔てはないと、アタ猥らな。殊には御主人、又その上に、お手廻りの女中衆を捉へ、こりや何事でござる。不行儀千萬。
十左　次太夫どのゝお咎め、キツと誤まり入つてござるが、只今のは、なんでござる。
次太　なんでござるとは。
　ト十左衛門、モヂ／＼する、思ひ入れにて
十左　折角取らうと存じ居つたを。
次太　取るとは何を。
　ト十左衛門續いて
十左　この歌がるたを。
次太　ヤ。

十左　また取つて御覽じろ。惡うはござらぬ。女の中へ交つて、歌かるたを取りました事でござるから。
岡野　わたしや、大抵腹が立つてなりませぬわいなア。
　ト思ひ入れあつて
次太　そんなら何か、身共にも取れか。そりや、女中の相手の歌がるたなれば、此方から望んでも、取らうと存じ居つた。姫君様にも、はや朝ぼらけの時、斯うなれば婚禮などは御延引になつては、恨み侘び乾さぬ袖だにあるものを戀に朽ちなんと、すべて御殿勤めの女中は、一生男の肌を知らずに、妾が戀に朽ちなんでござらう。
皆々　そんなら、アノ次太夫さまも
十左　歌がるたを取らつしやるか。
次太　隨分取りまする。コレ／＼、この逢坂山のさねかつらでござるわいの。
　ト歌がるたを取る。
皆々　でもマア、呆れるわいなア。
　ト次太夫心付き
次太　イヤ／＼、身共は歌がるたなぞは、取り申さぬ。十左衛門どの、女に交はり、迷惑千萬。
　トきつと云ふ。

岡野　わたしもあんまりで、悲しうござりますわいなア。
十左　例へ其方が悲しうても、この十左衛門は、女中頭の
　美の尾どのに、峯の紅葉の心あらば
岡野　エヽ。
十左　今一度の御幸待たなん。
　トまた美の尾を捉へようとする。次太夫キッとなる。
次太　ソリヤ。
　ト下座より、權太郎、股立ちにて走り出て
權太　不義者の十左衛門、腕廻せ。
　ト十左衛門へかゝる、十左衛門立廻りにて、見事に取
　つて投げる。
皆々　これは。
　ト中の舞になり、見附けの金襖一面に開く。眞中に、
　多門之助、着付け上下、殿の拵らへにて、上の方に、
　左京之進、床几にかゝり、近習大勢並び居る。皆々こ
　れを見て、ハッと扣へる。權太郎また立廻りあつて
權太　十左衛門、捕つた。
　トかゝるを、同じく取つてキッとなり
十左　こりや、十左衛門をなんとおしやる。
權太　知れた事。主人の姫といひ、女中頭の美の尾どの
　に、心をかけゐる不義の大罪。
十左　なんと。
　ト思ひ入れある。
左京　不義の成敗は、云はゞ私し。武將家へ對して不屆き
　の第一は、當家の領地、志州鳥羽表の騷亂。その取鎭め
　方の役目を受けながら、出立もなく延引。それゆゑ今日
　某が上使。それに何ぞや酒興の上にて、女を捉へ、武士
　たる身にあるまじき、不屆きなる身持ち。
次太　さるに依つて、御上使といひ、殿への申し譯、執權
　を相勤むる拙者めが、打捨て置かれぬ。
權太　それゆゑに繩掛ける。腕廻せ。
　ト多門之助、こなしあつて
多門　兩人、扣へい。
次太　ハア。
多門　十左衛門こと、某が成敗。
　ト岡野、驚ろき
岡野　すりや、殿樣には、夫の御成敗とや。ハアヽ。
　トこなしある。
左京　多門之助どの、成敗の程、拜見いたさう。
多門　誰れかある。料紙を持て。

侍ひ　ハツ。

ト合ひ方になり、侍ひ、料紙文庫、硯箱持つて出て、多門之助の前へ直す。多門之助、料紙を取つて、サラサラと書く。皆々、合點のゆかぬ思ひ入れ。

多門　三木十左衞門、近う／＼。

十左　ハツ／＼。

多門　十左衞門が一件、多門之助が成敗。斯くの通り。

ト感狀を差出し見せる。皆々見て

皆々　その御書面は。

多門　只今見聞するところ、天晴れ忠臣の三木十左衞門。さるに依つて、下地五百石の知行に、只今百石の加增して、都合六百石當て行ふ。

ト皆々悔りする。

十左　すりや、この十左衞門に御加增とや。

ト合點のゆかぬ、思ひ入れ。

岡野　アノ殿さまの御成敗ではなうて、御知行の御加增。こりやマア、夢ではござりませぬかいなア。

ト喜ぶ思ひ入れ。

多門　卽ち加增の感狀。

ト差出すを、十左衞門濟まぬこなしながら、感狀を取つて戴き

十左　有り難く頂戴仕つてござりまする。

多門　天晴れ愛い奴。出かした／＼。

次太　ハ、、、。何を殿のうろたへか、不忠不義の見せしめに、縛り首か詰め腹であらうと思ひの外、加增とは、こりやどうだ。

左京　多門之助どの、最前より見請けまするところ、まだ年端もゆかざる當家の姬、殊に奥女中を捉へての不義の科、臣下の身として、上を犯し、惡戯しても、當家の掟は苦しうござらぬか。

多門　不義は武士一統の制禁、その罪に依つて、提切り胴切りなどゝ、他の掟より嚴しく禁ずる、先祖よりの家法。

次太　それに又、十左衞門は。

多門　不義でない。

次太　でも、見す／＼姬君といひ、お手廻りの女中の美尾どの。

十左　如何にも、お奥廻り、お手廻りの女中とは存じながら、思ひ込んだはこの身の因果。武士のあるまじき事と心で思ひ直しても

岡野　すりや、矢ツ張り、不義の惡名請けても

三番目

十左　思ひ切る事ならぬ。
岡野　エヽ。
　ト大きに恟りする。
多門　イヽヤ、十左衛門がその一言、戯むれの證據、どこまでも忠臣。
權太　アノ、忠臣とは。
多門　こりや酒興の上の戯むれ。然れども、姫に云ひ號け、又は定まりし夫あらば、譬へ戯むれにもせよ、赦し置かねど、未だ年端も行かぬ姫、誠の座興。美の尾ことは、某が手廻りにて召使ふ女、またその外に、明石、龍野、浪の江、鳴戸、淡路なんどの、數多の女、多門之助多病ゆゑ、わざと意見を申さずに、その身を不義の越度にして、手廻りの女を遠ざける彼れが計らひ。その爲にこそ、姫への不義は、我れへの意見。斯ほど身を捨てゝまで、主を思ふ忠義心と察し、感ずるに餘りある、さるに依つて加增を遣はしたは、忠義の規模。なんと多門之助が、よもや誤まりではあるまいが。
次太　ハテナア。
　ト岡野喜び
岡野　すりや、不義のお疑ひは晴れましたか。エヽ、有り難う存じまする。
　ト十左衛門、濟まぬこなしにて、チツとなる。
左京　イカサマ、こりや尤も。
次太　イヤ、その不義の一件は、それにも致しませうが、大切なる御上使への申し譯は。
權太　如何程、殿には十左衛門を贔屓召されても、この儀ばかりは。
十左　然らば、今日の御上使は。
左京　先達てより、當飾間家の領分、志州鳥羽表百姓一揆、一旦靜まるとはいへども、又ぞろ蜂起。
次太　先達て罷り越し、鎭めたるはこの次太夫。この度役目を蒙むりしは三木十左衛門。
權太　それを、今日まで打捨てゝ、御上使を請ける程の不屆き。十左衛門、この云ひ譯は。
十左　サ、それは。
次太　申し譯には早く切腹。
十左　サ、それは。
次權　サア／＼、なんと。
　ト十左衛門、思ひ入れあつて、切腹せうとする。
多門　ヤレ待て、十左衛門。忠臣たる其方、切腹は相成ら

ぬぞ。

十左　でも、申し譯に。

多門　謀り事を帷幕の内にめぐらす三木十左衞門。滅多に殺さぬ。

次權　なんと。

多門　漢の張良は間道地利、韓信が震沙背水、諸葛亮が八陣遁甲、錦の衣を諸軍に授けしも、みな居ながらの計策。百姓一揆を鎭め方の、役目を請けながら、今日までも延引なすは、思慮なくては叶はぬ十左衞門。打捨て置くは多門之助が胸中に見極めある事。まだ〳〵若輩の某、斯やう申すも御上使へ對し、烏滸がましうござれども、憚かりながら、御安心下されい。

ト左京之進、こなしあつて

左京　多門どのと某は、譜代の列にて、別して入懇。平生氣質を存ぜし事。若輩と卑下召されても、よも粗忽はござるまい。

多門　なんと、かほど忠節あるものを、取立てずんばあるべからず。只今の百石に、また百五十石加增して、都合七百五十石の知行高。

皆々　エ、。

ト悃り。多門之助、サラ〳〵と感狀を書く。

多門　イザ、十左衞門、加增の感狀。

ト差出す。十左衞門、ウヂ〳〵して思ひ入れ。

岡野　モシ、十左衞門どの、ちやつとお請けを。

十左　ハテ、サテ、其方が、

トこなしある。

多門　辭退に及ばぬ。早く〳〵。

十左　ちやと申して、

左京　十左衞門、その身に取つては、時の規模、申し請けい。

十左　サ、それは。

多門　猶豫するは、詞を背くか。

十左　ハツ。

ト思ひ入れあつて

有り難く頂戴仕つてござりまする。

トこなしあつて、感狀を取つて戴く。

次太　エ、、いま〳〵しい。折角鳥羽表へ行つて、百姓一揆を鎭めて歸つても加增はなく、十左衞門は居ながらにこの通り。

權太　これが彼の、歌人は居ながら名所を知るの格でござ

らう。ハヽヽ。

ト嘲笑する、十左衛門、思ひ入れあつて

十左　殿へ申し上げ奉りまする。これまで神影流の師範も仕り、段々との御厚恩、有り難うはござれども、多病の拙者、お勤めも自ら怠りまするゆゑ、筋なき立身仕りましても、却つて朋輩の下げしみ、祿盗人。何卒永のお暇を申し請け、病氣保養仕りたき願ひ。お聞濟み下さりませうならば、この上もなき御慈悲と、有り難う存じ奉りまする。

多門　ハヽヽ。忠臣を嫉むは奸佞の心。その者どもは役に立たず。今日より出勤を差許し、隱居料五十石加増いたし、都合持ち高八百石。

ト感狀を書く。皆々思ひ入れ、イザ感狀ト差出し

この上は、無役にて、出勤は其方が心任せ。

十左　すりや、如何やうにお願ひ申しても。

多門　暇の儀は、相叶はぬ。

十左　ホイ。

ト當惑のこなしあつて、これを隱し、心意氣あつて

重々の御厚恩。

ト感狀を取つて戴く。

有り難く頂戴仕る。

岡野　チエヽ。

ト喜びの思ひ入れ。

多門　斯く黑白の相分れば、多門之助が心の雲も晴れ渡り、御上使への申し譯も、相立つ上は又改めて。

左京　誠に卞和が珠の磨かれ出づるこの時節。

權太　ハテ、仕合せな十左衛門。

姫君　そんなら兄上。

美の　私しどもゝ、お奥へ參りませう。

多門　打混じての上使へ饗應。

左京　多門之助どの。

多門　イザ。

ト唄になり、左京、多門之助先に、この一件皆々奥へ入る。十左衛門は手を組み、思案の思ひ入れ。岡野、こなしあつて

岡野　申し、十左衛門どの、お前の酒興といひ、不義の體裁。百姓一揆に御用の事も、等閑になさるゝを、殿樣にはお咎めもなう、却つて御意に入り、一つ〳〵に立身加增。殿樣といひ、お前の心底、どうもわたしは、合點がゆかぬわいなア。

十左　この十左衞門が、今日の體裁、酒興の上とは云ひながら、姫君といひ、美の尾どのへの横戀慕、また御上使の催促も、我れに代つて殿の云ひ譯。お咎めなくて、却つて加増、これではこの身の。

ト岡野を見て、また奥を見やり、ヂッとこなし。

ハテナア。

ト思ひ入れ。下座より、股立ちの侍ひ四人、權太郎付添ひ、走り出て、十左衞門を取巻く。

四人　動くな。

十左　こりや、何れもには

岡野　何事でござりまする。

權太　只今、殿の御意を以て、御加増と云ひしは、十左衞門の心を引き見ん爲。誠は上を僞はる不屆き者と、殿の御機嫌以ての外。廣庭に於てお手討ちと、御意を請けたるこの權太郎。サア、尋常に、腕廻せ。

トきつとなる。十左衞門、思ひ入れあつて

十左　ハ、、、。その一言、合點がゆかぬ。殿には身共を御賞美あつて、御加増賜はる。この十左衞門を其方には、私しの意趣にて、上意と僞はり繩打つのか。

權太　その疑ひは、あらうと存せしゆゑ、證據たるは、斯く近習の面々。

侍ひ　殿の上意を蒙むりて、召捕りに向つた。サア、尋常に殿の御前へ

四人　うせう。

ト十左衞門、思ひ入れあつて

十左　すりや、殿の御上意にて拙者めを。

岡野　そんなら矢ツ張り、越度でござりましたか。マアマア。ホイ。

ト恟り。當惑のこなしある。

十左　たとへ權太郎どのゝ僞はりにもせよ、殿の上意とあれば是非がない。

岡野　そんなら、どうでも。

ト十左衞門に取付くを振り拂ひ

十左　然らば、御前へ。

四人　サア、うせう。

ト合ひ方になり、權太郎、侍ひ四人、十左衞門を取巻き、下座へ入る。後に岡野殘り、いろ／＼こなしある。

岡野　すりや、どうあつても御成敗とや、ハア、。

ト思ひ入れあつて

ほんに思へば情ないこの身の上。遠州の妹おときと云ひ

交せし、香川半次郎どの、親をも捨てゝ、師匠の敵討と、若黨中野藤兵衞付添ひ、この程當地へ參り、樣子を聞くに、父石井兵衞さまの不慮の御最期。敵は赤堀水右衞門と知れてはあれど、弟兵助は御用金紛失の、越度によつて勘當の身。妹おときの云ひ號け、半次郎どのが、わしを緣に便り來たのに、夫の心のあのつれなさ。助太刀どころか敵討の事、思ひ依らぬと、追ひ歸されしゆゑ、夫十左衞門どのへ密かに隱して、わしが部屋へ二人を隱まうての心遣ひ。それに引替へ夫には、色と酒とに不身持ち。殊に百姓一揆の役目も等閑。どうなる事と案じしが、思ひの外お咎めもなう、最前の立身加增、ヤレ嬉しや、有り難やと思ふに、又もお咎めに二度悔り。心ならざる思ひ。もしや夫が御成敗に遭うたなら、誰れを便りに親の敵が……弟といひ、わしまでが、討つ事ならぬ因果の兄弟。こりやマアどうせう、なんとせうぞいなア。

トいろ／＼こなしあつて泣き伏す。唄になり、チョンチョンにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見付け黒骨障子、下の方、榎の大樹。人の登るやうにして、すべて奥座敷の體。よき所に松の木、爰に多門之助、袴ばかり。權太郎、刀を持ち、付添ひ居る。道具とまる。

多門　龜島權太郎。用意はよいか。

權太　仰せ付けられました通り、出來ましてございまする。下部ども、土壇の用意。

大勢　ハア、。

ト下座より、奴四人、土俵を持ち、走り出て、松の木の下へ並べる。

多門　ソレ、十左衞門を引出せ。

侍ひ　畏まつてござりまする。

ト時の大鼓になり下座より、十左衞門、繩付きにて、侍ひ四人引出る。

多門　繩付きを、松の根に引据ゑい。

侍ひ　畏まつてござりまする。

ト十左衞門を、松の木の側へ連れ行く。

多門　其方どもは、皆行け／＼。

皆々　ハア、。

ト入る。

多門　權太郎、刀をこれへ。

權太　ハツ。

ト差出す。多門之助、刀を取つて

多門　ドレ、成敗いたしてくれう。

トこれより誂らへの合ひ方になり、多門之助、刀を持ち、二重舞臺より下りて、十左衞門が側へ行く。

十左衞門、おのれ、さま〴〵に主を誑かる不屆き者。最前加増と云ひしは、心を引き見んため。いま多門之助が成敗は、かねて覺悟であらう。

權太　イヤモウ、同じお手討でも、縛り首を刎ねらるゝは、恥辱の上の恥辱だ。さぞ心外にあらう。ハテ、よいざまよいざま。

十左　榮枯盛衰は、人力の及ばざるところ。お手討に屍を曝すも、みな天命と諦めれば、さのみ心外とも存せぬ。

多門　まだしもの觀念。流石は十左衞門、生け置くは何かの……イヤ、是非に及ばぬ。いま討ち放す。

ト思ひ入れあつて、多門之助、刀を拔き放す。

十左　サア、すつぱりと遊ばされませう。

多門　これを見よ。この刀は、某が秘藏なしたる和泉守千手院守國、これまで手づから試し見ねども、其方がこの刀の切れ味試しになるとは知らぬ。

トこなしあつて

十左　南無阿彌陀佛。

多門　南無阿彌陀佛。

ト多門之助、十左衞門に切り付ける振りにて、松の木を見事に切る。十左衞門の繩を切る。權太郎驚ろき

權太　それは。

トかゝらうとするを、多門之助、權太郎をポンと切つて、血を拭ふ。十左衞門驚ろき、思ひ入れあつて

十左　これは。

多門　主家の祿を貪んで餘りとせず、高知を取つて足れりとせぬ不義不忠、後日の見せしめ、この手討。

十左　して、拙者めは。

多門　君子はその罪を憎んでその人を憎まず、今討つたるは松の幹、罪ある三木十左衞門は、先ツその通り二つ胴。

十左　すりや、拙者めの苗字に准へし、三木は卽ち松の幹。

ト松の木を取上げ

アノ、二つ胴に。

トこなしある。此うち、岡野出て

岡野　そんなら、夫の命は助かり、苗字に准へし幹を御成敗とや。エヽ。

ト多門之助を拜む。

多門　コリヤ、その禮を請けては、飾間の家の掟が立たぬ。

岡野　ぢやと申して。

多門　ハテ、二つ胴の刀の切れ味、數代秘藏の千手院守國、千手は則ち觀音薩埵、枯れたる木にも花咲く利生、その靈驗にて、助命の其方。

兩人　エヽ、有り難う存じ奉りまする。

多門　サ、利生ある千手院の刀に添へて、加増の知行は差遣はす。

岡野　すりや、最前の御加増に。

十左　千手院の一腰を、下し置かるゝとや。ハツ〳〵。

ト刀を取り、押戴く。

多門　また千手院に差添一品、其方へ餞別。

ト香包みを投げやる。十左衞門、心得ぬこなしにて取上げ

十左　合點參らぬ、御餞別とは。

ト香包みを取つて

こりや連理香と號せし名香、これを拙者に。

多門　敵討の門出の餞別。

兩人　ヤヽ、なんと。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、多門之助こなしあつて

多門　その名香こそは、織田信長公武將宣下の功に依つて、東大寺の蘭奢待を申し請けし例に任せ、後年に至つて時の武將久吉公、南天竺より經木を取寄せ、佛師を以て觀音の像を作らしむる。その像は濱松の城主、淺山家へ下し置かれ、また殘り木の經は、當飾間家の先祖へ下し置かるゝ。この木を以て燻く時は、その煙の一つに寄るとあつて、卽ち連理香と號す。其方が爲には舅、妻岡野が實父石井兵衞、赤堀水右衞門が爲に敢へなき最期。兵衞が預かる所の觀音の尊像、奪はれし事、半次郎が到着の折柄、忍びを以て詳しく承知。聞くも不便な同流の嘆き、石井兵衞は神影流の達人、其方には師なり親なり、倶に天の戴かずと、敵討の思ひ立ちはあれども、折惡しき鳥羽表の百姓一揆、鎭めずんば叶はぬ事ゆゑ、其方が腹心大倉瀨平、病と披露し、彼れに密かに計策を與へ、鳥羽表へ立越えさせ、まつた半次郎主從は、つれなくも追ひ歸さんと、女房にまで疑はせたる深き計策、その上にて、敵討の本望達せん爲に、永の暇を乞はんとて、この程の身持ち放埒。天眼鏡はいざ知らず、多門之助が目の付け所、十左衞門、なんと相違はあるまいがな。

トこなしある、十左衞門キッと思ひ入れあつて

十左　ハヽア、未だ御若年とは申しながら、恐れ入つたる明智の御主君、申すに隙なき御仁惠の御惠み。すりや拙者めが本心を。

多門　とくと見拔きしゆゑ、不屆き却つて加增、等閑を褒美せしは、敵へ通路のその者に、油斷させん一つの手段。八方劍の傳授なきうちは、暇はならぬと我が片意地、忠臣といひ、武術の賞美、如何ほど扶持なすとも、志しは相足らぬ。これも師範の三木氏への寸志。

十左　アノ、それまでに拙者めを。

岡野　誠に、冥加に餘る殿樣の御仁心。

多門　この上は神影流の奧儀、八方劍の秘術傳授、その上にては、望みの通り永の暇。

十左　何がさて、速かに御傳授申し奉らん。

多門　ホヽウ、滿足々々。

トこなし。向うバタ〳〵にて、大倉瀨平、絆纏手甲股引、凜々しき旅立ちの形にて、菅笠を持ち、走り出て來て

瀨平　御主人十左衞門さま、これにござりましたか。

岡野　オヽ、其方は、この程病氣と披露せしが、すりや殿さまの御鑑定の通り

瀨平　鳥羽表へ立越え、御計略の通り、首尾よく計らひ、只今到着。

トどつかと座して思ひ入れある。

十左　して〳〵、鳥羽表の樣子はなんと。

ト多門之助、急いたるこなしにて

多門　早く〳〵。

瀨平　ハツ〳〵。されば當地を立つて、鳥羽まで七日路、彼の地へ到着なしたるところ、案に違はぬ國の騷動。

十左　すりや、推察の通り一揆の輩が。

瀨平　神社佛閣山野に陣取り、銘々引ツ削ぎ竹槍に、すわこそと合圖をなさば、我れ劣らじと討取る氣色。然るに、御主人の御計策の通り、領主の上意と云ひ立て、一揆の中へ分け入り、事の次第を具さに承はつたるところ、勿體なくも殿樣を、恨み奉るその趣意は。

多門　ムウ、さては領主を恨むる土民、趣意の程は、ナ、なんと。

瀨平　古來よりの年貢の外、當時の執權曾根次太夫の計らひにて、山年貢、海の運上嚴しき取立て。國中徒黨なし、彼の次太夫を打ち殺さんとの、折も折とて先達て、次太夫どの罷り上り、右課役金免し遣はす間、飾間家を滅ぼ

し、國家押領の一味いたせ、さすれば百姓徒黨の者、殘らず武士に取立てんとの事ゆゑ、この度の徒黨は、本國播州へ押寄せん企て。その徒黨も速かに、一味の者の白狀でござりまする。

ト皆々驚ろき

岡野　すりや、矢ツ張り次太夫どのゝ惡事とや。

多門　我が眼力に違はぬ人非人めが。

瀨平　この上は、仁道の計らひにて、課役御免の上、一ケ年の年貢差赦す、殿の上意と申せしゆゑ、阿修羅の如く荒れたる百姓、みな頭をうなだれ、殿の御仁心を拜し、歸服いたしてござりまする。

十左　すりや、身共が一々計策の通り。

瀨平　卽ち一國村々、庄屋下百姓まで、連判取りし、この書付け。

ト百姓連判に書付けを出す。

十左　ホヽ、出かしたく。

多門　ムウ、すりや、十左衞門が計略にて、一揆の騷動治まりしか。

十左　定めて殿には一ケ年の年貢御免の儀、如何とばし思し召しもござらうが、かねて惡事の曾根次太夫、御改易あれば、千二百石は上りもの。また拙者めは小知なれども、一生無知行にて相勤めなば、平均いたし、一ケ年の年貢と存じました。拙者の計らひ。

ト多門之助、一々感心のこなしにて

多門　左程まで萬事才智の十左衞門、天晴れく。まつた鳥羽表へ立越えし大倉瀨平、時の褒美として、陪臣たる其方、今日より多門之助が近臣と取立てくれう。

瀨平　すりや、拙者めを御直參に。ハヽ、ハツ。

ト平伏して

これと申すも主人の御恩、有り難う存じ奉りまする。

トこなしある。此うち、左京之進出て

左京　多門之助どの、何か逐一承はるに、三木十左衞門が才智、鳥羽表の騷動相鎭まる上は、武將家も咎めはない。何を申すも、曾根次太夫が惡事より。

多門　三木十左衞門に更へて、罪科は多門之助が成敗。

と此うち次太夫、出かけ居て

次太　樣子は殘らず聞いた。多門之助、うぬ。

ト切つてかゝる。多門之助、立廻りにて留める。

多門　主に刃向ふ人非人と云ひ、國家を奪ふ大罪人。

次太　何がなんと。

十左　即ち證據は百姓の連判、最早遁がれはあるまいがな

次太　エヽ、口惜しや。鳥羽の百姓奴等を味方となし、一揆に事寄せ、この飾間家を押領せんと思ひの外、露顯なして、殘念々々。この上は、うぬ等一々

トまた十左衞門へ切つてかゝるを、上の方へ引きのける。左京之進立廻りにて、次太夫をポンと當てる。

皆々　これは。

左京　天下に拘はる大罪人、上使の身共が當座の仕置。後々後にては家の成敗。

皆々　御尤も。

十左　斯く何事も首尾よく相濟む上は。

多門　暇の儀は其方の心任せ、遠州の珍客も。

ト思ひ入れある。

岡野　夫十左衞門、つれなう追ひ歸されしを、私しが部屋へ密かに。

多門　隱まひ置きしは、其方が孝道。目通り許す、暇乞ひ。

岡野　ハツ。

ト喜びの思ひ入れあつて

半次郎、藤兵衞、早うこれへ。

ト向う揚げ幕にて

兩人　畏まつてござりまする。

ト向うより、半次郎、旅の形。藤兵衞、若黨の形、菅笠持ち、走り出て、花道にて

半次　何かはあれにて承り、御仁心の御計らひ。

藤兵　お目通りまでお免し下され、有り難う存じ奉りまする。

岡野　これも偏へに夫十左衞門どのゝ武の勳し、殿樣にも御滿足。

多門　兩人、近う〳〵。

兩人　ハツ〳〵。

ト本舞臺へツカ〳〵と來る。

多門　十左衞門、今こそ其方の心任せ。

十左　ハツ、香川半次郎儀は、武術師弟の恩義を思ひ、師匠の敵討たんず心底、天晴れ〳〵。この上は、師匠石井兵衞に成り代り、娘おときが聟となし、香川を改め石井半次郎。

半次　すりや、私しを、おときどのゝ聟となされ、石井の苗字を下されんとや。エヽ、忝ない。

岡野　今日こそ私しの、幾世の思ひも晴れましたわいなア。藤兵衞、喜びや〳〵。

藤兵　これが喜ばずに、なんと致しませう。
　ト思ひ入れある。此うち左京之進こなし。
左京　最前より見聞するところ、誠に港に潮の湛えし如
く、斯く忠孝もあればあるもの。左京、感心いたした。
一揆の騒亂治まりしこと、上聞に達するであらう。
　トこなしあつて
併し、武術、計策、才智の十左衞門、上使が扣への今日
の記錄書。
　ト懷中より書き物を出してやる。十左衞門、取つて見
て
十左　こりや、御上使の記錄書と思ひの外。
　ト廣げ見る。半次郎、岡野、藤兵衞、引ツ張り見て
岡野　この歌は。
十左　かちわたるたびに打寄す
半次　岸の波
岡野　海に飾間の
藤兵　近き川水。
岡野　こりや、當家に准へし飾間川を、詠みかなでたるこ
の一首。
左京　折句の振りに、心を付けい。

　ト四人、思ひ入れあつて
十左　かちわたる
半次　たびに打寄す
藤兵　岸の波
岡野　海に飾間の近き川水。
　ト考へて
十左　かぶりの折句は
藤兵　敵討。
多門　すりや、御上使にも御承知で
皆々　飾間の和歌は
左京　天下晴れての
皆々　すりや、敵討の
左京　お墨付。
皆々　エヽ、有り難う存じ奉りまする。
　トこなし。左京之進、皆々を見て
左京　天晴れ〳〵。
　ト感じたる思ひ入れにて、扇にて、刀の柄を打つをキ
ッカケに、唄になり、こなしあつて、向うへ入る。皆
皆後見送り、ちやつとこなし。
瀨平　何れもさま、この上は、ちつとも早く。

皆々　敵の行くへを。
十左　それにこそ好き手懸り。經木の觀世音を所持なす赤堀水右衛門。
多門　その導きは、いま餞別の同木の殘り木。
十左　一炷きくゆらせ
岡野　煙りの行く先。
ト十左衛門、香を火入れへ燻べる。この煙り、向うの方へ行く。
十左　ハテ、爭はれぬ連理香、煙りは矢ツ張り南の方。
皆々　すりや、これより東海道へ。
多門　門出の見送り。美の尾、參れ。
美の　ハア、。
ト下座より、美の尾、菅笠を持ち、出て來る。
多門　其方は姫が名代、また大倉瀬平は、某が名代に、國境まで、めでたく見送り。
美の　すりや、私しは姫君樣。
瀬平　この瀬平は御館の、規模によつて、殿の御名代、
ハツ／＼。
兩人　畏まつてござります。
岡野　重々厚き殿樣の御恩。

皆々　勿體ない、お見送りとは。
多門　ハテ、そこが師弟のこの別れ。
ト泪を隱す。十左衛門、懷中より一卷を出し
十左　神影の奧儀たる、八方劍の秘術の一卷。
ト差出す。
多門　すりや、傳授なして、ホ、ウ。
ト一卷を取つて
過分々々。
岡野　左樣なれば
皆々　御前さま。
多門　隨分みな／＼堅固で。
ト皆々名殘りを惜しむこなしにて、半次郎先に、岡野、美の尾、瀬平、藤兵衛、銘々菅笠を持ち、花道へかゝる。此うち、下の榎の木へ、侍ひ一人忍び窺ふ。次太夫心付きて窺ふ。多門之助、立ちながら扇の上へ一卷を載せ廣げ、大切に見て居る思ひ入れにて、よき程に
多門　誠にこれが。
次太　うぬ。
トきつとなるを、この時、十左衛門「エイ」と一時に隱し持つたる小柄を八方へ打つ。次太夫、侍ひに當つ

て、ウンと死ぬる。多門之助は扇にて叩き落す。花道の五人は、菅笠にて程よく請ける。右八方途端よろしく見得。

多門　即ちこれが。
十左　八方劍の極意でござりまする。
多門　ムウ〳〵。
ト笑を含む。十左衞門、こなし。めでたう出立。
十左　ハツ。
ト平伏すると頭を打つ。
多門　行け。
ト、チョン〳〵〳〵と拍子

幕

四幕目

府中質屋の場

役名——手代彌七實ハ石井兵助。野田藤四郎。質屋後家、おさご。同娘、おしづ。云ひ號け、助太郎。番頭、與助。道具屋、八九郎。木戸番、釣鐘彌左衞門。髮結ひ、おせん實ハ藤兵衞女房、おせん。中野藤兵衞。

この所四幕目、府中本町通り、質屋の場を御覽に入れますると、右口上云つて知らせ、又シャギリになり、打上げる。幕の内より
東西〳〵、府中本町通り、更科屋助太郎さま內、與助さま急用。
ト急用觸れあると、東の通路より與助、着付け羽織、手代の形にて、風呂敷をかたげ出て
與助　おれに急用とは、內に何事ぞ起りはせぬか。氣遣ひな事ではあるまいか。
ト云ひ〳〵本舞臺へ上がり、花道の方へ來ると、切り幕より八九郎、道具屋にて、場を見廻し、出て、兩人行き逢ひ
與助　オヽ、道具八か。
八九　これは與助、得意廻りをかこ付けて、この南町の芝居へ、入つて居ると聞いたゆゑ、突ツかけて呼び出してもらうた。
與助　そんなら、今の急用觸れさしたは、貴樣か。エヽ、

通のやうにもない。この幕が明くと、江戸から來た魚樂十町が泥仕合ひ。肝心の所を呼び出された。して、おれに用とは。

八九　ハテ、今の事で、急に逢はにや間違ふかと思うて。

與助　今の事とは、件の云ひ合せか。あれなればコレ

　ト囁く。

斯うぢや。

八九　成る程、そりや呑み込んで居る。そんなら、いよいよ明日ぢやな。

與助　時に道具八、てまへが以前の主ぢやといふ、彼の侍ひの顔を、おれは知らぬ。

八九　サア、どうぞ引合はさうと思うても、今朝から貴樣の行く先は知れず、彼の和郎も、あの事の工面に行かれたれば、どうぞ逢はせたいものだが。

與助　イヤ／＼、とつくりと云ひ合せ、てまへの云ふ通りなれば、知れた筋。もしあの人に逢はずば、幸ひコレ。この莨入れも渡して置かう。

　ト腰の胴亂を渡す。

八九　この莨入れを、どうする。

與助　ハテ、これを證據に。

八九　よし／＼、そんなら、その積りぢや。おりや歸る。貴樣は緩りと見物。

與助　イヤ／＼、芝居どころぢやない。明日仕掛けるなら、早う歸つて、その心積りせにやならぬ。

八九　そんなら、道まで連れ立たうか。

與助　首尾ようやつて、祝ひ事に貴樣と、朝から棧敷で見物せうわい。

八九　そりや、よからう。

與助　サア、道具八、おぢや。

　ト與助、八九郎を連れ、切り幕へ入る。土間より藤兵衞、見物の形にて出て、花道へ上がり、兩人を付けて向うへ入ると、頭取出て、幕の外へ出て

頭取　斯樣に仕りまする、この場の仕組み、いよ／＼五幕目府中本町質屋の場、左樣に御覽下さりませう。

　ト口上云うて入る。琴唄になり幕明く。

造り物、二重舞臺。見附け重ね戸棚、納戸口。上の方、折、廻し障子屋體。橋がゝり、格子、門口に更科屋と書いたる長暖簾かけあり、質屋の模樣、幕の内より質置きの人腰を掛けて居る。彌七、手代の形にて着物を見て居る。與助、以前の手代にて、帳合

ひして居る。右の琴唄にて幕明く。
彌七　コリヤ、なんぼ程いるのぢや。
質置　なんぼとは、目一杯貸してもらはうかい。
彌七　番頭さん、なんぼ貸さうな。
與助　ドレ〳〵。
　ト見て
質置　滅相な。七百がものはブラ〳〵してある着物ぢや。
　裏は黑ぢやな。マア、三百かい。
與助　なに云はんすやら。そりや四五年も着ぬ先の事ぢや。
質置　そんならどうぞ、五百貸して下んせ。
　ト與助、構はず張合ひする。
彌七　そんなら、私しが挨拶で、五十上げませう。番頭さん、それでよからうな。
與助　三百五十か。よい値ぢやな。
　ト帳へ付ける。彌七、錢を渡す。
質置　これではちつと、工面が違ふけれど、まゝよ、去んで一杯飮まう。
彌七　ようござりました。
　トまた琴唄になり、質置きの人、入る。彌七、右の着物を括る。直ぐに合ひ方になり
與助　ヤレ、忙しやの〳〵。後家の質屋と云へば、樂な物のやうに云ふが、みな呑み込むばかりで、こて〳〵した帳合ひぢや。
彌七　マア、お前も一服のまんせいなう。
與助　オヽ、さうせう〳〵。
　ト此方へ來て
　コレ、彌七、おいらが見世でアタフタするのに、何も知らず、奧では琴の稽古。あゝいふ暮らしでは、更科屋の見世も、ころりしやんになりさうなものぢや。
彌七　お孃樣と若旦那と琴の連れ彈き。エヽ、結構な身の上ぢやな。
與助　サア、結構な身の上でも、儘にならぬは色の道ぢやて。
彌七　儘にならぬとは。
與助　一體、爰のお孃樣は、淸見寺前の膏藥屋の名代娘、それを幼ないから、先旦那孫兵衞さまが、あの若旦那と娶合はす積りで、貰うてあれども、まだ祝言はない。それも、あの娘が息子をそゝがみ立て、嫌がつてござる、その根本は、ア、、どこやらの奴に。

彌七　番頭さん、どこやらの奴とは、お孃さまは、アノ誰れぞと。
與助　でも彌七、馬鹿々々しい、てまへが顏は。
彌七　ヤア。
與助　彌七、貴樣は、元遠州生れとやら、爰の內へ手代奉公に目見得の日から、お娘と顏を見合ふが否や、せしめられたい、せしめたいと思ひ合うた、互ひの眼中、氣取つて居るわい。彌勒町へも通ふおれぢや。さすものぢやない。ちやんとお初穗を上げうかな。
彌七　ア、コレ、聲が高い。滅多な事云ふまい。假にも助太郞さまといふ、云ひ號けあるお娘御と、そんな事があつてよいものかいの。
與助　コリヤ、なんぼ隱しても、お娘がとつくりと白狀したわいやい。
彌七　ヤア、アノおしづさまの口から。
與助　サア、この番頭を、この府中の町で、二人とない通と見掛けて、お娘の賴み。どうぞ助太郞さまと緣切つて、彌七と夫婦にしてたもいなう。ヤヽヽと、每日々々せがまるゝものではない。ハテ、それ程に思ひ合うた事なら、吞み込んで駈落ちさすと、請合つて置いたが、コレ、彌七、自體、わが身が爰な內へ奉公に來たは、深い樣子のある事であらうなう。
彌七　深い樣子とは、何がいの。
與助　アレ、又隱すかいの。わが身の素性は、遠州濱松の家中とやらの浪人ぢやげな。所に、爰な內へ伽羅の觀音が、質物に入つてある事を聞き出して、奉公に入込んだは、尊像の盜人を詮議して、身の明りを立て、歸參せう爲であらうがの。
彌七　ハテ、詳しい樣子を……マアく、それならそれにして、番頭さん、一體伽羅の尊像を質物に入れた、その置き主といふは。
與助　道具屋八九郞といふ奴が持つて來て、百兩の質に取つた、その明る日、この府中を夜拔けして行くへが知れぬ。それで、この內に流れ込んである代物。もし外の手へ渡つたら、歸參がなり憎さうなものぢや。なんと、盜人は後で詮議もならうが、百兩でわが身の手へ、取つて置いたがよからうぞや。
彌七　サア、兼ねてさうは思うて居れど、何を云うても肝心の
與助　金が無いといふ事か。それもおれが、拵らへる思案

がある。
彌七　その思案とは。
與助　その思案は、コレ。
　ト囁く。
彌七　ムウ。そんなら、アノ娘御のおしづさま。
與助　ざつと一筆にじらかしたがよい。おれが惡いやうに
はせぬ。サア〱、早う。
　ト卷紙をあてがひ、狀を書かす。
彌七　そんなら、その樣子をちよつと
　ト彌七、書狀を書く。
この狀は。
　ト與助、取つて
與助　おれが、ソツと屆けてやる。あれ程に思うて居る、
お娘の心根が可愛らしいゆゑ。
彌七　なんにも云はぬ、番頭さん。エヽ、忝ない。
與助　ハテ、禮には及ばぬ。またコレ。
　ト囁き居るうち、奧より
　彌七々々。
　ト云ひ〱おさご、嫁らしい後家の拵らへにて出る。
與助、ちよつと帳合ひする。彌七、着物を括つて居る。

　彌七を見て
さご　オヽ、彌七、そこに居るのかいの。
彌七　ハイ〱、爰に居ります。
さご　與助も爰に居やるか。精が出るなう。
與助　ヤア〱、帳面の間違ひでホツとした。
さご　ヤア、なんと云やる。
與助　これは聾の癖に、なんでもない事を聞きたがる。
　ト疊へ書いて見せる。帳面が間違うてホツと致しまし
たと、云ひ〱書く。
さご　オヽ、そりや道理、そんな時は、臺所へ行て、一つ
呑みやいなう。
與助　ヤレ、いつにない優方な事を云ふワ。そんなら、一
杯グツと引ツかけて來う。彌七、ちよつとの間、見世を
賴むぞや。
彌七　そりや合點ぢや。今の事を好いやうに。
與助　ハテ、氣遣ひしやんな。おれが呑み込んで居る。ド
リヤ、一杯引ツかけて來ようか。
　ト唄になり、與助、奧へ入る。おさご、後を見て
爰にはわしが居る。ゆるりと休みや
　ト合ひ方になり、こなしあつて、彌七が側へ行て

彌七、其方は何しやるぞいなう。
ト彌七、面倒なるこなしにて、筆の軸にて疊へ書き

彌七　流れ物を書き出して居りまする。
ト書いて見せる。

さご　それはよう精出して居やるの。

彌七　ヘイ。
ト構はぬこなし。

さご　彌七や〳〵。其方のこの間云やつた事は、ほんの事かいの。

彌七　アヽ、また舌たるい事を云ひ出したワ。
ト云ひ〳〵、筆軸にて、私しは氣は違ひは致しませぬと書いて見せる。

さご　そんならアノ、ほんにわしが可愛いかいなう。
ト抱きつく。

彌七　アヽ申し、人が見ますわいなう。
トやう〳〵振り放し
アレ、人が見て居りまする。
ト書いて見せろ。

さご　なんの、見ても大事ない。ほんに其方が奉公におちやつた時から、惰らしい可愛らしいと思ひ染め、人目を構はず、白粉塗つたり紅付けたり、これも其方に思はれたいばつかり。堪えかねて其方の入つて居る風呂場へ押掛けて行て、口說きに口說いたれば、何やら云やつたけれど、わしが聾で聞えはせず、書いて見しやと手を出したりや、どうなりともと、この腕へ書いて見しやつた、その時より、わしが氣はどのやうにあらうぞ。聞えぬ耳がひよつとして、心から底へスツと應へるやうに、嬉しかつたわいなう。わしもこの府中では、更科屋孫兵衞といふ可愛い主に別れて、閨淋しい。これから孫兵衞後家を取措いて、其方の女房ぢやと思うて居るわいなう。コレ、彌七。
ト大きな聲にて云ふ。

彌七　アヽ申し、聲が高うござります。エヽ、とつと我が耳へ入らぬとて、途方もない聲を出して、ほんに、聾聲とは、よう云うたものぢや。
ト此うち奥より、おしづ、娘の形にて出かけ、これをちよつと見て腹の立つこなし。
コレ、つい女房どもと云うて、堪能さしてたもいなう。
嫌ならこつちや、死ぬる〳〵。

彌七　サア〳〵、そんなら女房ども。

ト大きな聲で云はうとして、ちよつと口を塞ぎ、女房どもと、小さき聲して書いて見せろ。

こちの人、オヽ嬉し。

トひつたり寄り添ふ。おしづ、ツカ〳〵と出で、彌七を振り袖にて叩き

しづ　エヽ、あんまりぢやわいなう。コレ彌七。

ト彌七、愕りして、飛び退かうとする。おさご、聞えぬ心にて、放さぬを、それ〳〵と云うて、無理に突き退ける。おさご、をかしき身振りにて、おしづを見て、愕り、ちやんと居住ひを直し

さご　おしづ、なんぢやぞいやい。いつの間に爰へ來たのぢや。

しづ　アヽ、なんぢや知らぬわいなア。

トむつとして居る。彌七、氣の毒なるこなしにて

彌七　おしづさま、お前は御機嫌よう琴を彈いてござると思へば、何をマア其やうに。

しづ　何をとて、こちや腹が立つて〳〵ならぬわいなア。

さご　これはしたり、なんぢや、ピンシヤンと。

彌七　イエ、アノおしづさまが。

トどぎまぎ云ひ〳〵疊へ、あの腹立てヽござる事はと、云ひ〳〵書き、ちよつと行きどまつて

彌七　オヽ、それ、最前琴の爪を失うたに依つて、それで

さご　アノ、琴の爪を失うたに依つて、それを戻せと云うて、あのやうに……コリヤ、嗜め。アタ吝い。なんのそれしきの物を、失うたとて、可哀さうに彌七を、今のやうに叩くと云ふ事があるものかい。

彌七　おしづさま、お前も大概めかりして、腹立てたがようござります。

しづ　コレ、彌七、其方は聞えぬ。ようわしを騙しやつたなう〳〵。

彌七　何を騙しましたえ。

しづ　騙さぬものが、母樣と今のやうに、女房どもぢやの、なんのかのと、エヽ、つツとわしや、騙されて、腹が立つ〳〵。

さご　ヤレ、この子わいの。なんの琴爪位で泣く事があるぞいやい。

彌七　ほんに、騙すの騙さぬのと、お前もマア、大概悋氣するも人に依つたもの。よう見たが好い。なんの事はない、生贄に供へられる氣でなけりや、側あたりへ寄られる、これが代物かいなア。

さご　彌七、其やうに、云ひ譯せいでも大事ない。高で琴の爪位の事、アタ仰山な。

トおしづを睨み付けて云ふ。

しづ　それでも、母様は後家、後家といふと面妖、殿方が好もしがつてぢやゆゑ。

彌七　後家も後家によつたもの。なんぼ据ゑ膳でも、ほんまに箸取るのは、お前より外にはござりませぬわいな。

ト疊を叩いて云ふ。

しづ　そんなら、ほんまに可愛いのは、アノわしばつかりかえ。

トわざと腹を立てるやうに身振りにて云ふ。

さご　エヽ、しつこい。何をいつまでもせり合ふのぢや。琴の爪が欲しか、買うてやるわい。アタ吝い。其やうに彌七を苛めると、わしが聞くこつちやないぞ。

しづ　アレ、あのやうに母さんが、肩持たしやんす程、腹が立つて〳〵。

彌七　サア、ようござります。なんぼ聾ぢやと思うても、側に居ると思ふと、氣が置かれて話しがし憎い。

ト父疊へ書く。何事も詳しい事は晩程、マア奥へお出でなされませと、云ひ〳〵書いて見せる。おさご嬉しきこなしにて

さご　其方がその氣なら、コレ、耳貸しや。

ト耳の側へ寄り、晩に來てたも、待つて居るぞやと、大きな聲で云ふと、合ひ方になり、おさご、奥へ入る。

しづ　エヽ、よい年して、アタ憎らしい。彌七に惚れるとは、なんぞいなア。コレ、彌七、今云やつた通り、ほんまの夫婦とは、わしかや。

彌七　サア、今さう云うたものゝ、思へばお前は助太郎さまといふ、歴とした云ひ號けのあるお身。

しづ　サヽ、云ひ號けある事は、初めから知れてある。今まで云ひ交したのは、嘘か。そりや其方の氣に似合はぬ。エヽ、胴慾な、侍ひのやうにもない。

彌七　ア、申し、侍ひのやうにもないとは。

しづ　遠州濱松の御家中、石井兵助さま。

彌七　コレ、聲が高い。石井兵助といふ、わしが本名を、お前は、マアどうして。

しづ　サア、斯う〳〵したお人ぢやと、番頭の與助が話し。伽羅の尊像の置き主の詮議さへ濟んだら、お國元へ歸るお心と聞いて、わたしが悲しさ。どうぞわたしも、一緒に連れて。

彌七　ト取付いて泣く。この身の樣子知られた上は、隱すに及ばぬ。成る程、この家にある尊像ゆゑ、難儀の我が身。いま金百兩といふ金がなければ、歸參せうにも、どうせうにも。マア、それまでは手代の彌七、お主のお前に、滅多な事も云ひ憎い。

しづ　サイナア。それぢやに依つて、その百兩も、與助と相談して、そつと……拵らへて爰にある。役に立てゝ下さんせいなア。

ト渡す。

彌七　そんなら、その百兩。エヽ、忝ない。

しづ　女房になんの禮。まだ疑ひが晴れぬかいなア。

彌七　ほんにさうぢや。浪人しても石井兵助。術なう人に、この金は貰はぬ。段々の世話にて、コレ、女房ども。

しづ　こちの人、必らず變つて下さんすなえ。

ト抱きつく。此うち助太郎、奥より出かけ居て、この時、ツカ〳〵と側へ行て

助太　コリヤ、見付けたワ。

ト兩人、悔りして飛び退く。

助太　人の心も知らずに、あんまりぢやがな〳〵。

彌七　これは若旦那助太郎さま、あんまりとは、何があんまりでござります。

助太　これが、あんまりでなうて、何があんまりであらう。餘りの事で、あんまり腹が立つわい。早う祝言がしたいしたいと、待ち兼ね居る此おしづを、女房どもと、今のは何ぢや。あんまりぢやな〳〵。

ト兩人氣の毒なこなしあつて……

彌七　イエ〳〵、申し、これには段々の樣子のある事。マア〳〵、氣を鎭めて、お聞きなされませ。

助太　ナニ、氣を鎭めようと思うても、その氣は行てしまうたわい。

彌七　助太郎さま、こりや、お前のお爲でござりますわいなア。

助太　どうして、おれが爲ぢや。

彌七　サア、そのお爲と云ふ譯は……オヽ、それ〳〵、斯うでござります。お前とおしづさまとは、夫婦にする積りと、小さいから貰うてござります。

助太　ござります。

彌七　そこで、祝言を待ち兼ねてござるワ。

助太　ござるとも。

彌七　所で、おしづさまが、お前を嫌うて。
助太　ヤア。
彌七　イヤサ、嫌うてぢやござりませぬ。好いてござりますが。
助太　さうあらうとも。
彌七　ぢやけれど、サア、恥かしいて。
助太　なんの恥かしい事がある。おりや根ツから恥かしい事はないもせんもの。
彌七　サア、お前はそれでも、おしづさまは、恥かしいと て、コレ彌七、わしや助さまと祝言がしたうて／＼、どうもならぬ。けれど、恥かしくて／＼ならぬが、どうせう。
　ト身振りにて云ふ。助太郎・現になつて居る。
そこで、私しが云ふのには、申しおしづさま、お前はお前は、今時祝言が怖いの、恥かしいのと云ふ娘が、三千世界にござらうかいなう。エ、、見下げ果てた初心者ぢやと、先づ此やうに云うて叱りました。
助太　ナニ、叱らずともよいに。可哀さうに。
彌七　サア、その意見が堪えたやら、ちつくり氣が太うなつて、そんならよいやうに、道付けてくれいとござります。そこで私しが申しまするには。
助太　なんと云うて聞かしてくれた。
彌七　ハテ、もう道付けると云つて、兎角一所へ寄るが肝心、何がなしにヒツタリと抱き付いたがよいと申して、抱き付きやうの鹽梅を教へて居りました所。なんとコリヤ、お前のお爲ぢやござりませぬか。ナア、おしづさま。
　トおしづ、恥かしきこなし、振り袖た顔に當て、思ひ入れある。助太郎もこなしあつて
助太　さう聞きや。どうやら、おれが爲のやうにもあるが……それに又、こちの人、女房どもとは、どうした爲ぢや。
彌七　サア、それはアノ、オ、、それ／＼、常々お前を、此おしづさまが、兄様々々と仰しやつてござるゆゑ、兄様をこちの人に、こち直す教へ方でござります。なんとこれも、お爲でござりませうがな。
助太　ハア、そんなら兄様々々と云ふ事を止めにして、こちの人と云うてたもる心かいなう。
　トおしづ、物云はずに彌七へこなし。
彌七　これはマア、アイと仰しやれ。ア、コレ、教へて置くに、不器用な。

トいろ〳〵こなしあつて呑み込ます。

しづ　アイ。

ト不承々々に云ふ。

彌七　それ〳〵、アイとござります。

助太　アイとは忝ない。これと云ふも、彌七が敎へ方の好いゆゑ。この上ながら、早う祝言の埒の明くやうに、賴む〳〵。

彌七　ハイ〳〵、畏まりました。爰が大事の傳授事。若旦那のお賴みならこそ敎へまする。申し、おしづさま、爰へお出でなされませ、ハテサテ。

トいろ〳〵目まぜ。

しづ　それでも、どうやらわしや、恥かしいわいなう。

助太　その恥かしいのを、恥かしうないやうに、敎へてやるといふ、彌七の側へ行きやいなう。

彌七　サア〳〵、早う。

トおしづ、思ひ入れあつて、彌七が側へ寄り

しづ　彌七、何か用があるかいなう。

彌七　ハテ、ズツと此方へお寄りなされて、これ申し、何がなしに、こちの人と仰しやりませ。

助太　それ〳〵、こちの人助太郎さまと、云うてたもいの。

しづ　わしや、そんな事は。

彌七　サア、マア、アイと請けて置いて、助太郎と云ひ憎けりや、太郎さまとなりと、ナア申し、若旦那。

助太　オヽ、なんとなりと、物云うてもらや、おれは嬉しい。

彌七　イヤ、モウ、當世の祝言に、睦言は古めかしい。頭から抱き付くが近道ぢやて。

トおしづを引寄せる。おしづ、助太郎が手前斟酌して

しづ　コレ、何しやる、人が見るわいの。

彌七　人が見ても大事ござりませぬ。お許しの出た仕付け方。

ト云ひ〳〵

おしづさま、斯う抱き付いて、此やうにな。

トこなしある。おしづ、恥かしきこなし。助太郎、現になつて見て居る。

しづ　そんなら彌七、斯うして居れば、わしが兼ねて思ふ通りに。

彌七　コレ、女房ども。

しづ　こちの人。

彌七　傳授は爰ぢや。

ト程よく袖で顔を隱し、こなしある。助太郎、よろしく身振りにて

助太　ア、コリヤ〳〵、待つてくれ〳〵、あんまり敎へやうに實が入つて、見て居ても堪らぬわいなう。

彌七　ぢやと申して、稽古から本までにやつて置かぬと、本舞臺へ掛けてから、間違ひますわいなア。

ト奥より

さご　彌七や、彌七はどこに居やるぞいなう。

彌七　エヽ、コレ、まだ何や彼や敎へる事があるけれど、側に見物があつては、どうもならぬ。

助太　それ〳〵、イヤ又、見物して居るのも、上氣して堪えられぬ。兎角好いやうに、わが身、頼む〳〵。

彌七　お氣遣ひなされますな。御祝言までは、ズル〳〵べツタリ。

助太　其方が敎へて

彌七　こちの人と仰しやるやうに

助太　云はしてたもるか。彌七が先生。

彌七　若旦那。

助太　コレ、女房ども。

しづ　助太郎さま。

彌七　そりやこそ、云うたワ。

助太　エヽ、忝ない。

と抱きつくを彌七、引分け

彌七　イヤ、印可は後程。

助太　ハテ、餠屋は餠屋ぢやなア。

ト唄になり、彌七、おしづ、助太郎、こなしあつて、奥へ入る。引違うて、與助、出て來て

與助　先づは、お娘をぢやらつかして、帳簞笥に入れてある、百兩の金を盜み出し、摺り替へてお性根は、我れらが着服。

ト百兩出して見て

時に、これをどこぞへ暫しが間、忍ばして置きたいものぢやが。

トあたりを見廻し、幸ひと見世に釣つてある傘を下ろして來て、この中へ金を隱し、元のやうに釣つて置き、此方へ來て

こいつは好いが、昨日芝居で道具入と約束した、彼の侍ひが、もう來さうなものぢやが。面妖な。

トこなしある所へ、奥より、おさご出て來て

さご　オヽ、與助、爰に居やるか。奥を尋ねたわいなう。

與助　エヽ、また聾め。何を吐かすのぢや。アタ邪魔な。
　ト云ひ〳〵頷づいて見せる。
さご　コレ、其方にちよつと、相談せにやならぬ事がある。
　サア、爰へ來てたも。
與助　さては、こいつは、おれにほの字か知らぬ。
　ト側へ行て、何の用でござりますと、書いて見せる。
さご　コレ、相談と云ふは、恥かしながら、わが身も知つて居やる通り、わしもモウ五六年、後家立つて居るが、生れ付いた派手な取なりゆゑ、孫兵衞後家と人にけなりがらすも、きつい殺生。未來の罪が恐ろしさ、どうせうか斯うせうかと、思ふ矢先に、あの手代の彌七、正直と云ひ、情らしい所を見込んで、いつそわしと一つになつて、この家を納める思案ぢやが、なんと似合ひ相應な、好い夫婦であらうがの。
與助　ハテ、厚かましく吐かした。あの面わい。
　ト呆れる所へ、向うより、彌左衞門、袖なし羽織、木戸番の形で出て來て
彌左　なんでも、此あたりの筈ぢやが。
　ト内を覗いて
　更科屋といふ質屋は内方かな。番頭與助どのに、ちよつと逢ひたうごんす。
與助　オヽ、更科屋は爰、番頭の與助はおれ。なんの用ぢや
　ト云ひ〳〵門口へ出る。
彌左　イヤ、道具屋八九郎から、手紙を持つて來ました。
與助　オツト合點、道具八待つて居る。さうして、その手紙は、
彌左　コレ、爰に。
　ト懷から出して渡す。與助取つて、サラ〳〵と讀み
與助　成る程、これで手番ひはよいが、コレ、この手紙に書いてある、貴樣は、大概な事は見事やツ付けるか。
彌左　サア、道具八にあらましは聞きました。おれも江戸では誰れ知らぬ者もない、釣鐘彌左衞門といふ木戸番、今度この府中の寺町へ芝居が來たゆゑ、付いて來たは、年は寄つても强氣でごんす。幸ひ八九郎は、江戸での近付き、よい仕事があると聞いて、それでわざ〳〵來ましてごんす。
　ト此うち、おさご門口を見て、キヨロ〳〵こなしあつて
さご　これはしたり、與助々々、人に物云はして置いて、

何して居るのぢやぞいの。

與助　ハイ〳〵。アレ、内から呼ぶ。この事に付いて、よい目論見が出來た。マア、内へ入つて。

彌左　そんなら許さつしやりませ。

ト連れ立つて内へ入る

さご　コレ與助、今云うた事、其方も助太郎といふ息子を持ちながらと、思うて居やらうが、あのやうな愚かしい生れ付き。兎角この家が大事。殊に又、戀には我が子も捨てる慣ひ。一旦わしが思ひ込んだ事ぢやに依つて、彌七と夫婦になつて、急に祝言も披露目も、又したい事だらけぢや。わが身も、その積りで早くしてたもや。

ト此うち與助、思案のこなし。おさご、彌左衞門をフト見て

これはいかな事、わしとした事が、ウカ〳〵と、どこのお人やら來てござるのに。

彌左　イエ〳〵、大事ない者でござります。

與助　これサ、聾ぢや〳〵。何を云うても、聞えぬ〳〵。

彌左　そんなら、金挺か。そりや幸ひ、何話してもお搆ひなしぢや。

與助　これからおれが、智惠を振ふ段ぢや。

ト云ひ〳〵、掛け硯を引寄せ、卷紙に書く。

コレ、彌左衞門、貴樣にも少々儲けさすワ。

彌左　なんぢや知らぬが、巧くなつたワ。

ト與助、卷紙をおさごに見せる。

さご　そんなら、わしと彌七は、似合はしい事ぢやと思やるか。與助、其方は、顏に似合はぬ戀知りぢやわいの。

トまた讀み〳〵

ヤア〳〵、アノ娘のおしづめが、彌七に心がある素振りか。

ト與助領づく。

エ、、腹の立つ憎い奴。小さい時から貰うて置いたも、助太郎と娶合はす積り、それにマア、油斷のならぬ。

ト腹立てる。與助、また書いて見せる。

ムウ、そんなら、高々娘分のおしづぢやに依つて、どうせうと儘、いつその事、外へ嫁入らせ、幸ひ頼みの印百兩、おこす聟があるか。

ト與助、領づき、また書いて見せる

そんなら、そこに居る人が、仲人せうと云はるゝか。

ト與助、領づく。

そりや好い手廻しぢや。幸ひ、今のを聞いては、彌七が

側へ、おしづは置かれぬわいなう。
ト此うち、與助、また巻紙に書いて、懐へ入れ
與助　親仁々々、ちよつと逢はう。
ト彌左衞門を此方へ連れて來て
今聞いた通り、爰で一番仲人になつてもらはにやならぬ。
彌左　よし／＼、仲人呑み込んだが、いま聞けば、頼みの百兩は、どうするのぢや。
與助　そりや、爰にある。
ト百兩包みをソツと渡す。
彌左　成る程、こりや眞鍮。
與助　云ひ合せの筋は、詳しく書いて置いた。
ト巻紙を渡し
その百兩を、懐から出した顔で、彼の聾の前で、合點か。
彌左　よし、取つて居るワ。
ト巻紙を讀んで懐へ入れ、おさごの側へ行て、右百兩をおさごの前へ直し、鹿爪らしい體にて
彌左　おんあぼきやアべえるしやのう、まかまにはんとはちんばらはらはりたや。ハ、、、、何を云つても佛様ぢや。

さご　これはマア、段々お世話。番頭の與助と相談して、よいやうにして下さんせや。
彌左　いろはにほへとちりぬるをわか。
さご　ハテ、娘が得心せうがせまいが、親甲斐に無理に押付け。
彌左　サア／＼、めでたう頼みも納まつたワ。時に、聟の工面。
ト彌左衞門、此方へ來て
與助　聟も矢ツ張り、貴様の積りぢや。
彌左　滅相な。まだ振り袖の娘ぢやないか。それにあんまり
與助　ハテ、そこが魂膽。傳へ聞く齋藤別當實盛は、鬢髪を墨に染め、若やいで勝負を遂げんと云うたワ。その赫ら顔は、目立たぬやうに薄化粧と出かけ、藥罐頭は青黛で彩色を。
彌左　イカサマ、眞菰を引いて添へ入れて、黒油でピツタリと、繻子鬢に仕立てたら、夜目には三十と四十若く見えるであらう。
與助　追ツ付け黄昏。時分はよし。急げ／＼。
彌左　待つたり／＼。滅多に急がれぬ。着物が無い／＼。

與助　ほんに、袖なし羽織では詰まらぬわい。
彌左　頭ばかり若うなつても、こんな形で出掛けたら、維盛彌助の化け物ぢや。
與助　オツト、幸ひ、今朝置きに來た上下着物の
　ト質の上下着物を括つたのを、ソツと取つて來て
これで好いぞ。聾が見ぬやうに。コリヤ。
　ト蔭になつて居る。彌左衞門、羽織の下へソツと入れ
彌左　よし〳〵、なんでも身仕舞ひの出來次第、聟入りぢや。
與助　必らず首尾よう、イヤ、まだ大事の物渡さにやならぬ。
　ト彌七が書いた狀を出して囁いて居る。
彌左　ムウ、合點ぢや。
與助　早う行け。
　ト唄になり、彌左衞門、外へ出て、腰を伸して向うへ入る。
さご　與助、今の仲人は去なれたか。いよ〳〵右の相談はよいか。
與助　よし〳〵。
　ト書いて見せる。

時に又、あの金の納まり所が
　トちよつと思案して
彌七〻〻、ちやつとおぢや〳〵。
彌七　オイ〳〵。
　ト出て來て
番頭、けたゝましい、呼ばんすが用か。
與助　用どころぢやない。わが身はあやかり者ぢや。今もお家が云はしやるには、其方と祝言して、妾の内を納めるといの。
彌七　エヽ、滅相な。そんな事して、どうなるものぞ。
さご　コレ彌七、與助に樣子を聞きやつたであらうが、先刻に云やつた事が、あんまり嬉しさに、善は急げと祝言して、早う夫婦になつたら、夜も晝も側へ寄つて話しせうと、こちや喜んで居るわいなう。
彌七　これは情ない。アレ、厚かましい程、話し好きぢやないか。
與助　ぢやと云うて、見入られたてまへが因果ぢや。コレまだ云はにやならぬ事がある。娘御のおしづさまは、嫁入りなされるぞや。
彌七　ヤア〳〵、そりやどういふ譯で。

與助　ハテ、諸事はお家の悋氣ぢや。もし女子を一緒に置いては氣にかゝる。もう助太郎にも添はさぬ。外へ出すてゝ、それ見や、その百兩の包みが賴みの印。

彌七　アノ、そんならモウ賴みが……おしづさまには嫁入りか。

與助　コレ、慌てまい〳〵、これが却つて貴樣の幸ひ。ハテ、云ひ號けの緣さへ切れて、外へ嫁入りする日は、どうせうと儘ぢやないか。マア、氣に入つて、その百兩も望みの物も、手に入れる工面が肝心。おれが惡いやうにはせぬわいの。

　ト與助、おさごが側へ行て、疊へ書いて見せるを、讀んで

さご　オヽ、さうせう〳〵。コレ、彌七、おしづを嫁入りさすといふも、根が其方が大切さ。この百兩は賴みの印この上、財產を任すからは、この金も其方が預かつて居てたも。

與助　ソレ、預けると。預かつて置いて、後でさま〳〵。

彌七　何云はんすやら。

與助　ドリヤ、粹を通さうか。

　ト唄になり、與助、こなしあつて奥へ入る。後におさご、彌七が側へ寄り、ソロ〳〵、嫁らしきこなし。彌七、嫁がる。この唄のうち、向うよりおせん、着流し、世話の女髪結ひの拵らへ、前垂れに櫛道具を包み、持つて出て

せん　御免なされませえ。

　トずつと內へ入る。彌七、幸ひと立退き

彌七　これは、誰れぢやと思うたら、藤兵衞が內儀……イヤ、髪結ひのおせんどの。

せん　彌七さま、この間は懸違うて、暫らくお目にかゝりませぬなア。

　トおさご、おせんを見て

さご　これはしたり、この彌七を世話にして、奉公におこして下さんした、髪結ひのおせんどのか。オヽ、幸ひ幸ひ、わしも今日から、この後家髪を結ひ置いて、あしたから島田崩しか、可愛らしう丸髷に結うてもらはにやならぬわいなう。

　トおせん、構はず默禮ばかりして居る。

彌七　コレ〳〵、おせん、今朝藤兵衞から、密かにわしへの手紙。彼の伽羅の尊像さへ手に入れたら、直ぐに敵討の出立と。

せん　ア、申し、それを。
　ト思ひ入れあるを
彌七　ハテ、大事ない。聞えぬわいの。
せん　ほんになア。幸ひな耳の遠い後家御様。
　トおさごに指さしするを、おさご間違へて
さご　そんなら、おせんどの、彌七に様子を聞かしやんしたか。オヽ、恥かしい。
せん　ありや、何の事でござりますえ。
彌七　マア〳〵、外の事は打ツちやつて、とつくり藤兵衞が云う通りに早う。
せん　サア、その事で、こちの人の内意、密かにお前に申さねば、ならぬ事があつて、わざ〳〵参りましたわいなア。
彌七　その様子を早う聞きたい。そんなら。
　トおさごにサラ〳〵と、書いて見せるを、讀んで
さご　おせんどのへも、右の事を相談したい。オヽ、それが肝心。云うても其方の請け人の事。いつち云はねばなるまい。ちやつと奥へ連れ立つて行きやいなう。
せん　左様ならば彌七さま、奥にてとつくりと。
　ト彌七、頷づき、おさごに書いて見せる。

さご　なんの遠慮。早うござんせ。
彌七　サア、おせん。
せん　彌七さま、お出でなされませ。
　ト唄になり、彌七、おせんを連れ、おさごも共に奥へ入る。暮れ六ツの鐘鳴る。與助、奥より行燈を提げて、出て來て
與助　こりやもう日が暮れるのに、どいつも暖簾さへ取る奴がない。ハテ、番頭といふ者は、世話なものぢや。
　ト合ひ方になり、門へ出て暖簾を取り、そこらを片付けて居る所へ、向うより藤兵衞、着付け羽織、侍ひにて、幕の外にて、與助が八九郎に渡した胴亂を提げ、家來に箱提灯を持たせ、出て來て
藤兵　確かに此あたりと聞いたが、大方この家であらう。半助、案内いたして見よ。
半助　畏まりました……頼まう。更科屋といふはこれか。
與助　これでござりまする。どなた様ぢやな。
半助　これでござります。
藤兵　然らば其方は。
　ト囁く。
半助　ハツ。

ト入る。與助、門へ來るうち

藤兵　御免あれ。通ります。
ト内へ入る。與助、こなしあつて

與助　ついに見受けませぬお侍ひさま、何ぞ御用でございまするか。
ト云ふうち、藤兵衞、そこらを見廻し、與助、藤兵衞が恰好を窺ふ。

藤兵　さした儀てはござらぬ。この家の番頭、與助どのと申す人。

與助　ハイ、私しでございます。

藤兵　すりや、其許が與助どのか。
ト提げて居る胴亂を見せる。

與助　エ、成る程、與助でございます。

藤兵　アノ、實正與助か。
ト胴亂を見せる。

與助　ハテ、如何にもその、イヤ、與助でございます。
ト奥少しバタ／＼にて

助太　サア／＼、大事ぢや／＼。
トおさごも一緒に出て

さご　一々詮議せにやならぬ。

助太　與助々々。

與助　ハイ／＼／＼。
ト云ひ／＼、藤兵衞と目まぜ、いろ／＼。

助太　百兩といふ金が見えぬ。與助々々。

與助　ハイ／＼／＼。

助太　奥の帳簞笥に入れてあつた、百兩の金が無いゆゑ母者人が大騒ぎぢや。詮議ぢや／＼。

與助　サア／＼、ようございます。何事も私しが爰にございます。
ト胸を押へる。此うち藤兵衞、上へ通る。件の胴亂より莨を出し、莨をのんで居る。

さご　そんなら與助、この詮議は、わが身の胸にあると云ふのか……ムウ、そんならよい。
ト云ひ／＼、藤兵衞の顏を見て

ヤア、ありやどこから見えたお侍ひ。これも彌七の御一家の衆かいなう。

與助　ハテ、默り居れ。
ト助太郎と顏見合せ

イヤ、默つて居なされ。

助太　オ、／＼。

ト助太郎、おさごと、並んで聞いて居る。

與助　さても、お侍ひさま、あなたがこれへ、お越しなされました、御用の筋は、如何やうな事でござりまするな。

藤兵　身共は、遠州の武士でござる。今日參つたは別儀てない。昔に聞えた伽羅木にて作つた、觀音の尊像、慥かにこの家へ、質物に取りあると承はつたが、いよ〳〵左樣か。

ト、おさご助太郎になに云ふと尋ねるこなし。助太郎、疊へ書いて見せる。おさごこれを讀んで心意氣ある。但し此方のせりふの間々、右の心持ちなり。

與助　成る程、質物に取つてござりまするが、なんと致しましたな。

藤兵　さればサ、その伽羅の尊像と云ふは、身共が主人、遠州濱松家の重寶、先達て紛失いたした。それゆゑ、拙者にこの詮議を仰せ付け、諸所方々と尋ねるところでござる程に、早々、その尊像を、これへ出し召され。

與助　ハイ、御尤もでもござりまするが、私し方は商賣の事ゆゑ、否とも申されず、これに依つて、成る程、百兩の質に取り置きましたでござります。

藤兵　サヽ、てまへ儀は構はぬ。その置き主めが盜賊、詮議の手懸りといふもの、置き主はいづくの誰れと、早く云やれ。隱し立ては爲にならぬぞ。

與助　ハイ、サア、その置き主は、その砌りに、出奔いたしてござります。

藤兵　ナニ、置き主が出奔とばかりでは濟まぬ。コリヤ、この家にも詮議がかゝるわい。

トあたりを睨み廻はす。助太郎、始終書いて見せる。おさご、氣味惡いこなしある。

藤兵　何はしかれ、是非尊像は身が持ち歸る。爰へ出しやれ。

與助　ハイ、それはさうでもござりませうけれど、此方も百兩に取りました代物、この見世を預かつて居まする番頭、親方の手前と云ひ、ツイほつかりとは。

藤兵　渡されぬといふも、尤もさ。置き主は拙者が引ツ捕へ詮議を糺し、金子なくても、持ち歸る術もあらうが、差當つて、この家の質物……ムウ、よいワ、身が請け戻して、代金を遣はさうわサ。

與助　左樣ならば、申し、若旦那、その尊像を、これへお出しなされませ。

助太　出しても大事ないかや。

ト云ひ〳〵奥へ入る。藤兵衛、懐中より、百兩包みを出し

藤兵　伽羅の尊像の代金百兩、受取り召され。盗賊は後日の詮議。

與助　お金さへ受取りますれば、御勝手になされませ。

ト此うち助太郎、尊像の蒔繪の箱を持つて出る。續いて彌七、出掛け、與助と顔見合せ、あれをやつては、トいふ仕方。でもどうもならぬといふ仕方、いろ〳〵あつて

藤兵　ナニ番頭、利息の儀は、後より算用。先づ一時も早く。

ト尊像を受取らうとする時、彌七、是非なうズツと出て

彌七　イヤ〳〵、マア、お待ち下さりませう。

ト留める

藤兵　待てとは何者。

ト彌七を見て

ヤア、こなたは同家中、兵衛どの、御子息、石井兵助どの。ハテ、兵助どのでござるなア。

彌七　貴殿は野田藤四郎どの。ハテ、思ひがけない。

藤兵　變つた所で兵助どの。何は格別、大切なる尊像を持ち歸るを、待てと留めさつしやるは。

彌七　サア、貴殿にも御存じの通り、この尊像の儀は、殿樣より親兵衛預かりしところ、彼の赤堀水右衛門、親人を手に懸け、尊像を奪ひ取つて立退きしと、サア、勘當の身の上なれば、様子を承り、せめては、この尊像を詮議仕出し、殿樣へ差上げなば、それを功に親の敵を討ちたい願ひ。浪人の身の幸ひに、心を盡すこの兵助。それに今貴殿の手より、殿樣へ、尊像を上げました時には、一生埋れ木。サア、何卒以前のよしみに、この尊像を私しに。

ト懐中より百兩の金を出し

コレ、番頭どの、いま聞かんす通りの譯ぢや程に、この尊像は、この百兩で。

藤兵　イヤ〳〵、兵助どの、そりや、こなたの身勝手と申すもの。この藤四郎に仰せ付けられた、尊像詮議の役。貴殿に渡しては、身共の武士が立たうか。サ、番頭、尊像を渡しやれ。邪でも非でも持ち歸る。

彌七　そりや、いつまで仰しやつても同じ事。私しが手より差上げねば、コレ、番頭どの、こなさん、何も彼も、

ソレ、合點ぢやないか。是非わしが請け戻すぞや。

與助　それは、さうでも。

藤兵　番頭、金子百兩渡したぞ。約束の通り、云ひ分はあるまい。

與助　サア、それはナ。

彌七　イヤ、私しが。

藤兵　是非身共が。

兩人　差上げまするぞ。

ト此うち、彌左衛門着付け上下にて、小提灯を提げ出て

彌左　頼みませう／＼、娘御は内方にござるかな。約束の聟どの。早々と聟入りでござる。どなたぞお出迎ひなされませう。

與助　なんぢや。もう聟さまが見えたや。めでたい／＼。

トおさごが前へ出で

與助　聟様が見えました。

ト書いて見せる。

さご　ヤア／＼、聟どのが見えた。爰へ通しや／＼。

與助　サア／＼、聟どの、通りなされて下さりませ。

彌左　通りませう／＼。花聟でござれば。

ト無理に、腰を伸し、ズツと入る。

藤兵　何かこりや取込みさうな。ズツと暫らく扣へよう。番頭、早く譯を立てやれ。

トよき所へ片寄つて莨のんで居る。彌七も扣へる。

與助　ハイ／＼、マア、善は急げ、此方から片付けます。サア、聟様、此方へ／＼。

彌左　ヤレ／＼、年は寄るまいものぢや。こんなものぢやなかつたが、アタフタ爰まで來たら、體中がムリ／＼いふ。ヤレ、腰痛や。

ト腰を屈めて打つ。與助、咳拂ひして知らす。彌左衛門、ちよつと氣を替へ、しやきばつて居る。

さご　娘々、おしづ、早うおぢや／＼。

しづ　アイ／＼。

ト出て、おさごが側へ寄り

母様、御用かえ。

さご　コレ、おしづ、外の事でもない。今夜、この聟様と祝言さす程に、喜びや／＼。

しづ　エ、。

ト恟りして、彌七と顔見合せ、助太郎も恟りして

助太　コレ、阿母、なんぢや。アノおしづと、この回向場の

戒名書き見るやうな和郎と祝言ささう。おしづはおれと祝言するのぢやと喜んで居るのに、なんの事ぢや。ならぬぞ〳〵。

與助　これは若旦那、なんぼ其やうに仰しやつても、母御樣が御合點で、百兩といふ賴みの來た花聟樣、祝言ささにや、濟みませぬ。ナウ、彌七。

彌七　サア、そんな事か知らぬて。

助太　彌七、われまでがそんな事を云ふわい。精出して祝言の稽古さして、手が上がると、人にやつて堪るものか。さうして、見れば頭の若うて、顏はひねくさい、親仁聟と、祝言はさゝぬ〳〵。

彌左　ヤレ、興がない、けんから親仁と侮つてもらふまい。まだ〳〵年は六十。

ト與助咳拂ひして、紛らかす。

イヤ、アノ、六六三十六ぢや。マア、商人の聟には調法男ぢやぞえ。二二が四から、とつと九九八十一まで、宙でやる。こんな聟が又あるものぢやないぞえ。今年は、聟の豐年ぢや。ヤレ〳〵、腰痛や。

さご　コレ、おしづ、助太郎も、不思議にあらうが、高が斯うぢやわいなう。末は二人を夫婦にする積りであつたけれど、よう思や、相性が惡いげな。それで、外へ嫁入りさするも可愛さ。殊に、見れば好もしい聟どの、年若な娘ぢや程に、あしらつてやつて下さんせいな

助太　イヤ、なんでも彼でも、この祝言はさゝぬ〳〵。この助太郎が、オヽ、ヌツとさゝぬぞ。

彌左　コレ、貴樣とせうとは云はぬぞや。お娘とするものぢやわいなう。オヽ、祝言をするのぢや。ちやつ〳〵と來てもらひませう。

トおしづが手を取る。

しづ　エヽ、否ぢや、何するのぢやわいなア。

ト振り放し、ピンとする。

彌左　何するとは、エヽ、この筈ぢやあるまいな〳〵。大枚百兩といふ賴みをおこした花聟ぢや。一體これまでいたづらかわく事も知るまいと思うて居たが、おりやよう知つて居るぞ。其やうにマア、よい年な者を化かさうとする、アノ姿な狐狸め、鼬め、泥鼈め。

ト立ち、色事師のやうに云ふ。

與助　コレ〳〵聟さま、イヤ聟どの、氣に入らぬ、賴み戻せてよい事ぢや。いとしほげに、手入らずのおしづさまを、いたづら者ぢやの、狐狸の泥鼈ぢやのと。

彌左　アノ、泥鼈の譯聞きたいか。
與助　オ、、聞くのぢや。
彌左　こりや、もう濡れ事師ではゆかぬわい。聞きたか何なと聞かさう。マア、百兩の賴み戻せ。
與助　オ、戻して置いてから、存分云ふのぢや。待つて居よ…コレ、彌七、先刻お家が預けしやつた、百兩の金、爰へ出しや。
彌七　成る程、最前預かつたなりに、持つてゐる百兩。
ト懷中より出す。與助取つて、彌左衞門の前へ置き
與助　ソレ、賴みの百兩、戻したぞ。
彌左　受取らいで。なんと又聟入りばかりで、百兩損せう筈がない。
ト云ひ／＼改め
ヤ、こりやなんぢや。賴みの印は金百兩。眞鍮臺の似せ小判は受取らぬ。あんだら盡せ。
ト投げ付ける。與助、取つて見て
與助　ヤア／＼、ほんにこりや似せ小判ぢや。先刻に改める時には正金で、今明けて見りや似せ小判。こりやどうぢや。ハ、、、、聞えた。彌七おぢや。
彌七　番頭どの、その小判が、なんとなりました、

與助　なんともせぬ。じやら付かずと出してたも。
彌七　出せとは、何をいの。
與助　ハテ、賴みに來た本まの金を。
彌七　エ、
與助　出してたも。その場が濟まぬわいなう。
彌七　そりや、何云はんす。あの金より外おりや、知らぬわいの。
與助　知らぬものが、我が身の懷へ、ちつとの間入つてありや、どうして小判が眞鍮になるぞ。エ、、聞えた。今の先刻、尊像を買ふと云うた、コレ／＼、爰にある。
ト百兩の金を取上げ
この百兩、これがそれぢや。彌七、惡い／＼。
彌七　滅相な。その百兩は、こなさんも知つての通り
與助　おれが知つて居るとは、知らぬぞ、なんでも、この百兩が
ト包みを解いて見て
ヤア／＼、これもぢや／＼。
ト彌七に見せる。
彌七　ヤア／＼、この金は似せ小判。
トおしづと顏見合せ當惑。助太郎、おさこに書いて見

せる。

さご　ヤア〳〵。

　　ト悄りして居る。

與助　彌七、この金といひ、この金まで、同じ細工の眞鍮小判、われが手から出たからは、云ひ譯はあるまい。賴みの金を摺り替へ、又その上、銅脈で尊像の質請けせうとは、わりや太い者ぢやなア。茲な大盜人めが。

彌七　エヽ、見す〳〵知らぬ無實の罪に。

　　トきつとこなし。おしづ、心遣ひのこなしある

彌左　サア、此方の賴みはどうぢや、百兩渡して、泥鼈娘の由來を聞かぬか。

與助　オヽ、聞かうと思うて。この詮議ぢや。マア、すツ込んで居やいなう。

彌左　イヤ、すツ込むまい。スツと出さうかい。

與助　出すとは、何を。

彌左　百兩の金吸ひ取つた、泥鼈の娘、いたづら女郎の證據を出すのぢや。

與助　エヽ。

彌左　これぢや。

　　ト狀を出す。彌七おしづ悄り。與助、取つて

與助　この狀は何ぢや。ハテ、ぬらりくらりと書いたワ書いたワ。口の文面は一通り。肝心の所は、金子百兩御貸し下され候はゞ忝なく存じ參らせ候ふ。さてこそ帳箪笥の百兩も、これで荒まし知れてある。捕へて見れば我が子なりけれ。

　　トおしづ、辛氣なこなし。

番頭の役、此まゝにして置かれぬ。宛名はおしづさま參る、御存じより。彌七、こりや、われが手ぢや。

彌七　サ、それは。

與助　それとは、おのれ。

　　ト薪ざつぱ持つてかゝる。おさご留める。

さご　コレ、與助、わが身は彌七を、どうするのぢや。

與助　ヤレ、情ない。何も知らず庇うてくれるは、さらば腸を沸えさゝうか。

　　ト右の狀を又サラ〳〵と書いて見せる。おさご、狀を見て

さご　ヤア〳〵、ほんにこりや、大抵な事ぢやない。百兩といふ金を貸せと書いたは、盜んでくれいの謎々。そんなら、おしづめと、彌七と疾から、腐り合うて居るのぢやなア、エヽ、腹の立つ〳〵、彌七は彌七とも思ふが

アノどう女郎めを、どうせうぞ。

ト飛びかゝるを、助太郎留めて

助太　コレ〳〵、母者人、二人は祝言の稽古ぢやわいなう。

トしつかりと留める。おさごあせるうち

與助　コリヤ、彌七、もう斯う何も彼も、顯はれたら、云ひ抜けやうはあるまい。足元の明るいうち、摺り替へた金どもを、爰へ出せ。

彌左　オヽ、さうぢや。おれが頼みにおこした百兩も、爰へ出せ。

與助　おしづさまから貰うた。百兩も爰へ出さす。

彌七　サア、それは。

與助　サア、

彌七　サア。

與彌　サア〳〵〳〵。

與助　うぬがやうな盗人は、いつそ斯うして。

彌左　間男ひろいだがよいか。これがよいか。

ト兩人、薪ざつぼにて彌七をぶち据ゑる

しづ　コレ、覺えない彌七を

ト行かうとするを

さご　おのれは。

ト箒にておしづをぶつ、兩方よろしくある所へ奥よりおせん、ツカ〳〵と出ておさごが箒を引ッたくり、與助を引廻し彌左衛門を突き飛ばす。彌左衛門、ヒョロヒョロとしてこける。

彌七　ヤア、こなたはおせんどの。

與助　ほんに、髪結ひの女郎め、なんで邪魔する。

彌左　年寄つた者、なんで酷く投げたのぢや。

せん　ソレ、殿達でさへ仰山な。それに今のやうに、ひかひすな彌七さんを、ほんに我が身抓つて人の痛さを知れと、譬への通りに。ホヽヽヽ。

與助　イヤサ、似せ金を拵らへて、悪企みをひろぐ大盗人ぢやに依つて、いま存分にするが、なんとした。

せん　そりや、誰れに斷わつて。

與助　ヤア。

せん　彌七さんの請け人の、此せんを差措いて、我まゝ打擲。もし怪我でもさせた時には、番頭さん、云ひ譯があるまいぞ。

與助　サ、それは。

トつかへる。おせん、また彌左衛門の方へ

せん　頼みを肩に、どうやら合點のゆかぬ聟どの。マア、
　とつくりと顔を見て。
　　ト引寄せて顔を見て
　どうやら、こなさんは見たやうな。
彌左　おれもどうやら見たやうな面‥‥お顔ぢや。
せん　オ、ソレ、慥かに、今度寺町の芝居へ、江戸から付
　いて來て居る釣鐘彌左衛門といふ、木戸番のこなさん。
彌左　ソリヤ、段々火が廻つてくるぞ。
せん　芝居近所はわしが得意。毎日廻る髪結のおせん、フ
　ト近付きになつたお前ぢや。なんと覺えがござんせうが
　な。
彌左　アイ、よう見知つて居る。髪結ひのおせんさん。
せん　酒の上では、心安う、わしにじやれかゝる親仁様、
　それに、お前の此つむりは。
　　ト鼻紙にて頭を拭く、青黛をかしく禿げる
　如何に芝居者ぢやというて、年に似合はぬ繻子鬢で、若
　う化けて聟入りした、百兩の頼み。大方仲人は番頭ど
　の、この筋から詮議したら、様子がサラリと知れさうな
　ものぢやわいなア。
　　ト突き放す。腰を抱へて

彌左　アイタ、、、、疝氣の蟲が天上するわえ。
　　トこなしあつて抑へる。
與助　どう云ひ抜けても、彌七めが悪企み。その元といふ
　は、おしづさまと、不義間男に違ひない。
せん　そりや、今の狀を證據に云ふのか。
與助　知れた事。この狀が慥かな證據。
　　ト取上げて見せる。おせん、サラ〳〵と讀んで
せん　番頭どの、おしづさまと、彌七どのとは、なんぢや。
與助　知れた事。お主様と家來。
せん　サア、その家來の難儀するを、主人のおしづさま
　が、救うてやつたら、不義間男と云ふか。
與助　ヤ。
せん　イヤサ、慈悲は上からと、彌七さまにもせよ、お前
　にもせよ、家來の難儀を救うてやるは、主人の情ぢやな
　いか。
與助　サ、それは。
せん　殊に、この文言は、只百兩の金の無心一通り、不
　義した事はござんせんぞえ。それに名立てがましい。不
　義間男と仰山に云はんすりや、彌七さまより、却つてこ
　なさん方、お二人の身の上ぢやぞえ。

與助　そりや又なぜ。
せん　サア、おしづさまは、先旦那孫兵衞さまが、娘分に貰ひ、助太郎さまと一つにせいとの遺言とやら。そんなら助太郎さまといふ、男のある娘御。その娘御に得心もさせず、轉はずみに聟呼はりすりや、これも不義間男。死なば一緒に磔刑は三人、仲人はお定まりの獄門とやら番頭どの、男らしう、此方から名乘つて出て、磔刑の相伴したがよいわいなア。
與彌　サア、それは。
せん　木の空で涼みたいか。
與彌　サアそれは。
せん　サア〳〵、どうでござんす。
與助　いま〳〵しい。なんぢややら、惡い籤椿になつてしまうた。
せん　コレ、此まゝで濟ませば波風立たず、互ひに無事。それに云ひ分があれば、此方にも思案がある。彌左衞門どの、どうする氣ぢや。
彌左　どうと云うたら、どうせうぞい。聞かぬと云うたら磔刑の相伴。それよりは此まゝで歸るがよいわい。
せん　それがまし、もう爰には用はない。とつとゝ歸つた歸つた。
彌左　オ、歸る。
トそろ〳〵出かけ
エ、馬鹿らしい。コレ、とんと何しに來たのぢや譯が知れぬ。
ト云ひ〳〵、與助と顏見合せ、藤兵衞を教へ、思ひ入れして、思はず、おせんと顏見合せ
ハヽヽ、番頭どの。いかいお取持ち。
與助　聟樣、ようござりました。
と唄になり、彌左衞門、提灯を尋ねるこなし。
せん　これはしたり、何をウヂ〳〵。
彌左　ア、忙しない、慥かに提灯持つて來たと思うたが年寄ると精根がない……ア、儘よ。
ト門口へ出る
サア、眞暗ぢや、ても暗い夜さりな。この頭で提灯は要らぬ筈ぢやが、ヤレ〳〵、今日の聟は、ほんに酷い目に遭はし居つた。
トぼやき〳〵向うへ入る。此うち、藤兵衞貞のんで居る。この時、立上がり
藤兵　先程より何かのもやつき、聞いて居つても詮ない身

共。この上は、この尊像、所持して歸る。番頭、さらば。
ト合ひ方になる。藤兵衞、ソロ〳〵向うへ行きかけるな
せん　申し〳〵、お侍ひ樣。
藤兵　身共が事か。
せん　ハイ、ちつと御無心ながら、暫らくお待ちなされて
下さりませ
藤兵　なんだ。用ばしあるのか。
せん　お隙はとりませぬ。ちつとの間。
ト藤兵衞、こなしあつて立戻る。
せん　申し後家御樣。
ト疊へ書いて見せる。おさご讀んで
さご　おせんどの　なんと云はしやんす。娘が事は濟んだ
これから詮議すると云はしやんすのか。
與助　コレ〳〵、髮結ひさん、イヤ髮結ひどの、まだ詮議
とは、そりや何の詮議を。
せん　さればでござんす。この上は何をか隱しませう。こ
の彌七さまといふは、わたしが夫のお主筋、その縁で請
け人に立つて、內方へ手代奉公。
藤兵　そりや存じて居る。石井兵助、それがどうした。
せん　サア、その兵助さまの親御が、預かつてござつた伽

羅の尊像紛失。如何に今浪人してござるといへど、似せ
金の、イヤ盜賊のと惡名受け、剩さへその身詮議せにや
ならぬ尊像が、人手へ渡れば、一生歸參の叶はぬ仕儀。
サア、爰に斯ういふ、事がござんす。イヤ申し、お侍ひ
樣、お前もお聞きなされて下さりませ。
藤兵　面白い儀なれば、いつまでなりと聞きますわな。
せん　同じ家中に、野田藤四郎といふ、歷としたお侍ひ、
また尊像の行くへ、續いて御用金の紛失も、當時行くへ
の知れぬ、赤堀水右衞門が仕業と、云ひ觸らしてあると
やらの風說あつて、その藤四郎どのには、お國を出奔こ
サア、その出奔した侍ひに、よもや尊像の詮議せいと、
殿樣の御上意は、ありそもないもの。ホ、、、。さて
も〳〵世には似たお人も、あれば、あるものでござりま
すわいなア。
ト藤兵衞、ギツクリとこなしあつて、立上がり又行き
かける。
お侍ひ樣。お前は、こりや、どれへでござります。
藤兵　罷り歸る。
せん　そりや、御勝手にお歸りなされませ。併し、その尊
像は、置いてお歸りなされませ。

藤兵　たつた今、買ひ取つたこの尊像、置いて行けとは、何がどうした。

せん　彌七さま、その金改めて御覧じませ。

彌七　ドレ。

ト金を取上げ、包みを披き見て

ヤア〳〵、これも矢ツ張り似せ金ぢやわいの。

ト藤兵衞、門口へ出ようとするを、おせん、引廻し、門の戸ピッシャリ

せん　滅多に動かしは致しませぬぞ。

ト立塞がる。藤兵衞、こなしあつて、また下に居る。

番頭どの、最前ちよつと樣子を聞けば、彌七どのには似せ金で、賣られぬとある尊像を、このお侍ひには、似せ金で賣つても、大事ござんせぬか。

與助　サ、それは。

せん　これ程、似せ金の散らばる內に、大ざつぱいな、番頭どのではあるわいなア。

與助　ムウ。

ト閊へる。

せん　サア、お侍ひ樣、足元の明るいうちに、尊像を出さつしやれい。

藤兵　出しまする。斯うして參つたは、高で拙者、騙りでござる。オ、、騙りの仕損なひでござるわサ。

せん　名乘らいでも知れた騙り。サア、キリ〳〵と尊像を出した〳〵。

藤兵　ハテ、忙しない。何も急ぐ事はない。賴まれぬ先こそ斯う顯はれてからは、なんのこれしき。

ト云ひ〳〵、尊像を出して

兵助どの、貴殿の手前も、面目なきこの仕儀。身共を武士と思うて、折角のお賴みも、イヤ斯うなつては、何も申さぬ。併し、さぞ心外にござらう。息女をたらして百兩の金子、賴みの金も一つにして、息女諸ともこの家をサア、その企みも水の泡。武士の相互ひと存じ、斯程までに致した事。申さぬぞや。コレ、天命でござる叶ひませぬ。せめて貴殿への寸志には、譬へ如何やうに拷問に遭うても、いつかな白狀は致さぬ。御安心なされ〳〵。

彌七　そりや、何を云ふのぢや。こなたに何も賴んだ覺えはない。

藤兵　コレ〳〵、氣遣ひ召されな。何者が尋ねても、何も申さぬ。貴殿が斯う〳〵お賴みぢやと、なんの申さう。手前、武士でござる。

彌七　それ〳〵、矢ツ張りそれだ。
與助　コリヤ、云ふな〳〵。なんぼどのやうに云ひ廻しても、鼻の先の智惠、相摺りと知れてある。彌七、われが摺り替へた金を早う出せ。出さぬと、矢ツ張りおれが
　ト引立てにかゝる。おしづ、與助を押し隔て
しづ　コレ、與助、待つてたも。
與助　お前が知つた事ぢやない。退いて居た。
　ト引退けるを、また留めて
しづ　ハテ、その金さへ渡せばよからうの。
與助　ヤア、なんと。
しづ　ハテ、わしが親里、凊見寺前へ云うてやつて、貳百兩の金を其方に渡したら、彌七が身の上に、云ひ分はあるまいがの。
與助　ムウ、そんならお前が。
しづ　サア、家來の難儀を救うてやるが、主の慣ひとあれば、最前も、おせんさんの云はしやんした通りに。
せん　天晴れおしづさま、こりや、さうありさうなものぢやわいなア。
與助　又これも、うやむやに濟ますのか。
せん　ハテ、金の出所さへあれば、もう云ふ事はござんすまいがな。
彌七　ほんに、おせんどのといひ、おしづさまのお庇で、この彌七が身の上よりは、あの騙りの藤四郎。
せん　イヤ、氣遣ひはござんせぬ。便りの者に云ひ付けて人網が張つてあれば、滅多に動きはなりませぬ。……併し、折角騙りに來て、仕損うた事なれば、その同類、サア話したい事もあるまいものでもない。それだけは人の情。構はずと、あの儘に。
藤兵　追從云はずと、どうぞ歸さつしやつて下され。
與助　オヽ、それ。
　ト思ひ入れあつて
イヤ、申し、若旦那、お家を連れてお前方は、マア、奥へござりませ。
　ト助太郎、おさごに書いて見せる。
さご　オヽ、成る程、どうなつた事やら、聞えぬので猶退屈した。ドレ、奥へ行かうか。
助太　それ〳〵、おれも奥へ行かう。
せん　イヤ、申し、助太郎さま、折角取返したこの尊像。マア、お渡し申しませう、大切になされませ。
　ト尊像を渡す。

助太　成る程、慥かに受取つた。
彌七　ヤア、尊像を、金拵らへて請け戻すワ。
せん　此方の勝手に、わたしら夫婦が働きで。
しづ　そんなら、お前が。
せん　ハテ、案じずと、彌七さまと御一緒に奥へ。
與助　エ、思へば〳〵、うぬ。
　トきつとなるを
せん　コレ、力まずと、コレ、騙りの相摺り。
　ト藤兵衛に指し
二人でとつくりと、又よい目論見の相談さんせ。ホ、、ホ。
　ト唄になり、おせんこなしあつて、彌七、おしづを連れて行かうとする。おさこ、彌七が手を取らうとするを、おせん、隔て、二人を連れ、奥へ入る。後家、ピシヤンして、助太郎も共に奥へ入る。あと合ひ方になり、藤兵衛、與助、殘り居て
藤兵　まんまとしくじつた。たうとう濟まぬ身の上になつた。
與助　エ、いま〳〵しい。似せ金の百兩を、頼みの印ぢやと云うて、預けて置いたは、彌七めを科に落して、似せ金師ぢやの闇男ぢやのと喚いたら、聟後家が惚れて居る彌七めぢやに依つて、百兩はせしめる。なんでも似せ小判をほんのやつで、こつちへ取入る算用も、あの街妻めがけつかつて、支へこさへし居つた。道具入も道具入ちや。あんな死損ない親仁を、お先に使ふといふは、マア、七分の弱味があるてや。
藤兵　國元から詮議に來たと云ひ立て、似せ金で尊像をせしめる所を、埒もない女めが居つて、また彼方へ取戻されたかと、思へば殘念。
　ト與助あたりを見て
與助　その事なら氣遣ひない。
　ト密々に云ふ。
藤兵　氣遣ひないとは。
與助　誠の伽羅の尊像は、疾におれが、たぼ〳〵して置いたわいの。
藤兵　ムウ、そんなら誠の尊像は。
與助　惡い企みするやうにもない。どこやらが侍ひだけ、人の好い。そこらは抜からぬこの與助。
藤兵　天晴れ功名。して、誠の尊像は、いづくにある。
與助　人知れぬやうに、中庭の飛び石の下へ、密かに隱し

て置いた。
藤兵　それ聞いて落ち付いた。して貴様の身の納りは。
與助　サア。此やうに骨折るも、有やうはあのお娘に首たけ。彼奴をかたげて、爰をツイと走る積りぢや。
藤兵　さうして、路銀の用意はどうぢや。
與助　彌七にやりかけた百兩を宙でせしめて、眞鍮小判に仕替へて置いた。正金百兩は爰に座しますぢやて。
　ト最前の傘を取つて來て、中より出す。
藤兵　出來た〳〵。身共、爰に二百兩。この金は國元に於て、赤堀と云ひ合はして、奪ひ取つた御用金の殘り。
與助　その事も道具八に荒ましは聞いて居る。して、あの伽羅の尊像は。
藤兵　この金子で買ひ求め、體に付けてこれより又江戸へ出る積りぢやが、幸ひこの金は國元の極印。身共が手からは遣ひ憎い。その百兩と貳百兩。
與助　斯う取替へれば、尊像の代金も相濟み。
　ト百兩と二百兩を取替へる。
藤兵　委細の事は、道具屋八九郎方まで。
與助　押ツ付け後から
藤兵　必らず萬事。

與助　そりや合點ぢや。
藤兵　ぬかるまいぞ。
　ト唄になり、藤兵衞こなしあつて、向うへ走り入る。後に與助殘り、思案して
與助　お娘を斯うしてから、先づ尊像の代金百兩、先取りとは忝ない。これからは、彼のたぼ〳〵の尊像を出して。
　トこなしある所へ、向うより、彌左衞門、スウ〳〵息切り走り出る。後より藤四郎、浪人の形にて出る。與助、思案してゐる中へスツと入る。
彌左　番頭どのか。
與助　彌左衞門、トツカワと何事ぢや。
彌左　なんぢやどころか、大事ぢや〳〵。コレ、先刻の藤四郎といふ侍ひは、居るか〳〵。
與彌　何か手番ひして、今の先、歸つた〳〵。
彌左　ヤア〳〵、コレ、また藤四郎と云う侍ひが、わせたわいの。
與助　なんぢや、藤四郎といふ侍ひがわせたとは。
　ト云ふうち藤四郎、內へ入る。
藤四　與助といふは、お身の事か。

與助　さう云ふお前は。
藤四　野田藤四郎といふ者サ。
與助　エヽ、なんぢや。お前が藤四郎ぢや。そりや又どうして藤四郎でござります。
藤四　こな男は、キヨロ〳〵と、彼の道具屋八九郎は、以前召使うた奴。貴樣に諸事は呑み込ましあるとの儀、内談して來ると、昨日内を出て、今に歸らぬゆゑ、方々と尋ねて居るのサ。
與助　エヽ、そんなら今の藤四郎と云うたは、どうやら。
ト二百兩の包みを解いて見て
ヤア〳〵、そりやこそ〳〵、眞鍮小判ぢや。折角物した百兩は、彼方へちやらくら。エヽ、なんの事ぢや、いまいましい。
藤四　して、其奴は、いづくへ參つた。
與助　サア、どこへやら、眞ツ暗がり。おれもどうやら、合點が行かぬと思うたてや。
彌左　彼奴は、昨日、慥かに。
藤四　ソレ、ぼつかけて、早く〳〵。
彌左　イヤ〳〵、今朝から只働らき。なんぞ見にや、行かぬ〳〵。
藤四　ハテ、慾な奴。ソリヤ、大儀しろ。
ト小判を二三兩抛つて遣る。
彌左　忝ない。元服した山吹は、慥かにこの道。まかしよとな。
ト引返し、向うへ、走り入る。
藤四　時に與助、その騙りめの人相は
與助　サア、騙りめの人相は
ト奥より
藤兵　聞くに及ばぬ、そこへ出て見せてやらう。
ト藤兵衛、若黨の形にて、袋入りの尊像を持つて出る。
與助　ヤア、われは。
藤四　慥かに石井が家來の藤兵衛。
藤兵　珍らしい藤四郎、昨日、芝居の云ひ合せを幸ひ、騙りになつて、この家へ來たは、この尊像を無事に取返さう爲ぢやわやい。
與助　ヤア、さては。
藤兵　まだ恟りさす事がある。女房、その同類をこれへ。
せん　アイ〳〵、合點でござんす。
ト括られて居る道具屋八九郎を連れて、奥より出る。
與助　ヤア、わりや髮結ひのおせん、道具八を縛つたは。

藤四　そんなら、八九郎、われも。
八九　昨日から物も食はず、藤兵衛夫婦が責め。堪つたものではないわいの。
せん　何もかも、こちの人の指圖で、云ひ合せの、最前の仕儀。これも伽羅の尊像詮議の爲。
藤兵　うま〳〵喰うて、飛び石の隱し所まで委細に聞いて
コリヤ、大切な尊像は爰に。
ト見せる。
與助　それを。
ト取りにかゝるを立廻りにて
藤兵　裏道から廻つて、ちやんと此方へ取つたわやい。
ト見事に投げる。
せん　百兩の金も戻り、兵助さまの御身も潔白。この上は尊像を差上げ、敵討の御出立。
藤兵　そのお供は、中野藤兵衛。出立の血祭りに水右衛門が同類、野田藤四郎、うぬも敵の片割れ。覺悟ひろげ。番頭與助も、惡事の根元、慮外な奴の身に取つて、損はないぞ。
與助　藤四郎さまは侍ひ。おりや町人なれば、斯うなつたれば逃げる方が。

ト向うへ逃げる所へ彌左衛門、ツカ〳〵と出て
彌左　ドツコイ、滅多に逃がさぬ。待ち居ろう。
彌與　ヤア、さては、おのれも。
彌左　おせんさまの親御、以前の家來、いま落ちぶれて釣鐘彌左衛門、芝居者でも正しき正路な。コリヤ、江戸ッ子の通り親仁ぢやわやい。
與助　こりや、なんの事ぢや。亂騷ぎになつて來た。
彌左　殊に最前藤四郎がくれた、この金に、お國の極印あるからは。
せん　爭はれぬ水右衛門が同類。この上は、こちの人。
藤兵　一々に縄ぶつ。腕廻せ。
藤四　さう吐かしや。
ト刀を拔く。
八九　次手におれが縄も。
藤四　合點ぢや。
ト縄を切り、直ぐに藤四郎、八九郎、藤兵衛にかゝるを立廻り。與助、おせん彌左衛門と立廻り、兩方よろしく、與助、おせんを振り切り、向うへ逃げて入る。彌左衛門、おのれを追ひ駈け入る。藤兵衛、藤四郎を見事に取つて投げ、おせん、八九郎を支へる。

引敷く。この見得よろしく、チョン〳〵にて、道具廻る。

本舞臺一面の高塀、更科屋の裏通り、切り戸口あつて、時の鐘、しつぽりとした合ひ方にて、道具とまる。

ト右の切り戸より彌七、以前の形に大小差し、走り出るを、おしづ、留めながら、兩人出て行くを留める立廻りよろしくあつて

彌七　未練なおしづどの、大切な親の敵、討たねばならぬ兵助が身の上、詳しう云ひ聞かせしに、得心なくば、この世は愚か、未來の緣まで

しづ　サア〳〵、御尤もでござります。事を分けてのお詞に、二世を誓ひし嬉しさ、未練に留めは致しませぬが、せめて一言、わたしが云ふ事。

彌七　イヤ、聞く程迷ひの種。藤兵衛夫婦が思惑あれば、爰放した。

しづ　イ、エ、それでも、どうぞ。

彌七　ハテ、聞分けのない。

ト振り切り留める。立廻りの所へ、切り戸より、おさご手燭を灯し出て、彌七を見て

さご　ヤア、彌七か。

彌七　お家樣。

トちやつと、おしづを後へ隱す。

さご　逢ひたかつた〳〵わいなう。

ト取付く所へ、向うバタ〳〵にて、與助、走り出て

與助　ヤア、彌七、われを。

トおさごを引退け、彌七にかゝる。

彌七　與助、よくも最前。

ト立廻りになり、おしづ、手燭を吹き消す。皆々暗がりのこなしの所へ、彌左衛門、走り出て、立廻りを窺ひ見て

彌左　そこにござるは、兵助さまぢやござりませぬか。

彌七　さう云ふは、彌左衛門か。して、藤兵衛夫婦は。

彌左　藤四郎に縄掛け、國元へ引渡し、あなたを連れて直ぐに出立。

彌七　嬉しや日頃の願ひ。

しづ　わたしが願ひは尼法師、せめてはお見送りを。

與助　その聲はおしづ。われを。

ト一同立廻り。暗がりのこなしにて、おさごは彌七と

思ひ、彌左衞門に取付く。おしづは、花道の方へ出て
居る。彌七、與助、立廻り、與助を當て

彌七　彌左衞門々々々々。

ト花道へ行きかける。

彌左　押し付け業にあうて居りまする。

しづ　申し、兵助さま。

ト取付く。

彌七　そんなら、どうでも。

彌左　南無三。

ト與助、起上がり

與助　二人の奴らを。

ト花道へ行かうとする。この前、切り戸より藤兵衞、
窺ひ出かけ居て、この時

藤兵　與助め、うぬを。

ト與助を捉へ立廻り。

與助　ヤア、藤兵衞か。

藤兵　爰構はずと。

ト見事に投げる。此うち、彌左衞門、おさご、揉み合
つて居る。

さご　オ、嬉し。

トぴつたり寄り添ふ。

與助　さては。

ト藤兵衞に又かゝるを、立廻りよろしく、あつて

藤兵　ござりませ。

ト彌七、おしづ、向うへ入ると、本舞臺にて、四人よ
ろしく拍子

幕。

五幕目　島田新關の場

役名　鳥井彌十郎。蒲原兵次。沖津軍次。川越
し人足、戸塚の金。同、胴取りの定。同、ぐでん
の政。引がらの八。同、牡丹花の卯之。藤兵衞姉
娘、お常。同弟、太吉。島代屋才兵衞。傾城、狹
衣實ハ藤兵衞女房、お雪。中野藤兵衞。

造り物、瀨戸川松原の體。幕の内より戸塚の金、胴
取りの定、ぐでんの政、引がらの八、牡丹花の卯

之、皆々川越しの形、湯掛け、紅木綿の褌にて、猿を抛りゐる。定、政、摑み合ひ居る。八、卯之、取押へて居る。在郷唄にて幕明く。

卯之　ハテサテ、待てと云はゞ待ちやいやい。

定政　イヤ、聞かん〳〵。料簡ならぬぞ。

金　コレ、五百がいわひ、三百がコウトウぢや。

八　おれは二百がいわひ、百がコウトウぢや。

トこんな事出鱈目に云うて、皆々張つて居る。

金　イヤ、コレ〳〵、なんぼう生きてある胴ぢやと云うても、其やうに突きかゝつて、天秤に來てもらつては叶はぬ。もう一息ぢや。

八　存分生かして一息はさゝぬ。それなら鹽梅よく張るわいなう。

定　なぜ、おれを毆りやアがつた。

政　ハテ、同じ仲間の内を、爺むさいせりふするゆゑ、毆つたが何ぢや。

定　何でおれが爺むさい。

政　ハテ、爺むさいワ。

定　なんで。

トまた摑み合ふ。

皆々　サア、よいわいやい〳〵、マア、待ちやいの〳〵。

金　待てば甘露の日和。

ト猿を抛る。

一二四十盆叩き。

ト掻き寄せる。

八　エヽ、いま〳〵しい。

卯之　おりや、二朱から取られた。

八　もつと盗人に合うたやうなものぢや。

政　何でも、此せりふし拔くのぢや。

定　われに負けて居やうかい。

金　わいら、何をツウ〳〵云ふのぢや。また負けてヂヤヂヤ踏むのか。コリヤ、生ぢや。取つて置け〳〵。

ト一貫づゝ錢を抛り出す。

皆々　こりや忝ない。

卯之　おい等も五百づゝ拾ひませうかい。

定　サア、氣遣ひすな。わい等も割つてやるワ。

金　時に、今朝から寒風が居らぬが、どうぢや。

政　イヤ、居らぬ筈ぢや。われも知つて居る通り、池鯉鮒にかゝつて居る浪人、おいらが仲間を頼んで、もし爰らへ、石井兵助、半次郎といふ奴に、藤兵衛といふ、で

つかとした男めを連れ立つて通るが、随分氣を付け、もし殺らしてくれたら、仲間へ五十兩ぢやといやい。なんと耳寄りな仕事ぢやないか。
八　そんなら松めは、その藤兵衞とやらを、頑張りに失せたか。
卯之　素早い奴なれば、一人の仕事にせうも知れぬ。皆の者、ぬかるなよ。
皆々　オヽ、合點ぢや。
政　もと此方が仲間へ手廻つたら
金　捕まへる云ひ合せは、あの木蔭で。
定　サア、皆來い。
ト在郷唄になり、皆々捨ぜりふ云ひつゝ入る。あと合ひ方、向うより藤兵衞、七里飛脚の形にて、葛籠を背負ひ出て來る。後より寒風の松、附いて出る。
松　親方々々。マア、待たんせ。ても早い足ではあるわい。
藤兵　此奴、この形が眼にかゝらぬか。江戸道中五十三驛年に十歸りもするお飛脚、遲くつてつまるものかい。
寒風　ハア、貴樣お七里か。
藤兵　おゝてや。
寒風　面妖な。七里といふお七里に、この寒風が見知らぬ飛脚はないが。
トこれにて藤兵衞ギックリするこなしあつて
藤兵　イヤサ、おらは。
寒風　貴樣は。
藤兵　ナニ、オヽそれ。
寒風　新米か。
藤兵　何を此奴が。新米ではなけれども、おらは常住木曾中仙道を往來するゆゑ、この海道は始めてだから、お身が知らぬのだわい。
寒風　そんなら、初見參に、酒手で越しやんせう。ナウ、親方、さうせう〳〵。
藤兵　そんならマア、向うで一服して、相談せうかい。
寒風　それがよからう。サア、行かんせ〳〵。
ト在郷唄にて本舞臺へ來て
サア、親方、一服のまんせ〳〵。
ト火打ちを出し、火を打つ事よろしくあつて
藤兵　イカサマ、ちと爰で一服すべい。ヤレ〳〵、草臥れた。
ト葛籠を下ろし、莨のむ。

松　してマア、こなさんは、どこからどこへのお七里ぢやいなう。
藤兵　おらは、細川さまより桃の井さまの、お國へ參る早飛脚だ、
松　アノ桃の井さまの……それにしては、仰山なこの荷物。殊に細川の繪符もなし、ハテ、けうけれゝつな飛脚だなア。
藤兵　ハテ、繪符があらうが、あるまいが、いらぬ貴樣のお世話だの。
松　ハヽヽヽ。こりや尤もぢやが、川越しは、こんな事が附け目でえすわい。
藤兵　イカサマ、そりやさうかい。見たところが、貴樣は川越しの仲間でも親玉ぢやの。お頭と見える。さうであらう。さうか〳〵。さう見え透いてあるわいの。ハヽヽ。その頭と見かけて、身共が頼みぢや。なんと、安くして無事に川を越してくれまいか。
松　イヤモ、さう云はんすりや向ふ猪には矢が立たぬ。見かけられたが不肖、こなたの云はんす通り、おれが一言で、水中で落さうと流さうと、また無難に越さうともおれが儘ぢやが、その代り、酒手が要るぞや。
藤兵　イヤモ、酒手位はいくらなりとも。そんなら貴樣をお頼み申すワ。
松　サア、合點ぢやわいの。
ト此うち川越し皆々、後へ出かけ居る。この時
皆々　寒風、戾つたか。
松　オヽ、戸塚も爰に居るか。
金　オヽ、最前から爰に居て、何も彼も聞いた。そんなら、これが藤兵衞。
松　アヽ、コリヤ〳〵、サア、藤ナ……とうたう値が出來て、いま越す筈に極まつたわい。
皆々　そりや巧い、
松　引きがらと、牡丹花は、この駄荷を。
兩人　オヽ、合點ぢや。
松　胴取りは、この親方を深味で……ナ、必らず辷りこけなよ。
政　おれも水切りに行かうわい。
兩人　そんなら、この駄荷を。
ト擔ぎ行かうとする。藤兵衞、待てと手をかけ、引き戾す。八、卯の、藤兵衞が足に取りつく。皆々取卷き

皆々　こりや、なんとするのぢや。
藤兵　イヤ、なんともせぬ。この葛籠、どこへ持つて行くのぢや。
松　知れた事。荷物を先へ越すのぢや。
藤兵　アノ、相對もせずに。
松　ハテ、相對は知れた極めの通り。
藤兵　して、その極めは。
金　常の四十八文がお定まり。なれど、この間の高水では。
政　それに氣を附けて下んせ。
ト三百の錢を藤兵衞抛り出し
藤兵　高水とあれば、荷物ぐるめに、そんなものかい。
定　ヤア、こりや三百。荷物ぐるめに四百ぢやとやい。
金　ハテ、四百ならよい値ぢや。それでやれやい。併し、親分、外に酒手がいるが合點か。
藤兵　その酒手は、いくらだえ。
金　イヤモ、これぢやてゝ、滅相な事も云はれまい。親方、とんと詰まつた所が百兩ぢや。
藤兵　ヤア。
トこなし。

金　百兩なら安いものぢや。
定　それ〳〵、どちこちなしに越してやらう。
藤兵　否だ。
皆々　なんと。
ト藤兵衞、荷物を圍ひ
藤兵　もう否だ。うぬ等がやうな蛆虫に、詞を下げて頼むのは、川を無難に越さうばかり。それになんだ、酒手百兩。否だ。百兩の事はさて置き、一兩も一歩もやらない。うぬ等を頼みにこそ。まだ外に川越しを頼んで越すべい。道の邪魔だ。退きやアがれ。
ト松を引きのけ、行かうとする。松、止めて
松　コレ、待たんせ。さう行かんすと、關所があるが合點か。
藤兵　ヤア。
松　今度連理とやら連木とやらいふ寶が失せて、その科人を詮議の爲、嶋田には新關が立つて、往來を改め、赤堀水右衞門、石井兵助、右二人の者を訴へ出るに於ては褒美として金百兩遣はすべきものなりといふ、高札が立てゝあるわいの。
ト藤兵衞ギックリする。

政　なんと膽が潰れるか。こちとらを雇や關所は自由。

八　どうなと斯うなと、云ひ拔けて、無難に越してやるワ。

定　あの雲行なら、今夜は大しけ。

卯之　コレ、川が止まろも知れぬぞや。

松　箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。

金　大概なら、料簡つけて、川も關所も

皆々　越さんせ〳〵。

藤兵　味な詞の引き放し。そんなら、この荷物の內を

松　オ、、見つけた。

藤兵　なんと。

松　藤枝の町はづれ、人のない所で荷物を開き、內から出した若い男、年の頃は二十四五な、色白で瘦せ肉。さるざぶに頼まれた石井兵助。わりやその家來、中野藤兵衞であらうがな。

藤兵　イ、ヤ、そんな事は知らぬが、兵助ぢやの藤兵衞ぢやのと、變つた名を、ハテ、よく知つて居るな。

金　オ、、さる浪人の侍ひに頼まれ、何も彼も知つて居る。何がなしに、仲間へ百兩くれたら。

松　オ、、頼まれた侍ひへも、どちぢや。關所も無事に其方の幸ひ。否と云や、また此方も意地。人違ひでも大事ない。引立て來いと關所のお役人、蒲原兵次さまの御意。

藤兵　ぢやと云うて、その百兩が

松　なくば關所へ訴へようか。

藤兵　サア、それは。

松　頼まれた侍ひへ知らさうか。

藤兵　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト藤兵衞「ムウ」と詰まる。

松　エ、面倒な。皆、合點か。

ト荷物にかゝる。藤兵衞、突きのけ

藤兵　こりや、何とするや。

ト藤兵衞に取りつくを、立廻りにて、また松、金「われを」とかゝる。藤兵衞、切りつける。皆々、藤兵衞を取卷き

皆々　動きやアがるな。

藤兵　こりやモウ、絶對絶命ぢやわい。

ト荷物を圍ひ、刀を構へ、キッと身構へして　返し

造り物、關所の體。眞中に三間の高二重。前に式臺。幕下りて、襖締まり、床の間に鐵砲大分並びあり、兩方落ち間。右手石垣、枳殼植ゑあり、上下ともに門、明立てあり、突棒刺股、琴柱、熊手など飾りあり、下手用水桶、手桶積みあり、上手よき所に高札立てあり、軍次、大帳控へ二重に居る。式臺に侍ひ二人、東西に並び居る。幕の内より時の太鼓にて、早幕明く。兩方より旅人の仕出し大勢出て

旅人　急ぎの者でござります。お通し下さりませ。

同　早うお通しなされて下さりませ。

ト兩方より口々にやかましく云ふ。

侍二　ハテサテ、此方から通すまで、扣へて居らう〳〵。

軍次　ア、イヤ〳〵、一刻にても遲なはれば、往來の妨げ。何れも吟味して、相違なくば通し召され。

侍ひ　ハツ、通りませい。

ト西の門を開く。

旅人　ハイ〳〵、私しは岡部の豆腐屋でござりますが、袋井の阿母と親子の縁がきらずにござりますゆゑ、見舞ひに參りましてござります。

侍ひ　ムウ。其方一人か。

旅人　左樣でござりまする。

軍次　聞き屆けた。通れ〳〵。

ト西の旅人入る。東の旅人、繪符を持つて入る。

旅人　私しは日坂の蕨餅屋でござります。一昨日上下五人連れて、私しが店で蕨餅を喰ひましたが、この繪符を置いて參られました。見れば細川さまの繪符ゆゑ、後日にどんな祟りがござりませうも知れぬと存じまして、幸ひ往來改めの新關ゆゑ、これへ持參いたしましてござります。御覽じて下さりませ。

軍次　その繪符、これへ。

旅人　ハイ〳〵。

ト旅人、繪符を軍次の前へ持ち行く。侍ひ、取次ぐ。

軍次　如何にも、こりや細川の繪符に相違ない。此方へ預かり置く。其方は、歸れ〳〵。

旅人　ハイ〳〵、有り難うござります。

ト入る。才兵衞出て

才兵　ハイ〳〵、お許されませ。

侍ひ　何方へ行く者ぢや。

才兵　イヤ、私しは、この新關へお願ひあつて、參りましてござります。

軍次　願ひとは何事ぢや。
才兵　私しは嶋代屋才兵衛と申しまして、駿河二丁町の傾城屋でござります。狭衣と申します私しが抱への傾城、突出しの夜、駈落ちを致しまして、今に在所が知れませぬ。もし又、この關所へ參りましたら、何卒お慈悲を以て、お捕へ下されませうならば
軍次　コリヤ〳〵、才兵衛、日に幾人と限りなき男女の往來。もしその傾城であらうかと、理不盡に旅人を捕へては、往來の妨げ、是非參るに極まらば、其方門前に扣へその女が通らば、連れて歸れサ。
才兵　畏まりました。エヽ、情ない。どこへうせた事ぢや知らぬ。
　トぼやき〳〵橋がゝりへ扣へると、合ひ方になり、向うより、バタ〳〵にて、狭衣、着流し、菅笠にて顏隱し、走り出る。
狭衣　ア、嬉しや、今のは親方さんではなかつたさうな。こちの人に別れる時さへ、足元から鳥の立つやうに、急な旅立ちであつたに依つて、どこを心當てに行かしやんすと云ふ事も聞かず、定めて上方へ志して行かしやんしたであらう。アヽ、達者で居やしやんすか。もし持病の癪へは起りはせぬか。主は兵助さまのお供、わしは半次郎さまのお爲に勤め奉公。後に殘つた兄弟の子供は、どうなつたぞ。定めし父樣やこの母を、尋ね焦れて居るであらう。可愛や〳〵。
　ト泣かうとして氣を變へ
　アヽ、思ふまい〳〵。何事もお主の爲。さうぢや〳〵。
　ト笠傾むけ、關所を通らうとする。侍ひ、咎めて
侍ひ　何者ぢや。笠を取れ〳〵。
狭衣　イエ、大事ない者でござります。
侍ひ　ヤア、此奴、笠を取らぬか。
　トきつぱ廻す。
狭衣　アイ〳〵。
　ト慄うて悧りのこなし。
軍次　女、そちや何方へ通る者ぢや。
狭衣　ハイ、爰を通る者でござります。お許しなされて下さりませ。
軍次　女、爰を通りたくば、切手を出せ。
狭衣　エヽ、イ。
軍次　イヤサ、往來切手を出せ。
狭衣　爰はマア、どこでござりますいなア。

軍次　遠江駿河の境。この嶋田の驛に、新關を立てられしは、大切の科人詮議の爲。女、爰を通るには切手がなくは、往來叶はぬ。サア、切手があらば、切手を出せ。

狹衣　それはアノ、斯うでござります。私しはアノ、つい近所の者でござりまする。オヽ、それ〳〵、父樣や母樣が煩らうてぢやに依つて、ちよつと見舞ひに行つて來うと思うて、つい歸りまする。行つて參りませう。

ト行かうとする。

軍次　待て、憎い奴の。その近所の者が、爰はどこでござりますと、この新關をなぜ尋ねた。

狹衣　サア、それは。

軍次　なんとやら紛らしき女。門外へ引出せ。

侍ひ　女め、早う出をらう。

ト才兵衞、出かゝり居て、この時、狹衣を見つけ

才兵　うぬは狹衣ぢやないか。

狹衣　ヤア、親方さんか。

才兵　どこへ。狹衣、よい所で逢うた。

軍次　すりや、その女は。

才兵　先程お願ひ申した、駈落ち者でござります。直ぐに連れて歸りたうござります。

軍次　勝手に致せ。

才兵　有り難うござります。

狹衣　モシ、どうぞ見遁がして下さんせいなア。

ト此うち彌十郎、上下にて出る。才兵衞、狹衣を引立て、行きかゝる。

才兵　大事を吐かす。サア、キリ〳〵うせう。

ト引立てる。

彌十　傾城屋待て。

才兵　ハテ、構はずと來いやい。

トまた引立て行かうとする。

彌十　イヤサ、用がある。暫らく待て。

侍ひ　御意ぢや。待ち居らう。

才兵　ハアイ。

ト下に居る。彌十郎、扣へる。軍次、居直り

軍次　彌十郎さま、なぜお留めなされまする。

彌十　委細の儀はあれにて聞いた。關所へ參りかゝつた駈落ち者、云はゞ四海の科人同然。此まゝ歸しては、後日にお咎めある時は、當所を預かる鳥井彌十郎が越度になるまいものでもない。赦し歸すは、とくと樣子を聞いた上の事と存じて。ナニ傾城屋、その女、これへ連れて參

れ。

才兵　ヘイ〳〵、畏まりました。サア〳〵、うせい〳〵。

ト狹衣を引立て、彌十郎の側へ連れて行く。

彌十　ヤイ、女、顏を上げい。

トこれにて狹衣、ヂツと仰向き

狹衣　ヤア、お前は兄さん。

ト云はうとする。

彌十　ヤイ〳〵〳〵、うろたへて、そりや何を云ふ。兄とは誰が事。身に同胞はないぞよ。尤も一人の妹はあつたれども、淺山家の下郎と不義淫ら。物堅き親人、直さま御勘當なされ、去年御死去の節、御遺言にも、不行跡は妹娘、身共が目を塞いだりとも、屋敷へ呼び寄せ、勘當赦しなど致したら、未來より其方どもに勘當と、サ、云はねどしるき親の慈悲。ア、、妹めは、この親人のお心はよも知るまい。

狹衣　そんなら父樣は……ヘア、。

ト大泣き。彌十郎、こなしあつて

彌十　ナニ傾城屋、あの女を抱へたは、それには何ぞ慥かな證據があるか。

才兵　どこで要らうも知れぬと、爰に持つて居りまする。御覽じて下さりませ。

ト彌十郎の側へ持つて行く。彌十郎、披き見て

彌十　如何にも、こりや奉公人の請け狀。女、この證文に其方が判を据ゑながら、駈落ち致しては、盜賊も同然ぢやぞよ。

狹衣　成る程、得心の上、勤め奉公に出ましてござりまするなれども、駈落ちせねばならぬ事があつて、如何にも駈落ち致しました。親方さん、さぞお腹が立つたでござりませうが、私しが尋ねる人に、ちよつとなりとも逢うたならば、直ぐに戻つて勤めを致しませう。どうぞそれまで見遁がして下さんせ。勤めする身は、十人が九人まで、親夫の爲。淫らで申し譯が

ト彌十郎を見て

サア、云ふに云はれぬ私しが身の上。どうぞ他國にござんす夫に、一目逢うて來るまで、待つて下さんせ。

才兵　いつそ呆れて物が云はれぬ。

ト侍ひ一人、橋がゝりより出て

侍ひ　申し上げまする。蒲原兵次さま、只今お出でござります。

ト云ひ捨て入る。橋がゝりより兵次、着附け、上下に

て、出て來る。

彌十　これは〳〵、蒲原兵次どの、御苦勞千萬。先づこれへ。

兵次　然らば御免下されい。

ト上へ通る。眞中に彌十郎、軍次、その座定まる。

兵次　彌十郎どの、この程は御意得ませぬ。關所吟味の儀につき、鎌倉より御書到來仕つてござる。

ト皆々「ハツ」と平伏する。

軍次　鎌倉よりの御書とは、氣遣はしき儀ではござらぬか。

兵次　イヤ〳〵、別に氣遣はしき儀ではござらぬ。卽ち御書拜見なされ。

彌十　ハツ。

ト彌十郎、受取り、披き

「先達て配符を廻し候ふ赤堀水右衞門、石井兵助、右兩人の者、姿をやつし、東海道を徘徊致し候ふ趣き、嶋田の宿に新關を構へ、詮議いたされ候ふ條、又もや兩人往來仕る由、畧訴へこれある間、とくと吟味いたすべき段、承知せしむるものなり、岩倉主膳承つて件の如し　横目役蒲原兵次どの、鎌倉在判」

兵次　なんと、殊に微細なる鎌倉よりの御書。この上は、如何にしても兩人を尋ね出さねば、役目の越度。なんと左樣ではござらぬか。

彌十　御尤もに存じまする。

兵次　この上は、銘々に主人の面晴れ。草を分けても詮議せにやなりませぬ。御兩人、水右衞門兵助が身寄りの者、男女に拘らず引ツ捕へ、きつと吟味を召されてよからう。

軍次　委細、畏まつてござります。

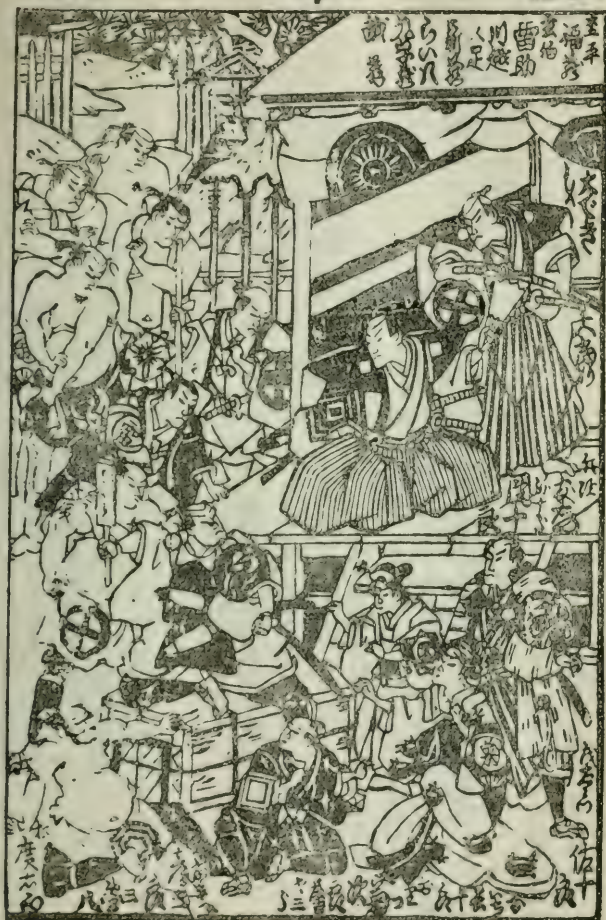
トこの間、狹衣、ピク〳〵する。才兵衞、キツと思案して

才兵　さうぢや、後日にひよつと知れた時には、どのやうな難儀にならうも知れぬ……ハイ〳〵、申し上げまする。そのお尋ねなさるゝ石井兵助が家來、中野藤兵衞が女房、おゆきといふは、この狹衣が事でござります。

兵次　ナニ、この女が、石井身寄りの者とは。

才兵　左樣でござります。しかもお常太吉と申します、同胞の子まである、藤兵衞が女房でござりまする。

兵次　わりや何者ぢや。

才兵　駿河二丁町の傾城屋でござります。

彌十　即ち彼れめが方へ召し抱へ、突き出しのその夜より駈落ち致し、爰へ參りしゆゑ、只今、詮議最中でござる。

兵次　ハテ、幸ひの科人が手に入つたなア。

彌十　女、今聞けば、同胞の子供もある由。その子供は、如何いたした。

狹衣　夫にも隱して、勤めを致します程の仕合せなれば、その子供も、どうなつた事ぢややら。

彌十　すりや、子供の行くへも知らずか。

狹衣　ハイ。

　トしをりとなる。

兵次　野太い女め。どうで一應で誠の事は申すまい。彌十郎どの、キツと詮議なされたがようござる。

彌十　成る程、キツと吟味仕らう。ソレ、軍次どの、その女、身が居間へ伴ひ召され。

軍次　畏まつてござりまする。

才兵　私しは如何いたしませう。

兵次　うぬも係り合ひ、落ちつくまで扣へて居らう。

才兵　これは迷惑。

彌十　科人の帳面に記す間、兵次どのも、奥へお出でなされ。

兵次　イカサマ、暫らく休息仕らう。

軍次　ソレ、御休息の間、双方の門を打て。

侍ひ　ハア、。

　ト双方の門を締める。

軍次　科人の女、立ちませい。

狹衣　ハイ。

彌十　然らば、兵次どの。

兵次　彌十郎どの。

彌十　御案內仕りませう。

　ト唄になり、この一件、皆々入る。あと合ひ方。向うよりお常、振り袖、やつし、男髷にて、太吉を脊に負ひ、足の痛む思ひ入れ。花道中程にてとまり

つね　コレ、太吉、術ないかや。

太吉　姉樣　熱うて術ない／＼。

つね　オヽ、この熱では術なかろ。父樣は若殿樣を連れまして、どこへやら行かしやんす。母樣は廓を駈落ちさしやんしたげな。わしが悲しいより、其方が父樣に逢ひたいと云うて、飯も食べやらぬに依つて、それが悲しい‥‥コレ、太吉、やんがて父樣や母樣に逢はして、乳を呑

まさう程に、術なくとも、堪忍して、このあも食べてたもや

ト竹の皮より餅を出してやる。

太吉　イヽヤ、食べともない。父様や母様に、早う逢はして下されいなう。

つれ　サア、わしも早う逢ひたいに依つて、尋ね來たのぢやが、後の宿で聞けば、關所とやらがあつて、女は通さぬげな。惜しくてならぬけれど、此やうに髮切つて、男の子の眞似をして通る程に、必らず姉様と云はずに、兄様と云や。

太吉　さう云ふと、父様や母様に逢はれるかや。

つれ　オヽ、逢はれる程に、兄様と云ふのを忘れてたもんなや。

太吉　オヽ、合點ぢや。

ト在郷唄になり、旅人二三人出て

旅人　サア／＼、爰が嶋田の新關ぢや。必らず無禮さしやんな。

同　晝中に門を打つたは、どうしたものぢや。

同　何ぞ御詮議でもあつたかいなう。

同　マア、訪うて見たがよい。

ト云ひ／＼本舞臺へ行く。

つれ　そんなら爰が、噂の關所。コレ太吉、今のを忘りやんなや。

太吉　アイ。

トお常、太吉を負ひ、旅人の中へ交る。

旅人　ハイ、お通しなされて下されませ。

侍ひ　往來がござります。

トこれにて兵次、彌十郎、奥より出る。

彌十　門を開いて、これへ通せ。

侍ひ　ハツ。通りませい。

ト門を開く。

旅人　ハイ、私しは金谷へ參りまする者でござります。爰に居らるゝは、皆友達衆でござります。皆の衆。

同　左様でござります。

彌十　吟味に及ばぬ。通れ／＼。

旅人　ヘイ／＼、お許しなされて下されませ。

ト皆々、上手へ入る。お常、太吉を負ひ、通らうとする。

太吉　姉様、ぶゝが飲みたい。

つれ　アヽ、コレ／＼。

ト云ひ消す事よろしくあつて

太吉　姉様、ぶゝが飲みたいわいなう。

つれ　飲みたきや兄が飲ますわいなう。

ト行かうとする。

兵次　待て〳〵。家來衆、あの伜共に繩打ちやれ。

侍ひ　ハツ。

ト立ちかゝる。

彌十　待て……兵次どの、あの者どもには、何ゆゑ繩をおかけなさるゝな。

兵次　今その餓鬼が、姉様と云うたに依つて。

彌十　ア、イヤ〳〵、そりや斯うでござる。國元を出る時は、三人連れて出たところが、その姉が道で死んだか、又ははぐれたと云ふやうな事であらう。それゆゑ常に、姉様〳〵と云うたが口癖になつて、兄を捕へて姉様と云うたか。コリヤ、何も怖い事はない程に、それならさうと、早く云うたがよいぞよ。

つれ　ハイ、その通りでござります。

彌十　オヽ、さうであらう。兵次どの、子供と申す者は、なんと、あどないものではござらぬか。

ト兵次、物も云はず立つて、太吉の首筋を引ッ掴む。

お常、これはト寄るを睨みつける。お常、怖がりて慄ふ。

彌十　兵次どの、こりや何となさるゝ。

兵次　詮議に依怙がござると、彌十郎どの、貴殿のお爲になりませぬぞ。

ト太吉を引提げ出て

ヤイ、そな女郎め。うぬ、僞はり云ふと、この餓鬼めを提げ切りにするぞ。

つれ　ア、モシ〳〵、そんなら嘘つくと、その子を切らしやんすかえ。

太吉　姉様、怖いわいなう。

兵次　サア、ぶち放さうか。

つれ　ハイ〳〵、わたしや女でござりますわいなア。

兵次　ハヽヽヽ。彌十郎どの、聞かしやつたか。

彌十　成る程、假初ならぬ子供が大罪。併し、兵次どの、高が小児の事。荒々しく仰せらるゝ程、敗亡いたして、何を申すやら譯が知れぬものでござる。とくと實否を糺すまでは、先づお扣へなされ。

ト早太鼓になり、嚴しきバタ〳〵にて、寒風の松、血だらけになつて走り出て

松　サア〳〵、切りましてござります。突きましてござります。御覽じて下さりませ。何か頭を此やうに、西瓜見るやうに致しました。敵を取つて下さりませ。アイタアイタ。痛いソ〳〵。

ト わめく所へ、金、血だらけになつて戸板に乘り、政八、エイ〳〵と持ち出て來て

兩人　コレ、御覽じて下さりませ。戸塚めは切られて死にました。敵を取つて下さりませ〳〵。痛いワ〳〵〳〵。オヽ痛いソ。

ト やかましく喚く。この間に、金が死骸、片脇へ寄せる。

兵次　ヤイ〳〵、姦しい。して、その相手は何者ぢや。

松　サア、その相手は

ト 兵次を見て

ヤア、お前は兵次さま。あなたのお頼みの、彼の

兵次　コリヤ〳〵〳〵、血迷うて何ほざく。コリヤ、相役もこれにござるぞ。ツカ〳〵と、うろたへた奴の。

塞風　イエ〳〵、うろたへぢやござりませぬ。喧嘩の相手は七里飛脚。アレ〳〵、もう爰へ參りまする。彼奴でござります〳〵。

ト 云ふうち、川越しの人足大勢、棒を持ち、藤兵衞を取卷き出る。藤兵衞、矢張り葛籠を脊負ひ、拔き身を下げ、大童になつて取卷かれ出る。この間、お常、太吉を介抱しながら慄うて居る。

兵次　ソレ、棒伏せにして縛し上げい。

皆々　合點ぢや。

ト 打つてかゝる。また立廻りにて、ドッコイと留まる

軍次、股立ちにて走り寄り

軍次　手に餘らば身共加勢。

ト 打つてかゝる。ちよつと立廻りあつて、見得よく留まり

藤兵　待つた、お待ちなされ。こりや、何ゆゑの狼藉。

軍次　ヤア、狼藉とは其方が事。川越しを手にかけ、往來を騒がすは、狼藉ではあるまいか。

藤兵　全く拙者、狼藉は仕らぬ。細川さまより桃井さまへ急御用、荷物ぐるめに三百文に應對いたし、越す段になつて、酒手として百兩出せとの難題。返答に困る折柄、はや荷物を奪ひ立退くゆゑ、それやつては御主人へ云ひ譯のないばかりでない、笠の臺が飛ぶ生き別れ。是非なく支へる拙者は一人、相手は多勢、是非に及ばず。

松　コレ〳〵、云やんないの〳〵。細川さま〳〵と、細川めかして云つても、その手を食ふ寒風ぢやない。細川のお飛脚なら、細川の繪符を出せ。見よう。サア、出しや出しや。

皆々　サア、繪符があるなら見ようかい。サア、出せ。繪符を出せやい。

藤兵　イヤサ、その繪符は

松　繪符ないか……ソリヤ、合點か。

皆々　オヽ、合點ぢや。

ト締めかゝる。

藤兵　何する。

定　何にもせぬ。繪符を見るのぢや。

藤兵　わい等に見せる繪符はないわい。

ト立廻り。此うち彌十郎、欄間にかけある件の繪符を取り、隱し持ち、金の死骸に目をつけ居て、立廻りよき時分に、藤兵衞、見得の時、彌十郎、繪符を「エイ」と打つ。藤兵衞、中にて摑み

藤兵　こりや、川越しの御加勢かな。

ト云ひ、取り、繪符を見て

こりやコレ、細川の繪符。

彌十　それ程繪符を持ちながら、疾より出せばよい事を。ハテ、麁相千萬な。

藤兵　すりや、これを。

ト云ふうち、兵次ツカ〳〵と行つて「うぬ」ときめる藤兵衞、目先へ繪符を突きつける。

細川の繪符……イザ、お改め下されう。

兵次　ハテ、手つがひのよい繪符ぢやなア。

松　イヤ、繪符が出やうが、ゲツプが出やうが、わりや細川の飛脚ぢやない。お尋ねの石井が家來。

ト彌十郎、松を引廻す。また來ると、鐺にて當てる。松、ウンとこける。川越し皆々怖がる。

彌十　管領細川のお飛脚に、慮外があると免さぬぞ。

皆々　ハアイ。

ト皆々怖がり、後すざり小隅へ寄る。

彌十　外科山名一齋、來やれ。

一齋　ハア　。

ト云つて橋がゝりより出る。

御用でござりますか。

彌十　その、のたれ居ろ手負ひ。疵口とくと改め見やれ。

ト侍ひ、外科の道具持ち出る。一齋、松を片脇へ連れ

て來て、血を拭き、疵口を洗ふ事、いろ〳〵あり。此うちお常、藤兵衞を見て

つれ　ヤア、父樣。

ト云はうとする。藤兵衞悔り

藤兵　コリヤ〳〵……ヤア。オヽ、おちよぼかな。コリヤ、おちよぼ。おりや其方の隣の次郎兵衞ぢやが、見知つて居るか。

ト呑み込みます。

つれ　ほんに、隣の次郎兵衞さま。

藤兵　さうして、わが身は何しに來た。

つれ　父樣や母樣に逢はうと思うて。

ト藤兵衞、心意氣あつて

藤兵　して、母樣はなんとした。

つれ　母樣は駿河の二丁町へ、勤奉公に行かしやんしたが、駈落ちさしやんして、行き方が知れぬゆゑ、太吉はそれを苦にして煩らやるゆゑ、二人連れで、父樣や母樣を尋ねに、出たのでござんすわいなア。

藤兵　それなら、坊主は、おれや………イヤ、嬶が事を苦にして煩らうて。

ト皆々を見て、氣を變へ

そりやマア、可愛い事ぢやなア。

兵次　科人の子倅は、飛脚、われが子であらうがな。

藤兵　今も申し上げます通り、この二人の子供は、隣家の者。承れば、この小さい者を科人とはな。

兵次　オヽ、科も科、關破りの大罪。

藤兵　アノ、此奴等が。

兵次　さう云ふうぬも大罪人。ソレ、軍次。

軍次　腕廻せ。

ト反り打ち、詰めかゝる。

藤兵　待つた。身共には何科あつて。

兵次　そちや石井兵助が家來、中野藤兵衞であらうがな。

藤兵　ムウ。また中野藤兵衞なら、なんで科人ぢやな。

兵次　科の次第は、ソレ、その高札を讀み上げい。

ト藤兵衞、高札を見ようとする。軍次「うぬ」ときめる。藤兵衞、葛籠を園うて、高札をキッと見て

藤兵　赤堀水右衞門、石井兵助、右兩人の者、訴へ出るに於ては、褒美として金子百兩遣はすべきものなり。

兵次　その兵助が家來のうぬゆゑ、科人と云つたが誤まりか。

藤兵　イヽヤ、知らぬ。藤兵衞でなければ、科人であらう

やうもなし。必らず麁相仰しやるな。

兵次　ヤア、しぶとい奴の。
　ト此うち一齋、火鉢にて燒酎を沸し、松の疵口を洗ふ事よろしくあり、松、氣の附くこなし。

松　アツ、、、。ア、、痛い〳〵。沁むワ〳〵。こりやどうさつしやるのぢや。

一齋　ハテ、やかましい。疵口改め、療治してやるのぢや其やうに藻搔くと、疵口が直ぐ裂ける。この人參を咬へて居らうぞ。

松　ハイ〳〵、そんなら、そろ〳〵やらしやつて下さりませ。
　ト人參を咬へ、氣味惡きこなし。

兵次　ソレ、軍次、最前の女を伴へ。

軍次　ハア。
　ト入る。一齋疵口を洗ふ。

松　ア、、痛い〳〵。死ぬるワ〳〵。皆來て助けてくれ。

八　やかましい奴ぢや……イヤ、お役人樣、寒風はともあれ、戸塚の金は死にましてござりまする。

政　それ〳〵、こちとらが旅人一人殺せば、九人づゝ取らるる命。但し、大名のお飛脚なら、狼藉しても大事ない筋でござりまするか。

定　モシ、四十八文で、敵も取れぬ命なら、なんとマア、こちとらが命は、安いものぢやないかい。

卯の　四も五もない、お役人樣。

皆々　下手人取つてもらひませう。
　ト口々にやかましく喚く。

彌十　ハテ、仰々しき奴等の。理非明白に糺した上、下手人取るとも取らぬとも、又は品に依つて切られ損にならうやら、一々括し上げ、牢舍申しつけうやら、裁許相分るまで、扣えて居らう。

皆々　ハイゝ。
　ト扣える。この時、狹衣を軍次連れ出る。藤兵衞も顏見合せ

狹衣　ヤア、お前は。
　ト云はうとする。

藤兵　コリヤ。
　ト目額で押へる。お常太吉、狹衣を見て

つね　ヤア、母樣、逢ひたかつたわいなう。
　ト取りつき泣く。

狹衣　オ、、道理ぢや〳〵。斯ういふ身になつても、親に

逢ひたいとはしをらしい。わしもそれが愛しさに、廓を駈落ち。今でも藤兵衛どのに尋ね逢うたら、ようマア健で

ト兵次睨むゆゑ

サア、云ひもせうが、夫でもない人に、そんな事云はれもせず。

藤兵　そりや、おれも同じ事。こなたがおれの女房なら、預けて置いた人、イヤサ、預けて置いた子供の事を思はず、身の淫らに夫の留守に、我れと我が身を勤め奉公。その酷い母様を、親と思うて同胞の子供が、闕破りの科人になつても尋ねるに、エ、憎い……とサア、女房なら叱らうけれど、他人の身共が構はぬ事。

狭衣　そんなら此やうな姿で居るゆゑ、お前は

ト藤兵衛睨む

イヤサ、お前までが、悪性淫らのやうに、思はしやんせうが、耳の役ぢやと思うて、聞いて下さんせ。元わしも筋目正しき

ト彌十郎を見る。咳拂ひする。

狭衣　サア、人の娘。フト石井の御家來、中野藤兵衛といふ人と馴れ染め、情の胤を二人まで、宿み落したは、サア、此やうな娘と弟。不義の科とて父様の御勘當。ほんに杖とも柱とも、思つて連れ添ふ藤兵衛どの。其お主の兵衛さまを、水右衛門に討たれ、剩さへ、お預かりの寶も紛失。屋敷も沒收。御流浪の若旦那、お二方をお供して立歸り、敵討の旅立ちも、思ひがけない弟御半次郎さまの御大病。いつを果しに御本腹、待つ間も急かるゝ敵の在所。マア、兵助さまのお供して、行くへを探して、どうか斯うかと、旅の路用に一つある、わたしや子供の着物まで、賣り代なしてその後は、その日の煙りも立て兼ねる。其うちにお主の御病氣、人參代や藥代も、女の手業の詮方なく、辛い悲しい川竹の、勤めも皆お主の爲どうやら斯うやら取りとめて、元の姿に御本腹。旅の調度も御不自由の、ないやうに取り調へ、兵助さまの後を追ひ、立たせましたは半次郎さまの、命代りの君傾城。勤めねばならぬ親方に、大切なお命を救うてもらうた金の冥加。勤めへ出ては夫へ立たず、忠義と操の二筋に、この身の思案も突き出しの夜、駈落ちして夫に逢ひ、この云ひ譯をせうものと、心を盡したこの形が、お前の目からは悪性者、淫者と見えますか。そりや聞えませぬ、胴慾ぢや、胴慾でござんす……とサア、藤兵衛どの

なら恨みも云はう。何を云うても日影の夫、現在の兄様にも……コレ、愛し可愛い我が子にも、逢うて物も云はれぬとは、親に背いた不孝の罪と、わしや悲しいわいなア。悲しうござんすわいなア。

ト大泣き。彌十郎、この間、煙草のみ居て、爰にて扇を額にあて、愁ひのこなし。兵次、藤兵衞に目をつけ居る。藤兵衞も、いろ／＼こなし。

藤兵　夫の留守に大病人を抱へ、殊に同胞の子供はあり、家内を引さらへて出た後ぢやもの、さうなうては叶はぬ筈。出かした。

狭衣　アイ。

ト兵次の方に心意氣。

藤兵　出かさんした／＼。

狭衣　アイ／＼。

トしやくり上げ泣く。此うち一齋、疵口改める。

藤兵　サア、今の話しをおれがしたら、定めて藤兵衞どのは、此やうに云ふであらうぞい。

松　ア、イタ……。こりやモウどうもならぬ。

ト表へ出て、川越しの中へ逃げ込む。

痛い／＼。コリヤ、誰れぞ手を貸してくれ。頭がフラフラする。

ト手拭にて頭を括る事よろしくあり。

一齋　臆病な奴ぢやわいの。

彌十　して、疵はどうぢや。

一齋　額際に僅か二寸ばかり。イヤモ、ほんのかすり疵。縫ふ程の事ではござりませぬ。

彌十　ムウ、さうあらう。さうありさうな事ぢやわい。

一齋　イヤモ、頭に血の多い奴でござりまする。

彌十　其方は、コリヤ

ト囁くことあり。

一齋　畏まりました。

ト奥へ入る。兵次、始終こなしあつて

兵次　へ、、、、。役にも立たぬ長詮議。ヤイ、女郎め、煩らうて居るちつぺいめを、今爰で、責めて／＼責め抜くが、あの飛脚は、父ではないか。イヤサ、この傾城は母ではないか。

つれ　サア。それは。

兵次　有やうに云はゞ、助けてくれう。サア、われが父か母であらうがや。

ト藤兵衞、云ふなと仕方。

つれ　イヽエ、そんな人ぢやござんせぬ。
兵次　云はぬな。云ふなよ。吐かすなよ。
　ト刀スラリと抜き放す。
つれ　アレイ〱。
　ト慄ふ。狭衣、留めようとして、ちやつとこなし。藤兵衛も始終こなしあり。兵次見て
兵次　賣女め。何をびこつく。但し此ちつぺいは、うぬが作か。
狭衣　イヽエ。
　トこなし。
兵次　あの飛脚は、われが夫、藤兵衛であらうがな。
狭衣　そんなお人ぢやござんせぬ。
兵次　しぶとい女郎め。白狀せずば、この作を、カウ〱カウ。
　ト子役を背打ちにする。
太吉　痛いわいなう〱。
兵次　サア、これでも吐かさぬか。
狭衣　こりやモウどうも。
　ト立ちかゝる。藤兵衛、立廻りにて、引きつける。
兵次　サア、云はぬか……云はすばまだ。カウ〱。
　ト立ちかゝり、背打ち厳しくする。太吉「ウン」と死ぬる。
ちつぺいめ。痛くば吐かせ。コリヤ、どうぢや。
　ト太吉を引きあげ見て
ヤア、南無三、こりや相果てた。
　ト藤兵衛狭衣、太吉が死骸を抱へて
狭衣　コレ、太吉やアい。
つれ　太吉イなう。
　トいろ〱に呼ぶ。狭衣、太吉が死骸を抱へ、ウロウロして
狭衣　モシ、太吉は死にました。
　ト藤兵衛に死骸を見せ、彌十郎に見せて
死んだわいなア、死にましたわいなア。こりやマア、なんとせうぞいなア。
　ト大泣き。藤兵衛、始終堪える思ひ入れ、いろ〱にあり、彌十郎もこなし、いろ〱あり
藤兵　廓を駈落ちすれば、關破りの科。その親を慕うて出た娘も、また爰で關破り。その弟は關所で死ぬるとは、思へば過去の因縁ぢやよなア。
兵次　ヤア、空とぼけ取措け。川越しども、もうこの上は

人違ひでも苦しうない。踏みつけて繩打てい。

皆々　心得ました。マア、この荷物から。

トかゝるを、藤兵衞、投げのける事よろしくあり、この時

松　エ、、齒痒いわい〳〵。エ、、わい等ぢやゆくまい。ドレ、おれが。

ト藤兵衞にかゝる。兩人立廻りあつて留まる。

彌十　イヤ、そな川越し寒風とやら。最早疵は癒えたか。

松　エ、。

トたるむ所を、藤兵衞取つて投げる。また來る所を彌十郎、首筋取つて引きつけ

彌十　上を欺く憎い奴の。管領細川どのゝお飛脚に向ひ酒手をねだり剩へ、百兩といふ大金を、ぐづり取らんと僅かな疵を大仰に訴へ、上を掠むる科人。ヤイ、うぬ等も徒黨の者ぢやなア。

ト松を扇にて散々に叩き、突き飛ばす。

定　イ、エ、徒黨の者ぢやござりませぬ。私しどもは仲間の喧嘩ゆゑ、挨拶に出たのでござります。

皆々　ハイ、さうでござります〳〵。

トロ々にやかましく云ふ。松、思ひ入れあつて

松　イヤモシ、お役人樣、尤も酒手をぐづツたも惡い。また仰山に云つたも、マア惡いにもなされませ。金はこの通り死んで居ります。ハイ、てこねて居りまする。下手人取らうと云ふが、無理でござりますか。

彌十　その死骸、目通りへ直せ。

卯之　ハイ。

ト戸板に乘せたる儘、金が死骸を前へ持つて出て直す

彌十　先程より心をつけるに、呼吸の程怪しき死骸。山名一齋、彼の申しつけた氣附けを持ちやれ。

一齋　ハア、。

ト脊中一ぱいの玉なりの大艾を持つて出る。皆々悔り

仰せに從ひ、氣附けの用意仕つてござりまする。

彌十　所詮死んで程のある死骸、なれども萬に一つ息吹き返す事もあらうか。マア、氣附けを用ひて見やれ。

一齋　畏まりました。

松　そんなら氣附けといふは

皆々　その大艾で、灸を据ゑるのでござりますか。

ト死骸、慄へ出す。

彌十　どうか、思ひなしか、死骸が動くやうなが。

一齋　左樣でござります。

彌十　早う用ひて見たがよい。
一齋　畏まりました。
ト死骸を俯向け、件の大艾を金の背中へ置き、火をつける。一齋これを煽ぐ。
狭衣　コレ、太吉、其方を殺して、なんの母が生きて居やうぞ。生き永らへる程、忠義は缺くる、貞女を破るが辛い。生きて居やうより、わしも後から行くぞや。
ト此うち金、火の迫りしこなし、いろ〳〵あり、身を跪き
金　アツ、、、、。こりや辛抱がならぬ。
ト飛んで起きる。
彌十　ソレ、繩打て
ト軍次、金に繩かける。松、行かうとするを、彌十郎、引き戻し、投げる。軍次直ぐに繩かける。
定　こりや、二人の奴等を。
彌十　徒黨せば、一々括し上げうか。
皆々　ハアイ、。
ト皆々すくむ。
兵次　彌十郎どの、さう片手打ちになさるゝな。藤兵衞と見極めたゆゑ、彼れらが訴へ。すりや、上へ對しては御奉公の者に、繩をかけ、往來を騷がせし飛脚を、助け置いても苦しうないか。
彌十　苦しうござらぬ。管領、細川の早飛脚、途中にて人足が慮外せば、切捨ては御定法。
兵次　ヤア。
藤兵　全く理不盡は仕らぬ。荷物に手をかけ、無法の節々。嚇しのために拔いたる刀。證據は彼れらが向う疵、往來には凶事はござらぬぞ。
兵次　然らばその荷物、改めて通してくれう。
藤兵　イヤ、その儀は。
兵次　見せぬは曲者。ソリヤ。
皆々　合點ぢや。
トかゝるを皆々を投げる。皆々逃げる。兵次、刀を拔いて切つてかゝるを、叩き落し、その刀を兵次に突きつける。皆々寄らうとする。
藤兵　寄りやアがると命がないぞ……お侍ひ、お身が吟味召さるゝも、お主の云ひつけ。おらが荷物を見せまいと云ふも、大切なお主の荷物。なりや五分々々のせりふ。また是非とおいやりや百年目、どいつ此奴の容赦はない。飛脚が手並は、川越しどもが覺えて居らう。惡く

寄つたら・グワラリドツサリ、小豆粥だぞ。
兵次　イヤ、慮外な奴の。
彌十　イヤ、慮外でない。お飛脚、身共が許した。勝手に關所を通り召され。
藤兵　エ、、忝ない。
兵次　イ、ヤ、詮議のかゝつた奴。私しに見遁がしては・貴殿の役目が立ちますまい。
彌十　左程邪正を糺す兵次どのが、詮議の囮に捕へたる小兒を、私しになぜお手にかけられた。
兵次　イヤ、その儀は。
彌十　未だ罪の疑はしき者を、この成敗。殊に小兒は科あるとて、十五歳までは助けるが定法。それに科の兒狀も糺さず、役目の身共を差措き、横目のこなたが要らざる成敗。この通り、貴殿の主人大炊之介さまへ、言上申さうか。
兵次　サア、それは。
彌十　その上、川越しどもが申すを聞けば、兵次さまお頼みのと申したが、貴殿、彼れ等に何を頼ましやれた。
兵次　アイヤ・それは。
彌十　關所を預かる役人が、川越しを頼み、往來を妨げ、大金を強請り上げても苦しうないか。
兵次　イヤ、全く以て。
彌十　云ひ分ござるか。
兵次　サア、それは、
彌十　言上申さうか。
兩人　サア〱。
彌十　右三ケ條の返答打ちやれ。どうぢや。
兵次　ムウ、誤まり入りましてござる。
彌十　然らば、このお飛脚に云ひ分ないか。
兵次　云ひ分ござらぬ。
彌十　川越しども、憎い奴等の。大切なお飛脚に麁忽を云ひかけたは、うぬ等が誤まり、キツと曲事申しつける奴等なれども、事穩便に計らひくれる。ソレ、軍次、兩人が縄を解き、東の門前へ抛り出せ。
軍次　ハツ。
　　ト金と松の縄を解き
命冥加な奴等の。
　　ト門外へ抛り出す。
皆々　エ、、思へば〱。
彌十　云ひ分あるか。

皆々　なんのお前。

ト皆々顏見合せ、目まぜして入る。

彌十　お飛脚、定めて難儀にあつたであらう。詮議落着の上は、勝手に關所を通り召されい。

藤兵　エヽ、忝ない。御厚志のお禮は重ねて。

兵次　イヤ、落着いたさぬ。この娘は逆磔刑。

彌十　イヽヤ、子供が詮議も落着いたした。

ト行かうとするを、引き留める。

兵次　なんと。

彌十　その女と同腹の弟を、罪なくして手にかけ召されたからは、取りも直さず姉が身代り、殊に未だ關破りといふにもあらず。こりや關を破らうと致したばかり。ハテ貴殿の罪を償ふ爲、娘が命は助けて遣はされい。

兵次　ムヽ、子侔どもはそれにもせよ、關破りの大罪は、この賣女め。この科はかりは遁がれはあるまい。

才兵　イヤモ、狹衣が關破りは、勿怪の幸ひ。彌十郞さまからお金を貰ひ、身請けの算用、相濟みましてござります。

兵次　ヤア、すりや科人の身請けを。

彌十　石井に身寄りの藤兵衞が女房、詮議の囮に身請け致した。

狹衣　エヽ、忝なうござんす。

藤兵　段々のお志し、お禮の申しやうも…………拙者は最早お暇申さう。

ト葛籠を背負ふ。

兵次　イヽヤ、行くなら荷物を置いて行け。

藤兵　すりや、どうあつても。

兵次　疑ひかゝつた荷物の詮議。ソレ。

トかゝらうとする。藤兵衞立廻り少しあり、此うち彌十郞、鎗を取り、鞘を外し、覘ひを定め

彌十　實否を糺す覺えの鎗先。

ト葛籠へ突ッ込む。藤兵衞悔り。

藤兵　南無三。

ト行くを、兵次、突き廻し、立廻つて

彌十　兵次どの。イザお改め。

ト鎗を引き拔き、穗先を兵次へ突きつける。兵次、鼻紙を以て拭ひ見る。血つかぬゆゑ、思ひ入れ。藤兵衞こなしあつて

兵次　これは。

彌十　なんと御覽なされたか。

藤兵　云ひ分あるか。
兵次　ムヽ。勝手に致せ。
彌十　云ひ分なくば、お飛脚、お行きやれ。
藤兵　ハツ。
ト三人引ッ張りの見得よろしく、返し　幕。

六幕目　大井川の場

役名——石井兵助。中野藤兵衞。三木十左衞門。赤堀水右衞門。

質屋の場、チョン〳〵といつもの引幕。一面の浪幕にて締まると、浪の音ツナギ、道具拵らへ出來次第拍子木を直すと、浪の音、嚴しく、この浪幕の外へ向うより、藤兵衞、旅の形。葛籠を背負ひ出て來る。これを、川越し人足大勢、付いて出て來て、花道にて

川越　これサ、先刻から、こちとらが呼ぶのに、その耳へは通じないか。
同　旅がけといひ重たさうに、葛籠を引ッしよつて。
同　日本一のこの大井川へさしかゝり、川越しのこちとらに賴まずに
同　一人越しをする氣か。但し、耳の穴へ聞えないのか。
同　若い男だが、可哀や、聾ださうな。
同　これサ、耳の穴をかッぽじつて、こちとらが云ふ事を
皆々　聞きやアがれえゝ。
藤兵　い、ヤ、耳も聞える。聾でもない。
皆々　そんなら、なぜ物を云はない。
藤兵　知れた事。御主人の大切な荷物を持つて居るゆゑ、役所へかゝつて越すのだ。
川越　たとへ役所へかゝつても、こちとらが肩車に乘らにやア、越す事はならないワ。
同　マアわれよりは、この葛籠を持つてやらうわえ。
ト葛籠へかゝるを、藤兵衞、突き退ける。
同　オ、、おれが脊負つてやるべえ。
ト又かゝるを、藤兵衞、退ける。皆々立ちかゝり
皆々　オ、、さうだ。葛籠を持つてやれ〳〵。
ト藤兵衞、キッとなり

藤兵　こりやアうぬらは。
皆々　大井川を越してやらうと云ふのだワ。
藤兵　滅多な事をして、旅人に慮外があれば
皆々　川越し七人、下手人と云ふのか。
川越　お身さま、こちとらを
同　猫のやうにしやアがるのかえ。
同　イヤ、にやんとも、思はぬぞえ。
同　こちとらが商賣。どうでも川を渡さにやアならないわえ。
同　否と云やア引摺つて。
　トかゝるを、藤兵衛、立廻りにて、取つて投げ
藤兵　こりやどうしても。
皆々　おいらが、斯うして。
　ト皆々藤兵衛にかゝる。立廻りにて、藤兵衛、刀を拔く。
　ソリヤ、拔いたぞ〳〵。
　ト皆々幕の内へ逃げて入る。藤兵衛追ひかけて入る。
　ト波の音、誂らへの鳴り物になり、チヨン〳〵にて右浪幕の引幕、仕掛けにて、幕の針金浪幕ともに、隨分靜かに、舞臺一面に破風づらまで後へ引付ける。

　いつもの舞臺になる。又チヨン〳〵にて、この浪幕西の頭際より、東の方、樂屋口の際まで浪幕を筋違ひに、引付ける。又チヨン〳〵にて、引拔き、四尺程の底付きの浪と成り、花道兩側舞臺前へ浪板を引出す。舞臺、花道へ一面の水幕を、平地に繰り出す下座の方は、淵の道具。東海道大井川の模樣。右の鳴り物にて、道具納まると鳴り物變り、浪の音、花やかなる鳴り物入りの、川越し唄になり、川越し大勢、思ひ〳〵に旅人を肩車に乘せ、鼻唄、捨ぜりふにて、大井川を越す事。上り下りの、好みいろ〳〵ある。此うち始終、右の川越し唄に、雨車。皆々渡る事ある。また道具變りの鳴り物になり、下座より、低き淵の道具を押し出す。これに藤兵衛、葛籠を負つて立ち身。道具とまる。藤兵衛、こなしあつて
藤兵　川越しめらに付けられたを、やう〳〵拔けて爰までは渡つて來たが、しけ日和では、渡る事も心元ない。
　トあたりを見て
　雨もやんださうな。御不自由な兵助さまを。さうだ。
　ト合ひ方になり、葛籠を下ろす。中より兵助、着流し浪人の形、眼病のこなしにて、探り〳〵出る。

兵助さま、さぞ御窮屈にござりませう。

兵助　藤兵衞、爰はどこぢや。

藤兵　大井川の、三の瀬あたりでござりませう。

　ト兵助、こなしあつて

兵助　ア、如何なれば、石井一家の身の不運、神影流の達人と、呼ばれし父兵衞さまも、水右衞門が爲に敢へなき御最期。この兵助は御用金の越度に依つて御勘當の身。その用金の盜賊も、確かに水右衞門に組みせし者の業と思ひ、その詮議の爲に浪々のうち

藤兵　親旦那兵衞さまには、不慮の御最期。元はと云へは奧樣より起つた事。これとても、おときさまの、義理に依つて御落命。おのれやれ、親旦那の敵と思つても、御總領の岡野さまは、飾間家の十左衞門さまへ御緣付き。御次男のお前樣は、御勘當にて、駿河邊に御流浪の御身。後に殘つてござるは、おときさまばかり。日頃から思ひ思はれ、云ひ交してござつた御秘藏弟子の香川半次郎さま。親御香川又左衞門さまに、暇を乞ひ受けて敵討。兵衞さまには殿樣より、預かり奉つた伽羅木の觀世音、それまで奪はれし科によつて、石井家は斷絕。それゆゑ駿河にござると承り、やう〳〵尋ねてお知らせ申し

兵助　親人の御最期の樣子、聞いて恂り、その無念口惜しさは、今とても同じ事。御用金詮議は元より、その伽羅木の觀世音が、差當る詮議と思ふうち、府中の質屋にあると云ふ事聞いたゆゑ、その家へ奉公の憂き艱難。

藤兵　それより私しも、半次郎さまをお連れ申して、播州へ立越え、十左衞門さまをお賴み申して、助太刀やら敵討ちやら、殿樣より首尾よくお暇賜はり、十左衞門さま岡野さま、半次郎さまと、御夫婦御兄弟にて、この駿河へ下り、別れ〳〵に諸所へ旅宿。お前樣の御奉公の質屋へ便り、手段を以て、伽羅木の觀世音を取返しましたれば、これを功に、一先づ濱松の淺山家へ、御歸參とは思へども、ほのかに承りますれば、石井兵衞は師範の身横死の上に尊像まで、奪はれし白痴者とあつて、勘當の兵助を尋ね出し、罪科に行へとの風聞。大事の御身のお前樣、人目にかゝつては一大事と、御不自由ながらも葛籠の住居。やがて何かの事も相濟み、御本望もお達しなされませう程に、必らずキナ〳〵と、思し召さぬがようござりまする。

兵助　何かにつけて其方の世話、忘れは置かぬ忝ない。

十左衞門さま、弟半次郎にも、駿河の旅宿に逗留のうち、何か申し合せ、おれが苦勞の奉公も、甲斐があつて尊像は手に入り、それを頼りに一旦は、歸參を願はんと思ふうち、この眼病。何の因果で此やうに、辛い事のみする事と、思へば〳〵。

ト口惜しきこなし。藤兵衞、思ひ入れあつて

藤兵　サア〳〵、其やうに思し召したら、猶さらお目の毒でござりませう。

ト兵助、思ひ入れあつて

兵助　イヤ〳〵、案じてたもるな。おりやア口惜しいとも何とも思やせぬ。目も惡うはない。どうやら水音を聞いたれば、大井川の東西、嶋田から金谷まで、見え渡るような。大分心よい〳〵。

ト云ひ〳〵、そこらを探るこなし。

藤兵　それはマアよろしうござります。

兵助　さうして、十左衞門さま姉者人、弟半次郎は。

藤兵　あなた方も御一緒では、目立ちまするから、岡野さまと半次郎さまには、關助がお付き申して、後から十左衞門さまは、もう追ツつけお出でござりませう。

ト雨車になる。

モシ〳〵、また雨が降つて參りました。川の止まらぬうち、どうぞして、よい川越しを騙して渡りませう。人目にかゝつては大事の御身。

兵助　それ〳〵、何かに付けて其方の心遣ひ。ドレ〳〵、葛籠の中へ。

藤兵　サア、お入りなされませ。

兵助　ほんに思へば、この葛籠の……誠に安壽、對王の其方の苦勞。

藤兵　エヽ、お心弱い。三庄太夫の氣になつてござりませい。

ト此うち、下座より、以前の川越し大勢、出かけ居る藤兵衞、兵助を葛籠の中へ入れて、脊負ひ、立ち上がる。この時、兩方より殘らず出て、藤兵衞を、引ッ挾み

皆々　旅人、川を渡さうかえ、

ト藤兵衞、見て、ギョッとして

藤兵　こりや、わいらは先刻の奴等、まだ懲りもせず。

川越　知れた事だワ。こちとらの商賣。

同　素手の孫三で通して堪るものかえ。

同　先刻は格別。

同　おいらが新規に、渡さうと云ふのだ。
同　マア葛籠から
同　脊負つて渡らうわえ。
藤兵　すりや、どうしても、わいらは。
皆々　強請ると云ふのか。
藤兵　オヽ。
川越　どうで五十三驛の、溢れ水のこの大井川で、口過ぎするこちとら。
同　頑張つて置いたその葛籠。
皆々　置いて行きやアがれ。
藤兵　こりや、一度ならず二度三度と、すりや、どうあつても。
皆々　只の洒手で、通すものかえ。
藤兵　そんならアノ
川越　面倒な。疊んでしまへ。
皆々　合點だ。
ト これより誂らへの鳴り物になり、藤兵衛、この人數を相手に、面白き大立ち廻り、さまゝゝあつて、皆々を追ひ込む。川越しの一人、取つて返し、そこにあつた葛籠を見て

川越　なんでも、この葛籠を。
ト 葛籠の紐を取つて明ける。中より兵助、探りゝゝ出る。
ヤイ、どう盲目め。うぬ、この葛籠の中に隱れて居るからは、詮議のある奴に極まつた。うしやアがれ。
ト 兵助を引立てる。振り拂ひ
兵助　おのれ、武士に向つて慮外したら、許さぬぞ。さうして、其方は何者ぢや。
川越　おれか。大津の八といふ、この大井川の川越しだ。
兵助　その川越しが、なんで身共を。
川越　引立てゝ代官所へ連れて行く。うしやアがれ。
ト また引立て、立廻りにて、兵助、刀を引拔き
兵助　おのれ、聊爾なすと許さぬぞ。
ト 刀にて、なぐり廻す。川越し、いろゝゝ逃げ廻るうち、雨車にて、いろゝゝあつて、川越し、かゝるを兵助、盲目切りに、川越しを切り殺す。アツと倒れる。
兵助、思ひ入れあつて
こりや川越しのおのれ、その身に應へたてあらうが。
ト 云ひゝゝ探り、川越しを撫で廻し
そんなら今の川越しめを、この刀にて。

花菖蒲浮木龜山　　文化二年四月市村座所演

助高屋高助の十左衛門　松本幸四郎の水右衛門　（初代豐國畫）

トほつと息つく。合ひ方になり、兵助、そこらを探り探り

兵助　思はぬ彼奴等が狼藉に、眼病ながらも一刀に、切つて捨てたは、まだ手の內の狂はぬのか。ア、嬉しや／＼

トこなしあつて

ア、、また雨が降つて來た。さうして爰は、大井川の二の瀨、陸へとても行かれず。この藤兵衞は、どこまで追つて行た事やら。藤兵衞やアい／＼。

トあたりを窺ひ、いろ／＼呼んで

なんの因果で此やうに、難儀に難儀の重なるものか。まだ十左衞門さまはござらぬかしらぬ。アヽコレ、どうぞ藤兵衞が來てくれぬ事かい。目かいの見えぬこの兵助、西も東も惡者だらけ。油斷のならぬこの海道。

ト懷中より尊像を出して

シタガ、心を碎いて取返したる、この尊像、せめてこれを御主人へ差上げて、勘當の詫び……それにつけても藤兵衞は戾らぬ事か。藤兵衞やアい。

ト呼び立てる。此うち、下座より水右衞門出て窺ひ居る。兵助を見て、セヽラ笑ひ、刀を引拔き

水右　その藤兵衞に、逢はしてやらうわえ。

ト兵助を、一突き突く。これより、雨の音嚴しく、時の鐘、凄き合ひ方。兵助、苦しみながら

兵助　何者ぢや。この川中にて狼藉と云ひ、卑怯未練に名乘り合せもせず、刃傷に及びしは、誰れぢや。何者ぢや。ムウ聞えた。そちや川越し共ぢやな。

水右　イヽヤ、そんな者ぢやない。

ト兵助、この聲に心付き

兵助　さう云ふ聲は

水右　赤堀水右衞門だ。

兵助　ヤア／＼／＼。

ト大きに驚ろき

アノ水右衞門とや。エヽ。

ト口惜しき思ひ入れにて、よろめき／＼、キッとなりながら

よい所で出會うた。おのれ水右衞門、親の敵、觀念。

ト切つてかゝらうとするを、水右衞門、酷ごく蹴飛ばし

水右　エヽ、何をしやアがるのだ。ヤイ、兵助、ヂタバタ騷ぐな。わいらがやうな奴等が、千萬人來ても、ビクともする水右衞門ではないぞ……見りやア、うぬは盲目

だな。可哀やそんなら、殺さねばよかつた。ア、、いらざる殺生。

ト思ひ入れあつて

シタガ、大事の伽羅の尊像、それを持つたが、われの不運だ。猫に鰹節と云はうか、鳥に餌を飼ふやうなものだハ、、、、、。水右衛門が兵衛を討つた譯も云つて聞かさう程に、もう少しくたばらず、よつく聞け。

トこなしあつて

イヤ〱、この雨では川が止るであらう。

ト空を見て

ア、、雨もちつと止んで來た。ドレ〱、一服のみながら、云つて聞かさう。

ト兵助、こなしあつて

兵助　うぬ、水右衛門の人非人め。

水右　騒ぐな〱。

ト大きな丸石へ腰を掛け、摺火打ちにて莨のみながら

先づ濱松の屋敷へ、劍術を云ひ立て、有りついた所が、われが親の石井兵衛、なか〱神影流の達人。この水右衛門が一光流を云ひ立て高慢したれど、兵衛には及ばぬと思つたから、此奴生けて置いちやア身の妨げと、思ひ立つたが、石井一家の運の盡き。

兵助　チエ、。

トきつとなる。

水右　これサ、あんまりぎしや張らずと、靜かにしてよく聞け。うぬが、寶藏の番の夜に、御用金千兩紛失したも八之丞、藤四郎との云ひ合せて、の水右衛門が、ひん盜んだワ。

兵助　さてこそな。

ト無念がる。

水右　まだある〱。靜かにしてよく聞け。まだこんな事ぢやアない。うぬが爲には繼母の、兵衛が女房のおらい、彼奴年增盛りで美しいから、水右衛門が首たけ惚れた。そこで智慧をめぐらし、口說き落した所を、兵衛めが聞いて亂騷ぎ。こいつ堪らぬ、生けて置かれぬと、老ぼれながらも手者の兵衛、騙し置いて打ツ放し、殿より預る尊像を、奪ひ取つて濱松の、屋敷を隨德寺ときめたのだワ。

兵助　おのれマア。

ト又キツとなり、立ちあがらうとするを、水右衛門エ、と煙管の吸ひ殼を叩き付け、唾を吐きかけ

文化十四年五月中村座所演　　忠孝菖蒲刀

坂東三津五郎の十左衞門　尾上菊五郎の兵助　（初代豐國畫）

水右　騒ぎやアがるな、肝心な話しの邪魔になるワ。まだ
まだこんな事ぢやアない。靜かにして、よく聞け。それ
からこの水右衛門、浪人ゆゑ藤四郎に渡して、伽羅の觀
音を質に百兩借りて、活計歡樂、その尊像の事について
藤四郎を尋ねて、駿河の府中へ來るこの道にて。
兵助　すりや、尊像を、口惜しや。
ト切つてかゝるな、立廻りにて引ツたくり、引敷き、
片膝にて、押へ付け、上へ乘りかゝり
水右　われが所持したこの品、合點ゆかぬと窺ふに、疑ひ
もない伽羅の尊像、又も我が手に入る時節と、おれが喜
び、うぬが悲しみ。尊像渡して、キリ〳〵くたばれ。
ト蹴飛ばす。兵助、また來るを突き貫く。始終、時の
鐘、合ひ方にて、嬲り殺しにする。此うち、また雨降
つてくる。兵助、無念がり
兵助　エヽ、聞けば聞く程、惡事の水右衛門。チエヽ、……
……藤兵衛やアい〳〵。
ト段々と弱り、苦しむ。水右衛門、尊像を懷中し
水右　再び尊像、我が手に入るとは、忝ない。
ト以前の川越し、皆々出て來て
皆々　お侍ひさま、兼ねてお頼みの通り
川越　貳分半に喧嘩を仕掛けて
皆々　まんまと此奴を。
水右　出かした。ソレ酒手。
ト金をやる。皆々取つて
皆々　こりや、一人前へ一兩づゝ……忝なうごんす。
水右　この上は、島田の方へ身共を渡して。
皆々　合點だ。
ト蓮臺を取つて來て
皆々　サア、親方、乘らんせ。
ト水右衛門、蓮臺へ乘る。皆々、ワヤ〳〵云ひ〳〵蓮
臺を舁き上げる、二の瀬の道具は、兵助、倒れながら
下座へ引込む。浪の音、川越しの唄になり、川越し皆
皆、この唄に合せ、唄ひながら段々と花道の川へ行き
かゝると、此うち十左衛門、旅人の形にて、蓮臺に乘
り、これを川越し大勢にて舁ぎ、これも川越し唄を唄
ひ〳〵、始終右の川越し唄にて、十左衛門、花道の中
程にて、蓮臺行き違ひになる。この時、十左衛門、水
右衛門、顔見合せ、兩人思ひ入れあつて、合點のゆか
ぬこなし。水右衛門、知らぬ振りにて、頬かむりなす
る。十左衛門は水右衛門を振り返り〳〵見て居て、こ

の蓮臺、下座へ入り、水右衞門、合點のゆかぬこなしにて、向うへ入る。あと合ひ方にて、二の瀨の道具を又押し出す、爰に手負ひの兵助を、十左衞門、介抱して

十左　ヤア兵助、心を付けい。兵助〳〵。十左衞門ぢやぞ。

トこれにて兵助、やう〳〵呻く。

見れば藤兵衞も居合はず、兵助一人、こりや何者が手にかけた。コリヤ、兵助〳〵。

トいろ〳〵心急きにて介抱する。兵助、心付き、十左衞門を見て

兵助　十左衞門さまか。

十左　オヽ、氣を慥かに持て。十左衞門ぢやぞ。

兵助　遲かつた〳〵。

十左　して、藤兵衞は。

兵助　大勢の川越しどもを相手に。

十左　すりや、口論にて追ひかけ行きしか。して、其方を討つたる者は。

兵助　口惜しや……矢ツ張り敵水右衞門。

ト反る。十左衞門、大きに愕りして

十左　ヤア、すりや返り討に。

ト思ひ入れあつて、向うを見て

慥かに今のが……ソレ。

トきつとなり、舞臺先の川端までツカ〳〵と行く。向う揚げ幕にて

大勢　川が止まつた〳〵。

十左　すりや、川が……ホイ。

ト向うをキツと見て、膝を叩く。チヨンと頭をよろしく、拍子

幕

七幕目　八ツ橋村の場

役名——八ツ橋村の又四郎。同娘、おくら。一子、市松。百姓、庄六實ハ飯田由兵衞。奴、關助。赤堀水右衞門。三木十左衞門。

造り物、平舞臺、正面三間の間、高欄付きの二階立て。見附けより左右障子入り。下の見附け納戸口。左右赤壁。上手柱際より舞臺先へかけて、筋違ひに

柵をかけ、杜若盛りの體。この後に小柴垣を隔て茅屋根の侘びたる屋體。橋がゝり、茅葺き繩暖簾の小家。隣家の體。この模様よろしく、幕の内より、おくら、襷、前垂れ、木綿の着物、裾を小短かく搦げ、棹を持つて、麥を打つ體。庄六、襦袢一つ、百姓の拵らへ。およし、在所嚊の拵らへ、外に下女一人、百姓二人、この人數空棹を持つて、麥を打つ體。鄙びたる唄にて幕開く。

皆々　サア／＼、みんな精を出さうぞや／＼。

庄六　大分仕事に身が入つて來たぞや。

よし　身が入るが、よいぞ／＼。

トロ々に云うて空棹を打ち始終唄、これに合せ、皆々捨ぜりふ云ひ／＼、麥を打つ體。庄六、空棹を止めて、上の方おくらの側へ行き

庄六　お娘、今年の麥は、よう出來たぢやないか。

くら　よう出來たわいの。

ト云ひ／＼、空棹を打ち、外の人數も、構はず唄に合せ、空棹を打つて居る。

庄六　あんまりよう生えたに依つて、納屋が貸してもらひたいワ。

ト側へ寄る。

くら　コレ、惡い事さんすな。お前の内から、お内儀さんが見てぢやぞえ。

ト隣を指差して云ふ。

庄六　イヤ／＼、嚊めは、桑名へ用があつて行て、内には居らぬ。そこで嚊めがする事を、水の澤山なお娘の畠へ一鍬入れようと思うて。

トおくらに抱きつく。

くら　エヽ、知らぬわいなア。

ト突き飛ばす。庄六、橋がゝりの方へ、ヒョロ／＼と行つて、元の所へ來て、直ぐに空棹を打つ。

庄六　豐年ぢや／＼。

トやかましく云うて、空棹を打つ。始終この間、唄にて、よき時分、又四郎、親仁の拵らへ、繼の當りし單物を着て、盆に茶碗を大分載せて、市松を連れ、納戸より出て、門口の方へ行き

又四　これは下作の衆、大儀ぢや／＼。サア、煮花ぢや。呑んで下され。

皆々　煮花とは有り難いぞ。

くら　なんとマア、強い埃ではないかいなア。

ト手拭にて、體を拂ふ。

庄六　とんと煤掃きのやうぢや。晝までに、此方の麥打ちをしまうて、晝から親仁どのゝ麥打ちを、皆が此やうに手傳ふと云ふもんぢや。何でも麥は、充分に出來、米も充分、親仁どのも充分であらう。ナウ、皆の衆。

よし　それ〳〵。イヤ、又この三河では、庄屋どのにも負けぬ又四郎どのゝ顏なり、下作のお衆達が手傳ひにござんしても、來た甲斐があるといふものぢやわいなア。

皆々　ソレイナウ。

庄六　イヤ、親仁どの、おりや尋ねたい事がある。

又四　尋ねたいとは、何ぢや〳〵。

庄六　イヤ、外の事でもないが、おりや一體、少さいから屋敷へ奉公に行て、ちつと譯があつて、この在所へ戻つて來たは、去年の事。爰な内とはツイ隣同士で、朝晩爰な内を見るにつけても、在所には不都合な二階立ての構へ。何やら樣子のありさうな普請ぢやによつて、いつぞは、この譯を問はうと思うて居たが、どうでこんすぞいの。

又四　イカサマ、なんぼ隣同士でも、われはまだ新米の百姓ぢやによつて、この家の由來は知るまい。

庄六　サア、それが聞きたいと云ふのぢや。

又四　イヤ、斯うぢやて、元爰は三河の國の八ツ橋と云うて、大內へも聞えた杜若の名所であつた。その昔、禁裏からこの澤邊に、御知行が付いて、その杜若の花守を、仰せつけられたが此方の先祖ぢや。そこで先の地頭濱田さまの時に、おれも御奉公申して、帶刀もした此方の家筋ぢやけれど、月日の立つに隨うて、御內裏さまも始末になつて、儉約で知行は來ず、昔の面影どこへやら、八ツ橋の跡もなく、杜若も枯れ〳〵。ほんの名所のしるしまでに、アレ〳〵、あの通り少しばかり殘つた跡は殘らす田畑になつて、常の在所の只の爺になつて、斯ういふ百姓の身過ぎするも、移れば變る、ア、何やらであつたわい。オ、、音に聞く三河の澤邊來て見れば、田ばかりあつて杜若なしぢや。

庄六　イカサマ、由來を聞けば、ホツと草臥れたわい。

百姓　イヤ、親仁どの、由來の次に、も一つ由來が尋ねたい。爰な二階の逗留の客人は、東國の浪人衆ぢやと云うて、三月餘りの逗留。今云はしやつた先祖の格式があるによつて、その緣を傳うてわせたのか。次手にこれも來歷を聞きませうかい。

又四　されば、アノ仁の事は。
トこなしあつて
サア、ちつと大切にせねばならぬ、據ない客人。この
譯は、マア〳〵、話して聞かす折もあらう。
くら　イエモウ、娘のわたしにさへ、父様が譯を云うてぢ
やないによつて、どういふ事で逗留のお客様やら知らね
ど、坊が爲には劍術の御師匠様、隨分大切にせねばなら
ぬわいなア。
百姓　又そこで、おいらも客人に弟子入りして、畑仕事の
隙に、エイヤツトウの稽古を、やつて見るといふものぢ
や。
百姓　竹槍の魂膽を覺えようと思へば、餘ツぽど骨が折れ
るぞ。
同　陣鎌をやつて見たが、イヤ又、草を刈る鎌とは、案排
の違うたものぢや。庄六、われも先生を頼んで、兵法を
習うて見んかい。
庄六　イヤ〳〵、おりや、そんなむづかしい事は嫌ぢや。
百姓　此奴は餘ツほど不精者ぢや。
同　イヤ又、いかに新米の百姓ぢやと云うて、鋤鍬はえゝ
持たず、たつた十町ばかりある山田まで行くのに、この
永の日を半日づゝ使うて、イヤモウ、かゝつた足ぢやな
いて。見た所は達者さうに見えるが、とんと見掛よけに
はらぬ者ぢや。
下女　そこで、あの人さんをば、躄松の庄六と、異名が付
いてあるわいなア。
百姓　イヤ、そりやさうと、先生が云はるゝ事には、一兩
日行て來ねばならぬ所があるによつて、稽古をば休むと
云はれたが、まだ戻つては來ませぬか。
又四　さいやい。世を忍ぶ身ぢやと云うて、あの二階に引
込んで居る和郎が、何を思ひ出されたやら、急に藤枝へ
行て來ねばならぬと、駕籠に乘り、ちらけて出られた
は、七日以前、もう戻られさうなものぢや。ナア娘御。
くら　大方、この間の雨で、大井川が止つたによつて、そ
れで遲いのであらうわいな。
同　イヤ、大井川の次手に、この間えらい喧嘩があつたげ
な。
同　相手は、ざぶぢやないかい。
同　それ〳〵、なんでも川越しが大勢、切られたげな。
同　其ざぶも、二瀬めで殺されたが、イヤモ、膾叩いたや
うにしてあつたげな。

同　脆い奴ぢやなア。
庄六　なんぢや、大井川で侍ひが。
　ト思ひ入れ
又四　庄六、大井川で喧嘩があつたら、なんぞ氣にかゝる
　事があるか。
庄六　サア、侍ひが切られたとは。
又四　その侍ひが近付きか。
　ト庄六、こなしあつて
庄六　イヤ、見ぬ事ぢやによつて、近付きぢややら、なん
　ぢややら。
又四　それを案じて、なにするぞえ。
　ト庄六、こなしあつて氣を替へ
庄六　ほんになア。
くら　父さん、日も闌けたさうな。もう皆休ましたがよい
　わいなア。
皆々　そりや忝ない。
くら　そこらを片付けて、皆、風呂へ入つて下さんせ。
又四　さうぢや／＼、湯でも浴びてから、休んでもらは
　う。うめよ、風呂の下焚き付けて來い。
下女　アイ／＼、ドリヤ、風呂を焚きつけて來うか。

　ト入る。
庄六　おれも去んで、釜の下を焚きつけうか。
百姓　一ぱい浴びて、先生の歸りを待たう。
同　それもよからう。
よし　こちは去にますぞえ。
又四　オヽ、皆大儀ぢやあつた。
　ト在郷唄になり、百姓皆々、納戸口へ入る。およしは
　花道へ入る。又四郎、皆々大儀ぢやつたと捨ぜりふ云
　うて居る。庄六、おくらの太股をつめる。おくら、腹
　立てる。庄六、フト又四郎と顏見合せ、こなしあつて
　橋がゝり藁葺きへ入る。右唄のうちにて、又四郎、お
　くら殘り
又四　ヤレ／＼、大水の出たやうな。サア／＼、娘、入れ
　入れ。
　ト市松を連れ、内へ入る。おくら、莨盆を又四郎の側
　へやり
くら　ドレ、世話次手に、麥の粉を挽いて置かうか。
又四　マア、ちつと休んだがよい。
くら　イエ／＼、近所へ配る飯の拵らへ、明日隙の入らぬ
　やうに、サア／＼、坊も手傳うて下されや。

市松　合點ぢや。

ト跳らへの合ひ方になり、粉などを取つて來て、おくら、臼をひく。又四郎、寢腹這ひ、莨のみ居る。

くら　なんとマア、新まい麥は、よう出來たぢやござんせぬか。

又四　出來たとも〳〵。イヤ、その出來た次手に、娘、われもまた折々は、髮を結うて、女房振りを作つたがよいわいやい。

くら　イエ〳〵、大事ござんせぬ。

ト臼を挽き〳〵云ふ。

又四　イヤ〳〵、さうぢやない。女子に髮飾りは第一の嗜み、われがやうに、灰猫追ひ出したやうにして居ると、人が嫌がる。ちつとはけはひ化粧もして見たがよいわい。

くら　父樣の云はしやんす事わいなア。なんぼ洗ひ磨きをしたというて、誰れに見せうといふ相手はなし。

ト萎れたる體にて臼を挽く。

市松　コレ、母樣、お父樣には、いつ逢はして下さるぞいの。

くら　サア、なんぼ逢はしたうても、海山隔つた旅路といふ譬へ。お國元へ行てからが、奥樣の手前があれば、お屋敷へは行かれぬ仕儀。もし一生お顏を見る事もあるまいかと思へば、悲しいやら、味氣ないやら、生き甲斐もない者ぢやわいなう。

ト泣く。又四郎、こなしあつて

又四　ア、イカサマナア。幼少の時より、飾間の御家中。三木十左衛門さまへ腰元奉公。緣でがな、旦那どのゝお手が掛つて、間もなう懷胎。御本妻の手前といひ、物堅い屋敷の事なれば、世間の聞え、彼れこれを思し召して、みごもつたなり、養育の金が付いて、この三河の在所へ戻つて來たを、數へて見れば丁度八年。尤もその當座は、狀通もあつたなれど、いつともなしに音信不通。御用向が多いので、さつしやる間がないか。何を云うても、遠い所へぼやいたとて、なんの役に立たぬなれども、また遲かれ遠かれ便りなされいでは叶はぬ。今にも十左衛門さまに巡り合うたら、何より自慢は孫が成人。また逗留の客人を頼んで兵法の稽古。土民の手業に養育しても、武士の胤に相違はないと、教へ込んだ武家の行儀。それなりやこそ、現在の孫を孫と云はずに、和子さま〳〵と、おれが口から樣付けをして、育てるも、天晴れ三木

十左衛門の後取にしたさ。コレ〳〵、こなたをば侍ひに仕立てたいと思うて、マア、お師匠を頼んで敎へさす。エイヤツトウ隨分精を出して、今にもお父様に逢はしやつたら、賞められるやうにさしやれや。

市松　爺様、やらぬ。

ト竹刀にて打つてかゝる。又四郎受けて

又四　エ、悧りさしやるわい。

市松　居合ひの稽古ぢや。相手は爺様。サアござれ。

又四　ハ、、、、こりや出かさつしやつた。イヤ〳〵、こなたには敵はぬ。この爺が負けぢや〳〵。イヤ、そりやさうと、お師匠も今日は、是非に戻らつしやるであらう。夕飯の用意もせう。われもモウ日暮れ。仕事を措いて、休め〳〵。

くら　そんなら、もう休んで、飯の拵らへせうか。

又四　サア、和子様ござれ。

ト唄になり、市松を連れ、兩人納戸口へ入る。入相の鍾鳴る。靜かなる合ひ方になり、向うより十左衛門、野袴に三度笠を持ち、出て來て

十左　海道を左の方半道ばかり、八ツ橋村と云うて、尋ねいと云うたが、大方此あたり

ト舞臺の方を見て

ハテ、片田舍には似合はぬ構へ。大方當村の庄屋でがなあらう。幸ひ〳〵。

ト本舞臺へ來るうち、入相の鐘打ち切る。あと合ひ方になり、十左衛門、門口へ來て

イヤ、卒爾ながら、ちとお頼み申したい。

ト納戸口よりおくら、角行燈に火をともし。返事しいしい

くら　アイ、どなた様ぢや。此方へ入らしやりませ。

ト云ひ〳〵出る。

十左　イヤ、ちとこの邊に由緣がござつて、その者の在所を尋ねまするところ、御覽じる通り、夜半に及んでござれば、土地の勝手も存ぜず。いかう迷惑に存ずる。これで相尋ねましたら、何か相知れうと存じて。それゆゑの儀でござる。

ト此うちおくら、灯火をつくらうて居る。

ナニサマ、ハヤ、暫らく休足いたして、相尋ねますでもござらうならば。

ト云ひ〳〵兩人顏見合せ

くら　ヤア、あなた様は。

ト悧り、門口をピッシャリ閉す。十左衞門。悧りしながら、氣の付かぬこなしにて
十左　これはしたり。身が顔を見ると、いかう慌てた體にて、門口をトンと閉てきつたは。
トこの間おくら、苞をいらうたり、我が形を見、ていいろ〳〵とこなしあり
ハア、どうでも亂心者と見ゆる。イヤ〳〵、斯うしても居られまい。ハテサテ、よしない事に隙を費したなア。
ト行かうとする。
くら　ア、中し、必らずとも。どこへもお越しなされて下さりますな。先刻にから、これへと存じますれと、いかう内は取散らけて居りますによつて、それでアノ、爰を取片付けてから、お通し申しませうと存じまして。
ト云ひ〳〵、鏡を取つて髪を直したり、顔を拭いたりしい〳〵、右のせりふを愚圖々々云うて居る。
十左　イヤサ、左やう召されては、結句迷惑に存ずる。所の案内を、ちよつと相尋ねましたら、外に用事はござらぬ。近頃ハヤ御面倒ながら。
ト云うても戸を明けぬゆゑ
これはしたり。

トこなしある。
くら　ハイ〳〵、もう明けますでござります。
ト鏡を持つたり、居たり立つたり、いろ〳〵ある。十左衞門、困つたこなしにて、捨ぜりふ云ひ〳〵あり、此うち隣より庄六出掛け
庄六　また火口を切らしてのけた。隣へ行て火打ち箱を借りて來う。
ト云ひ〳〵門口へ行つて
親仁どの〳〵、火打ち箱が借りたい。
ト入らうとする。此うち、十左衞門、門を覗きゐて、庄六を呼びかけ
十左　アイヤ、所のお人と見受けましたが、卒爾ながら、ちと御無心がござるが。
庄六　なんぢや、無心ぢや、持ち合せと云うては、壹文もないが。
十左　イヤ〳〵、左樣の儀ではござらぬ。
庄六　左樣の儀でなくば、なんの無心でえす。
トぼやき〳〵、十左衞門が顔を見て
ヤア、あなたは。
ト悧りして橋がゝりへ逃げようとする。

十左　ア、コレ〳〵。

ト輕く云うて留める。庄六「ハイ」と立止まり、顏を隱してこなしあり、此うちおくら、覗き居て、見て、この間にと云ふ思ひ入れにて、押入れより衣裳葛籠を出し、引摺つて納戶へ入る。始終合ひ方になり、十左衞門、合點のゆかぬこなし。

十左　ハア、この人も亂心と見ゆる。どうでもこの邊は、狂人の寄合ひ所と見える。ハテ、氣の毒千萬な。

ト困つた體。庄六、尻からげを下ろし、鉢卷の手拭を取つて、着物の塵を拂ひ、十左衞門が前へ出て

庄六　三木十左衞門さま、お久しう存じまする。

ト十左衞門、思ひ入れ。

十左　ムウ、身共が名を知つた其方は。

庄六　成る程、御存じない筈。あなた樣の舅御樣、石井兵衞さまの若黨、飯田由兵衞と申しまする者でございまする。

十左　ナニ、飯田由兵衞。すりや足達者の由兵衞か。

庄六　左樣でございまする。

十左　これはハヤ、珍らしい所で

ト庄六が振りを見て

對面いたすなア。

庄兵　下ざまの身でござりますれば、お見知りないも御尤も。拙者めは折々親旦那樣にお出會ひの節、お供先に於てお顏も見知り居りまするが、思ひがけなう御意得まして、この身の成果て、お恥かしう存じまする。

十左　なにサ〳〵、國元の騷動は、其方も存じの通り。彼の者を尋ねん爲、駿河府中の町へ罷り越したところ、サア、彼の所に於ても、これぞといふ手掛りもなく、もしや上方にてもあらうかと引返し、立歸る道すがら、存じ出したは其方の事。在所は詳しく存じたれど、何を云うても顏も知らず、名も變りあらんが、如何いたして尋ねんと思ふに、ハテ、よい所での對面。何はしかれ、息災で重疊々々。

庄六　あなた樣にも、御機嫌の體、斯樣な喜ばしい儀はござりませぬ。今更悔んで甲斐もない拙者の越度。いつぞや伊勢へ代參の折から、鳥羽の一揆の騷動を、お國へ知らせの早打で、出かし立てが却てその身の害となり、親旦那に御不興を受け、こりやマアなんたる因果と、身を悔むところに、思ひ掛けなく兵衞さまは、人手にかゝつて御最期と、聞いて恟り南無三寶、勘當御赦免の綱も切

れ果てたかと、モウ〳〵その時は、胴腹かツさばかうかと存じたれど、イヤ〳〵、後には御兄弟のお子様方もあれば、せめては敵討の御供と存じましても、御勘當のこの身なれば。

十左　男兵衛に成り變り、勘當を免してくれたいものなれど、なんぞ一つの功なきうちは。

庄六　脛骨達者ながらしくじつた、思へばこの脛めが、憎うて〳〵、腹が立つて、もう一生達者立てを致すまいと存じまするが、無性者ゆゑ埒明かず、ありや聾ぢやと士民まで疎むこの態。御勘當の免りませぬ事なら、早うくたばつてしまひたうござります。

十左　その悔みもさる事なれど、この十左衛が私しに、勘當を免しては、男兵衛どのゝ位牌へ對し、殊にこの頃大井川にて討たれたる、兵助への云ひ譯も、なにともハヤ。

庄六　すりや、噂の通り大井川で

十左　兵助は討たれたわやい。

ト庄六、いろ〳〵慌てるこなしあつて、ツカ〳〵と向うへ行かうとする。

十左　待て、由兵衛。そちや、どこへ行く。

庄六　大井川へ參つて、相手の川越しを引ツ捕へまして。

十左　大井川の一件は五日以前。

庄六　譬へ五日十日延るゝとも、脛に覺えの下郎が早道。

十左　サ、その術ゆゑに兵衛どのが勘當。無益の事に用ひては、いよ〳〵以て詫び致しくれる時節はないぞ。

庄六　なんと御意なされます。

十左　身共もその場に有合せながら、天運未だ至らず、取逃がしたる水右衛門、その行く先はいづくなりと、目當わからぬ闇夜の礫。時日は經ち行く、寶の詮議も日延も今明日、所詮寶も手に入るまい。さすればお家の一大事。萬に一つ寶の在所が知れても、行くて遙かに隔たり居れば、早速の時の早使ひ、勤めべき者は、其方ならであるまじき、大切の御用。サ、用に立つたならば、勘當免りるは身共が請合ひ。大事の足ぢや。いらざる事に心勞いたさぬがよいぞや。

庄六　何かは知らず、その用を勤めた上では。

十左　男兵衛になり變り、勘當免してくれる。

庄六　エヽ、忝ない。私しもちつと、御詮議の手筋について心當りもござりますれば、見苦しけれど私しめが住居へ、暫らくお入りなされませ。

十左　イヤ、功の立たざる其うちは、音信は致されまい。
庄六　成る程。して、お住居は。
十左　イヤモ、いづくとも定めぬ旅の道。
庄六　して、御勘當お免さるゝ
十左　時節も今宵は過されぬ…所の百姓。
庄六　旅がけのお侍ひ樣。
十左　萬事は後に。
庄六　御返事キツと
十左　相待ちやれ。
　ト合ひ方になり、庄六、こなしあつて元の所へ入る。此うち納戸口より、おくら立派になり、髪など綺麗にして出かけ、門の戸をソツと明け
くら　旦那樣、お久しう存じまする。
十左　旦那樣とは。
　トつく／＼見て
其方は、手廻りに遣ひ居つた、くらでないか。
くら　左樣でござりまする。
　ト又いろ／＼あつて
十左　誠に、くらぢや。最前は散ばら髪を致して、何かいから見苦しい體であつたに依つて、一向見外れて居つたが、ハヽア、さては其方が親里といふも。
くら　卽ちこの家でござります。マア／＼、お通り遊ばされて下さりませ。
十左　ヤレ／＼、珍らしい對面。然らば通るであらう。
　ト上の方へ通る。おくら、莨盆、茶など持つて行く。
十左衞門、落ちついた體にて
誠に其方が親元は、三河路とばかり、聞いて居つたが、この八つ橋であらうとは、夢にも存じなんだ。其方も無事で滿足々々。
くら　ハイ、旦那樣にも、マア／＼、御機嫌のよいお顏を拜しまして、此やうなお嬉しい事はござりませぬ。
十左　ナニサマ、廻りゆく月日に關守りもなし。暇を遣はしてより、はや八歲あまり。それより音信も絕え、其方は元より親の身では、さぞ怨んで居つたであらう。老人にも對面いたさう。サア、呼んで來やれ／＼。
くら　サア、父樣よりは、お逢はせ申さねばなりませぬ、お預かり申しましたる、あなたのお胤。
十左　誠に其方こと、この親里へ預けし砌り、首尾よく身二ツになり、男子出生と、その節の便りであつたが、成人いたしたであらうなア。併し、遠ざかる者は日々に疎

しとやら云うて、只今にては入夫などを取つて、夫婦の中の忰となし、養育いたすであらう。亭主の思惑も如何なれど、忰の顏をちよつと見て歸りたい。どれに居るぞ。

くら　お胴慾な事を仰しやつて下さります。例へお暇が出ましたとて、ま一度お目にかゝりませうと、樂しんで居りますものを、男を持つたとは、あんまりな仰しやりやう。

十左　ムウ。すりや男も持たず、身共への貞女を立て

くら　今に獨り寢を致して居りますわいなア。

ト十左衞門、思ひ入れ。

十左　それはハヤ、よう辛抱いたしたな。

くら　わたしよりはあなたが、現在血を分けた和子の事も、お忘れなされたでござりませう。

十左　ナニ忰が事も、其方が事も、忘れてよからうか。束の間も心にかゝつて案じて居る。

くら　イエ／＼、そりや僞はりでござります。あなたは飾間の御家老、お手廻りに仕ましたわたしは、素性賤しい百姓の娘。申すも詮ない事ながら、お屋敷に居りました時、慥か霜月廿三夜、お上には月待ちの賑ひ、お酌に立つたわたしをば、酒の機嫌のお座興か。初めの嘘が誠となり、ツイ築山の圍ひの間で……サア、怖いやら、嬉しいやら、奧樣の目顏を忍び、逢ふ瀨の數も度重なり、お情の胤を宿せしゆゑ、奧樣の手前、お上の聞えもあれば、暇を遣はす、親里へ歸つて養生して、首尾よう嬰兒を産んだらば、事を分けて迎へるであらうと仰しやりやう。飽かぬ別れも故郷へ歸り、父樣のお世話にて、どうやら斯うやら身二つにはなりながら、お知らせ申すも海山離れて、誠に佗びしい日影の身の上、世を喞ち身を恨み、憂き年月を泣き明し、思ひ明かして辛かりし、その數々はどのやうにござりませうぞ。それにあなたの今のお詞。お胴慾でござります／＼わいなア。

ト泣いて云ふ。十左衞門、こなしあつて

十左　その恨みは甚だ道理ぢやが、さう取つかけ／＼云うては、一向にハヤ返答に困り入る。何を云つても長の年月、音信をせなんだゆゑ、女心の一筋に、恨みるも理りなれど、よく物を思うても見やれ。身が胤を宿した其方、奧が腹に子とてはなく、男子出産あれば、行く／＼は國元へ呼び取り、奧にも話した上、後日に立てうと存じ居れば、なか／＼等閑に致す所存はないが、これとても町

家と違うて、武家と申すものは、不義密通の政道が第一。家中の淫らを制す可き身共が、却つて隠し妻を持つたなど、サア、些細な事も觸れ歩くは世界の有様。身共ぢやと云うて、木石でもなければ、不便を加へし其方が事。つれ〴〵なる小夜の寝覺めには、武士の口から云ふまじき事まで…サア、そりやハヤ、其方にも覺えがあらう。何を申すも、公務の御用繁く、心にはかゝりながら、便り致さなんだは此方が惡かつた。一應も再應も、恨むるは道理ながら、何もかも水にサラリと流してしまうて、機嫌よく致すがよい。ハテサテ、女と申すものは、淺慮なものでござるワ。

ト段々事を分けて云ふゆゑ、おくらも心の解けし思ひ入れにて

くら　これまでは、いろ〳〵にあなたを恨みましたなれど、今のでマア、わたしが心も解けたやうに思ひますわいなア。

十左　そんなら恨み述懐も、思ふ程云うてしまつたに依つて、其方も機嫌よう。悴にも逢はしてくれるか。

くら　ハイ〳〵、逢はせませいで、なんと致しませう。左様ならば、おこし遊ばした様子を、父様にも申しまして、坊を連れて參りませう。

十左　さうしやれ〳〵。

くら　ハイ〳〵。ドレ、連れて參りませう。

トいそ〳〵として、行かうとする。納戸より

又四　アイヤ、御子息市松さま、それへ連れまして、親御様へ對面させませう。

ト合ひ方になり、黒の着付に麻裃を着せ大小を着させた市松を、又四郎連れ出る。十左衛門又四郎を見て

十左　其方は。

又四　くらが親又四郎と申しまする者。コレ〳〵、和子、常づね戀しがつた、お父様はあなたぢや程に、行儀に畏まつて、御挨拶を早う。

ト市松、十左衛門が側へ行て畏まり

市松　さてはお前が、お父様でござりまするか。先づ以て御機嫌よく、恐悦に存じまする。

ト辭儀をする。十左衛門、こなしあつて

十左　天晴れ。ハテ、健氣な育ち。この程の養育、イヤモウ老人の心遣ひ。さこそ〳〵。始めて逢うた親に、惡びれも致さず、さてはお前が父様でござりますか、先づ以て御機嫌よく、恐悦に存じまするとは、ハテよく云やつた

六番目

なア。

くら　オヽ、出かしやつた〱。父樣、坊が出かしやつたわいなア。

又四　イヤ、十左衞門さま、娘くらをお家へ御奉公に出しまして、一度はお國元へも參る筈ではござりますれど、貧しい身を顧みまして、あれが肩身が狹からうと‥‥何は兎もあれ、思ひがけなう、この在所へお立寄りなされたと云ふに、見受けますれは、御家來も見えず、お一人でお越しなされたは、定めて樣子のありさうな事と存じられます。

十左　不審は尤も。この度、身共が國元を出でしは、身が舅、石井兵衞を討つて立退いた、敵の詮議。

又四　エヽ。

十左　ア、イヤ、必らず共に、他言は無用。

ト又四郎こなし。

又四　成る程、敵討とござりますれば、武家に於ては大切の御用。マそれはそれよ。藁の上からお預かり申した市松さま、腹こそ賤しけれど、胤はと云へばあなたの御子息、天晴れ武士に仕立てにやならぬ大事の逸物。それなりやこそ、和子さま〱と云うて尊敬するも、あなた樣を敬ふ心。手習ひも、學問も、相應に敎へ込んだ上、幸ひと好い劍術のお師匠を頼んで、エイヤツトウも仕込んでイヤ、血脈は爭はれぬ。第一、好きなり、器用なり、こんな少さい形して、大人でもやツつけかねぬ、天晴れの上達。イヤモウ、こればかりは、キツと自慢せにやなりませぬ。

十左　イヤモウ、老人の心配りの程、誠に平生の養育と見えて、眼の中淸しく、行儀正しう、シヤンと畏まつた所は、天晴れ育て柄。自慢しやれ〱。オヽ、出かす出かす。

ト市松をあふぎ立てる。又四郎おくら、餘念なく喜ぶこなし。所へ納戸より百姓三人、爼板擂鉢德利を、めいめい持ち出て

百一　親仁どの〱、鱠も味噌も、ようござるぞや。

百二　サア〱、臺所へごんせぬかいなう。

ト口々にやかましう云ふ。又四郎。十左衞門に氣兼れのこなし。

又四　エヽ、機轉の利かぬ。臺所をお目にかけるといふ事があるものかい。御馳走が薄うなるわい。

百三　でも、肝心の物が、この通りぢや。

ト徳利を振つて見せる。

又四　サア〳〵、それも海道の銘酒を取りにやつて下され。サア、娘も爰へ來て、手傳へ〳〵。

くら　アイ〳〵、合點でござりまする。

百一　おれは仕掛けた吸ひ物。

百二　おれには合つた、大根の丸剝きと出かけよう。

百三　この鯛は、おれが洗ふワ。

ト又四郎、百姓一の持つてゐた擂鉢を引取つて

又四　ドレ〳〵、此方へおこしやれ。味噌はおれが擂つてやろ。コリヤ、娘、持つてくれ。擂鉢が逃げ歩いてどうもならぬ。

くら　エ、なんのこつちやいな。此方へおこさんせ。

ト擂粉木を持ち、擂る。

百一　牛蒡も蕗もよいワ。

ト擂鉢へ打込む。

百一　大根も剝いた〳〵。

百二　めで鯛を洗つた。

ト皆々擂鉢へ打込む。おくら、知らずに、滅多に擂つて居る。

又四　ア、、コリヤ〳〵。

ト擂鉢を抱へ、をかしき身振り。おくら、擂粉木を持つて、十左衞門と顏見合せ

皆々　ハ、、、、。

ト笑ふ。

十左　ア、、イヤ、何かと心遣ひの體。身共への饗應ならば、無用にしやれ〳〵。

又四　でも、初めての御入來。何はなくとも鱠、燒き物。イヤ、次手ながら申し上げまする。この和郞達も、兵法の弟子になつて、和子さまとは弟子朋輩、みな爰へ來てお近づきにならしやれ〳〵。

百一　イヤ、お客人樣へ申し上げまする。私し共も、この在所の百姓ども。

百三　なんぞの便りにならうと、行つて見る居合ひ稽古。

百二　御子息樣とは弟子朋輩。この後は

三人　お見知りなされて下さりませ。

十左　これは〳〵、農業の外に、武藝の嗜なみとは、面白い心掛け。以後は別懇に存ずるでござらう。時に、悴にも改めて對面いたさう。

ト又四郎、市松を前へ連れ出る。十左衞門見て

十左　ハテ、立派な。お侍ひ樣なれば、ドレ〳〵、お侍ひ

の嗜なむ、腰の物を拜見仕らうか。
市松　ハツ。
ト大小を取り、十左衞門が前へ持つて行く。又四郎、
嬉しさうなこなし。
十左　お道具拜見。
ト仔細らしく云うて、刀を取り、ちよつと見て
ハテ、天晴れ丈夫造りぢやよな。
ト刀を下に置き
次に差添を拜見いたさう。
ト取上げ、拵らへを見て、不思議なるこなし。
ムウ、刀にはそぐはぬ拵らへ。鐵に赤銅の緣頭。ハテ
ト思ひ入れあつて、拔き放し、とつくり見て
鍔際より切尖下がりに刄金薄く、はゞき元には鐵のどう
刄を以て、しとゝめに入れしは、遠州鍛冶が好みの鍛え。
聊か花麗を延べず、利方を以て重とするは、當時東國に
於て專ら用ゆるところ。
ト思ひ入れあつて
して、この差添は。
又四　即ちそれは、和子樣のお師匠樣から、預かつた一腰
御親子初めての見參に取合せ、菖蒲刀も天晴れ似合うた
武士の差添。エ、、コレ、まちつと大きくばなア、只今
仰しやつた敵討のお供、御一緒にお越しなされうもの
を、こればつかりは、殘念に存じまする。
十左　ハ、、、。譯もない。敵に出合ふ時は、仕負ふせ
るか、運盡きて討たるゝか、萬が一の互ひの運命。それ
ゆゑ國元の暇を乞ひ受け、發足せしは、某一人。家來な
ども足手纏ひ。まして忰など召連れては、此方に六分の
弱味。併し、幼少なる忰に、劍術を敎へたとは、なかな
か一興。して、師導たるお侍ひの、家名は何と。
又四　ハイ、東國方の御浪人、樣子あつて私し方に御逗留
即ちお名は、黑川源藏さま。
十左　ムウ。黑川源藏。して、在宿なるか。
又四　イヤ、一兩日は御他行。今晚は是非お歸りでござり
ませう。
ト十左衞門、思ひ入れあつて
ムウ、歸宅あらば對面いたし、忰に劍術の指南、何か一
禮も申すであらう。先づ差當つて忰が劍術の稽古、太刀
捌きなど一見せうか。
又四　イヤ、仰しやらいでも、お目にかけたうてならん。
幸ひ相手は朋輩の門弟衆。

百三　おいらが相手になりませう。
又四　サア〳〵、大事の晴れ業。出かしたと譽められねばなりませんぞや。
十左　ドリヤ、これにて見物いたさうか。
　ト誂らへの合ひ方になり、十左衛門、上の方に見物する。又四郎、おくら、兩人して市松に股立ちを取らせ絹の襷をかけさせ、いろ〳〵あり、三人も用意しかじかあつて
百二　先づ〳〵、私しから參らう。
市松　小父樣、組んで參らうか。別れて參らうか。
十左　オヽ、透さゞる聲の掛けやう。サア〳〵、勝負。
百二。サア。
市松　サア。
兩人　サア。
　ト早き合ひ方になり、市松、百姓二と竹刀を持つて向ひ合ふ。又四郎、片唾を呑み力んで見て居る。おくらもこなし、いろ〳〵ある。十左衛門、眞のみながら見て
十左　ハテ、鋭どい構へ。劍を後に仕掛けを待つは、右劍來るか、左劍に來るか、手錬した者が教へたと見えるわい。
　ト市松「ヤツ」と打ちかゝる。百姓二、身を背けるを、直ぐに付け入つて打つ。百姓一入れ替る。
　ムウ、肱を落して斜に構へ、青眼の受け太刀は、ハテ、よく教へ込んだな。
　ト市松、立廻つて、百姓一が竹刀を打ち落す。
又四　オツと見えたぞ。勝ぢや〳〵。
十左　弱味を見て付け入る氣持ちの勝。天晴れ〳〵。
百三　油斷を見濟まし、騙し討ち。
　ト打ちかける。後へ開き、飛び違ふを、よろしく見得になり。
又四　ドツコイ、止つたぞ〳〵。
　ト市松拂ふ。百姓一、ツカ〳〵と出で
百一　折りに觸れては、多勢を相手に。
　トかゝるを、竹刀を拂ふ。よろしく立廻つて、三方へ別れ、ヤアと見得になる。
十左　ムウ、八相無明の打込み。畢竟竹刀なればこそ。眞劍ならば兩人は梨子割り。オヽ、怖やの〳〵。
百一　ヤツ。
　ト百姓一打ちかゝるを、よろしく拂ふ。

十左　ムウ、表に拂ふは大極の劍。
　ト百姓二かゝろ、竹刀を跳ねる。
跳ね上げるは無極の劍。
　ト百姓三かゝる。竹刀を落す。市松、直ぐに竹刀の先にて、百姓三が脾腹を突く。タヂ／＼となる。
六波の切尖。
　ト百姓二かゝるを、竹刀を突き付け、した／＼と付いて行く。
ムウ。引劍に添うて來るは、鳥羽流のそくい付け。
　ト百姓二、三、一時に打ち込むを、一時に竹刀を打ち落す。
オツト、勝負は見えた。勝ぢや／＼。
　ト直面目になつて三人扣へる。
くら　オヽ、出かしやつた／＼。申し、坊が出かしましてございまする。
　ト又四郎無性に喜ぶ。十左衞門、こなしあつて
十左　ムウ。ハテ心得ぬ。廣く諸流に亙り、利方を以て一流を立つる…正しくこの流義こそ、我が尋ぬる一光流ムウ、この流義を敎へ込みし師導といひ、一見せし刃物の拵らへ。思ひ當れげ、
　トよろしく、思案のこなし。
又四　なんと、和子樣の小腕の働らき、お心に入りましたかな。
十左　ナニサマ、見所のある流儀。併し今一應、竹刀の勝負を、某が立合うてくれう。
又四　ハテ、お望みならば、相手は嫌はね。和子樣の劍術親御さまでも容赦はないぞ。
　ト十左衞門立つて、竹刀を持ち
十左　竹刀の小さいは子供だけ。身共は長劍。イザ
市松　イザ
十左　イザ
　ト市松「ヤツ」と云ふて付け合す。ト左衞門、立廻りあつて、いろ／＼試みる思ひ入れ。竹刀を打ち落し、打ち据ゑる。又四郎、おくら、恟りして、これはト支へるを、突き退け、散々に打ち据ゑる。
くら　こりやマア、何事でござりまするぞいなア。
又四　モシ、劍術の法かは存じませねど、高が足弱の立合ひ。なぜあのやうに打たつしやりました。いとほしさうに、骨さへ固まらん者を、今のやうに。ナ、なんで叩かしやりました。

十左　イヤモウ、斯様な役に立たずは、生きても死んでも苦しうない。劍術を仕込んだなぞと、一向にハヤ惡あがき同然。氏より育ちと、土百姓の中に育つた奴。せめて師匠でも取る事か、鈍刀流の歪みを知つて、生兵法が程の事で、武士の交はりがならうと思ふか。イヤハヤ、土民百姓ばらを弟子に取つて、その日を送る、放下師の居合ひ同然。

ト三人を尻目にかけて

ハ、、、、底の知れたる生兵法、似合うたやうに鋤鍬を敎へ、土ほぜりに仕立て上げい。親子の緣もこれ限り。親でないぞ、忰でないぞ。

トきつと云うて、竹刀を置き、下に居る。

又四　娘。

くら　父さん。

又四　あんまり呆れて、物が云はれぬわい。

ト此うち百姓三人とも、しらけた體にて

百一　なんと皆の衆、行かうぢやないか。

百二　行かう／＼。シタガ、コレ先生が居られたら

百三　それ／＼、あの口はきかすまいもの。

百一　ハテ、えいわい……ヤ、お客

三人　これにござりませ。

ト皆々向うへ入る。あと合ひ方になり、又四郎、十左衞門の側へ寄り

又四　旦那様、イヤ十左衞門どの。今のはなんぢや、十歳にも足らぬ小腕で、あの位にはようやるワ。偉い者ぢや、けうとい者ぢや。土ほぜりは云はいでも知れてある。如何にも土ほぜりぢやけれど、おれも若い時分は、ちつとの間、侍ひの米も食つた、帶刀もした又四郎、只の土ほぜりぢやと思はしやつたら、當てが違ふ。なんぢややら、滅多くたに、年端もゆかぬ、脊丈もない躰を、あのやうに打ち据ゑて、なんぼこなた様の子ぢやてゝ、一人して出來ますか。相棒が娘なら、おれが爲にも孫でえす。エヽ、こりやなんぢやな。彼奴が在所へ戻つてから外に惡性をしよまいと思うて、こなた様への心中で、體も構はず、髮も結はず、お國に居た時より、いかう器量が下がつたに依つて、それでなんと理窟を付けて、緣切つてしまふ心ぢやな。尤も娘を在所へ預かつた時は、廿兩と云ふ金を付けて、產後の養生、子の養育を賴むとの事。間もなう產んだは玉のやうなる男の子。ヤレ嬉しやと、養ひ育てる其うちにも、預かり置いた金は、コレ

コレ　ト金を納戸より取つて來て
見やしやれ。煤けてはあつても、こなたの封印。どんな切ない事があつても、ほんに手もさゝず、間には娘が氣の毒がつて、遣つてくれと云ふけれど、イヤ〳〵、大事のこの和子、男に生れりや七人の敵、幼ないとて金のいる事があるまいものぢやないと、いらん瘦せ顔をはるのも、國より迎ひの來た時、娘が肩身をすぼませまいと思うて、それぱつかりを樂しみに、切ない中を辛抱して、國の便りを待つ程に、八年といふもの便りは愚か、狀一本おこさず、投げやり三寶にして置いて、たま〳〵來りや、アタ我まゝな。よい〳〵、望みの通り、親子でない。緣切つた。他人ぢやぞ。

　ト膝を叩き、齒ぎしみして云ふ。

くら　申し、この子に何の仕落ち、なに過ちがあつて、其やうに酷う遊ばす。あなたでもお父樣ぢやと思へばこそ焦れ慕うて居るものを、敵同士かなんぞのやうに、あんまりなされやう。今のやうに打ち擲き、もしもの事があつた時には、どうせうと思し召すぞいなア。

十左　ハ、、、、。只今老人の腹立ちと云ひ、緣はハヤ切れてあるわい。

くら　なんのマア、父樣も、その心ではござりませぬけれど。

又四　娘、云ふな。何を愚闇々々と云ふ事があろぞい。無法な者と緣切つて、土ほぜりの育て柄の、よいか惡いか、天晴れの侍ひに仕立てあげて見せる。ア、、慮外ながら捨てる神あれば拾ふ神あると、あのお師匠が時折にふれては、われを女房にくれんかと云はるゝ。餘所事に聞いて居たが、今で思や物怪の幸ひ。牛を馬に乘りかへると思や、案じる事もない。娘、泣くな。和子も泣かしやんな。なんのこれが。

　ト泣かうとして、十左衞門を見て、澁面を作る。

緣切つたからは、とつとゝ去んでもらひませうぞ。

　ト力んで云ふ。この時向うより中間、菅笠を持ち出て

中間　ヤレ〳〵、いかう草臥れた。イヤ、宿にござろか。旦那のお歸りでござる。

　ト大きな聲で云ふを、又四郎、打ち消し、十左衞門を敎へ、門口へ出て小聲になる。

又四　歸らしやつたか。

中間　聞かつしやれ。川留めに逢うて、存じの外隙がいつ

た。旦那のお駕籠は。
又四　裏の切り戸から、いつもの二階へ。
中間　左樣なら、駕籠は裏へ廻しませう。ヤレ〳〵、草臥れたぞ。
ト元の所へ入る。又四郎、内へ入り
又四　顏見るも胸が惡い。キリ〳〵去んでもらひませうぞ。
くら　コレ、父樣、其やうに云はずと、ならう事なら、どうぞマア、お前も思ひ直して。
又四　ハテ、何をくど〳〵。百萬だら云うたとて、聞分けのない顏付き。あつたら口に風引かすやうなものぢや。コレ、この金も、こなたから來た廾兩。そんな金はいらん。戻したぞや。
ト投げつける。
くら　とは云ふものゝ、どうぞマア。
又四　ハテサテ、役にも立たぬ事を愚圖々々と、思ひ切つて娘、和子樣連れて、奧へ來やれ。
ト唄になり、おくらこなしあり、又四郎叱り付け、市松を連れ、納戸口へ入る。後に十左右衞門、思案のこなしにて、右の金を見て、感心のこなしにて納め、また最前の一腰を取つて
十左　老人が預かりし一腰。遠州鍛冶が好みといひ、数へ込みし只今の流儀は。
ト思案のこなし。
浪人の名は黑川源藏。もしや水右衞門……サ、水の流れと人の行くへ。敵の在所、寶の詮議、一つに得べき思案が、ありさうなものぢやが。
ト兩手を組み、工夫のこなし。時の鐘鳴る。いろ〳〵こなしあつて
最早初更。思へば今日は、横死めされし舅どの、月は變れど卽ち逮夜。殊更不便は石井兵助。これとても敢へなき横死。佛事供養も世につれて、所存に任せず。心ばかりの、せめての手向け。ソレ。
ト合ひ方變る。十左衞門、行燈を取つて出て、手向けのこなし。此うち二階の障子一面に引くと、水右衞門長髮に好みの齊付け、前帶にて、他所より駕籠に乗り歸りし體。下女、水右衞門の大小を刀掛けへ直し、莨盆など持ち行き、しか〳〵あつて
下女　この間は、よい氣晴らしでござりましたなア。
水右　イヤモウ、氣晴らしやら、苦勞やら、駕籠ばかりも

窮屈な事ではない。ヤレ〳〵、疲れた事ぢや。

ト欠伸をしたり、いろ〳〵ある。

下女　申し、御膳をあげませう。

水右　イヤ〳〵、歸りに酒屋へ寄つて、下郎めにも鱈腹食はせ、身も二ツ三ツ過して參つた。なか〳〵空腹にはないてや。

下女　左樣ならば、風呂へ。

水右　イヤ〳〵、風呂も望みにはない。ナニ、又四郎はどれに居る。

下女　お聞きなされ。先程丁度あなたのやうな、お侍ひ樣がお出でなされて。

水右　ナニ、侍ひが參つた。

下女　なんぢややら、上を下へと返して、御馳走でござりましたが、俄に旦那樣の御機嫌が損ねて、急に去なすのぢやさうにござります。

水右　そりや、去なしたがよからう。忰に劍術を敎へてくれいと、身共を泊め置いて、又ぞろや侍ひたる者を呼び入れると云ふは、第一身共への無禮、そりや去なしたがよからう。さう云やれ〳〵。

下女　畏まりました。

水右　ヤレ〳〵、殊の外疲れた。その枕を取つてくりやれ。

下女　ハイ、お枕も上げませうが、今日本屋が參りまして、先日の本を置いて歸りました。これを御覽じませ。

水右　ナニ、本屋が參つた。ドレ〳〵。

ト本を取上げ見て

水右　又まくら繪か。久しいものだ。

ト小口を二三枚見て・こなしあつて

水右　なんと、くらが返事したか。

下女　アイ。

水右　とは吉左右、どうぢや〳〵。

下女　イヽエ、矢ツ張り請けが惡いわいなア。わたしがどうぞしてと、いろ〳〵素引くけれど、石部金吉金兜ぢやわいなア。

水右　どうぞ致したら、手に入りさうなものぢやが。

ト云ひ〳〵本の方を見て餘念なき體。下女、こなしあつて

下女　申し、お前樣、お淋しうはないかえ。

水右　淋しいと云つて、くらが得心せねば。

下女　いつそ乗り替へ、わたしとはどうぢやえ。

ト水右衞門、下女の顏を見て

水右　ハテ、厚かましい。

　ト本を見て

下女　文句を書き居つたな。

水右　お枕を上げませう。

下女　それに置いて、あつちへ行け／＼。

下女　ハイ。ア、今夜も獨り寢をせうか。

　ト上の方へ入る。この間に十左衞門、行燈を取つて來て、灯を掻き立て、戒名を二つ出して、行燈に貼り、釣り手桶の柄杓にて水を掬ひて、杜若の葉を取り、元の所へ來て、右の戒名に水を手向けるこなし。水右衞門は寢ばら這うたり、いろ／＼ある

十左　劍樹院眞榮大居士、刀鑑劍鋭居士、場所と月日は替れども、親子諸とも劍難、魂魄の御無念も、さぞかしと思ひやられて。

　ト泪を含むこなし。

　追ツつけ敵を討ちおほせ、修羅の妄執を某が、晴らさせませうぞや。

　トこなしあつて懐中より香包みを出し

　國元を出でし砌り、詮議の綱にもと、御主人より拜領のこの名香。香花供養は疎かなれども、心の香りは知る人ぞ知る、伽羅の一焚き。

　ト火入れを取つて香を炷く、仕掛けにて煙立つ。十左衞門、合掌して

十左　生死頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々。

　ト小凄き合ひ方になり、二階の水右衞門、フト香をききとりしこなしにて、ムツクと起き、キツと思ひ入れある。向うより關助、黑股引、草鞋の形、三度笠を持ち、ツカ／＼と出て、同じく香をきく。柴垣見越しの屋體におくら、窺うて居る。各々キツとなつて

水右　ムウ。この家に異香燻ずるは。

關助　目差すも知らぬこの闇に、在所にそぐはぬこの香氣。

くら　誰が炷き捨てか知らねども、その名床しきこの薫りは。

　ト三方にて思ひ入れある。十左衞門居直り

十左　この一木を、連理木と名けしその由來は、小田信長武將宣下の功によつて、東大寺の香を拜領あり、その例に任せ、その後大領久吉公、南天竺の伽羅木を以て、觀世音の像を時の佛師に作らせらる。然るに佛師、誠の名香を試みんと、伽羅の木屑をくゆらせ見るに、煙自然と尊像の方へ、靡き從ふ心を以て、連理の名香と名け、殘

れろ伽羅を久吉公、常に御秘藏あり

水右　連理の香は播州飾間の家へ讓られ、伽羅木の尊像は、濱松の先祖淺山家に傳はつて、我が手に入れた彼の尊像。

關助　御主人兵衞さまの御最期、若旦那といひ、聞く度々に、無念さまさる敵の行くへ。やう／＼十左衞門さまに巡り合ひ、お願ひ申して下郎が忠義。

くら　夫婦の緣を切る時は、印に伽羅を送るといへば、繫がる緣を斷ち切つて、手の裏返すお腹立ち、最前の體裁といひ、もしやあの子のお師匠樣が、その敵とやらではあるまいか。

十左　討つに討たれぬ四海の盜賊、詮議の爲と御主人より、餞別ありし伽羅の一本。

ト香爐に目を付け、キッとなり

ハテ心得ぬ。直ぐに立つべき名香の、煙は逆に、アレアレ／＼

ト二階へ目を付ける。

水右　その名香の香も變らず、燦爛として薫ずるは

關助　立場で聞いた駕籠の噂は、慥かにこの家。

くら　心にかゝる伽羅の一炷き。

十左　目差す詮議の割符も合うて

水右　油斷は大敵、この身の大事。

關助　心憎きは葛家の名香。

くら　善とも惡とも

十左　詮議の糸口。

水右　思へば不思議。

關助　稀代な有樣。

くら　樣子知らねど

十左　稀代の珍事を

四人　見る事ぢやよなア。

ト各々こなしあり、合ひ方やむ。關助、ツカ／＼と舞臺へ來て、おくら十左衞門と顏見合せ、障子〆め切る。この見得、途端に水右衞門、茶碗の水をこぼして煙を留める。十左衞門見上げる。關助、戸口を明け、十左衞門と顏見合せ、この途端に三方一時にて

四人　ハテナア。

ト思ひ入れ。後の合ひ方になり、水右衞門、思案すると、關助、スッと入る。

關助　十左衞門さま。

十左　關助、只今參つたか。

關助　ハツ、御意に任せて大井川を横切り、海道筋の裏手

裏手を尋ねますれども、これぞと申す手掛りの端も。

ト二階へこなしあつて

殘念なは若旦那兵助さま、お久し振りにてお目にかゝらうと存じの外、大井川にて敢へなき御最期、その砌り、お供に付きし中野藤兵衞にも、申し譯の爲に切腹。

十左　兵助が追ひ腹切りし中野藤兵衞は、天晴れな忠臣。惜しき家來ぢやよな。

關助　サア、その折柄不思議にも、あなた樣のお目にかゝり、若旦那を手にかけしも、察するところ水右衞門が仕業ならん、風を喰はぬ其うちにと、御意に隨ひ尋ぬるところ、海道筋の立場にて、駕籠舁きの噂、三十ばかりの浪人を、この八ツ橋村へ送つたと云ふ、此奴胡亂と存ずるから、附け込んで參つたところ、十左衞門さまにもこの家に。

トこなしあつて

なんぞ手掛りばしござりまするかな。

ト此うち十左衞門、思案の體。水右衞門も、さま〲思案を極め、逃げ支度して、守り袋を取出し、これさへあれば命に氣遣ひない、と云ふこなしにて、また首に掛け、脇より荷行李を出し、旅立ちの用意する。下に

十左衞門、こなしあつて

十左　兵助相果てし上は、親兄の敵討つべきものは、身が女房岡野、半次郎ばかり。其方も最期を遂げし藤兵衞に賴まれし鬱憤を。して、兩人が隱れ家、存じて居るか。

關助　アイヤ、岡野さま半次郎さまの儀は。

十左　知るまい〳〵。殊に相手は四海の科人、例へこの場に居るにもせよ、私しの勝負は叶ふまい。

關助　すりや、敵討は叶はぬとな……ホイ。

十左　併し、寶を無事に取返し、盜賊の名を削るならば、討つべき時節がないとも云はぬ。コリヤ、岡野半次郎も、身共が知るべに預けてある。

關助　エヽ、忝ない。まだしもの安堵。然らば直ぐにあなた樣のお供を致し、夜のうちにぽツ付いて。サ、お立ち遊ばされませう。

ト十左衞門、二階へこなしあつて

十左　一色一香。いま一炷きは兵助が追善。

トまた火入れへ香を注す、仕掛けにて煙立ち、納戸口よりおくら出掛ける。始終合ひ方。

關助　これは悠長な穿鑿。

ト困つたこなし。

くら　心がゝりな香の空炷き。

ト柄杓の水を掛けようとするを、十左衞門、おくらを上へ引廻し

十左　いらざる差配、扣へて居らう。

關助　して、その女中は。

十左　身共が胤を懷胎せし、以前の腰元。

關助　ハテナア。

ト思ひ入れ。

くら　申し、伽羅を送れば緣が切れると世の諺。二世の緣もこれまでと、果敢なき香の一炷きは、眞實緣を切るとのお心か。わたしは兎もあれ、あの子ばかりは、可愛くはござりませぬか。エヽ、お胴慾でござりますわいなア。

と泣き／＼云ふ。關助、氣の急くこなし。

關助　暫しの後れは暫しの不孝。サヽ、お立ちなされませう。いかう心急きに存じられまする。

トあせる體。此うち水右衞門、とつくりと身拵らへして、二階の納戸口へ、ソロ／＼行かうとする。十左衞門、香の煙に眼を附けて

十左　コリヤ、其方は何れへ行く。

關助　ハテ、隱れ家へお供申して、半次郎さまにお目にかかります。

十左　そりや成るまい。

關助　なぜ成りませぬ。

十左　イサヽ、斯くあらんと察せしゆゑ、裏道には多勢を以て圍ませ置き、道の通路を塞ぎ置けば、なか／＼この家を立退く事は叶ふまい。

ト水右衞門、後へ戻る。おくら、こなしあつて

くら　ハイ、もう立退かずと、思ひ直して、どうぞお止まりなされて下さりませいなア。

關助　ハテサテ、さう隙取る場所ではない。サア、お立ちなされえ。

ト此うち水右衞門、思案して、下手の松を傳ひ、下りようとする。十左衞門、煙を見て

十左　イヤサ、いづくへ行く。

くら　イエ、どつこへも。

十左　ハテ、卑怯な奴の。例へその身に翼あつて飛ばんとするとも、身が眼力に睨んだれば、一寸も動かさぬぞ。

ト水右衞門、松の枝へ足を掛ける。

松が枝を傳へ下りんと致さば、かねて鍛へし八方劍、兩足ともに木の空へ縫ひ付けうか。

ト水右衞門、ギヨツとして足を引く。

くら　ハヽヽヽ。それがよい〳〵。いか程に跪いても、その座は立たさぬ。茲な慌て者めが。

關助　そりやマア何を

くら　御意なされまするな。

關助　ト水右衞門、守を出す。さてはこれゆゑぢやと云ふこなしにて、尊像を出し、疊へ打ちつけ、ムウ。と齒ぎしみして、ドツサリと下に居ると、一度に障子さす。關助、おくら、合點のゆかぬこなし。

兩人　なんの事ぢや。

ト十左衞門、スツと立つて

十左　敵の隱れ家、寶の在所は。ハテ、時來つたよなア。

トよろしくある。

關助　ナニ、敵の隱れ家。

くら　寶の在所。

關倉　時來つたとな。

十左　外でもない、この家の內。

關助　なんと。

くら　そんなら二階の

十左　黑川源藏とは假の名、本名は赤堀水右衞門。

くら　エヽ。

關助　さてこそこの家。

ト二階を目掛け、行かうとする。

十左　コリヤ待て。

關助　なぜお止めなされます。

十左　最前も申す通り、四海にかゝる寶の詮議の、日延べは二百日の日限りも、はや二日と迫る今月今日、一旦繩掛け、國元へ引いた上で、願ひを立てゝ日頃の本望。

關助　大事の囚人、少しも早く、遊ばせ〳〵。

ト十左衞門、下げ緒を取り、繩捌きして行かうとするを、おくら留めて

くら　一旦父樣が隱まはしやんした御浪人。マア、父樣にもお逢ひなされたその上で。

十左　猶豫はならぬ。そこ退け。

くら　そこをどうぞ。

十左　面倒な。

トおくらを向うへ踏みやる。また留めるを關助、引廻し支へる。十左衞門、駈け込まうとするを、納戸の內より

又四　待つた、何れも。赤堀水右衞門、それへ參つて對面

いたさう。

ト合ひ方になり、又四郎、水右衞門の着物を着て、市松を連れ出る。

くら　ヤア、父樣、その姿は。

又四　十左衞門さま。思ひも依らぬ敵の本名。その敵といふは、和子の爲には大事のお師匠。師弟のよしみを思ひ、それでどうぞ、この場はコレ。

ト市松を十左衞門に突きやる。

關助　イヽヤ、四海の囚人、ちよつとの間も猶豫はならぬ。三寸繩に縛り上げ、本國へお引きなされい。

又四　水右衞門を荒立て、彼の寶に凶事でもあらば、お國は斷絕。

關助　なんと。

又四　とサア、十左衞門さまの今のお詞。それぢやによつて、盜賊の水右衞門は斯くの通り。

ト最前市松の差した脇差にて腹切る。竹笛の合ひ方になる。

くら　ヤア、父樣、こりやひよんな事して下さんしたなア。

市松　爺樣、なんで死なしやるぞいなう。

又四　オヽ、死なで叶はぬこの場の成行き。元あの水右衞門どのゝ親御、濱田松軒さまは、この三州八ツ橋村の地頭職。百姓のうち、お見出しに與かつたこの又四郎。その後朋輩の讒言にあひ、御浪人なさるゝまで、大恩の御主人。その子息、水右衞門どのなりや、お主の片割れ。敵持ちとは露知らず、一旦この家に隱まうて、見殺しにしたその時は、義理もなく忠義もなし、とあつてこれを付け狙ふ、人といふは娘が御主人。どちらをどうとも分けかねて、この皺腹の云ひ譯。水右衞門どのゝ一命と、お家お國の納まりを、事なくしたいコレこの品。

ト守り袋の尊像を出す。十左衞門取つて、香の煙に引合せ

十左　紛れもなき伽羅の尊像。これで連理と揃ひし上は、濱松飾間兩家の安堵。

又四　エヽ、忝ない。

ト苦しきこなし、おくら、取付いて泣く。

關助　イヤ、十左衞門さま、憚りながら、そりや御料簡が違うたかと存じます。

十左　何が違つた。

關助　されぱサ。寶の詮議の日限りは一百日、その日延べの願ひも、はや一日に迫つた最前のお詞。海山隔てし本國

の道程、寶を持參の其うちに、日延べは切れてお家は大變。水右衞門は取逃がし、一も取らず二も取らず、これまでの心盡しも、千荷の漆繪、蟹の足、千日の茅、一日の晉へ。

庄六　ハツ。

十左　氣遣ひ致すな。斯くいふ事もあらんかと、拘へ置いたる達者の若者。飯田由兵衞、參れ。

ト此うち庄六、出かけ居て、この時ズツと入る。

不時の御用もあらんかと、疾よりこれに扣へ居りまする。

關助　ムウ。飯田由兵衞。

庄六　關助、互ひに無事で、先づは重疊。

十左　コリヤ、其方が汚名を淸むる時節。男に代つて勘當ゆるした。

庄六　ナニ、お勘當を。エ、、忝ない。

十左　歸參の功に寶を守護し、本國播磨へ早使ひ、相勤むべき心覺えは。

庄六　この胫骨の續かんだけ、命限り根かぎり、火急のお使ひ仕負ふせませう。日延べの願ひも、はや二日。

十左　今日もはや夜陰に及べば、二日といへど、たつた一日。

庄六　一晝夜をかけて走つたら、いつかな外れぬ使ひの刻限。シタガ、もう何時。

ト空を見る。七ツの鐘鳴る。

關助　ありやもう七ツ。

十左　十二時の刻限りに。

庄六　一時八里は、して來いまかせ。

十左　出かした。早う。

ト尊像を渡し、最前の金を出し

ソレ。

ト金を抛つてやる。庄六、取上げて

庄六　然らば此まゝ。

關助　急げ〳〵。

庄六　合點ぢや。

ト金と尊像を持ち、一散に向うへ走り入る。

關助　して、水右衞門は。

十左　どう思うても助けられぬ。くら申し、それでは。

關助　目ざす敵は、あの二階。

ト行かうとする。十左衞門、引廻して行燈を吹き消す。

二人　これは。

十左　五月雨の雲隱れ、闇は綾なし、この間に。
ト二階へかけて
イヤサ、この隙に、必らず取逃がすな。
ト關助に云ふ。關助・柄に手を掛け窺ふ。此うち納戸より水右衞門、探り出る。關助に行き當り、兩人立廻り。十左衞門もかゝる。皆々暗闇のこなしよろしくあつて、水右衞門・頰かむりして二人を摺りぬけ、向うへ行きかける。おくら、よき時分手燭を差出す。
十左　南無三、取逃がした。
又四　エ、忝ない。
ト拜み、バッタリ死ぬる。關助、向うを見て
關助　ヤア、あれは。
トきつとなるを、十左衞門
十左　コリヤ。
ト引廻す。水右衞門
水右　エイ。
ト手裏劍を打つ。十左衞門、請け止め、直ぐに打ち返す。水右衞門が足へ立つ。關助、キッとなるを、十左衞門制する。水右衞門、手裏劍を拔き、向うへツイと入る。よろしく

大詰　幕

龜山仇討の場

役名――斯波左京之進。庄六實ハ飯田由兵衞。奴、關助。十左衞門妻、岡野。石井半次郎。赤堀水右衞門。三木十左衞門。

造り物、東海道間の宿、町續き。商ひ見世などいろいろあつて、殘らず店を閉し、夜の體。時の鐘にて幕明く。
ト蛙の聲、忍び三重。矢張り時の鐘、靜かに打つて居る。すべて夜中。物靜かなる體にて、向うより水右衞門、前幕の形にて頰かむりして、少し足の痛むこなし。跛を引きながら、氣の急く心にて、ツカ〳〵と出る。花道中程まで來る時、戸屋口より關助、前幕の形にて、龕燈提灯を持ち、水右衞門が足の疵の血汐、道に滴たりあるに眼を附け、窺ひ出る。水右衞門立ちどまる。關助も立ちどまる。水右衞門、ホッと息をつき、

本鐘臺の方へ來る。關助、附けて來て摺り違ひ、橋がかりの方に身を寄せ、窺ふ。始終時の鐘、蛙の聲、忍び三重、水右衞門こなしあつて

水右　ありや野寺の捨て鐘。まだ七ツ過ぎでもあらうか。池鯉鮒より最早二里ばかりも來たであらうか。

ト足の痛むこなしあつて

慥かに十左衞門が打つた手裏劍、かすり疵と思ひの外、駈けて來た加減か、餘程痛み出した。

ト鼻紙を出し、足の血汐を拭き、星明りに見て

こりや、餘程の事ぢや。これでは道の程も心元ない。京都は白川のほとりに由緣の者もあれば、これへ參らば、この身は安堵。併し、この足では、血止めなぞも所持せず、どうぞコレ、少し痛みを留めたいものぢやが。

ト云ひ〳〵、あたりを見る。小間物屋の軒に藥の書付け、いろ〳〵貼つてあるを見て

幸ひ藥屋と見える。何ぢや無二膏、……何の役に立たぬもの……イヤ〳〵、捨て置かうよりはましであらう。さうだ〳〵。

ト門口へ來て

頼みませう〳〵。

ト戸を叩く。

藥屋　誰れぢや〳〵。

ト寢ぼけた聲で云ふ。

水右　膏藥が求めたい。

藥屋　寢て居ます。明日ござりませ。

水右　イヤ〳〵、火急な事だ。當村の庄屋どのからぢや。

トこれにて藥屋の男、門口を明け、前帶のまゝ、寢ぼけた體にて、目を擦りながら出る。

水右　お身が亭主か。なんと、金創に付ける藥はないか。

藥屋　ヘイ、何となされました。

水右　少しばかり怪我を致したが、どうぞ血止めのやうな物があらば、くれやるまいか。

藥屋　血止めなら、いつち奇効油がようござります。

水右　奇効油。ウム、それがよからう。とても の事に、灯を借りたい。

藥屋　ハイ、マア、入つて莨でもあがりませ。

水右　それは過分。何かと問ひ合す事もあれば、暫らく上がり口を借らうか。

藥屋　サア〳〵、お入りなされませ。

水右　然らば免しやれ。

ト水右衛門、藥屋の内へ入る。關助、始終窺ひ居て、この時ズツと出て、藥屋の内をとつくりと見て、此方へ來て

關助　相違ない水右衛門。あの足では、所詮遠路は叶はぬ。さうぢや。

ト身拵らへして行かうとする。この時、向うより庄六、前幕の狀箱をかたげた形にて走り出て來て

庄六　エイ〳〵サツサ〳〵。

ト云ひ〳〵出て關助に行き當る。

關助　眼玉を明いて歩け。馬鹿面め。

ト云ひ〳〵行かうとする。

庄六　コリヤ〳〵、さう云ふは關助ではないか。

關助　由兵衛か。

庄六　關助か。ハテ、よい所で逢うたわい。夜中にわりや、どれへ參る。

關助　されば、その用は、コリヤ。

トあたりを見て囁く。

庄六　すりや、水右衛門は。

關助　ハテ。

トこなしあつて

時に、われは本國播磨へ火急のお使ひ。どうして爰へは。

庄六　下郎めをお召しなされて、御使者樣の御意には、寶の詮議二百日の日延べも最早一日。お家の安否如何あらんと、殿樣より鎌倉へ段々とお願ひの上、今十日の日延べ叶ひ、その儀濱松へ使者の趣き、承ると其まゝに、此方の手に入つた伽羅の尊像を、御使者さまにお渡し申し、家國安堵の御書を頂き、御使者はお國へ、身共は又、其まゝに引返して

關助　十左衛門さまにお知らせ申したか。

庄六　イヤサ、池鯉鮒まで參つたところ、はやお立ちなされ、勢州龜山の殿へ、敵討のお願ひを立て、彼の地に於て本意を達せんとの儀、聞くと其まゝ取つて返してこの所。

關助　すりや、龜山の城下へ。イヤモ、よい時は臍を突いてもよいと云ふが、お家の寶も手に入る上、附け廻した水右衛門は、袋に入つた鼠同然。

庄六　三寸繩に縛し上げて

トきつとなり、行かうとする。

關助　コリヤ、待て。彼奴もしれ者。荒立てゝは事の破れ。おれが思案は、これから。

ト　また囁く。

庄六　ムウ。これも尤も。

關助　先へ駈けぬけ、何かの手つがひ。

庄六　早道達者、おらが得手もの。

ト駈け出さうとする。關助引廻し

關助　ドツコイ、この期になつたら、早道にも負けないぞ。

庄六　急げ〱。

關助　合點だ。

ト兩人、臆病口の方へ駈け出す。この見得、誂らへの合ひ方になり、驛路の鈴の音、道中曉方の體にて、町家の道具、段々に橋がゝりの方へ引くと、上の方より松原を引出す。よき所に一里塚の道具、取合せよく、一面の松原に、關助、庄六、道具留まると、よろしく立留まる。

關助　待て〱。一里塚があるなら、爰らあたりに駕籠舁きが居さうなものだが。

トあたりを見て

庄六　コリヤ〱、爰にどぶさつて居るワ。コリヤ〱、目を覺ませ〱。

關助　早く起きろ〱。

ト兩人して口々に云ふと、一里塚の後より雲助一人、寢ぼれし體にて、向うへ出て、目を擦り〱

雲助　エヽ、旨いどうぶくらを起された事ぢや。

關助　此奴、寢とぼけた面ではあるわい。コリヤ、龜山まで通しがある。なんと、行かないか〱。

雲助　されば。

ト欠伸しい〱云ふ。

庄六　駕籠賃も酒手も、ふんだんにくれるワ。拵らへろ拵らへろ。

雲助　アイ、拵らへますが、鈍な事がごんすぞい。大津まで通しがあつて、皆出て行つて、駕籠は一挺しかごんせん。殊に合ひ棒も居ず

關助　イヤ、合ひ棒も片棒も、こなたでよいやうにする。何ぢやあらうと、拵らへろ〱。

雲助　合點でごんす。

ト一里塚の後へ入る。由兵衞、向うを見て

庄六　慥かに水右衞門。

關助　コリヤ、來い。

ト二人頷づき合ひ、一里塚の後へ隱れる。始終合ひ方。

向うより藥屋の亭主、、、今岡村と書きつけし弓張り提灯を提げ、道案内の心にて先に立ち、捨ぜりふ云ひ〳〵出て來る。後より水右衞門、附いて出て來る。

藥屋　道が惡うございます。足元に氣を付けさつしやりませう。

水右　イヤモ、急ぎの道中に、この如く怪我いたしたれば、一向歩けるものではない。ぢやが、只今の宿より、もう半道も參つたであらうな。

藥屋　左樣でございますわい。爰らが知れ憎いでございます。これからは又往還で、隨分とよい道でございます。爰が彼の三河の出離れ。あれは一里塚でございます。

水右　ムウ。ちと仔細あつて、日のうちは往來が仕憎い。只今お身が申した、桑名とやらまでは、いか程あらうな。

藥屋　これから七里半程ございます。

水右　七里半。夜のうちは心元ない。亭主、とてもの世話だが、このあたりに駕籠があらば、壹挺世話をしてくれまいか。

藥屋　ハイ、立場の事なら、駕籠はございませうが、夜の明けぬうちは、どうございませうぞ。

ト此せりふのうち關助、庄六、頰かむりして、一里塚の側にコロ〳〵寢て居る。藥屋、提灯にて、そこらを見廻し

藥屋　コリヤ〳〵、駕籠よ。起きい〳〵。これは寢入り端。コリヤ、起きぬか〳〵。

ト庄六、寢ぼけし體。鼻くたの眞似。

庄六　ヤレ〳〵、よう寢入つた事ぢや。

藥屋　コリヤ、桑名まで通しにやるのぢやが、なんでも早うさへやつたら、駕籠賃は望み次第ぢやが、どうぢやどうぢや。

庄六　そいつは耳よりぢや。

ト鼻くたで云ふ。

藥屋　時に、合ひ棒はあるか。

庄六　合ひ棒もごんすが、コリヤ、啞ころよ〳〵。

ト始終鼻くたで關助を起す。關助、起きて啞の體にて

關助　ム、、、、。

ト何ぢやといふ仕方する。

庄六　桑名まで通しぢやとやい。コリヤ、駕籠賃も酒代も、望み次第ぢやとやい。

關助　ム、、、、。

ト旨いと云ふこなし。藥屋、二人を見て

七幕目
宗十良
助

藥屋　ヤア、何ぢや、啞ころと鼻くたちや。此奴はよう片輪が揃うた。
水右　イヤ〳〵、どうか恰好の揃はぬ奴等だ。彼奴ら二人で早駕籠は心元ない。
庄六　桑名まで七里半、朝ツぱらにやりやす。乘らんせ乘らんせ。
關助　ム、、〳〵。
ト何でもない道ぢや、ツイやろと仕方する。藥屋見て
藥屋　ハ、、、、。イヤ〳〵、あゝ云ふ者は、道々口をきかぬによつて、道は早いものでござります。お乘りなされませお乘りなされませ。
水右　イカサマ、それもさうだ。然らば其方は歸つてくりやれ。最前の藥料、何かの世話代。ソリヤ、三兩。
ト鼻紙入れより出して遣る。
藥屋　こりや忝ない。左やうなら御機嫌よう。
ト行くところを
水右　コリヤ〳〵。
トちよつと呼びとめ
もし身共體の者を尋ねて、追手の參る事もあらうが、必らずとも身が事を、他言いたすな。

藥屋　畏まりました。何にも申しませぬ。云はぬ代りには
水右　ソリヤ、壹兩。
ト遣る。
藥屋　オツト締めた。左樣ならお暇申しませう。お靜かにござりませ。
ト橋がゝりへ走り入る。
水右　ハ、、、。ハテ、慾の世界だな。イヤ、わいら、隨分急いだらば、壹人前小判二兩づゝだ。
庄六　こりや忝ない。
關助　ム、、、〳〵。
ト巧いと云ふ仕方。
庄六　サア〳〵、乘らしやりませ〳〵。
ト兩人、駕籠を持ちあげる。關助も駕籠の垂れを上げる。
水右　ヤレ〳〵、殆んど草臥れた事ぢや。
ト駕籠に乘る。直ぐに垂れを下ろす。
庄六　サア、やりますぞえ。
水右　隨分ともに、急げ〳〵。
庄六　合點ぢや〳〵。
ト誂らへの合ひ方になり、駕籠を舁いて、上の方へ行

きかける。この見得にて、松原半分ばかり下へ引く。
兩人、よきやうにあつて
庄六　待つてくれ。草鞋が切れた。
關助　ム、、〳〵、下ろせ〳〵。
ト駕籠をよき所へ下ろし、兩人差し足にて此方へ來て
うまく行たではないか。
ト庄六、下地の聲にて
庄六　オ、サ、此まゝ直ぐに龜山の城下へ。
關助　まともに行くは十六里、鳴海の宿を横に切れて、小道を行けば四日市の出はづれ。龜山までは十里の近道。
庄六　直ぐに發足。敵討の場所へ。
關助　オ、サ、合點ぢや
ト頷づき合ひ、また駕籠の側へ來て、庄六また鼻くたにて
庄六　親方々々。爰でちつと酒手が貰ひたうごんす。親方親方。これはしたり、もう寢られたさうな。
ト駕籠を覗いて、關助も覗いて見て
關助　よくどぶさつて居る。ムウ、やれ〳〵。
庄六　合點ぢや。

ト兩人、荒繩を取つて來て、駕籠をグル〳〵巻きにする。
關助　斯うすれば籠の鳥。
庄六　網にかゝつた鱗屑同然。うまい〳〵。
ト方々にて鷄啼く。
關助　もう夜明け。
庄六　此まゝ直ぐに、合點か。
關助　合點ぢや。
ト駕籠を舁き上げる。
兩人　エイ〳〵〳〵。
ト駕籠を舁き、向うへ走り入る。この間鷄笛。夜明けの體にて、右の松原を兩方へ引き、見付け黑幕を切つて落す。
造り物、向う奥深き龜山の城、遠見の吊り物。裾を霞にて見切り、景色よろしく、舞臺に矢來を結ひ廻し、兩方に出入り口あり、この眞中に十左衛門、着附け上下。岡野、半次郎、白衣裳、紅の襷、鉢卷、敵討の形にて扣へ居る。上の方、矢來の外に、左京之進、衣裳上下。その外上下の侍ひ三人、この後に

並ぶ。家來大勢、矢來の左右に付添ひ居る。時の太鼓にて道具とまる。

十左　敵討御赦免によつて、石井兵衞が兄弟の子供を召連れ、用意一々相調うてござります。

左京　この度、石井兵衞を手に掛けし赤堀水右衞門、寶の盜賊、四海にかゝる重罪なれども、十左衞門が願ひによつて、敵討御赦免と仰せ出され、卽ち敵討檢視の役目として、斯く申す斯波左京之進。

家來　我れ／＼は飾間どのより、差添への者。

同　疾より伺候仕つてござります。

左京　敵討は恥あるもの、心靜かに用意いたされてよからう。

十左　各々、御苦勞に存じ奉りまする。今日は五月廿八日、建久の昔、敵祐經を討ち滅ぼせし、曾我兄弟の譽れにも叶ひ、倶父戴天の親の敵、首尾よく打ち負ふせんな、偏へに君の御厚情。まつた濱松家の重寶、觀世音の功力、誓ひに洩れぬ千手の助太刀。

岡野　年來の仇、我れ／＼の喜び。

半次　この上はござりませぬ。

左京　十左衞門、して、當の敵の水右衞門は。

十左　腹心の者に申し付け置きましたれば……召捕つてこの所へ參る手筈。とくと申しつけ置きましたが、關助はもう歸りさうなものぢやが。

ト向うを見る。ドン／＼と五ツの太鼓打つ。

左京　最早、辰の上刻。敵討の刻限。

十左　作法亂さず、用意おしやれ。

岡半　ハツ。

ト皆々用意しかゞある所へ

關庄　エイサツサ／＼／＼。

ト水右衞門を乘せし駕籠を舁いて出て、矢來の眞中へ下ろす。

十左　關助、立歸つたか。

關助　やう／＼只今でござります。

庄六　十左衞門さま。

十左　本國の樣子は、斯波左京さまに承り、とくと承知。

庄六　卽ち安堵の御書。

ト最前の狀を渡す。

十左　ハツ。

ト取つて開き、讀むうち

庄六　サア、この上は水右衞門め。

ト兩人、立ちかゝらうとする。
十左　コリヤ、敵討は石井兄弟。助太刀の儀は叶はぬぞ。
關庄　エ、。
ト額を睨めつけ、こなしある。
十左　先づ水右衞門をこれへ。
關庄　ハツ。
ト駕籠の繩を解き、兩人左右より圍ひ
關助　赤堀水右衞門、榮華の夢の覺め小口だ。
庄六　目を覺まして、これへ出ろ。
關助　早く出ませい。
兩人　出居らう。
トきつと云ふ。水右衞門、駕籠の垂れを揚げ、キッと
あたりを睨め廻し、二人を見て悧り。
水右　うぬら二人は、石井が家來。すりや駕籠舁きと云う
たは。
關助　手段の網にかゝつた大馬鹿。
庄六　こま言云はずと、早く出ませい。
兩人　出居らう。
ト水右衞門、駕籠からスッと出て、あたりを見廻し、
皆々を見て
水右　十左衞門、さては兩人が出立ちと云ひ、矢來を結ひ
廻し、數多の警固の有樣は。
十左　不審は尤も。夜前八ツ橋村に於て、一旦の助命は、
又四郎が最後の願ひ。然れども、四海にかゝる重罪の科
人、木の空の成敗にも及ぶべきを、身が願ひに依つて敵
討の御赦免、尋常の勝負を遂げるは、まだしもの武士の
本意。時到つて今月今日、石井一家が年來の仇なる岡
野、彼れこそ付け狙ひし赤堀水右衞門、面體をとくと覺
え、尋常の勝負を遂げやれ。
ト岡野、水右衞門をキッと見て
岡野　さては其方は赤堀水右衞門。この年月、付け狙ひし
仇敵、石井兵衞が娘の岡野。
半次　同じく弟半次郎。
由兵　親旦那の鬱憤。
關助　若旦那の修羅の妄執。
岡野　遁がれぬ所、サア、尋常に
皆々　勝負々々。
ト左右より詰め掛ける。水右衞門、こなしあつて
水右　ムウ。すりやこの所へ誘き寄せんと、うぬらが手段
の網であつたか。エ、、殘念やなア。

左京　斯く成り行くも天命の致すところ。討ち討たるゝは
双方の運次第。急いで勝負いたしてよからう。
ト水右衛門、無念のこなしいろ〳〵あつて
水右　よいワ。斯うなつたからは是非がない。敵討の勝負
いたしてくれう。
左京　得心の上は、用意の白裝束。ソレ、家來ども、早く。
家來　ハア、。
ト廣蓋へ白裝束を載せ持つて出て
皆々　サア、水右衛門どの、着替へさつしやれ〳〵。
ト大勢、口々に云うてせり立つる。
水右　ヤア、姦ましい奴等。斯うなつては逃げも走りもす
る水右衛門ぢやアないぞ。ザワ〳〵と吐かすな。
ト云ひ〳〵、身拵らへする。家來皆々、口々に着替へ
さつしやれと云ひ〳〵、衣服を脱がせ、白衣裳と着せ
替へろ。此うち十左衛門、皆々に手配りを教へる。庄
六、手桶を持ち出て、水を打つて廻る。關助、三方に
土器を持ち出で、眞中に置く。此うち皆々用意して、
向うへ出て、水右衛門、眞中に直り、土器を二枚取上
げる。岡野半次郎、兩方にて土器を取上げる。皆々一
時に水呑んで、土器を取替へ、また水を呑み、この杯、
古實の通りよろしくあつて、三人一時に土器を打ち割
る。水右衛門、スツと立ち
水右　遠州濱松に於て、石井兵衛を討ち放し、先頃大井川
にて、悴兵助をも返り討。並み〳〵の水右衛門ではない
ぞ。劍術無双の身共が引導。うぬら一々返り討だぞ。
ト鯉口を濕す。
岡野　赤堀水右衛門、親の敵、弟の仇、女ながらも姉の岡
野が、初太刀の立合ひ。サア。
水右　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
ト敵討タテの合ひ方、いつもの通りになり、水右衛
門、岡野、花々しき立廻り、いろ〳〵あつて、岡野、
ちよつと手を負ふ。半次郎、入れ代り、タテになり、
關助、岡野を介抱する。半次郎、當てらるゝ。水右衛
門、疊みかけて二人へ切りつける、關助、怪我のやうに
拔き身を叩き落し、水右衛門、差添に手をかけるを、
十左衛門、手裏劍を打ち、水右衛門、膝を突く所を、
庄六、水右衛門を蹴倒し、起きようとする所を、岡
野、乘りかゝり、抉る。水右衛門、跪く。
十左　止め〳〵。

ト岡野半次郎、水右衛門に止めを刺す。

岡半　親の敵、思ひ知つたか。

由開　お出かしなされた。お手柄〳〵

左京　敵討相濟む上は

十左　めでたい〳〵。

先づ今日はこれぎり。めでたく打出し。

昔語黄鳥墳

繪入讀本 全部五册

河内に聞ゆる武功の家柄その姓名は　佐々木源太左衛門
多賀に名高き老功の古兵は其名も同じ　佐々木源太左衛門

津の國の長柄の里に由緒ある長者の愛むすめ梅ケ枝が歸りもうでに見初めたるその媒は神前の鶯鳥類ながら忠義の若黨作左衛門が麁忽より取違へたる具足櫃明けて云はれぬ非人の舅父母討たれて只一人取殘されし孤兒も天運爰に順應して忠孝全き仇討の榮

表のカタりは、この狂言が初めて江戸で上演された、天保三年五月河原崎座初演のものである。下掲の凸版も、その時の櫓下の番附の一部である。本文に見える數箇の凸版も、この時の繪本番附が見附かつたので幕毎に挿入したのである。

本文に入れた錦繪は、割合に近い頃のものだが、外に見當らぬのでこれを用ひた。その一々に説明は附けてある。

昔語黄鳥墳

序幕

北條館の場
大井川の場
島田宿屋の場

役名——河内の佐々木源太左衞門。同若黨、作左衞門。日下淸三郎。北條花若丸。寶山和尚實ハ大仁坊。腰元、若葉。横田治郎太夫。外山貫左衞門。戸田佐五左衞門。佐々木源吾、多賀の佐々木源太左衞門。

本舞臺、うしろ淺黃幕、誂らへの冠木門練り塀。爰に紺看板の奴二人、水打ちの體、よろしく、白囃子にて幕明く。

兩人　ヤレ〳〵、これで綺麗になつた。

奴一　ドレ〳〵、一服しようぢやアないか。

奴二　時に可内、なんで今日は此やうに、お掃除があるのぢや。

奴一　オヽ、候平、わりや新參ゆゑ何にも知るまいが、今日は此お下屋敷へ、若殿様がお越しなされて、佐々木源太左衞門さまと、佐々木源吾さま、お貳人が劍の爭ひ。どうぞ日頃からお心好しの源太左衞門さまの、お勝ちなされるやうにしたいものだ。

奴二　それサ、おいらは何にも知らないが、あの源吾さまとやらは、意地の惡さうな顔つきなお方ぢや。

奴一　こんな事を云ふ事が知れたらば、直ぐにお眼玉であらう。ハヽヽヽ。サア〳〵、來い〳〵。

ト兩人奥へ入る。

呼び　若殿様のお入り。

ト三味線入り序の舞になり、向うより、子役の花若丸、羽織袴壹本差しの形。後より淸三郎、上下衣裳の形。子役の源之助、同じく上下衣裳。左仲太、右源次、何れも上下。後より作左衞門、若黨の拵らへ。治郎太夫、老けたる拵らへ、上下衣裳にて出る。中間壹人、草履取りにて出る。この人數よろしく花道に居並び

治郎　今日佐々木源太左衞門、同苗源吾兩人、所持の劍御改めの上にて、いよ〳〵淀川、川浚への儀、仰せ付けらるべきところ、大殿御所勞に付き、御名代として、若殿

のお入り。

清三　御介添として治郎太夫どの、また某も兄十左衛門が名代、何れにも、随分ともに麁忽なきやう心得てよからう。

源之　父源太左衛門も、追ツ付け出仕いたすでござりませう。

治郎　若殿様には、先づ入らせられませう。

花若　皆、參れ。

皆々　ハア、、、。

ト矢張り右の鳴り物にて、本舞臺へ來り、冠木門の内へ入る。唄になり、若葉、屋敷女中の拵らへにて、權平、中間にて連れ出て來り、花道にて

若葉　コレ〳〵、權平どの、わたしが一生の頼みがあるが、聞いて下さんせぬか。

權平　ヘイ〳〵、何なりと、あなたの仰しやる事、聞きませいで、なんと致しませう。

若葉　サア、外の事でもない。今日、此お下屋敷へ、日下清三郎さまといふお方が、若殿のお供で、お出でなさる由。ちよつとお目にかゝつて、お話し申したい事がある程に、わが身、先へ行て、ちよつと呼び出してはたもらぬか。

權平　ヘイ〳〵、畏まりました。

ト權平、門の內へ入る。

若葉　ほんに、待たるゝとも待つ身とは、よう云うたものぢやなア。

トいろ〳〵思ひ入れ。序の舞に成り、向うより源吾、上下衣裳にて、中間に刀箱を三方に載せたるを持たせ、出て來り

源吾　まだ源太左衛門には、出仕はあるまい。サ、、急いで參れ

ト直ぐに舞臺へ來る。若葉を見て、思ひ入れあつて

ヤ、、其方は若葉どのではないか。

若葉　ハイ、源吾さま、あなたは爰へ、何しにお出でなされました。

源吾　身共より其方は、爰へ何しに參つた。

トちよつと思ひ入れあつて

コリヤ〳〵、ちよん內、其方は先へ參り、その一腰を治郎太夫どのへ相渡し、源吾只今それへ參ると、申しておくりやれ。

奴　畏まりました。

ト奴、門の内へ入る。

源吾　コリヤ〳〵、君よ。其方は情ない者ぢやぞよ。身共、常々からの目使ひ、大概知れてあらうに、素知らぬ顔はむごいぞや〳〵。

若葉　わたしや其やうな事は存じませぬ。不義はお家の堅い御法度、お嗜なみなされませ。

源吾　これはしたり、何を其やうに堅い事を申す。かねてそもじに遣はさうと思うて、認め置いたる文、どうぞこれ、を讀んで見てくりやれ〳〵。

若葉　エヽ、わたしや其やうな事は、存じませぬわいなア。

ト振り切る拍子に文を落す。

源吾　コレ〳〵、さう氣強うは、したまふな〳〵。

ト捨ぜりふにて付け廻す。よき時分、奥より清三郎出て、この文を拾ひ、思ひ入れあつてこの中へ入る。源吾、思はず、清三郎に抱きつき、愕りして

ヤ、こなたは清三郎どの。

清三　源吾どの、大切な御劍御改めの日に當つて、女子を捉へ、何をなされます。

源吾　サア、こりや何でござる。オヽ、それ〳〵、この若葉が申さるゝには、女ながらも武家に奉公いたす者、太刀筋すべても覺えたいと申すゆゑ、女子の事なれば、劍術より先づ柔術をと、それで只今その稽古を。

清三　ハテ、御深切な儀でござりますなア。

源吾　イヤナニ、清三郎どの、源太左衞門には、最早出仕いたされましたかな。

清三　イヤ、未だ出仕仕りませぬ。

源吾　イヤハヤ、呆れた者だ。大切なる今日、今頃までべん〳〵と、何を致して居るであらう。

清三　イヤ、遲刻いたすと申す書面が參りました。

源吾　ナニ、源太左衞門より、遲刻斷わりの書面が。

清三　左やう〳〵。その書面卽ちこれに。

ト以前の文を出す。

源吾　ドレ。

ト上書を見て

御許さまへ、源より……ヤア、いつの間にその文を。

清三　サア、源より……源太左衞門どのよりの書面、なんとよい、遲刻斷わりの書状ではござらぬか。

源吾　サア、よいワ〳〵。そんなら隨分苦しうござらぬ。

とは云ふものゝ

ト取りにかゝる。ちよつと持ち替へ

清三　但しは源太左衛門どのよりの、遲刻斷わりの文言、今爰で一々讀み上げませうか。

源吾　イヤ、それにも及ばぬ。御勝手々々々々。
　ト門の內へ入る。兩人見送り

清三　ハヽ、。なんの事ぢや。して、若葉どの、何しに爰へ。

若葉　何しにとは、お胴慾な。あなたに逢ひたさ。あの權平を頼んでやう〳〵と。

清三　これはしたり、其方も嗜なんだがよいわいの。御劍御改めの今日、大切な日ではないか。淫らな事があつては濟まぬわいの。

若葉　イエ〳〵、大事ござりませぬ。不義いたづらと云ふではなし、ほんに親々の云ひ號けある身ぢやござんせぬか。話し位したとても、咎むる者はござりませぬわいなア。

清三　それぢやというて、大事の今日。それはさうと、最前其方は、あの源吾と何か話して居やつたが、大方わが身、あの源吾と、女夫になる心であらうがの。

若葉　なんのマア、滅相な。どうしてマア、其やうな事があつてよいものかいなア。わたしより變り易いは殿御の心、滅多に油斷はならぬわいな。

清三　イヤ〳〵、わが身に油斷がならぬわいの。
　ト此うち、以前の權平、出て來り

權平　モシ、清三郎さま、治郎太夫さまが、何か御用があると仰しやつてゞござります。お早くお出でなされませ。モシ、清三郎さま〳〵……モシ、清三郎さま。……
　トこれにて清三郎、悔りして權平を眞中へ入れ、下へ坐らせ、耳を押へて、若葉に囁く、この模樣よろしくして道具廻る。

　本舞臺、正面二重舞臺。向う金襖、上手、櫻の立ち木、日覆より櫻の吊り枝、この二重、上の方に褥を敷かせ、花若丸、後に左仲太、右源次扣へる。寶山、鼠の衣、同じもうすにて拂子を持ち、扣へる。平舞臺の上の方に源吾、刀筥を前に置き扣へる。下手に治郎太夫、その次に子役の源之助、よろしく扣へる。序の舞にて、道具とまる。

治郎　若殿樣へ申し上げます。御庭前の櫻を御覽遊ばしませ。殊に散りも始めず、咲きも殘らぬ風情、よい詠めではござりませぬか。

花若　百囀りの諸鳥の音色、皆の者、眺めに飽かぬ景色ではないか。

源之　お館の内とは違ひ、一興な儀でござりまする。

左仲　我れ〳〵どもゝ、若殿の御供。よい氣晴らしでござる。

右源　左様でござる。これで好いたぼが參つたら、また一入でござらう。

治郎　これは何れも方、何を仰らるゝ。如何に御若年な若殿ぢやと申して、ちとお嗜なみ召され。それよりは、何ぞこの花を題にして、歌なりと發句なりと、一首おやりなさるがよろしうござりませう。

源吾　コレサ、治郎太夫どの、發句などゝ、左様な、生ぬるけた事は、公卿や坊主の慰み、武士たる者は、武藝一通りさへ心がければ、他の事には疎くとも、何も恥かしい事はござらぬ。なんと左様ではござらぬか。

治郎　イカサマ、源吾どのゝ仰せの通り、佐々木氏は先祖より、勳功の家柄、源太左衞門どのといひ、源吾どのも、流石は名家の子孫程あつて、天晴れな心掛けでござる。

源吾　して、寶山どのには、何か源太左衞門どのに、火急の用事あつて、わざ〳〵御入來との事。これに居らるゝは、卽ち源太左衞門どのゝ御子息、同苗源之助どの。なんぞ急な御用ならば、源之助どのへ。

寶山　イヤ、愚僧、源太左衞門どのとは、未だ懇意ではござらねど、直々對面いたし、申し聞かせたき事ござつて、わざ〳〵參り申した。

源之　いま暫らくお待ち下され。追ツ付けこれへ、參りまするでござりませう。

源吾　落ちつくも事による。源太左衞門、餘りと申せば遲刻。畢竟、お上を輕しめた仕方。イヤ又、斯様申せば如何でござるが、拙者が別腹の兄ながら、あの源太左衞門、高祿は頂戴しながら、肝心の武藝には疎く、漫文とやらを好み、本ばかり讀んで居るが、まさかの時に本で軍は出來まい。學問が刀脇差の代りにはなるまいし、治世に亂を忘れずとは、武士の嗜み。今にでも軍があつたら、イヤハヤ、笑止千萬なる事でござる。ハヽヽヽ

ト序の舞になり、向うより、源太左衞門、老たる拵らへ、麻上下にて、刀の筥を抱へ出て來り、花道より舞臺を見て

源太　これは〳〵、若殿様には、お早いお入り。治郎太夫どの、何れも御苦勞。拙者、遲參の段は、眞平御免下さ

りませう。
花若　オヽ、源太左衞門、近う〳〵。
治郎　源太左衞門どの、御前の御意、近う〳〵。
源太　ハツ〳〵……然らば何れも、御免下さりませう。
ト矢張り件の鳴り物にて、小腰を屈め、本舞臺へ來り、下の方へ住ふ。
源吾　源太左衞門どの、餘りの遲刻、今頃まで何してござつた。若殿樣にも、お待ち兼ねてござる。
源太　オヽ、源吾。して、其方、國行の刀、持參いたしたか。
源吾　疾より持參いたし、貴殿の出仕を、長くなり短かくなつて待つて居申した。
源之　殊に生駒山の寶山和尙、何か父上に用事ありとて、最前より、あれにおいでゝござります。
源太　ナニ、聞き及んだる寶山和尙とな……拙者、卽ち佐々木源太左衞門。寶山和尙には未だ懇意にもあらぬに、何用あつて、これまで御入來。
寶山　ムウ。すりや貴殿が、佐々木源太左衞門どのとな。初めて逢ひ申した。
ト　つく〳〵顏を見て
ハテ、爭はれぬ……イヤナニ、密々貴殿に申し聞かせたき事ござつて參つたれば、後でゆつくり。
源太　イカサマ、今日は大切なる御太刀御改めの儀なれば、後刻ゆるりと、承はるでござらう。暫らくお扣へ下されい。
治郎　何は兎もあれ、先づ双方とも、御太刀を差上げ召されい。
兩人　ハツ、畏まつてござります。
ト合ひ方になり、源太左衞門、源吾、恭々しく刀の筥を、治郎太夫が前に差置く。治郎太夫、思ひ入れあつて源吾が刀を取り、拔き放ち、とくと見て、鞘に納め
治郎　イカサマ、天晴れの業物と相見える。
ト花若の前へ置き、また源太左衞門の刀を取上げ、少し拔きかける。薄どろ〳〵になる。治郎太夫、思ひ入れあつて、鯉口シヤンと締め
ホウ、紛ふ方なき朝日丸、これに上越す名劍はあるまい……花若君へ申し上げます。この上は、いよ〳〵川浚ひの儀、源太左衞門へ申し付けまするでござりませう。
花若　治郎太夫、よきに計らへ。
治郎　然らば源太左衞門どの、卽刻鎌倉へ下られてよから

う。

源吾　イヤ、治郎太夫どの、こりや如何いたした儀でござる。ちよつと鯉口を拔き放して、切れ味が知れるものでござるか。朝日丸の何丸のと、得知れぬ刀さ・大そうな名を附けて、我が君へ差上げれば、また目明き千人盲目千人とやらで、何を見てやら、ヤレ名作だの業物だのと、イヤモ、お臍がでんぐり返しを致す。いつその事、朝日丸と附けるより、がた／＼丸とでも附ければよいに。ムム、ハ、ヽ、ヽ、ヽ。

源太　こりや、源吾には異な事を申すな。して、其方が持參いたした刀。名作とは、何を以て…その切れ味は覺束ない。

源吾　イヤ、兄者人、拙者が持參の名劍の、切れ味を心元ないと云はつしやるのか。さう思はつしやるなら、論より證據と、いま目の前で、切れ味をお目にかけう…ヘテ、何をがな。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、上手へ行き、櫻の枝をスツパリと切る。扇を開き、その枝を扇子の上に載せ、

差出し

御覽下されい。まツこの如く、只一打ちにこの枝の、切り歪まず眞直ぐに、すつぱり切れしは、拙者が手練の手の內とは申しながら、天晴れの名作でござるまいか。

源太　ム、ハ、ヽ、ヽ、ヽ。堅き物を以て切れ味を試むるは、そりや小刀、剃刀の事。なか／＼それしきの事を以て、名作名劍とは云はれまい。よし又、誠の國行なりとも、其方如き者が所持いたさば、炭搔き庖丁同然サ。

源吾　ヤ、なんと。

源太　さればサ、都で太刀といへる物は、莫耶の劍も持ち手によると、譬へ炭搔き同然の鈍刀ものでも、持ち手の心直ぐにして、一心だに固まらば、名劍利刀に等し。また某が家重代の朝日丸は、三條の小鍛冶宗近が、鍛へたる名劍にして、鯉口を放す時は、忽ち闇夜も夜明けの如く、數多の烏啼きわたる。かゝる威德あるを以て、朝日丸と名付けし名劍。なんとこれでもあらがふか。

源吾　イヤ、並べたり、ほざいたり。正眞正銘、紛ひなしの、この國行の刀を措いて、由來も知れぬ朝日丸。そんな奇妙な奇特があらば、サア、いま爰で試みようか。

源太　望みならば見せてくれんが、サ、若殿、治郎太夫どの、とくと御覽下されませい。

ト思ひ入れ、刀を拔き放つ。大ドロ／＼になり、烏大

分啼く。皆々見て悄くり。思ひ入れあつて

皆々　ヤヽヽ、數多の烏の、あの聲は。

花若　これぞ誠に劒の威德。

治郎　天晴れ流石、佐々木の重寶。

源太　斯くの通りでござります。

ト刀を納める。ドロ〳〵止む。

源吾　ヤア、正法に不思議なしと。さては邪法の妖術にて、この場の動搖。

ト立ちかゝる。

源太　劒の威德を邪法とは、おのれが心に引くらべ、兄をさみなす無道。いま一言云つてお見やれ。

源吾　汝こそ人をさみなすその詞。莫耶が劒も持ち手によると、例へ似せ物の劒にもせよ、一心凝つたるこの源吾が、武士の魂ひ。

ト引寄せ、拔き放ち、上手へ構へ

斯う構へたる白刃の下。サア、源太左衞門、潜れるならば、潜つてお見やれ。

源太　ハテ、仰山なその詞。君の御前も憚からず、白刃を拔いて尾籠千萬。

源吾　ヤア。

ト思ひ入れ。

源太　立騷がずと、下にお居やれ。

ト尻にてトンと下に居さす。

源吾　なにを。

ト立ち上がらうとする。扇にて白刃をキッと押へ

源太　サア、どうぢや〳〵。その名作の刀で、源太左衞門を切らぬか。サア、立上がつて勝負せぬか。

源吾　ヤア。

源太　殿の上意。

源吾　ハツ。

ト思ひ入れ。此うちに、源太左衞門、掻潜いろを源吾心づき、うぬト切つてかゝるを源太左衞門、扇にて押へ

源太　へ小賢しき源吾が振舞ひ。サア、動かれるなら、動いて見やらぬか。

ト源吾、口惜しき思ひ入れ。

源吾　なにを。

トまた振り解いてかゝるを、引廻して押へ

源太　サ、どうぢや。源吾、手向ひせぬか……。治郎太夫どの、御覽なされい。此奴は蟇蛙に、よう似て居るではござりませぬか。ハヽヽヽ。たわけ者めが。

ト來るをポンと當てる。これにて源吾、悶絶して倒れる。皆々見て

皆々　これは。

花若　劍といひ、手の內といひ、天晴れの源太左衞門、父上のお眼鏡に相違は無い。この上はソレ、源太左衞門へ川浚ひ御免の御教書遣はせ。

治郎　ハツ…然らば源太左衞門どの、いよ〳〵御用仰せつけらるゝ間、明る早朝、鎌倉へ出立いたしてよからう。

源之　すりや、父上には鎌倉へ。

源太　ハツ、有り難き御諚。委細畏まつてござりまする。

ト寶山、これを聞き、思ひ入れあつて

寶山　イヤナニ、源太左衞門どの、先刻より差扣へ居つたるが、この寶山が參つたる仔細は、貴殿の身の上。一大事を告げ申さんが爲。この程愚僧、天文を考へ見るに、貴殿の屋敷の上に當つて、毎夜怪しき妖氣立つ。これ全くその家に、災ひあるの兆し。また最前より爰へ來り、つら〳〵其許の面を見るに、水難によつて一命を果すこれ人相。只今承はれば、鎌倉へ下向との事。この儀は達て、御辭退申すがよろしうこざらう。

源太　これは〳〵、何事かと存じたれば、寶山和尙には、御深切のお詞。さりながら、武士たる者、君命によつて、一命を失ふ事珍らしからず。水難によつて命を果すとも、さら〳〵惜しむに足らず。無用の舌の根動かされな。併し、折角の御入來。コリヤ、源之助。

源之　ハツ。

ト源太左衞門が側へ來り

御用でござりまするか。

ト源太左衞門、ちよつと囁く。源之助呑み込み

源之　畏まりました。

源太　早く〳〵。

源之　ハツ。

ト奥へ入る。

寶山　ハテ、片意地な源太左衞門。如何に君命なればとて、一命失はゞ何を以て忠義と云はんや。是非この度の儀は思ひ止まり、幸ひなるかな弟源吾を以て、名代として鎌倉へ下してよからう。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、奥より清三郎、以前の形、高坏に小判を載せたるを持ち出で來り、寶山和尙の前へ直し

清三　心を籠めし源太左衞門がおもてなし、寶山和尙には、

定めし其お菓子、御好物でござりませうがな。

ト寶山、思ひ入れ。

寶山　拙僧は常に深山幽谷を住居とし、木の實榧の實を食とすれば、如何なる佳肴珍味も好もしからず。まして金銀珠玉は、石瓦に等し。それに何ぞやもてなしとて、この黄金を突きつくるは、我れを侮どるこの場の振舞ひ。

源太　イヤ、左様でござらぬ。そりや木の實でござる。

寶山　ハテ心得ぬ。この黄金を木の實とは。

源太　サア、その實の成る木を搖錢樹と名け、俗には金の生る木といふ。サア、その金の生る木が欲しさに、寶山和尚と名乘り、入込む曲者。

寶山　ヤア。

源太　茲な大騙りめ。

寶山　ナニ、この寶山を騙りと云ふのか。

源太　傳へ聞く、生駒山の寶山和尚は、霞を食ひ、霧を呑み、火山にも跨がり、芥子にも隱るゝ仙術自在の名僧知識。見事其方、騙りでなくば、我が見る前にて法を行ひ、佛法弘通の奇特を現はし、この所にて不思議を見せぬか。

寶山　サア、それは。

源太　但しは騙りか。

寶山　サ、それは。

源太　不思議を見せぬか。

寶山　サ、それは。

源太　騙りの一々白状せぬか。

寶山　サ。

兩人　サア〳〵〳〵。

源太　ド、どうぢや。

寶山　ムウ。

ト詰まる。清三郎、思ひ入れあつて

清三　さてこそ怪しいこの賣僧め。うぬを糺して、賴み手を。

ト立ちかゝる。

源太　コリヤ、清三郎どの、お扣へなされい。助け憎い奴なれども、假にも三衣を纒ひし者。其まゝにして赦し歸すも、門出の祝ひ。

清三　エ、、命冥加な騙りの賣僧め。早く歸れ。

寶山　ア、、歸るとも〳〵、誠に緣なき衆生は度し難しと、今に水難に遇うて水膨れ。源太左衛門を改めて、土左衛門とがな云ふであらう。

清三　何をこま言。キリ〳〵歸れ。
寶山　うぬ、覺えて居らう。
　ト唄になり、思ひ入れあつて尻を捲り、向うへ入る。
治郎　この上は源太左衞門どのには、一刻も早く、出立の
　用意いたしてよからう。
源太　ハツ、畏まり奉る。然らばお暇。
　ト源吾心付き
源吾　うぬ、源太左衞門め。
源太　殿の御前ぢや。
源吾　エヽ、思へば〳〵。
　トつか〳〵と來て拔きかける。
若花　源吾、扣へい。
　ト奥にて
呼び　お立ちの刻限。
清三　お供の用意。
源太　然らば此まゝ。
源吾　門出にちよつと。
源太　ハテ、仰々しい餞別ぢやナア。
　トまた源吾、拔きかけるを、ちよつと留める。双方引
ツ張りよろしく。

幕。

本舞臺、一面の淺黄幕。所々に蛇籠。浪板。よき所に
大井川と印せし榜示杭。爰に傳兵衞、松太、五郎、
五助、丸裸にて焚火火鉢にあたり居る。浪の音にて
幕明く。
傳兵　コレ、松よ。われはどこをぼツつくぞい。
松　とんと通りが途切れたゆゑ、四五里も下へ行かうと思
つてよ。
五郎　此やうな事では、濁酒壹合飮めぬわい。
五助　おれは酒よりは、阿部川の拳固にさへ、見放された
か。
傳兵　イヤ〳〵、そんなに氣を落すなよ。酒も餅も、ふん
だんに食はれるぞ。
松　酒も餅も食はれるとは、どういふ譯ぢや。
傳　わいらは、まだ知らぬか。さりとは商賣に疎い奴等ぢ
や。今日か明日のうちに、京都から多賀のお留守居が御
逗留ぢや。又その上に、河内の同じ名の、佐々木源太左
衞門といふ人が、えらい切れ者で、今度どえらいめでた
い事があつて、東へ行くのぢやとよ。併し、世の中には、

よう似た名もあるもので、京からござるも佐々木源太左衛門といふ侍ひ、河内にござるも佐々木源太左衛門というて、紋所も皆同じ事ぢやげな。

五郎　そいつは、どうぞ一緒にならねばよいが。

松　そりや又なぜに。

五郎　ハテ、何もかも一緒ぢやと、草履一足の違ひでも、大きな眼玉ぢや。

五助　イヤ、そりや宰領が、よいやうにするであらうわい。

松　そんなら、それを當に一杯やらうか。

皆々　サ、それがよい〳〵。

ト行かうとする。バタ〳〵になり、作左衛門、旅形にて走り出て

作左　コリヤ〳〵、川越しども、われ達の内に、頭と覺しき者はないか。どうぢや〳〵。

傳兵　この人は頭を尋ねて、何にするのぢや。

作左　餘の儀でもない。身共は河内の國、佐々木の家來ぢやが、頭立つたる人に逢ひたい。早く〳〵敎へてくりやれ。

五郎　オヽ、頭は島田の宿でごんすが、どちらからも、お通りがごんすゆゑ、皆爰に手を分けて待つて居やすが

作左　左樣ならば、其方達へ頼み置く。手前主人は、至つてお氣が短かいゆゑ、川筋萬事氣を附けておくりやれ。その代り賃錢は望み次第遣はす間、必らず麁相の無いやうに、合點か。ヤレ〳〵、世話ぢや〳〵。

ト云ひ捨て、上手へ入る。

松　なんぢや、けたいな奴なア。おのればかり得心して、去んでしまうたが。ハヽヽヽヽヽ。

トばた〳〵になり、川越し壹人出て

川越　オヽ、皆爰に居たか。聞いてくれ、京から通る留守居の宰領めが、九十の川を二十引いて、七十にせいと云うて居るゆゑ、皆云ひ合して渡さぬと云うてゐる。わいらもさう思つて居い。

五郎　そりやえらい違ひぢや。河内の旦那は増しをやると云うてゐるに、穢ない侍ひぢやないか。

川越　その上いろ〳〵云うて、早う渡せと、荷物を出しかけて居るぞよ。

傳兵　そりや荷物を出しかけても、役所から九十川にきめてあるものを値切るとは、そりやお留守居ぢやなうて、お薄いのぢや。

五助　なんであらうと、松よ、行かうぢやあるまいか。
皆々　さうせう。
ト皆々捨ぜりふにて下座へ入る。驛鈴、馬士唄になり、向うより多賀の源太左衞門、ぶッ裂き羽織、大小、野袴の拵らへ。後より佐五左衞門、貫左衞門、各々野袴ぶッ裂きの拵らへ。中間、具足櫃を擔ぎ、付添ひ出る。後より源吾、五十日、くりさげにて同じく野袴大小、ぶッ裂きの拵らへ、深編笠にて出て來り
源吾　イヤ、卒爾ながら、それへござるは、佐々木源太左衞門どのではござらぬか。
ト源太左衞門これを聞き、思ひ入れあつて
源太　いかにも某な、源太左衞門。して貴殿には。
源吾　イヤ、拙者は佐々木源吾でござる。
源太　ナニ、源吾どのとな。
源吾　一別以來、御健固でござるか。
ト笠を取る。
源太　ヤレ〳〵、源吾どの。先づは御健勝にて、重疊々々。
ト矢張り右の鳴り物にて、本舞臺へ來り
イヤ、何は差措き、拙者浪人いたし居つたる砌りは、厚きお世話に相成つた。只今にては多賀家へ仕官の身と相成り、この度主用に付き、久々都に逗留。只今鎌倉へ下向の道中。見ますれば源吾どのには、供をも連れず只壹人、何方へお出でなさるゝのでござる。
ト源吾、思ひ入れあつて
源吾　イヤ、某この所へ參りしは、深き仔細のあつての事。貴殿はその昔、拙者が扶助いたし置きし時の事を、お覺えでござらうな。
源太　何がさて、貴殿の御恩、生々世々忘れは置きませぬ。コレ、貫左衞門どの、佐五左衞門どの、此お人は拙者が恩人、佐々木源吾どのと申す仁、以後は互ひに御別懇に
貫佐　これは〳〵、源吾どの、この後ともに御入懇に賴み存ずる。
源吾　これは始めて御意得申した。イヤナニ、源太左衞門どの、拙者この度はる〴〵と、この所へ參りし仔細。他聞を憚かる一大事。
ト思ひ入れあつて、源太左衞門も
源太　イカサマ……コリヤ〳〵、其方どもは先へ參り、川端にて相待ち居らう。早く〳〵。
家來　ハツ、畏まりました。
ト家來二三人は具足櫃を舁き、上手へ入る。

源太　サア、源吾どの。最早下部どもは、遠ざけました。これなる兩人は、拙者の腹心。何事によらず、お心置きなう御意なされい。

源吾　ムウ。この上は。

　ト思ひ入れあつて下に居る。源太左衞門も下に居る。

源太左衞門どの、なんと頼まれては下さらぬか。

源太　ムウ。頼まれてくれいとは、そりや何を。

源吾　イヤ、外でもござらぬ。身共が兄、佐々木源太左衞門を、人知れず討ち捨てゝは下さるまいか。

源太　ヤ、なんと。

　ト合ひ方になり

源吾　サア、驚ろきは尤も、拙者が兄ながら、無道の源太左衞門、拙者を押籠め、その身壹人、榮耀に誇る傍若無人。おのれやれとは思へど詮方なく、無念の月日を送るうち、この度大役を蒙むり、鎌倉へ下向これ幸ひ。切つて捨つれば、佐々木の家督はこの源吾。時節到來と密かに河内の國を發足し、忍び〳〵に窺へども、彼方は大勢、此方は壹人。なまじいに手を下ろさば、却つて事の破れと相成るゆゑ。おめ〳〵とこの所まで參りしところ、フト貴殿を見掛けしゆゑ、これ屈竟と存じ、武士と見かけてお頼み申す。何卒聞き屆けて下さるまいか。

源太　イヽヤ、そりや成るまい。例へ無道にもせよ、現在の兄を殺してくれろとは、非義非道のお頼み。何なりとは存じたれど、この儀ばかりは。

源吾　すりや、御得心ないぢやまで。ハヽア、聞えた。貴殿、源太左衞門が怖いか。エヽ、玆な腰抜け武士。先年某許が難儀の場所をお救ひ申したは、何の爲でござる。その時貴殿涙を流し、この御恩は死んでも忘れぬ。貴殿の事なれば、一命をも差上げまするると、云はしやつたではござらぬか。命を捨つれば、鬼神も恐るゝに足らず。武士たる者に一大事を口外させ、その儀は出來ぬといつて其まゝで事が濟まうと思ふか。見下げ果てたる恩知らず。もう頼みませぬ。お斷わり申す。

　ト行かうとする袖を扣へ

源太　イヤ、お待ちなされい。

源吾　なぜ留めさつしやる。

源太　頼まれて進ぜませう。

源吾　すりや、得心あつて。

源太　ホヽ、如何にも。さほど思ひ詰められたからは、隨分承知いたしした。併しながら、彼の方にも、大勢供廻り

あれば、もしや仕損ぜは互ひの身の上。こりや好い事がござる。幸ひ拙者が苗字も佐々木源太左衞門。紋所も四ツ目結び、寸分違はぬ具足櫃の印。コリヤ

ト源吾に囁く。源吾、呑み込み

源吾　ムウ。すりや川越しどもに呑み込ませ、どさくさ紛れに具足櫃を取違へ

源太　それを越度に、喧嘩に事寄せ

源吾　打つて捨つるが貴殿の計略。

兩人　天晴れ、妙計。

源太　コリヤ、密かに〳〵。

ト後へ、以前の川越し出て

四人　旦那方、蓮臺を持つて來ませうか。

源吾　コリヤ、わいら、おれに頼まれてくれろ。仕負ふせたらば、褒美は望み次第遣はすぞ。

川越　イヤモウ、褒美さへ下されば

皆々　なんなりと頼まれませう。

源吾　サア、その頼みと云ふのは、外の事でもない。コリヤ、斯うだワ。

ト一人へ囁く。また大勢囁き合ひ、皆々うなづき

皆々　合點でごんす。

源吾　こりや、當座の褒美。取つて置け。

ト金を遣る。川越し見て

皆々　ヤ、こりや、お金。

源吾　必らずぬかるな。

皆々　ようごんす。

源太　然らば源吾どの、猶また申し談ずる事もあれば

源吾　御同道申すでござらう。

ト矢張り波の音になり、この一件、殘らず奧へ入る。知らせに付き、淺黃幕を切つて落す。

本舞臺、浪手摺り。奧深に、嶋田の宿の、遠見になろ。矢張り、浪の音にて道具納まる。

ト下座より川越し大勢、繪符の付いたる具足櫃を舁き出る。後より、松、傳兵衞、五介、三人の川越し、ヮヤヮヤ云ひながら、印の具足櫃を、舁き出る。

松　コレ〳〵、八よ〳〵、どうぞわれ、この具足櫃と、その具足櫃と、取替へてくれぬか。

川越　イヤ〳〵、もう面倒だ。これにして置かう。

傳兵　エ、コレ、そんな事を云はずに、取替へてくれ〳〵

五介　松やい。一杯呑ましてやれ〳〵。

松　エヽ、仕方がない。呑ませるから、取替へてくれ〳〵。

川越　そんなに云ふなら、取替へてやらう。

ト見物に見えるやうにして、松が舁いて來た具足櫃と、前の川越しの舁いで來た具足櫃と取替へ、ワヤワヤ捨ぜりにて向うへ入る。後より鎗、合羽、籠などいろ〳〵な物を舁き、各々捨ぜりふにて向うへ入る。知らせにてこの道具廻る。

本舞臺、三間の間、常足の二重。向う赤壁、納戸口、上手、障子屋體。貳重の下に、具足櫃、直してあり、嶋田の宿旅籠屋の體。爰に河内の源太左衞門、着流しにて、二重の上に居る。平舞臺に作左衞門、同じ着流し。宿屋の亭主、下女、捨ぜりふ云つて居る。合ひ方にて道具留まる。

作左　これはお旦那樣。今日はお早い、お泊りでござりまするて。下郎を始め中間ども、皆恐悦の體にござりまする。

河源　サア、まだ八ツ時なれども、大井川を何事なう無事に渡りしゆゑ、日も高けれど、皆の者の疲れを察しての事。作左衞門、其方は別して、心遣ひであつたなア。

作左　これは冥加ない仰せ。何か金谷の宿へ參ると、取る物も取り敢へず、川越しどもへ直々の相談とげ、コリヤ、われ達に二人三人の増しをくれるゆゑ、隨分人足どもを大勢寄せ、首尾よく渡してくれなば、酒も肴もふんだんにくれると申しましたゆゑ、何がさて口さがない者や道樂者が寄り集まりまして、我れも〳〵と云うて參りまする、金銀にお替へ申す命はないと、餘程金子も遣ひましてござりまする。

トこの話しのうち、源太左衞門。喜ぶ、作左衞門、思案して

時にお旦那、先頃濱松のあたりより、後になり先になり、參りましたる侍ひ。見受けましたところが、同じ四ツ目の紋所ゆゑ、合點ゆかずと、中間に殿のお名を承はりましたところ、佐々木源太左衞門さまと申しましたが、世界は廣いものでござります。お苗字もお名も、お紋所も同じ事で、同じ月日に出會ふとは、變つた因縁ではござりませぬか。

河源　その儀は身共も、不思議に思うたが、先祖は何かの端でがなあらうぞい。ナニ、作左衞門、下郎どもに無事に渡りし喜びに、酒肴を取らせい。

作左　ハア、畏まりました。コリヤ、亭主〳〵。
亭主　ハイ〳〵。
作左　只今旦那の仰せの通りなれば、下部どもへ酒肴を遣はせ。
亭主　ハイ〳〵、畏まりました。
ト亭主と下女は奥へ入る。
作左　時に旦那様、明日は未明に出立と存ぜられますれば、旅宿の入用何やかや、今宵のうちに致し、明朝滞りなく仕りたう存じますが、最早や金子も切れましてござりますれば。
河源　オヽ、さうであらう〳〵。ソレ、その具足櫃を開き、金子を出しやれ。
作左　畏まりました。
ト側にある、具足櫃を取出し、腰に付けたる多くの鍵を出し、いろ〳〵合せて見ても合はぬゆゑ、愚鬪々々して居る。
ハテ變つた
トこなしにて、矢張り合して見る。
河源　どうぢや。明かぬか〳〵。どうぢや〳〵。
作左　こりや、とんと合はぬ。面妖な。

ト鍵をいろ〳〵探し見る。
なんでも、この中にある筈ぢやが。
河源　イヤ〳〵、心急く時は、斯様な事のあるものぢや。併し、鍵の出るまで、打捨てゝも置かれまい。錠捻ぢ切つて早くしやれ。
作左　御意の通り仕りませう。
ト錠前をやうやく捻ぢ放し
錠前は、やう〳〵の事にて明きました。
河源　早く金子を出しやれ。
作左　畏まりました。
ト蓋を取る。中には鍋釜入れてあるを見て、恟りして
ヤ、この中には金子はさて措き、鍋や釜が入れてござりまする。
河源　ナニ鍋釜が。
ト立上がり、具足櫃の中をいろ〳〵見て、また紋所など見れども、我が具足櫃に相違なき思ひ入れあつて
こりやコレ、正しく佐々木源太左衛門と記しあり。ハテナア。
ト思ひ入れ。作左衛門、とつくり思案して
作左　お旦那様、思ひ當りました事がござります。

河源　ナニ、思ひ當りし事があるとは。
作左　左樣にござります。先刻お話し申しました、多賀の源太左衞門どの、金谷の宿で、何か上を下へと、交ぜ返しましたが、こりや川越どもが粗忽で、取違へたに相違ござりますまい。
河源　誠に同じ紋、同じ具足櫃ゆゑ、取違へしに相違あるまい。して、多賀の源太左衞門が旅宿は何方。
作左　イヤ、その儀は旅籠屋の亭主を呼び寄せ、詮議いたさば、直さま相解りませう。……………コリヤ〳〵、亭主、亭主は居らぬか。
ト奥より
亭主　ハイ〳〵、御用でござりまするか。
ト出る。
作左　イヤ、外の儀でもないが、身共が主人と同苗なる、佐々木源太左衞門どのと、名乘るゝ仁の旅宿は、何方ぞや。
亭主　ハイ、それはツイこの隣の座敷でござります。
河源　ナニ、ツイ隣とナ。それは幸ひ、早く取替へて來やれ。
作左　畏まりました。……併し、斯樣に、錠前を打ち碎き此まゝ持ち行かば、何ともハヤ。
河源　ハテサテ、延引いたさば却つて惡い。早く行け〳〵
作左　ヘイ。
河源　サア、キリ〳〵と、行かぬかい。
トきつと云ふ。チヨン〳〵。返し
本舞臺、矢張り二重。眞中、暖簾口。障子屋體・誂らへの通り。隣の宿屋の道具になる。爰に多賀の源太左衞門、着流し。貫左衞門、佐五左衞門、莨のんで居ろ。合ひ方にて道具とまる。
貫左　時に今日は、さぞお疲れでござらう。ちとお寛ぎ召され。
佐五　なんと、按摩でも呼びにやつて、揉んでもらはうではござらぬか。
多源　イヤ〳〵、先づ〳〵風呂へでも入つてからの事に致すがようござらう。
ト思ひ入れあつて聲を潛め
御兩所、スツパリ巧く參つてござる。
兩人　イヤ、それは重疊々々。
ト奥より、作左衞門、亭主を先に出で來り

亭主　イヤ申し、憚かりながらお客樣へ、お願ひの筋がござりまして、ちよつと參りましてござります。
貫左　ナニ、願ひの筋があつて參つたとは。
佐五　何者ぢや。
作左　ハツ、下郎は河內の國、佐々木源太左衞門が家來、作左衞門と申しまする者でござります。あなた樣方へ、お願ひの筋がござりまする。
兩人　ナニ、願ひぢや。願ひとは如何やうな儀ぢや。
ト源太左衞門、默つて居る。
作左　イヤ、別の儀でもござりませぬが、手前主人も佐々木源太左衞門。あなた樣も佐々木源太左衞門。苗字と申し紋所まで、寸分違はぬ具足櫃の印。大井川にて人足どもが、取違へましたるものと存じまする。何卒手前具足櫃と、お取替へ下さりませうならば、生々世々の御厚恩と、有り難う存じまする。
貫左　ヤイ〳〵、そりや何を申す。武士たる者が大切な具足櫃を、取違へて濟むものか。
佐五　左やう〳〵。此奴、とつけもない事を申す奴でござる。此方に且以て、左樣の覺え決して無いぞ。
兩人　キリ〳〵と罷り歸れ。不屆き千萬な奴の。

ト立ちかゝつて云ふ。亭主驚ろいて逃げる。源太左衞門思ひ入れあつて、兩人を押し止め
多源　さて〳〵、世の中には不思議の事もあればあるもの定めて先祖は故あるものでがなござらう。此方の具足その外相違なくば。………。ナ、ソレ、取替へておやりなされいサ。
貫左　成る程〳〵。エ、コレ、其まゝに取替へて遣はす奴ではなけれども
佐五　源太左衞門どのゝ御料簡。強いお詞に、免じて、取替へて遣はすぞ。
作左　すりや、お聞屆け下さりまして、私し方の具足櫃をお返し下されまするとな。エ、有り難うござります。
ト作左衞門、具足櫃を前へ出す。兩人、立ちかゝつて見て
貫左　こりや錠前が、打ち碎いてござる。
佐五　イカサマ、こりや如何いたした儀ぢや。
作左　イヤ、その儀は斯樣でござりまする。今晩ちと入用な品がござつて、その具足櫃を手前方のと存じ、明けようと致しましたるところ、いつかな〳〵、どの鍵にも合はず、元より短慮な拙者が主人、錠前を打ち碎けと云ひつ

け。是非なく御覽の如く、錠前を打ち碎きましたは、拙者が重々の不調法。幾重にも御料簡下さりませう。

兩人　源太左衞門どの、お聞きなされたか。

　ト源太左衞門、思ひ入れあつて

多源　すりや、蓋を開き、中なる品を‥‥。御兩所、改めさつしやい。

兩人　ハツ。

　ト立寄り、蓋を開き、恟りして氣を替へ

貫左　ハ、、、、。こりや其方、何か旅の氣晴らしに、我れ我れを嬲るのぢやな。座興も。時に依つたものぢや。包まずと此方の具足櫃を出しやれ。

作左　イヤ、これは大方、思ひ違ひでござらう。サア〳〵早く返してくりやれ。‥‥‥。ハア、成る程〳〵、承知仕つた。武士は相互ひなれば、貫左衞門どの、ナソレ他言は致さぬ

兩人　サア〳〵、早く返してくりやれ。

作左　イヤ、憚りながら、お嬲り下されまするは、あなた方ではござりませぬか。

兩人　ナニ我れ〳〵が嬲るものか。

作左　すりや、いよ〳〵。

兩人　實々誠に。

作左　イ、ヤ、この具足櫃は、あなた樣の覺え違ひ。此方の具足櫃、お返し下されい。

貫左　イヤナニ、源太左衞門どの、お聞きなされ。此奴、亂心いたして居ると相見えまする。あらう事か、あるまい事か、具足櫃の中へ、世帶道具の鍋釜を入れ置き、取替へてくれなどゝ申すのみならず

佐五　この品を此方の物ぢやなぞと申す奇ツ怪至極。打ち放す奴なれど、旅中の事ゆゑ、差許すぞ。キリ〳〵持つて歸り居らう。‥‥馬鹿な者にお構ひなくとも、風呂へでも入つて來ようではござらぬか。

貫左　それがようござる〳〵

　ト兩人奧へ入る。源太左衞門も。立つて行かうとする作左衞門とめて

作左　こりや、いづこへござります。

多源　默れ下郎め。最前から、おし默つて聞いて居れば、言語に絕せし無禮の一言。佐々木源太左衞門は武士だぞ、武士たる者が持ち扱ふ、具足櫃に下樣の、世帶道具の鍋釜を入れ置かうや。ハ、ア、聞えた、こりや何か同苗を幸ひに、うぬが主人と云ひ合せ。‥‥初めより企んだな。

物かず云ふな、聞く耳持たぬ。……この上は其方の主人に、直々逢うて返答次第。家來ども、この具足櫃、隣の座敷へ持つて行け。

作左　すりや、斯程まで申し上げましても

多源　ナニ支へ立て。源太左衞門は侍ひぢや………武士ぢやわやい。

作左　さう仰しやれば、私しも。

ト血相變へて思ひ入れ。この時後より、河内の源太左衞門、ツカ〳〵と出て、扇にて、作左衞門を打擲する、作左衞門、悔りして、

ヤ、あなたは、お旦那源太左衞門さま、何ゆゑ私しめをお打擲。

河源　ヤア、何ゆゑとは、不屆きな奴。其方が麁相は我が麁相。無禮な下郎め、扣へ居らう。……。イヤナニ、一河の流れも他生の緣と、斯く同苗同姓なるも、不思議の因緣。拙者事は、河内の佐々木源太左衞門と申す者。

多源　これは〳〵、身共は多賀の源太左衞門と申す者。

河源　初めて御意得申す。

多源　以後は互ひに、御別懇

兩人　致すでござらう。

河源　イヤナニ、源太左衞門どの、拙者所持の品を取持へ、錠前を打ち碎いたは、家來が不調法、その段は、幾重にも御免下されて何卒無難に此方の、具足櫃をお返し下さらば。

多源　默らつしやい〳〵。默らつしやい。

河源　ムウ。

ト思ひ入れ。

多源　何をベラ〳〵と、其許の御家來、鍋釜の入れし具足櫃を持參めされて、此方の具足櫃と取替へてくれいなどと、言語道斷な儀。貴殿までも同じやうに。よく物を考へて見さつしやい。武士たる者が具足櫃に、鍋釜を何の役に入れ置かうや。馬鹿な事を。

河源　イカサマ、御尤も。併し、この具足櫃の内に、左樣な品が入れてあつたやら、何ぢややら、ろく〳〵中をば知らぬ事。心急くまゝ錠前を打ち碎き、ちよつと蓋を。……明けて云はぬが武士の情。只此まゝに事故なく、お取替へ下さるゝが、お身のお爲にならうかと、憚りながら存じ申す。

多源　イ、ヤ、罷り成り申さぬ。

河源　ムウ。すりやどうあつてもこの具足櫃は、貴殿ので

はござらぬな。

ト多賀の源太左衞門、默つて居る。

河源　よろしうござる。よし又この具足櫃を、此方のに致せ、其許の具足櫃は、錠前のまゝござるが、いよ〳〵その具足櫃が、其許の所持の品ならば、入れ置きし兜は如何に……イヤサ、鎧は何色、軍用金は何程ござるな。

多源　サア、その儀は。

河源　然らばお返し下さるか。

多源　サア、それは

河源　但しは云ふか。

兩人　サア〳〵〳〵。

多源　サア、それは。

河源　よもや返事はござるまいがな。

多源　ムウ。

ト行き詰まる。

河源　即ち入れ置く品々は、兜は鍬形、鎧は黑糸縅、草摺には四ツ目結びの金物。左りの筥に五十兩。右の筥に五十兩。僞はりならぬ證據の合ひ紋。

ト鍵を作左衞門に渡す。

多源　それを。

トかゝるをちよつと押へて

河源　何をびくしやく、尾籠至極。お客人には立騷がずと、お下にござれサ。

ト此うち作左衞門、鍵にて具足櫃を明けて

作左　誠に仰せに相違なく

河源　中なる品に相違ないか。

作左　如何にも、相違はござりませぬ。

河源　ハテサテ、怖い世の中ぢやなア。

多源　もうこの上は。

ト抜きかけるを、ちよつと止めて

河源　こりや、何と召さるゝ、その刀で、身共を切る氣か。ムウ、ハヽヽヽ。犬侍ひのなまくら刃金で、佐々木源太左衞門が首は切れぬ。切るなら切つてお見やれ。

多源　なにを

ト振り切つて又抜きかけるを、押へて

河源　何を猪口才なほてでんがう、コリヤ、この源太左衞門は誠の武士。おのれ等如きなまくら金で、鍛へに鍛へし身が五體は、何として〳〵、及ばぬ事ぢや。兩腰差せば同樣に武士と思はうが、畢竟某なればこそ、餘人に斯樣な粗相があると、コレ、首が飛ぶぞよ。この後フツツ

リと嗜なみ召され。

多源　思へば〳〵。

ト又ツカ〳〵と來て、拔きかけるを、刀の鐺にてポンと當て

河源　お暇申す。作左衞門、ドリヤ、歸らう。

ト唄になり思ひ入れあつて、河内の源太左衞門、奧へ入る。作左衞門、具足櫃を舁き同じく入る。あと合ひ方。奧より貫左衞門、佐五左衞門、出て

兩人　源太左衞門どの。

多源　御兩所の手前、面目次第もござらぬ。

貫左　樣子はあれにて聞きましたが

佐五　こりや、此まゝには濟まされますまい。

多源　イヤモ、この上は破れかぶれ。隣の座敷へ忍び入り。いつその事に手短かに。コレ。

ト兩人へ囁く。

貫左　すりや、源太左衞門めを。

兩人　たつた一突き。

多源　コリヤ、密かに〳〵。

ト時の鐘になり、この道具、廻る。

本舞臺、また元の座敷になる。爰に河内の源太左衞門壹人思ひ入れあつて、庭を眺め居る。時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

河源　ア、いま打つ鐘は最早九ツ。今宵は思はぬ事に餘程の隙入り。ハテ、夏の夜は短かいな。

ト風の音になり、側にある行燈、仕掛けにて消える。

河源　ハテ心得ぬ。灯の消えしは、飛んで火に入る夏の蟲その身を失なふ……ハテ、心がゝりの事どもぢやなア。

トこの時、下手の柴垣より貫左衞門、佐五左衞門、拔刀にて忍び出で、探り寄りて、この聲をしるべに切りつける。

河源　ヤ、、何者なれば、騙し討とは、卑怯な奴め。

ト拔き合せ。ちよつと立廻りながら、下手へ下りる。よき程に、多賀の源太左衞門、上手の柴垣より鎗を持つて現はれ出て、覘ひ寄つて、源太左衞門を突く。源太左衞門、その鎗の鎗首を捕へ

河源　おのれ曲者、名を名乘れ〳〵。

多源　ムウ、聞きたくば云つて聞かさう。佐々木源太左衞門だワ。

河源　ナニ、源太左衞門とな。さてはおのれ、宵の遺恨を

根に持つて。

多源　オヽいゝ推量だ。武士たる者に飽くまでも、恥辱を與へた返報。思ひ知つたか。

トいろ〳〵立廻つて、三人にて切り殺す。奥にて物音する。源太左衛門、具足櫃の金と、鍬形の兜を取る事あつて、貫左衛門。佐五左衛門に囁く。兩人心得て奥へ入る。源太左衛門は思ひ入れあつて、下手の柴垣へ小隠れする。奥より作左衛門、手燭を持ち出で來り

作左　心得ぬ今の太刀音。

ト源太左衛門が死骸に躓き

ヤヽヽヽヽ。こりや親旦那様を何者が。エヽ親旦那さま〳〵。

ト思ひ入れあつて、具足櫃の開きしを見て

ヤヽ軍用金といひ、大切の鍬形までを。エヽコレナ、今一足早くば、この御最期はさせまいもの。追ひ腹切るは易けれど、一先づお國へ立歸り、この様子をお二人様へ、せめての形見に、コレ

ト思ひ入れあつて、源太左衛門の死骸の髻を切る。此うち多賀の源太左衛門、ソロ〳〵花道へかゝる。作左衛門、透かし見て

作左　曲者。

ト聲を聞き、花道より小柄を取つて

多源　エイ。

ト打つ。これにて手燭消える。

作左　取逃がしたか。殘念な。

ト口惜しき思ひ入れ。多賀の源太左衛門は、向うへ走り入る。チヨン〳〵返し。

本舞臺、誂らへ一面の竹藪になる。爰に以前の川越し、傳兵衛、五介、五郎、その外川越し大勢、茶碗酒を呑んで居る。禪のツトメにて道具とまる。

傳兵　コレ〳〵、今日は思はぬ仕事をして。大分餘計な錢を取つたから、サア〳〵、呑め〳〵。

五介　それ〳〵、わい等も、爰で一杯呑め〳〵。何ぞもつと取つて來い。

五介　今頃、何があるものか。併し、酒はまだたんとある。やらかせ〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて、焚火して酒を呑んで居る。向うより、貫左衛門、佐五左衛門、以前の形にて走り出で來り

貫左　コレ〱、わい等は先刻の川越し。よい所に居つた
　頼まれてくれ。

皆々　ヤア、あなたは、先刻のお侍ひ様。何なりとも。

佐五　イヤ、外の事でもないが。あの、源太左衛門の若黨
　めが、爰へ來るは必定。

貫左　ぶち殺してくれなば、また褒美はズツシリだが、必
　らず〱合點か。

皆々　合點でごんす。

兩人　忍べ〱。

ト皆々思ひ入れあつて、上下へ忍ぶ。パツタリ音して
作左衛門、藪疊を押し分け、源太左衛門が髻を口に啣
へ、白刃を提げて出る。左右より川越し出て、縫ひぐ
るみにて打つてかゝる。禪のツトメ烈しく立廻つて、
キツと留まる。鳴り物になり、これより貫左衛門、佐
五左衛門も、この中に入り、いろ〱立廻りあつて、
皆々、下手藪へ逃げ込む。作左衛門、あたりを見廻し
思ひ入れあつて

作左　爰で死ぬるは易けれど、一先づお國へ立歸り、奥様
や若旦那様へ、この場の樣子を逐一に申し上げ、その上
にて潔よく、腹かッさばいて未來のお供。さうだ。

ト行きかゝる。後より壹人の川越し窺ひ寄つて

川越　うぬ。

トかゝるを、ちよつと立廻つて、見事に上の藪の内へ
切り込む。これと一緒に雀の聲して、差し金附きの雀
大分、藪の内より飛び出る。川越し大勢、窺ひ出る。
これにて作左衛門、さてはトいふこなしにて、下手を
キツと見る。チヨンと木の頭。飛びしさつて身構へす
る。キザミよろしく、拍子　幕。

二幕目　源太左衛門屋敷の場

役名 ―― 北條多門の頭。日下十左衛門。同弟、淸
三郎。源太左衛門妻、渚。家中娘、小菊。同、若
葉。同、小野路。和多木辨次。若黨、作左衛門。
下部、勝介。佐々木源吾。佐々木源之助。

本舞臺、常足の二重。向う屋敷襖。上手、塗り骨の
障子屋體。この側に毘沙門天への常夜燈の結構なる

松の立ち木。この臺は切り石にて、屋根に注連張つてあり。但し人登る事あり。上下柴垣、枝折り戸。すべて佐々木源太左衞門屋敷の體。幕の内より小菊、小野路、若葉、三人家中娘の拵らへにて、上手の燈籠を目當に、お百度を打つて居る見得。三味線入り大拍子にて幕明く。
ト向うより和多木辨次、着付け袴、羽織にて、紺看板の中間へ肴籠に鯛と蛸を入れたるを持たせ、出て來り

辨次　何か佐々木氏の屋敷は、賑はしく聞えるではないか。

中間　左樣でござります。慥か今日は寅の日でござりまするに依つて、御家中の娘御達が、例のお百度でござりませう。

辨次　イカサマ、毘沙門天を信仰の家なれば、さうであらう〳〵。
ト云ひながら、本舞臺へ來り、門口にて

中間　賴みませう〳〵。
ト矢張り内にはこれを知らず、百度參りして居る。

辨次　百度參りに餘念はない。
ト辨次、肴籠を取つて

辨次　其方は屋敷へ、歸れ〳〵。

中間　ネイ〳〵。
ト中間は引返して入る。

辨次　御免下されい。
ト肴籠を持ち入る。これにも構はず、お百度を打つて居る。
誠に百度參りに、他愛なしぢや。
ト魚籠を下手に置き、思ひ入れあつて、右の數人に交り、お百度を打ちながら、三人に、いろ〳〵ある。ト三人、辨次を見て

若葉　どなたかと存じましたら、和多木辨次さま。

小野　いつの間に、お出でなされましたいなア。

小菊　さうして、お百度の邪魔を

三人　なされますないなア。

辨次　なされますないなア、とは何をなされますな。最前から、お賴み申さう〳〵と申しても、誰れ一人答へる者もなし、今日は辨次、當家の御主人、源太左衞門どの、お役向にて東國へ御發足、留守中のお見舞ひに推參いたした。それは格別、家中のお娘御達には、打揃うてお百度をめさるゝが、こりや何の爲でござるな。

若葉　今日は毘沙門様の御縁日、寅の日でござりまするゆゑ

小菊　わたし等が、御願參りのその代り

小野　このお庭の、あの常燈明へ、お參りしまするは

三人　御存じでござりませうがな。

辨次　この辨次、何とも惡い事は致さぬぞ。お身樣達の願ひといふは、ばつちり割つて欲しさぢや。そこで拙者がその願ひを叶へてやらうと存じて……先づ若葉どのが、この中の年かさ、十四の上は一つ二つ。願ひを叶へてあげ申す。

ト若葉にしなだれかゝる。若葉、飛びのいて

若葉　みだらな事なされたら、父樣へ申しますぞえ。

小菊　さうでござんす。父上へ云ひますぞ。

若葉　キツと表向きにて

三人　申し入れますぞえ。

辨次　何ぢや、表向きからこの辨次を、病づかすと云はつしやるか。申し上げるなら申し上げい。何でもメめ子のうさ〳〵。

ト皆々を捕へようとする、よき時分に、淸三郎、上下衣裳にて出て來り、直ぐに本舞臺へ來り

淸三　お願ひ申さう〳〵。

ト云ひながら入る。辨次は矢張りこれを知らず、三人を追ひ廻す。トヾ三人、辨次を突きこかし、逃げて入る。辨次、起き上がつて

辨次　ドツコイ、さうはさせぬワ。

ト淸三郎に抱きつかうとして、悧りして

ヤア、其許は日下淸三郎どの。

淸三　これは、和多木辨次どの。

辨次　惡い所へ

淸三　只今の體たらくは。

辨次　イヤ、只今の體たらくは、それ〳〵今日は寅の日、そこで家中の娘達がお百度。そこへ拙者も參り合せまして、毘沙門天を拜禮いたし居つたのサ。

淸三　成る程、今日は寅の日、そこで娘達を捕まへて。

辨次　ヤ。

淸三　ハテ、御信心な事でござるてな。

辨次　信なれば德あり。身共常より大信心でござるてな。

淸三　して、そればかりの思し召して、當家へお越しでござるかな。

辨次　イヤ〳〵、左樣ではない。

ト最前の魚籠を出し
清三郎どの、これ御覽下されい。この如く肴を持參いたして、源太左衞門どの留守中の、お見舞ひの爲に參つたのでござる。

清三　それは御懇志の儀でござるな。

辨次　して、其許にも、お見舞ひでござるかな。

清三　イヤ、某は少々外に……成る程、お留守見舞ひでござる。

ト此うち猫出て、件の魚籠の蛸を啣へる。辨次、見て

辨次　南無三、猫めが蛸をば……コリヤ／＼、ならぬ。シイ／＼。

ト魚籠を提げながら押へる。猫は奥へ蛸を啣へながら入る。辨次、これを追ひながら、奥へ入る。

清三　ハテ、騷々しい人ではある……賴みませう／＼。

ト合ひ方になり、若葉、小菊、出て來り

若葉　オヽ、あなたは清三郎さま。

兩人　ようお出でなされました。

清三　これは若葉どの、今お一人は植村どのゝお娘御、今日は定めて毘沙門天の御緣日ゆゑ、當家へ御參詣でござるかな。

若葉　モシ、清三郎さま。わたしや、あなたにたんと話しがござりますわいなア。

清三　これはしたり。どういたしたものでござる。物堅い源太左衞門どのゝお屋敷、左樣な事はナ……お嗜みなされませ。

小菊　モシ、若葉さん。何やらお屋敷も、お取込みな樣子もうお暇いたさうぢやござんせぬかいなア。

若葉　サア、行く事は行くけれども、わたしや、あなたに。

ト思ひ入れ

小菊　それぢやと云うて、歸りが遲うなりますわいなア。

清三　あのやうに小菊どのが云うて居らるゝ。早うお歸りなされませ。

小菊　左樣なら清三郎さま。……サア、參りませうわいなア。

ト若葉の手を引く。

若葉　せわしない、只今參りますわいなア。

ト唄になり、小菊、若葉、向うへ入る。合ひ方になり
渚、奥より急いで來り

渚　これは／＼、どなた樣かと存じましたら、日下十左

御門さまの御舎弟清三郎さま、ようお出でなされまし
た。
清三　これは奥方渚さま、先づは御健勝で、重疊に存じま
す。拙者事はお留守中、見舞ひやら、また少々内々にて
渚　ナニ、内々にてお話しが。それは御苦勞に存じます追
ッ付け悴源之介も、歸りまするでござりませう。マアマ
ア、おゆるりとなされませいなア。
ト唄になり、向うより佐々木源之助、上下衣裳、大小
にて、左の小指を紙にて括り、志貴山參詣歸りの心。
中間一人供して出て來り
源之　定めて母人には、お待ち兼ねてあらうワ。
中間　左樣でござります。併し、まだ七ツにはなりませぬ
てな。
源之　道を急ぎしゆゑ、少しは早く覺えるやうぢや。
ト云ひながら本舞臺へ來て
中間　若旦那のお歸り。
ト源之助先へ、中間も付いて内へ入る。奥より腰元一
人出て
腰元　オヽ、若旦那樣、お早うござりまする。
渚　ヤレ〳〵、源之助か。待ち兼ねました。

源之　左樣存じて私しめも、道を急ぎましてござります。
これは日下清三郎どの。ようお出でゞござりまする、
清三　源之助どのには、志貴山へ御參詣でござりました
か。
源之　毎月寅の日には、參詣いたすでござりまする。
ト懷中より守り札を出して
おまつ、この守を神棚へ、粗末なきやう直して置きや
れ。
腰元　ハイ〳〵、畏まりました。
ト右の札を取つて入る。
源之　ナニ、有助、其方も草臥れたであらう。部屋へ參つ
て、休め〳〵。
ト中間、奥へ入る。
源之　清三郎どのには、定めて親ども留守中、お見舞ひで
ござりまするか。
清三　如何にも、お見舞ひやら、また外に、少々申し入れ
たき儀ござつて。
源之　ナニ、内々の儀とはナ。
渚　心ならぬ内意の儀。
源之　して、それは、如何の儀でござるな。

清三　何か仔細は存じませぬが、兄十左衛門へ殿様より、仰せ出されし事あつて、暮れ早々御當家へ上使との事。源之助とは竹馬の因み。お心入れにもならうかと存じ、內々申し入れまするやうにござる。

源之　御深切なる清三郎どのゝお志し。千萬忝なう存じまする……様子は知らねど、內意の御上使。

トこなし。

渚　夫の留守に、殿様よりの御意の下るは。

源之　心がゝりは毘沙門天の拜前にて。

ト指を見せる。

渚　どうしやつた。

清三　血に染む紙のその疵は。

渚　ナニ、指の怪我とは。

ト驚ろく。

源之　アイヤ、別してもない事……清三郎どのには御退屈。せめては拙者が手前の薄茶なりとも。

清三　イヤ〳〵、お心遣ひ、御無用になされませう。

渚　俄かに動搖、胸騒ぎがするやうな。

源之　ハテ、何も其やうに、お心遣ひは……なんと清三郎どの、左様ではござらぬか。

清三　なか〳〵左様でござる。

ト三人顔見合せ、思ひ入れ。向うより源吾、袴、羽織覆面頭巾にて出て來り、直ぐに舞臺へ來り、頭巾を取つて

源吾　御免下されい。

源之　其許は佐々木源吾どの。

渚　ほんに源吾さま。

清三　御遠慮の身を以て

源之　手前屋敷へ

渚　お越しあつたは。

源吾　成る程、不審は尤も。同姓のよしみ、お留守中も心にかゝれば、上を犯し、忍び參るも、密々のお話しあつて。見れば日下の舍弟清三郎にも、これにござるか。何れも御免下されませう。

ト刀を提げ、二重上手へ直り

さて、何は格別源之助どの。お母上とも留守中、さぞお淋しくござらう。併し、御壯健で重疊々々。

渚　お前様も御機嫌で、お嬉しう存じまする。

源之　同性のよしみと御懇志のお尋ね。忝なうは存じますれど、殿様より仰せ渡されし、お上を遠慮の身を以て、

源吾　往來あるは後日のお咎め。何ともハヤ。
清三　ハテ、そのお咎めも承知いたし居るが宿所に居つても心にかゝるは、御兩所の事。その上、何か御前の樣子を承れば、いよ〳〵以て心ならず、推して參るもくどい事だが、同姓のよしみ。時に、日下清三郎どの、これに居召さるは、何ぞ御舍兄より、御用でもござつてか。
源之　イヤ、左樣ではごさらぬ。手前とても御見舞ひ…誠に先刻よりの長座、最早お暇仕りませう。
清三　ナニ、御歸宅とな。
源吾　源吾さまには、これでゆるりと…渚さま、源之助どの、いづれ明日。
清三　成る程、また〳〵御意得ませう。
源之　左樣ならば、ようこそ。
渚　方々、おさらば。
清三　ようお出でなされました。
源之　ト唄になり、こなしあつて向うへ入る。
源吾　ナニ、源之助どの、この頃の風聞聞かしやつた事はござらぬかな。
源之　風聞とは、そりや何事でござりますな。
源吾　エヽ、まだ知らずか。

渚　源吾さま、何やら心ならぬあなたのお詞…して、風聞とはな。
源吾　サア、その風聞は…イヤ、何でもござらぬ。この頃は志貴の毘沙門、殊の外繁昌と申す事サ。
渚　何やら心ありげな源之助が、その指の疵といひ。
源之　ハテ、何を御意なされまするぞ。斯樣な時には、御酒一獻、幸ひに源吾どのもお入りなり、マヽ、奥へお越しなされませう。
渚　成る程、憂ひを拂ふ玉はゞき。イヤナニ、源吾さま、あなたにも。
源吾　イカサマ、下世話で申す、留守事とやら、御馳走にあづかりませう。
渚　源之助もおぢや。
源之　先づお出でなされませ。
渚　源吾さま。
源吾　ドリヤ、參りませうか。
ト唄になり、こなしあつて源吾渚は奥へ入る。源之助一人殘り
源之　遠慮の身を以て、推して入來の佐々木源吾。先達て館に於ての彼れが振舞ひ。それに引替へ今日の詞は、

二幕目

世の風聞を知らぬかと、事ありげなる一言といひ、清三郎どのゝ内意といひ
ト指を見て
神前にて血汐をあやせしは、ハテ、心ならぬ事ではある。
トぢつと思ひ入れ。トヒヨになり、鳩一羽、空よりパツタリ落つる。これに目を附け、ツカ〱行つて、これを取上げ
鷹に追はれて落命せしか。誠や鳩に三枝の禮。人を救ふる古語の戒め。元來八幡大神の愛鳥、武家を守りのこの鳥が、今目前に命を落せしは、ヤ、、、こりや只事では。ムウ。
トべつたり下に居て思ひ入れ。合ひ方キツパリとなり、向うより作左衞門、出て來り、花道よろしき所に留り、舞臺を見て
作左　最早旦那のお屋敷。これまでは氣を急いで歸つたがこれから先が、おらが爲には、鐵の關所も同然。島田の宿の大騷動、斯樣々々と……云はれぬわえ〱。
トきつと思ひ入れ。
源之　親人の御發足、兼ねて水難の相ありと聞く、鳩の有樣。
作左　この身の云ひ譯。
源之　もし道中にて
作左　旦那の御最期。
源之　お身の災ひ。
作左　あからさまには
源之　ハテ、心苦しい
作左　事ぢやなア。
ト双方思ひ〱のこなし。
さうだ。いつまで思うても同じ事だ。申し譯には。
ト腹切らうと云ふ思ひ入れして、ツカ〱と門口へ來て、モヂ〱して入り兼ねるこなしにて、思ひ切つてツト入る。源之助と顏見合せ
若旦那樣。
源之　そちや、作左衞門ではないか。
作左　ヘイ〱。
トみすぼらしく下に居る。
源之　何用あつて、親人の供先よりは立歸つたぞ。
ト急いで云ふ。
作左　ヘイ〱。
ト術なき思ひ入れ。

源之　母樣々々、作左衞門が歸りましてござりまする。

ト けはしく云ふ。

渚　ナニ、作左衞門が戻つたとは。

ト 奧より出る。

源之　親人には、鎌倉へお越しあつたか。

作左　ヘイ／＼。

源之　何を云うても、ヘイ／＼と、サ、、用事は何で、如何の事か、早く母樣へ申し上げぬか。

作左　ヘイ／＼。

渚　心にかゝる事もあれば、道中の樣子早う聞きたい。作左衞門。

源之　樣子はなんと。

兩人　サ、、早く云はぬか。

作左　サア、申し上げます／＼。申さうと思つて、惜しからぬこの命を。

源之　ヤ、なんと。

作左　イヤサ、命の切端、申し上げるも情ない、お旦那樣には

源之　如何なされた。

渚　御病氣でも發つたか。

作左　モシ、お旦那樣にはかゝつて、島田の宿て…島田の宿にて口惜しや、人手にかゝつて、お果てなされましたわい。

ト 思ひ切つて云ふ。

兩人　ヤ、、、、。

ト 大愽りして、双方より取り付きして、

渚　相手は何者。

源之　いづくの誰れ、始終の樣子は。

渚　コレ、作左衞門。

兩人　どうぢやぞいやい。

ト この時、上手の障子屋體より、源吾、いろ／＼と窺ひ、よしと云ふ思ひ入れして、引込む。

作左　サ、その相手と申すは、北國の武士、同姓同名、佐々木源太左衞門と申しまする者でござりまする。

源之　すりや、敵といふは、佐々木の同苗。アノ

渚　源太左衞門とな。

ト 向うを見詰め、無念の思ひ入れ。源之助、作左衞門が襟髮を取つて、引きつけ

源之　ヤイ、玆な不忠者めが。大切な御用先ゆゑ、道中萬端親人樣に、心を付けよと云ひ付けたに、主人を殺され、その敵を取逃がし、おめ／＼うぬは歸つたな…人非人

と云はうか、獄卒と云はうか、エヽおのれはなアく〳〵
トいろ〳〵作左衛門を振り廻し、無念のこなしにて突
き放す。

作左　サヽ、御尤もだ〳〵。その場で下郎も、どん腹とは
存じましたが、せめて旦那のお形見、又はその敵の次第
も申し上げてと、すご〳〵歸るも心け早鐘、足の踏み度
も覺えぬ旅路。モシ、奥様、若旦那様、せめては旦那に
お逢ひなさるると思し召して
ト風呂敷包みを取つて、内より袱紗に包みし切り髪を
出して
御覧なされて下さりませう。
トおづ〳〵渚の前へ差出す。渚、取つて

渚　すりや、これが夫の形見。
ト明けて見て
そんなら、この切り髪が。
ト愁ひの思ひ入れあつて
コレ、源之助。
ト見せる。

源之　父のお形見。
ト手に取りて、ヂツと見詰めて

親人様、さぞ御無念にござりませうな。私しがお供せば
斯くやみ〳〵と、御最期はさせまいに、思へば〳〵。
トこなしあつて
母様。

渚　源之助。

源之　これが父の。

渚　夫の。
ト互に手を取り交し、切り髪を見て

兩人　ハア。
ト泣き落す。此うち作左衛門、いろ〳〵愁ひの思ひ入
れ。暮れ六ッの鐘鳴る。源之助、渚、これに耳を付け
て

渚　最早、暮れ六ツ。

源之　清三郎どのゝ内意の御上使。

渚　お出でに間もござるまい。

源之　先づそれまでは親人様の、このお形見。

渚　せめて佛間で

源之　御回向を。
ト顏見合せ、愁ひのこなし

母様。

渚　源之助。
源之　佛間へお越しなされませ。
ト唄になり、しづ〳〵と兩人奥へ入る。作左衞門、後見送り、思ひ入れ。
作左　御兩所樣の今のお詞。今宵御上使のお入りあるとは、ムウ、腹かツさばき申し譯と、覺悟はしたが、心にかゝる上使の樣子。
トあたりへこなしあつて
さうだ。
ト思ひ入れあつて下手へ入る。上手の障子屋體より、源吾出て
源吾　島田の宿の騷動、源太左衞門が働らき。何の苦もなく日頃の鬱憤晴らすといひ、この上は佐々木の系圖を
トこなし。上手より、辨次、外に一人、忍びの者出で來り
兩人　源吾さま。
源吾　コリヤ。
辨次　兼ねて申し合せし通り、これなる腹心の者に申し付け置いてござる。
源吾　出かし召された。其方はこの小筒を持つて、あの松ケ枝に忍び居て、源之助めをドッサリと。
忍び　お氣遣ひなされますな。油斷を見濟まし、この小筒で。
辨次　命の引き金、たつた一擊ち。
源吾　必らずぬかるな。
忍び　心得ました。
源吾　程よき所へ、密かに忍べ。
忍び　ハツ。
ト忍びは小筒を持つて、上手へ入る。
源吾　この上は、猶も密事を。
ト囁く。
辨次　心得ました。萬事後刻。
源吾　お出でなされい。
ト辨次は奥へ入る。この時、向うにて
呼び　御上使の御入り。
源吾　はや十左衞門めが上使の役目。こいつもどうで生かしては置かれぬ。ソレ。
トこなしあつて奥へ入る。唄になり、源之助、渚も奥より出て
渚　待ち設けたる御上使樣。

源之　母様にも、お出迎ひ。

渚　心得ました。

ト兩人向うへ出て、兩手を突きこなし。太鼓謡になり向うより十左衞門、上下衣裳にて出て來る。後より若黨勝介、刀箱を持つて出る。

十左　殿の嚴命、上使として、日下十左衞門、罷り越してござる。親子ともに出迎ひ大儀。

渚　存じがけない俄の御上使様。

源之　御苦勞至極。先づ／＼

兩人　お通り下さりませう。

ト矢張り右の鳴り物にて、十左衞門、二重へ通り、上手に直る。

渚　恐れながら御上意の趣き。

源之　仰せ聞かされ下されませうならば

兩人　有り難う存じ奉りまする。

十左　上意の趣き。只今演舌。

兩人　ハツ／＼。

ト恐れ入る。鼓の合ひ方になり

十左　謹んで承聽。

トこなしあつて

其方父、佐々木源太左衞門、重き役目を蒙りながら、道中島田の宿に於て、私しの爭論、剰さへ殺害され、武將へ獻上の月光の鍬形まで、奪ひ取られし條、不屆き至極と以ての外の御怒り。なれども、勤功にめで、其方どもも死罪一等を赦し、知行沒收、屋敷は改易、母渚諸とも今日より追放との上意。有り難くお請け申してよからう。

源之　すりや、親人横死、獻上の品紛失ゆゑ、知行屋敷を召上げられて

渚　我れ／＼親子は、御追放でござりまするか。

ト愁ひのこなし。

十左　親の不覺は、その身の不運とは云へ、殿の御仁心、縛り首にあはんよりは、お身達の仕合せと申すものサ。

ト源之助・渚、ムツとしたる思ひ入れにて

渚　イヤ、憚りながら、御上使様へ申し上げます。夫源太左衞門、お目鏡を以て、この度の役目を蒙りましたれども、時の災ひ、武に逞ましき武士も、騙すに手なし、やみ／＼討たれさうな源太左衞門ぢやと、思し召しますかいなア。日頃から御懇志な日下さま、殿様のお怒りがござりませうとも、斯様々々と、なぜお執成しに下されませぬ。縛り首にあはうより仕合せ者とは、お情ないや

うに存じまする。
源之　アイヤ、母人様。今日は大切なる御上使様。お役の表、麁忽のお詞。マ、、お扣へなされませう。
渚　それぢやと云うて
源之　ハテ、お鎭まり下されませい。
　ト こなしあつて
母渚の只今の申し條、御上使へ對し無禮。さりながら、女の一途、御免下されて、何卒殿様へお願ひ。知行屋敷は召上げらるゝとも、父の敵多賀源太左衞門、尋ね出して親の敵。この儀ばかりは御宥免あるやう、御前の執成し、十左衞門どの、偏へに願ひ奉りまする。
　ト 思ひ入れ。
十左　ヘ、、、。敵討とは武士たる者の願ひ。よく物を辨まへられよ。闇討ち同然に切り殺され、その上、献上の鍬形までを、奪ひ取られし不覺の父。献上の品紛失とあつては、武將への申し譯立ち難く、卽ち殿の御越度。
兩人　エ、。
　ト きつと云ふ。
十左　三代相恩の御主君へ、越度を蒙らしたる科の償ひ、何と致す。
源之　サア、その儀は。
十左　されども御仁心にて、改易追放、罪ある身を以て、敵討の願ひなぞとは、不屆き至極。
勝介　お旦那のお執成しで、御兩所様のお身の納まり。御得心なくば、憚りながら手を下ろして。
十左　縄目の耻を蒙むる心か
源之　サア、その儀は。
勝介　但し御返答がござりまするか。
源之　サア、それは。
十左　親子諸とも立退き召さるか。
兩人　サア。
十左　サア
皆々　サア〳〵〳〵。
十左　返答おしやれ。ナ、なんと。
　ト 詰め込む。源之助、渚、當惑のこなし、この時奥より
源吾　ヤレ、暫らく〳〵。
　ト 源吾、出て來り
十左衞門どの、先づ〳〵お待ち下さりませう。
十左　お身は佐々木源吾、遠慮の身を以て、上使へ對し麁

忽の一言。

源吾　ハツ〳〵。

ト平伏して

殿様の御不興蒙むり、閉門同然の　某。罷り出るは、罪に罪を重ぬる道理ではござれども、そこが侍ひ、佐々木の同性、見るに忍びず、拙者がお願ひ。

十左　ハテ、據ろなき願ひぢやなア。して、その仔細は如何なる儀。

源吾　今度、佐々木源太左衛門、島田の宿にて計らず横死、大切なる月光の鍬形、奪ひ取られしと、承つて拙者が驚ろき。殿様の御越度と相成る上は、重罪たる彼れ等親子。四海の政道、是非なき次第、さりながら、源之助はまだ前髪、申さば小児も同然。渚どのとても女儀の事。それゆゑ罪科を輕く、御追放ではござれども、そこを枉げてのお願ひと申すは、何卒敵討の儀を、御免なし遣はされ下さらば、倶に力を添へて、親子が本意を遂げさしたく存じまする。十左衛門どの、何卒貴殿の執成しにて、御前よろしく御推擧の程、頼み　奉る。

十左　すりや、弱きを助け、お身が助太刀いたして。

源吾　如何にも、親の耻辱が雪がせたく存じまする。

十左　日頃に變る眞心の願ひ。いよ〳〵それに違ひないか。

源吾　兩刀は飾りではござらぬ。今日から心を改め、佐々木源吾、共に追放仰せ付けられませう。

源之　ア、イヤ、源吾どの、段々の御深切は、忝なう存じますれど、助太刀の儀は、御無用になし下さりませう。

源吾　とは又なぜ。

渚　神影の奥儀を極めし佐々木の家。若輩なれども、我が夫源太左衛門どのより、傳へ置かれし口授口傳。斯様申せば烏滸がましくはござれども、親が覺えの源之助。

源吾　サ、それは存じて罷りある。若輩ながら、器量骨柄備はる子息ではござれども、多勢に無勢。もし敵が大勢なれば、また助太刀もなくては叶はず。一流極めし御親父でも、島田の宿で無慘の最期、餘り自慢も出來ないものサ。なんと御上使、左様なものではござらぬか。

十左　手だれといへども時の運、おのれをおのれと頼みにならず。然らば源吾には、源之助親子に力を合して。

源吾　敵討は元より、紛失の鍬形、キツと詮議して差上げませう。

勝介　したり、武士の生粹、侍ひは、さうなくては叶はぬ叶はぬ。

源吾　弱きを助け、強きを挫く身が心。義を見てせざるは勇なし。
十左　天晴れ發明。もし殿樣に御許容あらば
源吾　源之助親子は、身共が預かり、力となつて
十左　敵を討たせ
勝介　寶の詮議も
源吾　キツと拙者が
十左　致してやるか。
源吾　如何にも左樣。
十左　ハテ、よく企んだなア。
源吾　何がなんと。
十左　辯舌巧みに乘せかけても、日下十左衞門は兩眼明らか、日月同然。
源吾　すりや、某が心中に、企みがあると云ひ召さるのか。
十左　心に問はゞ何と答へん。
源吾　何がどうした。朋友の信義、殿への忠義。命を捨ての身が助太刀。上使とて容赦はない。今一言云うて見よ。その座は立たさぬ。十左衞門、返答はドヽ、どうだ。
十左　その位でなくば、根強い企みは出來ない筈だ。兼ね〴〵望む當家の系圖、ムザ〳〵としてやらうとは、ハテ、あざとい奴の。十左衞門が睨んだ眼は、卽ち淨玻璃。善惡邪正は只今明白。弟清三郎、囚人早く、これへ引きやれ。
清三　ハア。
ト奥より辨次を繩付きにして引立て出る。源吾、見て惘りして
源吾　そちや、和多木辨次。
辨次　斯くの仕合せ。
清三　兄者人の指圖にて、召捕つたる和多木辨次。拷問の上何もかも、白狀に及んだわやい。
源吾　すりや、云ひ合せた始末をば、云うてしまつたか。
辨次　殘らず白狀。源吾さま、佛の椀だと諦めさつしやれ。
源吾　ムウ。
ト見込み、無念のこなし
渚　ほんに恐ろしい、我れ〳〵親子を預かつて
源之　系圖を奪ひ、親子の命を取らん企み。
十左　天道などか免すべき、彼れが積惡。
勝介　尻抜けざしの猿智惠で、面眞赤いに化けの皮・顯は

れた源吾さま。
清三 最早叶はぬ科明白。
源之 親人御最期も大方、お身が企みであらう。
渚 サア、眞直ぐに白狀しや。
源吾 イヽヤ、知らぬ、存ぜぬぞ。
十左 この期に及び、未練の一言。但し其方の面前で、其奴を拷問いたさうか。
源吾 サア、それは。
十左 白狀いたすか。
源吾 サア。
十左 サア。
皆々 サア／＼／＼。
源吾 もう、この上は破れかぶれだ。十左衛門、覺悟。
ト切つてかゝるを、立ちかゝつて、ポンと當てる。此まゝへたる。
皆々 これは。
トこなし。
十左 詮議ある佐々木源吾、只この儘に。弟、申し付けたる用意の乘り物。
清三 畏まつてござります。

ト下手より網乘り物を舁いで出る。清三郎、勝介、兩人にて源吾を乘り物へ打込み、戸を立て、よろしくあつて
然らば拙者は、此まゝ屋敷へ。此奴も共に……屋敷へ引け。
辨次 エヽ、いめいましい。
十左 早く／＼。
清三 ハツ……乘り物急げ。
駕舁 ハツ。
ト乘り物先に、清三郎、引添ひ、辨次、繩付きの儘引き立て、向うへ急ぎ入る。源之助、渚、こなしあつて
源之 お目鏡を以て源吾が罪科、露顯の上は
渚 何卒親子の者がお願ひ。
源之 敵討の儀を、幾重にも
渚 お願ひ申し上げまする。
十左 その願ひは、相叶はぬ事サ。
兩人 すりや、如何やうに申しましても。
十左 叶はぬ譯は、大切の鍬形の紛失。
兩人 エヽ。
十左 但しは、その鍬形、殿へ差上げたるか。

源之　サア、その鍬形は紛失。
渚　行くへ知れざるお家の寶。
　ト兩人顏見合せ、吐息つく。この時、下手より
作左　イヤ、その鍬形、差上げませう。
　トつか〳〵と出る。
源之　其方は作左衞門、紛失の鍬形を
兩人　差上げんとは。
作左　即ち下郎が、所持仕つてござりまする。
十左　所持とあらば、早くこれへ相渡せ。
源之　親人御最期の場より紛失の鍬形、其方が所持いたすとは。
渚　合點のゆかぬ、作左衞門。して、御上使樣へお渡し申す、その鍬形は。
作左　お氣遣ひなされまするな。その鍬形は下郎が所持。御上使樣、イザ、お手渡し仕りませう。
十左　然らば、これへその鍬形。
作左　いかにも鍬形、イザ、お受取り
　ト刀を逆手に
下さりませう。
　ト腹へ突き立てる。皆々これを見て

源之　作左衞門。こりや何ゆゑの切腹なるぞ。
渚　氣を慥かに持つてたも。
　トこなし。
十左　寶の紛失、主家に代つて、云ひ譯の腹切りよな。
源之　作左衞門、して云ひ譯の筋ばしあるか。ナ、、なんと。
作左　若旦那樣、奥樣、いづれ死なねばならぬ下郎。大切の旦那のお供、側に居ながら、やみ〳〵と、人手にかけし不忠の某。五臟六腑はでんぐり返り、申し譯もござらぬ體。御上使樣の今のお詞、敵討はならぬと、理非明かなお上の裁許、聞く程胸も苦しくて、堪へられたものではござりませぬ。せめてその夜のあらましを、申し上げなば千に一つは、お聞き屆けもござらうかと、斯くの仕合せ、憚かりながら一通り、お聞きなされて下さりませう。
　トこなし。
十左　今際の願ひ。して、その敵の次第は、なんと〳〵。
作左　申し上ぐるも便なき次第。
　ト合ひ方、變つて
急ぎの道中、夜を日につぎて、大井川をも易々と、島田

の宿のお泊りにて、お疲れ休めと存じの外、具足の取り違へ、俄の敗亡、下郎が仰天。よく〱事を相糺せば、合ひ宿いたせし北國武士、苗字も名も旦那と同じ事、縮符もそのまゝ、佐々木源太左衞門。具足にも四ツ目結ひ、人足どもの取り違へと、心付くより此方から、七重の膝を八重にして、詫ぶれどきかぬ相手の理不盡。とゞは旦那が直々に、面會なつて理詰めの計らひ。何なく此方へ取返し、後は亭主の扱ひにて、無事に納まる旦那の喜び、下郎が安堵。なれども油斷はならないと、間を隔てゝもその夜の宿居、盜人の隙を窺ふ源太左衞門。いつの間にやら寢所へ忍び、彼の鍬形に路用の金子、盜み取つて駈け出すを、スワ盜人とお旦那様、枕刀を取る間もなく、非道の劍に無慘の御最期。その物音に起き合はし、うぬ盜賊と引ツ捕へしが、彼奴もしれ者、振りほどき、逃げるを逃がさじと挑むうち、同類共に支へられ、やみ〱と取逃がし、詮方盡きてお死骸を、見れば無慘や・はや御最期。その場で直ぐに切腹と、刀には手は掛けましたが、せめてはこの御様子申し上げてと、すご〱歸る下郎が心、どのやうにあらうと思し召しまするぞ。肉も骨もズタ〱に、離るゝばかり。申し譯のこの切腹。モシ、十左衞門さま。何卒若旦那様のお願ひ、敵討の御免をば、コレ、手を合して拜みます。どうぞ叶へて下さりませう。

ト此せりふ一つ〱こなし。源之助、始終無念の思ひ入れにて、向うを見詰めるこなし、渚、涙を拂ひ思ひ入れ。

渚　作左衞門が物語り、强ち夫の不覺と申すでもござりませねば、源之助がお願ひ。この上のお情に、十左衞門さま。

源之　母人の御意の通り、只管父の仇討ちを。

十左　いよ〱ならぬ。叶はぬ事ぢや。

源之　すりや、如何やうに申しましても。

十左　様子を聞けば、猶々不覺の源太左衞門。末世末代・殘す恥面。

ト きつと云ふ。源之助、口惜しき思ひ入れ。

源之　上使の過言堪えるも、この身の願ひ立てたさばつかり。倶に天の戴かざる父の仇、

作左　主人の敵、多賀源太左衞門。

渚　討つて手向くる操と孝。

源之　この上は、命を的の拙者が願ひ。畏れ多くござれども、殿へ直さま…母人・ござれ。

ト兩人、血相かへて花道へ、ツカ〳〵と行く。

十左　兩人待て。

源之　なぜお止めなされますな。

十左　上意をもどけば、不忠になるぞや。

兩人　サア、それは。

十左　但し、お咎め蒙むつて、罪に罪を重ぬるか。

兩人　サア、それは。

十左　忠義全き敵討、家相續には時があらう。時節を待ちやれ。サア、人は時節を待つものぢや。

源之　すりや、上意なければ、敵も討たれず。

十左　不覺者の彼れ等親子、召捕つて掟を糺す。者ども、源之助に繩打て。

ト向うにて

捕手　ハア、。

ト袴股立ちの侍ひ四人、十手を持つて出て來り

動くな。

源之　こりや、何となされます。

十左　搦め捕れ。

四人　捕つた。

トかゝるを、見事に投げのけて

源之　忠を立つれば孝に缺くる、源之助が身の浮沈。

ト立廻つて

渚　例へお咎めあるとても申し出せし親子が願ひ。

源之　お聞き屆けあるまでは、いつかなこの場は動きませぬ。

十左　猶豫いたさず、搦め捕れ。

源之　手向ひ御免。

トきつとなる。これより「鐵輪」の唄に合せ、四人と立廻つて、ドゞ四人を投げのけ、キツと見得。

十左　者ども引け。

皆々　ハア。

ト引き、上下へ入る。

十左　ハテ、天晴れな。若年に似合はず、一心据りし大丈夫なる親子が魂ひ。流石は源太左衞門どのゝ御子息。感心感心。

ト奥へ向ひ

我が君、御覽遊ばされましたか。

ト奥にて

多門　聞いた〳〵。

ト北條多門の頭、袴にて出て家來二人を連れ來り樣子は殘らずあれにて聞いた。斯くあらんとは知つたれども、もしやと思ひ、十左衞門に申し付け、試させしに案に違はぬ兩人が立振舞ひ。驚ろき入つたる心がけ。イヤナニ、親子の者。

兩人　ハツ〳〵。

多門　近う〳〵。

ト兩人、近く寄る。

その手の內にては、よも仕損ずる事はあるまい。この上は聞き屆けた。今こそ許す、敵討の免狀。ソレ、十左衞門、親子の者に遣はせ。

十左　ハツ。

ト取次いで、立文を源之助に渡す。

源之　すりや、御許容あつて

十左　殿の御墨附。

源之　ハツ。

トつか〳〵と來て、御書を受取り

兩人　有り難う存じまする。

作左　エヽ、有り難い〳〵。敵討御免とござれば、親旦那にも、草葉の蔭にてお喜び。そのお使ひはこの下郞。

源之　其方が命を捨てしゆゑ、お許し受けし親子が願ひ。其方も敵を討ちしも同然。

作左　エヽ、忝ない。

多門　今の働らき見る上は、例へ敵源太左衞門、何程の手並たりとも、忠孝の劍を以て、仕留める事、間もあるまじ。この刀は先達て、其方が父源太左衞門が、差上げたる朝日丸の名劍。佐々木重代の劍とあれば、敵討の餞別に遣はす。イザ。

源之　ハツ〳〵。

ト摺り寄つて、刀を受取り、押戴き

重々厚き御仁惠の賜物。有り難く頂戴仕つてござりまする。

ト喜ぶ思ひ入れ。渚もこなし。

渚　冥加に餘る御前のお情。これと申すも十左衞門さまのお庇。チエヽ、有り難う存じまする。

十左　君の惠みを頭に戴き、敵に巡り、本意の逹し、再び故鄉へ歸り咲き。

源之　開くる運のこの仇討。草を分つて尋ね出し、やがて敵の首引ツ提げ、歸國の上にて、この御恩。

渚　報ずる時節も今暫らく。此まゝ親子は出立せん。

作左　下郎は死出の旅立ちにて
多門　死の緣無量、不便の最期。
作左　それも主人へ忠義の爲。何れも樣、早おさらば。
ト笛を掻き切り、バッタリ落入る。
兩人　南無阿彌陀佛。
十左　ハテ、健氣な振舞ひ。惜しき若者。
源之　譜代忠義の作左衞門、不便な最期を遂げたなア。
多門　めでたい折柄、涙は不吉、手向けの花より、あの松を、ナ、ソレ。
ト松の上へ思ひ入れ、源之助、キッと見て
源之　エイ。
ト礫を打つ。以前の忍びの者、種ケ島を持つて飛び降りる。
渚　其奴も正しく
源之　敵の荷擔人。
ト源之助、一刀切る。
多門　天晴れ手の內。
十左　門出の血祭り。
源之　まツこの通り。
ト切り返す。

多門　エイ。
ト割り笄を二本、手裏劍に打つ。渚、源之助、受け留めて
兩人　こりや、何となされまする。
多門　飛び道具にも氣遣ひなし。
源之　滅多に油斷は
ト打ち返すを多門の頭、双方へ打ち落し
兩人　仕りませぬ。
多門　流石は兩人。
兩人　憚りながら。
多門　イヤ、天晴れ〳〵。
兩人　左樣ならば、御前樣。
多門　めでたう出立。
ト多門の頭、扇を披く。チョンと木の頭
行きやれ〳〵
トきざみよろしく、拍子

幕。

三幕目

服部天神の場
春日江堤の場

役名――長者娘、梅ケ枝。腰元、幾代。同、おぶん。同、おつる。源太左衞門妻、渚。非人、岩。作左衞門弟、作内。佐々木源吾。佐々木源之助。

本舞臺、三間の間、うしろ一面の淺黄幕。所々に稻村。舞臺先、春草の盛り、その中に床几直し、左右に紅白の梅、同じく吊り枝。爰に木綿賣りの仕出し三人、やつしの拵らへ、風呂敷包み脊負ひ、床几に腰かけ、在鄉唄にて幕明く。

仕出　佐七どの、なんと今年のやうに、木綿の高いはないの、五郎兵衞どの。

同　オヽ、十助の云はるゝ通り、斯う木綿が高うては、水も呑めぬ。

同　何でも、錢儲けはならぬ。

同　この間噂を聞けば、この國の佐々木の旦那が、どこやらと云うたが、喧嘩があつて、ついには殺されたと云ふが、ほんまの事か。

同　そりや、おいらも河内通ひでは、隣のやうに歩くに依つて、知つても居る。聞いても居るてや。

同　ムウ、こなた、よう知つて居やしやるか。

同　まだ日も高い。マア／＼、休んで話しませう。

兩人　オヽ、さうせう／＼。

ト皆々莨のんで

仕出　全體、あの源太左衞門と云ふ人は、篤實な人。なんでも人に情があつて、それは／＼下を憐れみ、又その上に川施餓鬼をさつしやつたり、身貧な者には、金をやらしやつたりしやつたといなう。

同　ハア、それは好い人ぢやなう。なぜ又、死なしやつたぞいの。

同　さればいの。詳しい譯は知らぬが、島田の宿にて、何やら間違ひな事があつて、殺されさしやつたとの噂。

同　その殺した者は、何者でござる。

同　それは何者やら、そこまでは聞き糺しはしません。

同　おれも、ちよつと聞かぬでもないが、大井川で死んだと云ふぞや。

同　そりやモウ、いろ／＼と云ふが、大阪方では、大和か

ら水が出て、それで流されたと云ふ、専らの評判でござる。

同　さればいなう。人の事といふものは、いろ／＼と見たやうに云ふものぢや。とかう云ふうち、もう七つでもあらう。行きませうぢやござらぬか。

同　オ、、よからう／＼。餘り話しに身が入つて、肝心の商賣もとんと忘れた。皆行きませう。

兩人　サ、、參りませう。

　トてんつゝになり、向うへ入ると、賑やかなる出の唄になり、向うより鋲打ちの乘り物出る。これに幾代、おぶん、おつる、その外腰元二人附添ひ出て來り、直ぐに舞臺へ來り

幾代　なんと皆さん、斯う見晴らした野邊の景色、氣が晴れて、好い眺めぢやわいなア。

つる　幾代どのゝ云はしやんす通り、御寮人樣のお供にて花見がてらの天神詣で。

腰元　爰へお駕籠を立てゝ、この花をお目にかけたら、お慰みにならうわいなア。

ぶん　ほんに、皆さんの云はしやんす通り、こんな所で、大きなにぎ／＼でも食べたらよからう。ナウ、皆さん。

幾代　これはしたり、其やうなさもしい事を。御寮人樣のお側で、ちと嗜なましやんせ。

ぶん　イヤ／＼、幾代どの、さうぢやないぞや。お錢やお金はたんとある。何不足のないお家で勤めて居る、其方やわしは、食べたりするが、樂しみぢやが、不足な事があるわいの。

幾代　そりや、何が不足ぢやいなう。

ぶん　この口へはたんと食べるが、下の口のひだるいので困るわいなう。

幾代　ホ、、、。この人は、大口ばかり云ふ人ぢやわいなう。

　ト梅ヶ枝の側へ來て、兩手を突き

御寮人樣へ申し上げます。長閑なる野邊の景色、お駕籠を離れて、これなる咲き揃うたる土手の花、毛氈を敷かせて、御秘藏の唐琴を連れて、おひろひ遊ばされましては、如何でござりませうな。

　ト乘り物の内にて

梅枝　薫る香の絶えせぬ春の梅の花、吹きくる風やのどけかるらん。それへ行て、詠めうわいなう。

　ト唄になり、梅ヶ枝、振り袖、衣裳にて出る。皆々床

几に毛氈を敷き、これへ住ふ。

つろ　なんとマア、梅ケ枝さま。お宿の花とは事變り、よい慰みでござりませう。

幾代　まだ日足も高うござりますれば、ゆる〳〵とお眺め遊ばしませ。唐琴も暫しが間。

梅枝　コレ唐琴、我が身が好いた野邊の梅ケ枝、あれへ行て、樂しんでおぢやいなう。

ト鳥籠の口を明ける。鶯、飛んで出て、いろ〳〵梅に戯むれ遊ぶ。梅ケ枝、餘念なき思ひ入れ、誂らへの合ひ方になる。

ぶん　アレ〳〵、幾代どの。唐琴が喜んで、戯むれ遊ぶ事わいなう。コレ、唐琴や、御寮人様は、いつお立ちなされうも知れぬ程に、傍を離れまいぞや。オヽ、嬉しかろ嬉しかろ。……イヤモシ、梅ケ枝さま、世間に數多小鳥を育てる人もあれど、分けて唐琴のやうな鳥は、滅多にござりませぬ。先づ第一あのやうに離れて居ても、呼べば直ぐに戻り、御寮人様のお側に附き、振り袖にとまり、御機嫌を伺ふといふは、なんと珍らしい鳥ではござりませぬか。

ト此うち梅ケ枝、鳥に戯むるゝ事いろ〳〵あつて

梅枝　イヤナウ、わしが云ふ事を、よう聞き分けて、アレあの通りに枝に離れ、戯むれ遊ぶ。しをらしい可愛らしい鳥ぢやないかいなう。

ト此の時、梅ケ枝、手招ぎをする、手元へ來り、戯むれ遊ぶ。

ぶん　なんと幾代どの、あの鳥は仕合せものぢやなう。いづく何方へ行ても、よもやあのやうに寵愛されまい。ほんに結構な鳥ぢや。わしも鶯になりたい。

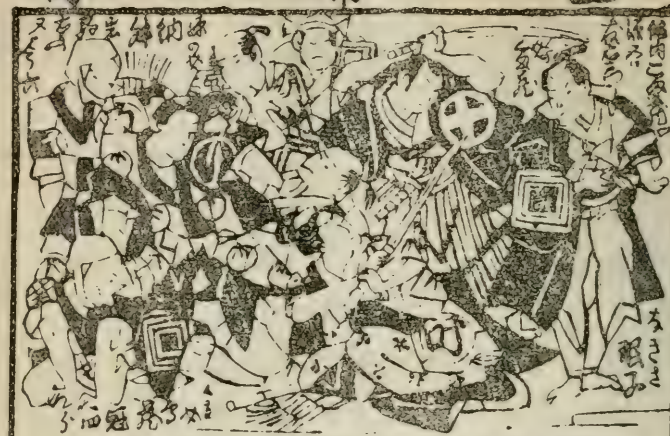
ト風の音になり、鷹一羽飛び來り、鶯を追ひかける。大小入りの合ひ方になり、向うより源之助、襤褸、非人の拵らへ、柄杓を持ち出て來り、キツと舞臺を見て

源之　ハテ、不便なる小鳥の有樣。此まゝ置かば直ぐに落命。オヽ、ソレ。

トつか〳〵と來て、柄杓にて鷹を打ち落す。鶯は驚ろき、源之助が左の袖へ逃げ込む。腰元、皆々あせる思ひ入れ。

ぶん　コレ〳〵、お乞食様。お前の袖へ唐琴が入つたが、無事か。どうぢや〳〵。

幾代　無事でゐるなら、早う御寮人様へ、お戻し申してたも。よう鷹を殺してたもつたなう。

三幕目

源之　イヤ、お案じなされますな、小鳥は無事で居りまする。
　ト取出して渡さうとする。梅ヶ枝、嬉しさうに取らうとする。
イヤ〳〵、お待ち下され。穢れたる手にて、直さま籠へ移すは恐れあり。
　ト柄杓の中に鶯を乗せ、差出す。梅ヶ枝、見惚れ居る。よき程に籠に入る。
梅枝　唐琴が命の親、嬉しうござるぞや。…………人品骨格、只人ならぬお顔ばせ。何某の中將と申しても恥かしからぬ御物腰。ほんに可愛らしい……唐琴を、よう助けてたもつたなう。
ぶん　唐琴が命のお禮申さん爲。して、お前のお内は、どこでござりますえ。
源之　イヤモ、非人の儀でござりますれば、いづくを當てと、定めましたる所もなく、一人の母を養はんと、爰に三日、彼所に二日、定まる所もござりませぬ。
幾代　コレ、非人どの。御寮人樣は、百日といふ御念願あつて、この天神樣へ御參詣。毎日の道すがらなれば、其方の爲にも惡うはない。殊に唐琴が命を助けてたもつた其方、追つて御褒美の沙汰もあらう。喜んで待つて居や。
源之　それは有り難うござりまする。
幾代　モシ、御寮人樣、最前より餘程の隙入り、早う御參詣なされませ。
ぶん　オヽ、大分日が西へ寄りました。サア〳〵、お駕籠に召しませ。
梅枝　腰元ども、當座の褒美、あのお方に、早う〳〵。
　ト幾代、心得、乗り物の中の手箱より金を出し、紙に包み
幾代　サア〳〵、これは唐琴を助けてたもつた當座の御褒美。有り難くお受け申しや。
　ト此うち梅ヶ枝、乗り物の中より硯箱を出させ、短册に歌を書いてゐる、
源之　これは〳〵。結構なる御禮、母にも見せて喜ばせませう。エヽ、有り難うござりまする。
ぶん　コレ、お乞食どの、金が欲しうば今頃に、毎日爰に來て居や。まだそんな事ぢやない。たんとお遣りなさる。此方の旦那さんは、金が澤山あつて、難儀してぢやが、御寮人樣のお名は、梅ヶ枝さまと云うて、手水鉢でも叩いて、三百兩も出すかと思はうが、さうぢやないぞ

えゝほんに〳〵金が澤山で、どうも斯うも、仕様がなし、この間も川へでも捨てようかと仰しやる。それも勿體ないと云うてぢや。わが身も貰うてたもらんか。さうするとわが身、内も助かるといふものぢや、ナウ、幾代どの。

幾代　コレ、そな人、今日は過分にござるぞや。

源之　御縁もござりますれば、又お目にかゝりませう。

梅枝　幾代、この短册はお禮の印に、あのお方へお渡し申してたも。

ト幾代、短册を取つて、源之助へ渡す。

源之　これは〳〵、重々厚き御褒美のお印、如何ばかり有り難う存じまする。

ト抜き見て

「思へどもいかでかひまに夕霞、隔つる宿の鶯の聲」此お心は。

ト顔見合せ、梅ヶ枝、乗り物の垂れを下ろす。幾代、思ひ入れ。

幾代　お立ち。

ト行きかゝり、三重になり、皆々上手へ入る。源之助後見送り

源之　ても、思ひがけない金をお貰ひ申し、夢ではないか。これといふも、日頃念ずる天神様のお庇。エ、忝ない。一時も早う歸り、母人にお見せ申し、お喜びのお顏を拜まうか。さうぢや〳〵。

ト思ひ入れあつて、上手へ入る。靜かに、この道具をぶん廻す。

本舞臺、うしろ黒幕。二重の草土手、眞中に非人小家。下手に浪板。左右、藪疊。上手へ寄せて焚火の土竈に、自在に土瓶をかけ、大吹竹などあり。すべて春日江堤の體。誂らへの合ひ方、時の鐘にて道具納まる。

ト上手より、非人の岩、襤褸の形にて出て來り

岩　コレ、母さん、寢さんしたか。心持ちはよいか。どうでごんす。

ト小家の内にて

渚　どなたでござりまする。

ト小屋より、渚、襤褸の形にて出る。

岩　イヤ、おれぢや、岩でごんす。

渚　オヽ、岩どのか。早う戻らんしたなう。

岩　イヤモウ、足の擂粉木になる程歩いても、湯のこ一つ

くれる所はない。あんまり貰ひがないに依つて、ついに行かぬ村へ入つたら、所の番人めが叩き出して門へ立たさぬ。まんが悪さに、それで早う戻りました。まだ息子どのは歸らぬか。

渚　さればいなう。今朝から町へ出ましたが、もう歸りさうなものでござります。

岩　イヤ、もう戻られるであらう。わしも貰うた麥が二三合、今夜の飯米、もう去にますぞや。

渚　もうちつと、話さつしやれ。

岩　イヤモウ、ひだるい話しは面白うもござらぬ。

渚　そんならもう、歸らつしやるか。

ト唄になり、上手へ入る。後合ひ方、渚、そろ〳〵前へ出て

アヽ、この源之助は何して居る。いつもよりも戻りが遲い。また道にて凶事でもありはせぬか。アヽ、案じられる事ぢやなア。

ト立ち上がり、向うを見て、ヒヨロ〳〵となる。

イヤ〳〵、とかう云ふうち、戻るであらう。茶など沸かして置いてやりませう。

ト自在の側へ寄り、焚火してゐる。向うより源之助、以前の形にて竹杖を突き、肴を提げ、出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。

源之　母人、只今歸りました。

渚　源之助、今戻りやつたか。今日はきつう遲かつたなう。

源之　今日は、ちつと用事ござりまして、隙取りました。その譯をお聞き下されませう。覺恩寺より歸りがけ、御大身の娘が、秘藏の鶯を放し悔みたまふ折、右の鶯を鷹が舞ひ下り、既に鶯を捕らんといたす所へ、折よく某出合せまして、その鷹を害し、彼の鶯を助けましたる、御褒美とあつて、多くの金子を頂戴仕り、其まゝ當村の入り口で白米を求め、聊かの肴を一疋。即ちこれは大和の名物ゑぞと申す魚。母人、敵の行くへの知れると云ふ。

ト右の肴を出し

ゑぞを聞けと云ふ心の縁起の魚。母人、私しが手料理て只今差上げませう。おあがり下さりませう。

ト下手の川端へ行き、米を洗ひ、肴を料理する。渚は上手の竈へ火を焚きつけ、いろ〳〵あつて、源之助、米肴を洗ひ、渚の前に持ち行く。渚、この體を見て

渚　ハア、時世なればとて、河内の郡司、佐々木源太左

衞門の忰が、白米を洗ひ、土の竈、柴の薪もあらばこそ、板や竹の折れを拾ひ、淺ましいこの有樣。昨日までも、お乳や乳人に傅かれ、何くらからぬ身を持ちながら、巷に出て人の袂に縋り、一錢二錢を貰ひため、親子が露命つなぐとは、さぞ口惜しからう、無念にあらうなア。

源之　そのお歎きは御尤も。私しとても同じ事、斯く流浪いたす、元はと云へば敵ゆゑ。おのれ源太左衞門、天地の間に隱るゝとも探し出して父の敵、討たいで置かうか

ト無念のこなし。

渚　オヽ、さうぢや、尤もぢや、兎角に足手纏ひは、この渚。夫源太左衞門どのゝござる所へ、早う行きたうござるわいなう。

源之　これはしたり、お情ない。追ツつけ敵を討ち負ふせ母人のお喜びのお顏を拜するまで、生き長らへて下さりませう。左樣な忌はしい事は、必らず〳〵仰しやつて下されまするな。母人樣。

渚　オヽ、わしが惡かつた。必らず氣にかけて下さるな。

源之　モウ〳〵、左樣な儀は申さぬやうに。

渚　源之助、其方が孝行にしてたもるが、涙がこぼれて嬉しうござるわいなう。

源之　私しも母人の、御不便のお詞に、涙は胸に張り裂く思ひ。これも誰れゆゑ

渚　敵ゆゑとは云ひながら

源之　淺ましい二人が身の上。

渚　雨露の厭ひなく

源之　蓆一重に草枕

渚　明くれば人の門々に

源之　立てども人の情なく

渚　今日は食べても

源之　明日は見えず。

渚　地獄の責めか

源之　餓鬼道か

渚　源之助。

源之　母人樣。

渚　こりやマア

源之　なんの

兩人　因果であらうなア。

ト兩人、手を取り交し、ヂツと思ひ入れ。

源之　イヤ〳〵、母人樣、人目ござれば密かに。オヽ、御飯が出來たであらう。さぞ御空腹でござりませう。

渚　イヤ、まだ欲しうござらぬわいなう。

源之　左様ならば、暫らくお休みなされませぬか。

渚　さうしませう。其方もちつと休息さつしやれ。

源之　畏まりました。サア／＼、お手を取りませう。

ト渚をいたはり、小屋の内へ入れ、そこら片づけると向うより雲助の丑、松、兩人、後より作内、脚絆、三尺、一本差しの旅形、また後より同じく雲助の辰、八附き出て來り

松　コレ／＼、親分、先刻から一丁ばかり、斯うしてわし等が附けて來ます。

丑　どうぞ一丁場乘つて下さりまし。馬でも駕籠でも、好きな物を持つて來やす。

作内　エヽ、やかましい。馬も駕籠もいらねえと云ふに、うるさい雲助だ。

辰　ナニ、雲助だ。雲助もすさまじいわえ。雲助が、うぬ等が世話になるものか。

八　さうだ／＼。雲助だの何のと云はれたら、何でも彼でも、乘つてもらへ／＼。

トこんな事云ひながら舞臺へ來る。

作内　そんなに云ふなら、乘つてやるまいものでもないが、いくらで乘せる。

松　ナニ、いくらかくらと云ふ事があるものか。九十九貫まではお定まりだワ。

丑　何でも路金の有りツたけ、身ぐるみ脱いで置いて行け。

四人　置いて行け。

作内　さては、わい等は追剝ぎだなア。

四人　オヽ、追剝ぎだ。

作内　追剝ぎと云つたからは

八　その懐の金財布から

ト懐の金財布を取りにかゝる。いろ／＼立廻りあつてよき程に源之助、四人を見事に投げる。起き上がつて

松　なんだ／＼。いらざる所へドウ乞食め。なんで邪魔をひろぐのだ。但しは、おのれがよしみの者か。

源之　左様ではござりませぬが。

丑　ア、聞えた。おい等を退けて、うぬが取るのか。

源之　全く以て。

辰　おいらが商賣の

八　邪魔をするのか。

源之　サア、それは。

四人　サア。

源之　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
丑　ドウ乞食め、退きやアがれ。
ト源之助少し扣へる。四人の惡者、作内が側へ行き
松　サア、足元の明るいうち、キリ〳〵金を出せ。
丑　サア、渡せ。
作内　コリヤ、滅多な事をするな。
四人　エヽ、面倒な。
ト作内を引き倒し、引きつける。一人は懐中へ手を入れ、金財布を取出して、散々に打つて、金を持ち行かんとする。源之助、立ちふさがり
源之　强惡非道な雲助ども、滅多に渡してよいものか。
ト金財布を引ッたくり、散々に打つ。これにて四人逃げて下座へ入る。
源之　コレ、お旅人、この金を、早う受取らつしやれ。ても、憎い奴でござります。
作内　これは〳〵、誠にお乞食様のお情で、命を拾ひました。その上に金子まで、返す〴〵も、千萬有り難うござりまする。
トいろ〳〵禮のこなしある。

源之　これは御挨拶、痛み入ります。拙者は爰に住居いたす、非人でござりまする。あまり理不盡なる者どもゆゑ、見かねましたのでござります。
作内　イヤ〳〵〳〵、申さうやうもなきお世話、なんとお禮申したらよからうやら。この金子もあなたがこれにお出でなさらねば、今の雲助どもに奪ひ取られ、また命にも拘はるところ。
ト金五兩、鼻紙の上に乘せ、差出し
この金は、あなたがござらねば、殘らず取られまする金子なれば、せめて半金は其許へお禮の爲め、お受け下されませう。
源之　イヤ〳〵、斯様なお禮を受けようと申して、支へたる事ではござらぬ。この金子は、先づ〳〵お納め下さりませう。
作内　イヤ〳〵、それでは私しの心が濟みませぬ。どうぞお受取り下さりませ。
源之　イヤ〳〵、平にお納め下されい。
作内　イヤ、是非とも。
源之　如何やうに仰せられても、申し受る事は、御容赦下さりませう

明治三年五月守田座所演　花葛紀念畫双紙

市川左團次の源吾　　澤村田之助の姉織江（渚の代り）
中村鷲助の辨次（岩の代り）

ト作内、感心の思ひ入れあつて
作内　ハテナア、賤しい身分といひ、人の袖に縋りても、貰はにやならぬ其許、斯く正しきお志し、恐れ入りました。是非とも、この金子は、其方へ受取り召され。
トずつと立つを、源之助押し留め
源之　よしみもないお方に、金をお貰ひ申します筋はござりませぬ。
作内　それぢやと云つて。
源之　持つてお歸りなされませ。
渚　源之助、騒がしい。何事ぢや。
ト小家より出る。
源之　イヤ、何事でもござりませぬ。お氣遣ひなされまする事ではござりませぬ。
作内　これは阿母でござりまするか。この譯と申すは。
ト渚を透かし見て
卒爾ながら其許様は、佐々木の奥方、渚さまではござりませぬか。
ト渚、愕りして
渚　我が名を知つた、旅のお方は。
作内　お見忘れなされましか。作内めでござります。

源之　ムウ。して、あの者は
渚　サア、前方屋敷に勤めて居やつた、作左衛門が弟の。
源之　ムウ、聞き及んだ作内か。
作内　して、あなた様は。
渚　オヽ、悴源之助ぢやわいなア。
作内　ナニ、若旦那様とは。
源之　知らぬ事とて
渚　面目ない親子が成行き。
源之　變つた所で
作内　變つたお姿。
渚　便りも聞かぬ
源之　其方が身の上。
作内　私しよりは、あなた方。
渚　爰らあたりで逢はうとは
源之　ても、思ひがけない。
渚　主從盡きせぬ
三人　縁ぢやなア。
渚　ほんに作内、變つた所で逢ひましたわいなう。
作内　左様でござります。私しめは、兄の作左衛門とは違ひ、お家に勤めて居りまする時分より、侍ひの附きあひ

が嫌ひゆゑ、旦那様へお願ひ申しましたるところ、實體に勤めしとあつて、旦那様より金子百兩を賜はり、由緣あるを幸ひに、加賀の國へ參りまして、商人奉公を致しましたるところ、風の便りに承りますれば、大井川の騷動、兄作左衞門は切腹と聞き、南無三と思つた所が後の祭り、早お家は沒落、御親子ともお行くへ知れずと、聞いて悔りせまいものか、おのれやれ敵を討つてと、サア、思つて見ても町人の悲しさ、とても叶はぬと力を落し、只今では大阪の上町と申す所に住居いたし、福嶋屋の淸七と名も改めまして、人入れ商賣。何不自由なく暮らしまするところ、昨日服部と申す村まで、用事がござりまして、金子を受取りに參り、歸る道で惡者どもに附けられ難儀の場所を、これなるお方に助けられ、只一通りの非人と存じましたるところ、さては若旦那源之助さまでござりましたか。御幼少にてお別れ申しましたるこの作內、お顏はとくと覺えませねど、不思議にお目にかゝりまするといふも、主從の緣の盡きざるところ。またその上に、今の危難をお救ひ下さる段、この作內め、淚がこぼれて、ヘイ〳〵、エヽ、有り難う存じまする。

源之　只今其方が詞に、加賀の國に居たとあれば、加賀の國にて佐々木源太左衞門といふ者、富樫の旗下にはあるや。如何に作內。

作內　成る程、聞き及んだ佐々木源太左衞門といふ人は、京都の留守居役を勤め居りますれば、ついに顏は。

源之　見知らぬとか。ムウ。

渚　敵源太左衞門、何しに彼の地に居やう。これより共に詮議仕出し、親、夫の敵。コレ、作內、もしも手懸りがあらば、ナウ、合點か。

作內　委細畏まりましてござります。

ト最前の金財布を取出し

この金子は、先程のお禮にさへ、差上げませうと存じましたるに、主從の名乘り合ひを仕りますれば、せめてこれをお使ひ下されませ。それが直さま敵討ちのお供に、參つたも同じ事でござりまする。

渚　成る程、首尾よく敵討ちおふせ、再び世に出でなば、直さま返濟。

作內　すりや、お使ひなされて下さりまするか。

渚　戴きますぞや。

作內　これは〳〵忝ない。最早私しはお暇申しませう。もし、御用でもござりますならば、何時なりとも大阪の上

町へ、お心置きなう、お二人様。

源之　そんなら、もう行きやるか。

作内　いつまで居りましても、飽き足りませねど、歸らずばなりますまい。

兩人　隨分無事で。

作内　左樣ならば、奥樣、若旦那樣。

兩人　また重ねて

作内　お目にかゝりませう。

ト唄になり、すご〳〵思ひ入れあつて、向うへ入る。

源之　さて〳〵忠義な者も、あるものでござります。

渚　サア、この金は其方、しつかりと持つて居や。

源之　畏まりました。

ト懷中へ納める。

イヤ、母人樣、あなたにお願ひがござりまする。サア、外の儀でもござりませぬが、この程より近在を殘らず尋ねましても、何の手懸りもござりませぬから、お暇を願ひまして、これより兵庫明石の方を、尋ねて見ようかと存じまする。

渚　オヽ、それがよからう、よい思ひつき。この母が事案じずと、一日も早う尋ね出して、本望遂げるが父への手向け。暫時も早う。

源之　すりや、お暇を下されますとや。エヽ、有り難うござりまする。今宵も早、夜も更けましたれば、明日は早朝に出立いたしまするでござりませう、今宵は早うお休みなされませ。

ト此うち源之助、最前作内が落せし手帳を拾ひ

こりや、作内が落して參りましたものと見えまする。これが無くば、さぞかし困りまするでござりませう。私しは、ちよつと一走り行て、追ひつきまして、渡して參じませう。

渚　イヤ〳〵、今宵は夜も更けたる事なれば、さしたる入用なものでもあるまい。捨てゝ置いたがよいわいの。

源之　イエ〳〵、左樣ではござりませぬ。ツイ一走り。

渚　そんなら早う歸つてたも。

源之　畏まりました。母人、行て參じまする。

ト花道へ行き、爪づき轉ぶ、渚、見て

渚　どうぞしやつたか。

源之　イヤ、何とも致しませぬ。ドレ、行て參りませう。

ト思ひ入れあつて、向うへ入る。時の鐘。渚、後見送り、思ひ入れあつて

洛　アヽ、コレナア、時世とは云ひながら、佐々木源太左衞門とも云はれし者の妻子が、この有さま、親一人子一人のわしが此やうに、今をも知れぬこの病ひ。ひよつとわしが身に凶事でもあつたら、さぞ歎くであらうと思へば、わしやそれが悲しいわいなう。イヤ〱、こんな事は思ひますまい。ドレ、寢て源之助が歸りを待ちませうか。

ト小屋の内へ入る、靜かなる禪のツトメになり、向うより源吾、野袴、ぶッ裂き羽織の拵らへにて、家來二人に四ッ目の紋の附きたる弓張り提灯を持たせ、白木の臺に卷き絹を載せたるを持ち、出て來る。後より岩、附き添ひ出て花道にて、

源吾　コリヤ、其方が今申した、女非人の親子めが居る小屋はあれか。

岩　左樣でござります。

源吾　其方、先へ參り、それとはなしに起して、試し見ろ。

岩　合點でござります。

ト思ひ入れあつて、岩、先へ行き、本舞臺へ來る。源吾は上手に窺ふ。この時、弓張り提灯を上手の松の枝に掛ける。岩、小屋の側へ來り

阿母々々、用がある。ちよつと起きて下され〱。

ト小屋の内にて

洛　オヽ、けたゝましい。誰れぢや〱。

ト云ひながら出て

オヽ、岩どのか。何ぞ用でござんすか。

岩　阿母、用と云つて外の事でもごんせぬが、今日はよい貰ひがあつたと聞いたゆゑ、一杯飲ませてもらはうと思つてサ。

洛　こな人は、なんのよい貰ひと云うた所が、二文か四文の事、どうしてこなたに、酒振舞ふやうな事は。

岩　イヽヤ、二文や四文のはした錢ぢやアねえ。小判でズツシリ。サア、分け口を出さつしやい。

洛　今時、なんの其やうな事があらうぞいなう。

岩　イヤ、ないとは云はれぬ。先刻、丑や松が見た、旅人から貰つた金、キリ〱爰へ蒔き出すまいか。

洛　イヽヤ、そんな覺えはござらぬ。

岩　エヽ、甘う云ふうち出し居らぬと、痛い目させても出させにや置かぬ。

ト立ちかゝらうとする。この時源吾、ツカ〱と出

て、岩を取つて投げろ。これにて兩人、顏見合せ

渚　ヤア、そちや源吾、恥かしい形で。

　ト行かんとするを

源吾　アイヤ、お待ち下さりませ。姉者人暫らく。これは久々にて御對面。ハア、斯く淺ましき、お住居とは、兼ねて承りましたれど、公けの恐れあれば、今日までも訪れも致さず、寒さも強ければ、定めし肌寒くおはすらんと、朝夕拙者が案じは如何程か。それゆゑ今日、家來に持たせ參りしこの絹、身にお卷き下さらば、拙者が喜び、偏にへ願ひ奉る。

　ト慇懃に云ふ、渚、不審の思ひ入れ。

渚　ホヽヽ、これは昔のよしみを思ひ、結構なる御挨拶。誠に源吾どのであればこそ、佐々木の家の長久、この上ながら、よろしう頼みますぞや。また心にかけて賜はるこの絹、斯く非人となり、襤褸を身に纏ひますれば、斯樣に結構なる物は望みにござらぬ。この絹は矢張り其方へ、お納め下さりませ。

源吾　折角持たせし品、平にお受け下されませう。

渚　お志しは有り難けれど、非人の身で斯樣な品を所持すれば、人の思惑も如何。矢張り此まゝ、お戻し申す。

源吾　ハテ、是非もなき事ぢやなア。

　トあたりをちよつと見て

して、源之助どのは、いづれにござるな。

渚　サア、源之助は早朝より里へ參りまして、今に歸りませぬ。

源吾　それは對面の致さいで殘念千萬……イヤ、今晩某が爰へ、はる／＼と參りましたは、御親子にちとお願ひの筋あつて、と申す譯は、別儀でもござらぬ。先つ頃、家騷動の折、佐々木の系圖の一卷朝日丸の劍、その二品を持ち、立退きたまはん。その二品、暫らく拙者にお貸し下さらば、姉人樣は申すに及ばず、源之助諸とも、安樂に貢ぎ申す。何卒この儀、お聞き屆け下されい。この源吾め、土に手を突いてお頼み申す。姉人樣。偏へに願ひ奉ります。

渚　これは何事かと思へば、この身に覺えのない今の一言。我れ／＼親子、屋敷を出る時、思ひがけなき御上使のお入り。即ちその座より直ぐに追ひ拂はれしこの身の上。系圖劍はさて置き、一錢の旅用さへ持たず、それゆゑのこの非人。系圖劍は寶藏を探し召され。我れ等二人は、存せぬ事でござるわいなう。

源吾　默れ、老ぼれ。最前より詞を扣へ、下から出れば附け上がりのする、茲な乞食め。エヽ、もう頼まぬ。コリヤ家來ども、此奴が懷中へ手を入れて、探して見ろ。

家二　ヘツ。

ト渚にかゝる。渚、ちよつと立廻つて、家來の刀を奪ひ取り、ホン〳〵と雨人を切り、キッとなつて

渚　ヤア、最前よりの惡口も、かゝる時節と無念を堪え、默つて居れば樣々の雜言過言、系圖の一卷やみ〳〵と、おのれ等如きに渡さうか、女ながらも武士の妻、手向ひしやると手は見せぬぞ。

ト岩、出て

岩　エヽ、危ない〳〵。

ト劍をもぎ取らうとする。岩とちよつと立廻つて、源吾、後から拔いて、散々に切る。

渚　こりや、どうでもおのれ、殺すのぢやなア。エヽ、コレ、一人の手にも足らぬ者を、なぶり殺しは情ない。心は千千に逸れども、女の甲斐なき力ゆゑ、やみ〳〵爰で討たるゝか。さぞや草葉の蔭の源太左衞門どの、腑甲斐なしとや思されん。エヽ、口惜しい〳〵。

源吾　エヽ、踠くワ〳〵。うぬは知るまいが、われが夫の源太左衞門めも、いつぞや島田宿で、おれが手を廻して殺したのだ。今にうぬも、おれが世話で往生させる。イヤモウ、大抵な骨折りな事ではない。この源吾さまの手にかゝるを、有り難い事だと三拜して、くたばつてしまやアがれ。

渚　すりや、何と云ふ。夫源太左衞門を討つたも、汝が業であつたか。エヽ、聞けば聞く程大惡人、例へ此まゝ死ぬるとも、生き替り死に替り、怨みを晴らさで置かうか。アヽ、コレ、源之助は何して居やる。源之助が居やつたら、やみ〳〵討たれはせまいもの。エヽ、口惜しい。源之助、源之助、源之助やアい〳〵。

源吾　その源之助も後からやる。こま言云はずと、早くたばれ。

ト渚を切り倒し、止めを刺し、懷中より系圖の一卷取出し

これ程持つて居るに太々しい。コレ、その小屋の內に、太刀のやうな物はないか。

岩　畏まりました。

ト小屋の內を探し見て

其やうな物は見えませぬ。

源吾　ムウ。すりや、源之助めが帶し居ると見える。何にも致せ、爰へ歸るは必定。コレ。

ト囁く。向うにて人音するゆゑ、思ひ入れあつて

忍べ。

ト上手へ入る。向うより源之助、急ぎ出て來り

源之　母人樣、さぞかしお待ち遠でござりましたらう。

ト云ひながら舞臺へ來て、小屋の内を見て、居ぬゆゑ

母人樣々々々。

ト死骸に行きあたり

ヤア、母人樣々々々、こりや、何者が手にかけた。今一足早くば、斯くやみ〳〵と御最期はさせまいもの。母人樣、お心を慥かにお持ちなされて下さりませ。母樣いなう〳〵……絆は切れたか。ハア、。如何なれば、父上と云ひ母人まで、人手にかゝりて果敢ない最期。後に殘つてこの源之助は、なんと浮世が過されませう。因果なこの身の成行きぢやなア。

ト思ひ入れあつて、源吾が殘し置きし、上手の松の枝にかゝりし提灯に、キツと目を附け

ハテ、心得ぬ。母が最期の傍に、殘し置きたる、あの提灯。四つ目のあの紋。さては敵は佐々木に由縁の者なるか。何にもせよ、ソレ。

トつか〳〵と行つて、提灯を取上げる。この時、後より源吾、岩、窺ひ出て切つてかゝろ。源之助は曲者の顔を見ようと、提灯をさしつける立廻り。源吾、提灯を打ち落し、三人キツと見得。誂らへの鳴り物になり、いろ〳〵闇の立廻りあつて、此うち源吾、手を負ふ事あり、源之助、竹の仕込み杖を拔く。この劍、朝日丸ゆゑ、光明を放つ。源之助、これに心附き、白刃を袖に隱す。木の頭。よろしく、キザミにて、拍子

幕。

四幕目

長柄長者屋敷の場
淀川堤の場
長者屋敷婚禮の場

役名——淀與三右衞門。家臣、主水。長柄の長者、左衞門。同女房、玉木。同娘、梅ケ枝。同妹、櫻木。腰元、幾代。同、おぶん。番頭、忠太夫。醫者、文庵。修驗者、大仁坊。佐々木源之助。

本舞臺、三間の間、中足の弐重。向う金襖。上手、

障子屋體。枝折り戸。すべて。長者屋敷の體。爰に醫者文庵、腰元幾代、おぶん、忠太夫、供壹人、扣へる。文庵、藥を調合して居る模樣。只の唄にて幕明く。

幾代　これは〳〵、毎度御苦勞に存じまする。

文庵　なんの〳〵、さのみ苦勞にも存じませぬ。

忠太　御病氣の御容體は、如何でござります。

文庵　先づあの病氣は、初めは氣から出た病氣で、命には別條あるまいけれど。ちと長うなるでござらう。さう思はつしやるがよい。

ト云ひながら藥を盛つて居る。

ぶん　左樣ならば、お命に別條はござりませぬかえ。

文庵　きつと請合ひは仕らねど、大概命は助かる積りぢやが、どこぞでは命がない。

幾代　ホヽヽ。そりやモウ、千年生きる積りではござりませぬ。

忠太　せめて貳百年か三百年は、置きたうござりまする。

文庵　イヤ〳〵、それは拙者が、南蠻流の療治を以て、藥を盛る時は、譬へ百年貳百年、置かうとまゝでござる。又いま立ち所に殺さうと儘な、藥がござるわいなう。

幾代　恐ろしい。そんな藥がござりまするかえ。

ト幾代、忠太夫、顏見合せ、この藥服ませろは、氣味が惡いといふ思ひ入れ。

文庵　イヤモウ、藥といふものは、さま〴〵ござるて。

ト藥を包みしまひ

生姜をお入れなされませ。

トおぶんに渡す。

ぶん　畏まりました。

ト此うち、おぶん、藥箱を家來に渡す。

文庵　コリヤ、行助。

ト箱を差出す。家來、受取る。

然らば又々、明日お見舞ひ申しませう。

幾代　イヤ申し、文庵さま、世の中に、名も多うござりますが、あなた樣の御家來のお名は、行助どのとやら、こりやなんぞ、譯のある事でござりますか。

文庵　イヤ、別して譯もござらぬ。ちと緣起を祝ひまして付けてやりましたのでござるて。

三人　そりや、どういふ譯でござりまするな。

文庵　サア、お聞きなされ。この頃大坂中で、人殺しが流行りますて。滅多無性に切りますといなう。

ぶん　それはマア、怖い事でござりますなア。

文庵　全體、私しが家來の名は、以前はあぶ內と申しましたが、先達て南邊へ療治に參りましたところ、無法な奴もあればある者でござる。愚老が首筋を取ツ捕まへまして吐かすには、うぬが差して居る腰の物を、此方へ渡せと申しまする。そこで此方は命あつての物種と思ひまして、拙者が腰の物をやりましたれば、彼の盗人めが、拔きまして、とつくりと見て、こりや間に合はぬと云つて、コリヤうぬ、いくらで買つたと吐かしたによつて、愚老も有やうに云はずば惡からうと思つて、ハイ、百八十四文で買ひましたと云うたれば、さうであらう。どう藪醫者めと吐かして歸り居つたが、それから彼奴とわしとがコソ〳〵と歸りまして、內でその話しを致したら、女房が申すには、それは、あぶ內といふ名が、緣喜が惡いと申します。そこで愚老も、やう〳〵發明いたして、行助。主から讀むと無難行助、助は助けるといふ緣喜を祝ひまして、付けましたる名でござる。この事必らず世間へ、御沙汰なし〳〵。併しその盗人も、爰らまでは參りますまい。とは云ひながら、長柄の長者と申しては、大坂中でも誰れ知らぬ者もない、金持ちの儀でござれば、油斷は出來ませぬ。コレ、番頭どの、隨分氣を付けさつしやれ。ヤレ〳〵、あんまりしやべつて、口が酢くなつた。コレ、女中、茶を一つ下され。

ぶん　ハイ〳〵。

　ト茶を汲んで出す。文庵、茶を飲んで

文庵　これは忝ない。長話して、隙取りました。

　ト立つて、門口へ出る。

忠太　これは御苦勞でござりまする。

文庵　隨分氣を付けさつしやれ。また明日、お見舞ひ申さう。

　ト唄になり、家來引連れ、文庵、向うへ入る。

ぶん　ドレ、お藥を煎じて來よう。

　ト立たうとする。

忠太　コレ〳〵、おぶんどの、待たつしやれ。

ぶん　まだ早いかいなア。

忠太　どうやら氣味の惡い其お藥。

幾代　よもや、あのお方に限つて、とは思へども。

忠太　油斷のならぬ人心。

幾代　マア〳〵、其お藥は、やめにして、又よいお醫者でも替へて見ませう。ナア、申し、兄さん。

忠太　さうぢや〳〵。コレ、おぶんどの、こなたは奥へ行て、御寮人さまへ氣を付けたがよい。

ぶん　ハイ〳〵、畏まりました。

ト　おぶんは奥へ入る。

忠太　時に妹、外の事でもないが、わしがよく〳〵考へて見るに、娘御梅ケ枝さまの、今度の御病氣、どうも合點がゆかぬわい。お娘御の事なれば、もしやひよつと、お心に何ぞ思うて、それを氣病みになさるゝではあるまいか。其方、とくと尋ねて見てくれまいか。

幾代　ようござります。密かにわたしが聞き糺してお見せ申しませう。

忠太　若い娘といふものは、そんな事はまゝあるものぢや。そこをよろしく頼むぞや。

幾代　畏まりました。

ト　合ひ方になり、忠太夫は奥へ入る。後に幾代殘りてあたりを見廻し、上手の障子をソツと明ける。この内に、梅ケ枝、病氣の體、結構なる夜着蒲團の上に括り枕を置き、六枚屏風を引廻し、枕元に、鶯の籠、直しあり。

御寮人さま、ちつとはお快うござりまするか。

梅枝　オヽ、幾代、今日はちと、ようござるわいなう。

幾代　それは嬉しうござりまする。斯樣な長い病氣と申しまするものは、御退屈なものでござりまする。ちとお腰を撫りまするでござりませう。

ト　後へ廻り、腰を撫る。誂への合ひ方になり

イヤ、御寮人樣、いつぞはお話し申しませうと思うて居りましたが、外々の事ではござりませぬ。お前樣の御病氣如何なる名醫にかけましても、只お氣の煩ひぢやと申しますにつき、姫御前と申すものは高いも低いも、戀に上下はござりませぬ。私しも、いくらも覺えがある事でござります。この間もお前樣のお供を致しまして、天滿宮へ御參詣の時、色の白い男振り、背も高からず、低からず、慥か召しておいでなされましたお小袖が、黒羽二重に茶宇のお袴。アヽ、あんな殿御と女夫になつたら、さぞ嬉しい事であらうと、思ひ暮らせど、いづくの誰れとも見知らねば、思うた事も皆仇事となり、それより思ひ暮らし、泣き明かし、現にも夢にも、その男の事ばかり思ひ焦れて居りましたが、主持ちの悲しさ。思ひ思うた戀の仇、花も微塵と散り失せて、ナア。

ト　梅ケ枝が顔を見て、ヂツと泣き、また氣を替へて

サア、それは、大切な、御主人様と云ふ色があつて、思ひ切らねばなりませぬ。又お前様は、大切に思うてござる、大事の〱のお家の娘御様なりや、例へどのやうな御大身様より、お聟様をお取りなされうとまゝな御身。もし又あなた様が、同じ女夫になるならば、あんな殿御と添うて見たいと、思し召すお方もあるといふやうな事ならば、只今申す如く、姫御前と申しまするものは、戀に心を移し、若い娘のうちは、歴々の御身の上でも、貧しい暮らしでも、添ひ遂げようと思へば、面白うなる。これも皆戀ゆゑ。何にも恥かしい事はござりませぬ。あなた様の御幼少より、お側を離れず、お使ひ下されました私しに何にも遠慮はござりませぬ。例へ旦那様、奥様が如何やうに思し召さうとも、私しがキツと……とサア、そんな事はないかも知らねども、お話し申さぬ事は解らぬとやら、御寮人様。オヽ、私しとした事が、御退屈を存じまして申した事。お藥を上げませうかえ。

ト梅ヶ枝、頭を振る。

お氣もじの細いあなた様、ひよつともしもの事が……オオ、私しとした事が、また若木の花盛り、色も艶々美しう、咲き揃うたる梅ケ枝さま、心の莟みの開くやう、氣を浮き〱と、お持ち遊ばしませいなア。

梅枝　幾代が面白さうな話しを聞き、ちつと心が開いたやうなわいなう。最前からの話し、わしを大切に思うて、いろ〱と心を盡しての物語り、忘れは置かぬ、嬉しいぞや。

幾代　イヤモウ、兎角浮世と申しまするものは、色事話しで無ければ、面白うござりませぬ。御寮人様、お前様も、なんぞ面白いお話しはござりませぬか。

梅枝　幾代とした事が、なんのわたしが其やうな事を。

幾代　サア、今はござりますまいが、いつ何時、どのやうな事が出來やうも知れませぬが、外へお出でなされますと、また賑やかな事でござりますぞえ。なんぼ、あなたのやうな、堅いお生れでも、ア、あの男ならと思し召すお方がないと、申す事はござりませぬ。モシ、御惣領は家出なされて、どうで女子のお子様ばかりの爰のお家、いつか一度は、お聟様をお取りなさらねばならぬあなた様、早うお聟様をお呼びなされまして、初孫の顔をお見せ申すが、お父様へ御孝行でござりますぞえ。

ト梅ヶ枝、矢張り默つて居る。

ムウ、さうして、あなたは、一生殿御を持たず、やもめでお暮らしなされますお心かえ。

ト梅ヶ枝、頭を振る。

そんなら早う、御意に叶ひましたお聟様を、お呼びなさまし。あなたぢやと申して、木竹ではござりますまいし、ちつとはお心に叶ひました。殿御の無い事はござりますまい。御寮人様、お聞き遊ばされませや。女は三界に家無しとやら申しまして、なんぼ此やうな結構なお暮らしでも、殿御といふ者をお持ちなされませぬと、モシ、宿無しと同じ事でござりますといなア。それより、まだ怖い事には、幾つにおなりなされましても、殿御を持たずに、おかくれ遊ばすと、モシ、賽の河原へ參りますといなア。なんと恐ろしい事ではござりませぬか。

梅枝　兎角に女子は、罪深しと聞きつるが、淺ましや、因果か業か、この事ばかりは、たとへ死ぬるとも云ふまいと思うたれど、此まゝ妾が戀死なば、未來の程も恐ろしい。懺悔に罪も消ゆると聞けば、我が身の上、一通り聞いてたも。

幾代　エヽ。そんなら、どうやら思ふお方が。

ト顔見合はせ、梅ヶ枝、顔隱す。

てつきり、わしが斯ういふ事であらうと思つた。サアサア、御寮人樣、何にもお恥かしい事はござりませぬ。其あなたの戀男と云ふは、いづくの誰れでござります。ハヽア、解りました。大江の若殿、金吾さまでござりませう。

梅枝　わたしや、あなたは、きつい嫌ひぢやわいなア。

幾代　ムウ。そんなら誰れであらうな。少し苦味走つた、男らしい、淺澤の左京どのは、どうでござりますな。

梅枝　あなたも嫌ひぢやわいなア。

幾代　ホイ、これはしたり、あなたでもないか。ムウ、知れました〳〵。角の倉の彌市さまは、よい殿御でござりませうかな。

梅枝　エヽ、そんなお方ぢやないわいなア。

幾代　それでは、どうも知れませぬ。どなたであらうな。いつその事、云うてお聞かせなされませ。サア、わたしが耳へ押ツ付けて、そつと。エヽ、さつぱり聞えませぬわいなア。思ひ切つて、大きな聲で。

梅枝　サア、それはナ。

幾代　サア、それはナ。

梅枝　アノ、いつぞや。天神詣での折。

幾代　天神詣での折。
梅枝　春日江の片ほとり、其方衆に誘はれ、春めいたる野邊の景色。眺めも飽かぬ梅の花。盛りかざさう唐琴が、あちこちするうち、鷹が唐琴を取らんとせしを、助けられし、その人に。
幾代　成る程、さう仰しやれは、其やうな事もございました。その時、鶯を助けました人とは、どのやうなお方でございましたつけな。
梅枝　サア、其お方の立振舞ひ、貴人高位といふとも、恥かしからぬと、フト思ひ初めたる戀の端。それより俤、目先へチラ〳〵。夢現にもその人の、事のみ思ひ、戀ひ焦れ、忘れし事は露程もなく、いつそこの世を離れたなら、この思ひはあるまいと、泣き暮らして居たわいなう。
幾代　ヤア〳〵、それは一大事でござりまする。して、その時の唐琴を、助けし人は
ト、思案して
すりや、その時の乞食に
ト梅ケ枝と顏見合せて
ても、思ひがけないと云はうか。
ト梅ケ枝、袖を翳す。幾代、恟りこなし。

梅枝　この事必らず、わが身息あるうち、父上に話しは無用。人も知つたる長柄の長者に、非人の聟を取らんと云へば、却つて父の心も痛めん。この身死しての後、其方より父上へ物語り。サア、この上は暫しのうちも、面目ない。幾代、さらば。
ト側に有り合ふ鏡臺の上の剃刀を取つて、死なうとする。
幾代　エヽ、こりや何事でござりまする。例へ如何なる人にても、好いた者に添はすとは、かね〴〵父御の仰せなれば、どのやうな事かござりましても、私しがキツと請合ひ、お前樣を添はせ申しまする間、必らず〳〵、短氣なお心を、お持ちなされまするな。
梅枝　ぢやと云うて。
幾代　ハテサテ、私しが、悪いやうには致しませぬ。例へ非人乞食にもせよ、また以前は武士といふやうな者が、落ちぶれて居まいものではござりませぬ。マア、何事も奧へ參りまして、忠太夫とも相談の上、キツと私しがその非人めを。イヤサ、その非人を連れまして、お前樣と添はせまする。私しが胸にござります程に、なんであらうと、マア、幾代に任して、落ちついておいでなされま

せいなア。
ト剃刀を引ツたくる。
梅枝 と云うて父さんにこの事を。
幾代 大事ござりませぬ。親御が得心なくば、その時は私しが。コレ。
ト囁く。
ぢやわいなア。
梅枝 そんなら、其方が。
ト嬉しきこなし。
幾代 案じるより生むが易いと、今の思ひは昔語り。ナ、面白い事でござりませう。
ト梅ヶ枝、幾代を見て、嬉しき思ひ入れ。恥かしきこなし。
左様ならば、先づ忠太夫に逢うて、私しが口先で云ひ廻し、キツと女夫にさせまするわいなア。
梅枝 幾代とは思はぬ。結ぶの神さま〳〵。
ト幾代を拜む。
幾代 ア、、勿體ない。
ト手を分ける。
何か、詳しい話しは、後程しつぽり。

梅枝 そんなら、幾代。
幾代 梅ヶ枝さま。アノ嬉しさうなお顔わいなア。
ト唄になり、奥へ入る。梅ヶ枝、幾代が後影を拜みしたやうな。
梅枝 エ、、嬉しや〳〵、今日といふ今日は、日本晴れがしたやうな。併し、幾代があのやうに云やつても、父さんはお聞入れあつても、母さんがお聞入れがあるまい。エ、、早う樣子が、聞きたいわいなア。
ト物案じの思ひ入れ。奥より櫻木、振り袖の形にて出で來り
櫻木 これは姉上樣、これにおいでなされまするか。今日は御病氣の程、如何でござりまする。
トあたりを見て
これはお側に誰れも居やらぬ。女ども〳〵。
ト手を叩かうとする。
梅枝 イヤ〳〵、今まで幾代が居やつたけれど、今わしが父樣のお側へ。
櫻木 左樣ならば、よろしうござりまする。今日よりお醫者さまも替へねばならぬと、忠太夫が申して居りました。
梅枝 サア、そのよいお醫者樣があるによつて、いま幾代が父上へ。

櫻木　そんなら、お醫者の事について、幾代が參りましてござりますか。申し、姉上樣、早う藥を召上がつて、ようなつて下さりませ。父さんはお年の上、御存じの通り母さんが、さがないお生れ。それにひよつと、お前樣のお身に、もしもの事があつたら、わたしやなんと致しませう。

トほろりと思ひ入れ。

梅枝　エヽ、この子とした事が、父さん母さんが、お聞きあつたら。よいお醫者さまが見えると、わしが病氣は、サラリと癒る程に、必らず案じる事はない。わが身もともどもお話しがあつたなら、よいやうに執成して置いてたも。何も其やうに案じる事はない。

櫻木　それでも、わたしは心にかゝり、案じられまするわいなア。

ト向うより侍ひ一人、出て來り

侍ひ　ハツ、申し上げまする。主人木村與三右衞門、左衞門さまに御對面、申し上げる筋あつて、只今これへ伺候仕りましてござります。

梅枝　これは／＼、お使ひ御苦勞に存じまする。ソレ、櫻木、父上へこの由を。

櫻木　畏まりました。

ト奧へ入る。

侍ひ　然らば、お取次頼みます。

ト奧より長者左衞門、出て來り

長者　これは／＼、取次大儀。これへと申しておくりやれ。

侍ひ　ハヽア。

ト引返して向うへ入る。

長者　コレ娘、大病の身を以て、端近う出て、また病氣の障りになれば惡い。兎角養生が第一。寢所へ行きやれ行きやれ。

梅枝　父さん、今はちと心ようござりまする。

長者　それは重疊々々。併しながら、いま與三右衞門さまのお入りなれば、長の病氣、見苦しい形でお目にかゝるも如何。早く寢所へ、行きやれ／＼。

梅枝　申し、父さん、お前樣、幾代になんぞ。

長者　オヽ、何か忠太夫と幾代が、話したいと申すうち、與三右衞門どののお出での事を、櫻木が知らせしゆゑ、まだ詳しい樣子は。何は兎もあれ、行きやれ／＼。誰れも居ぬか。コレ、腰元ども／＼。

腰元　ハイ／＼。

ト奥より腰元壹人出て
御用でござりまするか。
長者　只今お客來がある程に、娘を奥へ連れて行きやれ。
腰元　ハイ〳〵。御寮人樣、サア、奥へお出でなされませ。
梅枝　左樣ならば父上樣、後程お目にかゝりませう。
ト唄になり、心殘して奥へ入る。唄變り、向うより淀與三右衛門、袴羽織にて出て、跡より主水、菖蒲革の形、家來三人、千兩箱を一つづゝ持ち出て來り、花道よき所にとまる。
長者　これは〳〵淀與三右衛門さま、火急の御先觸れ。何は兎もあれ、イザ先づあれへ、お通りなされませ。
與三　これは〳〵左衛門どのには、久々御對面も仕らず、先づは御健固の體、珍重に存じまする。
長者　何は兎もあれ、先づ〳〵あれへ。
與三　然らば許し召され。
トずつと本舞臺へ來る、上手へ通る。
長者　コリヤ、お茶、莨盆を持てよ。
ト奥より、櫻木
櫻木　畏まりました。

ト櫻木、茶臺に茶碗のせて出て來り、與三右衛門に出す。
與三　これは〳〵。
ト取る。
櫻木　これは與三右衛門さま、ようこそお出で下されました。先づは御機嫌のよい體を拜しまして、おめでたう存じまする。
與三　これは御挨拶。イヤナニ、左衛門どの、娘御でござりまするな。餘程久々御對面いたさぬうち、お見違へ申した。御成人の體、おめでたう存じます。
長者　これは〳〵御挨拶、有り難う存じまする。イヤモウ形は大きうござりますが、まだ子供でござりまする。
與三　さて、左衛門どの。今日、某、この所へ參りましたは、先年佐々木源太左衛門、川渡ひの儀を蒙むりしところ、駿州嶋田の宿に於て横死、それより後、暫らく延引せしところ、右の佐々木源太左衛門とは、親々より、ちと由緣もござれば、鎌倉より拙者に川渡ひの儀、仰せ付けられしが、それに付いては數多の金子の入る事ゆゑ、早速お請けは申せしが、その儀に當惑いたし、兎やせん角やと存じ居つたる折柄、計らず其許にお出會ひ申し、右の

の一件お話し申せしに、早速御承引あつて、金子三千兩お出し下され、それゆゑ首尾よく成就仕つたれば、鎌倉よりその褒美として金子四千兩賜はる。これ全く長者のお情と存じ、即ち先年借用申したる金子、今日只今、持參仕りました。イザ、お受納下されませうならば、有り難う存じまする。

長者　これは〳〵、結構なる御挨拶でござりまする。誰れあらう、淀の御城主、御出來のお喜びもさこそ。又二つには、この家の面目、斯樣な有り難き仕合せはござりませぬ。

與三　これは〳〵。何はさて置き、大切なる鎌倉の御用。首尾よく相濟む上は、借用の金子、ソレ、主水。

主水　ハツ。ソレ、家來ども。

ト家來、件の三千兩を長者が前に並べる。主水、懷中より五百兩の包み金を出し、白木の臺の上へ置き、右の三千兩と一緒に、長者の前へ並べ、跡へ下がり

ハツ、この度、淀川の川浚ひ、首尾よく相勤めしも、全く貴殿のお情。主人與三右衛門、祝着の體。イザ、金子、お受取り下さりませう。

與三　先づ、三千兩の金子は、即ち借用いたせし金子。返濟仕る。また金子五百兩は、御禮の爲なれば、些少にはござれども、御受納下されい。イザ、お納め下されませう。

長者　イヤ〳〵、與三右衛門どの。三千兩は受取りまするが、五百兩の金子、お受け申しやうはござりませぬ。

與三　イヤ〳〵、平に御禮申さねば、拙者、義が立ち申さぬ。この儀は平に、お納め下さりませう。

長者　イヤ〳〵、この義は御容赦下さりませい。御大身樣へお貸し申しましたとて、利息取らうと申すやうな、私しでもござりませぬ。先づ〳〵それは打捨て置き、久々の御光來、何は無くとも、御酒一獻。

與三　イカサマ、近々鎌倉へ出立いたせば、暫しの名殘。何かの話しは追つての事、然らばお詞に甘へ、御馳走に相成り申しませう。

長者　それは有り難う存じまする。コレ、腰元ども〳〵。

ト奥より以前の腰元出て

腰元　これは御大身さま、ようこそ御入來でござりまする。イザ、御案內いたしませう。

與三　イヤナニ、主水、其方も、お座敷の御無心申し、暫しの間休息しやれ。コリヤ、其方達も、暫らく扣へい。

家來　ハ、ア。
ト三人、下手へ入る。
主水　左樣なれば、御亭主。ちよつとの間、お座敷を借用申す。
長者　サア、御遠慮なく。與三右衞門さま、櫻木、一緒に御案内申しやれ。
與三　然らば、左衞門どの。
櫻木　斯うお出でなされませ。
與三　案内、大儀。
ト唄になり、皆々奥へ入る。長者殘り
長者　コリヤ〳〵、手代ども〳〵。
手代　御用でござりまするか。
ト奥より手代貳人出て來る。
長者　この金子、藏へ入れて置きやれ。
兩人　畏まりました。
ト三千五百兩の金を奥へ運び入れる。
長者　さて〳〵、侍ひといふものは、堅くろしい者ぢやなア。それはさうと、只心にかゝるは、娘があの病氣。如何なる名醫にかけても、今に勝れぬといふは、あれが身に凶事でもあつたら、おりや泣き死がなするであらう。ア、コレ、どうぞよい見立て醫者がありさうなものぢやなア。
ト合ひ方になり、上手の障子屋體より忠太夫、下手の襖より、幾代出て、双方顏見合せ、幾代はお前から云ひ出せと云ふこなし。忠太夫は、イヤ〳〵其方云へと云ふ仕方する。長者は思案して居る。兩人、右の仕方しながら前へ出て、三人一緒に顏見合はせ、兩人會釋して
幾忠　旦那樣。
長者　忠太夫、幾代、何ぞ用か。
幾代　ハイ、ちつとあなた樣に。
忠太　あなた樣に。
長者　ヤア。
兩人　お願ひの筋がござりまして。
長者　ナニ、願ひの筋とは。
幾代　そのお願ひの筋と申しまするは、その譯は、先程忠太夫どのへ、とくとお話し申したれど、是非お耳に入れねばならぬ仕儀。
忠太　據ろなくお話し申し上げまする。娘御梅ケ枝さまの御病氣の根ざしの事が

幾代　相知れましたるゆゑのお願ひ。
長者　ナニ、娘の病氣の元が知れたとは。
　ト急いでいふ。
忠太　左樣でござりまする。私しは男の事。斯樣な事は女子でなければ、明らさまに申し惜い。ソレ、幾代、そこをよろしう願ひます。
長者　サア、幾代、早く聞きたい。早く／＼。
幾代　サア、その譯と申しまするは、梅ケ枝さまの御病氣の、元の起りと申しまするは、いつぞや天神樣へ御參詣の折ふし、長閑なる春の景色、春日さまのほとりで、御秘藏の唐琴を出して、慰さむ折から、空より大鷹飛び下り、その唐琴を取らんと致しましたる折、よき人に出會ひ、唐琴を助けられ、ヤレ嬉しやと思ふ共お人に戀ひ焦れ、それよりの戀病みでござります。
長者　ナニ、すりや、その時、見染めしその人に、戀ひ焦れての病氣とな。定めし娘が戀ひ慕ふは、大方歷々の人ならん。して、その人は侍ひか、但しは公卿高家といふやうな事であらう。その人の年恰好、いづくの誰れ。それが聞きたい。今にも親々とも引合せ、早々呼び迎へなば、娘の病氣も本腹、我れ／＼の安堵。サア、幾代、忠太夫。エヽ、名乘れ。サヽ、早く／＼。
　トいそ／＼する。忠太夫、幾代、云ひ憎き思ひ入れ。
エヽ、キリ／＼云うて聞かせ居らう。忠太夫、幾代、どうぢや。
　トきつと云ふ。
エヽ、聞えた。こりやこの程の物案じゆゑ、僞はりの詞、この左衞門を騙かるのか。コリヤ、ヤイ、我れを騙かつて、娘の命は、捨てゝも苦しうないか。うろたへ者め。
　トまた氣を替へ
是非それが誠の事ならば、早くその思ひ人の名、苗字はいづくの誰れといふ事を、早く云つて聞かせてくれい。二人の者、コリヤ、頼むわやい。
　ト憂ひの思ひ入れ。兩人、始終、顏見合はせ、云ひかねる思ひ入れ。
幾代　申し上げまする。大事の／＼、お娘御さま。御幼少の時よりお側に居て、何事によらずお包みなく、お話しある梅ケ枝さま。今日に限り、深うお隱しありしを、段段と聞出しましたるところ
忠太　その戀ひ焦れしその主は。
長者　何者ぢや。

花菖紀念誹双紙　明治三年五月守田座所演

坂東太郎の玉木　澤村訥升の源之助　市川左團次の忠太夫

兩人　その主は。
長者　サア、その主は。
兩人　ハイ、非人でござりまする。
長者　非人とは、アノ、物貰ひか。
兩人　ハイ、左樣ぢやさうにござりまする。
長者　ヤ、、、、。
　ト大きに愕くり。兩人はヂッと顔を上げ、顔見合せ、長者また愕り、手を組み、思案の體。幾代は摺り寄つて
幾代　お家柄と申し、斯く淺ましき人を聟に入れるならば、とは存じまするが、梅ケ枝さまのお命にかゝはる一大事なれば、とくと御思案下されまして、その物貰ひをお聟樣に取られまするやう、どうぞお聞き屆け下されませうならば、人間壹人の命の助かる事。
忠太　どうぞ、我れ〱のお願ひ。
幾代　お聞き屆け下されば
忠太　梅ケ枝さまの命も全う
幾代　お心には、叶ひますまいけれど
忠太　幾重にも、このお願ひを
幾代　旦那樣。
忠太　どうぞ
兩人　お願ひ申しまする。
　ト兩方より云ふ。長者、默然として居て、顔を上げ
長者　さて〱、かゝる事も世にあるべきか。因果と云はうか、我が家は千年近き長者の家筋。我が代となつて、非人を聟にせしなど風聞あつては、先祖への申し譯なし。不便には思へども、娘壹人、見殺しにする分の事。なかなかこの家に非人乞食、引入れる事、いつかな叶はぬ。叶はぬ事ぢや。
兩人　すりや、此お願ひは
長者　叶はぬ〱。
兩人　すりや、どうあつても。
長者　エヽ、叶はぬ事だ。
兩人　ハヽア。
　ト兩人、泣き落す。奥より玉木、女房の拵らへにて出て
玉木　イヤ、申し、旦那樣。暫らくお待ち下さりませう。
忠太　あなたは奥方、玉木さま。
長者　玉木、待てと云つたは。
玉木　あれにて樣子は殘らず承りました。旦那樣、あな

たは世間の義理を思ひ、娘梅ケ枝を見殺しにもなされう
が、わたしはどうも、娘を見殺しにはなりませぬ。
長者　とは又、なぜに。
玉木　ハテ、こなた樣の爲には實の娘、また私しは繼母の
事なれば、世間の人の善惡ない口の端に、娘を見殺しに
せしは、繼子だけぢやと云はれては、どうも濟みませ
ぬ。それぢやに依つて留めました。
長者　それぢやと云うて、代々長者の家にて乞食を。
玉木　サア、乞食に系圖なしと、如何なる人の落ちぶれた
るも知れず。もし又非人にて、この家の相續なり難くば
娘の望み叶ひし上にて、娘諸とも追ひ出し給へ。例へ乞
食にもせよ、思ふ人に添ひ遂げなば、娘の本望。さすれ
ば娘の命も助かり、二つにはこの家の納まりは、妹櫻
木。そこを思うて留めに出ました。姉の梅ケ枝は、どう
もこの母が、え丶死なさせぬ。さう思うて下さんせ。
長者　すりや、一旦非人を聟に。
忠幾　どうぞ、お聞き屆け下されて、此お願ひを。
長者　すりや、どうあつても。
忠太　只、梅ケ枝さまの命乞ひと思し召し
幾代　一旦引入れ、內祝言のなされ

忠太　由緒正しき人ならば
玉木　試した上で、この家の花聟。
忠幾　どうぞ、願ひ上げまする。
ト三人、手を仕へ、賴む。長者、とつくりと思案して
イカサマ、何をするも因果づく。忠太夫、幾代、其方兩
人へ申しつける。其方達が心に任す。
忠太　すりや、お聞き屆け下さりまするか。
ト忠太夫、幾代、顏を見合はせ、喜ぶ思ひ入れ。
兩人　チエヽ、有り難うござりまする。
玉木　サア、一時も早う、その非人に對面とげよう。
兩人　委細畏まりました。
長者　早う行つて、尋ねておぢや。
忠太　左樣ならば奧樣。
幾代　旦那樣。
兩人　行て參りませう。
ト唄になり、兩人、イソ〱して向うへ入る。
長者　イヤ、ほんに最前から、與三右衞門さま、さぞ御退
屈であらう。ドレ、奧へ行て、久々でのお物語りをしよ
うか。
ト唄になり、奧へ入る。玉木壹人殘り、思ひ入れあつ

て
玉木　なんでも、その非人めを引入れて、娘と共に爰を追ひ拂ひ、その後は。うまい〳〵。この大仁さんは、なぜに遲い事ぢややら。待たるゝとも待つ身になるなとは、よう云うたものぢやなア。

　ト合ひ方、時の鐘になり、白の着付け、黒衣にて、大仁坊、珠數を爪繰りながら、出て來る

大仁　南無阿彌陀佛々々々々々。ハア、最早長者が許へ近寄つて來た。愚僧が祈り込んだこの珠數の威德を見せ、命乞ひをしてやらうか。さうぢや〳〵。

　ト此せりふ、仔細らしく云うて、靜々と本舞臺へ來り

大仁坊、只今參り候ふぞや。主は無きや。案內いたされてよからう。

　ト玉木、思案して居る。

しもざまは居らぬか。腰元達はなきや。案內いたしてよからう。

　ト玉木はフツと心づき、表を見て

玉木　ヤア、お前は大仁坊さま。

　ト飛び付くやうにして、あたりを見て

いかい御苦勞に存じまする。

大仁　なんの、坊主の役ぢやもの。殊に外へ行くでもなし爰の家へ來る事ぢやもの、なんの苦勞にあらう。

玉木　オヽ、さう思うて下さんすりや、わたしも嬉しい。マア、下に居て下さんせ。

　ト大仁坊が側へ寄り

わたしやお前に話しがある。その譯は、每日お前が祈り祈禱をして居やしやんす、あの娘の梅ケ枝が病氣の根ざしは、戀煩らひぢやといなア。

大仁　ナニ、戀煩らひぢやとか。

玉木　サア、それに付き、此方の旦那めが、その聟を入れぬと吐かす。そこをわたしが、是非入れねば濟まぬと云うて、たつた今、手代を連れて幾代めが、行き居つたわいな。

大仁　ヤア〳〵、それは無分別。どうした事で、聟を入れては、いよ〳〵この家はその聟の

玉木　ア、コレ、そこをぬかつてよいものかいな。

大仁　して、詳しい樣子は。

玉木　その聟といふ奴は、あらう事かいな。非人ぢやわいなア。

大仁　ナニ、非人を聟にするとは、どういふ譯で。

玉木　サイナア、聞かしやんせ。あの梅ケ枝めが、いつぞや天神參りの節、フツと見染めたと吐かして、それから戀煩らひぢやといなア。そこでその聟を引入れて、行儀作法でしくじらせ。娘諸ともこの家を追ひ出してしまふわたしが心の企み、なんと好い智惠ではござんせぬか。

大仁　ハア、、流石は女儀、まそつと智惠が行き屆かぬ。

玉木　そりや又なぜ。

大仁　サア、もしその非人をしくじらせ、まんまと首尾よく非人ばかり、追ひ出した所が、娘が跡へ殘りし時の、思案は如何に。

玉木　エ、、流石は長袖、栴檀の懷ろ子ぢや。それゆゑに娘が病氣、非人壹人を追ひ拂へば、直ぐに娘は

ト自害の眞似をして

これぢやわいなア。

大仁　ムウ、成る程、これも尤も。併し、その聟をしくじらす工面は。

玉木　サア、聞いて下さんせ。先づ第一が、長袴といふがわたしの魂膽。筵に引替へ、踏みつけぬ疊。それでゆかねば、濃茶薄茶で困らす工面。もし仕損じたらば、破れかぶれ。

ト殺さうといふ仕方する。

大仁　成る程、惡い事には、ぬかりない。

玉木　戀ゆゑには、鬼となつたる例しもあり。

大仁　我れも又、法界坊の譬へもあり。

玉木　お前とわたしが、心を合せ

大仁　首尾よくゆけば

玉木　わたしがそれより

大仁　還俗して長者のお聟。

玉木　わたしや矢ツ張り丸いのが。

大仁　でも、長者の聟が坊主では。

玉木　福大黑と云はする氣。

大仁　その心底を見る上は、可愛い此方の女房ども。

玉木　いとしい此方の戀坊主。……オ、嬉し。

ト兩人思ひ入れ。よろしく道具廻る。

本舞臺、三間の間、うしろ淺黃幕。淀川堤の體。前に草土手、所々に稻村。松の立ち木、松の吊り枝。四ッ竹の合ひ方にて道具とまる。

ト向うより源之助、非人の拵らへにて、竹杖を持ち出て來る。上手より仕出し二三人出る。源之助、この仕

出しに錢を乞ふ事。此うち花道より忠太夫、幾代出て
あの非人がそれぢやといふ思ひ入れして、本舞臺の方
を指さし、いろいろ思ひ入れ。源之助また花道へ來
り、兩人を見て腰を屈め、錢を乞ふ。忠太夫、幾代、
迷惑さうに同じく腰を屈め

忠太　イヤ、ちつとあなた樣に。
ト源之助と入れ變り、跡になつて

源之　モシ、旦那樣、壹錢取らせて下さりませ。
トこの間、忠太夫、幾代、氣の毒なるこなし。始終小
腰を屈め、また後になり

幾代　イヤ申し、あなた樣、密々お頼み申し上げたき事が
ござりまして。

源之　どうぞ、壹錢下さりませ。

忠太　あなた樣に、お願ひの仔細あつて。
ト此うち源之助、後になり先になり、よろしくあつて
トゝ、本舞臺へ來て、源之助を上座へ直し、兩人手を
つかへる。源之助、不思議のこなし。同じく手をつか
へ

源之　先づ／＼、お手を上げられませう。平に／＼。

幾代　憚かりさまながら、我れ／＼が願ひ一通り、お聞き
なされて下さりませう。

源之　イヤ／＼、申し、旦那樣。私し風情に兩手を突き、
お願ひは、大方お試しなさるゝ命の御用と、申すやうで
ござりませう。拙者儀は、ちと望みが

忠太　イヤ／＼、お非人樣、左樣な無情なお願ひではござ
りませぬ。

幾代　我れ／＼がお願ひの樣子を。
トこの時、源之助、立たんとするを
先づ／＼、お聞きなされて下さりませう。
ト源之助、是非なく坐り、氣の毒なるこなしある。合
ひ方。

忠太　ハア、拙者儀は、長柄の長者の家來、忠太夫と申す
者でござりまする。今日この所へ參りましたる樣子は、
別の儀でもござりませぬ。貴公樣を、長柄の長者の聟が
ねに致したく、主人の娘梅ケ枝と申す者、貴公樣を慕ひ
慕ひ居りまするゆゑ、主人、私しへ申し付けまするには
直ぐさま參り、お願ひ申し上げ、其まゝ連れ來れとの仰
せ。あまり早急な事ながら、我れ／＼同道にて、御來駕
なし下されまするやう、願ひ奉りまする。
ト源之助、右の話しを聞きながら、ビク／＼する思ひ

入れあつて

源之　エヽ、其許さまは、亂心なされましたか。但しは狐狸に化かされてござるかと見えまする。手前は非人乞食先づは、心をお靜め下されませう。

幾代　アイヤ申し、亂心も致しませぬ。全く僞はりを申すてはござりませぬ。手前主人の娘が、戀ひ焦れて、是非ともお供いたしませねば、私し二人の者は、宿元へは歸られませぬ。何卒この道理をお聞き屆け下されまして、コレ、お乞食樣。

ト手を合せ拜む。源之助、身内ゾッとせしこなしにて

源之　何しに私しを其やうに、仰せ下さりまする。ア、聞えました。さては試し物になされうとの事か。但しは申の年申の月申の日に生れし者かと、生膽でも取らうとの思し召しの儀でござりませうが、なか／＼左樣な年月ではござりませぬ。只管この儀はお許しなされて下さりませ。どうぞ、お聞き屆けなされて下されませう。旦那樣奧樣、この儀ばかりは、お助けなされて下さりませ。アヽ申し、お歸りなされて下さりませう。

ト兩人を拜む。兩人思ひ入れ。

忠太　ハヽヽ、何しに左樣な事でござりませう。詳しき事は幾代、ソレ、お物語り致してよからう。

幾代　成る程、斯う申しては解らぬ筈。いつぞや主人娘、天神詣での折から、秘藏の鶯を鷹に取られんとせし時鷹を打つて鶯を、お助けなされしその時に御浪人樣が

忠太　其許樣をお見染め、戀煩らひ。今は命も絶え／＼、御兩親の嘆きは大方ならず、たとへ賤しき御方なりとも娘が命には替へ難し。爰の所をお聞分けて下され

幾代　どうぞ御行くへを尋ね出して、梅ケ枝の聟となしくれよとの事。長者兩人とも、泪を流しての賴みゆゑ

忠太　はる／＼と其許樣の在所を探せしに、今日天神の社にて、お目にかゝると申すも、即ち天神樣の御利生と存じますれば

幾代　御辭退なく、お越し下さらば

忠太　我れ／＼とても主人への忠義も立ち

幾代　また主人の命の助かるも

忠太　あなた樣のお心一つ。

幾代　丸う納まる長者のお家。

忠太　どうぞこの儀を

幾代　お聞き屆け

兩人　下さりませう。

ト此うち始終源之助、手を組み思案して居る。

源之　成る程、鶯を助けし覺えあり。さりながら、斯く非人の身なれば、御長者さまの聟にならんとは、餘りに恐れあり。また私し事は大望あつて、諸國を巡る用事もござりますれば、この事に於て幾重にも、御宥免下されませう。御兩所樣、偏へに願ひ奉りまする。

ト忠太夫、これを聞き、感心の思ひ入れ

忠太　アヽ〳〵天晴れ。實にあなた樣は只一通りの非人に非ず。長者が聟にせんと云はゞ、喜んで卽座に承引あるべきに、今の一言にては、猶更奧床しい。諸國へ出で給はんとあらば、キツと請合ひ。御祝言あつて、娘御病氣本腹いたさば、その上にて貳年三年なりとも、御出國なされませ。

幾代　人間の命一つお助けあらば、何事の望みも叶ひませう。御身に對して、惡しくはござりますまい。

忠太　斯樣に事を分けてのお賴み、どうぞお聞濟み下され御非人樣。

ト兩人立別れ、袖に縋り賴む。源之助、思案して

源之　さて〳〵、世には珍らしき事もあればあるもの。乞食を長者の聟にせんとは、かゝる不都合な緣組みはあるまじ。娘御のお命助け、その上、旅立ちの儀をお請合ひ下さる上は、兎も角もお心次第に隨ひませう。

忠太　エヽヽ。

ト大きに愕りして

コリヤ、幾代、兎も角もせうと御意なさるゝ。

幾代　アイ〳〵、サア〳〵、めでたい〳〵〳〵。

兩人　エヽ、有り難うござりまする。

ト兩人、顏を見合せ、落ちつきし思ひ入れして喜び、手をつき一禮する。

エヽ、忝ない、お忝なうござりまする。

トこんな事、度々あつて辭儀する。

忠太　サア〳〵、これより私しが密かな所へお伴ひ申し、お湯に入れ、お髮も直させ、お小袖を召替へさせませう

幾代　なんでも善は急げぢや、申し、お乞食樣。

忠太　コレ。

ト幾代に目配せ。ひよんな事云うたといふこなし。忠太夫、片腕へ連れて來て

其方も、ヒヨコスカ〳〵と、嗜なんだがよい。長者の娘御、梅ケ枝さまの聟様を、お乞食とは、滅相な事を云ふものぢや嗜なめ〳〵。

幾代　それでも、お名は何と仰しやるやら、知れもせぬものを。
忠太　オヽ、さうぢや〳〵。肝心の聟どのゝお名が知れねば。
幾代　ようござんす。わたしが聞いて來るわいな。
ト源之助が側へ行き
イヤ、お非人樣。
ト云ふを忠太夫、術なき思ひ入れ。
申し、あなた樣のお名は、ござりまするか。
源之　成る程、手前の名は、榮三郎と申しまする。
トこの時、非人壹人出て、委細を立聞いて居る。
忠太　ナニ、榮三郎さまとな。榮は榮える。長者の家も、益々榮えるといふ。吉左右々々。急いで我が家へ
源之　然らば、御同道申しませう。
ト非人、前へ出て
非人　何かおめでたい。御祝儀を戴きたうござりまする。
忠太　ア、コレ〳〵、わしらは心の急く者。なんぞ取らせてやりたいが、出たのがない〳〵。
非人　ナニ、出たのがなくば、おいらが出してやらう。
ト胸倉を取りにかゝるを、源之助、引退けて、ちよつと手を捻ち上げ
源之　足洗ひするこの門出。
忠太　非人が非人に付くといふは
幾代　これがほんの山から里。
源之　祝儀代りに、此方から、祝うて石打ち。
トぽんと返し、思ひ入れ。
兩人　榮三郎さま。
源之　サア、參りませう。
ト四ツ竹の合ひ方になり、兩人、源之助を煽ぎ立てながら、向うへ入る。この道具廻る。
本舞臺、中足の二重、向う金襖。上手、塗り骨の障子屋體。すべて、長者屋敷、奥座敷の模樣。爰に梅ヶ枝、腰元に髮を結ひ直させて居る。櫻木、下手に扣へゐる。合ひ方にて道具納まる。
腰元　御寮人樣、サア〳〵、お髮が出來ましたわいなア。
同　ほんに、取亂してお出で遊ばしてさへ、お美しいに、又お髮をお取上げ遊ばしたら、一しほ
兩人　お美くしうお見え遊ばされます。
梅枝　また其方衆はわしを、嬲りやるかいなう。

兩人　なんの勿體ない。どうして、あなた樣を

　ト奥より、おぶん出て

ぶん　これは〳〵御寮人樣、御病氣でお出でなされぬのに、滅相な、お髮をお上げなされますといふ事が、あるものでござりまするか。

腰元　サイナア、わたし等も不思議に思うたが、何やら急に、いそ〳〵と遊ばして、髮を結うてくれいと仰しやる。こりや、どうも合點がゆかぬ事ぢやわいなア。

櫻木　コレ〳〵、其やうな事云やるな。病は兎角氣より起るとやら。日頃からお心弱い姉上樣、何やかや御苦勞なされるゆゑ、此やうな御病氣も起るといふもの。髮でもお取上げなされ、さつぱりとなされたら、御病氣もよからうわいなア。

腰元　左樣でござります。ほんに思ひの所爲か、お顏色までが、急にようおなりなされましたやうでござりますわいなア。

同　それ〳〵、どういふ事やら、さも嬉しさうなお顏つきでござります。

ぶん　こりやどうも、とんと合點がゆかぬわい。なんぼお堅い御寮人樣でも、もうお年頃、蕃實の豆もはぢける時分にははぢけるとやら。こりやてつきり、何か内證で面白い事が出來たので、それで急にあのやうに、髮を結つたり、何かなされるのぢやござりませぬか。

櫻木　コレ〳〵、おぶん、どうしたものぢやぞいなア。餘りツカ〳〵と口をきゝやんな。また御病氣に障らうぞや。

皆々　嗜なましやんせいなア。

　ト向うより、幾代走り出て來り

幾代　サア〳〵、御寮人樣、やう〳〵の事で首尾して參りました。お喜びなされませ。

梅枝　ヤア〳〵、何と云やる。そんなら自らが願ひが叶うたかいなア。

幾代　イヤモウ、叶うた段では、ござりませぬ。追つつけお聟樣がお出でゞござりませう。コレ〳〵、腰元衆、早くお小袖を召替へさせたがよいわいなア。

皆々　ヤア〳〵、聟樣とは、何の事ぢやぞいなア。

幾代　何の事どころか、御寮人樣の所へ、聟樣がお出でなされまするのぢや。サア〳〵、早く〳〵〳〵。

腰元　そんなら、マア、奥へ。

梅枝　おぶん、早く小袖を持つておぢや。

　ト唄になり、奥へ入る。幾代殘り、思ひ入れあつて

幾代　サア〳〵、旦那さま〳〵。今にお聟様のお出でゞござります。

ト呼ぶ。奥より長者、上下衣裳に着換へ、玉木も裲襠の姿に改め、出て來り

長者　そんなら聟どのゝお出でとや。よい折柄、與三右衞門どのゝお入り、この通りお傳へ申し、この席へお連れ申すがよからう。

幾代　ハイ〳〵、畏まりました。

ト幾代、奥へ入る。

玉木　旦那どの、今宵は娘が一生に一度の、晴れの祝言。聟どのには、嘉例の通り、長袴になされませ。

長者　如何にも。その儀はかねて忠太夫に云ひ含め置いたれば、萬事別家方にて、支度いたさせて連れ參る。

ト奥へ向ひ

コレ〳〵、腰元、早く爰へ伴なうてよからう。

皆々　サア〳〵、御寮人様、お出でなされませいなア。

ト合ひ方になり、梅ヶ枝、白無垢に着替へ、綿帽子を着て出る。與三右衞門、腰元皆々付添ひ出て、よろしく住ふ。

與三　これは〳〵、左衞門どの、よい折柄に參り合せ、この座に列なると申すも、不思議の因縁。與三右衞門に於ても、祝着に存じまする。

皆々　おめでたうござりまする。

ト三味線入り、亂れになり、知らせに付いて、正面の襖を引拔く。千疊敷の遠見になり、燭臺灯しあり、向うより、忠太夫、上下にて、雪洞持ち出る。後より源之助、誂らへの長上下、小さ刀、仕込みの竹杖を持ち悠々と出て來り

源之　誠に天地開けし此方、斯様に不思議な緣組みはござるまじ。拙者、只管辭退申せしところ、これなる忠太夫どの、達て御承引なく、乞食御承知の上なれば、否み申さず、推參仕つてござりまする。

ト長者、感心の思ひ入れあつて

長者　長者となり、乞食となるも、前世の因緣。こなたも深い因緣あればこそ、この家の聟となる。この上とも、娘を不便と思うて、行く末長く添うてくりやれ。

玉木　私しは、玉木と申して、娘梅が枝が母でござりまする。行く末長う頼みます。時に聟どの、見ますれば、座敷にそぐはぬ竹杖。そりやマア何でござりまする。

ト何がな見出して罪に落さうといふ思ひ入れ。

明治三年五月守田座所演　　花菖紀念畫双紙

中村芝翫の與三右衛門　澤村訥升の源之助

源之　この竹杖の儀でござりまするか。

玉木　いかにも。

源之　この儀は拙者、賤しき身よりこの家へ聟となりし上は、我が身に取つては、この上も無き身の立身でござりまするゆゑ、その元を忘れまじき爲、世を終るまで、竹杖を放し申すまじき願ひ。それゆゑこれまで持參仕る。あはれ御免を蒙むり、寢食ともに、この杖を離さぬ我が所存、憚りながらこの儀、御容赦の程、願ひ上げ奉りまする。

長者　何は兎もあれ、先づ／＼これへ。

源之　然らば御免、下さりませう。

ト矢張り、右の鳴り物にて、本舞臺へ來り、よろしく住ふ。

長者　サア、この上は、一刻も早く、娘と祝言。忠太夫、ソレ、杯の用意。

玉木　イヤ、旦那樣、暫らくお待ち下さりませう。祝言は後の事。先づそれよりこの母が、聟どのゝ行儀作法を試みませう。……イヤナニ、聟どの、夫婦の仲も濃茶の手前、一服所望したうござるわい。

源之　イヤその、濃茶とやらは。

玉木　ウム、そんなら何と云ふ。濃茶は知らぬか。そんならわしが、申しつけた薄茶、一服進ぜませう。ソレ、腰元ども、手前の薄茶を早う。

腰元　畏まりました。

ト琴唄の合ひ方になり、薄茶を玉木の前へ持ち行く。玉木、頷にて、源之助へ遣はせといふこなし。腰元、心得、源之助が前へ直す。源之助、思ひ入れあつて

源之　イヤ、拙者儀は、人の食べ剩り、飲み剩りを飲みし身の、薄茶とやらは、見たる事もござりませぬ。

玉木　すりや、薄茶も知らぬか。

源之　この儀は御免下されませう。

忠太　イヤ／＼、その儀は、お止めなさるゝがよろしうござりませう。

玉木　忠太夫、扣へい。

忠太　なぜでござりまする。

玉木　聟に、この母が云ひつける事。家來の其方が、何知つて。

忠太　でも、餘りと申せば。

玉木　大切な夜といひ、これには、與右衛門さまも、お出でなされまする。餘り、ズバ／＼と出しや張つたら、

免さぬぞ。
忠太　ぢやと申して、お前様のやうに。
玉木　云うたがどうした。其方が知つた事ぢやない。口出しせずと、すツ込んで居らぬか。
忠太　へエイ。
　　トロをつぐんで扣へる。玉木、摺り寄つて
玉木　コレ、聟どの。成る程、娘が戀ひ焦れた程あつて、人品骨柄、何一つとして云ひ分の無い花聟どの。併し、なんぼ器量が好うても、長者の聟とも云はるゝ者が、薄茶一つ立てる術も知らないでなからうか。あれにお出でなさるゝは、淀の御城主、與三右衛門さまといふ、御大身のお方。皆お附合ひは、貴人高位。もて遊びは立花、茶の湯、亂舞の類ひ。それに何ぞや、薄茶位ゐを知らぬと云うて、濟まうかいなア。イヤモ、それもその筈かいなア。昨日までも、今日までも、右や左のお長者様と、人の袖に縋つて、壹文貳文の合力受けた、お非人様が、薄茶を知らぬも、尤もかいの。ホヽヽヽヽ
長者　これはしたり、玉木、どうしたものぢや。今宵始めて逢うた聟どのに對して、無禮の詞。コレ、聟どの、何を云うても、女子の事。必らず氣にかけて下さるな。

源之　何がさて、勿體ない、その仰せ。母様のお詞は、他家にて恥を搔かせまじとの御深切。拙者が身に取りまして、いかばかりか、有り難う存じまする。
長者　イヤモ、何も風情もなき、仕合せでござりまする。時に、與三右衛門さま、いつぞは、承りませうと存じ居りましたが、あなたは淀のお城主なれば、淀與三右衛門とお名乗りなさるゝのでござりまするか。又は、あなた様の、お苗字が、淀と申しまするのでござるかな。
與三　拙者儀は、木村與三右衛門と申せども、先祖木村與三右衛門は、その頃城中に水乏しく、水車の工夫を仕り、水の便りを得しゆゑ、淀與三右衛門が水車と云ひ習はし、いつしか木村を淀と稱へ、遂には、淀與三右衛門と申しまする。然るにこの度、金子返濟いたすも、先年佐々木源太左衛門と申す者、川浚ひを仰せつけられしに、嶋田の宿にて横死、その事暫らく延引いたせしところ、某その佐ゝ木の家に、親々の由緣もあれば、鎌倉より淀與三右衛門に、川浚ひ仰せつけられしところ、事故なく相濟みしゆゑ、わざ／＼、今般貴殿方より借用申せし金子、返濟に及び申す。卽ち、淀と申しまする儀は、斯くの通りでござる。

ト源之助、これを聞き、思ひ入れ。

長者　それで様子が解りました。この上は、この所にて、亂酒に仕りませうかな。

玉木　それはよろしうござりませう。亂酒とあれば、聟どの、何ぞめでたい謠を、謳うて聞かせさつしやれ。

源之　イヤ、その儀は。

玉木　知らぬか。長者の聟が、亂酒の席に於て、謠を知らぬとは、よもや云はれまい。誰れかある、鼓、太鼓を、これへ持ちや。

侍ひ　ハア、。

ト下座より、上下の侍ひ、太鼓と鼓を持ち出て、玉木が前へ直す。

玉木　サア、謳はつしやれ。

源之　サア、その儀は。

玉木　但しは知らぬか。

源之　サア。

玉木　サア。

兩人　サア／＼／＼／＼。

玉木　早う謠を、謳はつしやれ。

ト玉木、鼓を取り、あてがはうとするを、付け廻し、キツと見得、玉木、太鼓を打つ。

源之　東遊びの舞ひの曲。

トこれより源之助、鼓を取上げ、羽衣の謠を謳ふ。玉木太鼓を打ち、ト源之助、また太鼓を打つ事あつてキツと納まる。

源之　未熟の藝道、お耳に觸れ、お恥かしう存じまする。

與三　ホ、ウ、天晴れなる源之助どの、お嗜なみ、感心いたした。左衛門御夫婦にも、さぞかし御安堵でござらうなア。

長者　何一つ、拔け目のたい聟どの。イヤモ、此やうな喜ばしい事はござらぬ。この上は忠太夫、娘を奥へ伴なひ、祝言の用意を。

忠太　畏まりました。サア、御寮人様、マア奥へ。

長者　サア／＼、今宵のめでたき夜は、互ひに機嫌のよい、のがよい。與三右衛門さまも奥へござりませ。玉木も奥へ。

與三　イヤ、某は、この所に於て、聟どのに、少と話しもござれば、御夫婦は、先づ／＼お先へ。

長者　左様なれば、與三右衛門さま、玉木も奥へ。

玉木　勝手に致します。

長者　與三右衛門さま、後程お目にかゝりませう。

ト唄になり、この一件殘らず奥へ入る。下木、文を落す。與三右衛門、これを拾ひ、ちよつと開き見て、思ひ入れあつて、懐中へ入れる。源之助、思ひ入れ。合ひ方變る。

源之　なんと、與三右衛門さま、先程のお話しを承りますれば、あなた様の御先祖は、佐々木に、由縁のあると御意遊ばせしが、いよ／＼左様かな。

與三　如何にも、某先祖は、佐々木に由縁あつて、その筋目に依り、川浚ひを鎌倉より仰せつけられしが、また貴殿は、佐々木家を深うお尋ね召さるが、その佐々木に身寄りの者か。

源之　イヤ、何も左様な者ではござりませぬ。

與三　それに又、佐々木の餘類、お糺し召さるゝは、ハ、ア、聞えた。佐々木源太左衛門、嶋田の宿にて横死、その砌り部屋住みの悴ありしと聞きつるが、さては其方、源太左衛門が一子、同苗源之助であらうがな。

源之　全く左様な。

與三　イ、ヤ、お隱しあるな。宵よりの立振舞ひ、なかなか非人に似合はぬ諸藝の達者、武術といひ、慥かに父源太左衛門が、敵を打たんず心であらうがな。サア、源之助どの、お名乘りあらば、身不肖ながらも此與三右衛門お力になるまいものでもない。サ、、早く明かされよ。

源之　成る程、御深切のお詞、有り難うは存じますれども

與三　實に尤も。

ト與三右衛門、思ひ入れあつて、小柄を拔き、金打する。

斯く金打致せば、先づお名乘りあれ。

源之　斯く御心體を見るからは、何をか包みませう。御推察の通り、佐々木源太左衛門が一子、同苗源之助でござります。

與三　さてこそな。

源之　父源太左衛門、討たれしその座より、屋敷は伯父源吾に押領せられ、直さま、母諸とも河内の國、春日江の堤に、小家をしつらひ、往來の人に壹錢貳錢の合力受けて、非人の世渡り仕るところ、伯父源吾、某の他行を幸ひに、母を殺し、家の系圖を奪ひ取り立歸る。その無念さ、口惜しさ。所詮、悔んで歸らず。その折節、この家の番頭、忠太夫どのゝ、忠節に免じ、この家へ入り聟。親の敵を持ちながら、不届き者と思し召しもあらんなれ

ど、全く色に迷ひでにあらず、その證據は、この身に大望ある事は、忠太夫どのい、幾代どのに、かねて申し置き首尾よく、讐を討たせ、再び佐々木の家を起し、修羅の妄執晴らさせ、この身を開く梅ヶ枝どの、旦の恩義あれば、また立歸り優曇華の、花の契りへ歸り咲き、今の憂き身を昔語り、私しが身の幾瀬。與三右衛門どの憚りながら、御推察下されませう

與三　ハテサテ、若年の貴殿の御心配、さぞかしと察し入る。併しながら、敵、多賀の源太左衛門、彼奴が用ゆるところ、戸田流の奥儀を極め悟りあれば、定めし助太刀あらん。なんと〳〵。

源之　敵討は、只恥あるものゆゑ、例へ、敵、如何なる達人にもせよ、まゝ助太刀あるとも、如何程の事やあらん。相手向ひの勝負を決せん。

與三　イヤ、その詞、心許ない。さ程どの心底にてありながら、諸國を巡り、敵の行くへを探し、倶に天を戴かざる父の仇を討たうともせず、この家へ入り聟。ア、、聞えた。戀に眼がくらみしか。但しは娘の色香に迷うての事か。見下げ果てたる人非人。草葉の蔭の源太左衛門、さぞかし立腹。今この與三右衛門、父御に代つて汝を成敗。覺悟なせ。

ト長押に掛けたる鎗を押取り、早襷を掛け、平舞臺へ下り、キッと見得。源之助、詮方なく、ツカ〳〵と出て

源之　手向ひ御免。

ト扇を持つてあしらふ。よき程に見得。大小入り亂らへの鳴り物になり、立廻つて、キッときまる。

與三　これが神道の極意、智心流、三妙三つの極意。

トまた立廻つて

源之　戸田の極意、身流れの三つの口傳。

トまた立廻つて

與三　これが即ち、木村の家に傳はる田宮の心流、三妙術の極意。しつかりと、應へたか。

トいろ〳〵あつて、振りほどき

源之　お免しを受け、智心流の儀、心に受け、まツこの如く、かけ向ひ、秘術を盡さば

トよろしくあつて

これでは敵が、討たれませうがな。

與三　天晴れ、その極意を胸に疊みながら、本望遂ぐるに疑ひなし。して、まさかの時の嗜なみは。

源之　かねて用意の、この竹杖に
與三　見事。まだ密々に話しもあれば
源之　奥の一間で
與三　何かの密談。
源之　萬事のお指圖。
與三　身共が胸に。
源之　委細の事を
與三　云うたり
源之　聞いたり
與三　マア、それまでは
源之　與三右衛門どの。
與三　コリヤ。
ト早舞ひになり、この道具、ぶん廻す。
本舞臺、武重、朱骨の障子建てあり、上手、矢張り障子屋體、下手、柴垣、眞中に竹床几を置き、梅ヶ枝、物思ひの體にて、腰を掛け居る。側に鶯の籠直しある。獨吟にて道具とまる。
〽鶯の、都の春にあいたけて、氣は淀川へ泊り船、さゝへられたる北風に、身は儘ならぬ丸太船。

梅枝　コレ、唐琴、其方は誠に結ぶの神、今宵といふ今宵、自らが念願叶うて、戀ひ焦がれたお方と女夫になり、此やうな嬉しい事はない。人間ならば、禮の云ひやうもたんとあれど、鳥類の事なれば、外に仕様もなし、ほんに可愛らしい、唐琴ではあるわいなア。
ト獨吟の合ひ方になり、源之助、奥より出て
源之　何か合點のゆかぬこの家の有樣。與三右衛門どのゝ詞といひ、この家に足は止め難し。ちつとも早く、オ、それ。
ト行かうとする。梅ヶ枝、そこへ出て、源之助を留めて
梅枝　ア、申し、樣子は殘らず聞きましたが、いま逢うて、いま別るゝとは、あんまりお胴慾で、ござります。せめて一月、二月、お側に居ての上でなければ、いつかな放さぬ、放しはせぬ。
トまた獨吟。
〽岸の柳に引留められて、歩み習はぬ陸路をも、登りつめたも幾度か、一夜を明かす八軒家。
ト振りにて、源之助を留める。
源之　成る程、止めさしやるは、理りなれど、今宵この家へ参りしは、忠太夫兄妹の頼みにより、是非に及ばず、

一旦聟入りはしたれども、この身は望みある身なれば、一時も是は止め難し、爰放されよ。

梅枝　その事は、忠太夫、幾代にも聞きましたが、望みある御方なれば、無理に云うても、お聞入れはあるまい。また戀ひ焦がれて死なうより、いつそ一思ひに、あなたのお手にて

ト源之助が、刀を取らんとする。源之助、これを押し止め

源之　待つた、早まるまいぞ。

梅枝　お止めなさるゝからは、わたしの願ひを叶へて下さりますか。

源之　すりや、達てと云へば、馴染もない、この源之助の爲に、命を捨てる御所存か。

梅枝　捨ていでなんと致しませう。これほど、思うて居るわたしに、お隱しなさるゝが怨めしい。行かいでならぬ事ならば、その入り譯を、とつくりと、云うて聞かせて得心させ、なせその上で、旅立ちはなされませぬ。

源之　斯程までに申さるゝ、心底を見るからは、今は何をか包まん。もと拙者は、佐々木源太左衞門と申す武士の一子、同苗源之助と申す者。ことにこの身は、討たねばならぬ親の敵、尋ぬる栞、天運に叶ひ討ち負ふせに、その時こそは改めて、變らぬ夫婦。變らぬ心の證據には、いつぞや我れに贈られし短冊は、これ見られよ。肌身離さず所持いたすが、僞はりならぬ我が心。爰の道理を聞き分けて、末の縁を、待つて居て下され　コレ、梅ケ枝どの。

梅枝　さう承れば、猶の事、あなたの親御の敵は、わたしが爲も舅の仇、どうぞ、いづくまでも諸ともに

源之　君が一日の情に、妾が百年の命とは事變り

梅枝　虎伏す野邊の末までも。

源之　つらからば、只一筋につらからで、情は人の爲ではござらぬ。

梅枝　イエ〳〵、どのやうに仰しやつても、あなた一人は、遣りはせぬわいなア。

〽雜魚寢を起す細嶋の、つぐるは鴉、遠山寺、

ト九ツの鐘鳴る。源之助、指折り數へて

源之　ありやモウ子の刻。

トいろ〳〵あつて、思ひ切つて梅ケ枝を當て、花道まで行き、印籠を取つて、抛りさうぢや。

へ盡きぬ話しの種となりけん。
ト向うへ走り入る。梅ヶ枝、心付き、起き上がつて
梅枝　源之助さま〳〵。源之助さまは、もうお出でなされましたか。コレ、唐琴、其方は鳥類なれど、聞分けのよいものぢや。わしが云ふ事を、よう聞きやゝ。源之助さまに追ひついて、早う呼び戻してたも。
ト云ひきかして、籠を明ける。鶯は驚ろいて、上手障子屋體に逃げ込む。
エヽ、憎くい鶯。日頃わしが、可愛がるを打忘れ、いま頼みし事を聞入れず、飛び去つたは、エヽ、流石は鳥類。いつそ引裂いて。
ト上手、障子屋體を明ける。大仁坊と玉木、しどけなき形にて居る。梅ヶ枝見て、悔りし、逃げんとする所を大仁坊、梅ヶ枝が髻を摑んで引寄せる。
大仁　ヤイ、どう女郎め、二人の有樣、うぬに見付けられては、生けては置かれぬ。覺悟ひろげ。願以至功德、この坊主が、引導渡してくれう。
トさん〴〵に苛なむ。
梅枝　マア〳〵、待つて下さりませ。たつた一言、云ひたい事が。

大仁　サア、云ひたい事があるならば、早く云へ。
玉木　エヽ、いつそ捻ぢ殺して、しまふがよいわいなア。
梅枝　マア〳〵、待つて下さりませ。この年月の母樣の御恩、忘れは置きませぬ。後の親を本にせいと、なかなか他言は致しませぬ。悪事千里と申せば、外より洩れても我が身になる。そこを思うて今宵、この家を出て、例へいづくの果てまでも、源之助さまの、お後を慕うて參りまする。さすれば、漏れ聞えん事、少しもなし、そこを思うて、どうぞ助けて下さりませ。私しを愛で殺し給はゞ、忽ちに父のお疑ひ、かかるは必定。
大仁　成る程、うぬを愛で殺せば、二人の身の上。
玉木　こちとら二人が、難儀にかゝはるは目の前。
梅枝　私しが家出のしるしには、書置するが父への證據。
玉木　オヽ、出かした。それでこそ、お母さんへ孝行だぞ。
大仁　サア、源之助が後を、慕うて行くといふ、書置をキリキリ書け。
ト上手より、硯箱、卷紙を持つて來て出す。
梅枝　ハイ。
ト獨吟になり、梅ヶ枝、涙流しながら、書置を書く。
さぞ、父さんが。

玉木　キリ〳〵書かぬか。
大仁　サア、キリ〳〵書け。
梅枝　ハイ。
　トまた獨吟になる。梅ヶ枝、書置を書きしまふ、玉木、
　思ひ入れあつて、手箱の中より金子一包みを出し
玉木　コリヤ、この金は、其方が路用にくれる程に、早う
　源之助が後を追うて、行け〳〵
梅枝　左樣ならば、母樣、おさらば。
　ト早三重になり、一散に向うへ入る。
玉木　大仁さん、まんまと首尾よう參りましたな。
　ト大仁坊、思案して
大仁　イヤ、まだ落ちつかぬわい。よく〳〵考へて見れば、
　彼奴を生けては、我れ〳〵が身の上。また立歸り、父へ
　語られんと計られぬ。我れは、これから彼奴に追ひつき、
　一思ひに刺し殺し
玉木　そんなら、爰に丁度、旦那どのゝ、この脇差。
　ト脇差を出す。
大仁　これから、直ぐに。
玉木　早う行かんせ。
大仁　合點だ。

　ト尻引ツからげ、向うへ走り入る。玉木思ひ入れあつ
　て、奥へ入る。バタ〳〵になり、幾代、奥より出て
幾代　梅ヶ枝さま〳〵、源之助さまは、何れにお出でなさ
　れました。お二人樣〳〵。
　トそこに落ちてある、梅ヶ枝の書置を見て
　書置きの事。エヽ。
　ト恟り、思ひ入れ。
　なう悲しや、源之助さまの後を慕うて、行くとある書置。
　申し、旦那さま〳〵、イヤ〳〵、斯うしては居られぬ所。
　遠くはお出でなされまい。お主の一大事。オヽ、さうぢ
　や。
　ト行かうとする。雨車になる。そこに落ちてある番傘
　を差して向うへ、一散に走り入る。合ひ方になり、奥
　より與三右衛門、忠太夫、玉木、長者、櫻木、各々手
　燭を持ち出て
與三　千萬有り難う存じまする。
長者　イヤモ、何か家内の取込みゆゑ、何事も御容赦下さ
　れい。大事なくば今暫らく
玉木　御休息なされまして、もう一獻召上がりませぬか。
忠太　マア〳〵、よろしうござります。

與三　イヤ〳〵、思はぬ長座、拙者ことも、近々鎌倉へ發足いたせば、何かと支度もござる。今日は此まゝ。

長者　左様でござらば、また其うちに、ゆるりとお出でなされませ。

與三　過分に存じまする。

忠太　與三右衛門さまのお立ち。ソレ、お供の衆〳〵。

家來　ハア、。

ト下手より主水、外に家來貳人、箱提灯を持ち出る。

與三　火急の事ゆゑ、お禮は追つてこつ奥方、今日は何かと失禮……ア、、誠や、牝鷄の晨する家は、必らず亂るると古人の金言。最前からの體たらく、心得難き立振舞ひ。底意の程も。

玉木　エ。

ト思ひ入れ。

與三　ハ、、。ナニ、左衛門どの、兎角に家事には、心を委ね、萬事とくと御賢慮をめぐらされい。

長者　イヤモ、お心添へ、有り難う存じまする。

與三　ナニお手代、最前座敷にて、拾ひましたこの反古、何か仔細のありさうな書き物、斯様なる事を、表立て詮議いたせば、血で血を洗ふ家の瑕瑾。只穩便に、意見を加へて。

ト以前の文を投げる。忠太夫、花道へ、ツカ〳〵と行きて、上書を見て

忠太　玉木どのへ、大仁より。

長者　そんなら、玉木は。

與三　ア、コリヤ、密かに。

ト、チョンと木の頭。唄になる。

近日々々。

トきざみにて、拍子、幕。

與三右衛門は、家來を連れ、向うへ入る。禪のツトメのツナギにて、この幕を引返す。

本舞臺、高貳重の草土手、うしろ藪疊、上手に柳の大木。日覆より柳の吊り枝。雨車、雷の音にて幕明く。

ト向うより、バタ〳〵になり、梅ケ枝、以前の形にて、走り、出て來り、直ぐに本舞臺へ來り

梅枝　源之助さま〳〵、源之助さまは、どこへお出でなされました。爰はマア、なんと云ふ所ぢやら、聞きたうにも人はなし。こりやマア、どうしたらよからうわいな

ア。

ト思ひ入れ。藪奥より、大仁坊出て

大仁　その道筋は、おれが教へてやらう。

ト梅ケ枝、恟りして

梅枝　ヤヽヽ。あなたは大仁さま、どうして爰へ。

大仁　サア、近道を廻つて来たも、こなたに逢はうばつかり。梅ケ枝どの、サア、ござれ。

ト手を取る。

梅枝　ア、コレ、私しを、どこへ。

大仁　どこへとは曲がない。大仁村の庵室へ連れて行て、愚僧が御内佛、可愛がつてやるワ。

梅枝　ア、モシ、お前は、母様と、

大仁　エヽ、なんの、あんな狸婆アを請けて居たも、こなさんに所存あつての事。コレ、あんまり、惜うもあるまいが。

梅枝　エヽ、穢らはしい。わたしには源之助さまといふ夫のある身。エヽコレ、源之助さまは、どこへお出でなされたやら。逢ひたい見たい、源之助さまいなう。

大仁　コレサ、行くへの知れぬ源之助を慕はうより、おれが心に随へ。

梅枝　例へ命を取らるゝとも、非義非道なるおのれ等が、なんの心に随はうぞ。

大仁　ムウ。さう吐かせば、大事を知つたおのれ、生けては置かれぬ。サア、これだが、どうだ／＼。

ト刀を抜いて振り廻す。梅ケ枝、頭を振る。

エヽ、おのれ、可愛さ餘つて憎さが百倍。それ／＼、切るぞ／＼。

ト立廻つて、梅ケ枝、白刃を掴む。手の切れし思ひ入れ。

大仁　ヤア／＼／＼、これは誤まつて、それそれ、見た事か。

梅枝　エヽ、胴慾な。どうでもわしを、殺すのぢやなア。

大仁　惜しいものだが、仕方がねえ。くたばつてしまへ。

梅枝　エヽ、口惜しい。非道のおのれが刃にかゝり、死ぬる命は惜しからねど、源之助さまの後を慕ひ、迷ひ出て此やうな、非業な最期を遂げたのを、源之助さまがお聞きなされて、もしや、いたづらゆゑ逃げ隠れでもしたのかと、思はるゝのが口惜しい。誰ぞ、この様子を、源之助さまへ告げてくれぬか。強い人が来て、此奴を切つてくれぬかいなう。

大仁　こま言云はずと、くたばつてしまへ。
ト逃げようとする所を、後より又一太刀切る。トヾ、梅ケ枝を、散々に切り殺す。日覆より、月出る。ト柳の枝に、鶯、頻りに囀る。ドロ〳〵、早めの合ひ方になり、大仁坊、キツと見て
ハテ心得ぬ。いま梅ケ枝を殺すと、忽ち鶯の囀り。この聖僧を見ると怨めしさうに。まだ今は、月の出汐の夜夜中、囀づる鶯は、ハテ、變つた鳥もあればあるものぢやなア。
ト向うバタ〳〵になり、幾代、傘を持ち出て來り、死骸に躓き
幾代　どなた樣か存じませぬ。心の急くまゝ、お免しなされて下さりませ。心の急きまするゆゑ。
ト透かし見て、恟りして
ヤ、、、、こりや、梅ケ枝さまを、何者が手に掛けた。いま一足早くば、斯くやみ〳〵とは。エ、、口惜しい。
トこの時、後より大仁坊、切つてかゝる。幾代、身をかはし。
ヤア、其方は大仁坊、梅ケ枝さまを手に掛けたは、其方ぢやなう。

大仁　オ、、如何にもおれだ。うぬも梅ケ枝が冥土の供。くたばつてしまへ。
幾代　梅ケ枝さまの敵、覺悟しや。
大仁　猪口才な女め。うぬを殺し、直ぐに長者の内へ仕掛けて、與三右衛門めが持つて來た、金を盗んで高ぶけりだ。覺悟ひろげ。
幾代　何を小癪な
ト誂らへの鳴り物になり、傘の立廻りあつて、兩人、キツと見得、この道具廻る。
本舞臺、長者の屋敷、幕明きの道具になる。下手に碁盤直し、朝顔付きの燭臺ともしあり、爰に中間壹人、與三右衛門の紋所の付きし法被を着たる儘にて、酒に醉ひ、倒れて寝て居る。合ひ方にて、道具とまる。
ト中間、心付き起き上がり、あたりを見て
中間　コレ、六助よ、權助〳〵、七助。みんな、おれ一人殘して歸り居つたな。おれだと、いつて歸るワ。
トひよろ〳〵花道中程まで行き
なんだ、又おれに酒を呑ませるのか。これは忝ない。

ト云ひながら、横に、轉げて寢てしまふ。向うより大仁坊、出て來り、この中間に躓き、恟りして飛び退き、透かし見て

大仁　この紋所は、慥かに淀與三右衛門が定紋。

ト思ひ入れあつて

見附けられたら、これを證據に殘し置き……、うまいうまい。

ト件の中間の法被を脱がせる。この時中間、目を覺まし、捨ぜりふ云ひながら向うへ入る。大仁坊、右の法被を着て

これでよし／＼。

ト本舞臺へ來り、奥へ入る。バタ／＼にて、長者、枕刀を引ッ提げ、大仁坊を追うて出る。大仁坊、思ひ入れあつて、燭臺を消す。これより誂らへの合ひ方になり、兩人探り、立廻り／＼行き當る。長者、刀を拔いて切つてかゝる。大仁坊、その刀を叩き落し、互ひに落したる刀を探る。大仁坊、下手の碁盤に手が觸るゆゑ、これ屈竟と手に持ち、長者の頭を打つ。これにて長者、倒れる。大仁坊その上へ跨がり、長者を殺す。この物音に忠太夫、寢間着の形にて、手燭を持ち、奥より出る。これにて大仁坊は、上手へ忍ぶ。忠太夫、ツカ／＼と寄つて、長者の死骸を見て

忠太　ヤア、こりや、旦那さま／＼。エ、コレ、誰れぞ來てくれぬか／＼。

ト呼び立てる。これにて、大仁坊、窺ひ、よろしく手燭を消す。これにて忠太夫、氣附き

曲者。

ト捕へようとする。大仁坊、逃げようとする。いろいろ、摑み合ひ、トヾ大仁坊が法被、忠太夫が手に殘る。大仁坊は遁がれて、花道まで行き、へたるを、木の頭。

泥坊／＼。

ト喚く。キザミ、よろしく、拍子、　幕。

大詰

諏訪洞仙隱れ家の場
與三右衛門屋敷の場
濱松城內仇討の場

役名――佐々木源之助。淀與三右衛門。濱左門實ハ長者の悴十三郎。同女房、八重機。手下、馬八。同、竹九郎。同、與太郎。同、猛六。同、眼八。

同、牛六。番頭、忠太夫。腰元、幾代。十三郎妹櫻木。長者女房、玉木。修驗者、大仁坊。佐々木源吾。諏訪の洞仙實ハ多賀の佐々木源太左衞門。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕、松並木、同じく吊り枝。爰に旅人の仕出し四人居る。馬士唄にて幕明く。

仕出　コレ、お旅人、善光寺樣の方へは、どう參りますな。

同　されば、この道は、とんと知らんが、爰は遠州、善光寺は信濃ではござらぬか。

同　それ／＼、もそつと行かんせ。信濃路はまだ遠うござるわいの。

同　ムウ、まだ爰は遠州かの。

同　アレ、向うに微かに見えるのが、濱松でござるわいの。

同　エヽ、あれが濱松かいなう。話して聞いたとは違つて、廣いやうで狹いなう。

同　そりや、爰から見さつしやるに依つてぢや。行て見やしやれ。それは／＼好い所でござる。

同　アヽ、もそつと近いと、次手に見物せうもの。さうして殿樣は、なんぼ程の御知行ぢやな。

同　されば、何程取らつしやるやら。

同　エヽ、爰な人は埒もない事問ふので、道が一里ほど遲れるわいなう。

同　サア、行きませう／＼。

同　マア／＼、もちつと話してござれ。これいの／＼。

ト矢張り馬士唄にて、皆々下座へ入る。直ぐに向うより馬八、竹九郎、誂らへ柚の揃ひにて、酒樽と肴を入れし籠を、兩人して擔ぎ出て來り

竹九　馬よ、ちつと休まんか。

馬八　オヽ、向うへ行つて休まうわい。

ト兩人、本舞臺へ來り、樽を下ろし、摺火打ちを出し、莨のみながら

コリヤ、竹九郎よ、これから坂ぢやぞよ。

竹九　イヤモウ、えらい道ぢや。なんと此やうなえらい目にあはせて、こちの旦那のやうな、榮耀食ひをするといふは、胴慾な人ぢやなア。

馬八　イヤ／＼、それは、われが云ふのが無理ぢや。なぜと云へ、われやおれには、給金もふんだんに下さつて、

その上、われとおれれとは此やうに、町使くひに行けば、そこでた貰う金給で、何食はうと儘ぢや。外の奴等は一人も出る事もならず、なんぼ金があつてもは遣れねば、石瓦も同然ぢや。

竹九　それぢやというて、あの和郎ばかり旨い物食うて、われやおれには、猪猿のあらばかり食はせて置いてゞはないか。

馬八　イカサマナ。なんぼ金があつても、買ひ喰ひして、隙が取れるとやかましい。錢があつても遣ふ事はならぬてなア。

竹九　あの山中で肴はなし、誠に錢金の延び次第ぢや。

馬八　又こちの旦那が、一度療治に行にへとよい金を取ると見える。

竹九　そりや又なぜに。

馬八　それに、なんぢやか知らぬが、矢鱈に女子や男を引入れて、旨い物はふんだんに食はして、滅多無性に取込んで置かるゝとは、なんぞ思案のあるの事でらうわいなう。

竹九　その上、大勢の人を取込むが、どこに居るやら、とんと見えぬが、これが不思議な事ぢや

馬八　なんでも、廣い所があるかして、一人も見えぬが、又あの旦那の弟子と吐かす、左門といふ奴や、八重と一いふ女を、なんであのやうにして置くのぢや。われはからぬか。

竹九　イヤ、その譯は知つて居る。その譯といふは、あの女に旦那めが惚れて居る。そして、あの弟子といふは、あの女の兄ぢやげな。その緣であのやうにして置くのぢや。

馬八　それで、彼奴等の譯が知れた。シタガ、どうかう云ふうち、遲うなつたら、旦那の目の玉ぢや。そろ〳〵行かうか。

竹九　オヽ、行かう〳〵。

馬八　サア、これからが難所ぢや。

ト荷をかたげる。

竹九　エヽ、この肴が料理してあると、この上の山中で、一杯引ツかけやうになア、馬よ。

馬八　埒もない事云ふな。早う去んで、左門が妹の顏でも見ようか。

竹九　阿房吐かすな。われに誰れが惚れるものか。

馬八　コリヤ、其やうに云ふな。まんざら捨てた男でもね

え。

竹九　あんまり拾ふ男でもあるめえ。

兩人　ハヽヽヽ。

ト馬士唄になり、兩人、下座へ入ろ。木につき、林並木引いて取り、淺黃幕切つて落す。

本舞臺、向う山幕、眞中に本緣付の古き辻堂、狐格子、板羽目、草生ひ茂りし體。左右、杉の立ち木、爰に源之助、旅形にて緣側に居眠り居る。山颪しにて道具とまる。

ト本釣り鐘にて、目を覺ます。思ひ入れあつて

源之　誠に秋葉大權現の、靈驗あらたなりとある。これより光明山へは何れの道を……當所不案內の某、何れの道へ。いつぞや長者の許を出てしより、種々心を痛めさまよふうち、フト鳥眼の業病。然るに淀與三右衞門さま、鎌倉より下着になられ、我れに元服を勸め、これと云ふも眼病の、養生にもならんかと思し召して、この計らひ。エヽ、忝ない。便りなき某、まだも賴みは與三右衞門さま。ハテ、誠に武士の魂ひは、あれでなければ。

トこの時、上手の杉へ鶯とまり啼く。源之助、これを見て

ありや、鶯の聲。鶯を聽くに付け、梅ヶ枝が寵愛の唐琴、如何なりしぞ。それに付けても梅ヶ枝は、我れを慕うて居るであらう。可愛や〳〵、可愛やなア。

ト鶯、肩にとまる。源之助見て

ハテ、不思議や。かゝる山中に、人馴れし鶯……慥かに唐琴。

トよく〳〵見て、怪しむ思ひ入れ。源之助、思ひ入れあつて

法華經と囀づるは、ムウ、さては梅ヶ枝は死したりと知らするのか。ハテ、可哀い事をしたなア。鳥類の中にも、六十里彼方の事を告げ知らすとは、恐ろしい名鳥もあるものぢやなア。昔、孝謙天皇の御宇、大和の國高間寺の稚兒。死して鶯となり。囀づるを聞けば、初陽每朝來不相還本栖と啼きしを、文字に直して見る時は、初春の朝每には來つれども、逢はでぞ歸る元の住家へと、一首の歌を囀づりし例もあり、我れを慕ふ一念、唐琴に付添うて來りしか。南無幽靈頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々。

ト思ひ入れ。山颪しになり、下座より猛六、與太郎、杣

の形にて、柴を負ひ出て來る。源之助、これを見て
申し〳〵。憚りながら、ちと物が尋ねたうござります
る。
兩人　貴樣は、なんぢや。何者ぢや。
源之　ハイ、拙者は旅の者でござりまするが、道に蹈み迷
ひまして、難儀仕ります。本海道へは、どう行きまして
ようござります。
與太　ハテナ。なんぼ道に蹈み迷うても、爰へ來る者はな
い筈だが。
猛六　一體、貴樣は
兩人　何者だ。
源之　ハイ、拙者は非人……アイヤ、商人……オヽ、それ
それ三度飛脚でござります。
兩人　オヽ、さう見える。
源之　ハイ〳〵。
與太　一體、三度飛脚といふものは
兩人　何をする者だ。
源之　エヽ。
與太　大盜人め。道を知らいで商賣がなるものか。
猛六　但し、道を知らないでもよいものか。

源之　サア、その儀は。
與太　何やら怪しい紛れ者。おらが頭へ手土產に
猛六　引ツ括つて連れて行く。
兩人　覺悟ひろげ。
ト双方より立ちかゝる。
源之　イヤサ、左樣な胡亂な者ではござりませぬ。どうぞ
御料簡なされまして、本海道の道筋を。
兩人　敎へてやらうソ。
ト又かゝるを、ちよつと振り切り
源之　すりや、どうあつても某を
兩人　手足を括つて、頭へ土產。
源之　アノ、この山中の頭とやらへ。
兩人　キリ〳〵歩め。
源之　ハヽヽヽ。猪口才な猿めら。重々の粗相もこの身の
上、うぬらが吐かした詞の端々、頭とやらへ此方から、
面會いたすそれまでは、滅多にうぬらが儘にはならぬ。
てんがうさらすな。
與太　面倒な。疊んでしまへ。
ト禪のツトメになり、兩人、源之助にかゝる。立廻り
よろしくあつて、トヾ兩人を當て

源之　最前よりの彼れ等が振舞ひ。合點ゆかざるこの山中に、住居いたす杣の棟梁。この道をしるべになし、事の實否を。

兩人　うぬ。

トきつとなる。兩人、心付き、起上がつてトかゝるをポンと返し

源之　オヽ、さうだ。

ト山颪しになり、源之助、向うへ入る。此まゝ道具廻る。

本舞臺、岩屋造りの高二重、丸木の本緣付き、向う種々の藥種棚、抽出し、誂らへの森、書き落し、異風なる道具好みの通りよろしく、爰に以前の竹九郎、馬八、眼八、牛六、何れも杣の拵らへにて、銘銘、柴をからげ居る。山颪しにて道具納まる。

馬八　コリヤ〳〵、三人の手合、なんとマア、おいら達が此やうに精出すものゝ、よく〳〵考へて見れば、末の詰まらぬものぢやないか。

竹九　それよなア、朝から晩まで山働らき、手も足も堪らねえワ。それに引替へ、おらが頭の活計歡樂。

眼八　それ〳〵、この頃は又、都から虜になつて居る、美しいあの八重機とやら、彼奴を占める氣であらうなア。

牛六　それに又、兄だと吐かして一緒にうせた、左門とやら、彼奴もしまひは身の脂。ア、恐ろしや〳〵。

馬八　併し、どうで世間廣う住居の出來ぬこちとらが身の上。

竹九　イカサマ、命の無いよりは、ましであらうかい。

三人　マア、そんなものだ。

ト山颪し、木魂の合ひ方になり、向うより左門、誂らへ、杣の形にて柴を脊負ひ、出て來り、花道にとまり

左門　ヤレ〳〵、此やうに薪を脊負ひ、水仕の業、艱難辛苦もこの身の望み、手足の破れ、釋尊が佛法廣むる難行には、よもや劣りはしまいかえ。こんな事云うて居て、見咎められてはこの身の大事。ドレ〳〵、そろ〳〵と。

ト本舞臺へ來り

ハイ、只今歸りました。

ト皆々見て

馬八　新參の左門どの、いま歸らしやつたか。

竹九　そして、見りやア柴を脊負つて歸らしつたが、山へござつたのか。

左門　ハイ、左樣でござりまする。
眼八　なんだ、こればかりの薪を重さうに。コレ、そんな事ぢや、爰の內に奉公は出來ねえぞよ。
左門　イヤモウ、勝手の知れぬ奉公、何分あなた方のお指圖にて、長らく旦那樣のお氣に入つて、奉公いたしまするやう、お執成しを偏へにお願ひ申しまする。
馬八　なんと云ふ。おいら達に、爰の內の勝手を敎へてくれいと云はつしやるのか。
左門　何分お願ひ申しまする。
竹九　コレ、貴樣はマア、爰に長く奉公する氣なら、左樣然らばの切り口上を止めにして、うぬのわれのと付合ひに、ぶツさばけるがいゝわな。
牛六　それ／＼、堅い事は禁物だ。ちよつと酒盛りをすればとて、茶碗酒でなけりやア付合ひは出來ねえ。
眼八　なんでも、知れねえ事があるなら、おいら達に訊くがよい。
左門　ハイ／＼、畏まりましてござりまする。何分にも、この上とも御指南をば、お願ひ申し上げまする。
馬八　そんなら、これから崖端の、おいら達が仲間の部屋で
左門　お內の樣子を何分詳しく
四人　おいら四人が師匠になつて
左門　敎へを受ける弟子の役。
四人　そんなら奧へ。
左門　サア、お出でなされませ。
ト山颪しになり、四人、左門付いて奧へ入る。直ぐに谺の合ひ方になり、向うより源之助、以前の形にて出て來り、この時、矢張り鶯飛び來り、啼く事あつて
源之　誠や、我れを慕ひし梅ケ枝の魂魄、鶯に止まつて、我れを導くこの山中。今また爰に止まつて、啼く音を聞けば、いよ／＼我が來る方と囀ずるは、正しくこの窟に吉事あつて、我れに來れと敎への音聲。
ト鶯啼く。
ムウ、一旦危難に出合ふとな。オヽ、出かした唐琴。例へ九死の難にあふとも、父の敵を討つまでは、死しても死なれぬ我が一心。猶この上にも吉凶を告げ知らせよ、南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト鶯、舞臺の方へ飛び出る。源之助、本舞臺へ來り
ハテ、心得ぬ。山家に似合はぬ華美の家柄。殊に藥罐筒の飾りあるは、正しく醫者の好みならん。何は兎もあれ、

この源之助も、この程より鳥眼の惱み。いま鶯の教へし吉事とは、鳥眼の妙藥あらんも知れず。さうぢや〳〵。

　ト思ひ入れあつて

誰ぞ頼み申さう〳〵。

　ト奥にて

眼八　オイ〳〵、誰れか來た。皆來い〳〵。

　ト四人の杣出て來り

竹九　コレ〳〵、みんな見やれ。ついに見馴れぬ旅人が只一人。

馬八　滅多な者の來られぬ山中。

牛六　案内さつしやる、してこなたは

四人　どこからごんした。

源之　イヤ、拙者は旅の者でござる。斯う見受けましたところが、醫師の家柄と見かけまして、お尋ね申したい儀があるゆゑ、と申して立ちながらのお話しも申し憎い。お許し下されい。

馬八　さういふ事なら、マア、何しろ入らつしやるがようござる。

　ト合ひ方になり、源之助、内へ入る。よき所へ住ひ

この家の内を醫者と見かけ、尋ねたい事があるとは

竹九　遠慮もなしに、内へ通り、坐り込んだ旅の侍ひ。

眼八　こいつは頭へこの樣子、聞かしたならば、よい獲物。

牛六　何は兎もあれ、我れ〳〵に、尋ねたいとは

四人　何でごんすな。

源之　イヤ、餘の儀ではござらぬ。拙者は少しく望みあつて、行きつき次第の旅の空。元より今日、爰へ參つたは道に迷ひて甚だ難澁の折柄。見受けますれば、表は峨峨たる岩を疊み、内は豐のこの住居。藥箪笥の飾りあるからは、風雅を好む醫者のお家。某この程より鳥眼と申す難病、もしや妙藥もござらば、平癒の致したく、それゆゑ分けてお願ひ申し上ぐるのでござる。

竹九　そんなら貴殿は、アノ鳥眼の病で、その療治をしてもらひたいと頼まつしやるのか。

馬八　如何にも、この家は醫者に違ひござらぬが、他國の人の療治ばかりで、内で療治をせぬのが家風。

眼八　併し、一旦この山家へ足蹈みかけた旅人は、元へ戻さぬ家の掟。

牛六　所詮娑婆へは歸られぬ。

馬八　爰へウカ〳〵踏み迷ひ、さまよひ來たが百年目。

竹九　覺悟を極めてお旅人。

眼八　マア、落ちついて
四人　ござらつしやい。
源之　すりや、なんと御意なさるゝ。この家へ參りし病人は受取らず、他國ばかりを療治なし、元より歸る事は猶ならぬとは……面白い。逗留いたさう。
　トきつと云ふ。皆々こなし。
四人　なんと。
源之　ハテ、只今のお詞には、一旦この家へ參りし者は、歸さぬとあれば、折に幸ひ拙者が難病、暮るゝと云うても今一時か半時、知らぬ山道、探り迷うて歸らうより、今宵は一宿仕り、この家の主に對面しよう。
馬八　イヤ、ならねえ。
四人　キリ〳〵、立て。
　ト奥にて
洞仙　この家の主、諏訪洞仙、旅人へ對面せうワ。
　ト谺の合ひ方にて、洞仙、好みの誂らへにて出て來り
最前より聞きしところ、鳥眼の病にて難儀の旅人。達て療治を望まるゝ、この家の主は拙者でござる。
源之　すりや、こなた樣が。
馬八　對面しようとごたついた、おいら達が頭と頼む大先生。頭が高い。
四人　三拜ひろいで、すさり居らう。
源之　高からうが低からうが、生れ付きの脊丈より低うもならぬが、高うもならぬ拙者が頭……なんと致さう。一宿ならぬこの岩山、無理にお宿は御無心申さぬ。ドリヤ、引返さうか。
　ト行かうとする。洞仙、思ひ入れ。
洞仙　イヤ、旅人、お待ちなされい。
源之　用事がござるか。
洞仙　道に迷ひし其許が、只一宿の斷わりに、この家を出づる所存でござるか。
源之　イヤモ、國を出てから、月と日と、足の力で、爰まで參つた拙者、いづくまでも參らうと思うたら參ります。
洞仙　晝さへ迷ふこの山中、暮れに及んで鳥眼もいとはず、歩行召さるか。
源之　なんと。
洞仙　鳥眼の療治は致さぬ心か。
源之　養生いたすも、この家の内には。
洞仙　イヤ、禮物次第、難病たりとも療治いたさう。
源之　それ。

ト懐中より包み金を出し、洞仙が前へ置く。
洞仙　ムウ、すりや、この金子が療治の謝禮か。
源之　養生代のこの金子、快氣の上は、謝禮の金子は望み次第。
洞仙　イヽヤ、金銀財寶は、此方に望みはない。
源之　然らば、何が望みござるな。
洞仙　手下になれ。
源之　ヤア。
洞仙　異議なく手下になる時は、心の儘に鳥眼の療治。
馬八　さもなき時は、生けて歸さぬその身の破滅、返事は如何に。
源之　否だ。
洞仙　なんと。
源之　邪正分らぬ主の一言。醫師といふ者は、野に伏す乞食は云ふに及ばず、いま落命のその人も、末は助けるが醫者の仁術。それに何ぞや、手下にならば直しくれん、さも無くばこの身の破滅とは、こりやコレ、推量に違はず山賊夜盗。
洞仙　何がなんと。
源之　斯樣な所に居らうより、お暇申して歸らうわえ。

ト思ひ入れあつて門口へ出ようとする。上よりドッサりと誂らへの大石落ちる。源之助、身を交し、こなしあつて
ハヽヽヽ、この手もある事。いらざるてんがう。
洞仙　どうで遁がれぬ地獄の罪人。身が手を下ろして。
ト立ちかゝる。源之助、キッと見て
源之　劍の山とは、そりやゆかぬ事ぢや。
洞仙　エイ。
ト割り笄を打ち付ける。源之助、手にて受け留め
源之　こりや、加勢が殖えて面白い。
洞仙　力量といひ、手練の若者、命を取るも無益の殺生。情を加へ療治なし、助けて遣はさう。
ト此うち源之助、打ちかけし割り笄と、序幕の笄を出して、合せて見る事あつて
源之　ヤヽヽヽ、この笄の、しつくり合ふは。
洞仙　ヤ。
ト目を付ける。源之助、隱して
源之　この笄は、いよ／＼こなたの所持なるか。
洞仙　如何にも身共が……アイヤ、身共が由緣の所持せし笄。

源之　して、その主は。
洞仙　この程、この家へ他國より招客。其方達風情が知らぬ仁ぢやワ。
源之　手下にならう。
洞仙　なんと。
源之　手下に付けば、こなたの腹心、この笄の持ち主の
洞仙　その姓名はゆつくりと、手下となつたその上で、先づそれまでは。
源之　明けて云はぬが頭の心底。
馬八　手下になるなら
四人　おい等が部屋へ。
源之　詞に付いて暫時の休息。
洞仙　その心底見拔いたなら
源之　この笄の主の苗字も
洞仙　其方が苗字も
源之　こなたの素性も
洞仙　とつくりと
源之　云ふか。
洞仙　云はぬか。
源之　マア、それまでは。

洞仙　奥の一間へ。
源之　ドリヤ、參らうか。
　ト唄になり、源之助、奥へ入る。
馬八　コレ、お頭、今の野郎をあの儘に、助けて置いては後日の妨げ。
洞仙　コリヤ、取逃がさぬやう、心付けい。
四人　心得ました。
　ト山颪しになり、四人、奥へ入る。洞仙殘り、思ひ入れあつて。
洞仙　今あの若者と先達て、召抱へたる左門を加へて、身が藥法も首尾よく調ふ。これに付けても、儘にならぬは戀の道。虜にしたるあの八重機、手を替へ品を替へて口說けども、心に任せぬしぶとい女。ハテ、靡く工風がありさうなもの。
　ト合ひ方になり、左門出て
左門　憚りながら、その戀のお取持ち、私しめが致しませう。
　トそこへ出る。
洞仙　其方は左門。身が戀の取持ち致さうとか。
左門　如何にも。加茂川の水、双六の賽と、心に任せぬそ

の戀を、拙者が工風で、首尾よくあなたのお心に、從は
せてお目にかけませう。

洞仙　しかとその詞に相違なく、我が戀人の八重機を、口
說き落して、身共が手活けの

左門　花の盛りの八重機を、浪風立てず

洞仙　身共が閨の伽をさせるか。

左門　違變に及ばゝ

洞仙　落花狼藉。

左門　そこを拙者が散らさぬやう

洞仙　なるならざるは別間にて。

左門　色好い御返事。

洞仙　待つて居るぞよ。

ト唄になり、洞仙、思ひ入れあつて奥へ入る。左門、殘り

左門　いつぞやより、この山中に捕はれとなりし某夫婦、
津の國長柄に、人も知つたる長者の悴十三郎、濱左門と
變名なし、兄弟なりと僞はるも、合點のゆかぬ洞仙が、
實否を糺さん爲ばかり。さりながら、あの八重機を、口
說き落せと今の一言。この事どうぞ離れの座敷へ、便り
してやりたいものぢやなア。

ト合ひ方になり、奥より源之助出て來り

源之　長柄の長者左衞門どのゝ、御子息十三郎どの。

ト左門、恟りして

左門　この家に見馴れぬ旅人が、我が實名を十三郎と、知
つたるからは、生けては置かれぬ。

ト切つてかゝるを、ちよつと留めて

源之　同士討ちさせまいぞ。

左門　卑怯な侍ひ。

ト振り解き、下へ押して來て、源之助、大小投げ出し

源之　ソレ、手向ひせぬぞ。早まるまいぞ。

ト短冊を出して差しつける。左門、取つて

左門　「思へども、いかでかひまに夕霞、隔つる宿の鶯の
聲」この手蹟は、覺えある姉者人、梅ケ枝さまの慥かに
手蹟。この短冊を所持する其方は。

源之　ホ、オ、不審な尤も。仔細あつて貴殿の姉、梅ケ枝
どのと緣を組んだるこの源之助。我れとても討たねばな
らぬ實父の敵。今日この所へ參りしが、心得難きは主の
洞仙、最前我れに打ちかけし、笄の片割れは、家來作左
衞門が親人最期の節、敵の證據と我れに渡せし笄と、
しつくり合うたは、敵源太左衞門と推量すれども、面體
を見知らねば、迂濶にそれとも決し難く、その上、殿よ

り預かりの、月光の鍬形奪ひ返すまでは、無念を堪ゆる心の内、推量あれ、十三郎どの。

左門　すりや、貴殿が、姉梅ヶ枝さまと縁を組まれし、佐々木源之助どのとな。噂に聞けど逢ふは初めて。天晴れなる御心底、驚ろき入る。拙者とても望みあつて、この山中に身を潜め、捕はれ同然となるも、一つの願ひあつての事。殊に二世と誓ひし八重機まで、この家の内にあるからは、貴殿の力と一つになつて、事の實否を糺すには、今宵幸ひ女房八重機が、色に事寄せ洞仙が、素性を詳しくお知らせ申さん。

ト囁く。源之助、頷づき、思ひ入れ。

源之　天晴れ手段。

左門　いよ／＼敵と相知れなば

源之　踏ん込んで、たつた一討ち。

左門　先づそれまでは、拙者は別間へ。

源之　萬事よろしう。

左門　やがて吉左右

源之　これにて相待つ。

左門　源之助どの。

源之　十三郎どの。

左門　然らば直さま。

源之　コレ、密かに／＼。

ト左門心得、奥へ入る。

爰で十三どのに巡り逢ひしも、これ皆、梅ヶ枝が道知るべ。實否の解るも今暫らく。

ト思ひ入れあつて

嬉しやなア。

ト後へ以前の四人出て

竹九　最前より心を付けて窺ふところ

牛六　合點のゆかざる汝が振舞ひ。

馬八　引立て來れと頭の云ひ付け。

牛六　マア、その前に、うぬが本名。

眼八　キリ／＼名乗つて

四人　繩かゝれ。

源之　何を小癪な。

ト山颪になり、立廻つてキッと見得。この道具廻る。

本舞臺、三間の間、矢張り一面の巖窟。常足の二重。伊豫簾を掛け、飾り付け好みの通り、山颪しにて道具納まる。

ト直ぐに跳らへの獨吟になり、正面の伊豫簾一卷き上げる。向う金襖、二重の上に洞仙、下手に八重機、好みの拵らへにて茶を立てゝ居る見得、よろしく唄一くさり切れる。

洞仙　サア、八重機、其方が手前の口取りに、色よい返事は、どうぢや〳〵。

八重　不束なわたしが手前、釜の沸りしあなたのお心、水注しならぬ戀路のお詞。忝なうはござりますれど、云ふに云はれぬ、深い樣子がござりまして

洞仙　身が心には從はれぬか。

八重　どうも、この事ばつかりは。

洞仙　ムウ。

トきつとなる思ひ入れあつて

いま一服、所望しようか。

八重　ハイ。

トまた獨吟になり、八重機、茶を立てる。此うち向うより左門、肩襄、庭下駄、竹笠をかざし、出て來り、よろしく唄切れる。八重機、茶を出す。洞仙取つて

洞仙　服加減と云ひ、どうも思ひ切られぬ。八重機、思ひ直して、色よい返事。くどうは云はぬ。また例へ身が心に背き、爰を駈落ちしようと思うても、三方は我々たる岩山、一方に門を構へて、蟻の這ひ出る所もないワ。サア、詞の甘い其うちに、キリ〳〵返答しやれサ。

八重　先刻にから申しまする通り、云ふに云はれぬその譯は、爰に居りますその時に、深くも契約いたしました、夫のある身。それゆゑ、この御返事は、御免なされて下さりませ。

洞仙　しぶとい女め。この上は身が手にかくる。覺悟致せ

ト刀拔きかけキツとなる。左門、ツカ〳〵內へ入り

左門　イヤ、暫らくお待ち下さりませう。

洞仙　其方は左門。最前請合ひし八重機が返事は、なぜ致させぬ。

左門　それゆゑに、わざ〳〵これへ參りましたは、八重機を口說き落さん其ために。

八重　モシ、それでは互ひの

左門　何事も、この兒が胸に納めて、ナ…納める仕樣は御主人へ、色よい御返事するならば、年來望みし兒が本望。大切に思ふ夫へ、操を立て拔く其方が心の內は、某よく存じて居る程に、とつくり思案を仕直して、この場に於て、色に事寄せ…サア。

八重　成る程、よう思うて見ますれば、いづくにござんすやら知れもせぬ夫。それに心中立てようより、眞實思うて下さります、あなた樣の心に從ひませう。兄さん、わたしは、得心いたしましたわいなア。

左門　なんと云ふ。すりや、あなたのお心に從うてくれると申すか。

八重　アイナア。

左門　オヽ、出かした〳〵。直ぐにこの場で、ナ、日頃の思ひを。

ト洞仙に切つてかゝるを、双方を押へ

洞仙　こりや、なんとするのぢや。

兩人　サア、これはナ。

八重　あなたへ惚れた心中に、ちよつとこの場で。

左門　オヽ、それ〳〵、お心引き見る其ために

洞仙　ナニ、身共に心中。危ない事の…併し、得心あつて先づは滿足。直ぐにこの場で二世の契約。幸ひこれに、身が手製の不老酒。これにてめでたく三々九度。

左門　仲人役には水入らず、他人交ぜずにこの兄が

八重　直ぐにこの場で、サア、兄さん。

左門　身が始めて、女の手より。

ト左門呑んで、八重機へさす。八重機も呑み

八重　サア、この杯は、あなた樣へ。

ト思ひ入れあつて、兩人、胸を押へ

左門　ヤヽ、この酒咽喉を通るや否、五體自由に、ならざるは。

ト兩人、苦しみ

八重　お前ばかりか、わたしまで。

洞仙　その筈〳〵。今うぬらに喰はしたは、南蠻國より傳來の、痺れ藥だワ。

兩人　ヤヽヽヽ。

洞仙　兄弟なりと云つた、うぬらは夫婦、今日が日まで助け置いたも、八重機を說き落さうばつかりだ。もうこれからは荒療治、兩人ともに、覺悟ひろげ。

左門　ヤア、おのれ洞仙。

八重　やはか此まゝ、手籠めにならうか。

ト兩人、よろぼひながら切つてかゝるを、刀を打ち落し、双方を當てる。これにて倒れる。

洞仙　暫時が間、彼奴等は死骸。いゝ態だ〳〵。

ト向うより牛六、走り出て來り

牛六　お頭、これにござりまするか。最前の旅人、引立て

來らんと思ひの外、鉞を持つて擲り立て、この家へ驅け來る樣子でござりまする。

洞仙　ヤア、小ざかしい。油斷するな。

ト向うより捕皆々、源之助と立廻りながら出て來り、直ぐに本舞臺へ來て

源之　さてこそ源太左衞門。親の敵、覺悟せい。

洞仙　イヽヤ、敵と云はるゝ覺えはないワ。

源之　拔差しならぬ證據の合ひ紋、父にて候ふ源太左衞門、闇討ちになし國を立退き、爰に姿を隱すとも、最前打ちし笄の片しは、死骸の側に落ち散りあつたが慥かな證據。サア、尋常に勝負〱。

洞仙　かゝる證據のある上は、包んで詮なし。如何にも島田の宿に於て、うぬが父たる源太左衞門、闇討ちにして立退きしは、斯くいふ多賀の源太左衞門だワ。

源之　さてこそなア。

洞仙　例へ敵と名乘るとも、わいらが手には、いつかないかな。それより爰で自害しろ。

源之　その廣言は後の事。サア、尋常に立合はぬか。

ト切つてかゝる。この時、ゴンと暮れ六ツの鐘鳴る。源之助、これにて鳥眼になり、見えぬ思ひ入れ。

エヽ、時も時、折も折とて。

トこなし。

皆々　頭、此奴は目が見えませぬ。

洞仙　ハヽヽヽ。サア、親の敵を討たないか。源太左衞門は爰に居るワ。

源之　なにを。

ト刀を取つて思ひ入れ。

寶の奇瑞を見せしめ給へ。

洞仙　ナニ、寶の奇瑞と云ふからは、紛ふ方なき朝日丸。ソレ、用意いたせ。

ト皆々、源之助を括し上げ、枠火鉢、銀の壺を、よき所へ持ち出て、源之助が利き腕を取り、火に炙り、脂を取る思ひ入れ。源之助、苦痛のこなし。

いくらわれが踠いても、もう叶はぬ。これからは又、うぬが五臟の荒療治。腕の脂を炙り取る。ちつとのうちだ。怖い夢だと辛抱しろ。

源之　エ、コレ、現在親の敵に出合ひながら、討たれぬのみか、この苦痛、いつそ一思ひに、殺せ〱、殺し居らう。

洞仙　イヤ〱、滅多に殺さぬ。今われが腕の脂を取つて、

この壺の藥へ合し、うぬが爲には伯父と聞く、奥に居る佐々木源吾の、金瘡癒す良藥を作るのだワ。

源之　ヤ、、、なんと云ふ。源吾に用ゆる藥とは、聞けば聞く程穢らはしい。こりやモウどうも。

　トいろ〳〵苦しみ

チエ、、口惜しい。父上といひ母といひ、この身まで、非業の憂き目に命を落すは、よく〳〵佛神三寶の、惠みにも見放されたか。チエ、、殺さば殺せ親の敵、生き代り死に代り、恨みの一念、晴らさいで置かうか。

洞仙　腕くワ〳〵。もうこれで脂も十分。往生させてこの世の暇。

　ト立上がつて蹴飛ばす。これにて源之助、氣絶して倒るゝ。奥より源吾出て

源吾　源太左衞門どの。して、彼の良藥、調ひましたか。

洞仙　如何にも。貴殿の甥の源之助が脂を取つて、良藥出來。急いでこれを。

源吾　忝ない。年來心にかゝりし金瘡。急いで良藥。

　ト銀の壺の藥を取つて付ける事よろしくあつて

ヤ、、爭はれぬ藥の奇特。金瘡いよ〳〵平癒して、腕の自由に働らくは、神變不思議の良藥も、あればあるものぢやなア。

洞仙　貴殿の金瘡平癒の上は、身共はこれより人知れず、本國多賀へ身を隱し、時節を待たん。この劍こそ源之助が所持せし朝日丸。暫らく貴殿に預け置き、身共はこれより、直さま北國多賀の國へ。

源吾　本海道は人目あり、裏道より忍びの道中。

洞仙　心得申した。

源吾　早く〳〵。

　ト洞仙、思ひ入れあつて奥へ入る。

この上は源之助始め、毒を喰ひし左門兄弟、一々引導渡してくれん。

　ト下手より以前の左門八重機を引出し片ツ端からこの世の暇。南無阿彌陀佛。

　ト落ちてある源之助が刀を取つて、源之助に切つてかゝる。薄ドロ〳〵にて烏啼き、これと一緒に向うの襖を引拔くと、遠州の濱邊、日の出の見得。一面の牡丹の盛り。源之助左門八重機、一時に心付き、起上がつて双方見得。誂らへの鳴り物になり

四人　ハテ、怪しや。

源吾　今この刀にて、三人を切つて捨てんと思ひの外、一

天俄かに晴れ渡り、東雲光り、數多の烏飛びかふ有樣。

源之　傳へ聞く、月光の鍬形の甲を着するその時は、闇夜と雖も光を放ち、敵を驚ろかす稀代の神寶。

八重　さては、この場に鍬形所持なす者あつて、日月の合體なせし奇瑞なるか。

左門　今また爰に現はせれば、朝日丸の刀の奇特。陰陽和合の印は目前、一時に富貴草。

源吾　唐土にては、草花の長と名づけし牡丹、今を盛りのあの庭前。

源之　また我が朝にては、櫻を花王と云ふ。時ならぬ返り咲は、朝日丸の德。これ即ち日光の奇瑞。

八重　もしや、鍬形所持なせしか。

左門　慥かに源吾。

源吾　なにを。

ト左門源吾、ちよつと立廻り。源吾、鍬形を落す。源之助、手早く取つて

源之　さてこそ尋ぬる月光の鍬形。

源吾　南無三それを。

ト寄るを左門支へて

左門　今こそ日月二品とも

源之　一緒に寄りしは

八重　正しく不思議。

源之　稀代なこの場の

四人　有樣ぢやなア。

源吾　さてはうぬ等は寶の德にて、蘇生なしたるよな。

源之　目前癒えし劍の德。爰に火難を遁がれしも、日頃念じ奉る、秋葉權現の御利生なるか、ハア、忝ない。

左門　我れ／＼とても、一旦毒氣に中るといへども劍の奇瑞諸ともに、今は惡夢の醒めたる心地。

八重　貴殿の蘇生なしたる上は、長者の家も納まる家督。

源之　サア、この上は源吾どの、惡事の一々、白狀々々。

源吾　如何にも、源太左衞門は我が手に掛けねど、女房渚は春日江の堤にて、討ち果して立退いたワ。

皆々　さてこそなア。

源之　すりや、母上の敵は其方。して、源太左衞門めは。

八重　最前チラリと樣子を聞けば、裏海道を生國多賀へ。

左門　源吾が指圖に逃げ失せしを、慥かに某も。

源之　すりや、逃げ失せしか。爰は我れ等にお任せあつて、十三郎どのには、源太左衞門が後追ひ駈けて。

左門　ぢやと云うて。

源之　エヽ、早くござれ。
左門　然らば源之助どの。八重機、參れ。
　トかけりになり、八重機が手を引き、左門、向うへ入る。
源之　サア、この上は源吾、劒を渡して覺悟せい。
源吾　返り討だぞ。觀念ひろげ。
　ト立廻りのうち、源之助、源吾の刀を打ち落す。源吾、差添を抜いて渡り合ふ事よろしくあつて、ト、源吾を見事に胴切りにする。
源之　ハテ、爭はれぬ劒の威徳。
　ト源吾、タヂ〳〵と堤の方へ二足三足行き、仕掛けにて半身になる。源之助、ニツコリ思ひ入れ。足を蹈み出す。チョンと木の頭。カケリにて、よろしく幕。
　本舞臺、冠木門、左右練り塀。すべて與三右衞門屋敷の體。爰に菖蒲革の侍ひ二人、六尺棒を持ち、扣へ居る。時の太鼓にて幕明く。
侍ひ　只今のお太鼓は未の下刻。最早、殿のお歸りに間もあるまい。
同　左樣でござる。今日はいつもより、殊の外お遲い事でござる。
　ト時の鐘になり、向うより忠太夫、櫻木、出て來り、花道にて
忠太　櫻木さま、お喜びなされませ。即ちあれが、與三右衞門が屋敷でござります。
櫻木　サア、早う父樣姉樣の、敵を討たせてたもいなう。
忠太　お急きなされますな。私しにも主人の敵、恨み重なる與三右衞門。
櫻木　實否を糺したその上で
忠太　心靜かに敵討ち。必らず共に、お急きなされますな。
　ト本舞臺へ來り、門の內を窺ふ。兩人見て
侍ひ　ヤア、何者なれば、御門內を窺ふ胡亂者。
同　引ツ捕へて糺明いたす。覺悟せい。
　ト立ちかゝる。忠太夫留めて
忠太　イヤ〳〵、私しどもは、左樣な胡亂な者ではござりませぬ。與三右衞門どのにお目にかゝり、お尋ね申したい事がござりまして
櫻木　わざ〳〵參りました者。どうぞお逢はせなされて下さりませう。
侍ひ　ヤア、ならぬ〳〵。見れば胡散な形をして、殿樣に

同　お目にかゝりたいなどゝは、不屆き至極。殊に今日は、御登城のお留守。達てお目にかゝりたいとあらば、御下城までヂツとして
兩人　相待ち居らう。
櫻忠　すりや、今日はお留守とな。ムウ。
　ト向うにて
大勢　ハイホウ。
　ト聲する。兩人、キツとなつて
櫻木　ヤ、、、あの聲は。
忠太　慥かに與三右衛門。歸りを待ち受け
櫻木　日頃の本望。
忠太　コレ、必らず油斷をなされますな。
櫻木　合點ぢやわいなう。
　ト思ひ入れ。行列三重になり、中間、鎗持ち、羽織の侍ひ出る。後より陸尺、乘り物を擔ぎ、挾み箱の中間、供の同勢付いて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。この時、忠太夫、櫻木、ツカ〳〵と前へ出て
櫻木　父樣姉樣の敵。
忠太　主人の敵、妹の仇。
櫻木　與三右衛門どの、サア、尋常に

兩人　勝負〳〵。
家來　ヤア、お乘り物を目掛け狼藉者。
大勢　下がり居ろう。
　ト駕籠の内にて
與三　仰々しい。乘り物立てい。
大勢　ハア、。
　ト皆々の扣へる。乘り物より與三右衛門出て
與三　ハテ、心得ぬ。おこと等が只今の詞、其方が主人、長柄の長者を、手に掛けし覺えはないぞ。
忠太　ヤア、そりや卑怯ぢや。こなたの家來が忍び込み、主人の長者を手に掛けしのみならず、娘御の梅ケ枝さままで
櫻木　殺した事は、證據の品にて慥かに明白。
與三　ナニ、證據とは。
忠太　その品こそは、この法被。
　ト包みより四幕目の法被を出す。
與三　こりやコレ、身共が家來の印。
兩人　なんと覺えがあらうがの。
與三　かゝる證據のある上は、我れを敵と思ふも尤も。それゆゑにこそ某も、長者が最期心得難く、密かに家來

を間者になし、大仁坊と密通せし、玉木が行くへを尋ぬる上は、近く様子も相知れん。先づそれまでは身が屋敷にて、時節を待ちやれサ。

忠太　すりや、證據の品は有りながら

櫻木　敵討も叶はぬとや。忠太夫

忠太　櫻木さま。

櫻木　こりやマア、どうせう、どうせうぞいなア。

ト泣き落す。バタ〳〵にて、向うより幾代、走り出て來り、直ぐ本舞臺へ來り

幾代　それにお出でなされまするは、淀與三右衞門さま。ヤ、あなたは櫻木さま。兄さん。よう爰に居て下さんしたなア。

櫻忠　そちや幾代。ようまめで居やつたなう。

與三　ムウ、幾代といふは長柄の腰元。して〳〵、家内の様子は如何なりしぞ。

幾代　マア、何からお話し申さうやら。御家内の騒動大方ならず。戀ひ焦れたる源之助さま、梅ケ枝さまの願ひも叶ひ、御病氣御本腹、ヤレ嬉しやと思ふうち、約束とは云ひながら、家出なされてお行くへ知れず。お後を慕うて梅ケ枝さま。詳しい事は、この書置。

ト前幕の書置を出す。

道の程が心元ないと、取るものも取敢へず、尋ね行きしに甲斐もなう、長柄の堤にやみ〳〵と、人手にかゝつて敢へない御最期。その場に居合す大仁坊、女でこそあれお主の仇、取押へんと思ふうち、闇に紛れて取逃がし、それより屋敷へ歸りましたれば、旦那様にも無慘の御最期。玉木さまの居間に、落ちてござりましたこの密書。

與三　ナニ、密書とや。

ト與三右衞門、披き見て

ナニ〳〵「密々に申し上げ參らせ候ふ、兼ねて御約束の通り、梅ケ枝を失ひ、今宵のうちに夫左衞門どのを殺害いたし、お前様と少しも早く添ひ遂げ度く、樂しみ居り參らせ候ふ」。さてこそ我が推量に違はず、長者親子を手にかけしは、大仁坊が仕業でありしか。

忠太　さうとは知らず今の今まで、あなた様を、思ひ違ひのお主の仇。

櫻木　與三右衞門さま、御免なされて下さりませ。

與三　なんの〳〵。無實の難も、幾代が詳しき物語りにて、具さに知れし上からは、大仁坊めも詮議仕出し、主親の敵は身が討たす。先づそれよりは、先達て手段を以て、

足を繫ぎし多賀の源太左衞門、源之助が隱れ家へも、この由申し遣はしたれば、今日參るは必定。幾代には道まで迎へて、少しも早く伴ひ來れ。

幾代　畏まりました。

櫻忠　して、私しどもは。

與三　敵を討たすそれまでは、身が屋敷で、心靜かに休息しやれ。

櫻忠　重々厚きお心ざし、有り難う存じまする。

幾代　左樣なれば、私しは、これより道まで。

與三　少しも早う。

幾代　おさらばでござりまする。

ト時の太鼓にて、幾代、向うへ走り入る。バタ／＼にて向うより旅侍ひ一人、走り出て來る。

與三　其方は、間者に遣はせし左仲でないか。待ち兼ねし樣子はなんと。

佐仲　ハツ、仰せに任せ、玉木大仁坊が樣子、詳しく承はるところ、長者を討つて立退きしは大仁坊にて、また娘梅ケ枝まで手に掛け、玉木諸とも逐電なし、夫婦となつて暮らせしゆゑ、召捕らんと存ぜしところ、風を喰つて又ぞろや、兩人とも行くへ知れず、相成りましてござりまする。

與三　慥かにそれと相知る上からは、彼れらを捕へて敵は討たす。それまでは、身が屋敷に。

櫻木　お詞に甘へ、暫しがうち

兩人　あなた樣の、お世話を以て

與三　本望遂ぐるも、近きにあり。

兩人　エヽ、有り難う存じまする。

與三　ソレ、家來ども、案內。

家來　ハア、。

ト合ひ方になり、家來案內して、忠太夫櫻木、門の內へ入る。與三右衞門、思ひ入れあつて

與三　思はざる無實の災難。併し實否の解りし上は、草を分つて彼れらが詮議。源太左衞門をも尋ね出し、一刻も早く源之助にも、敵を討たせてやりたいものぢや。

ト思ひ入れ。向うバタ／＼にて、十三郎、着流し一本差しにて、走り出て來り、花道にて

十三　卒爾ながら、あなた樣は、淀與三右衞門さまではござりませぬか。

與三　ムウ、如何にも拙者は與三右衞門。ついに見馴れぬ若者。何は兎もあれ、近う／＼。

十三　ハツ。

　ト本舞臺へ來る。與三右衞門、つく〴〵見て

與三　して、其許には、いづくの何者、何用あつて、この與三右衞門へ。

十三　イカサマ、心の急くまゝ、後先の事も申し上げねば御不審は御尤も。拙者ことは長柄の長者が一子、十三郎と申す者。若氣の誤まりにより、父の勘氣を蒙むり、他國に住居なすうち、父は人手にかゝつて敢へない最期。この程、街の風説を承はるに、あなた樣の手引を以て姉聟源之助、實父の仇源太左衞門を討つの由。何卒私しにも、その助太刀を。

與三　イヽヤ、そりや成るまい。身持ち惰弱に依つて、父左衞門に不興を受けし其方。まして姉に繋がる源之助が敵討。助太刀などとは烏滸がましい。

十三　ムウ。すりや、このお願ひは。

與三　叶はぬ〳〵。倶に天を戴かざる仇を討たんと思ふ者、傾城遊女に魂ひを奪はるゝ程のうつけ者、手練の程も覺束ない。この場に於て、身が試して。

　トちよつと拔きかける。十三郎、立廻つて

十三　こりや、與三右衞門さま、なんとなされます。

與三　所を。

　トまた立廻つてキツと留める。

十三　なんと、これでも助太刀は成りますまいかな。

與三　ホヽオ、見事々々。その手の內を見る上は、過まつて改むるに、憚かる事なきその心ざし。幸ひ今日其方が妹櫻木、忠太夫も身共が屋敷へ參つたれば、久々にて對面遂げやれ。

十三　ヤヽヽヽ。すりや、櫻木、忠太夫も。

與三　サア、最前參りしゆゑ、隱まひ置く。何かの事は奧にてとつくり。

十三　與三右衞門さま。

與三　十三郎、斯う來やれ。

　ト唄になり、兩人、奧へ入る。時の鐘になり、向うより大仁坊、玉木と連れ立ち、出て來り

玉木　コレ、大仁さま、もちつと靜かに步いて下さんせいなア。

大仁　コレサ〳〵、そんなにノロ〳〵步くと、今に追手がかゝるわな。こなたは靜かに步くなら、後から來るがいい。おらア先へ行くよ〳〵。

　と構はず舞臺へ來る。玉木悧りして

玉木　コレイナア〳〵。お前、なぜ其のやうになさんずぞ、胴慾ぢやわいなア〳〵。

　ト云ひながら追つて舞臺へ來て、しがみ付くを振り放し

大仁　エ、やかましいわえ。ふん張り婆アめ。今までうぬに惚れた顏して居たも、みんな金づくだワ。今この態になり、なんのうぬに構はうぞ。うぬが面を見ると、胸が惡くつて虫唾が走るわえ。

玉木　そりやお前、ほんの事かいな〳〵。さうとは知らず長者の內に居た時は、お前の云ふなり、いくらでも仕送りしたを忘れてかいなア〳〵……ようござんす。お前がさういふ氣なら、わたしも又これからは、今までの腹癒せに、長者を殺したは大仁坊と、惡事の一々訴へする。待つて居なさんせ。

　ト行きにかゝる。大仁坊、留めて

大仁　それを云はれて堪まるものか。コレ、待たつしやいコレサ〳〵、どうしたものだ。あゝ云つたのは、こなたの心を引いて見たのよ。

玉木　さうかいなア。そんなら疑ひ晴れたかえ。

大仁　晴れた段か。日本晴れ。

玉木　オ、、嬉し。

　ト寄り添ふ。大仁坊、こなしあつて、其まゝ手拭にて玉木が首を締める。玉木「アッ」と苦しむ。大仁坊、思ひ入れあつて。

大仁　この日頃から愛想が盡き、鼻持ちならぬ玉木めも、たうとう今日が往生安樂。如是畜生、南無阿彌陀佛。

　ト死骸を蹴飛ばし、思ひ入れあつて人目にかゝらぬうちに、ちつとも早く。さうだ。

　ト行きにかゝる。バタ〳〵になり、向うより源之助、出て來り、よき所にて兩人、行き當り、顏見合せ

ヤア、わりや源之助。

源之　さう云ふおのれは大仁坊だな。

大仁　南無三、爰を。

　ト逃げようとするを留めて

源之　待て、賣僧め。仄かに聞けば、長者梅ケ枝二人を手にかけ、玉木を連れて逐電せし由。さすれば舅の敵、女房の仇、目にかゝつたが百年目。念佛申して覺悟なせ。

大仁　もう斯うなつたら、何もかも顯はれ小口、一旦連れて立退いた玉木めも、たつた今、おれが手にかけ往生させたワ。

大吉

源之　云はうやうなき大惡人。天罰思ひ知り居らう。

大仁　何を小癪な。

ト立廻りしながら、上手へ入る。又バタ／＼になり、門の内より櫻木、忠太夫、十三郎、出て來り、玉木の死骸を見て

十三　ヤヽ。こりや玉木さまのこの死骸。

櫻木　ほんに、こりや母さま。

忠太　奥樣を、何者が此のやうに。

十櫻　母樣いなう／＼。

ト上手より大仁坊、逃げて出て來り、皆々に行き當り、顏見合せ

ヤア、わりやア大仁坊だな。

大仁　南無三。

ト逃げ出す。禪のツトメになり、これより方々逃げ歩く。また奥より源之助出て、追ひ駈ける事二三遍あつて、皆々、追うて門の內へ入る。ト門の內より以前の侍ひ、六尺棒を突き、出て來り、あたりを見廻し

侍ひ　今日は、御主人與三右衞門さま、源之助どのに敵を討たせんとのお心添へ。只今その用意最中。

同　もしや、助太刀の輩もあるか。又は逃げ出さんも計り難しとあつて、我れ／＼に云ひ付けて非常の戒め。

同　隨分ともに、城外に氣を付け召され。

同　畏まつてござる。

トあたり見廻し、思ひ入れあつて入る。チヨン／＼返し。

本舞臺、向う高土手。正面、竹矢來。左右に榜示杭これに濱松城內普請小屋場と記しあり、上手に與三右衞門、立文を懷中なして、挾み箱に腰を掛けて居る。眞中に源太左衞門、好みの拵らへにて立ち、この次に源之助、拔刀にて扣へる。下手に大仁坊、立ち、これを忠太夫櫻木十三郎、幾代その外家來大勢六尺棒にて取卷いて居る。時の太鼓にて道具納まる

與三　如何に源太左衞門、先つ頃駿州島田の宿にて、其方が爲に討たれたる、河内の源太左衞門が一子源之助、御免を受けたるこの仇討。

源之　同苗源之助、倶に天の戴かざる父の仇。

源太　何を小癪な。返り討だぞ。

十三　長者を討つて立退いたる大仁坊、左衞門が伜十三郎

櫻木　妹櫻木、父樣の敵。

忠綟　主人の仇。
與三　双方ともに、イザ、立上がつて
四人　勝負〳〵。
源太　何を小癪な。
トこれより白囃子になり、四人の立廻り、よろしくあつて、トヾ薄ドロ〳〵になり、鶯飛び歩き、源太左衞門大仁坊を惱ます事。源太左衞門は源之助、大仁坊は十三郎に切り下げられ、双方倒れる。これにて鶯は、パッタリ落ちる。
源之　今ぞ年來望みし本望。
五人　思ひ知つたか。
ト双方一時に止めを刺す。
與三　首尾よく本望。天晴れ〳〵。
忠太　お出かしなされた、十三さま。
幾代　これより直ぐに長柄へ御歸國あつて、長者の後目。
與三　その相續は佐々木の家督も、拙者が取持ち。
源之　首尾よく敵討ち負ふせしも、偏へに朝日丸の威德。さるにても、魂魄留まる鶯の、我れを導き、敵討の助太刀。
十三　鳥類ながら天晴れ名鳥。

與三　此まゝ埋めて塚となし、末の代までも
源之　鶯塚と名くべし。
與三　佐々木の家は萬代不易、長者が家の再興、めでたいめでたい、
ト頭取出て
頭取　これより二番目始まり左様、
ト片シヤギリにて、めでたく

幕。

澤村訥升の源之助（三世豐國畫）

八文字舍自笑が正本に柿本人麿誕生記と
那智の御山の靈驗記を綴り合せし狂言の
時代を世話の仇くらべ仇夢ならぬ正夢を
順禮のおきよが八鬼山ばなし網干の館の
お夜詰に召出されし御家老の伊丹がかけ
た色の謎ときおほせたる重籐の弓を證據
に双子の兄弟　小割何某出身榮

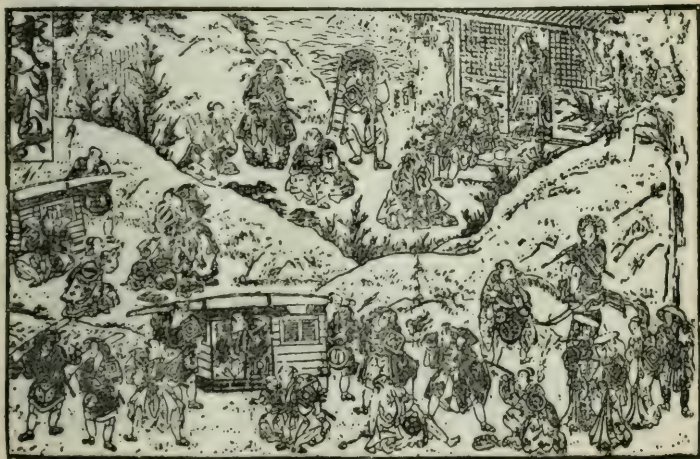
敵討浦朝霧

五幕

この狂言は、解説にも記してある通り江戸では文政五年八月の市村座只一度ぎりしか上演されない。表のカタリはその時の番附に現はれたもので、下掲の凸版も、その時の櫓下番附である。本文へ挿入した凸版は、初演の大坂番附を縮寫したものである。大坂番附は江戸のが菊半截位であるのに比べて菊判の大きさだが、人形が細かいから定めてお見づらい事と思はれる。大坂番附も、古い所はなか〳〵大きく畫いてあるが、この頃になると頁數を儉約して來たので、自然人形も小さく、側に記してある筋書も、簡單になつて來たのである。

敵討浦朝霧

人丸社の場
明石の浦の場
綱干館の場

口明

役名――綱干土岐之助。淸水杢之進。同妻、關屋。管領の使者、弓削主計。同娘、繼橋。管領の姬、里姬。綱干奴、浪平。近藤軍八。川邊軍次。永井金兵衞。垂水伴藏。眞野團作。傾城、滿月。同、待宵。同、桂女。同、歌木。同、十六夜。同、秋空。蟲賣り、露八。印南主膳實ハ紛ひの金六。惡者、熊鷹眼兵衞。奴、岩平。門番、松兵衞。勅使、松藤中將兼豐卿。若黨、丈助。腰元、磯浪。金澤主水。唐橋彈正大弼。奥方、お須磨の方。

造り物、平舞臺、淺黃幕。上手、鳥居、玉垣、石段正面より東手にあり。見付け花見幕、すべて明石人丸の社の模樣。傾城待宵、桂女、歌木、十六夜、秋空。いづれも錢緡を持ち、お百度參りの體。神樂の鳴り物にて幕開く。

ト橋がゝりより軍次、金兵衞、伴藏、團作、皆々衣裳羽織、侍ひの形にて出で

軍次　こりやア室の津の傾城達、打揃うての百度參りとはけうとい〳〵。

金兵　殿の御舍弟、土岐之助さまは、傾城の滿月に登り詰めてござれば、我れ〳〵もお相伴に、君達を靡かさうか。

伴藏　こりや面白い。

ト皆々傾城に抱きつくを、振り放し

待宵　アレ〳〵、向うから土岐さんが

桂女　浪平どのを引き連れて

十六　この人丸樣の社へ

秋空　御參詣なされますわいな。

軍次　若殿樣は粹なれども、あの奴の浪平めは、石部金吉ぢや。

金兵　イカサマ、我れ〳〵が逢うては惡い。

伴藏　幸ひの幕の內。

團作　暫らくいづれかへ隱れませう。

ト侍ひ四人、幕の内へ入る。トまた神樂になる。向うより土岐之助、衣裳羽織、若殿の拵らへ。浪平供して出る。よき所にて

土岐　コリヤ、浪平、父上御死去の後、網干の家督は兄、右兵衛之助どのに定まり、この社へ納めある、柿本人丸の烏帽子、國次の刀、傳授の歌書に添へて、御上使樣へ差上ぐるが舊例。それゆゑ人丸の烏帽子を、神主方より受取り歸らん爲の、今日の參詣。

浪平　殊に今日は禁廷より、人丸の名歌、ほの／＼の五文字の註解とやらを致せよとの、お勅使の御入來。

土岐　サア、その註解を一家中に、誰れあつて知る者なく幸ひ兄右兵衛之助どのの奧方、お須磨の方は、歌人の聞えあるによつて、大方勅答いたさるゝであらうわい。

浪平　何は兎もあれ、若殿樣には神主方へ。

土岐　浪平、參れ。

浪平　ハツ。

ト本舞臺へ來ると、四人の傾城、立ち寄り

皆々　土岐さん、待ちかねたわいなア。

土岐　思ひがけなき傾城達。

浪平　大切なる參詣の道、妨げしやるな。

ト此うち、軍八、衣裳羽織にて窺ひ出て

軍八　ソリヤ。

ト聲かける。捕り手、バラ／＼と出て、土岐之助、浪平を取卷き

皆々　やらぬぞ。

浪平　こりや、若殿をなんとするのぢや。

軍八　默れ、浪平。お家の御家督定めに付いて、近々御上使お越しといひ、殊に今日は禁廷より、御勅使のお入りに付き、神慮をすゝしめる社に於て、不淨の女を捕へ給ふゆゑ、若殿とても容赦はならぬが、役目の表、繩打つて館へ引け。

ト捕り手、兩人にかゝる。浪平、ちよつと立廻りあつて、橋がゝりへ追ひ込む。ト軍八、あたりを見廻し

サア、土岐之助さま、邪魔は拂ひました。

トこの時、幕の内より最前の四人の侍ひ出で

皆々　軍八どの、まんまと首尾よう。

土岐　何の事ぢややら

女皆　とんと、解らぬわいなア。

軍八　ハテ、この近藤軍八は粹でござる。あの奴浪平め、下郎に似合はぬ堅い奴。彼奴が側に附き添ひ居ると、我

れ〳〵まで樂しめぬゆゑ、神慮をすゞしめるこの社にて、不淨の女を捕へてなどゝは、浪平めを、遠ざける手段。

ト此うち浪平、立歸り、窺ひゐて

浪平　さう巧々とはゆきますまい。神慮をすゞしめるこの社にて、女を捕へ、若殿と一緒に遊び狂はうとするいづれも。御大身樣でも容赦はならぬ。繩打つて館へ引く。

皆々　ヤア。

ト皆々悯り。

浪平　サア、斯う云うたも今の返報がへし。下郎めは粹でござります。

軍八　そんなら浪平、其方も

侍四　我れ〳〵と同腹中か。

女皆　それで心が落ち付いたわいなア

ト橋がゝりより神主大江、狩衣にて、下部に人丸の烏帽子の入りたる白木の箱を持たせ出て、

大江　ハツ、若殿土岐之助さま、これにお渡りなされますか。

土岐　當社の神主玉串大江。して、預け置かるゝ人丸の烏帽子、持參いたされしか。

大江　お家の古例とあつて、御家督定めの御上使お入りの節、差上げ給ふこの烏帽子。イザ、お受取り下さりませう。

ト白木の箱を渡す。

待宵　コレ、土岐さん、滿月さんは、須磨の汐屋のほとりに待つてゐやしやんす。早う行てあげさんせいな。

土岐　サア、その汐屋の方へは、兄右兵衞之助どのゝ奧方、お須磨の方が月見の催ほし。ひよつと逢うてはならぬわいなう。

軍八　そりやアお氣遣ひなされますな。傾城どもを殘らず海女の姿に仕立て、御勅使を饗應の爲と僞はり、土岐之助さまの御遊興はどうでござります。

皆々　こりや、出來ました。

金兵　差詰め若殿を、古への中納言行平といふ役割は當り前。

伴藏　幸ひ、爰に烏帽子もあり。

ト白木の臺の烏帽子を出す。大江留めて

大江　エ、滅相な。人丸の烏帽子でござるぞ。

團作　ハテサテ、綱干家より預け置かるゝこの品を、若殿さまがお召しなさるゝに、誰れが點の打ち手があらうぞ。

ト無理に土岐之助にかむせる。

土岐　烏帽子を着ても、どうもこの形では、行平と見えぬわいの。
伴藏　差詰め神主の衣裳を
軍八　此方へ暫し狩衣ぢや。
ト四人して、大江の狩衣を脱がす。
大江　イヤモウ、この節は物騷なと承はれど、お國の若殿樣が、追剝きをなさるゝとは思ひがけない。
ト云ひ／＼、下部を連れて、逃げて入る。土岐之助に狩衣を着せる。
軍八　武家の姿に引替へて、殿上人の御粧ひ。
女皆　ほんに、お公卿さまと見えるわいなア。
トこの時、橋がゝりより、主膳、大勢の家來を連れて出で
主膳　ソリヤ。
ト土岐之助を取卷く。皆々愕りして
皆々　こりや、若殿を何ゆゑの狼藉。
主膳　ヤア、狼藉などゝは緩怠至極。某は職家の雜掌、印南主膳と申す者。禁廷の御用について、筑前の國まで下向の道すがら、當國をも檢分いたすところ、武家の身としてその姿は、いづくよりの許しなるぞ。見捨て置かれぬお職家の役名。
土岐　イヤ、某は、お勅使樣を饗應の爲のこの風俗。
主膳　エヽ、胡亂なるその云ひ譯。繩打つて連れ歸る筈なれども、當國の若殿とあるからは容赦いたす。印南主膳とある宿札のある所へ參れ。マア、それまではこの烏帽子を預かり歸る。
ト土岐之助の烏帽子を取つて
家來、參れ。
ト家來を引連れて、走り入る。
土岐　大切のアノ烏帽子を。
軍八　ハテ、苦しうござりませぬ。高の知れた宮侍ひ、垂水の宿所へ金子を贈られなば、いつでも取返さるゝ事、この儀にはお氣遣ひなく、女どもを召連れられ、若殿樣には、濱邊へお越しあられませう。
土岐　そんなら、烏帽子の事は、其方に頼んだぞや。併し、今日は嫂の、お須磨の方が月見の催ほしなれば、どうぞ逢はぬやうにせねばならぬ。
女皆　そりや、合點でござんす。
ト唄になり、皆々捨ぜりふにて土岐之助、女形皆々橋がゝりへ入る。あと合ひ方。軍八、その外の侍ひ四人

皆々　よろしくあつて

軍八　近藤軍八どの。

軍八　いづれも近う。かねて謀し合せし通り、大弼どの〻一味に加はり、網干家を押領して、活計を極めん企み。先年大殿病死の後、家督は兄右兵衛之助と定まれども、未だ鎌倉へ下向もなく、近々御上使のお入りの節、當家の重寶傳授の一巻、國次の刀、人丸の烏帽子を内見に供へ、國次の刀を盗ませ、その越度を兄右兵衛之助に負はせんと、下郎の岩平より、熊鷹の眼兵衛と申す者に云ひつけ、また弟土佐之助は、あの如く馬鹿者に仕立てたれば、色と酒とに魂ひを奪はれ、家督相續思ひもよらず。何は兎もあれ、眼兵衛とやらが、もう參りさうなものぢや。

トこの前より眼兵衛、厚袍着て窺ひ出で

眼兵　イヤ、その眼兵衛とは、おれが事でごんす。岩平から受取つたこの書き物。當社に納めある國次の刀、盗んでくれいとのこの文體。キツと呑み込みました。あなたの密書は、お返し申しまする。

ト密書を軍八に渡す。

軍八　小氣味の好い男ではあるぞ。

トこの時、皆々向うを見て

皆々　アレ〳〵、向うから來る同勢は。

軍八　大方、奥方お須磨の方、附添ひ來るは清水杢之進め、逢はぬうちに、所を變へて何かの密談。

侍四　然らば、我れ〳〵も御一緒に。

眼兵　軍八さま。

軍八　眼兵衛、來やれ。

ト神樂になり、皆々、上手へ入る。この前に、軍八、密書を落す事あり、向うより杢之進、上下。主水、奥方の乘り物を陸尺立派に舁き出る。腰元小汐、濱風、入江、磯浪、附添ひ出る。跡より松兵衛、附いて出る。その外、挟み箱、長刀、辨當持ちの同勢、皆々本舞臺へ來て

杢之　今日は御勅使御到着に付き、汐屋の風景を御覽に入れ奉らん爲、濱邊の假屋へ御案内の役目は、金澤主水どの、貴公、よろしく頼み存ずる。

主水　委細畏まりました。併し其許には、御上使のお入り近々なれば、何かと御繁多、奥方のお乘り物に附き添ふも、女中ばかりの中なれば、若侍ひの遠慮もござれば。

杢之　その儀はお氣遣ひ下されますな。即ち、あれに居る

は、お館の裏門番、松兵衛と申す者。老年といひ、篤實なる者と聞き及ぶ。女中のお供に屈竟。コリヤ〳〵松兵衛、近う參れ。

松兵　ハア、。

ト松兵衛、少しにじり寄る。

杢之　これなる奥方、今宵の月を御覽あつて、禁廷よりの勅諚の、ほの〴〵の名歌、五文字の註解を遊ばされん爲、浦の假屋へお越しのお供。女中方を其方に預けゐ間、何かに心を付けよ。

松兵　畏まりましてござります。

ト元の座へ直る。此うち杢之進、最前、軍八が落せし密書を拾ひ見て

杢之　眼兵衛へ近藤軍八。

ト讀み、少し思案の心意氣あつて、主水と顏見合せ

イザ、參りませう。

ト神樂になり、皆々橋がゝりへ入る。向うより里姬、振り袖、姬の形、乳人織橋、附いて出て、花道のよき所にて

織橋　申し、お姬樣、向うが卽ち明石の人丸樣、あなたが日頃戀しう思し召します土岐之助さま、今この社へお越しと聞きましたゆゑ、どうぞしてお逢はせ申しませうと存じ、これまでお供いたしました。

里姬　ほんに、其方がいかい大儀。自らと云ひ號けの名はありながら、輿入れも遲なはり、待ち焦るゝ殿樣、お顏は知らねど、お懷かしうござるわいなう。

織橋　そりやモウ、お道理でござりまする。マア〳〵、あれへお越し遊ばされませ。

ト本舞臺へ來る。此うち、奴岩平、橋がゝりより窺ひ出る。

あなた樣の御婚禮は、忝なくも將軍家よりの御媒妁、管領家の姬君と御緣組みは、土岐之助さまの御大慶。それに今まで御沙汰のないは、室の津の傾城、滿月とやらに馴染みを重ね、深い仲ゆゑと、わたしの父上、弓削主計聞くと等しく、あなた樣を伴ひ、當國へお越しあつて、御家老の淸水杢之進さまと應對ある筈なれども、わたしは早うお逢はせ申したさ。フト思ひつきましたは、土岐之助さま、御勅使を饗應の爲、傾城を海女の姿に仕立て、汐屋の假家へお越しとの事。どうぞあなた樣を、その海女の姿に出て立たせ、若殿にお逢はせ申しませうわいな。

里姬　それでも、自らは其やうな事を。

織橋　ハテ、わたし任せになされませ。傾城衆に頼んで、首尾よう致しまする程に、マア、斯うお出で遊ばされませ。

ト里姫の手を引き、橋がゝりへ入る。岩平、この前にちよつと隠れ、この時出て、あたりを見廻し

岩平　すりや、あれが管領家のお娘とな。乳人の計らひにて、傾城に打交り、海女の姿となり、若殿に逢はさうとの魂膽。そこでおれが若殿と姿を變へ、姫を抱いて寢るワ。こいつは上分別ぢや。巧いワ〳〵。

ト頷づき、ツイと橋がゝりへ入る。ト主膳、雜掌の衣裳を刀に括り付け、あたりを見廻し出る。臆病口より眼兵衞は國次の刀を盗み出で、主膳に行き當り

眼兵　金六ぢやないか。

主膳　眼兵衞か。

眼兵　われに頼んだ人丸の烏帽子。

主膳　オツと皆まで云ふな。お職家の雜掌となつて、まんまと首尾よう騙り負ふせ。

眼兵　そりやア忝ない。そんなら受取らうか。

主膳　イヤ、滅多には渡されん。雜掌になつた身の廻り、家來の雇ひ賃、餘程の元入り。褒美の金と引替へにせうかい。

眼兵　成る程、それも尤もぢやが、今と云うては金は無いけれど、幸ひ、爰に軍八さまから頼まれた國次の刀、これを暫らく預け置く。褒美の金の受取り次第、引替へにせう。

主膳　そんなら人丸の烏帽子。

眼兵　國次の刀。

ト袋入りの刀と、烏帽子と取替へて

主膳　人の見ぬ間に。

眼兵　合點ぢや。

ト兩人別れ入る。ト道具廻る。

造り物、見付け二重舞臺、金襖にて、欄間の所、明石桐の紋附き晒し幕。東西落間、浪幕。下手に汐屋あり、但し、入り口の戸、開閉て出入りあり、二重舞臺の上に、勅使中將兼豐卿、合引にかゝり居る。土岐之助、上下にて二重舞臺。平舞臺に軍八、軍次、園作、伴藏、金兵衞、いづれも上下にて並よく居る。

この見得、序の舞にて道具とまる。

土岐　御勅使樣には、遠路の御光駕

皆々　御苦勞に存じ奉ります。
弁豐　網干家の領地は播州にて、人丸の神社勸請あり、その上に奥方お須磨の方とやら、歌道の譽れ叡聞に達せしゆゑ、古へより實正定かならざる人丸の名歌、ほのぼのゝ五文字、註解せよとの勅諚。
金兵　その儀に付き、お須磨の方には、この濱に今宵の月を眺め、ほのぼのゝ註解いたさるゝその間
團作　この浦の風景を御覽遊ばされ
金兵　名所の譽れ、當家の面目
皆々　如何ばかり大慶至極に存じ奉りまする。
弁豐　聞き及んだろ浦の風景。都の土産に眺めうぞ。
土岐　御勅使樣を饗應の爲、申し付けた催ふしを、早う早う。
ト汐汲みの唄、華やかなる鳴り物にて、向うより、滿月、十六夜、桂女、秋空、待宵。腰元、濱風、入江、小汐、磯浪、皆々浴衣、腰蓑、海女の形。汐汲み桶を荷ひ出る。花道よき程に並ぶ。
滿月　わくらはに問ふ人あらば須磨の浦、藻鹽たれつゝわぶと答へよと、詠じ給ひしはこの浦の、程遠からぬ昔語り。

十六　その行平の中納言、三年のうちは須磨の浦、
桂女　汐馴れ衣しほたれて、海女の氣でさへ情を受け
待宵　戀路の譯は汲みて知る。
秋空　汐汲む桶に影二ツ。
小汐　宿せし月は名に高き
濱風　須磨や明石のうら淋し
入江　秋の夜すがらさす汐を
磯浪　汲む所の女の營み。
滿月　殿上人のお慰み。サア、皆さん
皆々　行かしやんせぬかいなア
ト皆々本舞臺へ並ぶ。
弁豐　すりや、この女どもは、この浦の海女乙女とな。
滿月　アイ、さうでござんす。白浪の寄する渚に世を渡る海女の身は宿も定めぬ、わたしは滿月と云ひやんす。
十六　わたしは十六夜
桂女　桂女。
待宵　待宵。
秋空　秋空。
小汐　小汐。
濱風　濱風。

入江　入江。
磯浪　磯浪。
皆々　お見知りなされて下さんせ。
土岐　御勅使様には。
軍八　この女どもに酌取らせ、一獻召上がり下さらば
侍皆　我れ〳〵までも、大慶至極に存じ奉ります。
　ト此の時、橋がゝりより露八、蟲籠荷ひ
出て　サア〳〵、召しませ〳〵。蟲はいろ〳〵お望み次第。
　ト云ひ〳〵出る。
皆々　ヤア、尾籠千萬、扣へ居らう。
軍八　御勅使饗應の假屋の前とも憚からず、憎い奴。
　トきつと云ふ。
露八　ア、其やうにお叱りなされますな。なんぼう、所の風景を御自慢にて、汐汲み海女を御覽に入れられても、この須磨や明石の秋の眺めに、肝心の蟲の音が致しませいでは、閑靜が薄うござります。
磯浪　なんぢや、其方は蟲賣りぢや。それは好い所へ來て下さつた。わしは最前からお腹が跡へ寄つて、どうもどうも辛抱がならぬ所ぢや。早う蒸したてのほつこりしたのを、下されいなう。

露八　サア、蟲は何なりと、お望み次第。
　ト蟲籠を取つて、磯浪に見せる。
磯浪　エ、この人わいなう。わしは此やうな物ぢやない。ほつこりとしたむし賣りが欲しいわいなア。
露八　なんぢや、ほつこりとした蟲賣り。
　ト少し思案して
ほつこりとしたむしうりとは、エ、聞えた、てつきりお前の望みは、蒸うりの琉球芋の事かえ。
磯源　サア、そのほつこりが早う欲しい。
露八　コレ、わしが商ひ物は、其やうな芋の蒸立てゞはない。此やうな鈴蟲、松蟲、轡蟲ぢやわいなう。
磯浪　ア、何の事ぢやぞいな。
露八　ハ、、、、。
　ト笑ふ。
軍八　イカサマ、これは幸ひの所。庭の面に蟲を放し、鳴く音をお肴に御酒一獻。
土岐　御勅使様には、所を替へて御休息。
露八　ドリヤ、わたしは蟲籠を奥へ。
乗豐　方々、後刻。
皆々　先づ、お入りあられませう。

ト唄になり、勅使は奥へ、虫賣り露八は臆病口へ、蟲籠持つて入る。跡に、皆々、心意氣あつて。

土岐　ヤレ〳〵、窮屈な事であつた。足も腰も、メリ〳〵云ふわい。

軍八　邪魔になる御勅使、蟲賣りを幸ひに、別座敷へやつてしまひ、滿月どのを始め、傾城達や腰元衆の、海女の姿は、氣が好いではござりませぬか。

滿月　殿さんには、たんと話しがある。

侍皆　我れ〳〵は海女を相手に、酒にしませう。

ト ばた〳〵にて、橋がゝりより岩平走り出て

岩平　若殿樣、一大事が起りました。

ト 皆々、悔りして。

皆々　一大事とは。

岩平　さればでござりまする。若殿樣へ云ひ號けありし管領の姬、是非とも今日は、婚禮させんとて、乳人が附添ひ參りました。必らず〳〵御油斷なされますな。

土岐　なんぢや。管領の姬を押しかけに連れて來たか。

滿月　殿樣、お前は婚禮する氣でござんすかえ。

土岐　ハテ、益體もない。なんぼう將軍家の仰せでも、太夫の肌を覺えては、管領家の姬とは、婚禮する心はない。

岩平　それでも、是非とも婚禮させんとて、管領家より使者の入來。

土岐　どうぞ、好い思案は無いかいなう。

ト 岩平、ちよつと思案のこなしあつて

岩平　好い思案がござりまする。

土岐　ナニ、好い思案とは。

岩平　さればでござりまする。此方の若殿樣のお顏をば、彼方で知らぬが此方の幸ひ。今にも連れて來たならば、姬君を、どなた樣なりとも、若殿に代り、婚禮すれば、事は濟むぢやござりませぬか。

軍八　成る程、若殿の吹替へを拵らへ、婚禮さすとは、出來た〳〵。して、その役を勤める者は。

岩平　マア、差詰め軍八さま。

ト 云ひ〳〵顏見合はし

でも、あるまいし、金兵衞さまにも、伴藏さまにも、よもや御得心はござりますまい。よいワ、何をするも奉公ぢや。誰れ彼れなしに、いつそ下郞めが、殿の代りになりませう。

女皆　それでも、その形では、どうも殿樣とは見えぬわいなア。

岩平　イカサマ、こりや尤も。ハテ、どうしたものであらうな。
軍八　若殿樣の衣裝羽織を、岩平に遣はされ、彼れが形に代りござれば、誰れあつて若殿と思ふ者もござりますまい。
土岐　そんならおれは、岩平の形になつてゐるのか。合點ぢや。
ト皆々捨ぜりふにて、土岐之助が羽織衣裳を脫がせ、岩平に着せ替へる。
岩平　なんと、これで若殿と見えるであらう。
軍八　これを一輿に御酒一つ。
滿月　土岐さん、奧へ行かしやんせいなア。
土岐　サア、皆來い〳〵。
ト唄になり、土岐之助、滿月、軍八その外、皆々上手へ入る。あと合ひ方、岩平、いろ〳〵あつて、若殿といふこなし。
岩平　マア、斯うしてゐれば、管領の姬が、若殿と思ひ、殿樣、お懷かしうござりますわいなアと抱きついたならおれがその姬を抱いて寢るとは、けうとい〳〵。
ト獨り言云うてゐる。此うち、乳人繼橋、海女の形にて窺ひ出で、樣子を立ち聞きする。臆病口バタ〳〵と音する。繼橋、ちやつと汐屋の内へ隱るゝ。ト岩平は姬と思ひ、いろ〳〵身繕ろひする。臆病口より眼兵衞出て來て
眼兵　岩平に逢はうと思つて來たが、どうぞして逢ひたいものぢや。
ト云ひ〳〵、岩平と顏見合はし、形を見て
エヽ、岩平、わりやマア、その形は何ぢやぞい。それはさうと、ちと急に話したい事が。
ト引立てようとする。
岩平　おりや、爰に用がある。
眼兵　でも、急な事がある。
ト無理に引立て、臆病口へ連れて入る。繼橋、汐屋の内より出て、あたりを見廻し、天を拜し
繼橋　すんでの事に姬君樣を、下郞に肌を穢されんとせし所。これも天道樣のお惠み。エヽ、忝ない。そんなら奴姿になつてござるが、若殿樣に違ひはない。この通りをお姬樣にさうぢや。
ト橋がゝりへ入る。ト浪平、幕明きの奴の形にて出て
浪平　若殿樣に、お目にかからねばならぬ。

ト彼方此方と尋ねるこなし。此うち、繼橋、里姫を海女の姿に仕立て、連れて出て、浪平を若殿と思ひ、無理に突きやる。里姫、耻かしきこなし、いろ〳〵あつて、トゞ、姫を突きやるはずみに、浪平に行き當り、顏隱して

里姫　申し、殿樣。

浪平　なんだ。おらを捕へて殿樣とは、馬鹿らしい。

里姫　お懷かしうござりますわいな。

浪平　なんだ、とんと解らねえ。

ト不思議さうに云ふ。繼橋、こなしあつて

繼橋　申し〳〵、殿樣、なんぼうお隱しなされても、紅ゐは園生に植ゑても隱れない。若殿樣、これにござるは云ひ號けの姫君。

ト云はうとして、氣を變へ

イ、エ、この浦の海女の乙女でござります。あなたを見初めて、强い焦れやう。どうぞ、願ひを叶へて下さりませ。モシ、御得心がござりませねば、いつそ。

ト姫に死なうとせいと、いろ〳〵教へるこなし。里姫やう〳〵合點して

里姫　南無阿彌陀佛。

ト浪平の刀に手を懸ける。

浪平　ア、コレ、滅相な。

ト留める。

里姫　そんなら、御得心でござりますか。

浪平　サア、それは。

里姫　サア。

浪平　サア。

二人　サア〳〵〳〵。

里姫　御得心がござりませずば。

トまた死なうとする。

浪平　ア、コレ、なんぢや知らぬが、マア、得心でござります。

繼橋　そんなら、善は急げぢや。幸ひのあの汐屋の內。

ト浪平、迷惑なるこなしあつて

浪平　ドリヤ、七十五日生き延びようか。

ト唄になり、浪平、里姫を連れ、汐家の內へ入る。繼橋、跡にて胸撫で下ろし、心落ちついたこなし。

繼橋　とは云へ初心なお姫樣。

ト內を窺ひ、いろ〳〵あり、ソツと橋がゝりへ入る。臆病口より、岩平、眼兵衛を連れて出で

眼兵　そんなら、人丸の烏帽子が入用なら、褒美の金にせうかい。
岩平　サア、その金は、爰に無い。
眼兵　それでは、滅多に渡されぬこの烏帽子。
岩平　幸ひ爰に持つてゐる、この一品と、替へ事せうか。
ト懐より袱紗包みを出す。
眼兵　全體、それは何ぢやぞい。
岩平　されば、この傳授の一巻は、網干家の重寶にて、唐橋大弼さまに頼まれ、盗み置きたる大金になる代物。
眼兵　イカサマ、隠して置くには嵩が低うてよい。そんなら替へ事せう。サア、おこせ。
岩平　われから出せ。
眼兵　エヽ、氣の惡い。そんなら一緒に取替へう。
ト兩人、烏帽子と傳授書を手に懸けて
兩人　一イ二ウ三ッ。
ト云うて、取替へて懐中する。
眼兵　ドリヤ、行かうか。
ト越後獅子の鳴り物になり、くろか〱の唄にて、眼兵衛、橋がゝりへ入る。ト岩平、いろ〱身繕ろひして

岩平　もう姫が來さうなものぢや。アヽ、待たるゝとも待つ身になるなとは、好う云うた事ぢや。
ト云ひ〱橋がゝりの方へ入る。汐屋の内より浪平、里姫を連れて出て。
浪平　縁あらば、重ねて逢ひませう。
ト行かうとする。里姫留めるを、無理に振り放し
こりやア御用が遅うなつた。
ト上手へ入る。里姫、浪平の跡を見送りゐる。ト橋がゝりより、岩平出て、姫を見て、こなしあつて後より抱きつく。里姫、恟りしてあせる事、いろ〱ある。此うち繼橋、走り出て、岩平を突き飛ばし、ちよつと立廻りあつて、繼橋、里姫を後に圍ひ、キツとなる。
この見得よろしく道具廻る。
造り物、二重舞臺、金襖。上手、折廻し障子屋體、橋がゝり網代の塀。主計、衣裳、上下。關屋、衣裳、裲襠にて出てゐる。序の舞にて、道具とまる。
關屋　管領家よりのお使者、遠路の所、御苦勞に存じ奉ります。妾は關屋と申す者にて、夫清水李之進が、御對談申し上ぐべき筈なれども、今日はお勅使のお入りと云

ひ、近々鎌倉の御上使もお入りの由。當家家督の定めに付き、何かと多用。それゆゑ、女ながらも夫の名代、お使者の趣き、私しに仰せ聞けられ下さりませうならば、有り難う存じ奉ります。

主計　成る程、當家と某の主人とは、將軍家より御媒妁にて、緣組みあらば、一門も同然。一家中の夥多の中にてお心遣ひは無用。何かは差措き、この度當家へ參りし使者の趣き、別儀にあらず、網干の次男土岐之助どの、此方の里姫と緣邊は、私しならぬ公けの嚴命。然るに、土岐之助どのは、傾城遊女にその身を忘れ、それゆゑ、姫君のお輿入れも沙汰なきと世上の風聞。これ卽ち、管領家の耻辱にして、將軍家を蔑ろにする恐れ少なからず。急ぎ實否を糺せよとの儀にて、姫の乳人、某が娘繼橋と申す者、姫を伴ひ、到着の上は、直さま輿入れをなし下さるやう。御返答を承りたう存ずる。

關屋　世上の風說は知らねども、土岐之助さまのお身持ち、放埒なる儀は一切これなく、お輿入れの遲なはりしは、大殿の御死去の後は、右兵衞之助と御家督は定まれども、今に鎌倉へ參勤これなきゆゑ、弟君の御婚禮も、自づと延引いたしたのでござります。

ト内より

軍八　イ、ヤ、放埒の正體、お目にかけう。

ト土岐之助を引立て、金兵衞、軍次、伴藏、團作、傾城殘らず引立て出る。

管領家の御使者、これ御覽なされ。室の津の傾城を館へ引入れ、晝夜分たぬ酒宴の遊び

金兵　將軍家の命を用ひず

軍次　管領の姬を嫌ひ

伴藏　傾城の滿月を寵愛いたさるゝ段

團作　なんと、不行跡では

皆々　ござりませぬか。

土岐　ア、コリヤ〳〵、この趣向は皆、其方達が計らひぢやないかい。

軍八　ハテ、今さら自分の科を、我れ〳〵に塗り付けやうとは、如何に主從なればとて

皆々　こりや、迷惑でござります。

關屋　これは又、何れも、穩やかならぬ詞爭ひ。今日、室の津の傾城どもを招き寄せしは、御勅使樣へ饗應の汐汲み、海女の催しではないかいの。ナア、傾城達。

女皆　左樣でござんす。

ト この時、橋がゝりより岩平、浪平を引立て出で

岩平　大それた不義の科人、岩平めが引立て參りました。

軍八　ナニ、下郎の浪平を、大それた不義者とは。

岩平　イヤモウ、不義も不義、大それた不義者。どこの世界に下郎の身として、管領家の姫君と不義密通。

主計　ナニ、此方の姫と密通せしとは、聞き捨てならぬ一大事。

浪平　イヤ、如何やうに云うても、姫君と不義した覺えはござりませぬ。

岩平　エヽ、生々しい僞はり、不義を見屆けた、慥かな證據は、この岩平。

浪平　例へ證人はあつても、姫と不義した覺えはない。

主計　下郎同士の論は無益。此方の姫は、身が娘附添ひ居れば、不義のあるべきやうはない。ヤア〳〵、繼橋、姫君を伴ひ、これへ參れ。

繼橋　ハア、。

ト里姫の手を引き、繼橋出る。里姫は浪平を見て

里姫　ヤア、殿樣。

ト浪平、恟りして

浪平　こなたは、最前の海女ではないか。それを管領の姫君とは。

岩平　なんと、膽が潰れたか。

浪平　ホイ。

ト當惑のこなし。繼橋、いろ〳〵こなしあつて

繼橋　父上、お免されて下さりませ。姫君樣にも、奴どのにも、さら〳〵不義の科はない。この科人は皆私し、この繼橋でござりまする。マア、お聞きなされて下さりませ。將軍樣のお指圖にて、これなる姫君と、當家の若殿、土岐之助さまと、御縁組みありしその日より、輿入れの日を待ち焦るゝは、姫御前の習ひ。お姫樣の心のうち察せしゆゑ、父樣と諸とも、當國へ參ぜしが、若殿には外心あるとの噂。どうぞ首尾して、お逢はせ申さうと存じ、樣子を窺ひしところ、下郎の姿にお身をやつし、奴どのが若殿となり、御婚禮をせんと聞くより、南無三寶、姫君とお逢はせ申しては、女の道立たずと思ひ、假初めの語らひでも道ならばと、あの奴どのを、土岐之助さまと心得、戀の取持ち致せしは、この繼橋でござります。

里姫　それも、矢ツ張り自らが淫らゆゑ。主計、堪忍してたも。その云ひ譯は。

ト白状せうとする。繼橋、止めて
繼橋 マア〳〵、お待ち下さりませ。
軍八 不義の相手は、浪平め。
皆々 縛り首はお定まり。
岩平 下郎め、覺悟。
ト浪平を切らうとする。花道戸屋の内より
杢之 方々、待つた。
ト聲かけ、杢之進、藤明きの形にて走り出て來る。
いづれも、急かれな。この場の落着、當家を預かる淸水杢之進が胸にござる。
軍八 でも、兩人の口から、慥かに白狀せし不義の罪人。
杢之 されば、そこでござる。あれなる乳人繼橋どのの只今の云ひ譯、土岐之助さまには、下郎と姿を變へ、下郎は若殿の衣裳を着し、姬君と婚禮を致さんとする方便を聞き、乳人が計らひにて、浪平を若殿と思ひ、また浪平は海女の姿の女をば、管領の姬君と知らぬも道理。さあれば、不義に似て、不義にあらず。兩人に科はござらぬ。この儀逹て詮議を遂げらるゝと、自然、若殿や姬君の御名の出る事。
軍八 イ、ヤ、例へ御名は出るとても、不義はお家の御法度。
杢之 サア、不義の相手を詮議すると、誠の不義は、あれなる岩平。
岩平 ナニ、この岩平を不義者とは。
杢之 如何にも。
ト岩平、ムッとして、杢之進の側へ行き
岩平 御家老樣、この下郎め、何ゆゑ不義者でござりますな。
杢之 ハテ、知れた事。うぬ、下郎の身として、若殿の衣服を着し、姬君を欺むかんとせしからは、不義者ではあるまいか。
岩平 エ、、それや得手勝手のこの場の計らひ。
ト杢之進に詰めかけようとするはずみに、懷中より、烏帽子を落さうとして
南無三。
ト云ひつゝ逃げて入る。ト主計、杢之進に向ひ
主計 ア、、流石は大國の家老職ほどあつて、双方無難に納まる計らひ。杢之進どの、わざと御禮は申さぬ。娘が麁忽、姬君の云ひ譯は、まツこの通り。
ト肌を脫ぐと、切腹して腹帶締めてゐる。繼橋、悄り

して取りつき

繼橋　ヤア、父樣には、切腹なされてござりますか。

主計　我れ、姫君の御供して、當國へ來り、若殿の風聞を聞きしより、所詮この婚禮、調ひ難しと見極め、主君への申し譯、疾より切腹いたせしが、いま杢之進どのの情の計らひに安堵なし、心置きなく成佛いたす。娘よ、其方はいつまでも、姫君に附き添ひ奉れ。猶この上ながら、萬事賴むは杢之進どの。

杢之　その儀は少しもお氣遣ひなさるゝな。先刻より對談の五音、切腹召され居らるゝ事、それと推察いたせしゆゑ、調ひ難き婚禮を、取結ぶは武士の寸志。

主計　エヽ、嬉しや、忝なや。いづれも、おさらば。

ト腹帶を解くと、バツタリこける。繼橋、里姫、ハアヽと大泣き。

杢之　近藤軍八どの、ちよつと御意得たい。

軍八　手前にかな。

トずつと立つて、舞臺の眞中へ出で、こなしあつてなんでござる

杢之　イヤ、別儀でもござらぬ。

ト最前の狀を出し

この狀、覺えがござるか。

ト見せる。軍八、悔りして懷中を探し、いろ〳〵あつて狀を取らうとする。その手を拂ひ

若殿に傾城遊女を勸め込み、色と酒とに御心を亂させ、剩さへ、主君の婚禮を妨げ、兄君右兵衞之助さま御家督定めに、上使に奉る、お家の重寶を盜まんなどゝ、事を好む大惡人。同じ穴の狐侍ひ、荷擔する佞人ばら、一々詮議する筈なれども、今より心改むるものならば、何事もこの場限り。以後はキツと愼み召され。

トきつと云ふ。軍八、氣を春へ

軍八　ハアヽ、惡事は千里、天道の罰は目の前。斯く露顯に及ぶからは、何事もお免されて下さる上は、とてもの事に、その密書を某にお戻しなされて下さらば、重々の厚恩。

杢之　イヽヤ、そりやならぬ。身が存ずる仔細もあれば、狀は矢張り此方に留め置かう。

軍八　サヽ、そこが武士の情と云ふもの。何卒、お返し下されい。

杢之　イヽヤ、なりませぬ。

軍八　所をどうぞ、御料簡あつて。

杢之　ハテサテ、なりませぬ。
軍八　左様でござらうけれど。
杢之　くどい事。罷りならぬ。
　トきつと云ふ。軍八、ムッとして
軍八　エヽ、おきやアがれ。其方を其方と思へばこそ、一家中、満座の中にて、武士が手を突いて頼むに、聞入れなくば、もう頼まぬ。オヽ、あやまりもせぬ。コリヤ、こなたはナ、表は仁心らしく見せて、爰が悪い、オヽ、心が汚ない。今更云ふに及ばねども、こなたが若年の頃、先殿の御前を仕損ひ、すんでにお手討にもなるべき所、某が父、近藤三太夫、幸ひとその場に居合して、殿へ、段々と理解を説き、お詫び申したばつかりに、今日まで命を長らへゐるは、これ皆、我が父三太夫が執成したゆゑではないか。さあれば其方、誠の武士の魂ひあつて、恩義を忘れぬならば、その狀を此方に渡すべきに、思ふ仔細ありながら、我まゝなるこの場の行跡。その賢人ぶつた汝を、斯う。
　ト切りかゝるを、扇にてあしらひ、また切りかゝるを見事に捩ぎ取り、軍八を取つて押へ
杢之　エヽ、云はうやうなき人面獸心。一家中へ見せしめに。
　ト軍八が眉間を割る。侍ひ四人、寄らうとする。杢之進、キッとなる。ト皆々、後へ寄る。軍八、また切つてかゝる。ちよつと立廻りあつてポンと當てる。
主計どのゝ自殺によつて、この場の事は何事も沙汰なし。さりながら、土岐之助さまには暫らく御遠慮。傾城どもは、殘らず廓へお返しあれ。奴の浪平は、心置きなく出勤してよからう。
浪平　有り難うござります。
關屋　土岐之助さま。
土岐　いづれも。
皆々　マア、お入りなされませう。
　ト序の舞になり、土岐之助、里姬、繼橋、關屋、女形皆々、杢之進もこなしあつて奥へ入る。浪平、橋がゝりへ入る。跡に侍ひ四人殘りゐて、金兵衛、軍八に活を入れる。軍八心附き、眉間の血を見て、恟りして
軍八　おのれ、杢之進め。武士の面てを打ち割り、遺恨に遺恨を重ねる上は、奥へ踏ん込み、たゞ一打ち。
皆々　我れ〳〵も御一緒に。
　ト身繕ろひして行かうとする。この前より、大弼、黒

裝束に野袴、兜頭巾にて、黒裝束の家來二人連れ、橋がゝりより窺ひ出て

大弼　コリヤ、待て。

皆々　ヤア、あなたは唐橋大弼さま。

大弼　シイ。

ト押へる。ト下がり葉打ちかける。大弼、あたりを見廻し

疾より館へ忍び入り、始終の樣子は殘らず聞いた。其方の無念は理りなれども、今日は勅使の入來、饗應の場へ踏ん込んでは、多勢に無勢、本望達する事、思ひも寄らず。彼れを討取るは、今宵勅使の歸館を見送りて、歸る所を待ち合せ、騙すに手なし、たつた一打ち。

軍八　成る程、尤も騙すに手なし。慥かに歸りは垂水の松原。

侍四　遊女塚を弓手馬手。

トちやん〳〵と暮れ六ツの鐘鳴る。

大弼　最早、暮れ六ツ、宵闇のうち。

軍八　思ひ知らさん李之進。

大弼　いづれも加勢。

皆々　心得ました。

大弼　急げ〳〵。

皆々　ハツ〳〵。

ト皆々、凜々しく向うへ走り入る。大弼、向うをキツと見る。この見得にて道具廻る。

造り物、一面の黒幕。見附けに辻堂。橋がゝりに遊女塚といふ石碑あり。バタ〳〵にて臆病口より眼兵衞、走り出で

眼兵　ヤレ〳〵、ひやいな所で、岩平から受取つた傳授の一卷を見付けられうとした。

ト云ひ〳〵袱紗包みを戴く。この時、繼橋、窺ひ出て

繼橋　それを。

ト取らうとする。ちよつと立廻りあつて、繼橋をポンと當て、眼兵衞、向うへ走り入る。繼橋、心付き

曲者を取逃がした。慥かにこの道、さうぢや。

ト向うへ入る。跡かすかに蟲の音。向うより軍八、侍ひ四人出て、花道にて向うを見て

軍八　向うに見ゆる提灯の、灯影は慥かに李之進。いづれも、油斷さつしやるな。

皆々　心得ました。

ト此うち、臆病口より箱提灯持たせ、杢之進出て來る。侍ひ四人、抜打ちに提灯を切り落す。ト軍八、杢之進に切つてかゝる。此うち、供廻り逃げて入る。跡入り亂れ、立廻りあり、トゞ軍八を、杢之進切り倒し、止めを刺す。此うち、向うより大弼、以前の形にて、前後に黒裝束の家來附添ひ出て、花道のよき所にて、エイと手裏劍打つ。杢之進、ウンと反る。此うちに本舞臺へ來て、杢之進を切り倒す。

皆々　息は止まりましたかな。

大弼　軍八が最期は悔んで詮なき事ながら、當の敵を立ち所に討ち取り、我が大望の手始めよし。

ト杢之進の懷中の密書を取出だし

斯樣の密書は、後日の妨げ。

ト龕燈の火にて燒き捨てる。橋がゝりより足音する。

ソレ、いづれも早く。

ト皆々臆病口へ逃げ入る。ト橋がゝりより蟲賣り露八、蟲籠を荷ひ出て、血汐に辷り

露八　こりや、なんぢや。

ト探るうち、上手へ月出る。ト杢之進の死骸を見て

ヤア、爰に人が殺されてある。

トよく〳〵見て

ホヽ、こりやコレ、晝見た網干の家中。エヽ、むごたらしう切り居つた。

ト云ひ〳〵、軍八の死骸を見て

これも矢ツ張り網干の家中。

トまた杢之進の死骸を見て

斯うムザ〳〵と、殺さるゝやうな、侍ひとは見えなんだに。

ト胸に立つたる手裏劍を見て

さては荷擔人があつたと見ゆるわい。

ト月影に透かし見て

こりやコレ、亂れ獅子に牡丹唐草の割り笄。

トちよつとこなしある。此うち橋がゝりより、パタパタと足音する。ト露八、ちよつと塚の後へ隱るゝ。ト關屋、奥方の姿にて、若黨丈助、股立ち取り、箱提灯持ちて出て、死骸に爪づき、よく〳〵見て

丈助　ヤア、こりやお旦那。

關屋　杢之進どのかいなア。

ト慟りする。

丈助　エヽ、何者の仕業、今一足早くば、斯くやみ〳〵と

討たせまいもの。

關屋　最前からの胸騒ぎも、斯ういふ事であつたかいなう。

ト此うち丈助、軍八の死骸を見て

丈助　この死骸は近藤軍八。

ト關屋も見て

關屋　さては最前の遺恨にて、夫の歸りを待伏せして

丈助　兩人ともに、御最期であつたか。

トこの前より、露八、窺ひ出で

露八　イヤ、その殺し手は外にごんす。

關屋　ナニ、外に殺し手が

丈助　あるとは。

露八　證據といふは、この一品。

ト割り笄を出す。關屋、見て

關屋　亂れ獅子に牡丹唐草の割り笄

丈助　それを敵の手がゝりとは

關屋　何にもせよ、怪しき曲者。

ト兩人、露八に切り付けるを、ちよつと立廻りあつて

露八　ア、コレ、マア、早まらずと。

ト立廻りにて關屋丈助をよろしく止めて

とつくりと譯を聞かんせ。

ト小腰をかゞめる。兩人もキッとなる。この見得にて道具廻る。

造り物、一面の浪幕。見附け、浦の苫屋あり。左右に所々臺松、廻りに松の吊り枝、上手、月出で、すべて明石の浦の模樣。假家の内に、お須磨の方、褥の上にて脇息に凭れ、月を眺めてゐる。平舞臺、左右に幕明きの腰元、皆々並よく並び、下の方に女乘り物、陸尺同勢。橋がゝり、切り幕の際には、松兵衞、女草履を腰に挾み、蹲りゐる。この見得、靜かな琴唄にて道具とまる。

須磨　二千里の外までも、隈なき今宵の月の眺め、その名所の多き中に、更科、田毎、姨捨山にも、猶勝りたる風景は、須磨や明石の浦づたひ、古しへの紫式部、石山寺に參籠して、源氏の物語りを浮み出づるも、先づ湖にうつる月影に、おのれと心も澄み渡る、須磨明石の卷より書き初めしと聞きしが、この度禁廷の勅諚を受け人丸の神詠、ほの〴〵の五文字の註釋、心澄まさんその爲に、わざ〴〵今宵の月見の催ほし、少しは心に、それ

かと思ひ寄つたる事もあれど、和歌の御祖の言の葉なれば、代々の先達の敎へなければ、迂濶にそれと、勅答もなし難し。ハテ、どうしたものであらう。

磯浪　ほんニ、辛氣な事でござりますな。

須磨　ほの〴〵と明石の浦の朝霧に、嶋かくれゆく舟ぞとも、西に傾むく今宵の月影も、はや東雲、明け方近し。妾は歸館しませうわいなう。

磯浪　奧樣のお歸り。

皆々　松兵衞どの、お草履。

ト松兵衞、女草履を差出し、假屋のよき所に直す。この時、お須磨の方の顏をヂツと見る事ある。陸尺、女乘り物を下手のよき所に直す。トお須磨の方、始終月を眺めるこなしにて、乘り物へ移り、左右の戸、明け放してあるなり。

皆々　お立ち。

ト靜かなる所地入りになる。乘り物、花道へ行く。女形皆々附添ふ。お須磨の方、乘り物の内より月を眺め靜々と向うへ入る。松兵衞は始終、お須磨の方に見惚れてゐて、ソロ〳〵と後より歩く。茶辨當持ち、松兵衞の後より面倒なるこなしあつて

茶辨　サア、行かんかい。

トこれにて松兵衞、心の附くこなしあつて、よろしく

兩人幕の外にて、ソロ〳〵と向うへ入る。　　幕。

二つ目

門番松兵衞部屋の場
網干家館の場

役名――網干右兵衞之助。網干土岐之助。奧方、お須磨の方。門番、松兵衞。李之進妻、關屋。傾城、滿月。傾城、明石。奴、浪平。奴、岩平。蟲賣り、露八實ハ李之進娘おきよ。奴、川邊軍次。永井金兵衞。垂水伴藏。眞野團作。腰元磯浪。唐橋大弼。

造り物、平舞臺、見附け二間の間、二重舞臺。裏門番の松兵衞部屋。鴨居に折れたる重籐の弓を掛けあり、屋敷の門、但し、裏手を見せ、上手奧へ寄せて塀、これも裏を見せ、すべて網干家裏門口の體。松兵衞、病人の拵らへにて、蒲團きて寐轉びゐる。傍

らに枕屏風、藥など、よき所に唐辛子の鉢植ゑあり
岩平、浪平、庭の掃除してゐる。この見得、白囃子
にて幕ひらく。

岩平　コリヤ〳〵、浪平、しまつたら一服せうかい。

浪平　オヽ、さうしよう〳〵。

ト云ひ〳〵松兵衞の側へ寄り

岩平　どうだ、松兵衞、今日は心持ちはよいか。

浪平　藥でも煎じてやらうか。

ト松兵衞、枕を上げ、起きあがりて

松兵　オヽ、岩平、浪平、よう見舞うてくれた。この間から、おれが此やうに寢てゐるゆゑ、それでも忙しい上に今日御上使のお入りとやらにて、お庭の掃除も忙しかろ

岩平　イヤモウ、そりや互ひぢや。

浪平　隨分養生して本服せいよ。

松兵　オヽ、忝ない。

岩平　ドリヤ、おらも部屋へ行て

二人　休まうわい。

ト二人、臆病口へ入る。ト松兵衞、こなしあつて

松兵　アヽ、いつぞやよりの物思ひは、誰れにも明けて云はれぬ事。どうぞ思ひが叶へばよいが。

ト獨り言。此うち、髭奴の鳴り物になり、臆病口より
腰元磯浪出て

磯浪　松兵衞どの、起きて居やんすか。ほんに、こなたはこの間、奥さまのお供してから、ツイ馴染みになり、御門の出入りに顏見合はすゆゑ、心安う思ひ、アレ、向うにこなたが手入れしやつた唐辛子、わしは大好物ゆゑ、一つ二つたもらんかと云うたも、厚かましい者ぢやと思うて下さんすなや。

松兵　なんの其やうな事思ひませうぞ。イヤ又、唐辛子といふ物は、食物に味を出し、第一は根氣の藥でござりますれば、お前樣のやうな、奥勤めをなさるゝお方は、ちと上がるがようござります。

磯浪　さう云うてたもると、遠慮なう貰ひます。

松兵　サア〳〵、なんぼなりと持つて歸らつしやれ。

磯浪　そんなら貰ひます。

ト唐辛子をむしりながら

イヤ、コレ、松兵衞どの、あすこに掛けてある弓の折れは、ありや何になる爲ぢやぞいなう。

ト鴨居の方を指さして云ふ。松兵衞こなしあつて

松兵　イヤモウ、なんぼう重籐の弓でも、折れては用に立

たねど、まんざら捨てられもせずして、ツイ向うに掛けて置いたのでござります。

磯浪　ムウ、さうかいの。わしや又、なんぞの咒ひかと思うた。わしとした事が、よう根問ひする者ぢやと思やらうが、其方の病はマア、なんぢやぞいな。

ト松兵衞、恥かしきこなしあつて

松兵　イヤモウ、この爺の病は、とんと、人樣に話しのならぬ事でござります。

磯浪　エヽ、あの人わいな。病になんの話されぬと云ふ事があらうぞ。其やうに隱さずと、樣子を話して聞かしてたも。

松兵　それでも、云うたらお前樣、お笑ひなされます。

磯浪　イヤ、どのやうな事でも、笑ひはせぬ程に、マア、話して聞かしや。

松兵　そんなら、必らずお笑ひなされて下さりますな。

磯浪　とんと笑ふ事ぢやない。早う話しや。

松兵　この親仁が病氣といふのは。

ト云ひかねる事、いろ〳〵ある。

磯浪　こなたの病氣は。

松兵　親仁の病氣は

磯浪　マア、なんぢやぞいな。

松兵　ハイ、戀煩らひでござります。

ト恥かしさうに云ふ。磯浪、恟りして

磯浪　ハヽヽヽヽ。あのやうな形して、戀煩らひとは、をかしいわいな。

松兵　サア、それぢやによつて、云ひますまいと申しました。

磯浪　イヤ〳〵、もう笑ひはしませぬ。イカサマ、幾つ何十になつても、捨てられぬは色の道。そして、こなたの惚れた女中は、町か、お屋敷かいなう。

松兵　イヤモウ、その事は、どうも申されませぬ。

磯浪　ムウ、そんなら、わしが指して見せう。大方、わしが、推量では、この間から、この屋敷へ室の津のお傾城が、大勢來てゐやんす。定めしあのうち……こなさんが惚れたと云ふは

トちよつと思案し

大方、待宵どのであらう。

松兵　いゝえ。

磯浪　ムウ。待宵どのでなくば、カウツ、秋空どのか。

松兵　いゝえ。

磯浪　そんなら、桂女、十六夜。

松兵　イヤ、傾城衆ではござりませぬ。

磯浪　フム、お傾城衆でなくば、腰元衆のうち、差詰め小汐どのか。

松兵　いゝえ。

磯浪　それでなくば、吹風どのか。

松兵　いゝえ。

磯浪　それでなくば。

ト我が額を指ざし

わしでもあるまいし。カウツ、その外に姫御前と云うたら關屋さま。奥樣でもあるまいし。

松兵　いゝえ、その奥樣でござります。

磯浪　エヽ。

ト悧りする。

松兵　ぞつこん奥樣に惚れました。

磯浪　親仁だてら、奥樣に惚れたとは、こりやをかしい。

ト笑ふ。

松兵　サア、それぢやによつて、笑うて下さんなと云うたのぢや。

磯浪　ぢやと云うて、これが笑はずに居られうか。

ト大笑ひして、氣を替へ

よい年をして親仁だてら。とは云ふものゝ、それ程までに思うてゐやるもの。

松兵　せめて奥樣に、夢なりとも、この事をお知らせ申したら、この親仁めが本望。

磯浪　百貫の鷹も放さねば知れぬと、いつそてんぽの皮、云ひかけて見たら、また叶ふまいものでもない。わしがこの戀の取持ちしませう程に、思ひの丈を、ザツと一筆書いたがよいわいの。

松兵　ナニ、この取持ちをしてやらうと仰しやりますか。

磯浪　おいなう。

松兵　そりや、誠でござりますか。

磯浪　人の見ぬ間に、早う一筆書くがよい。

ト松兵衞、立ち上がり、臥床の下より、錢二百出し、塵紙に包み、ソツと磯浪の前に出し

松兵　これは近頃、あなづりがましい事なれど、あなたに何ぞ、買うて上げませうと存じますれど、何を申してもこの病。これは、少しばかりでござりますれど、髮附なりと買うて下さりませ。

磯浪　エヽ、こんな心遣ひはせぬがよい。こなたも、病氣

の事ぢや。どうで小遣ひもいらうほどに、其方へ納めて下され。貰うたも同然ぢや。

ト云ひ〳〵欲しさうな心意氣にて

併し、年寄りの心遣ひを無足にするも氣の毒ぢや。そんなら貰うて置きませう。

ト戴き、帶の間に入れる。

松兵　又この病氣が本腹いたしましたら、なんなりと買うて上げませう。

磯浪　イヤモウ、必らず心遣ひはよしにして、サア、一筆書かしやれないなう。

松兵　成る程、狀もこれに書いてござります。

ト出す。磯浪取つて

磯浪　ツイ今の間に、よい返事をばせう程に、待つてゐやしやれ。

松兵　どうぞお賴み申します。

ト飛奴の鳴り物にて、磯浪は臆病口へ入る。松兵衞、嬉しきこなしあつて、天を拜む事ある。此うち軍次、金兵衞、下手の口より出る。

軍次　裏門番の松兵衞は、これに居るか。

金兵　唐橋大彌さまのお召し。

軍次　お尋ねなさるゝ、仔細あれば

二人　早々參れ。

ト兩人、松兵衞の手を取るを、振り放し

松兵　私しは裏門番を勤めますゆゑ、暫らくでも御門を明けて置く事がなりません。

軍次　でも、大彌さまのお召しぢやわい。

松兵　なんぼお家の叔父君でも、御門を明けては參られませぬ。

金兵　例へ參らぬと云うても

軍次　我れ〳〵が引立て行く。

兩人　サア、うせう。

ト兩人、無理に引立てるはずみに、松兵衞、ヒヨロヒヨロとして

松兵　死にますするわいなう。

ト頭を押へて見得、よろしく廻り道具。

造り物、二重舞臺、金襖。上手、折廻して障子屋體、橋がゝりの間、落ち間、柴垣あり、二重舞臺に、土岐之助、滿月、着附けの上に、浴衣、襷がけにて、待宵、秋篠、桂女、十六夜、いづれも傾城の形の上に

同じく浴衣、襷にて餅を取りゐる。平舞臺に岩平、
蟲賣り露八、餅を搗きゐる。この見得、砧の鳴り物
にて道具とまる。

土岐　サア／＼、餅が搗けたら、皆食うたがよい。

露八　我れらは、矢張り酒の方がようござります。

岩平　おらも酒がよいぞ。

土岐　成る程、そりや酒でなければ始まらねど、この間の
モヤ／＼から、暫らく遠慮せいとの事。元の起りは酒の
業ぢやによつて、酒を止められた。そこで餅搗きと出か
けたのぢや。また氣が替つてよいではないか。

女皆　アイ、さうでござんすわいなア。

露八　どうやら今の挨拶は、淨土寺へ法華宗が參つたやう
なものぢや。

皆々　とは、又どうして。

露八　ハテ、えらい宗旨違ひぢや。

皆々　ハヽヽ。

ト笑ふ。ト此うち、向うより大弼出る。金兵衞、軍次
團作、伴藏、いづれも衣裳上下にて附き添ひ出る。

金兵　アレ、見さつしやれ、いづれも。性懲りもなき若殿
の身持ち放埒。

軍次　遠慮のうち、酒を禁じられたとて、餅搗きのほたへ

團作　イヤモウ、取り所もなき儀でござる。

大弼　ハテサテ、よくござる。何事も某が胸中に。サア
いづれも、同道仕らう。

ト本舞臺へ來て、並よく並び

土岐之助さまには御遠慮のうち、御氣欝と存ぜしに、思
ひの外の御機嫌にて、大悦に存じまする。

土岐　ア、また唐橋が、けうとい顏で。折角面白いに興
が覺めた。

大弼　イカサマ、我れ／＼に心置きなく、また座敷を替へ
て御遊興遊ばされ、隨分ともにお疲れの出ませぬやう。

土岐　そんなら、奥へ行て、酒でなうて餅にせう。

皆々　サア、ござりませ。

ト唄になり、土岐之助、滿月、女形皆々入る。露八、
岩平も附いて入る。あと合ひ方。

四人　大弼さま。

軍次　その意を得ざるこの場の仕儀。矢張り、土岐之助ど
のに放埒を勸める、御所存でござりますか。

大弼　イヤ、全くさにあらず。表向き遠慮の土岐之助に酒
を禁じたれど、さのみ放埒とも申し難し。まこと放埒

馬鹿者に仕立て上げるは、兄右兵衛之助。この頃傾城の明石を寵愛のあまり、館へ呼び入れ、晝夜を分たぬ遊興。右兵衛が癖として、大酒を好みて心亂れ、近習、小姓を手討ちにする無道の行跡。今日、上使お入りのその座に於て、上使へ獻す杯にて、右兵衛に大酒させ、惡しき身持ちを上使へ見せなば、忽ち自滅は目前。

軍次　すりや、大殿を自滅させ

金兵　家督は土岐之助と定め

團作　これも同じく、放埒を云ひ立て

伴藏　當家の叔父君たる貴殿なれば、網干家は、ズル／＼ベッタリ。

大弼　ヤレ、音高し。いづれも、密かに。

ト皆々こなし。

荷擔の各々始め、近藤軍八にさへ、今まで隱せし親子の身の上。先年當家に亡ぼされし赤松の無念を受け繼ぎ、何卒、網干家を押領せんと窺ふ其うち、先殿の奥方に男子出生。産後の惱みに産家の騷ぎ、その頃、某が妾にも一人の男子を儲けしが、その紛れに幼な子を取替へ置き、先殿の落胤は人知れず害せん爲、阿波の金十郎と云ふ者を語らひ、彼れに渡し、當家の弟土岐之助どのは、某が實の胤でござるわい。

軍次　すりや、若殿は、貴殿の胤でござるか。

大弼　如何にも。

ト この前より、露八、柴垣の蔭に窺ふ。橋がゝりより岩平出て

岩平　大弼さま、これにお出でなされますか。仰せつけられた人丸の烏帽子、首尾よく騙り取らせました。

ト烏帽子を大弼に渡す。

大弼　出かした／＼。して、又、傳授の卷は如何いたした。

岩平　仰せつけられました傳授の卷も、盜み取りましたれど、この烏帽子の褒美の代りに、眼兵衛と云ふ者に預けました。

大弼　大切なる一卷、人手に渡し置かれぬ。褒美の金は、いつにても遣はさう。まだ其方に申し付ける役目がある。

岩平　下郎めにお役目とは。

大弼　別儀でもない。下郎の浪平め、騙し寄つて討取らば、その時は侍ひに取立て得さゝう。

岩平　ナニ、浪平を殺しなば、侍ひになされんとは、拙者とは戀の仇ある浪平、今のうちに討取りませう。

大弼　出かした岩平。必らず拔かるな。
岩平　心得ました。
ト橋がゝりへ入る。
軍次　浪平を殺せよと、仰せ付けられし貴殿の御所存は。
皆々　如何でござるな。
大弼　成る程、不審は尤も。下郎の浪平が面差し、先殿に寸分違はぬゆゑ、よく〳〵思ひ廻せば、金十郎に殺害せよと申し付け置いたれども、自然助け置いたるも計り難く、それゆゑ只今、岩平に云ひ含め、根を斷つて葉を枯らす手段。
皆々　イカサマ、こりや御尤も。
ト此うち、露八、始終を聞き取り、柴垣の蔭より差し足して行かうとするを、皆々、見付けて
大弼　町人待て。
皆々　そこ動くな。
ト大弼、露八をキッと見て
大弼　うぬはこの程、館へ出入りする商人ではないか。
露八　ハイ、左樣でござります。先日から參ります商人、フツと若殿の御意に叶ひ、屋敷へも出入りせいと、有り難いお詞に縋り、參りますも、商ひがしたいばつかり、最前からのお話し、一つも耳へ入りませねば、何も聞きは致しませぬ。どうぞお歸しなされて下さりませ。
大弼　ヤア、歸らうとて歸さうか。誰れかある。彼奴に繩をかけ、拷問せい。
ト橋がゝりより浪平、ハッと云ひつゝ走り出て、露八を引立てる。逃げようとするを、ちよつと立廻はりあつて見事に取つて押へ、手早く繩かける
浪平、出かした。其奴を嚴しく拷問せい。
露八　ア、、なんにも存じませぬ。どうぞお免し下されませ。
皆々　猶豫せずと早く拷問。
浪平　畏まりました。
ト嚴しくひしぐ。この見得にて、道具廻る
造り物、二重舞臺、見付け金襖。上手、中二階。下手とも折廻はし障子屋體。塗り骨、緞張り。爰にお須磨の方、中二階に机にかゝり、思案してゐる。この見得、琴唄にて道具とまる。
須磨　この頃、大内より勅諚賜はり、ほの〳〵の五文字の註解、この人丸の和歌は、古今集にあつて、石見の國へ

赴き給ふと名歌の心。それと定かに知られども、この程浦の月を眺め、心に浮みしほの〴〵の五文字、勅答申す筈なれども、家に傳はる餘材抄、歌道傳授の秘書の紛失ゆゑ、迂濶にそれとも申されず。ハテ、なんとしたものであらうなア。

トまた思案のこなし。此うち、見付けの襖を明け、關屋、衣裳裲襠にて出で、中二階の際に手を仕へ

關屋　奥様には、これにおわたりなされまするか。先頃より勅答の詮議ゆゑ、お心を痛め給ひ、さぞお疲れ遊ばされませう。

須磨　オヽ、關屋、日々の出勤大儀でござる。自らよりは其方の身の上、心を痛めてゐるやらうなう。其方の夫李之進、何者の仕業にや、垂水の松原に於て非業の最期と聞き、共に落涙しますわいな。

關屋　これは〳〵、奥様の有り難いお詞。御家督定め相濟みなば、敵討をお願ひ申し上げ、娘諸とも出立と、心構へは致しながら、世に便りなき親子の者、推量なされて下さりませ。

トちよつと憂ひのこなし。此うち、奥より磯浪、濱風、入江出て、平舞臺に手を突き

磯浪　ほんに、氣の毒なは關屋さまのお身の上。

濱風　お痛はしいは李之進さま。

入江　殺したは何者ぢややら知られども、憎い奴ではないかいな。

磯浪　イヤ、その殺し手よりも憎いは、あの傾城の明石とやら。お痛はしや、奥様の大事の〳〵殿様を寢取り

濱風　この程は、色と酒とに限りなく

入江　ありや、皆傾城がさす業にて、奥様につれなうあたりくさるわいな。

須磨　ア、コレ、そりや何を云やるぞいなア。其方達が口さがなう云やる事が、ひよつとわが夫のお耳に入りなば、自らが云はせると、蔑しみも恥かしい。悋氣は女の嗜なぬ事、必らず其やうな事、云はぬがよいぞや。

磯浪　でも、あんまり憎てらしい傾城づら。

須磨　アレ、まだ云やるかいなア。以後はキツと嗜なんだがよいぞや。

皆々　畏まりました。

ト關屋、こなしあつて

關屋　流石は、お殿様の御簾中、唐橋さまのお娘御ほどあつて、悋氣妬みも遊ばされず、それ程までに、お殿様を

大切に思し召す御貞節。明石どのとやらいふ傾城も、仇に思ひはさつしやるまい。それにつけ、わたしが存じ寄りまするは、廓の女郎は、多くの人の肌に觸れ、萬の情を知るものなれば、あなたが勅答のほの／＼の註解、膝とも談合とやら申す世の例もござりますれば、只今、この所へ呼び寄せ、問答を遊ばされましたらば、自然、勅答の便りとも、なる事があらうかと存じまする。

磯浪　成る程、關屋さま、そりや好いお思し召し。お傾城と奥様の問答で、閉口さすが、せめての腹癒せ。

兩人　こりや、よからうかいな。

須磨　ハテ、騒がしい女ども。自らへ勅諚ありし五文字の註解、餘人に談合したとあつては。

關屋　何も濟まぬ事はござりませぬ。マア、わたしにお任せなされて下さりませ。

ト見付けの襖の内より

滿月　お傾城の明石さん、連れまして行きやんせうわいな。

ト花やかなる合ひ方になり、滿月、衣裳襠裲、傾城の形。傾城明石、振り袖衣裳、襠裲。桂女、十六夜、待宵、秋空、皆々傾城の姿にて、明石に附き添ひ出る。

ト　お須磨の方、此うち眞中の二重舞臺へ下りる。關屋附き添ふ。明石、滿月よろしく並ぶ。平舞臺、上手に磯浪、濱風、入江並ぶ。各々よろしく座定まりて、お須磨の方、こなしあつて

須磨　さては其方が、殿様に思はれし、お傾城の明石どのか。自らは右兵衛が妻、須磨の方といふもの、この後は互ひに、心置きなう、睦まじく頼みまする。

明石　これはマア、御勿體ない奥様のお詞。賤しいこの身で殿様の、お側を穢し參らす段、さぞかし、お憎しみもあらうかと、冥加恐ろしう存じまする。

關屋　ハテ、殿様の御酒宴のお相手ならば、例へ幾百人の傾城達を招かるゝとも、妬み給ふ奥様ならず。その事はちつとも遠慮せぬがよいぞや。

滿月　流石は御家老様に連れ添はされし御身。よしなのお執成しは嬉しうござんす。そしてマア、明石さんを、呼ばしやんしたは、なんの御用でござんすえ。

ト關屋、よろしくあつて

關屋　イヤ、その儀は別でもござらぬ。定めて屋敷の噂にも聞いてゐやらう。先頃、禁廷よりお勅使御下向遊ばされ、當國に宮居まします人丸の神詠、ほの／＼と、明石

の浦の朝霧に、島かくれゆく舟おしぞ思ふと云ふ、この歌の初めの五文字、ほの〴〵と云へるは卽ち、人丸の神詠にして、和歌にも、みだりに讀み出づる事を禁じ給ひ、世々の先達も、ほの〴〵の說、まち〳〵にして、未だ治定なさゞるところ、當今樣、歌道の極意を探り給ふにつき、ほの〴〵の神秘を、この綱干家より註解して、叡覽に供へよとの勅定。然れども、一家中に誰れあつて、勅答申す人もあらざるゆゑ、これなる奥樣、是非勅答申し奉るに極まれども、未だそれとの治定もなし。さるによつて、其方衆は萬の事に物馴れし身の上なれば、もしや思ひ當りし事あらば、心の隔てなく、上の五文字の註解がしてもらひたさに、招いだのぢやわいな。

トこの時、磯浪、ツカ〳〵と出て

磯浪　ア、、これしきの事に、大勢の傾城達を呼び寄せ、それまでもない。ほの〴〵の註とあるからは、ほの〴〵は夜明け、註は鼠の事でないかいなア。

腰替　また磯浪どの、嗜なましやんせいな。

磯浪　わしや又、さうかと思ふ。

ト笑ふ。此うち滿月、こなしあつて

滿月　イヤ、申し、閼屋さまとやら。お歷々の奥樣はじめあなたは卽ち、御家老の御內室。そのお歷々が打寄つてさへ、判斷のならぬ五文字の註を、元より賤しい君傾城に、相談なされう筈はない。この滿月が存じまするは、こりや大方、お前樣方が打寄つて、爰に居さんす明石さんへ、難題を云ひかけて、もしや、その五文字の註解が首尾よく出來たらば、その旨を勅諚して、奥樣のお手柄とし、また明石さんに、和歌の心得が無い時は、大勢寄つて物笑ひとし、耻をかゝせて殿樣の御前を遠ざけんといふ、お前方の企み事でござんせうがな。

閼屋　ア、コレ、滿月どのとやら。そりや、こなさんの氣の廻り。ほんに遊女といふものは、多くの人に肌觸れて、形に似合はぬ、心のさもしいものぢやなア。

滿月　ホヽ、こりやをかしい事を聞くわいな。傾城遊女が形は作れど、心はさもしいと仰しやれど、丁度いま論ずる歌も同じ事。形は作つても、肝心の心が實でない時は、名歌とは云ひませぬ。

閼屋　そんなら、其方衆のかざる姿も

滿月　お前の仰しやる心も

閼屋　實と

滿月　實を

二人　比べて見せう。

ト兩人、キッと云ふ。明石は始終、氣の毒なるこなしにて、滿月が立つて行かうとする裲襠の裾を留めるな、ちよつと振り切る。此うち、お須磨の方も、心意氣あり、滿月よろしくあつて、兩人、平舞臺の眞中へ直り、座定まる。東西の傾城方、腰元、各々よろしくこなしあるべし。

關屋　それ、古今集の序に、人の心を種とする、本歌を詠ずるに、横しま非道を差挾まば、猛き武士の心をも、目に見えぬ鬼神をも、おどせしむる事となるべきか。

滿月　サア、そこでござんすわいな。なんぼ、武家の奧様が、賢女顏なされても、お心がむさい。アイ、心がさもしい。多くの人に肌觸れても、姿形ばかりを作るを、誠の全盛とは云はれませぬ。わたし等が苦界の勤めも、定家卿の敎への如く、和歌に師なし、心を以て師とせよとあり、憂き身の樣こそ賤しくとも、實の心を立て通さば、どのやうな名歌でも、詠みおほせまいでもござりませぬ。

關屋　すりや、賤しい身でも、敷島の道も心得しとな。

滿月　アイ、昔より遊女の名歌は、世々の集にも多く選ばれ、家集さへござんすぢやないかいな。

關屋　ヤア。

滿月　サア、關屋さまとやら、批判があらば答へさんせ。

關屋　サア、それは。

滿月　サア。

關屋　サア。

滿月　サア。

關屋　サア

滿月　サア／＼／＼、なんとでござんす。

トこれにて關屋、行き詰まり、少し扣へる。滿月、こなしあつて

眞實誠を表にして、色を商ふ室の津の傾城、滿月でござんす。明石さんの名代なら、いつでもアイ、わたしを呼んで下さんせ。

トきつと云ひ、そろ／＼と二重舞臺へ上がり。

サア、明石さん。

ト手を取る。ト明石、矢張り氣の毒なるこなしにて、お須磨の方へ挨拶する。滿月、澄[illegible]てる。

傾皆　ござんせいな。

ト唄になり、滿月、明石、その外の傾城皆々よろしく

あつて奥へ入る。始終、關屋、無念のこなしにて、よき時分、スツと立つて行かうとするを、お須磨の方、留めて

須磨　關屋、待ちや。

關屋　でも。

須磨　こりや、血相していづくへ行きやる。定めて今の遺恨を晴らさんと、傾城達と爭はゞ、これも、矢ツ張り自らが、させる業と思はせて、恥に恥を重ねさすか。

關屋　イヽヤ、全く。

須磨　さうでなくば、此まゝにして。

關屋　でも。

須磨　自らが詞を背きやるか。

關屋　全く左様ではござりませぬ。

須磨　最早、爰に用事は無い。次へ立ちや。

關屋　ハイ。

トもぢ／＼する。

須磨　腰元どもゝ、次へ立ちや。

腰元　ハイ

ト同じく、モヂ／＼する。

須磨　サア、早う。

皆々　畏まりました。

ト合ひ方になり、關屋、腰元、皆々奥へ入る。礒浪も、モヂ／＼して、あたりを見廻し、最前の松兵衛の状を、お須磨の方の側にソツと置き、ツイと奥へ入る。後にお須磨の方、こなしあつて

須磨　いま傾城達のさがない詞、殿樣の日頃に似合はせ給はぬ御身持ち。妬みもするやうに云ひほぐされ、思はぬ恥を取る事ぢやなア。まだそれよりは、大切な勅答の註解、この役目を仕損じなば、自らのみか、お家の恥辱、と云うて、家の秘書、餘材集が無ければ、何に便りて五文字の註解。諦らめる事もならず、ハテ、なんとしたものであらうぞ。

トいろ／＼思案のうち、中二階に大弼、窺ひ、立ち聞きする事あつて、よき時分に

大弼　その註解、身共がさしてやらう。

トお須磨の方、恟りして大弼の顔を見て

須磨　お前は父樣。

大弼　コリヤ。

ト押へる。合ひ方になり、大弼、あたりを窺ひ、いろいろあつて、中二階を下り、お須磨の方の側に寄り

娘、ア、われは不便な者ぢやなア。

須磨　エ、、なんと仰しやる。

ト不思議さうにする

大弼　されば の事。其方が頼みに思ふ右兵衛は、室の津の傾城、明石を寵愛のあまり、館へ呼び寄せ、晝夜の遊興、身持ち放埒。彼れの癖として、酒に正氣を奪はれて、近習小姓を手討ちにすること數知れず。それのみならず、鎌倉へ參覲して、網干の家名を受け繼ぎなば、寵愛の明石を、當家の簾中となし、侍づかせん彼れが胸中。なんと腹が立たうがな。

トきつと云ふ。

須磨　これは又、父様の仰せとも存じませぬ。殿様に限り、其やうな情ないお心はござりませぬ。

大弼　ア、、親の心子知らずと云ふ下世話の譬へ。其方は傾城明石に、夫を寢取られても大事ないか。

須磨　そりやモウ、諸侯に七人の妻は定まり。

大弼　ハテ、いらざる賢女立てに油斷して、明石を簾中に立てん爲、殺害せらるゝ所存か。

須磨　なんと御意なされます。

大弼　右兵衛が心を亂さす女どもが手段に乘り、淺ましき死をせんよりは、速かに離縁いたせ。

須磨　エ、。

大弼　ハテ、此方から暇を取つて、その身を全うするが、この親への大孝行。

トお須磨の方、いろ／＼心意氣あつて

須磨　成る程、合點が參りました。イカサマ、暇を取りませう。

大弼　すりや、得心がいたか。

須磨　隨分、暇を取りませうが、今というては。

大弼　そりや又なぜに。

須磨　その儀はあなたも御存じの通り、禁廷より勅諚下りて、ほの／＼の註解、殿様より自らへ仰せ付けられしところ、家の傳書紛失ゆゑ、今に心を苦しめ居りまする。この事も果さず、此方から暇を取らば、歌の道に暗きゆゑ、五文字の註解が出來ぬゆゑ、是非なく暇を取りしと殿様の思し召し、傾城達の物笑ひも恥かしく、註解を仕負ふせたら、その時こそは暇を願ひ。

ト大弼、心に領づき、あたりを見廻し、懷中より、袱紗包みの秘書を取出し、お須磨の方に渡し

大弼　早く勅諚の註解いたせ。

ト お須磨の方、不思議さうに見て
須磨　これは。
大弼　定家の傳書、餘材抄。
須磨　エ、。
ト恟りして
そんなら、これが餘材抄とな。
トこなしあつて
これがどうして、あなたの手に。
ト大弼、こなしあつて
大弼　斯樣の事もあらんかと、かねて岩平に申し付け、盜ませ置きしが計らずも、我が娘の役に立つて、先づは安堵。片時も早く勅答して、親の詞に任せ、右兵衞と離緣いたせ。
須磨　畏まりました。
大弼　そんなら娘。
須磨　父樣。
大弼　首尾よく致せ。
ト唄になり、大弼よろしく心意氣あつて、奧へ入る。あと合ひ方。お須磨の方、いろ／＼こなしあつて。
須磨　エ、、恨めしい殿樣。自らは露聊かも恨む心なく、お心に叶ひしものなら、いつまでも御寵愛あれかしと思ふに、何科あつて自らを、殺さんとは思し召す。エ、、聞えませぬ。つれないお心でござりますなア。
ト泣く。この時、最前磯浪が落し置いた狀を見て、不思議さうな顏して、ソロ／＼と歩み、右の狀を取上げて見て
お須磨の方さまへ、浦の松より。
ト讀み、合點のゆかぬこなしにて、膝を叩き
浦の松とは、あの裏門の松兵衞とやらいふ老人、この程月見の折から供に連れし者なるが、その外に差當つて覺えもなし。又あの老人が、何用あつて自らへ、文を送りし事なるぞ。合點のゆかぬ。何にもせよ。
ト心得ぬこなしにて、封じを解き、文を開き、見て恟り。
ヤア、こりやコレ自らへ、戀を仕掛ける艶書の文體。
ト腹の立つやうにて段々讀み
エ、、門番づれ、下郎の身で、艶書を送るも、これも矢ツ張り殿樣がつれないゆゑ、下郎までに侮らるゝか。エエ、腹の立つ下郎め。恨めしいは殿樣。
トきつとなつて、泣き落し、また不思議さうに、狀の

末の方を讀み、合點の行かぬ心意氣にて、向うをキッと見る。この模樣よろしく、道具廻る。

造り物、以前の二重舞臺、金襖にて、大弼、軍次、金兵衞、伴藏、團作、並よく並びゐる。平舞臺、よき所に浪平、露八を責めてゐる。以前の返しの模樣にて道具とまる。

大弼　すりや、先刻より未だ、白狀を致さぬとな。

浪平　イヤモウ、斯樣に手ひどく責めますれど、何も存ぜぬ〳〵とばかり。ハテサテ、死太い奴でござります。

露八　サア、どのやうに仰しやりましても、知らぬが定でござります。どうぞお歸しなされて下さりませ。

侍四　やがて御上使のお入りとござります。

大弼　ナニ、御上使は、最早當地へお着きとな。いづれも、麁相なきやう、心を付けられよ。

四人　畏まりました。

浪平　サア、町人め、白狀ひろげ。

ト手嚴しく責める。此うち、バタ〳〵にて向うより上下の侍ひ、走り出で、花道よき所にて、

侍ひ　ハツ、申し上げます。最早御上使の御入りとござります。

ト云ひ捨て入る。

浪平　サア、白狀ひろげ。

トまた向うより、バタ〳〵。上下の侍ひ出で、同じくよき所にて

侍ひ　最早御上使、御門前まで、お入りでござります。

大弼　ナニ、御上使には、最早門前へお出でとな。

侍四　早くお出迎ひ。

侍ひ　ハア。

ト走り入る。本舞臺の人數皆々よろしくあつて、又バタバタにて、向うより上下の侍ひ走り出で。

侍ひ　御上使の御供、大勢御門前に扣へゐられ、最早御上使には、お館へ御入りあつたとの儀でござります。

ト皆々愕りして

皆々　何かなんと。

大惘　エ、、狼狽へ者、何を云ふ。とくと門前の樣子を見て參れ。

侍ひ　ハツ。

ト走り入る。此うち本舞臺の人數よろしくある。又バタバタにて、上下の侍ひ三人、一時に走り出で

侍ひ　上使の御家來に段々尋ねましたところ、矢張り疾より御入りなれば、館の內を末々まで、吟味せよとの儀でございます。

大弼　ナニ、館の內を末々まで吟味せよとは、ハテ、合點のゆかぬ。

浪平　疾より上使には、御入りとあれば。

侍皆　もしや、この蟲賣りが。

大弼　御上使さまではあるまいか。

ト皆々、訝かしきこなし。よき時分に、露八、こなしあつて、繩を引ッ切り、キッとなつて

露八　家中の者、さぞ合點がゆくまい。鎌倉よりの上使、松倉內記、疾より當地に着いたした。

皆々　ヤア。

ト悃りする。

內記　家來、大小。

侍ひ　ハア。

ト上下の侍ひ、大小を差出す。露八、こなしあつて、二重舞臺へ直る。此うち皆々、敗亡して、平舞臺へ下り、平伏する。土岐之助も出で、いづれも座定まる。

土岐　鎌倉よりの御上使とあつて、遠路の御光駕。

大弼　殊に我れ〳〵が、先刻よりの無禮の段々。

土岐　たゞ幾重にも、御宥免の程を

皆々　偏へに願ひ奉る。

ト皆々平伏する。露八の內記、こなしあつて

內記　當網干家の家風よろしからざる趣き、鎌倉管領に相聞えしゆゑ、この度、家督定めの上使を承はる、この松倉內記。先日より密かに當國に參り、一家中の善惡は云ふに及はず、兄右兵衞之助、弟土岐之助兩人が身持ちまで、詳しく存じ罷りあれば、いま改めて云ふに及ばず。イザ、家督定めの舊例に任せ、人丸の烏帽子、歌道傳授の秘書、國次の刀、早々內見いたさう。

トきつと云ふ。土岐之助、大弼こなしあつて

大弼　成る程、網干家の重寶三品の寶、家督定めの節、御上使の御內見に入れ、鎌倉へ持參あるが古例なれども、御覽の如く、兄右兵衞、所勞と僞はり引籠り、傾城明石を寵愛のあまり、晝夜を分たぬ酒宴遊興に、連綿たる網干の家風を失ひ、剰さへ、上使內見に入れ奉るべき寶は、悉く紛失。

軍次　その詮議いたさうともせず

金兵　傾城のみに心を移し

伴藏　イヤモウ、かゝつた事ではござりませぬ。
內記　すりや、某が見聞せし如く、家の寶も其のまゝに。
大弼　打捨て置いたる右兵衞之助が行跡。
皆々　誠に他愛はござりませぬ。
　ト花道の戸屋の內より
右兵　寶詮議の申し譯、右兵衞之助、それへ參つて御上使
に對面せん。
　ト序の舞になり、向うより右兵衞之助、長上下、近習
小姓引連れ出て、花道よき所にて一禮、よろしくあつ
て二重舞臺、下座の方にゐる。各々よろしくある。
右兵　先刻より次の間に差扣へ、樣子は殘らず承知仕る。
御上使には、先月より當國へ御下向あつて、網干の家風、
家中の善惡、殘らず御覽の上は、今さら申し上ぐるに及
ばず。まつた某、先頃より奧殿に引籠り、傾城を呼び寄
せ、酒宴に長ずる體に見せたるは、深き仔細のある事。
この場に於て、具には申し上げ難し。何はともあれ、家
督定めの砌り、內見に供へる人丸の烏帽子、傳授の歌書、
國次の刀、紛失などゝは跡方もなき事。奧殿に於て御覽
に入れ奉りませう。
軍次　すりや、三品の寶別條なく
大弼　酒宴と見せしも僞はりとな。
右兵　ハテ、叔父御どの、御心配でござつたなア。
　ト詰るやうに云ふ。皆々合點のゆかぬこなし。
大弼　三品の寶、紛失と思ひの外、別條なきは先づ安堵。
然らば、當家の古例の如く、御上使のお杯、早く用意い
たせ。
　ト內より小姓の聲。
小姓　ハア、
　ト三方に大杯、長柄の銚子持ち出で、內記と右兵衞
之助の間に直す。大弼こなしあつて
大弼　他門にては、家督定めのお杯、御上使より戴くが法
なれども、この網干家に限りて、家督主より御上使へ
奉る古例なれば、右兵衞之助どの、杯を取上げ召され。
右兵　成る程、家風はさる事なれども、第一、御上使への
無禮と云ひ、殊に某、一つの癖あつて、酒氣に乘じ、心
變るゆゑ、堅く嗜なみ罷りあれば、先づ御上使、一獻召
上がり下されませう。
大弼　ア、イヤ〳〵、それでは古例が違ひますぞや。
內記　イカサマ、酒に惡しき癖ある事、聖人もこれを誡し
め給ふとは云ひながら、家風ももだし難し。

大弼　家の古例が相違しては、下々の政道立たず。
軍次　いつは兎もあれ、今日は
伴蔵　是非々々お取上げ
敵皆　遊ばされませう。
大弼　ソレ、伴蔵、お酌いたされよ。
伴蔵　畏まりました。
ト二重舞臺へ上がり、三方の杯を右兵衞之助の前に直す。右兵衞之助こなしあつて
右兵　然らば、家風の如く杯を試みます。御上使失禮の段、御免下さりませう。
ト杯を戴く。伴蔵、銚子を取つて酌する。大弼、氣を焦ちて
大弼　いつは兎もあれ、見事に召上がられませう。
ト皆々勸める。右兵衞之助、大杯にて見事に飲み干し、こなしあつて、伴蔵を見事にポンと切つて、その身も正氣を失ふ模様にて、ウンとこける。皆々よろしくある。内記もこなしあつて
内記　ハテ、聞きしにまさる癖ある酒。その身もこれを愼みても、家風とあれば力なし。酒氣散じなば亂心も納まらん。暫時の容赦は致しくれう。
土岐　すりや、御上使のお情にて
浪平　御容赦下さりまするとな。
大弼　御上使様には、暫しの間、奥殿へ御入りあつて
土岐　ゆる／＼御休息下さりませう。
内記　いづれも案内。
皆々　まづ、お入りあられませう。
ト太鼓謠ひにて、内記、土岐之助、大弼、軍次、團作、金兵衞、皆々奥へ入る。後に浪平残り、いろ／＼こなしあつて、銚子に紙を當て、右兵衞に枕をさせ、あたりに心を配る模様あつて
浪平　ドリヤ、部屋へ行かうか、
ト橋がゝりへ入る。ト團作、軍次、奥より窺ひ出で、兩人ちよつと囁き、右兵衞之助の側へさし足して兩人、一時に切らうとする。ト右兵衞之助、刎ねかへし、ポンポンと見事に兩人を切る。ト橋がゝりより浪平、走り出で、手水鉢の水にて右兵衞之助の血刀へ水を流し、手拭にて見事に拭く。この間、兩人とも始終無言にてよろしくあるべし。此うち岩平窺ひ出て、右兵衞之助に切りかゝるを、ちよつと立廻り、見事に平舞臺へ投げると、岩平また、切らうとするを、浪平、立廻りに

て、岩平を見事に取つて押へる。

右兵　詮議ある奴、殺害いたすな。

浪平　ハツ。

ト早縄かける。この見得よろしく道具廻る。

造り物、蓮明きの裏門の體。松兵衞、以前のまゝ倒れ居るを、磯浪呼び活け、介抱してゐる。この模樣にて道具とまる。

磯浪　コレ、松兵衞どのいなう〳〵。

ト磯浪いろ〳〵あつて

松兵　オヽ、お腰元樣か。そして、お返事がござりましたかな。

ト呼び生けると、松兵衞、氣の付いたこなしあつて

磯浪　イヤヽ、まだお返事はないわいな。

ト磯浪、氣の毒さうに

松兵　どうで此やうな下郎めが文、お取上げはなさりはせまい。アヽ、そんな事なら、最前から呼び生けずに、殺さつしやつて下さりましたがようござります。

磯浪　エヽ、この人は、滅相な事云ふわいなう。あのまゝで置いたら、死にやるであらうと思うて、それでわしが、呼び生けたのぢや。禮は云やらいで、却つてねだると云ふ事があるものかいなア。

ト少しねだるやうに云ふ。

松兵　成る程、こりやお前樣が御尤もでござります。ほんに、深切になされて下さりましたお前樣。この親仁も、この體では、どうで本腹も致しますまい。アノ向うにある唐辛子も、お前樣の御好物ゆゑ、わたしが形見に上げませう。持つてお歸り下さりませ。

ト哀れさうに云ふ。磯浪、こなしあつて

磯浪　アヽ、其やうな事はよしにして下さんせ。そしてマア、氣の弱い、なんのこれ程の事に、死ぬるものかいなア。藥を飮んで、早う、ようなつたがよいわいなう。

松兵　イヤヽ、もう病が癒つたとて、生き甲斐もないこの體。

磯浪　また其やうな事を云やる。コレ〳〵、今の間に、好い返事がある筈ぢやわいなア。

松兵　エヽ、なんと仰しやる。お返事をやらうと仰しやつてゞござりますか。

磯浪　オヽ、後方、お返事があるわいの。

松兵　アノ、お返事を下さりますか。アヽ、嬉しや、どうか。

ト胸を押へ

爰がよくなりました。

ト喜ぶ。此うち臆病口を見て、磯浪、悄りして

磯浪　南無三、見附けられたら悪い。

トいろ／＼うろたへる事ある。松兵衛も共にウロ／＼する。磯浪、二枚折りの枕屏風を取つて、橋がゝりの方へ持ち行き、姿を隠し、蹲まる。トよき時分、臆病口より關屋出で

關屋　裏門番の松兵衛といふは、其方の事か。

松兵　ハイ／＼、門番の松兵衛は、この親仁めでござります。

關屋　奥様のお返事。

ト松兵衛、悄りして

松兵　ナニ、奥様のお返事がござりましたか。

ト喜ぶこなし。關屋、狀を出し

關屋　この文は、其方の手跡であらうがな。

ト松兵衛に見せる。悄りして

松兵　ハイ。

ト手をモヂ／＼する。

關屋　其方こと、殿様より切り米頂戴して、御門の番を承り、大恩ある主人の奥方へ、艶書を送る段、身の程を知らざると云ひ、殊に年にも似合はぬ不屆き者、定めてこの文、取次ぎせし者あらん。なれども表立つて詮議をなさば、世上の聞え、網干の家風よろしからずと、思はれんもうたてしく、此まゝ穏便に差許す間、以後はキツと愼しんでよからう。

トきつと云ふ。松兵衛、悄り。磯浪も氣味悪さうにする。關屋、艶書を松兵衛に渡し、ツイと入る。磯浪、ソロ／＼出て、胸を撫で

磯浪　大方、こんな事であらうと思うた。全體マア、よい年をして、あらう事か、奥様へ附け文するといふは。みなお前の誤まり、また取次ぎしたわたしも麁相ぢや。すんでの事に、お暇が出やうも知れぬ。ヤレ／＼、恐ろしや／＼。

ト云ひ／＼、松兵衛の知らぬやうに、鉢植ゑの唐辛子を取つて懐中へ入れる。松兵衛、狀を取上げ、恨めしさうにする事、いろ／＼あつて、また不思議さうに見て

松兵　奥様より戻されしこの狀、おれが紙とは違うてある。封じ目も斯うではなかつた。

ト奇しき心意氣、いろ〳〵あつて、ツツと封じた解き、狀を見て

ヤア、こりや中には女の手跡。

ト開き

奥樣のお返事。

ト悔りして喜ぶ。磯浪、悔りして

磯浪　ナニ、お返事があつたかや。

ト松兵衞、口の内にて狀を讀む事、いろ〳〵あるうち、嬉しき心意氣あつて

松兵　そんなら今宵、奥庭まで、忍んで來いとある、このお文。

ト磯浪、狀の端を見て

磯浪　ほんに、奥樣の御返事ぢや。

ト松兵衞、嬉しき顏つきにて、手を合せ、向うを拜む。磯浪も思はず拜む。此はずみに唐辛子、バラ〳〵溢れるを、磯浪、悔りして拾ふ。松兵衞、この途端よろしく道具廻る。

造り舞臺、一面高二重、白木造りの御殿。西折廻りし屋體一面の金襖。欄間通り一面の簾。但し東西は下がりあり、庭に一面の萩の花見事に咲きあり、すべて、網干家奥庭の模樣。高二重の正面に、お須磨の方、衣裳襠裲にて、腰元二人附添ふ。琴一面直しあり、この見得、靜かなる琴唄にて道具とまる。

須磨　自らは琴の調べに、秋の夜すがら、憂さを慰めん。其方衆は、次へ立つて休息しや。

腰元　畏まりました。

ト正面の簾下りる。ト直ぐに靜かなる琴唄になる。かすかに蟲の音、物淋しき模樣よろしくある。ト向うより松兵衞、頰かむりして一本差し、弓の折れを腰に差し、そろ〳〵と出て、あたりを窺ひ見廻す事、いろいろあつて、蹴爪づき、ドッコイととまり、顫ふ模樣。

松兵　エ、、今夜に限つて、この胴慄ひ。ツイに來た事ない奥のお庭。

トあたりを見る事、いろ〳〵あつて

大方、あそこが奥樣のお座敷さうな。あの琴の音。

トそろ〳〵踏み段の側へ探り寄り、上がらうとする。

ト内より

右兵　誰れぢや〳〵。

ト聲かけるうち、正面の簾上がると、右兵衞之助、着

附け袴にて手燭を袖に隠しゐる。松兵衛、悧りして、逃げようとする。此うち腰元二人、臆病口より走り出で

腰元　捕つた。

ト松兵衛に縄かけ、下座の方へ扣へる。

右兵　女ども、出かした。

腰元　侍ひ衆に申し付けませうかな。

右兵　イヤ、それには及ばぬ。身共が手討ちに致す。必らず、家中へ沙汰いたすな。

腰元　畏まりました。

右兵　行け／＼。

腰元　ハツ。

ト腰元二人、臆病口へ入る。右兵衛之助よろしくあつて、駒下駄を履き、平舞臺へ下り、手燭にて松兵衛の顔を見て、いろ／＼こなし。

右兵　そちや、門番の松兵衛よな。

松兵　ハイ。

ト慄うてゐる。

右兵　その身の科は云ふに及ばず、覺悟よくば、手討ちに致す。それへ直れ。

松兵　ハイ。

ト慄へ／＼、平舞臺、正面よき所へ直る。右兵衛之助こなしあつて、手燭を前に置き、刀をスラリと拔き、縄目を切る。これまで始終、松兵衛、右兵衛之助の顔を見て。

これは。

ト不思議さうに云ふ。右兵衛之助、重籐の弓の折れを差出す。

右兵　この品、心覺えがあるか。

ト松兵衛、取つて悧りして

松兵　どうして、これをあなたが御所持。

右兵　親仁様。

松兵　ヤア、なんと。

右兵　お懐かしう存じます。

ト篠入りの合ひ方になり、兩人よろしくあつて

松兵　憚り多い事ながら、この親こそは、其方様のお身の上、知る筈なれども、其許さまは、どうして證據のこの弓を。

ト不思議さうに云ふ。右兵衛之助よろしくあつて

右兵　成る程、御不審は尤も。先日、他行の折から、裏門

より歸館せしに、番小屋の内に重籐の弓を掛け置きしを、合點ゆかずと、よく〳〵見れば、三つに折れたるその片片。さては我が所持なす弓の折れに、變らぬ重籐を掛け置く、主が年配まで、符節を合はす實の父と、推量はしながらも、いま當國の主と呼ばるゝこの右兵衛之助、迂濶に親子の名乘りもならず、如何はせんと思ふ折、幸ひ奥への艶書の筆、我が臍の緒と年月は隔つれども、紛ふ方なき同筆なるゆゑ、さては我が推量に違はじと、年月焦るゝ實父のお顏、拜みたくは思へども、それさへ明らさまには申し出し難く、奥に云ひつけ、返事を書かせ、今宵この奥庭へお忍びを待ちうけ、飛び立つばかりの心を鎭め、腰元どもに繩を掛けさせ、それのみならず某が、殺害なす體に見せかけしは、計略とは云ひながら、現在の實父へ、刃を振り上げし不孝の段々、幾重にも御容赦下され。親仁さま、お懐かしうござります。

ト取りつき泣く。松兵衛も大泣きにて、腰より重籐の弓の折れを出し

松兵　ハア、流石は網干家のお殿様、素性こそ賤しけれども、氏より育ちと明智の程を感心しました。思ひ廻せば廿餘年の昔語り、一通り聞いてたべ。某が本名は、淺羽久之進といふ武士なるが、若年の頃、武藝を勵み、その頃、射術の達人と呼ばるゝ、弓削の某といへる人の門人となりしが、フト師弓削どのゝ息女勝野と云へるに契りをこめ、一夜が二夜と度重なり、遂に師匠の耳に入るより、物堅き弓削どの、兩人が不義を憤りたまひ、有り合ふ重籐の弓を以て、某と勝野どのを散々に打ち給ひしが、さしもに強き重籐も、三つにホツキと折れたるを、親の形見、師匠の賜物と、所持して本國を立出で、紀の國那智山の麓、清水村といふに、ちとの由縁あれば、勘當の身の夫婦が侘び住み、月日を送るうちに、勝野が平産なせしは、淺ましや双子の男子。世間の人の手前も恥かしくと、兄松太郎は夫婦の仲に養育なし、弟の曾根太郎といふは、コレ、あなた様の幼名。人知れず捨て置きしを、幸ひなるかな、御當家の先殿、願望あつて熊野權現へ參詣ましまし、幼な子の泣き聲を聞きつけ給ひ、これこそ權現より授け給ふ、我が國郡の主なりと、大いに喜びたまひ、連れ歸り給ふ。始終の樣子をとくと見屆け立歸り、勝野にも右の樣子を話しければ、彼れも安堵なし、その後、仕官の望みあつて鎌倉へ志し、親子三人清水村を立出で、東海道へ赴むく旅宿、その夜俄かに大地

震に、所の騷ぎ大方ならず、案内は知らねども逃げ出し、親子は散り〳〵。夜明けて勝野、松太郎を尋ね探せど、かいくれに行くへ知れず、生死の程も心ならず、尋ね侘びたる廿餘年の其うちには、この如く、次第に積る老の悲しさ。世に便りなう思ふにつけ、行くへの知れぬ妻子の事は是非もなし、せめては在所の知れてある曾根太郎、今生の思ひ出に、一目逢うて死にたいと、このお國へ下りしかど、我が子ながらも、今では網干の惣領と侍くあなた樣、迂濶に親子の名乘りもならねば、緣を求めて、裏門番の奉公に入込み居れば、お目に止まることもあらうかと、長押に掛け置く重籐の弓の折れは、あなたにも所持ある筈と、思ふに違はず今宵の對面、よう顏見せて下さりました。

ト取りつき泣く。此うち、高二重の簾、一面に卷き上がる。正面にお須磨の方、上手の屋體には大弼、下手の屋體には內記、但し、衣裳上下にて兩人の樣子を窺ひ、立ち聞きしてゐる模樣。よき所にて、簾一面に下りる。右兵衛之助、憂ひの模樣、いろ〳〵あつて

右兵　成る程、我が身は當國へ拾はれ、養ひ子となり、殊に大恩ある養父先殿、臨終の御遺言にて、詳しく聞く。その時賜はりし重籐の弓の折れ、實父が自筆のこの臍の緒、心ありげに弓の折れを添へあるからは、賤しき者の胤にもあるまじ、心を付けて實父に巡り逢ふべしと、殘る方なき今際のお詞。思ひ當りしあなた樣は、紛ふ方なき我が實父。

松兵　違はぬあなたが、我が子の曾根太郎。

右兵　後の證據の弓の折れ

松兵　しつくり合うた

ト弓を合はして見て

本はづ。

右兵　末はづ。

松兵　親子の緣は重籐の

右兵　弓は折れても再びに

松兵　巡り逢うたるこの嬉しさ。

右兵　親人樣。

松兵　お悴樣。

右兵　ようマア無事で

二人　ござりましたなア

ト兩人、手を取り、右兵衛之助は松兵衛を上座へ直し、その身をへり下る。この模樣、いろ〳〵拍子よろしく

あつて、ト、兩人、泣き落しになる。

松兵　ア、、嬉しや、我が身の望み達したれば、この世に心殘らぬ老人。サア、スツパリと、お手討になされて下さりませ。

右兵　ア、、勿體ない。親子の名乘りせし上にて、なんと刃が當てられう。

松兵　イヤサ、後の親を親とせよと、聖人の敎へ、あなたは一國一城の主、不義の科ある門番の松兵衞め、お手討になされて下さらねば、政道が立ちますまい。

右兵　うたてき武門に交はり身を立てんとて、現在の親を殺されうか。例へ如何なる貧しき暮らし、賤しき世渡りするとても、親子一緒に居るこそ樂しみ。武士を捨てれば、不義を咎むる政道もいらじ。

松兵　イヤ〳〵、長うも生きぬ老の身を捨てゝも、我が子に出世をさせるが本望。

右兵　この身の榮耀は望みにござらぬ。

松兵　イヤ、わしを殺して下され。

右兵　どう仰しやつても、この儀ばかりは。

松兵　ならずば、いつそ。

ト松兵衞、一本差しにて死なうとするを、右兵衞之助留めて

右兵　ア、、申し、早まつた事なされますな。

松兵　そんなら、得心して下さるか。

右兵　サア、その儀は。

松兵　サア。

右兵　サア。

松兵　サア。

右兵　サア。

二人　サア〳〵。

ト附け廻しになる。この前より、臆病口に大弼、窺ひ出で、この時

大弼　樣子は殘らず聞いた。さては、右兵衞之助は拾ひ子にて、實父といふは、松兵衞よな。下賤の者の胤、網干の家名は繼がされまい。

トきつと云ふ。奥より内記出て

内記　委細は聞いたが、して、家督繼ぐべき者は

ト大弼よろしくある。右兵衞之助、松兵衞、平舞臺によろしくあるべし。

大弼　外ではござらぬ。舍弟土岐之助へ、網干家相續の儀、仰せ下さらば、有り難うござります……サア〳〵、土岐

之助さま、用意よくば、家督定めの式、改めて御上使へお目見得なされませう。

ト内より

土岐　ハア、。

ト土岐之助、烏帽子、狩衣にて出で、平舞臺の上座へ直り

當家の重寶、人丸の烏帽子は、即ちこれに。

内記　して又、殘りの寶は。

ト内より

須磨　いま一品、差上げませう。

トお須磨の方、衣裳襠裲にて、三方に袱紗包みの歌書を持ち出で、平舞臺の下座に扣へる。

土岐　改めて御上使へ、一つのお願ひ。某が身持ち放埒ゆゑ、國次の刀、歌道の傳書、紛失いたせし申し譯は。

ト手早く肌を脱ぎ、腹を切る。大弼、恟りして

大弼　こりや、何ゆゑの御切腹。寶の申し譯なら、兄の右兵衛之助こそ、腹を切る筈。

内記　でも其方、只今、土岐之助へ家督相續と申したてはないか。

大弼　如何にも。

内記　さあらば、寶の紛失の科は、その身にかゝるゆゑ、速かに切腹せし段、出かした／＼。

土岐　ハア、、有り難きお詞。人丸の烏帽子、イザ、お受取り下さりませう。

トお須磨の方、土岐之助、烏帽子、歌書を一緒に三方に載せ、上使の前に直し、よろしく下座に扣へて

須磨　人丸の烏帽子、歌道の傳書、紛失の代り、家に傳はる餘材抄、お受取り下さりませう。

ト此うち、浪平、橋がゝりより出で

浪平　寶の盜賊、岩平が首、イザ御實檢

ト右兵衛之助の前に置く。

右兵　出かした浪平。

ト云ひ／＼、首桶の蓋を明け、岩平の生首を出す。

此奴が所爲にて、國次の刀、傳書の紛失。

内記　それなる土岐之助は、大弼、其方の悴であらうな。

ト大弼、恟りする。

先刻、何もかも聞き取りし上は、先殿の胤、實の土岐之助を尋ね出せよ。先づそれまでは、網干の家名は、右兵衛之助と定め、二品の寶、詮議のうち、百日の日延べ申し付ける間、寶揃はゞ、改めて鎌倉へ參勤いたせ。

右兵　畏まり奉りました。
　ト お須磨の方、よろしくあつて
須磨　我が身の惡名、申し譯は。
　ト 自害せうとする。松兵衞、止めて
松兵　その科人は、この親仁。
　ト 腹切る。右兵衞之助、悔り愁ひのこなし。此うち橋がゝりより關屋、臆病口より、娘おきよ、振り袖の形にて出で
きよ　お家の家督定まる上は、傾城の明石と見せし私しは、清水杢之進が娘おきよ。
關屋　殿樣より、內意の御用勤めし上は、何卒、夫の敵討、出立のお願ひ。
右兵　成る程、殊におきよには、云ひ號けもある筈、巡り逢うて、助太刀を頼めよ。
二人　エヽ、有り難い。
　ト おきよ、關屋兩人、拜む。
大弼　たとへ助太刀あるとても、この敵は知れまい。何を證據に敵の實名。
　ト 內記、よろしくあつて
內記　先達て、渡し置いたる割り笄は、慥かに敵の手がかりぢやぞよ。
關屋　御上使さまの御賜物。
きよ　亂獅子に牡丹唐草の割り笄。
二人　尋ね出して、お目にかけませう。
　ト これにて、大弼、ギックリする。土岐之助、懷中より扇子を出し
土岐　コリヤ、浪平、其方は、これより實の土岐之助どのを尋ね出せよ。又、この一品は、相州箱根の邊にて、小割傳內と云ふ者を尋ね、我が最後の樣子を語り、形見の扇子を渡してくれよ。
　ト 浪平、ツカ〳〵と行き、扇子を受取り、下座へ扣へる。
浪平　畏まりました。
須磨　我が身も、これより諸國をば、修業の旅の出立して、實の在所、二つには、實の弟土岐之助が、菩提を弔らふが、せめて姉の役。
土岐　エヽ、嬉しうござります。いづれも、さらば。
　ト 引き廻し、バッタリとこける。お須磨の方、愁ひのこなし。大弼、心意氣ある。
松兵　我れも追ツつけ、死出の道連れ。

ト同じく引き廻す。此うち、金兵衛・窺ひ出て

金兵　うぬ。

ト右兵衛之助に切りかけるを、見事にポンと切る。皆々

皆よろしくある。

右兵　一味荷擔の輩は、根ざらへ。

大弼　なにを。

ト行かうとするを、皆々キツとなる。

右兵　御上使のお立ち。

ト目禮、よろしく。　幕

三つ目　箱根山の場

役名――網干右兵衛之助。奴、浪平。傳内母、勝野。女房、おふさ。雲生寺の和尚。槍持ち、與五助。笠持ち、雁平。一子、常松。唐橋大弼。小割傳内。

造り物、平舞臺、一面の山幕、雪降りの體。上手に雪持ちの這松、橋がゝりに相州領と書いた榜杭立ててある。幕の内より傳内、狩人の形、切り株の焚火にあたり居る。幕の内より江戸下りの駄荷・また印し櫃などかづき、雲助、外へ出で、唄うたうて、花道へ入る。ト幕開く。

傳内　この箱根の山中も、斯う雪が降つては、とんと獵がきかん。まそつと火にあたつてゐたら、獲物でもあらう。

ト何なりとも、此やうな事を云うてゐる。ト臆病口より槍持ち與五助、袖合羽着て、槍をかたげ、寒さうな風にて出で、傳内を見て、惘りし

與五　ヤア、何者ぢや、うぬ、近う寄つたら、手は見せぬぞ。

ト構へ／＼身構へして

槍持ち、槍を使はずと云ふは、下世話の譬へ。この槍持ちの與五助は、槍の一手も、心覺えがあるぞ。寄りやアがつたら、命がないぞ。

ト傳内、これを見て

傳内　ア、コレ／＼、わりや何するのぢや。わしはそんな者ではない。

與五　ナニ／＼、さう油斷さして、某が身の廻りを剝がんとする、うぬ、山賊であらうがな。

傳内　エ、、滅相な。おりや、そんな者ぢやない。

與五　でも、この夜中に出てゐるからは、旅人を惱ます山賊に違ひない。
傳内　成る程、さう思はんすも尤もぢやが、これを見やんせ。
ト火繩の鐵砲に、獲物の兎の付いたるを與五助に見せる。
與五　フン、そんなら、貴樣は狩人か。おりや又、山賊に出逢つたと思うて、睾丸までが縮み上がつた。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。エヽ、心が落ち付いたら、俄に寒くなつた。齒の根が合はぬ程、胴慄ひがする。
トがた〳〵慄ふ。
傳内　イカサマ、人の世渡り程、辛いものはない。おれが商賣の奧山稼ぎも、お前方の下り上りも、ほんに、仇な事ぢやごんせんの。
與五　イヤモウ、八ツ立ちで、雪道を歩くも辛いものだ。近頃無心ながら、おれも焚火にあたらしてくれぬか。
傳内　サア〳〵、爰へ來てあたらんせ。
與五　そりや、忝ない。
ト槍を上手の臺松にもたせ置いて、捨ぜりふにて、火にあたる。ト臆病口より、笠持ち雁平、同じく、袖合羽にて、寒さうにして花道の附け際まで、トボ〳〵行くを、與五助見て
與五　コリヤ〳〵。わりや、おらが仲間の雁平ではないか。
ト雁平、與五助の顏見て
雁平　オヽ、與五助か。
與五　オイヤイ。おれは寒うてならないから、この男に無心を云つて、あたらしてもらうてゐる。てまへも爰へ來て、一あたりあたれ。連れ立つて行かう。
雁平　そりや有り難い。そんならお若いの、暫らく御馳走にあづかりませう。
傳内　サア〳〵、遠慮なしに、あたらんせ〳〵。
ト兩人、捨ぜりふにて、火にあたる。
お前方は、マア、いづくの殿樣に附いて、鎌倉へ下らんすのぢや。
與五　おらが御主人は播州だ。
傳内　フン、播州はどこでごんす。
雁平　網干でござります。
傳内　そんなら、この間から噂のあつた、網干の參覲でござりますか。先殿の御死去の後、今の殿樣、右兵衞之助さまとやらは、慈悲深い、結構な殿樣ぢやと、海道筋で

の取り沙汰。その結構な殿樣に奉公せらるゝお前方は、同じ中間奉公でも、末の樂しみがあつて、仕合せぢや。隨分大切にさんせ。

與五　なにサ〳〵、人の噂とは大きな相違。今の殿樣、右兵衞之助といふは、おらと一緒で、色と酒とが大好物。その上、酒が過ぎると、段々氣が荒くなつて、近習小姓を手討ちにする、無道者ぢやわいなア。

雁平　今度の參覲も、泊りが遲うて、お立ちは早く、草鞋穿きかへて飯食ふ間もない程、急ぎの道中。おらが仲間は丸無茶だわい。

傳内　ハテナア。見ると聞くとは大きな違ひ。その又、右兵衞之助どのゝ御舍弟に、土岐之助さまといふのがあるとの事ぢや、その弟御も、この度一緒にお下りでごんすか。

與五　サア、その弟御は、兄とは違うて、仁心深い殿樣であつた。

傳内　サア、憐れみのあるお方ぢやと聞いてゐる。

雁平　その憐れみのある弟御は、ツイ死んでしまはしやつた。

與五　ならう事なら、兄御と代ればよい事ぢや。

傳内　ナニ、土岐之助さまには、お果てなされましたか。して、御病氣でもあつてか。

與五　サア、おらは中間の事だから、詳しい譯は知らねえが・・

ト腹切る眞似して

れきを、やられたのぢや。

ト傳内、愕りして

傳内　そりや、何ゆゑの御切腹であつた。

與五　ハテサテ、こちとらは譯は知らねど、これも矢ツ張り、兄の右兵衞どのゝ爲ぢやとな。

傳内　すりや、兄御の御無道ゆゑ、お痛はしや土岐之助さま。

ト愁ひのこなし。

雁平　お前は、いかい愁歎の體。

與五　土岐之助さまとは、近付きかいの。

トこれにて傳内、心附き

傳内　ハテ、益體もない。網干家の弟御を、狩人風情が、なんの近づきであらうぞ。常々、慈悲深いお方ぢやと聞いたのに、お果てなされたとあるゆゑ。

二人　それでかな。

傳內　アヽ、吹かんと燻ぼる。切り株ぢや。
　ト これにて紛らしてゐる。
與五　ヤレ〳〵、貴樣のお庇で、寒さを凌ぎました。
　ト 此うち、雁平、東を見て
雁平　南無三、東が白んだ。
二人　こりや、忝なうござりました。
　ト 兩人、禮云ひ〳〵向うへ入る。後に傳內、愁ひのこなし。
傳內　下郎が話しは、正直にも聞かれねども、兄御の無道、土岐之助さまの御最期、合點のゆかぬ。
　ト いろ〳〵思案するうち、瀧六、狩人の形にて臆病口より出て
瀧六　オヽ、傳內、爰にゐるか。今夜の雪では、獲物はない。もう仕舞うて去なんか。
傳內　オヽ、瀧六か、おりや、もつと働らいてから、去なう。
瀧六　ハテ、もうよいわい。この雪では、自由に働らかれぬ。
傳內　この噂を、母者人に話したら、定めて案じさつしやらう。
瀧六　ト 獨り言を云ふ。
　オヽ、イノ、母者人も案じてゐる。早う去んで休んだがよい。
傳內　明日は海道へ出て、實否を糺して見よう。
瀧六　そりや、去んでから、勝手にせい。
　ト 始終こんなすかたんなせりふあつて、兩人、橋がゝりへ入る。向うより傳內女房おふさ、世話女房の形、雨笠を提げて、子役の常松の手を引き出て
ふさ　コレ〳〵、常松、雪道で滑りやんな。もう追ツ付けぢやほどに、靜かに歩きや。
　ト こんな事云ひ〳〵、本舞臺へ來る。ト臆病口より、雲生寺和尙、鼠の衣裳、檜笠、草鞋にて鉦を持ち、片手に鐵鉢を提げ出て、おふさと顏見合せ
雲生　オヽ、これは傳內のお內儀かいの。
ふさ　これは、雲生寺のお住持さま、朝修行でござりますか。
雲生　オイナウ、愚僧は寒中の朝修行ぢやが、お內儀はマア、ちつさを連れて、朝寒から、どこへ行くのぢや。
ふさ　さればでござります。播磨の網干の殿樣が、夜前三島泊りで、今朝この箱根を、お通りなさるゝ。今度の參

覲は、美々しい事ぢやとの噂を、坊が聞きまして、その殿樣の行列が見たいと、夜前からせがむによつて、それで只今、連れて參じましたのでござります。

雲生　成る程、聞き及んだ今度の參覲。併し、この雪の山路を、子供を連れて行かうより、どうで爰へござるものぢや。爰らに待ち合はしてゐるがよいわいなウ。

ふさ　成る程、左樣いたしませう。コレ、坊、追ツ付け殿樣が、爰を通らしやる程に、ちつとの間、待つてゐや、

ト此うち、差し金の鳩、飛び來るを、常松、目早く見附け

常松　アレ、あそこへ鳩が來た。母樣、取つて下されいなう。

ふさ　また其やうなわやく云はんものぢや。お寺のお住持樣が、お叱りなさるゝぞ。

雲生　コリヤ／＼、あの鳩は、羽がひといふものがあるによつて、ヒヨイ／＼と、どこまでも飛んで行くゆゑ、自由に取らるゝものぢやない。

常松　イヤ、それでも、わしは欲しい。

ふさ　コレ常松、よう聞きや。父樣の殺生は、商賣なら是非がない。無益の殺生はせぬものぢやぞや。

ト此うち雲生寺、鐵鉢の米を蒔き、鳩に拾はす。常松、鳩を取らうとする。鳩はあちこちとする。此うち臆病口より、ハイ／＼と仰山なる聲をかけ、行列の先手徒士、若黨、乘り物、だん／＼に出る。鳩、此うちへ逃げ込むを、常松、捕へんと追ひ歩き、行列の横切りする。先手、常松を捕へて

先手　憎くき小兒、無禮の横切り。

同　切捨ては、お家の格式。

ト兩人、切らうとするを、おふさ、雲生寺、恫りして、常松を圍ひ

ふさ　マア／＼、お待ちなされて下さりませ。

雲生　頑是なき小兒の無禮。

二人　どうぞ、御料簡下さりませ。

ト兩人、常松をかばひ、下に蹲まる。先手兩人、また切らうとする。ト乘り物の内より

大弼　ヤレ／＼、待て／＼。

ト聲かけると、皆々下座する。上下の侍ひ、乘り物の戸を明ける。ト大弼、ぶツ裂き羽織、野袴にて出る。家來、笠をさしかけ、挾み箱に腰かける。おふさ、雲生寺、下座して平伏する。大弼こなし、よろしくあ

つて

大弼　委細殘らず乘り物の內にて聞いた。イヤ、それなる兩人の者も、定めて噂に聞き及ばん。鎌倉管領家へ願ひを立て、參觀の道筋を妨げる者あらば、切捨てに致すならひ。取分け、この度の參觀は、右兵衞之助どの、家督定めの下向の供先。如何に頑是なき小兒なればとて、妨げを致せし者を、其まゝになし置かば、管領どのを蔑ろにするのみならず、網干の家風、衰ろへたりと、世間の人口もせき難し。不便には思へども、我が家風には更へ難し。

ト きつと云ふ。雲生寺よろしくあつて

雲生　憚りながら、申し上げまする。愚僧は、當所雲生寺と申す者。これなる小兒は、拙僧が檀家の者、先程からも申す通り、まだ頑是なき者と云ひ、昔より出家が命乞ひに出る時は、如何なる重き罪極まりし者にても、三衣に免じて、命を助くる古例もござれば、何卒、小兒の命、お助けなされて下さりませ。

大弼　成る程、頑是なき小兒とあれば、其まゝに差許す筋にもなるまいものでもない。ハテ、どう致したものであらう。

ト ちよつと思案の心意氣。

ふさ　もしも、この子に怪我過ちがござりましては、預かつた夫や母樣へ、どうもわたしが、云ひ譯がござりませぬ。この子の代りに、わたしを、如何やうともなされて、この子の命、お助けなされて下さりませ。

大弼　イカサマ、女心に左やう思ふも尤も。計らふべき好き思案がある。

雲生　よろしくお願ひ申しまする。

大弼　手箱をこれへ。

侍ひ　ハツ。

ト 乘り物の內なる手箱を、大弼の側へ差出す。大弼、袱紗包みの小判と菓子、いろ／＼を、手箱の上に並べ、こなしあつて

大弼　コリヤ、兩人の者、よく聞けよ。いま目前に並べし二品、菓子を取れば、頑是なき小兒に定まれば、其まゝに差許す。また一品の金子に手を掛けなば、慾氣を知るゆゑ、頑是なしとは云ひ難し。さあれば立ち所に首を刎ねて、網干の家風を立てん間、その旨、とくと心得よ。

ト 雲生寺、おふさ、顏見合せ、こなしある。

先手　コリヤ／＼、坊主め。

雲生　ハイ〳〵。

ト向うへ出る。

先手　エヽ、うぬではないわい。

ト叱る。雲生寺、コソ〳〵と扣へる。

大弼　コリヤ、小兒、怖い事はない程に、爰へ參つて、どちらなりとも、欲しい物を取れよ。

ふさ　必らず、お金に手をさへずと

雲生　お菓子の方を貰うて來い。

大弼　ヤイ、坊主め、敎へる事はないわい。

雲生　ハイ〳〵。

トこそ〳〵と扣へる。

ふさ　サア〳〵、常松、温なしうして、殿樣のお側へ行て

ト菓子の方を指ざして

早う行たら貰へる程に、行ておぢやいなう。

ト敎へる。

常松　そんなら、どちらを取つても大事ないかや。

大弼　オヽ、才人な奴ぢや。爰へ來い〳〵。

ト常松、ツカ〳〵と行つて

常松　わしや、これが欲しい。

ト小判に手をかける。兩人、恟りする。大弼、常松を切らうとする。雲生寺、ツカ〳〵と大弼を留めて

雲生　マア、マア〳〵、お待ち下さりませ。

大弼　今となつて、何を妨げる。

雲生　イヤ、お詞が違ひます。

トきつと云ふ。

大弼　ナニ、詞が違ふとは。

雲生　さればでござります。只今、あなた樣が仰せらるゝには、頑是なき小兒に極まりたらば、命は助けてやらうと仰せられたではござりませぬか。

大弼　如何にも。

雲生　これなる小兒、金子に手をかけたれば、命が無いといふ事を知りつゝ、金子の方を取らうとしたが、頑是なき證據でござります。

ふさ　どうぞ、お慈悲にお助けなされて下さりませ。

ト兩人、いろ〳〵詫び、常松を引きのけうとする。

大弼　馬鹿な事を。

ト兩人を突きのけ、また行かうとする。家來、支へる。此うちに大弼、常松の首筋を握り、首をポンと切る。おふさ恟りしてウンとのる。雲生寺、恐れて下手に蹲まる。大弼、刀を納める。ト臆病口より、使ひ番

源吾、走り出で、大弼に向ひ

源吾　お先手に事ありと見えまするゆゑ、様子を告げ知らせよと、殿より御諚。

大弼　成る程、道筋を妨げし無禮の者、家風に任せ、切捨てに致したる仔細、兵藏、お使ひ番と同道いたし、右兵衞之助どのへ言上申せ。

兵藏　お使ひ番、御苦勞、

源吾　いづれも、おさらば。

ト源吾、兵藏打連れ、臆病口へ入る。大弼、よろしくあつて

大弼　よしなき事に、餘程の隙入り。

ト云ひ〳〵乘り物へ移り

乘り物、やれ。

家皆　ヘア、、、。

ト所知入りになり、行列の人衆、靜々と向うへ入る。此うちに、常松、吹替への死骸、切り首よき所に並べ置く。雲生寺、あと見送りて、おふさ正氣を失ひゐるを見て、捨ぜりふ、いろ〳〵あつて、雪を手にすくひ、おふさの口に含ませ、介抱すること、いろ〳〵あつて

雲生　コレ、お内儀、氣を慥かに持たつしやれ。お内儀どのいなう〳〵。

ト呼び生ける。おふさ、やう〳〵心付き、

ふさ　オ、、お住持様。常松は死んだかいなう。

雲生　イヤ、もう死んだどころか、なんの苦もなう、首をポンと切りをつたわい。

ト泣く。おふさキッとなつて

ふさ　我が子の敵、遠くは行くまい。追ひついてさうぢや。

ト勢ひ込んで行かうとするを、雲生寺、慌てながら止めて

雲生　待つた〳〵、マア、待たつしやれ。女の身で我が子を目前に殺され、無念、口惜しいと、思ひ詰めたは尤もぢや。けれどマア、よう合點しても見やつしやれ。相手は大勢、殊に大身、その中へ、女子たゞ一人、駈け込んだとて、なんで本望が遂げらるゝものか。コレ、お内儀急く事はない、敵は知れた網干の殿様。いつ何時でも討たるゝ事ぢや、マア〳〵待たんせ。

ふさ　でも。

トまた行かうとするを、無理に止め

雲生　コレ、お內儀、いま勢ひ込んで行た跡で、不便や、ちつぺいの死骸を、鳶や鳥の餌食、突きさすが、だんないか。
ふさ　エ、。
雲生　マア、急く事はない。差當つて、この死骸葬むるは、賴み寺の住持、わしが受取つた。
ト死骸をおふさに抱かせ、切り首を載せて見る。トばつたりと落ちる事、いろ〳〵あつて、そこらを尋ね、木杭を拾ひ、首を繼ぎ合はす。
ふさ　ア、。コレ、お住持さま、其やうにしても、痛みはしませぬか。
雲生　エ、、なんの痛まうぞいなう。
ふさ　申し、これでは、頭がありやこりやでござります。
ト雲生寺、首を向きかへる、をかしい風。始終おふさ、愁ひのこなし。雲生寺も、愁ひの模樣にて、最前、同勢が忘れ置いたる菅笠・二蓋を取上げ、銅鑼の心持ちにて、兩手に持ち
雲生　なまいだア〳〵。チリン、グワラリン、ドン。
トこの模樣、始終葬禮のこなし、引き念佛の模樣。おふさ、後より、そろ〳〵向うへ入る。

ト淺黃幕になる。すぐに所知入りにて、臆病口より、美々しき行列の先手、挾み箱、飾り弓、鐵砲、釣り簡、臺傘、立て笠、大鳥毛、對の長柄など、すべて本式にて、立派なる乘り物、近習、小姓、その他、後より曳き馬、合羽駕籠、後押への人數まで、見事に段々下手に出かける。バタ〳〵にて、向うより源吾、兵藏、走り出で、花道よき所にて、扇を開き、知らせをする。ト本舞臺の人數、橋がゝりより一面に並よく並ぶ。兩人、本舞臺の下手に下座して
源吾　お供先の樣子を言上の爲、唐橋大弼どのゝ家來を同道仕り、立歸りましてござります。
ト近習、乘り物の戶を明けると、中より、右兵衞之助、衣裳、黑羽二重の羽織にて、よろしくあつて
右兵　大弼どのゝ家來、近う〳〵。
兵藏　ハツ。
ト大小を下手に置き、靜々として、乘り物近く平伏して
今朝、三島の宿より、箱根山へ差かゝりますところ、向うより、年頃四五歲ばかりの小兒、道を遮り、妨げ仕りましたゆゑ、主人大弼、此まゝに差置かば、網干家の

家風の衰ろへ、第一、管領家へ立てし願ひも、無足に相成り候ふ事とて、彼の小兒を切捨てに致されましてござります。

ト右兵衞之助、心意氣あつて

右兵　我が家の家風とは云ひながら、十歳未滿の小兒の妨げ、手討ちに致せしとは、不便の至り、今に始めぬ大弼どのゝ荒氣、殊に某が初めての參覲の道筋にて、血をあやせしとは心よからぬ。管領家の思し召しも如何なれば、大弼どのには、暫らく遠慮いたさるゝやう、申し達してよからう。

兵藏　畏まり奉りまする。

源吾　お使者、大儀。

兵藏　お取次、御苦勞。

ト云ひつゝ、大小差して向うへ走り入る。右兵衞之助よろしくあつて、乘り物の戸をしめさせ

右兵　乘り物、やれ。

大勢　ハア、。

ト所知入りになり、行列美々しく、皆々向うへ入る。

ト淺黄幕、切り落す。

造り物、高二重、見付け納戸、赤壁、松の皮かけ、上手、折り廻し障子屋體、蹴込み、丸木の付け椽。橋がゝり、落間かけにて、門口いつもの所、竹庇にて、雪降りたる體。すべて箱根の山中、傳内住家の模樣。母勝野、老女の拵らへ、木綿やつし、繼ぎ繼ぎのでんち羽織着て、圍爐裏の火を焚き、側に茶瓶茶呑など取散らしある。

淨瑠璃〽茲に小割傳内と云ふ者あり、父の昔は扶持取りの、果ては何ともしらま弓、母の老女も一生に、氣の張り弓も腰にのみ、梓の弓の春近き、年も積みたる雪の庭。

トこの淨瑠璃のうち、勝野、よろしくあつて

勝野　このマア大雪に、我が子の傳内が、夜山の稼ぎも大抵ではないが、もう戻りさうなものぢや。嫁女は今朝、早くから孫の常松を連れて、網干の殿の行列を見せに行きやつたが、ア、孫がさぞ寒からうに、早う戻ればよいに。茶なと熱うして置きませう。

〽孫の最期も白髮の老女、圍爐裏に柴を折りくべる、折からヌツと百性德作。

ト德作、旅の形にて、藁苞を提げ、入る。

德作　オヽ、傳内の婆さん、今日は取分け寒うござるの。

勝野　誰れぢやと思うたら、德作どの。どつちへか行かれたと聞きましたが、マア〳〵、無事でめでたい。

德作　サア、わたしも、京へ用があつて、寒中もいとはず上つて來ました。

勝野　それは大儀な事でござつたのう。

ト此うち德作、内を見廻し

德作　見れば、傳内どの夫婦、坊も見えぬが、どこぞへ連れ立つて行たかいなう。

勝野　傳内は夜山から、まだ戻らぬが、嫁女は孫を連れて、網干の殿の行列を見せうと、今朝から行きました。

德作　イカサマナア。三島泊りで、今朝七つのお立ち、今度の參覲は、美々しい事ぢやと聞きました。そんなら追ツ付け戻るであらう。これは、おれが土產にやらうと思うて、買うて來た伏見人形、坊に遣つて下され。

ト藁苞より、大臣姿の土人形を出して、勝野に渡す。

勝野　これは、マア〳〵、結構なるお土產。大臣姿の好い細工わいなう。孫めがいんま戻つたら、大抵喜ぶ事ぢやござりませぬ。エヽ、お前は、我が子のやうに思うて、可愛がつて下さります。

ト人形を戴く。

德作　そんなら、婆さま、おりや、もう去にます。

勝野　こりや、忝なうござります。お前もお草疲れであらう。早う去んで、休ましやれ。

德作　傳内どのにも、よろしう。

〽云ひ〳〵笠をふりかたげ、もと來し道へ立歸る。

トこれにて、德作、入る。勝野、よろしくあつて

勝野　あの德作どのは、いつも氣の變らぬ、深切な人ではあるぞ。このマア、傳内は何してゐるぞ。いつもよりは、戻りの遲い事ではあるわいの。

〽オヽ、待遠やと母親の、案じる胸は親と子の、同じ思ひに傳内が、主人の生死如何ぞと、わけ白雪の降りつもる、道を辿りて立ちかへる。

トこの淨瑠璃のうち、向うより傳内、蓑明きの形、思案しながら出る。跡より奴浪平、旅姿にて、三度笠を持ち出で、傳内を呼びかけ

浪平　ア、コレ〳〵、ちよつと物が尋ねたい。この邊に小割傳内と云ふ人あらば、敎へて下され。

ト傳内、浪平を見て

傳内　そのお尋ねなさるゝ傳内は、即ち私し。見れば旅の人さうなが、なんの用でござります。

浪平　すりや、其許が傳內とな。これは丁度よい所でお目にかゝりました。ちと內々、お話し申し上げたい儀がござつて、わざ〳〵尋ねて參つたが、爰は途中。

傳內　何事かは存ぜねど、私しの宅は、ツイあれでござりますれば、マア、內へお越しなされて下されい。

浪平　然らば、御案內。

傳內　斯うお出でなされませ。

〽我が家へ伴なひ、門の口。

ト兩人、本舞臺へ來て、捨ぜりふにて、傳內、內へ入る。浪平、此うち、簑と笠を脫ぎ捨て、草鞋などを解くべし。勝野、よろしくあつて

勝野　オヽ、傳內、いつにない戾りの遲さに、たんと案じて居りました。そして、連れがあるさうな。あなたは、マア、どなた樣ぢや。

傳內　只今歸るさ、途中にてお出逢ひ申した旅人。何かこの傳內に、お話しの儀がござるとあつて。

浪平　イヤ、その儀は拙者が申しませう。某は、播州網干の家來にて、ちと內々お賴みの儀がござりまして。

傳內　そんなら、あなたは網干の御家來、左樣とも存じませず、先刻よりの失禮。

二人　眞平、御免下さりませ。

トまア〳〵と、兩人捨ぜりふにて、二重舞臺に上がり、座定まる。

傳內　何かは差措き、早速お尋ね申し上げたきは、お家の弟、土岐之助さまには、ます〳〵御堅固におわたりなされまするか。拙者事は、先年ついした事で、お目にかゝりました事もござりました。

勝野　その上、親子の者も、だん〳〵とお情にあづかりしゆゑ、蔭ながら、土岐之助さまの御武運を祈つて居ります。

浪平　サア、その武運を祈られし土岐之助さまには。

ト愁ひのこなし。兩人、驚ろき

傳內　ナニ、若殿には、なんとばしなされましたか。

浪平　されば、その儀につき、わざ〳〵其許を尋ねに參つた。

傳內　すりや、若殿の儀にて、おこしとある貴殿は。

浪平　卽ち、網干の家來、浪平と申す者なるが、仔細あつて浪人の身の上。それゆゑ、この度、兄右兵衞之助さま、參覲の御供仕らず、密かに貴殿を尋ぬるは、明白には申し難けれど、右兵衞之助さまといふは、誠の先殿

の胤ならず、また、弟土岐之助さまとても、先殿の胤にあらず、お家の叔父たる唐橋大弼どのゝ胤にて、お痛はしや、兄弟互ひに義理を重んじ、若殿は實父大弼どのゝ惡事をひるがへさせん爲ばつかり、お腹召されて、敢へない御最期。

ト兩人、愕りして

傳内　矢張り噂に違ひなう、御切腹なされましたか。

浪平　若殿、臨終の際に、某を召され、相州箱根山のほとりに、小割傳内といふ者を尋ね、この一品を渡せよとある、先殿の御送り物。

ト懐中より扇子を出し、傳内に渡す。

傳内　ナニ、土岐之助さまよりの御送り物とな、ハツ〳〵。

ト平伏して、右の扇子を開き見て

江南の橘は、江北の枳ならず。

ト思案して

この心は。

ト浪平、よろしくあつて

浪平　土岐之助さまの實父大弼どの、先殿の落胤と取替へ置きし、誠の若殿のお行くへ知れざるゆゑ、尋ね出だせよとあるその扇。

傳内　成る程、御遺言の趣き、キツと承知仕る。この傳内は、數ならぬ身なれども、左樣に思し召されて、賜はりし、この扇の判じ物、地紙の五體は破るゝとも、實の若殿を尋ね、扇と某が、心の要しつかりと、畏まり奉る。

浪平　ハア、、流石は傳内どの、若殿今際に御遺言遊ばされたる程あつて、頼もしう存じます。某は、これより奥州邊を尋ね申さん。最早お暇。

勝野　そんなら、もうお出でなされまするか。

傳内　御縁もあらば、また重ねて。

浪平　傳内さまにも、隨分堅固で。

傳内　貴殿も道中、お怪我なきやう。

浪平　御老母、さらば。

兩人　よう、お出でなされました。

〽一禮のべて浪平は、奥州さして急ぎ行く。

ト浪平、草鞋はき、簑笠にて、橋がゝりへ入る。トあと兩人、愁ひのこなしあつて

勝野　いつぞや江の島に於て、狼藉者に出合ひ、相手は大勢、此方は一人、殊に年老いたるこの母を伴ひしゆゑ、難儀の折から、網干の若殿、土岐之助さま、折よく御參

詣あつて、この體を御覧遊ばされ、御家來に仰せ付けられ、狼藉者を鎭めたまはりしゆゑ、親子が命を助かりし有り難さ、御恩報じと、鎌倉のお屋敷へ御奉公に出たれども、間もなう、あのおふさを伴ひ、又この山家へ侘び住居。

傳内　御恩を受けし若殿樣は、今はこの世に亡き跡の、筐に賜はるこの扇。すりや、最前、下部が噂に違はず、兄右兵衞どのゝ我まゝ無道。

勝野　なんと云やる。兄右兵衞が無道人とな。

傳内　サア、今朝、海道でもその噂。いま浪平が詞のはしばし、さながら主人の事ゆゑ、明白には云はねども

勝野　兄御の惡心ゆゑ、果敢ない御最期。今日は幸ひ月並みの逮夜

傳内　心ばかりの御追善。

勝野　お筐の扇を、佛前へ直し

傳内　御回向申しあげん。

勝野　老少不定と云ひながら

傳内　有爲轉變の

二人　世の中ぢやなア。

トこれも泣く〳〵打ちしほれ、納戸の内へ。

ト送りになる。兩人、愁ひのこなしにて、上手障子屋體へ入る。

ト憂き事は重なる山のそば傳ひ、おふさは我が子の亡き骸を、抱きて歸る雪の袖。

トこの淨瑠璃のうち、おふさ、向うより幕明きの姿にて、常松の死骸を抱き、泣く〳〵出る。後より雲生寺、附添ひ出て、花道にて、よろしくあつて

雲生　ア、コレ〳〵、お内儀どの、歎きは道理なれども、道々も云ふ通り、とても隱しおほせる事はならぬ事ぢや、けれども、暫くでも、傳内や婆樣に隱すやう、泣き顏せぬがよいぞや。

ふさ　そりや、よう得心して居ますけれど、これが泣かずに居られうか。

雲生　サア、そこをヂツと辛抱して居やしやれ。おれは、いつもの通り、今日の月並みの逮夜に參つたやうにして、餘所ながら、荒ごなしをして置かうほどに、わしがよい時分に合ひ圖をしたら、奧へ入らつしやれ。

ト行かうとして、立ちどまり

イヤ〳〵、これも惡い。こりや、斯うせう、其ちつぺいは、愚僧が所に預けて、戻つたと云うたがよい。マア、

こなたは先へ行かしやれ。さうするがよいてや。
　ト死骸を取つて抱き、おふさに、先へ行けと云ふ仕方する。おふさ、泣く〳〵、よろしく本舞臺へ來る。雲生寺、内の樣子を覗き見て
幸ひ、婆樣も傳内も、納戸へ入つて居ると見える。この間に、おれはあの屏風の蔭に隱れて居る程に、お内儀は、なに心なう、内へ戻つた體にさつしやれ。
　ト云ひ含める。いろ〳〵あつて、雲生寺は二重舞臺の二枚折りの枕屏風の蔭へ隱れる。おふさ、泣く〳〵内へ入る。ト障子屋體より、傳内、思案の體にて出で、思はず、兩人、行き當り、恟りして、互ひに泣き落し、顏を隱す模樣、よろしくあつて
傳内　オヽ、女房ども。
ふさ　こちの人。
傳内　いつの間に戻つたぞい。
ふさ　アイ、わたしや、最前から
　ト云はうとして
イヽエ、たつた今。
傳内　さうして、常松は、どこに居るぞ。
ふさ　ハイ、そこに。
　ト云はうとして
アヽ、イヽエ、ほんに、さうぢやわいなア。戻りがけに雲生寺さまへ、月並の逮夜の事を頼みに寄つたら、聞かしやんせ、お住持樣と一緒に去なうと、わやく云ふゆゑ、お住持が後方參ろ時に、連れて行かうと仰しやつてでござりますに依つて、後へ置いて來ました。
傳内　エヽ、この冷えるのに、雲生寺さまも、大抵世話ではない。連れて戻ればよいに、ドレ、おれが一走り迎ひに行つて來う。
　ト行かうとするを、おふさ止めて
ふさ　アヽ、コレ、行くには及ばぬ。
傳内　でも、今頃は、わやく云うて居をらう。
ふさ　イヽエ、もう戻りますわいなア。
傳内　そんなら、圍爐裏の火でもようして
　ト傳内、圍爐裏の中へ、柴折りくべる。此うちおふさ、愁ひの顏を隱すこなし。折り〳〵、雲生寺、屏風の蔭より顏をちよつと出し、樣子を窺ふ模樣、よろしくある。傳内、これを知らず。
イヤナニ、女房ども、ちよつと爰へおぢや。ちと其方に問ふ事がある。

ふさ　アノ、わたしにかえ。わたしも、お前に尋ねたい事がござんす。

傳内　其方も、おれに尋ねたい事がある。ハテナア。

　トよろしくあつて。

ふさ　お前の問ひたい事とは、そりやマア、なんでござんす。

傳内　イヤ、別の事でもないが、女房の身では、男ほど大切なものはないゆゑ、何事でも、夫の詞に背きやるまいの。

ふさ　ハテ、そりや知れた事いな。

傳内　ムウ、それ聞うたら、もうよい。して、其方の尋ねたい事と云ふは。

ふさ　わたしの尋ねる事は、外ではござんせぬ。眞實の子と、血を分けぬ子は、どちらが可愛うござんすえ。

傳内　こりや味な事を尋ねるものぢや。肉身の子でも、義理ある悴でも、お父樣々々と廻すもの、なんのその差別があらう。いづれ子の可愛いは同じ事ぢや。

ふさ　それ聞いたら、落ちつきました。

　ト此うち勝野、屋體より出で

勝野　アヽ、先づ夫婦が睦まじい話し。さうして、聞けば常松を雲生寺さまへ預けて戻つたとに事。大抵お住持樣のお世話ぢやあるまい。ドレ、わたしが迎ひに行つてやりませう。

ふさ　アヽ、よしにして下さりませ。

傳内　イヤ、わたしが行て參りませう。老人の雪道は、危なうござります。

勝野　イヤ／＼、大事ござらぬ。わしが行きます。

　ト無理に行かうとする。兩人、止める。此はずみに、枕屛風、バッタリこける。雲生寺、ヌッと出る。皆々恟りして

傳勝　お住持樣ぢやござりませぬか。

雲生　オヽ、住持とも／＼。正眞、交りなしの雲生寺ぢやわい。

傳内　でも、お住持さまの惡洒落な。最前から戻つて居て、わしに恟りさせようとてか。

勝野　そして、坊を、大きにお世話にあづかりました。サア、これへお遣はし下さりませ。

雲生　アヽ、可哀さうに。ちつぺいは、わしの懷中に、よう寢てゐる。

勝野　最前、あちら村の德作どのが、京人形ぢやとて下

さつたこの伏見人形、ちやつと、これを見やいなう。

雲生　それでも、よう寢て居るわいなう。

勝野　それでも、寒うござります。此方へおこして下さりませ。

雲生　エヽ、懷に斯う寢ぬくもつて居るわいなう。

ト勝野、無理に取つて、懷中に入れる。

勝野　このマア、手足の冷えて、冷たい事わいなう。

ト懷中にて、ゆすぶる。ト切り首、バッタリ落ちる。皆々、大悔り。傳内、おふさを引き付け、勝野は雲生寺に詰め寄る。

傳内　これはどうぢや、この體は。

勝野　定めて、これには樣子があらう。

傳内　譯を云へ、女房ども。

勝野　樣子はどうでござります。

ト兩人せり込み云ふ。おふさ、大愁ひのこなしあるべし。

雲生　オヽ、道理ぢや〳〵。尤もでござる。サア、その嘆きをさせまい爲め、隱せるだけ隱さんと、お内儀にも云ひ含めたが、もう斯うなつたら是非がない。今日の仕儀ちつぺいが最前からの樣子、わしが代つて、話して聞かさう。

傳内　サヽ、早う、樣子を聞かして下されい。

雲生　されば、今朝早うから拙僧は朝修行に出て、箱根山の往還にさしかゝる時、向うからこの家のお内儀が、ちつさを連れて來るのに出逢ひ、オ、お内儀、どこへ行かんすと尋ねたら、云ふには、網干の殿樣、お通りの行列を見せにと云はるゝに依つて、このマア雪の降る道を、行くより爰に待ち合さつしやれ。今日、三島からお立ちゆゑ、程なうお通りであらうと、相模領の棒杭のあたりに、愚僧も一緒に待つて居る所へ、鳩めが一羽、ヒヨイヒヨイと飛んで來たれば、ちつさが取らうとする、そんな事はせぬものぢやと留めても、聞き入れず、逃げ行く鳩を追ひかけ廻る其うちに、ホイ〳〵と網干の殿のお通り。此方は子供の事なれば、その行列の中を押し分け、鳩を取らうとして横切るに、先手の者が見咎めて、無禮を咎める。頑是なき小兒の事ゆゑ、眞平御免下されいとお内儀諸とも、拙僧が段々の詫び言。其うち乘り物から出たのは、大方、網干の殿、管領へ願ひを立てし家風の通りに行ふとて、ちつさの首をコロリと、其やうな目にあはし居つたわい。

ト段々語る。皆々、大愁ひ。おふさ、やう／＼顏を上げ

ふさ　母樣にも、こなさんにも、どう云ひ譯があるものぞ我が子の敵と、心は矢竹にはやれども、悲しい事は女子の身。

雲生　あの大勢の中へ、こなた一人駈け込んだとて、所詮本望遂げる事はならぬ程に、無念を堪へ內へ去んで、傳內にも話した上、敵は知れた網干の殿、何時でも討たるると、愚僧が無理に連れて戾り、道々も云ひ聞かせ、ちつとの間なりとも、この嘆きをさすまい爲、包み隱したは、愚僧が計らひでござるわいなう。

ふさ　母樣、傳內さま、堪へて下され。堪忍して下さんせ。むごたらしい切り首を側で見た、わたしの心の內を、推量なされて下さりませ。

ト大泣き。傳內、無念のこなしあつてキッとなる。

〽何思ひけん傳內は、すつくと立つて女房の、手を取り無理に上座に直し、はるか下がつて兩手を突き。

ト傳內、おふさを上座へやり、常松の死骸切り首をよき所に直す。勝野も、下座の方へ扣へる。この間、雲生寺、始終不思議がつてゐる。

傳內　今さら改めて云ふに及ばねども、この年月、女房ども、我が夫と云ふを構はぬは、人目をいとふゆゑの事。義理ある我が子の常松の、誠の父君は、當の敵、網干の殿右兵衞之助どのゝ御舍弟、土岐之助さま、これなるおふさどの事は、奧勤めを致されし頃、土岐之助さまのお胤を宿したまふ。まつた某は、先年よりこの山中に住みしが、或る日、江の島の辨財天へ、母諸とも、參詣の節、狼藉者に出會ひ、難儀に及ぶ時、折よくも土岐之助さま御參詣あつて、彼の狼藉者を、追ひ散らし給はり、母が無難も、これ偏へに若殿のお庇と、冥加恐ろしく、何卒御恩を報ぜんと、それより鎌倉へ立ち越え、お屋敷へ仕官せしが、未だ部屋住みの若殿、おふさどのゝ姙娠を物憂く思し召し、某を密かに招かせ給ひ、よきに計らひくれよと段々のお賴み。大恩ある若殿の事ゆゑ、畏まり奉ると、おふさどのを伴ひ、母諸とも屋敷を忍び出で、又もやこの山中に立戾り、母が介抱にて、安々と平産ありし常松どのも、土岐之助さまのお胤なる事は、隱し包む事なるゆゑ、おふさどのを女房、常松さまを我が子とし、表ばかりの夫婦の語らひ。何卒、若殿の御運の開く時あれと、祈つて暮らすこの年月。今日はいかなる惡日なる

か、土岐之助さまの非業の御最期の、様子を聞くのみならず、常松さまのこの有様、草葉の蔭の若殿様に、なんと云ひ譯あるものぞ、御運の末とは云ひながら、御親子ともに、刃の露となつて、果敢なくなり給ふか。エ、、恨めしき世の中ぢやよなア。

ト泣く。おふさ、この時、キツとなつて

ふさ　ナニ、若殿様には、非業の最期遊ばせしとは、そりやマア誠か。何ゆゑお果てなされましてござります。

傳内　サア、土岐之助さまの御最期も、網干の兄御の所爲にて、御切腹なされたといなう。

ふさ　エ、。

ト大愕りにて、ウンと反ることなし。皆々愕りする。介抱よろしくあつて

雲生　ヤア、目がまうたかいなう。氣附けぢや〳〵。

ト傳内、納戸より、熊の膽の壺入りを取つて來る。此うち、雲生寺、圍爐裏の白湯を汲んで

サア、白湯ぢや〳〵。

ト傳内に渡す。勝野、おふさを抱きかゝへ、傳内、氣付けを含めようとして、ちやつと心附き勝野に渡す。勝野、おふさの口へ含まして、皆々、介抱する事いろいろあつて、おふさ、正氣になることなし、よろしくあつて

ふさ　殿様、土岐之助さまの御最期といひ、常松の敵は、兄御右兵衛さまとな。

傳内　義理ある常松どのゝ敵といひ、若殿様の仇なれば、例へこの身は、ズタ〳〵に碎きてなりとも、討ち取らんとは思へども、當の敵は若殿の兄君、討つに討たれぬ義理あるとは、よくも拙なき御運ぢやなア。

雲生　ア、、その歎きは道理ぢやが、もう斯うなつたら、百萬だら泣いたとて、それが死んだ人の爲にもなるまい。せめて未來を助かるやう、一遍の回向でもしたがよい。

勝野　それ〳〵、孫の死體を納戸へ連れて、早う行きや。

ふさ　アイ。

トおふさ、泣く〳〵、我が子の死骸を抱へて、雲生寺もよろしくあつて

雲生　ア、、いやな念佛申さうの。

〽泣く〳〵打連れ入りにけり。あと見送つて母親は、袱紗包みを取出し。

ト此うち、おふさ、雲生寺、障子屋體へ入る。勝野、

傳内、愁ひの模様、よろしくあつて、勝野、袱紗包みの弓の折れと、香包みを取出だし、いろ〳〵こなしあつて

勝野　コレ、傳内、ちと密かに、話したい事がある。マア爰へおぢや。

傳内　お話しがござるとな。

ト合ひ方になる。兩人、よろしくあつて

勝野　今までは隱せし其方の身の上、思ひ出だせば廿餘年の昔語り、妾が父上は、世に聞えたる射術の達人、弓削の何某と云ふ人なるが、我が身、若氣のいたづらにて、御門弟のうちに、淺羽久之進と不義せし事、いつか父上のお耳に入り、元より物堅き武士なれば、お怒り強く側にあり合ふ重籐の弓を以て、淺羽どのと、我が身を散々に打ち給ふ。お怒りのあまり、さしもに强き重籐もコレこの如く。

ト袱紗包みより、重籐の三ツに折れたる弓の一つを取出し、傳内に見せる。

三つにポツキリと折れ、既にお手討にもあふべき所を、母の詫びにて、その場を遁がれ、二人打連れ、紀伊の國那智山の麓、淸水村に、淺羽どのゝ知るべありしより、それを頼りに世を忍ぶうち、情の胤を身に宿し、産み落したは、恥かしや双子の男子。人の譏りもうたてくて、其方は兄とて、松太郎と名付け、弟の曾根太郎には、この片しの重籐の弓の折れに、父御が直筆の年月を記せし臍の緒を添へて、捨て置きしを、幸ひなるかな、播州網干の先殿、熊野へ參詣の歸るさ、權現より家の世繼ぎを賜ふなりと拾ひ取り、重籐の弓を添へたるは、仔細あらん何にもせよ、賤しき者の胤にもあらずと、本國へ連れ歸り給ひしと、立歸つて、夫の物語り、少し心は落ちついて、暫らく淸水村に住居せしが、元より夫も武家の奉公を望み、立身して、師匠の勘氣を赦されんものと思ひ立ち、鎌倉へ心ざし、親子三人、打連れ行くうち、東海道の泊りにて、俄かの大地震、夫婦親子も散り〳〵に、夜明けて地震も鎭まり、夫の行くへを尋ねても知れざるゆゑ、是非なく其方を連れて、さま〳〵の憂き艱難、年を送り、程なく其方も成人して、緣でがな、この山中に暮らすうち、ほのかに聞けは、先年捨てし曾根太郎、今では網干の家の惣領となり、また妾の夫は、網干に奉公して居らるゝとの噂さ。どうぞ再び巡り逢はうと思ふ、折を幸ひ、先達て、江の島にて狼藉者に出會ひし時、御恩

にあづかりし土岐之助さまは、我が子の義理ある弟と悟り、これに奉公するには如かじと、鎌倉のお屋敷へ引越し居るうち、御家老清水杢之進さまが、其方を懇望あつて、娘おきよと夫婦にせんと、玉かづらの名香を贈られしかど、おふさどのを伴ひて、この山中へ戻りし跡は、如何なりしか知らねども、それは格別、先づ差當る土岐之助さまの御切腹も、最前浪平どのが詞のはしばし、これ皆、右兵衛之助が非道ゆゑ、常松さまの當の敵も、先殿の惣領ならば、土岐之助さまとは、御兄弟とも云ふべきなれども、若殿は大弼さまの胤といひ、殊に兄の右兵衛といふは、我が子の曾根太郎、其方とは肉身分けし双子の兄弟、その弟が悪心ゆゑ、大恩ある土岐之助さまの切腹、常松さまの御最期、恨みに恨みを重ぬる仇、不便とは思へど、助けて置いては、過ぎ去り給ひし人々へ義理立たず、第一はお家の爲にもよろしからず、早々右兵衛之助を討ち取つて、草葉の蔭の御親子が、修羅の苦患をお助け申し、誠の土岐之助さまを尋ね出し、お世繼ぎとなし奉つるが、上分別でござるぞや。

トきつと云ふ。傳内こなしあつて

傳内　成る程、初めて聞いた我が身の生立ち。双子の弟は大悪無道の右兵衛とな。さあれば、土岐之助さま御親子の仇敵。

〽胸に一物、覺えの鐵砲。

如何に、母人。

ト乘り地になる。

傳へ聞く、唐土晋の豫讓は、主の智伯が仇を討たんと、面には漆を塗り、姿を變へしと聞き及ぶ。我れは今、目前に扣へし仇、心覺えの飛び道具、いかで仕損ずる事やある。殊に我れとは、血を分けし兄弟仲は耻多し。右兵衛を討取つて、直ぐに腹をも切るべきなれども、最前浪平に請け合ひし、主君の落胤、實の土岐之助さまを尋ね出し、網干のお家相續させ奉らん。

勝野　オヽ、それまでは、大事の身の上、兎に角に命を全うせよ。

傳内　母の教訓、心魂に徹す。

ト云ひ／＼鐵砲を提げ、花道へ行かうとする。勝野呼び止め

勝野　コリヤ、傳内、必らず早まり仕損ずな。

傳内　ハア。

ト腕と胸を敎へ、心得たりと云ふこなしにて

〽飛ぶが如くに走り行く。

トこの浄瑠璃のうち、息せき向うへ走り入る。ト勝野あと見送りて、こなしあるうち、おふさ出で

ふさ　母様、始終の様子は聞きました。この身の納まり、夫の敵、我が子の仇、傳内どのゝ加勢の爲、さうぢや。

ト花道へ行かうとするを、留めて

勝野　ヤレ、待ち給へ。勇ましき敵討の門出の餞け、この妾がせん。

ト名作の一腰出し

心覺えのこの一腰。

トおふさに渡す。

ふさ　エヽ、有り難い。

ト戴く。

勝野　心殘りのないやうに。

ト懐劍にて自害する。

ふさ　アヽ、早まつた御生害。

ト二重舞臺へ駈けあがり、泣き落す。この途端、淺黄幕になる。

この淺黄幕、紋板と一時に、そろ〳〵と下がり、よき所にて、細折りになる。ト大黒柱でとまる。一面の松原、うしろ二重淺黄幕。直ぐに所知入りにて、最前の行列、本式にてよろしく段々下手へ入る。乘り物、曳き馬の時分を見合し、おふさ、窺ひ出て切つてかゝる。バタ〳〵にて、家來大勢とタテになり、上手へ皆々追つて入る。ト東棧敷の手摺りへ、遠見の行列、臺傘、立て笠、大鳥毛、對の長柄など上の方に見せる仕掛けにて、この間に本舞臺、道具そろ〳〵と元の通りに上がり、紋板の下、一面雪降り幕となる。バタ〳〵にて、おふさ、臆病口より、大童になり、家來とタテしながら出て、これより、大タテいろ〳〵ありて、網干の家來、皆々追ひこみ

ふさ　エヽ、口惜しい。この深手では、所詮、敵の首取ること思ひもよらず、エヽ、殘り多やなア。

トいろ〳〵ある。此うち

捕手　やらぬぞ。

トかゝるを、片手にポンと切り、その身もバッタリとこける。切り穴へ落すと、この途端に雪降り幕、切り落す。

造り物、舞臺一面、奥深う、險阻なる奥山の書割り眞中に竹藪しげり、踏み破る仕掛けあり、藪の際より、花道鳥屋まで、一面に松原の並木をセリ出し但し、花道板を引いて、行列の人數、本式の通りにて、並ぶと留まる。この仕掛け、花道の下、奈落にての行列。ト此うち、本舞臺、遠見に傳内の子役、鐵砲にて窺ふ模樣よろしくあるべし。

〽振れや振れ〳〵お先は對の挾み箱、花橋の金紋や、臺笠、立て笠、大鳥毛。

ト淨瑠璃のうち行列、だん〳〵來る事よろしく、よき所にて、傳内の子役、鐵砲構へる。鐵砲の音、火蓋を切る。ト奈落一面バタ〳〵にて、大騷動の體、この紛れに、子役の傳内隱るゝ。

〽根笹竹藪、押し分けて、現はれ出でたる小割傳内。

トこの淨瑠璃のうち、舞臺正面、藪の内より、誠の傳内、鐵砲持つてヌッと出で、キッと見得になる。ト物凄き合ひ方。傳内、はるかに見やる心意氣あつて、

傳内　慥かに手ごたへ……惡人ながらも、流石は恩愛。母の歎きも思ひやる。はし折り鏡、双子の兄弟。

ト愁ひのこなしあつて

他人の始まりぢやなア。

ト泣き落すこなし、よろしく　　幕

三つ目

紀州八鬼山峠の場
熊野宿笹屋の場

役名――笹屋半兵衛實ハ阿波の金十郎。馬士、紅蔵實ハ網干土岐之助。本之進妻、關屋。同娘、おきよ。管領娘、里姫。同乳人、繼橋。半兵衛女房、おてつ。宿引き、長九郎。在所娘、おちよぼ。ちよんがれ坊主、巖山。所化、鈍願。床屋、太郎作。代官、冠平。横田軍平。惡者、熊鷹眼兵衛。謎坊主、春雪實ハ貢數馬。右兵衛之助奥方、お須磨の方。小割傳内。

造り物、平舞臺、一面の淺黄幕。上手、鳥居玉垣、橋がゝりに葭簀、よき所に茶店床几。所々に御神燈の提灯立てあり、すべて、在所祭りの模樣にて、ちよんがれ巖山、網干の殿の事よろしく云うてゐる。仕出しの百姓大勢、これを聞いてゐる。この模樣、

神樂にて幕開く。

巖山　サア〳〵、お前方、いかきが廻ります。今日は取分け神事のお祝ひ、氣を張つて下さりませ。

ト巖山、いかきを廻はして錢を貰ふ。此うち橋がゝりより庄屋太郎作、木綿やつし、袷羽織にて走り出で

太郎　ア、コリヤ〳〵、追ツ付け爰へお代官樣が、何ぢや知らぬが、お觸れ流しの事があるとて、お出でなさる程に、隨分無禮のないやうにさつしやれ。

ト云ふをも聞かずに、巖山、ちよんがれ云うてゐる。仕出しの百姓、ワヤ〳〵云うて、聞いてゐる。太郎作腹を立て

エ、、最前からおれが云ふ事を聞かずに、あのちよんがればかりを聞いて、ワヤ〳〵笑うてゐる。そして聞けば、網干の殿樣が狩人に、鐵砲で殺されさつしやつた事を、ちよんがれに云うて堪るものか。そんな事、云はぬがよいぞや。

トきつと云ふ。

巖山　あなた樣は、お庄屋樣でござりますか。わたしのやうな乞食坊主、他愛もない、ちよんがれを云ふが商賣でござりますれば、鷹揚に聞いて下さりませ。

トこれを構はず、ちよんがれ云ふ。

太郎　コリヤ〳〵、坊主め。コリヤ、乞食坊主め、この庄屋が云ふなと云ふ事を、しやべり居る。うぬらが今、吐かす事、網干の殿樣の事を、爰で云ふ事はならぬぞ。

巖山　そりや又、なぜでござります。

太郎　ヘテ、知れた事、爰は卽ち、その殿樣の御領分ぢやわい。

ト巖山、恟りして

巖山　エ、、そんなら爰は、網干の御領分でござりますか。さうとは知らず、しやべりました。眞平御免下さりませ。

ト太郎作の前へ手を仕へ、捨ぜりふにて、いろ〳〵詫び言するうち、太郎作の腰提げを、ちよいと取つて、もう爰には居りませぬ程に、御免なされて下さりませ。

ト云ひ、向うへ走り入る。仕出しもワヤ〳〵云うて臆病口へ走り入る。太郎作、これを知らず、あたり見廻すうち、葭簀の内より、水茶屋の娘おます出る。太郎作、おますに見惚れ、こなしあつて

太郎　ア、いつでも爰なお娘は、美しいものぢや。時に

今日は、お代官樣が、何ぢややら、お觸れ流しの事があるとて、追ツ付け、お通りぢや程に、道端に出しやばつた物があらば、片付けて置くがよい。

ト云ひ／＼、葭簀を見て

コレ、此やうなものが惡い。おれがよいやうにしてやらう。

ト葭簀直してやる。

ます　そんなら、お庄屋樣、爰に居やしやんすか。どうぞちよつとの間、店を番して下さんせ。わしや、水を汲んで參じます。跡をお賴み申します。

ト手桶を提げて、橋がゝりへ入る。太郎作こなしあつて

太郎　オヽ、おれが店番してゐてやらう。時に、お代官樣のお出では、まだ間があらう。ドレ、一服いたさうか。

ト腰提げを探す事、いろ／＼あつて

ハテ、面妖な。內から慥かに持つて來た筈ぢや。道で落さうやうもなし。

トちよつと思案して

ハテ、そんなら、今のちよんがれめが、ちよつとちよろまかし居つたと見えるわい。大方、まだそこらに。うぬ、待つて居れ／＼。

ト云ひ／＼橋がゝりへ入る。ト向うよりおちよぼ、その外、娘二人、いづれも在所娘の形にて、連れ立ち出る。

娘　コレ、おちよぼさん、まそつと靜かに歩かんせいなア。

ちよ　エヽ、お前さんはきつい事ぢや。もうツイそこが、氏神樣ぢやないかいな。

娘　イヽエ、お前は、氏神樣が、急ぐのぢやあるまい。

娘　さうとも／＼、笹屋半兵衞さんとこの宿引き、長九郎さんに、逢はうと思うてゞあらうがな。

ちよ　其やうに知つての事なら、是非がない。成る程、その長九郎さんと、今日爰で出合ふ約束ゆゑ、それで氣が急くのぢやわいなア。

娘　あの長九郎さんは、この在所一番の近眼ぢや。此方からよう氣を付けぬと、あの人の眼には、かゝらぬぞえ。

娘　マア、こゝな床几で、待つてゐやしやんせいな。

ト三人、茶屋の床几に腰かけ、捨ぜりふいろ／＼あるうち、在鄕唄になる。向うより、宿引き長九郎、木綿やつし、尻からげして、眼鏡かけ、そこらウロ／＼尋ねる模樣にて出で、とくと三人を見付け

長九　オヽ、おちよぼ、皆も揃うて爰に。今日は氏神祭りぢやによつて、参らんすであらうと思うて、一遍尋ねたわいの。
ちよ　ほんにお前は、わたしのやうな者を、其やうにまで思うて下さんすか、嬉しうござんすわいな。
娘　戀なればこそ長九郎さんが
娘　近眼の癖に、見付けさんした。おちよぼさん、嬉しいかえ。
長九　エヽ、なに嬲てあげるぞい。併しながら、こなさんの云ふ通りぢや。おりや、この眼鏡をかけぬと、トンと盲目も同然ぢや。
ちよ　サア、長九郎さん、一緒に参らう。
長九　おりや、ちつと待ち合はす人があるによつて、マア参らんせ。
娘　そんなら、長九郎さん。
ちよ　後にえ。
ト神樂になり、三人、臆病口へ入る。
長九　アヽ、ものこの邊で、笹屋半兵衛の手代長九郎と云ふと、人に知られた男ゆゑ、所の娘どもがあのやうに、付きまとひ居る。シタガ、こちの内儀のお鐵さまも、今日氏神に参る程に、その時、なんぢややら話す事があるとの事。アヽ、コレ、もう見えさうなものぢや。
ト云ひ〳〵、床几に腰かけ、煙草のみ居る。向うより庄屋太郎作、先に立ち、代官冠平、捕り手引連れ、本舞臺へ來る。
太郎　ソレ、片寄らしやれ〳〵。お代官様のお通りぢや。
ト長九郎、これを知らず、煙草のみゐる。
コレ、退かしやれ、お代官様のお通りぢや。
ト大きな聲して云ふ。長九郎、悔りして
長九　ハイ〳〵〳〵、御免なされて下さりませ。
ト云ひ〳〵皆の顔を眺め
ハア、お代官様や、庄屋どのかいなア。この長九郎は、生れついての大の近眼ゆゑ、先程よりの失禮、眞平御免下さりませ。
冠平　コリヤ〳〵、長九郎、太郎作、よう聞けよ。この度管領家より繪姿を以て、御詮議のお尋ね者は、即ち、管領家の姫君と、乳人の繼橋と云ふ女。里姫と云ふは、年頃十六七、繼橋と云ふは廿二三にて、色白く、脊高く、この繪姿に似たる女あらは、代官所へ連れ來れ。キツと褒美を遣はすであらう。

長九　そりやア耳よりな事でござります。わたしは宿引きが、商賣ゆゑ、往來の旅人に心を附けて、見付け次第に連れて參りませう程に、マア、その人相書を私しに、お預けなされて下さりませ。

冠平　成る程、旅人に心を付けい。

ト人相書を渡す。

太郎　この庄屋も、その繪姿を一枚欲しい。

長九　こなたは、何にさんすのぢや。

太郎　おりや、内の屏風に貼つて置かうと思うて。

長九　エヽ、何を云はつしやる。阿房らしい。

太郎　イヤモ、庄屋と云ふものは、芝居でも阿房なものぢや。ヘヽヽヽヽ。

冠平　某は、次の村へ觸れ聞かさん。太郎作、案内しやれ。

太郎　斯うお出でなされませ。

ト神樂になり、冠平、太郎作、捕り手を連れて入る。跡に長九郎、こなしあつて、眼鏡をかけ、繪姿を透かし見て

長八　なんぢや、里姫と云ふは十六七、乳人繼橋と云ふは二十二三、色白く脊高く、こりや好い恰好な女子ぢやなア。ドリヤ、一遍と探して來うか。

ト神樂になり、ツイと臆病口へ入る。ト向うより、里姫、乳人繼橋、菅笠、對にて旅姿、繼橋は、風呂敷包み脊負ひ出て、花道よき所にて

繼橋　申し、お姫樣、マア、お靜かにおひろひなされませ。行く先定めぬ長の旅路、ほんにお痛はしう存じますわいなア。

里姫　アノ、繼橋の云やる事わいな。其方こそ、疲れるであらう。自らは殿樣と思ひ、假に契りし浪平どの、今では戀しう思ふゆゑ、誠の若殿樣を尋ねに出やつた跡を慕ひ、爰までは來たれども、今に尋ね逢はぬゆゑ、早う逢ひたい、顏見たい。其方ばつかりが力ぢやほどに、早う逢はしてたもいなう。

繼橋　向うに幸ひの床几がござります。あれへ參つて、暫らくお休み遊ばされませう。

里姫　さうしませうわいなア。

ト本舞臺へ來て、床几に腰かけ、こなしあつて

繼橋　この頃人の噂を聞けば、父御の怒り強く、諸國へ配符を廻はし、人相書を以て、姫君と妾を尋ね給ふとの噂。もしやそれが定なら、御身の大事、必らず御油斷遊ばすなえ。

里姫　例へ父上のお怒りあるとても、姫御前の身で、一旦肌觸れし浪平どの、是非に逢はしてたも。コレ、繼橋、頼んだぞや。
繼橋　サア、その間違ひも、わたしが業、御料簡なされて下さりませ。
里姫　なんのいなう、それも矢ツ張り自らを、大事に思うてたもるからの事。
繼橋　ア、コレ申し、斯樣な人立ちの所で、お身の上をお話しは、御無用に遊ばされませ。兎角斯樣な時には、神佛の御利生が頼み。この宮へもちよつと、御參詣遊ばさるがようございます。
里姫　そんなら繼橋。
繼橋　姫君樣、先づお出て遊ばされませ。
ト神樂になり、臆病口へ兩人入る。ト向うより、笹屋おてつ、世話女房の拵らへ、前帶にて出で、下女おとみ、付きそひ出る。
とみ　申し、お家さん、あなたが逢はねばならぬと仰しやるお方は、マア、誰れでござりますぞいなア。
てつ　アノ、わしが逢はうと尋ぬる人は
ト云ひかねるこなし。
とみ　エ、モウ、辛氣な人ではあるわいなう。それでも、合點がゆきませぬ。
てつ　わしが尋ねる人は。
ト云ひかねるこなしあつて
エ、、供しや。
ト神樂になり、臆病口へ入る。ト橋がゝりより關屋、着流し、武家の女房の拵らへ、旅姿にて出る。後より太郎作、百姓大勢連れ、窺ひ出て
太郎　ソリヤ。
ト聲かける。百姓皆々、關屋を取卷き
百皆　やらぬぞ。
關屋　旅人に向ひ、慮外しやると免さぬぞ。
ト太郎作、荒繩持ち、前へ出て
太郎　ヤア、あらがふまい。其方は管領家の娘の乳人、名は何とやら忘れた。
關屋　管領家の乳人をば、何ゆゑの狼藉。
太郎　サア、此方の注文にあうたお尋ね者。此奴を捕へたら、姫の在所も知れるであらう。
皆々　サア、繩かゝれ。
關屋　イヤ、此方は、其やうなものではない。

太郎　でも、繪姿のお尋ね者。

皆々　尋常に繩かゝれ。

ト　これより、百姓大勢を相手に、ちよつと立廻りあつて、臆病口へ追ひ込む。ト向うより娘おきよ、順禮姿振り袖にて杖突き出る。後よりちよんがれ巖山出て、おきよの後や先になり、捨ぜりふにて、見惚るゝ事、いろ〳〵あつて

巖山　エ、、美しい娘。一人旅と見えて連れもなし、さうしてマア、順禮さうな。大方、一番の札を納めに參らんすのであらう。

きよ　アイ、わたしや、順禮の者でござんす。連れ衆はたんと向うに待つてゐやしやります。

ト　氣味惡さうに云ひ〳〵、本舞臺へ來て床几に腰をかけ。

幸ひのこの床几、暫らく休んで行きませう。

ト　巖山も同じく腰かけ

巖山　コレお娘、こなさん、連れがあると云ふけれど、一人旅ぢや。さうか〳〵。一人旅といふものは、とんと何かに不自由なものぢや。おれが連れになつて、やりやんしよ。おれが連れになると、その勝手のよい事は、道中で馬、駕籠の下りきまり、宿へ着くと、草鞋脫がしてやらうし、風呂へ入つたら、脊中も流してやらうし、また寐所へ入つたら、足も揉んでやらう。うんと云や。そして又、西國三十三ケ所は云ふに及ばず、伊勢は七度、熊野へ三度、愛宕樣へは月參り、名所古跡も見物させ、鬼界ケ島の果までも、手に手を取つて、連れ立つて行かう程に、おれが連れにならんせ。

ト　此やうな事、何なりとも出鱈目に云うてゐるうち、おきよ、氣味の惡いこなしにて、よき時分に、ソツとさし足して、橋がゝりへ入る。巖山これを知らずに、しやべつてゐて、この時、おきよの方を見て、ゐぬゆゑ、悄りして

ヤア〳〵〳〵〳〵。いつの間にやらお娘は、どこへやら行き居つたわい。

ト　捨ぜりふ、いろ〳〵あつて、そこら探し見て、草履を抛つて見て、

そんならこの道。さうぢや。

ト　向うへ走り入る。臆病口より、おてつ出て、長九郎を尋ねる模樣あつて、床几に腰かける。ト此うち長九郎も、臆病口より窺ひ出て、おてつの後姿を見て、

お尋ね者と心得ろこなしあつて、おてつの腰かけ居る
を眼鏡で見る事、いろ〳〵あつて

長九　脊高く、色白く、エヽ、むつちりとしてよい肉あひ、女中さん、こちら向かんせ。

トおてつ、腹の立つを、ヂツと堪えろこなしにて、扇にて、顔を隠す。長九郎、捨ぜりふにて、戀しかけること、いろ〳〵あつて、トヾ、おてつ、長九郎が胸ぐらをキツと捕へ

てつ　エヽ、茲な悪性者めが。

ト腹立てる。長九郎、恟りして、いろ〳〵詫び言する此うち臆病口より、おちよぼ走り出で、これも腹の立つこなし、いろ〳〵あつて、長九郎を捕へて

ちよ　エヽ、氣の多い性悪男。アノマア、親にも持ちさうな人と、色事するとは、あんまりぢや。

てつ　女子さへ見れば、虫の強い。あんな者を抓むとは、ちつと耻も知つたがよい。

長九　サア〳〵、尤もぢや、道理ぢや。

ト始終、色事師の心意氣。おてつは長九郎の手を取り下手へ捨ぜりふにて連れ行く。おちよぼは、長九郎が手を取り、上手へ、捨ぜりふにて連れ行く。双方より引ッ張ろ。此うち長九郎、かけてゐる眼鏡を落す事あろ。これより双方、間違ひにて、長九郎はおてつを、おちよぼと思ひ、出鱈目に、おてつの悪口を云ひ、又おちよぼを、おてつと思ひ、同じく出鱈目に、おちよぼを悪く云ふ。兩人腹立て、トヾ、長九郎を差上げ、臆病口へ、連れて入る。始終神樂、關屋はタテしながら出て、暫らくタテあつて、また上手へ追ひ込む。トおてつ、長九郎を探し出て來ると、繼橋、後より出て

繼橋　コレ、女中さん、お前の探してゐやしやんす男さんは、あそこぢや、此方へござんせ。

ト臆病口へ、おてつを連つて入る。トおちよぼも、長九郎を探し〳〵出ろ。繼橋また出て

コレ、お娘さん、お前の尋ねてゐやしやんす男さんは、あそこに行てぢやほどに、逢はして上げやんしよ。

トおちよぼを連れて、臆病口へ入る。長九郎出て

長九　ハテ、面妖な。どこで落したしらん。

ト眼鏡、探し〳〵出る。繼橋、おちよぼ、おてつに猿轡はめ、繩をかけ出て

繼橋　コレ、お尋ね者の二人、お前に手渡ししやんしよ。

ト長九郎、近日のこなしにて

長九 ヤア、お尋ね者とは。

トうろ〳〵として見るうち、里姫、繼橋、關屋、そろそろとさし足して、橋がゝりへ入る。長九郎、兩人を引立て、

代官所へ連れて行て、褒美の金にせう。

ト繩付きを引ッ張る。返し。右の道具引いて、淺黃幕切り落す。

造り物、一間の二重舞臺、籠り堂の體。鐵燈籠、所所に吊りある。兩方よき所にて、守護所の立札あり、一面に紅葉の吊り枝、上手の方、紅葉の幹あり。すべて那智山の麓、籠り堂の體。蟲の音、靜かなる鳴り物にて道具とまる。

ト向うより、おきよ、前の順禮の形にて、ソロ〳〵出て

きよ エヽ、嬉しや、最前の惡者も、後からついて來ぬさうな。行く先とても知れぬ旅路、所の人に尋ねたら、向うが那智山の麓、籠り堂ぢやとの事。今宵はあそこに夜を明かし、明日は觀音樣へ一番の札を納めうわいなア。

トそろ〳〵本舞臺へ來て、二重舞臺へ腰かけ、草鞋を脫ぎ、こなしあつて

幸ひ、今宵は父上の御命日。せめては心ばかりのとひ弔ひ

トあたりを見廻はし、箱を引寄せ、火入れの火を探し懷中より、香包みを取出だし、香を炷く事、よろしくあつて

敵は誰れとも知らねども、御最期ありしその所に、殘し置いたる割り笄、敵の手がゝり、母樣と、いろ〳〵に尋ねても、今に在所も知れざれば、さぞかし草葉の蔭から父樣の、お叱りなされてござるであらう。お免しなされて下さりませ。兎角に賴むは佛の御利生。南無大悲觀世音菩薩。

〽ふだらくや、岸打つ波は三熊野の

ト此うち、おきよ手を合す。

何卒、修羅の妄執を晴らさせてたび給へ。那智山の觀世音樣、二番に同じく、紀三井寺。

〽故鄕を、はる〲爰に紀三井寺。

肌の守は親の筐、日頃信心怠らず、祈り參らす觀音樣、又この香包みは、玉かづらと號けて、父樣の御秘藏。い

つぞや鎌倉に於て、妾に云ひ號けしてたまはりし、小割傳内さまとやら、今はいづくにましますやら、在所知れねば逢ひ參らせ、力となつてもらふ事も出來ず。夫婦のしるしに送り賜はる、玉かつら片々も、佛に供ずるばかりにて、ほんに任せぬ浮世ぢやなア。

ト愁ひのこなし、隨分、靜かにあろべし。此うち、向うより、小割傳内、六十六部の形にて鉦をならし、花道のよき所にて、本舞臺の方を見やり。

傳内　我れ、相模の國に於て、思はず肉身の弟を討たねばならぬ義理に迫り、又その上、母が自害、おふさどのの最期、若殿はじめ常松さまで、敢なき有さま、變り果てたる浮世とは、アレ〱、目のあたりなる木々の紅葉飛花落葉の世の中ぢやなア、

ト少し愁ひのこなしあつて、此うち、香のかをりきくこなしあつて

アレ、向うに見ゆるは、この山の麓の籠り堂と覺しく、人跡絶えし秋の末、通夜する人もあると見えて、佛へ供ずる一木のかをり。ハテ、心得ぬ。

ト云ふうち、少し合點のゆかぬこなしあつて

この香は、慥かに玉かづらと號けし名香。某、鎌倉に於て、網干家へ仕官の砌り、同じ家中、淸水李之進どのの御息女、おきよどのと緣談の節、彼の方より贈られしその玉かづらに變らぬ香氣。ハテ、審かしい。

トいろ〱思案しながら、本舞臺へ來る。此うち、おきよ、二重舞臺の上座によろしくあるべし。傳内、こなしあつて、二重舞臺へ笈を下ろし、腰かける。トおきよ悄りして

きよ　誰れぢや〱。

ト咎める。傳内よろしくあつて

傳内　オヽ、さう仰しやるは女中さうな。定めて旅人でござらう。某は廻國の修行者、今宵はこの籠り堂にて、夜を明かさうと存じて參つた。許さつしやれ。

ト云ひ〱二重舞臺へ上がる。おきよこなしあつて

きよ　わたしは、西國三十三ヶ所へ札を納める者でござりますが、殊に今宵は、志す佛の命日ゆゑ、夜と共に回向いたさうと存じて、通夜して居ります。

傳内　オヽ、それは御奇特な順禮のお女中。某も、佛へ仕へる修行の身でござれば、とも〲御回向を申しませう。

きよ　それは、近頃御苦勞さま。

ト此うち傳内、心意氣あつて

傳内　卒爾ながら、お尋ね申したいは、其許さまが、いま
佛へ供じさつしやりましたその香は、親御からのお讓り
か。又は他家からお求めなされましたか。

トおきよも心意氣あつて

きよ　これはマア、變つた事のお尋ね。成る程、これは父
樣の御秘藏ありし名香ゆゑ、斯樣に肌身離さず、その上
今宵の追善も、心ばかりの香の一炷き。

傳内　成る程、常ならぬ香氣。もしや、其許の御生國は、
播州ではござりませぬか。

トおきよ、恟りして

きよ　あなた樣は、何ゆゑ御存じでござります。

傳内　すりや、播州とな。

きよ　アイ。

傳内　然らば、網干の御身内、清水杢之進どのゝ、由縁の
人ではござらぬか。

きよ　ほんに、詳しう御存じの上は、何をか包みませう。
如何にも、その杢之進が娘でござります。

傳内　ナニ、杢之進どのゝ娘御とあるからは、おきよどの
ではござらぬか。

きよ　あなたは、どうしてわたしが名まで

傳内　存じ居るその仔細、これおきゝ下され。

ト傳内、懷中より、香包みを取出し、香を炷き、おき
よへ渡す。おきよ、これをきく事あつて、恟りして

きよ　これも變らぬ一木の名香、

傳内　銘は卽ち、

きよ　玉かつらではござりませぬかえ。

傳内　如何にも。

きよ　そんなら、あなたは父樣が、鎌倉に於て云ひ號けあ
りし、傳内さまではござりませぬか。

傳内　如何にも小割傳内とは、拙者が事。

きよ　エヽ。

トおきよ、恟りするうち、嬉しき心意氣ある。傳内、
不思議なる顏して

傳内　その杢之進どのゝお息女、おきよどの、見れば供も
連れざる一人旅、これには何ぞ樣子がござらう。樣子が
早う承はりたい。

トおきよ、愁ひのこなしにて

きよ　ほんに悲しいわたしの身の上、聞いて不便と思うて
たべ。父樣は、去年の秋、お國の城下の片ほとり、垂水

の松原にて。
ト泣く。
傳内　ナヽなんと致された。
ト不思議さうに云ふ。おきよ、よろしくあつて
きよ　人手にかゝつて、お果てなされましたわいな。
ト大泣き。傳内、愕りして
傳内　ナニ、人手にかゝつて御最期とな。して、又、敵は
よもや、町人百姓にてはあるまじ。敵の實名、國所は、
いづくの誰れ。早う、樣子を云はつしやれ。
ト急き込んで云ふ。
きよ　サア、その敵は、何人とも知れず、闇討ちにおあひ
なされましたわいな。
傳内　ヤ、すりや敵は誰れとも、相分からず……然らば、
何を目當に、何を便りに。敵を尋ぬる心當りでもござる
か。
トおきよ、割り笄を懐中より出し見せる。傳内、取つ
て見て、
すりや、この割り笄を敵の手がゝりとな。
きよ　アイ、それが父樣の死骸の側に、落ちてあつたが慥
かな證據。母樣と、わたしとは、別れ〲に在所を尋ね
ても、今以て知れませぬ。世に頼りなきわたしが身の上
どうぞ力となつて、助太刀して下さりませ。
傳内　我れとても、其許と云ひ號けせし上からは、舅の敵
舅御は、實父も同然、やはか尋ね出さで置くべきか。
きよ　エヽ、嬉しうござります。
ト拜み、嬉しき心意氣、いろ〲あつて懐中より首に
掛けたる守り袋を取り出し
きよ　これと云ふも、日頃信心する、この觀世音の守り本
尊樣のお庇。エヽ、有り難う存じます。
ト傳内も守り袋を出し
傳内　この所に於て、不思議に逢うたも、即ち、この守り
本尊さまのお引合せ。
きよ　そんなら、夫婦變らぬ、固めにどうぞ、守を取替へ
て下さりませ。
ト兩人、守り袋を取替へる。傳内よろしくあつて
傳内　今宵は、夜と共に、亡き人の菩提を弔ふこの籠り堂
きよ　枯れたる木にも花咲かす
傳内　觀世音の誓ひもあれば
きよ　何卒早く修羅の苦患を
傳内　お助け申すがせめての孝養。

きよ　エヽ、嬉しうござります。

ト傳内、手を洗ひ、經机に向ひ、一心不亂に

傳内　南無幽靈出離頓生菩提。

ト此うち、おきよ・いろ／＼もどかしき心意氣にて、ソロ／＼と傳内の側に寄り

きよ　互ひに親々が云ひ號けはしてあれど、鎌倉網干と國を隔て、お顔を見たは今宵が始め。嬉しい事は嬉しいが、ほんに情ない男の心、其やうに回向ばかりしてゐずと、ちつと此方を向いて下さんせ。

ト摺りよると、傳内・ちやつと飛び退き

傳内　アヽ、コレ、みだらな事を致されな。夫婦の名はありながら、互ひに大切なる身の上。敵を尋ね、本望達し、某も心に誓ひし願望成就するまでは、不犯にて修業の旅。必らず側に寄るまいぞ。

トきつと云ふ。おきよ、いろ／＼辛氣なる心意氣あつて

きよ　親々のお許しありし夫婦の仲、佛様も見通しでござります。其やうに云はずとも

トまた寄らうとする。傳内、鉦机を此方へ持つて來て、おきよに構はず回向する。おきよ、机を取つて

コレイナア。

ト寄り添ふ。

傳内　ハテ、惡じやれな。

トこの途端に、兩人ヒツタリと抱き付く。ト籠り堂の屋體一杯に山幕下り、後へ引き込む。東西の紅葉の幹殘りあるべし。

造り物、平舞臺、向う一面の山に松あり、二重屋體籠り堂閉ぢ明けあり。上手、平舞臺に紙帳吊りあるよき所に臺松あり、すべて八鬼山峠の模様、雨車の音、靜かなる體。

ト向うより、巖山、雲助二人連れ、いづれも破れ笠などかぶり、捨ぜりふにて出で

巖山　エヽ又、搗てゝ加へて　この雨は・何の事ぢやぞいわいらも、力一杯尋ねてくれい。その美しい順禮一人。峠を通つたとの事ぢや。よもや、この夜中に峠は越えはせまい。もそつとぢや。尋ねてくれい。

雲助　その代り、キツと酒手があるであらうなア。

巖山　さうとも／＼、探し出しさへすれば、キツと酒手は

遣る。

トこんな事云ひ〳〵、本舞臺へ來て、巖山、紙帳を見つけ、兩人に囁き、嬉しさうな心意氣あつて

巖山　〆めたぞ〳〵。あそこに紙帳吊つて寢てゐるが、晝のお娘に極まつた。草臥れてよう寢てゐる所へ、ヌツと入つてせしめるつもりぢやほどに、わいらも、大きな聲せずと、あたりへ氣を附けてくれ。

雲助　合點ぢや〳〵。

巖山　その代り、おれが跡では、わいらにも、うまい事させやうわい。

雲助　そりや、忝ない。

ト巖山、をかしき身振りにて、いろ〳〵あつて紙帳の內へ入る。トばた〳〵にて巖山をポンと投げ、傳內、六十六部の形にて、ヌツと出て

傳內　何者なれば、狼藉ひろぐ。

ト此うち、巖山、起き上がつて、傳內を見て恟りして

巖山　ヤア、順禮の娘と思ひの外。

雲助　廻國の修行め。

巖山　えらい目に會はし居つた。

ト三人、一緒にかゝるを、ちよつと立廻りにて、見事に皆々を當て

傳內　さては、この奴等は、この邊の山賊よな。旅人を妨ぐ憎い奴‥‥それはさうと、今まざ〳〵と見たる夢のうち、所は麓の籠り堂にて、清水杢之進どのゝ娘おきよに巡り合ひ、互ひに守り袋を取替へしと思ひしに

ト云ひ〳〵懷中より、守り袋を取出だし、とくと見て

こりや、今まで掛けたる守とは、袋の裂れも違ひ‥‥さては、正夢であつたか。

ト此うち、雲助二人、起き上がつて、窺ひより

雲助　うぬ。

トかゝるを、ちよつと立廻りのうち

傳內　すりや、舅どのゝ、最期の樣子も。

トまた立廻りにて

敵討に出でたる娘。

雲助　なにを。

ト立ちかゝるを、トン〳〵と烈しき立廻りにて、トゞ雲助二人を追ひ込み

傳內　ハテ、心ならざる夢の樣子。何にもせよ、麓へ下つて、實否を糺さん。

ト笈をかたげ、鉦打ち鳴らし、靜かに向うへ入る。ト

橋がゝり二重屋體、籠り堂の内より、おきよ、順禮の形にて出で、あたりを見廻し、いろ／＼こなしあつて

きよ　今のは夢であつたかいなア。日頃戀しい／＼と、思うてゐる傳内さまに、玉かづらの香を證據に巡り合ひ、父様の御最期の様子も語り、守り袋を取交したと思うたが。

ト云ひ／＼懐中より、守り袋を取出し見て、悔り

こりや、わしが常に肌身に添へてゐた守り袋の裂れとは違うてある。そんなら、矢ツ張り傳内さまに、逢うたと見しは、正夢とやら云ふものであつたのいなア。本意ない別れであつたなあ。

ト辛氣なるこなし。此うち、巖山、起き上がつて、おきよを見附け

巖山　ヤア、こりや晝の順禮のお娘。其方に逢はうと、一遍と探してゐて、六部めにえらい目に會はされた。これ程までに、焦れてゐる男、幸ひあたりに人もなし、この間にツイ／＼。

ト寄り添ふを、振り放し

きよ　エ、、うるさい。この人わいの。側へ寄つたら、きかぬぞや。

巖山　なんぢや、側へ寄つたらきかぬ。晝から探したお娘、此まゝゝ置かうかい。

ト又しなだれかゝるを、おきよ、アレイ／＼と、あちこち逃げ歩く事、いろ／＼ある。此うち、向うより笹屋半兵衛、引廻し着て、三度笠、飛脚提灯、笹半と記したるを下げ出で、花道にて、ちよつと捨ぜりふあつて、本舞臺へ來て、巖山を見事に投げ、おきよを見て

半兵　オ、、見れば、若い女中さうな。大膽な。夜中には男も通らぬこの峠、狼藉者に出合つて、どこも怪我はなかつたかいの。

トおきよ、嬉しき心意氣あつて

きよ　これはよい所へよう來て下さりました。

ト此うち巖山、起き上がり

巖山　アイタ／＼。エ、、娘に似合はぬ、どえらい力ぢや。

ト云ひ／＼半兵衛を見て悔り。

ヤア、すてつんころりと投げたは、われぢやな。

半兵　夜中に、女子を捕へ、狼藉ひろぐゆゑ、投げたが何ぢや。

巖山　ヤイ、納めな／＼。見れば、旅人の形をして、この

八鬼山峠を夜通るは、わりや、山賊ぢやな。なんぼ、われが納めた顔しても、ビクともせうかい。そんな事を、怖がるおれぢやない。

トこんな事云ひ〳〵、よき時分に橋がゝりへ逃げて入る。おきよ、あたりを探すこなしあるを半兵衞見て

半兵　コレ、女中、こなた、何ぞ尋ねさんすか。

トおきよ、ちよつと心意氣あつて

きよ　アイ、ちつと尋ねる物がござります。

半兵　何ぞ、落さんしたか。

きよ　アイ、今の先まで、あつた物が。

半兵　大方、今のドサクサに、落したのであらう。そしてマア、落した物は、何ぢやぞいの。

ト尋ねる。おきよ、隱すこなしにて

きよ　イヽエ、ちと大事な物でござんす。

半兵　ムウ、大事の物か。

ト半兵衞、提灯の灯にて探し、割り笄をキッと見て、さてはト云ふこなしにて

コレ、こなさんは、播磨の人であらうがな。

トおきよ、悔りして

きよ　イヽエ、アノわたしや、出羽の庄内の者でござります。

半兵　何を云はんすぞいの。おれは商賣が、宿屋ぢやによつて、國々の訛りはよう知つてゐる。こなさんは、播磨ぢやわいの

きよ　エヽ。

半兵　しかも網干の家中、こなたの名は、おきよと云はうがの。

トおきよ、悔りして

きよ　それ知られたら。

ト懐劔にて切つてかゝるを、半兵衞よろしく止めて

半兵　エヽ、女子の手にあふやうなおれぢやない。コレ、女中、さる人に頼まれて、この割り笄を取り戻してくれいとあるゆゑ、往來に氣を附けてゐるのぢや程に、こりや、おれに下んせ。

きよ　イヤ、それ遣つては。

トまた切りかゝるを、止めて

半兵　エヽ、命ばかりは助けてやらうと思うたに、こりや、酷い目、見ずばなるまい。

きよ、そんなら、其方は、敵の餘類。

トまた切りかゝるを、立廻りにて、半兵衞、おきよを

一かせ切る。おきよ、口惜しがる事、いろ〳〵あつて

きよ　エ、、死にともない〳〵。敵の本名も聞かず、やみやみ殺さるゝか。エ、、口惜しい。どうぞ、夢の中に逢うた傳内さまの、お顔を一目見て、敵の事が頼んで死にたいわいの。

ト大泣き。半兵衞、あたりへ氣を附ける事、いろ〳〵あつて

半兵　エ、、こま言云はずと、くたばつてしまへ。

トぐつと止め刺し、割り笄を懐中して、おきよの死骸を上手の切り穴へ抛り込んで

谷底へ蹴込んでしまへば、これでよいワ。得てこんな所に、證據を落して置くものぢや。

トこんな事を云ひ〳〵、そこらを提灯の灯影にて見廻し〳〵上手へ行く。よき時分に見付け洞穴より、お須磨の方、黒裝束、着流し、頭巾著て、龕燈提灯を袖にて隠し、窺ひ出て、舞臺の正面にて

須磨　曲者。

ト半兵衞に龕燈を差出す。

半兵　エイ。

ト最前の割り笄を、手裏劍に打つ。お須磨の方、よろしく止める。この途端に、半兵衞、西の通ひ路へ、提灯の灯を吹き消し、走つて入る。よろしく　　幕。

造り物、平舞臺、一面の黒幕、石塔並びある。臆病口、折り廻し障子屋體、但し反古貼り。橋がゝり石塔に枕飯を供へある。すべて墓原の體。一つ鉦にて、幕開く。

ト向うより巖山、丸裸にて手を組み、寒さうにして出て

巖山　ヤレ、寒や〳〵、春寒いと秋ひだるいとは、堪へられぬと云ふけれど、このマア秋の夜に、寒さとひだるさとが、一時になつて來ては、堪るものぢやない。エ、、いま〳〵しい。

トぼやき〳〵本舞臺へ來て、石塔の枕飯を見て

ヤア、爰に枕飯が供へてある。これは忝ない、さらば御馳走にあづかりませうか。

ト枕飯を取つて、喜ぶこなしあつて、食はうとすると、内より犬の聲しきりに聞える。

エ、、いま〳〵しい。

ト石塔の前の石を拾ひ、犬に投げる模様あつて、また飯を食ふ。トまた犬の聲するゆゑ、犬を追ふ模樣、始終、捨ぜりふあるべし。此うち、臆病口より、墓守鈍願出て

鈍願　ドリヤ、もう枕飯、下げてもよからう。樂しんでゐて、犬めに食はれては詰まらん。

トいろ〳〵石塔の前を見て

ハテ、面妖な。いま供へた枕飯が。

トそこらを見廻し、巖山が喰つてゐるを見附け

ヤア、わりや、枕飯を食つてゐるか。

ト巖山、悄りして

巖山　イヤ、そウ、斯うひだるうては、枕飯どころか、犬の五器でも大事ない。

鈍願　エ、、何吐かすぞい。それはおれが食はうと樂しんでゐるのに、いま〳〵しい。此方へおこせ。

ト無理に引ッたくりかゝる。巖山、止めて、

巖山　命の親のこの枕飯、遣る事はならぬわい。

ト鈍願、腹立て

鈍願　エ、、遣る事ならぬなども厚かましい。この枕飯は、墓守りの餘得ぢや。此方へおこせ。

巖山　イヤ、ならぬ。

ト兩人、枕飯を引き合ふ。巖山、持つて逃げるを、鈍願、追ひ歩く。石塔の間に下り、あちらこちらへ、いろ〳〵ある。ト此うち、向うより、葬禮の人數、丸提灯、影燈籠、油樽を差荷ひにして來る。鈍願と巖山は、この葬禮の中で、飯取り合ふ。皆々、入れ亂れに、ゴッチヤになりて、鈍願、巖山は、油樽を差上げ、兩人、與勘平彌勘平、二人奴の模樣にて、キッと見得になり、ソッと平舞臺へ下ろす。此うち、葬禮の人數、呆れゐる事、よろしくあるべし。兩人は油樽を中において、顏見合して

鈍願　おれが、われか。

巖山　われが、おれか。

鈍願　頭の皿の禿げたまで

巖山　微塵變らぬ、臺なし坊主。

鈍願　でつかり据ゑた三里の灸。

巖山　摺り剝けたまで、違はぬ〳〵。

鈍願　つくね坊主の同作ぢやと、互ひに呆れしばかりなり。

ト淨瑠璃のやうに云ふ。葬禮の人數、口々に

皆々　此方の大事の佛を、なんで弄り物にするのぢや。

鈍願　これも、この乞食坊主め。其方へ片寄つてゐい。

巖山　ハイ〳〵。

ト巖山、片脇へ寄る。鈍願、油樽を見て

鈍願　申し、申し、この佛は、何で此やうに、油樽へ入れてござりますのぢや。

百姓　されば聞かしやれ。昨日、在所の者が、八鬼山峠を通つたら、おまんぢやないが、谷底見たれば、不便や、年の頃十六七の娘、しかも器量は飛切り上々物、順禮と見えて、笈摺を掛けてゐたが、むごたらしう切棄てゝあつた。その百姓が戻つて、村中へ話したら、此方の村の庄屋どのは、女子にかゝると、情深い大の腎張りで、女の死骸と聞いて、大方熊野へ參詣したのであらう。烏に突かすも不便ぢやとて、おらに云ひつけ、有合せの油樽を持たせて、その死骸を持つて戻らせ、そこで今夜、この墓所へ葬むらしやれとの事ぢや。コレ、わしらも、手傳うて埋める程に、指圖して下され。サア、お布施は、先へ渡すぞよ。

ト紙に包みし錢を渡す。鈍願、戴き

どん　これは、御叮嚀に。

トこの前より、巖山、始終を聞いて、恟りしてゐる。

皆々、鋤や鍬にて土を掘り、捨ぜりふにて、油樽を埋めうとする。巖山、この時、皆を突きのけ

巖山　そんなら、この中の佛は、八鬼山峠にて殺されてゐた順禮の娘か。エヽ、さういふ事とは露知らず、どこを尋ねたら逢はれうと、ひだるい腹を抱へて、ウロ〳〵尋ねてゐるわいやい。

ト泣き〳〵云ふ。

百姓　エヽ、この坊主めは、何を吐かすのぢや、氣でも違ひはせぬかいの。

同　こんな奴に構はずと、葬むつてしまひませう。

ト皆々、掘つた穴へ油樽を埋む。巖山とめて

巖山　どうぞ、一目見せて下され。

皆々　エヽ、面倒な。

ト鍬鋤にて叩き伏せ、皆々捨ぜりふにて、橋がゝりへ入る。鈍願も、よろしくあつて

鈍願　もう追ツつけ、お客人のお立ちの時分ぢや。ドリヤ、茶でも沸かして進ぜませうか。

ト合ひ方になり、障子屋臺へ入る。巖山、ソロ〳〵這ひ出て、あたりを見廻し、いろ〳〵あつて

巖山　あつたらお娘を、酷い目に逢はし居つた。大方、お

れを投げた旅の奴であらう。可哀い事ぢやなア。
ト泣き〳〵あたりを見廻して
うまいワ〳〵。この間に掘り出して顔を見よう。
ト鋤を持ち、捨ぜりふあつて、穴を掘りおこす思ひ入れあつて、油樽の蓋を取り、おきよの顔をいろ〳〵眺め、思案し、イヤ〳〵得てこんな時には、ヒウドロヒウドロとくはされては、却つて恐ろしいと云ふこなしあつて
エヽ、美しい事この上なし。
ト手を取り、引上げ見て
コレ、順禮のお娘、おれが此やうに、思うてゐる心が通じたら、可愛いわいなと、たつた一言云うて下され。
ト始終、清玄の思ひ入れ。或ひは鳴神、菴室の入れ事、いろ〳〵あろうち、寝鳥にて、おきよ、ソロ〳〵顔を上げ
きよ　エヽ、死にともない〳〵。死にともないわいなア。
ト微かなる聲にて云ふ。巖山、愕りして、身を慄はし、逃げようとするを、おきよ、巖山を、しかと捕まへて放さぬを、無理に逃げようとするはずみに、急所をしめらるゝ思ひ入れ、ウンとこける。おきよも、其まゝ、バツタリと又こける。始終寝鳥にて、よろしくある。また巖山、氣が附き、直ぐに起き上がり、おきよを見て、こなしいろ〳〵あつて、ヤレ〳〵嬉しや、また死んださうなと、おきよを抱き起し、いろ〳〵こなし。向うバタ〳〵と音する。巖山これにて愕りし、飛び退き隱れる。ト傳内、笈を負うて、杖突き、墓守りの障子屋體より出て
傳内　もう〳〵、それにお出でなさりませ。今宵は段々のお世話、忝なうござります。御縁もあらば、重ねてお目にかゝりませう。
ト云ひ〳〵花道の付け際まで、ソロ〳〵行く。トおきよ、少し顔を上げ、微かなる聲にて
きよ　申し、申し。
ト呼びかける。傳内、心意氣あつて、立ちどまり
傳内　ハア、誰れぢや、おれを呼ぶさうな。
ト思案し、あたりを見廻し、心得ぬこなしあつて
誰れも人影見えず：：さては松吹く風か。谷の谺を人聲かと思ひ
トこなしあつて
ドリヤ、ソロ〳〵行かうか。

ト花道へ靜かに行く。又おきよ、微かなる聲して

きよ　申し申し。

ト傳内、心得ぬこなしにて立ちどまる。

修行者樣、お待ちなされて下さりませ。

トこれにて傳内、キツとなり

傳内　修行者待てと、呼びかけしからは、正しく人聲。

ト本舞臺、薄原の間を窺ふ事、いろ／＼あつて、靜かに立ちどまり

我れを呼びかけしは、何人なるぞ。

ト云ひ／＼おきよを見附ける。おきよも、ヂツと傳内の顔を見て

きよ　ヤア、あなたは。

ト惘りする。傳内も心意氣あつて

傳内　ムウ、こなたも、どうやら見たやうなお人。

トちよつと思案のこなし

きよ　一昨日の夜、八鬼山峠の籠り堂にて

傳内　イカサマ、思ひ合する合ひ紋に

きよ　緣を摑みし玉かづら

傳内　その香包みは夫婦のしるし

きよ　互ひに名乘り合うた上

傳内　舅どのゝ御最期も

きよ　敵の樣子、語りしは

傳内　すりや、正夢で

二人　あつたよなア。

ト兩人よろしくあつて

傳内　然らば其方は、網干の家中、淸水杢之進どのゝ息女おきよどのでござりますか。

きよ　アイ、左樣でござります。あなたは小割傳内さま、おなつかしうござりますわいな。

ト取りつき、泣く。始終、傳内、不思議なる心意氣にて

傳内　夢の中に承はりし、舅御の非業の最後、母御もろとも、敵討に出でし其許と、この場の樣子、ハテ、訝かしい。定めてこれには、樣子がござらう。仔細は何とてござる。

トきつと云ふ。おきよ、よろしくあつて

きよ　さればでござります。まざ／＼見たる夢の中に、あなたに身の上の、憂き事しげきあらましを、お話しせしと思ひしが、夜半の嵐に夢さめて、本意ない別れのその所へ、晝のうちからつけ歩く、乞食坊主に見つけられ、

既に我が身を穢されんとせし所へ、旅人一人來合せて、その場の難儀は遁がれしが、その旅人こそは敵の餘類。心は矢竹に早れども、甲斐なき女の身の悲しみ。遂にこの身は切り殺され、果敢なき最期を

ト云ひ〳〵、我が身に別條なきに心附き、大きに恟りして

ほんに、わたしは死んだのに、矢ツ張り生きて居りますかいな。

ト傳內も、こなしあつて

傳內　イカサマ、身內に一つの疵なきは、ハテ、合點のゆかぬ。

ト兩人、訝かしく思ひながら、おきよ、心附きたるこなしあつて、

きよ　もしや、このお守の御利生にて。

ト云ひ〳〵懷中より、守り袋を出して見て、恟りして

ヤア、この守り袋は、ズタ〳〵に。

ト傳內も、恟りして手に取上げ

傳內　成る程、この守は、年來某が所持せしところ、夢の中に取替へありしも、佛の不思議。斯くズタズタに破れしも、惡人の刃にかゝり、觀世音が御身替りに立たせ給ひしか。

きよ　そんなら、守の御利生にて

傳內　不思議の利生もこれ偏へに

きよ　那智山觀世音の御かげ。

傳內　末世に及べど、誓ひを違はぬ佛のお慈悲

二人　有り難うござります。

ト上手の方を拜む。この前より、巖山、起き上がり、始終を聞いて、いろ〳〵腹立てる事あつて、鋤を取つて

巖山　エヽ、いま〳〵しい二人の奴等。戀の意趣ぢや、覺悟せい。

ト叩きかゝるを、傳內、おきよを後に圍ひ、よろしく立廻りありて、トゞ巖山を見事に押へる。おきよもよろしくこの見得にて紋板通りへ、雪松原の布幕引く。

ト在鄉唄になり、向うより馬方紅藏、馬を引き出る。謎坊主春雪、旅姿にて、琵琶を背負ひ、馬に乘り出る。後より馬方二人、付き出て花道よきところにて

馬一　ヤイ、紅藏、待ちやアがれ。

馬二　わりやマア、新米の癖に、よい仕事をさらすなア。

馬一　この盲目どのは、後の宿から、おれが付けて來たの

ぢや。

馬二　われに先越されては、この海道で面出しがならぬ。

馬一　サア、酒手の分け前せうかい。

ト口々にやかましく云ふ。

紅藏　エヽ、べり〳〵と、ようはしやいだ顋ぢやなア。おりやこの海道で顏は新しいけれど、馬士の紅藏ぢや。おれが馬に乘つた旦那の酒手をば、わいらに分けたというては、面が立たぬ。あつたら口に風引かさずと、とつとと海道を働らいてうせいやい。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。矢張り二人、後より

馬一　エヽ、それをわれに習はうかい。キリ〳〵と酒手の分け前せう。

紅藏　この紅藏が斯う云ひ出したからには、どこまでもならぬわい。

馬二　さう吐かしや、腕づくでも取つて見せう。

紅藏　こりやをかしいワ。そんなら一番せりふせうか。此方の客人は盲目どのぢや。怪我さしては、おれが濟まぬ……コレ、盲目どの。

ト春雪、氣味惡さうに

春雪　ハイ〳〵、何でござります。

紅藏　イヤ、外の事でもないが、お前の今、聞かんす通りぢや。此奴らと、ちとせりふがあるによつて、こなさんは、馬に乘つて、先へ行て下んせ。

ト春雪、惻りして

春雪　エヽ、滅相な。この盲目を乘せて、馬ばかりやらうとは、そりや胴慾ぢや。

紅藏　ハテ、馬ばかりでも、親方の内まで行く程に、氣遣ひせずと行かんせ。親方の家が、海道一番の宿屋、笹屋と云ふのぢや。

ト云ひ〳〵馬の尻を、鞭にて叩く。馬は一散に橋がゝりへ入る。此うち、紅藏、身構へして

サア、腕づくの勝負せう。みな一時にうせあがれ。

ト馬士、よろしくあつて

馬二　ソリヤ。

ト聲かけると、兩方より馬士、大勢走り出て、紅藏を取卷く。これより、大タテ、樣々あつて、ト、皆々を追ひ、橋がゝりへ入る。ヤアトコセイの唄になり、布幕、切り落す。

造り物、二重舞臺。上手、折り廻し障子屋體。橋が

がり宿札、熊野講中札の書割り。二重舞臺の端に、笹屋と書いた大行燈。よき所に、手代長九郎、帳箱扣へ居る。

長九　コレ〳〵女中達、大概に身じまひして、門へ出て、客を引かんかいなう。

ト宿屋の下女三人、奥よりバラ〳〵と出て

三人　長九郎さんの忙しない。

長九　なんのおれが、忙しかろ。門を見や。お客が大勢、通るわいの。

ト皆々、門を見て

女一　エヽ、長九郎さん・お客は通りはせぬわいなア。

女二　お前は近眼ぢやによつて、なんの門が見えやうぞいな。

ト長九郎、腹立て

長九　エヽ、なに吐かすぞい。

ト始終同じ鳴り物にて、橋がゝりより、仕出しの旅人大勢出る。下女皆々止めて、

三人　あなた、お泊りなせれませぬか。

長九　笹屋半兵衛は、爰でござります。

三人　宿一番の宿屋でござんす。

旅人　宿一番にして、女子達も美しい。

皆々　いつそ、爰へ泊らう〳〵。

長九　サア、どなた樣も、お御足をお洗ひなされませ。

ト此うち、下女皆、湯を取り、旅人の草鞋を解き、足を洗ふ。奥よりおてつ、世話女房の拵らへにて出で

てつ　どなた樣も、お早うござりました。サア、奥の大座敷へ……ソレ、御案内しや。

下女　サア、此方へお出でなされませ。

ト仕出し、皆々捨ぜりふにて、下女と皆々一緒に奥へ入る。トおてつ、そこらを見廻して、嫌らしきこなしにて、長九郎にしなだれかゝる。長九郎、嫌なと云ふ見得。此うち向うより紅藏、春雪を馬に乘せ、在鄕唄にて出る。本舞臺へ來て

紅藏　サア〳〵、お客を連れて戻つたぞ。

トこれにて、おてつ、長九郎、よろしくある。紅藏は、二重舞臺へ馬を寄せ

サア〳〵、盲目どの、爰がおれが親方、笹屋と云ふ宿ぢや。サア、下りさんせ。

春雪　オヽ、合點でござる。お世話ながら、手を取つて下され。

てつ　これはお早うござりました。
長九　そして、あなたは、お目が見えませぬか。
　ト此うち、春雪、二重舞臺へ下り
春雪　イヤモウ、目の見えぬ程、不自由なものはないぞ。
長九　左樣でござります。近眼でさへ、大抵不自由な事ぢやない。
春雪　コレ、馬士どの、杖を此方へ下んせ。
紅藏　オツト合點ぢや。サア〳〵。
　ト杖を渡す。奧より下女、三人ながら出て
皆々　あなたのお脊中に、負うてゐるのは、何ぢやぞいなア。
春雪　オヽ、これか。こりや琵琶というて、三味線よりはまた上品で面白いものぢや。
長九　そんなら、お前は琵琶法師ぢやの。
春雪　アイ、さうでごんす。
　ト此うち、料理人喜助出て
喜助　エヽ、この盲目どのは、なんの法師ぢやあらうぞ。江戸の淺草に居た、謎坊主ぢやあらうがな。
春雪　エヽ、なんの其やうな者ぢやない。
喜助　隱さんすな、さうぢや〳〵。

春雪　イヤ、モウ、さう知つてなら是非がない。成る程、わしや淺草にゐた謎坊主、春雪と云ふ者ぢや。
女三　そんなら、疾から評判のあつた、謎かけの坊さん。ようマア、お出でなされましたなア。
春雪　イヤ、あまりようも來ませぬ。一頃は、江戸中に、謎が流行したが、ちとこの邊も、流行らさうと思うて來ました。
長九　謎坊主なら今晩は、謎をかけて樂しまうか。
春雪　イヤ、モウ、草臥れてゐる。御免ぢや〳〵。
てつ　そんなら爰で、何なりと。
喜助　オツト、おれから先へかけて見よう。
春雪　これは迷惑。
　ト此うち、皆々捨ぜりふにて、ちよつと思案のこなし。
喜助　あるぞ〳〵。
春雪　何とぢや〳〵。
喜助　今年の芝居とかけて、なんとぢや〳〵。
春雪。ムウ。
　　トちよつと思案して
　これは緞子の折檻。
皆々　その心は。

春雪　當りが、えらい。
　ト皆々笑ふ。
てつ　矢ツ張り今度の芝居とかけては。
　ト春雪、ちよつと思案して
春雪　賑はしい在所祭りと解く。
皆々　心は〳〵。
春雪　作がよい。
紅藏　こりや、えらいワ。そんなら、おれが馬を休ませ、
臺所へ行たとかけては。
春雪　ハテサテ、長い謎ぢや。こりや、解けぬ。あげぢや、
あげぢや。
紅藏　ムウ、これが解けぬか……泉の金持ち。
春雪　その心は。
紅藏　めしぢや〳〵。
皆々　ヘア。
　トこの切れにて、紅藏は馬引いて下手へ入る。下女は、
　春雪の手を引き、喜助も一緒に奥へ入る。トおてつ、
　長九郎は殘り、よろしくあつて
てつ　エヽ、ヅツと、モウ、此方から思ふやうにもない、
辛氣な事であるわいな。

　トおてつ、帳箱を平舞臺の上手へ持ち行き、繪を畫く
事ある。長九郎も、色事師のこなしにて、いろ〳〵捨
　ぜりふあつて、おてつの側へ寄り
長九　お前、そりや、何を書くのぢやぞいなう。
てつ　ハテ、これには樣子のある事ぢやが、ほんに、辛氣
な事ぢやわいなア。
長九　イヤモウ、內では女子どもの手前もあるゆゑ、旦那
が留守でも、自由に話しもならぬ。
　ト云ひ〳〵おてつの樣子見て
オヽ、幸ひぢや。お前がさうしてゐてぢや所を、おれが
前方、璃寛が大坂でした、「傾城會稽山」といふ外題にて、
上田慶次郎の役、寺子屋の思ひ入れで、お前にいろはを
書かして、其うちに話しをさす。この趣向はどうであら
う。
てつ　そりやよいが、併し、わしは無筆ぢやによつて、字
を書いては分らぬ。わたしが心底は、マア、これぢやわ
いの。
　ト繪の畫いたを見せる。長九郎、眼鏡にて見て
長九　なんぢや、マア、をかしげな魚と見えるもの丶、下
に人形の首を書いたこの心は。

ト ちよつと思案して

とんと解らぬ。こりやなんぢや。どういふ心ぢやぞいの。

てつ　エヽ、鈍な人ぢや。こりや、鯒ぢやわいな。

長九　ムウ、鯒にした所が、下へ人形の首書いたは、どうぢや。

てつ　ハテ、こちの人と云ふ人ぢや。

長九　成る程。

ト 長九郎も絵を書いて、おてつに見せる。おてつ見て

てつ　こりや、何ぢやぞいの、羽掻のやうな物があるによつて、マア、鳥ぢやあらうが、それを二つ、書いた心は。

長九　そりや、烏ぢや。

てつ　イカサマ、真黒ぢやによつて、烏であらう。その烏を二羽書いたは。

長九　ハテ、かゝと云ふ事ぢや。

てつ　そんなら、わしをかゝぢやと思うて下さんすか。この人。

長九　かゝ。

てつ　オヽ、嬉し。

ト 寄りそふ。向うより半兵衛、口幕の形、引廻し旅姿にて出る。後より眼兵衛出て

眼兵　オヽ、イノヽヽ、半兵衛どのぢやないか。

ト 花道のよき所にて

半兵　オヽ、誰れぢやと思うたら眼兵衛。この間は逢はぬが、達者でよいワ。

眼兵　サア、おれも、貴様に逢はねばならぬ用があつて、この間から度々行けど、どちへか行かれたとの事ぢや、

半兵　サア、おれも岸和田まで用があつて、大分に隙が入つた。貴様が急用は、なんぢや知らぬが、爰は途中、マア、おれが内へごんせ。

眼兵　オヽ、さうせう。

ト 両人、本舞台へ来て、内へ入る。長九郎近眼にて

長九　これはノヽお客様、ようお出でなされました。

ト おてつ、眼兵衛吹き出し

眼兵　エヽ、長九郎、なに云ふぞい。

半兵　おれが戻つたのぢや

長九　さう云ふ声は。

ト 半兵衛と顔見合して

ほんに、矢ツ張り此方の旦那ぢや。

皆々　ハヽヽヽヽ

ト 此うち、半兵衛、引廻しを脱ぎ、こなしあつて

半兵　時に、おれが留守の間に、内の事は勿論、何も變つた事はなかつたか。
眼兵　爰の事は知らぬが、一昨日の夜、八鬼山峠に、十六七位の順禮の娘が殺されてゐた。なんと、いぢらしい事ぢやないか。
　トこれにて半兵衞、心に當る模樣、よろしくある。
が、そりやマア、餘所の事ぢや。おれが急に話したいと云ふは、先達てより貴樣に渡して置いた、網干家の重寶、傳授の一卷。
半兵　コリヤ。
　ト押へ
聲が高いわえ。諸國からの旅人の入込んでゐる此方の家、誰れが聞いてゐやうも知れぬ。マア、靜かに云はんせ。
眼兵　成る程。
　トうなづく。此うち、向うより、横田軍平、旅裝束、侍ひの形にて出で、本舞臺へ來て
軍平　ちよつと物が尋ねたい。笹屋半兵衞といふは、いづくぢや。敎へて下され。
　ト至つて大きな聲で云ふ。皆々恟りする。
長九　エ、、大きな聲の人ぢや。

　ト云ひ〱軍平に向ひ
ハイ、笹屋半兵衞は手前。あなた樣は、どこからお出でなされました。
軍平　ナニ、笹屋半兵衞はこれとか。ヤレ〱嬉しや、一遍と尋ねた。身共は播州網干の者、唐橋大弼よりの使ひでござる。
　ト大きな聲で云ふ。
半兵　すりや、大弼さまよりの御使者とな、マア、〱あれへ。
　ト軍平、ズッと平舞臺の上手へ直る。半兵衞よろしくあつて
遠方からのお使ひ、御苦勞に存じまする。
軍平　なんの〱、身共は役目でござるから、苦勞とも思ひませぬ。して、其許が、主人半兵衞どのでござるかな。
半兵　左樣でござります。
軍平　然らば、主人大弼さまのお使ひ、卽ち御口上の趣きは斯うでござる。先達てより申し置いたる淸水李之進が女房娘、某が所持せる、亂獅子に牡丹唐草の割り笄を證據にして、敵討に出立いたせしゆゑ、その地へ

参らば、見附け次第、ぶち殺して下さるゝやう、猶々頼み入る。

ト矢張り大きな聲して云ふ。半兵衛は、云ふなといふ仕方して、押へる事、いろ〳〵あるを、見向きもせず大きな聲して

また網干家の重寶、傳授の一卷、國次の刀と、二品とも熊鷹の眼兵衛と云ふ者を尋ねて取揃へ、此方へ持參あらば、褒美と引替へに仕らう。

ト大きな聲して云ふ。眼兵衛、云ふなといふ仕方するをきかず

先年、其方に、計らひくれよと申しつけし、先殿の實子土岐之助の事も承はりて、立歸れとある、主人よりのお飛脚。

ト大きな聲して云ふ。半兵衛、堪りかねて

半兵　エヽ、申し、お飛脚樣、大事な事を、お前のやうな大きな聲で、仰しやりましては、露顯の元、隨分と小聲で仰しやりませ。

軍平　イヤ、身共の聲は生れつきにて、これより小さい聲は、とんと出ませぬ。

半兵　そんなら、ザツと一筆お書きなされて下さりませ。

コレ、長九郎、硯箱を。

長九　ハイ〳〵。

ト掛け硯を取りに行かうとする。軍平止めて

軍平　コリヤ〳〵。硯には及ばぬ。身共は無筆でござるから、物書く事は出來ませぬ。

半兵　こりや困つた事ぢや。

ト迷惑さうに頭掻く。

眼兵　大弼さまも、大弼さまぢや。わざ〳〵遠方へ使ひをおこつさつしやるに、小聲で物の云はれぬ上、無筆の人を密事の使ひとは何事ぢや。

軍平　イヤ、拙者でなくては、委細が解らぬゆゑの事ぢや。

眼兵　そんならいつそ、奧の藪へでも、連れ立つて行て、聞かうかい。

半兵　それがよい。眼兵衛も、長九郎も一緒に。

長九　心得ました、

半九　大儀ながらお飛脚樣、奧へござつて何かの密事。

軍平　詳しう演舌いたさうわい。

ト矢張り大きな聲して云ふ。

長眼　サア、お出でなさりませ。

ト唄になり、長九郎、眼兵衛、おてつ、軍平を連れて
奥へ入る。後に半兵衛、殘り

半兵　大弼さまの密事、順禮の娘の事も、よし〱。

ト領づき、煙草盆、引寄せ、思案のこなしよろしくあ
る。ト向うより、お須磨の方、虛無僧姿にて尺八吹き
出る。ト後より捕り手二人、付き出て、いつもの通り
花道のよき所にて

捕手　ヤア。

ト聲かけ、十手振り上げる。お須磨の方、ちよつと見
返り、見得の心意氣あつて、捕り手二人、花道の戸屋
へ引返す。お須磨の方、よろしくあつて、靜かに尺八
を吹き〱、本舞臺へ來て、鶴の巢籠りを門口にて吹
く。

半兵　オヽ、虛無僧ぢやさうな。

ト立つて、盆に米入れ、持ち出て
報謝進ぜう。
トお須磨の方、こなしあつて

須磨　報謝、望みにござらぬ。

半兵　ナニ、報謝が望みにないとは。

須磨　吹きくらしたる旅の梵論字、一夜の宿がお賴み申し
たい。

半兵　イヤモウ、それは此方の商賣、マア〱、入らつし
やれ。

須磨　左樣なれば、許さつしやれ。

トお須磨の方、天蓋を取り、內へ入る。半兵衛見て

半兵　さてこそ、初めより女ぢやと思うた……して、宿賃
は、旅籠か木賃でござりますか。

須磨　今宵の價は千金。

半兵　ヤア。

ト不思議さうにする。

須磨　何を隱しませう。人を殺めて立退く者でござる。

半兵　ムウ。して又、こなたの本名は。

須磨　阿波の金十郎といふ盜賊の妻でござる。

半兵　ハテナア。

トちよつとこなしあつて
何にもせよ、泊めるが宿屋の商賣。マア、奧へござつて
ゆるりと休息。
トお須磨の方も、こなしあつて

須磨　今宵は世話にあづかりませう。

ト唄になり、兩人よろしくあつて、お須磨の方、奧へ

入る。あと合ひ方、半兵衛、奥を窺ひ、こなしあつて

半兵　あの虚無僧は、慥か八鬼山峠で逢うた女。ハテ、合點のゆかぬ。

ト手を組み、思案のこなし。此うち向うより、傳内、六十六部。おきよ、順禮にて、連れ立ち出で、靜かに歩み、花道のよき所にて

傳内　何にも急ぐ事はない。隨分、靜かに歩いたがよいぞや。

とおきよ、アイと會釋する。傳内、本舞臺の方を見て

この邊の宿屋は、笹屋といふが好いと聞いた。大方あの邊であらう。

トおきよ、アイと會釋して、二人とも本舞臺へ來る。傳内、門口にて

笹屋と云ふは爰さうな。ちよつとお頼み申さう。

ト半兵衛、表を見て

半兵　お泊りならば、入らつしやれ。

傳内　然らば、御免下され。

ト傳内、おきよを勞はり、内へ入り、二重舞臺へ笈を下ろす。

半兵　見れば、お前方、修行のお人さうなが、大方、木賃でごんせう

傳内　宿賃は、そこへよろしうなされ。ちと、お頼みと申すは、仔細あつて、これなる女中とは、間を隔てゝ休まねばならぬゆゑ、どうぞ、二間にして下され。

半兵　イヤモウ、間數は澤山にあれば、どうなりと、勝手次第。

ト此うち、半兵衛、おきよの顏を見て

半兵　ヤア、こなさんは

ト愕り、おきよも、半兵衛を見て、大きに愕りして

きよ　一昨日の夜、八鬼山にて。

ト云はうとするを、傳内押へて

傳内　マア、奥にござりませ。

ト合ひ方になり、傳内こなし。おきよ、半兵衛兩人、互ひに心意氣よろしく、兩人奥へ入る。半兵衛、後を見て、心得ぬこなし。

半兵　矢ツ張り、その時の順禮ぢやが、よもや生きてるやう筈もなし。幽靈にしては足もある。エヽ、どうやら氣味の惡い。

トいろ／＼あつて

今日ほど氣味の惡い、合點のゆかぬ日はない。
ト怖がるこなしあつて、また氣を替へ
なんにもせよ、ソレ。
ト奥へツイと入る。ト春雪、凜々しき侍ひの形にて窺ひ出て、懷中より呼子の笛を出し、吹く。バラ〳〵と仕出しの旅人、皆々、捕り手の形にて出る。
春雪　心得がたき、この家の亭主、コリヤ。
ト皆に囁く。
必らず、ぬかるな。
皆々　心得ました。
春雪　行け。
皆々　ハア。
ト春雪、奥を窺ふ見得。よろしく、廻り道具。
造り物、見付け二間の間、二重屋體。左右の落ち間建仁寺垣の書割り、植込みなどを見せて、東西は一間半の屋體、但し、西の方は高二重に、三段の踏み段あり、いづれも鼠壁、丸木柱等にて、隨分、綺麗にして、床の間の掛け軸もあり、花活けなどのあしらひ、よろしく、舞臺の端に、井戸側置きあり、すべて、笹屋奥座敷の模樣。一面に障子閉めあり、靜かなる唄に、竹の音もあしらひ、道具とめて、唄一くさりある。ト見付け屋體の障子、靜かに開く。ト傳內、六部にて笈を床の前に置きある。
傳內　誠に、思ひ廻せば、さま〳〵に、移り變るは浮世の習ひとは云ひながら、弟の惡心より、若殿御親子、おふさどの、我が母まで無慘の最期。せめては、誠の土岐之助さまを尋ね出し、綱干の家をお繼がせ申すが、寸志の忠、とあつてお顏も知らねば、何を證據に尋ねんやうもなく、殊に差當る舅李之進どのゝ敵。これとても、手がかりの割り笄を、八鬼山峠の劍難に、失ひしと、おきよどのゝ物語り。併し、我れ〳〵が忠孝、全き一心だに通じなば、土岐之助さまの在所も、舅の敵も、よもや知れぬと云ふ事はあるまい。
トこなしあつて、上手の屋體に向ひ
おきよどの、休んでござるか。この頃の心づかひ、今宵は、ゆる〳〵氣を靜め、草臥れを休めたがようござる。
ト上手の屋體の障子、靜かに開き、おきよ、順禮の形にて、少し二重舞臺の端へ出て
きよ　あなた樣にも、まだお休みではござりませぬか。夫

婦の名はありながら、此やうに間を隔てたる天の川、せめて一夜は、傳內さま。

ト辛氣さうに云ふ。傳內、よろしくあつて

傳內　不思議に巡り逢うたれば、左程に思はるゝも尤もなれども、互ひに大望のある身。殊に觀世音の御利生にて劍難を遁がれし上からは、猶も信心怠らず、佛に仕へ首尾よく望みを叶へし上、その時こそは夫婦の杯。

きよ　守のお庇は、忘れは致しませぬ。どうぞ、御利益にて、早う、敵を討取るやう。

傳內　間は隔てゝも、今宵も那智山觀世音、遙拜ながら、通夜いたさん。

ト傳內、笈の內より、佛具を出し、駒下駄を穿きて、井戸にかゝり、振り釣瓶にて水を汲み、佛具を洗ひ清める。おきよもよろしくある。始終この間、合ひ方、しめやかにして、竹の音入り、よき所にて、西手の屋體障子、密かに開く。お須磨の方、着流しにて、尺八吹きゐて

須磨　ほんに、わたしとした事が、お隣りにお人のあるとも知らず、拙なき糸竹の調べ、お耻かしうござります。

ト傳內、こなしあつて

傳內　これは〳〵御挨拶、あなたは、梵論字のお修行者と見受けまする。此方とても、廻國の者、修行の道は變れども、佛に仕へる心は、同じ一樹の宿り。

須磨　成る程、一河の流れも他生の緣とやら。夜寒を過す秋の末。

傳內　殊に長夜の事なれば、いま一曲、御所望が申したい。

須磨　不束ながら、御所望とあれば、それへ參つて、竹の一手。

トお須磨の方、よろしくあつて、靜かに平舞臺の眞中まで出て、傳內の顏見て、悄りして

ヤア、あなたは、殿樣ではござりませぬか。

ト傳內、不思議さうに

傳內　見る影もなき修行者を、殿樣と仰せらるゝは、合點のゆかぬ。

ト此うち、おきよ、樣子を窺ふ心意氣ある。お須磨の方、矢張り傳內の顏を眺め入り

須磨　イエ〳〵、どのやうに仰しやつても、あなたは我が夫。

傳內　エヽ。

ト悑りする。

須磨　本國にてお別れ申し、斯く修行の旅に赴むき、先達て箱根山にて、御落命と承はり、その悲しさは如何ばかり。何卒、夫の敵を討取らんと、諸國を巡る其うちも、心を碎き、手がゝりもあれかしと、思うて居りましたに、ようマア、無事でござつて下さりましたなア。殿樣。

ト側へ寄らうとする。此うち、おきよも、平舞臺へ下りて、お須磨の方を支へて

きよ　エヽ、滅相な、女中さん。このお人は、わたしが云ひ號けの大事な殿御、滅多に側へ寄つて下されますな。

須磨　それでも、違はぬ我が夫。

ト云ひ〳〵、顏見合はし

きよ　ヤア、あなたは。

須磨　おきよではないか。

きよ　奧樣。

須磨　でもマア、思ひがけない、出合ひと云ひ

きよ　わたしが殿御を、殿樣と仰しやるお心はえ。

ト お須磨の方、腹の立つこなしあつて

須磨　エヽ、聞えませぬ、殿樣。先達ては我が父、大弼さま、隱し置かれしお家の秘書を奪ひ返さんため、あなたは、酒と色とに、お身持ち放埓と僞わり、あのおきよどのを、室の津の傾城明石と姿をやつさせ、晝夜分かたぬ御酒宴、明石を御寵愛と見せたるは、大弼どのを計る手段と思ひ、勿體ない父上を欺むき、餘材抄を取り得しはお家の大事と夫の爲を思ふばかり。それに、あなたは聞えませぬ。妾に隱し、おきよと語らひ、我が身は修行の旅に出しぬき、まだその上に箱根山にて、狩人の鐵砲に中り、最期と見せしも僞わりにて、おきよと一緒に睦まじう、添うてござるお心か。さうしたお心とも露知らず、おのれ敵を討たんと、心を碎き、憂き艱難、思へば〳〵恨めしい…聞えぬはおきよ。其方は、親々の云ひ號けある身ではないか。父様に勝りし大惡人とは、この二人恨みの程を思ひ知らさう。

ト泣く〳〵恨めしげに、キツと云ふ、傳內、おきよ、迷惑なるこなしあつて

傳內　先程よりの詞の端々、此方に思ひ當ることもあり。さては、其許は、網干右兵衞之助どのに連れ添はれしお人よな。

きよ　あなたは、お須磨の方さまと申し、殿樣の奧樣でご

ざりますわいな。

須磨　エヽ、まだ、マザ〳〵しいその僞わり。

ト傳内、キツとこなしあつて

傳内　斯くなる上は、何をか包まん。我れ〳〵が身の上、始終の樣子、一通り申し聞かさん。お須磨の方とやら、心を靜めて聞いて下され。

ト合ひ方になり、キツと云ふ。お須磨の方よろしくある。

某、斯く修行者となつて、諸國を經めぐるは、全く佛道歸依の心にあらず。我が父は、淺羽久之進と云ひし武士なりしが、射術の師範にあづかる、弓削の某が娘、勝野と云へるに密通せしは、互ひに若氣の誤まり。この事、師匠弓削氏の耳に入り、怒り強く、側に有り合ふ重籐の弓を以て、兩人を折檻に及びしところ、さしもに強き重籐も、三つにポツキと折れたり。親の筐と師匠の賜物、勘當の身の肌身に添へて、當國那智山の麓、淸水村に、ちとの由緣ありしを、これを賴りて、夫婦浮世をわたるうち、身ごもりて平産せしは、双子の男子。兄を松太郞、弟を曾根太郞と名けしかど、人の誹りもうたてくて、密かに父が自筆の臍の緒に、重籐の弓の折れを添へて、捨て置きしが、幸ひなるかな、その頃、播州綱干の先殿、一子なきによつて、これを歎き給ひ、當國熊野權現へ立願の爲、參詣あつて、その歸るさに、曾根太郞の捨てありしを、御覽あつて、密かに思し召すやうは、これこそ權現より我れに授け給ふ一子ならんとて、やう〳〵取上げ見たまへば、臍の緒に生れし月日を記し、重籐の弓の折れを添へたるならば、賤しき者の胤とは見えじと、直さま綱干へ歸國の上、奥方と諜し合はし、實の子と披露ありしとは、後年に及んで聞く。その曾根太郞こそは、御身の夫、我が爲には、肉身の血を分けし双子の弟。我れこそ兄の松太郞、父は曾根太郞の安否を窺ひ、宿に歸り、母へ斯くと御物語り。その後、父久之進、かゝる片田舍に身を潛め、悴まで埋れ木にせんよりは、鎌倉へ立越え、武家へ仕官せんと、親子三人、淸水村を立退き、東海道にさしかゝる。或る夜の泊りにて、俄の大地震、所の騷動、旅人の敗亡大方ならず、行く先知らぬ闇路に迷ひ、夜明けて見れば、父の行くへ知れざるゆゑ、母は我れを懷に抱き、そこよ爰よと尋ぬれども、かいくれ父の姿は見えず、是非なく、我が身を勞はり、相州箱根の山奥に足を止め、憂き年月の日數を經るまゝに、我れ

も人となり、狩人の業に世を渡るうち、或る日、江の島辨財天へ參詣せしところ、思ひもよらぬ狼藉に出會ひ・相手は大勢・此方は一人、殊に老母を誘へば、難儀に及ぶその所へ、網干家の御舍弟、土岐之助さま、折よく御參詣あつて、この危難を見給ひて、狼藉者を追ひ散らし給はりしゆゑ、不思議に母子が命を助かり、何卒この大恩を報じ奉らんものと、それより鎌倉へ立越え、網干のお屋敷に暫らく御奉公いたせしが、その頃、土岐之助さま、未だ部屋住みの御身にて、奥女中おふさどのといふと割なき仲となり給ひ、いつしか情の胤を宿し、家中の聞えを思し召し、某を密かに招き給ひ、何卒おふさどのを伴ひ、屋敷を立退き、安產させてくれよとのお頼み。江の島に於て大恩ある、若殿の御內意、畏まり奉ると、母諸とも屋敷を忍び出で、又も以前住み馴れし、箱根の山奥へ伴ひて、程なくおふささまには御平産、出生ありし若君を・世を憚かりて我が子と呼び、常松さまと名け參らせ、表ばかりは、おふささまを、我が女房とせしところ、去年の冬の事なりしが、雪降り積る夜山の働らき、箱根山の往還にて、切り株くべて、寒氣を凌ぎゐる所へ、中間二人通りかゝり、いづくの殿の鎌倉入りと、樣子を聞けば、播州網干家の參覲、これ幸ひと、土岐之助さまの御事・餘所ながらうら問へば、兄右兵衞之助どの無道によつて、切腹ありしとの事、一度は驚ろき、一度は又、下郎の噂、合點ゆかずと、兎やかく案じ煩らひ、歸る道にて網干の家來・浪平に出逢ひ、土岐之助さまは御切腹の樣子、疊の扇に御遺言。流石は主人の事ゆゑ、浪平も右兵衞之助どのゝ不行跡を、明らさまには云はねども、若殿の御最期も、下郎が噂に符合なす。時も時とておふさどのが、常松さまの死骸を抱き立歸り、網干の殿の行列を横切りせし科、小兒とて容赦ならぬと無慘の最期も、網干の殿の所爲と聞き・我が子ならば、雉子と鷹、是非なき不運と諦めても濟むべきなれども、大恩ある主人より、預かり置いたる若君、とあつて敵は主人の御舍兄、討つに討たれず、討たねば草葉の蔭の御主人へ、なんと云ひ譯あるべきと、千々に思ひを碎くうち、思ひがけなき母人が、ありし昔の物語り、網干の殿は肉身の、双子の兄弟なりと聞き、血筋なれば猶恥多しと・母が義心に勵まされ、元より無道の右兵衞之助・討つて捨てなば家の爲と、年頃手馴れし鐵砲引ツ下げ、通ひ覺えし崖づたひ、先へ廻つて待つとも知らず、行列美々しく來りしは、

天運遁がれぬ絶體絶命、とは云へ現在、双子の兄弟、母の心中思ひやり、口に稱名、目にたまる、涙を拂うて覘ひを定め、火蓋を切つたがこの世の別れ。仕濟ましたりと立歸つて見れば、母の自害、おふさどのは深手の最期。それより修行の旅に出で、實の土岐之助さまの御在所を、尋ね求める其うちに、一昨夜、八鬼山峠にて、これなるおきよが劔難も、佛の利益に助かるのみか、親々が云ひ號けありし、某にまで巡りあひ、初めて聞いたる舅の最期。これを見、彼れを見るにつけ、たゞ慕はしきは、我が實父、生死も覺束なく、身につまされて、お須磨の方の心のうち、推量いたして居りまする。

ト泣く、お須磨の方も、愁ひのこなしあつて

須磨　そんなら、あなたが我が夫の御兄弟とな。おのれ巡り合ひ、討たう／＼と思ひしに、討つて討たれぬそれのみか、御兄弟の父御前に、助けられたる我が命、義理と義理とを重ねし身の上、こりやマア、なんとせうぞいなア。

ト大泣き。

傳内　ナニ、兄弟が父に、命を助けられしとは。

須磨　サア、實の父上は我が夫、右兵衛之助さまを慕ひたまひ、網干の門番とまでなり給ひ、親子の名乘りは重籐の、三つに折れたる弓が證據。

トお須磨の方、包みより重籐の弓の折れ二つを出す。傳内、取つて見て

傳内　成る程、此方にも覺えの品。

ト同じく弓の折れを出し、繼ぎ合はし見て

すりや、これこそ、父が年頃所持ありしを、弟に添へて捨てさせ給ひし、重籐の弓の折れであつたか。

きよ　そんなら、あの松兵衛さまが、我が爲には、舅御さまであつたかいなア。

ト泣く。バタ／＼にて、捕り手大勢、奧より、半兵衛を取卷き出る。

半兵　こりやアうぬら、なにひろぐのぢや。

トぽん／＼と捕り手を投げ、キッとなる。此うち、臆病口より春雪出で

春雪　ヤア、汝が惡事は、その身に覺えある事、遁がれはあるまい。

半兵　この半兵衛に惡事とは。

春雪　唐橋大弼に頼まれて、密事の段々。

半兵　大弼とやら、飯櫃とやらいふ和郎に、近づきでない

わいやい。
ト此うち、お須磨の方、キッとなつて
須磨　ヤア、知らぬとは云はれまい。慥かなる證據は、コレ、爰に。
ト割り笄を出す。半兵衞、見て
半兵　ヤア。
ト悔りする。
須磨　亂れ獅子に牡丹唐草の割り笄。
半兵　なんと。
須磨　疾より見附けて、一昨日の夜、八鬼山峠の暗まぎれ。
半兵　すりや、曲者待てと呼びかけたは。
須磨　如何にも自ら。
半兵　慥かにさうぢやと思うてゐた。
須磨　この品こそ、父大弼さまの所持の笄。
トこの時、傳内、おきよ、キッとなつて
きよ　ナニ、大弼さまの所持とな。
傳内　すりや、舅の敵。
きよ　父上の仇。
傳内　自然と知れしも佛の加護。
トお須磨の方、悔りして
須磨　思はず顯はす不孝の罪。その云ひ譯は、まヅかう。
ト自害する。皆々悔り。お須磨の方、よろしくあつて
我が父大弼さま、先殿の實子土岐之助さまと、自身の胤、妾が弟と、年頃同じ出生ゆゑ、人知れず取替へ置き、綱干の家名を繼がせんと、年來の企みも空恐ろしく、弟には切腹なし、世に便りなき父が身の上、惡人なれども大恩ある、親の惡事、敵の樣子、我が身から訴人しては、子たる者の道立たず、例へこの身をズタ〳〵にしてなりとも、父樣を、どうぞ助けて下さりませ。慈悲ぢや、情ぢや。コレ、傳内さま、おきよどの。
ト拜む。兩人も、心意氣よろしくあるべし。半兵衞、この時、平舞臺へ飛び下り、平伏して
半兵　すりや、あなたが大弼さまの御息女とな。さは知らずして、無禮の段々。眞平御免下さりませ。親御の惡に引替へて、孝心深きお詞、承つて私しも、年來の惡心を翻へし、綱干のお家へ一つの功を立てまする間、何卒、大弼さまのお命を助けて下さりませ。
皆々　ナニ、一つの功を立てようとは。
トばた〳〵にて橋がゝりより、紅藏。眼兵衞、軍平とタテしながら出て

紅藏　大弼さまの悪事、何もかも聞いた。サア、二品の寶の在所、白狀ひろげ。
兩人　エヽ、知らぬわい。
ト立廻りになる。此うち、春雪も支へて、ちよつと立廻りある。トヾ紅藏は眼兵衛、春雪は軍平を、ポンポンと切る。ト前の井戸より水氣立つ。烈しき合ひ方になる。皆々キッとなつて
傳内　ハテ、怪しや、血潮の穢れに、水氣逆卷き
きよ　あたりを拂ふ、この有樣。
春紅　何にもせよ、このあたりに。
傳内　尋ぬる寶が隱しあるか。
ト半兵衛、よろしくあつて
半兵　如何にも、網干の重寶、傳授の一卷を、お渡し申しませう。
ト大石を刎ねのけ、袱紗包みの一卷を、傳内に渡す。
ト合ひ方、水氣やむ。
傳内　すりや、これが
きよ　お家の重寶とな。
須磨　そんなら、それを功に父上の
傳内　命を助けてくれいと云ふのか。

半兵　成る程、私しは、阿波の金十郎と云ふ盜賊の張本、既に先年、首を刎ねらるべき科に極まりしを、大弼さまに助けられ、剩さへお金まで。それを敷金として、この笹屋へ入り聟。これ皆、大弼さまのお庇ゆゑ、先年頼まれし密事、先殿の胤を殺してくれよと渡されしかど、虫同然の子悴、殺すも不便と、助け置いたその若君、只今、お渡し申さう程に、大弼さまを助けて下さりませ。
きよ　ナニ、若殿には、御堅固でござるとな。
傳内　して、御在所は。
半兵　外でもない、卽ちこれに。
ト紅藏の手を取り、上座へ直して、
あれが内へ奉公に來た紅藏、幼な顔に覺えあり、誠の土岐之助さまとは、この浪平どのでごんす。
須磨　そんなら、あなたが先殿のお胤。
傳内　誠の若殿であつたか。
きよ　さうとは知らず、今までの無禮
傳内　眞平御免
皆々　下さりませ。
ト紅藏、實は浪平、よろしくあつて
浪平　半兵衛どのゝ情なくば、今まで存命なさゞるを、某

改めて綱干の家名相續すれば、大弼どのゝ助命は我が胸に。

須磨　エヽ、嬉しうござりまする。

ト皆々を拜む。

半兵　いま一品の國次の刀も、追ッ付けお手に入れませう。

傳內　惡に強きは善にも強く、半兵衞どのゝお庇にて、寶揃はゞ、めでたう御歸國。

浪平　マア、それまでは、馬士の紅藏。

きよ　わたしは矢張り順禮姿。

傳內　廻國の修行者。

須磨　我が身一人は死出の旅路へ。いづれも、おさらば

皆々　南無阿彌陀佛。

トお須磨の方、バッタリこける。皆々愁ひの模樣、いろ〳〵あつて、よろしく、　幕。

大詰

綱干館の場
船番所の場
木崎の端の場
人丸社の場

役名　唐橋彈正大弼。奴、浪平實ハ綱干土岐之助。有田瀨平。紛ひの金六。奴、瀧六。龍野丈助。奴、與五助。阿波の金十郎。傾城、滿月。管領の娘、里姬。同乳人、繼橋。李之進妻、關屋。同娘おきよ。亘數馬。赤松西郎則村。小割傳內。

造り物、三間二重舞臺。見付け金襖、東西、折り廻し障子屋體。よき所に松の幹。幕の內より、大弼、着付け長上下にて立つてゐる。平舞臺、上手に關屋、非人の形にて、大弼へ行かうとしてゐるを、瀨平、赤面の足輕の形にて止めてゐる。下手に奴與五助に、里姬、小幕の形にて、引き付けられ居る。乳人繼橋、立ちかゝり居る。上手松の木に傾城滿月、好みの世話風にて縛られゐる。深山の瀧六、敵役の奴にて、割り竹にて、責めてゐる見得。眞中に、龍野丈助、町人の形にて、刀箱の刀を目利きしてゐる。橋がゝりに紛ひの金六、肩入れの着付けにて扣へてゐる。この見得。バタ〳〵にて、早き序の舞にて幕明ける。

ト瀨平、瀧六、與五助の三人。

三人　ヤア、女め、動きやアがるな。

關屋　ぢやと云うて、聊示しやれば

繼關　許さぬぞや。

瀬與　何を小癪な。

ト瀬平は關屋、與五助は立廻つて、繼橋を引据ゑる。

大弼　コリヤ／＼、兩人とも荒立つな。ヤイ、うぬらよつく聞き居らう。右兵衞之助は道中の横死、その上に跡目に立つべき土岐之助の行くへ知れざれば、この家國は退轉にも及ぶべきところ、某が斯く、れいれいとあればこそ、事なく家國治まりある。さすれば、この大弼は當國の主、國の守り神をも憚からず、尾籠の振舞ひ、すさつて居らう。ヤイ、そこな傾城め、死太い奴、斯程に責め問ふに、浪平の行くへ、なぜ申さぬ。

滿月　サア、存じてさへゐますれば、申しますれども、二人でお國は立ちながら、若殿樣の詮議の爲、別れ／＼になりしまゝ、今に巡り逢ひませぬわいな。

大弼　まだ／＼僞はる太い女め、ソレ、ぶつて／＼、ぶち据ゑい。

瀧六　サア、有やうに、吐かし居らう／＼／＼。

ト打ち据ゑる。

大弼　それにゐる、不義働らきし管領の女郎ども。うぬ等が浪平の行くへ、知らぬといふ筈はない。サア、眞直ぐに申し居らう。

繼橋　我れ／＼も姫のお供して、諸國を尋ね廻れども、それと云ふ手がゝりもなく、ほのかに聞きしは、浪平どの、當國へ入込みしとの事。それゆゑ、忍び來り、擒となつて、この責め苦。

大弼　すりや、うぬ等も知らぬぢやよな。

繼橋　姫君の焦れ給ふ、浪平どのに逢はゞ、何しに、ウロウロこの國へ、さまよひ來やうぞいなア。

大弼　ムウ、イカサマ尤も……ヤイ、關屋、うぬは見苦しい姿になり下がり、身が前へ參りしな。敵の行くへでも、相知れたといふやうな事か。

關屋　サア、今以て、敵の行くへも知れず、その上、娘に別れ、詮方なく、いま國の守となつてござる大弼さまへ、奉公を願はん爲、あられもない姿を顧ず、參りましたのでござります。

大弼　すりや、敵の行くへも知れず、娘に別れしゆゑ、身に奉公望むとな。ムウ、出來す／＼……ナニ、刀屋彦兵衞とやら、いよ／＼その刀、國次に紛れないか。

丈助　ハイ、お國で人に知られた、信濃屋彦兵衞が目利きに、國次と見極めましたら、違ひござりませぬ。

繼橋　ナニ、國次の刀とな。

ト立たうとする。

與五　すさつて居らう。
　トきめる。

金六　なんと、この金六が申すに違ひはござりますまいがな。去年お國で岩平に頼まれ、人丸の烏帽子を、諸太夫になつて騙つた時、褒美の代りに預かつたその刀、どうぞお金と替へて下さりませ。

大彌　ムウ、すりや其方が、岩平に聞きし、紛ひの金六とな。如何にも、褒美の金くれう。

金六　エヽ、有り難うござります。

瀨平　國次の刀、目利きして、お求めなさるゝとは、殿樣には、お道具好きと見えますな。

大彌　ムウ、汝は新參なれば、樣子知らぬは尤も。この刀こそ、あれなる里姬が引手物。紛失の上、不義の大罪。さるによつて、武將の怒り強く、例へこの刀、詮議仕出すといへども、一つの大功なくては、姬の首打つて、差出せよとの上意。

繼橋　ナニ、一つの功が立たねば、

里姬　自らが首打てとの上意とや。
　ト瀨平、こなし。

大彌　イヤ、そればかりにあらず、不義の相手たる浪平めも、鎌倉へ引立ていでは、網干の家の大事。それゆゑ、何者が敵討ちなどゝ騷ぎ廻つても、滅多に勝負いたす事は叶はぬ。

關屋　そんなら浪平の在所、知れるまでは、當家の家來は、敵討は叶はぬとな。

大彌　おんでもない事。

繼橋　一つの功が立たざれば、姬の御身の上と云ひ、夫の敵も討たれぬとな。

關屋　繼橋さま

繼橋　關屋さま。
　ト兩人顏見合せ

兩人　ホイ
　ト當惑のこなし。

大彌　サア、それを思うて、某が召捕らしたる傾城滿月、館を連れ立ち、退いたる浪平、行くへ知らぬで濟まさうや。サア、キリ〳〵と申し居らう。

滿月　一言云ふも、千言云ふも同じ事、存じませぬと云ふより外はござりませぬ。

瀧六　まだ〳〵、此奴、吐かし居らう。

ト打ち据ゑる。
瀬平　ヤア、手ぬるい〳〵。そんな事で、吐かすやうな女郎ではない。ちと、おれが代つて白狀させて見せう。
大弼　ムウ、新參に似合ぬ愛い奴。責めて〳〵白狀させい。
瀬平　オツト呑みこみました。最前から、手がモヂ〳〵としてあつた所ぢや。サア、女郎め、うぬ、どうあつても吐かさぬか。これでもか〳〵。
　ト いろ〳〵打つて
でも、死太い奴な。この上は、水喰はして、白狀させませう。
大弼　出來した。その科人は、汝に預ける。キツと糺明して白狀させい。
瀬平　畏まりました。新參の手並、お目にかけませう。ぢやが、初手から受取る、この非人めは。
大弼　關屋は、瀧六と役目代り、預け遣はす。與五助は兩人の女、取逃がさぬやう、兩人とも、心得てよからう。
瀧與　畏まつてござります。
金六　して、私しへの褒美は。
大弼　追つて沙汰いたすであらう。刀屋彥兵衞、汝は、まだ用事もあれば、休息いたしてよからう。

丈助　心得ました。
大弼　女どもを引立てい。
瀬平　サア、女郎ども、
　ト 瀬平、瀧六、與五助の三人
三人　立ち居らう。
滿月　ほんに、思ひ廻せは果敢ないは浮世の習ひと云ひながら
繼橋　變り果てたる館の有さま。
關屋　お二人樣
滿月　滿月どの。
兩人　
　ト 滿月、繼橋、關屋三人
三人　神も佛もない事かいなア。
大弼　こま言吐かさず、引立てい。
　ト 瀬平、瀧六、與五助の三人
三人　うせ居らう。
　ト 唄になり、瀬平、滿月の縄付き引立て、瀧六、關屋に附添ひ、與五助、里姬、繼橋に附添ひ、奥へ入る。丈助、金六、橋がゝりへ入る。後に大弼、刀箱に刀を納めて
大弼　先づ、あゝして置いて、この上は、ムウ。

ト　こなしある。ト序の舞になる。奥より赤松四郎、總白髪の親仁の拵らへ、大小にて出て

四郎　大彌どの、爰にゐめさるか。

大彌　四郎どの、して、武將調伏の用意は、相整ひしかな。

四郎　某が兄滿祐が、無念を晴らさん爲、この年月、姿をやつし、諸國を廻るところ、思ひがけなく、兄滿祐に荷擔の大彌どの、斯く心の合ふ上は、この網干を根城として、大望成就は易きにあり。某、先年足利の寶藏へ忍び入り、奪ひ取つたる二つ引龍の籏、これに義教が姓名を書き、巳の年月、揃ひし女の血汐に穢せば、調伏の驗あること目前。今に於て手に入れ難きは、巳の年月揃ひし女。

大彌　それゆゑ、當國木崎の端の赤石に怪異あつて、生贄を捧げん爲と云ひ立て、この濱館の浦手に番所をしつらへ、吟味を遂げ、國中へその觸れ度々に及べど、今に於て巳の年月のもの、連れ參らず、種々に心を盡せしところ、思ひ出せは某、先年討ち捨てたる淸水杢之進と云ふ者の娘、慥かに聞きし巳の年月。

四郎　して、その者は。

ト　此うち、上手柴垣より、關屋ちよつと、窺ひ居る。下手より、丈助、ちよつと聞いて、兩方とも入る。

大彌　某が討つたるとも知らず、敵を討たんと國遠して、行くへ知れねば、是非もなし。

四郎　何分、手延びにならぬこの調伏。今日より某が、番所に相詰め、入り船の者に吟味を遂げん。

大彌　それは大儀。併し、其おきよといふ奴、所々方々へ討手を掛け置いたれば、連れ來らんも計り難し。

四郎　然らば某は、これより番所にて吟味。

大彌　御苦勞千萬。

四郎　大彌どの。

大彌　四郎どの。

兩人　後刻。

ト　唄になり、四郎こなしあつて、奥へ入ると、引違へて、瀧六、與五助出て

瀧金　御主人さま。

大彌　して、女どもは。

瀧六　女どもは、殘らず一間に打ちこみ、新參の瀬平めに預け置いたれば氣遣ひなし。

與五　最前の刀屋こそ、御推量の通り、慥かに杢之進が家來丈助。

大弼　それゆゑに、似せ物を以て、試みる所と察せしゆゑ、異議に及ばず、受取り置く。して、誠の國次の刀は

流六　我れ〱が受取り置くも大事と思ひ、彼奴に申しつけ、人丸の神前、燈籠の下に埋め置かしてござります。

大弼　ムウ、それでよし〱。あの刀さへ、手に入らねば、何事も彼奴らが思ふまゝならず、其うちには、何かの手番ひ。併し、心にかゝるは、浪平めが行くへと云ひ、幼少の砌り、預け遣はせし金十郎も、一軸を所持のまゝ、熊野を立退き、在所知れず、その上、かね〲其方共にも申せし通り、先達て、切腹いたせし某が倅、土岐之助、鎌倉に於て側女に手をかけしを、家來傳內と云ふものゝ計らひにて、女を連れて立退きし後、男子出生と聞く。せめてその嫁、孫の在所を尋ね、老の樂しみと思ひしに、これとても在所知れず。

流六　すりや、若君は、小割傳內と申す者が守り育て

與五　一軸は阿波の金十郎が所持とな。

大弼　何を云うても、兩人が行くへ知れず。

流六　いづくを指して尋ねんにも

與五　それと慥かな手がゝりもなければ

大弼　雲を當なるこの詮議。ハテ、是非もない。

ト三人、顏見合せ、こなしある。花道と通ひの戸屋より

傳內　待つた大弼さま。お預かり申せし若殿の忘れ形見。

金十　預かりの一軸、下郎の浪平。

傳內　箱根山の狩人、小割傳內。

金十　熊野に住みし阿波の金十郎。

大弼　ナニ、傳內、金十郎とな。

兩人　それへ行て、お渡し申しませうわい、

ト誂らへの合ひ方になり、花道より傳內、半纏、旅の形にて、鐵砲を腰に提げ出る。通ひ道より金十郎、半纏、旅の形にて兩人、よき所へ出る、大弼、いろ〱こなしあつて

大弼　すりや、傳內は孫を同道にて、金十郎は浪平を召連れしとな。

兩人　如何にも。

大弼　まづ〱これへ。

兩人　許して下さりませ。

ト右の合ひ方にて、兩人、平舞臺へ來て、よき所へ坐る。大弼、始終、嬉しきこなしにて

大弼　ムウ、誠に金十郎。すりや其方は、小割傳內とな。

今も今とて噂せしに、思ひがけなきこの對面。先づ金十郎は差措いて、傳内とやら、その孫は同道いたせしか。

傳内　同道しました。

大弼　すりや、いづくへ。

傳内　サヽ、爰に居ります。ソレ、逢はつしやれ。

ト腰に附けた鐵砲を出す。大弼、悔りして

大弼　こりや、鐵砲、これを孫とは。

傳内　こなたに問はしやれ。

大弼　なんと。

傳内　こなたの胸に問うたがよい、

ト空うそぶき、煙草のむ。大弼、合點のゆかぬこなし

にて

大弼　ムウ、さては此奴は、狂人だな。コリヤ〳〵、金十郎、其方は、あの者知つてゐるか。

金十　知つて居ります。

大弼　して、この樣子は。

金十　こなたに問はしやれ。

大弼　ヤ。

金十　こなたの胸に、問うたら解る。

大弼　なんの事ぢや。こりや、兩人とも、狂人ぢやな。

傳内　イヤ、狂人ぢやない、正氣の傳内。孫を連れて來たのぢやわいなう。

大弼　その孫にも逢はさず、投げ出したその鐵砲。さては、傳内といふは僞はりだな。

與五　コレ〳〵お旦那、いつぞや參覲の節、豆州に於て出合ひし狩人、彼奴、傳内に違ひござりませぬ。

傳内　ムウ、さう云ふは、栫にあたらした奴、うぬにもキツと、云ふ事があるわい。

大弼　ムウ、さう云へば、傳内は傳内であらうが、合點のゆかぬは、この鐵砲。

傳内　孫の譯が聞きたいか。

大弼　如何にも。

傳内　金十郎、云うて聞かさうか。

金十　あのやうに云はるゝもの、云うて聞かしてやらしやつたがようござらうかい。

傳内　この譯を云ふからは、キツと馳走せにやならぬぞ。

大弼　饗應は望み次第。して、その仔細は。

傳内　コレ、こなたの孫は、人手にかゝつて死んだわいなう。

大弼　ナニ、人手にかゝつて、相果てしとな。そりや、何

傳内　者が手にかけた。サア、孫を手にかけし者は。
傳内　外でもない、唐橋大弼。
大弼　なんと。
傳内　こなたの手にかゝり、死んだわいなう。
大弼　此奴、うろたへて何を云ふ。某が孫を手にかけたとは、そりや何事。
傳内　ハテ、物覺えの悪い人。去年の冬、參覲の道中、伊豆と相撲の國境で、行列の横切りした小兒を切つたを忘れさつしやつたか。
大弼　なにがなんと。
傳内　それが、この傳内が預かつた、こなたの孫ぢやわいの。
大弼　ヤア、、、。ヤア、すりや某が手にかけしは、アノ悴が忘れ形見であつたか。アノ、ヤア。
ト大悄り。傳内、金十郎は、莨盆扣へ、せゝら笑ひ居る。
さうとも知らず、不便い有様。チエ、、。
ト愁ひのこなしにて、傳内、金十郎と顔見合はせ、こなしあるべし。
何は格別、金十郎、其方が召連れし浪平めは。

金十　オ、、渡しませう。數馬さま、若殿をこれへ。
數馬　サア、若殿、お越しあられませう。
ト序の舞になり、浪平、衣裳、袴、羽織、若殿の拵らへにて、ズツと大弼の上、二重に上がる。大弼、悄り、數馬よき所に扣へる。
大弼　ヤア、浪平、うぬがその形は。
浪平　今日よりは、當家の跡目、誠の士岐之助。
大弼　ヤア。
ト悄り。
浪平　分知の大弼、頭が高い。すさり居らう。
大弼　ヤア、數馬が附添ひ、同道の金十郎。さては、うぬ、一大事を
金十　すつぱり云うてしまうた。
大弼　さては金銀をくれし大恩を忘れ、慾に迷ひしな。
金十　オ、、忘れた。
大弼　流石は匹夫、頼みに思ひし我が誤まり‥‥傳内が孫と云うて、差出したる鐵砲、箱根山に住むと云ふからは、右兵衛之助を討つたるは、其方ぢやな。
傳内　アイ、わしでござんす。
大弼　さてこそ、うぬ。

與瀧　傳內、覺悟。

ト兩方よりかゝるを、煙管で擲り廻し、又また來ると
ころを、額へ煙を吹きかける。兩人むせる。大弼、刀
引ッさげて立つ、傳內、横身になり、見て

傳內　なんぢや。そこから切りに來るまで、この手が遊ん
であらうか。惡うあがくが最後。

ト手早く鐵砲取上げ、莨盆の火を移し

商賣に手馴れた二つ玉、右兵衞之助の相伴さそうか。

大弼　ムウ。

傳內　どん腹に風穴明けうか。

大弼　コリヤ、早まるな。

傳內　靜まつて、下に居るか。

大弼　サア。

傳大　サア〳〵〳〵。

數馬　コレ、チタバタさんすな。あたら着物に皺が寄る。

大弼　ムウ。

トべつたりと下にゐる。數馬、こなしあつて詰め寄り

數馬　大弼どの、こなたはなう〳〵。科なき小兒を手にか
けられしが、取りも直さず、こなたの孫。それゆゑにこ
そ、双子の舍弟たる殿を討たれしも、元の起りは、皆こ
なたの我まゝゆゑ。又いとしいは、お須磨の方さま、敵
を討たんと某もろとも、諸國を巡り〳〵、逢うた傳內
どのは、主人の兄御と聞き給ひしより、こなたの惡事を
云ひ死に、コレ、自害してお果てなされたわいなう。

大弼　ナヽ、なに、娘も相果てしとな。

數馬　奥様の今際のお賴み、これを發起の種として、心を
改め、善心になつて下され。コレ、大弼どの、心を飜
す、所存はござらぬかいなう。

傳內　コレ〳〵、數馬どの、ありや燒かにや直らぬ。あつ
たら口に風引かさぬがよい。

金十　それ〳〵、これから此方の手番ひが肝心。

浪平　父の大恩打忘れ、血脈の某を匹夫となし、我が子
を以て、この家國を繼がせんとは、云はん方なき大惡無
道。

傳內　ハテ、それも過ぎた事。この上は奥へ行て、若殿に
跡目相續、

大弼　イヽヤ、そりや滅多に叶はぬ。一旦、大弼が預かつ
たこの家國、殊に浪平は管領のお尋ね者。その上引手の
刀紛失、一つの功なくては、姫も浪平も縛り首とあつ
て、詮議の上使も當所にとゞまる。

傳内　ハテ、餘所の事に、いかいお世話ぢや。イヤ、お世話次手に、約束なりや今夜は、皆ちと馳走に會はにやならぬ。ナア、金十郎。

金十　それ〳〵、先づ料理には、國盗人の見せしめに、大身の鎗の田樂飯か。

傳内　惣髪首をちよん切つて、ぬたもよからう。ハヽヽヽハ。サア、若殿、數馬どの。

ト立ち上がる。瀧六、與五助、「傳内うぬ」とぎしむ。

鐵砲差向け

燒き物が所望なら、手料理で何匹なりと、黒くすぼり。

金十　それが否なら案内さらせ。

與瀧　サア、それは。

金十　エヽうせいと云ふに。

ト唄になり、傳内、顔にて敎へる。浪平に數馬、附添ひ、金十郎、與五助、瀧六先に立ち、あと見い〳〵奥へ入る。後より傳内、鐵砲下げ入る。大弼後に、いろいろ無念のこなし。

大弼　チエヽヽ口惜しや。孫と云ひ、娘まで、最期の元は、我が粗忽より起りしか。知らぬ事とは云ひながら、現在の孫を祖父が手にかけ殺せしは、さぞ冥途より娘と云ひ、悴も孫も恨みつらん。ハテ是非もなき、不便の次第ぢやなア。

ト憂ひのこなし。關屋、ツッと後より出かけゐて、大弼が懷劍にて、突かうとする。大弼ちよつと目を附ける。關屋、ちやつと鞘に納めて

關屋　大弼さま。

大弼　關屋、うぬは新參の瀬平めに預けありしに、どうしてこれへ。

關屋　ハイ、あなたに、お願ひがござりまして。

大弼　して、その願ひは。

關屋　サア、願ひは。

トまた懷劍に手を掛ける。大弼、尻目に見る。關屋こなしあつて

夫に離れ、便りない身、あなたのお側に、御奉公が致したさ。

トぢつと寄り添ふ。大弼、こなしあつて

大弼　アノ身が側に。

關屋　アイ、一つ枕の閨の淋しさ、御推量なされて下さりませいな。

ト取りつく、丈助、後より出て、大弼を切らうとす

ろ。大弼ちよつと見る。丈助、ちやつと刀を隱し、こなし。

大弼　そちや最前の刀屋。今のは。

丈助　エ、。

大弼　この大弼を、なんとする。

丈助　サア、ありや、ソレ、オ、、お取持ち致さうと存じまして。

大弼　すりや、アノ其方が。

丈助　見ましたところが、似合ひ相應な事。それでちよつとお取持ちを。

ト刀を拔いて切つてかゝる。大弼、立廻り、關屋も懷劍にて、兩方より切つてかゝる。早き序の舞になる。

關屋　夫の敵。

丈助　主人の仇。

トよろしく立廻つて、大弼、兩人が刃物をキツと踏まへ

大弼　イヤ、小積な奴の。

トこの見得、よろしく、早笛にて返し。

造り物、見付け淺黃幕。眞中に、三間の高二重石垣、眞中に石段。この上に、少し後へ寄せて屋體。見付け唐紙、東西、鐵砲の壽割り、欄間に橋の幕張り、すべて川口番所の體。舞臺前、花道より、浪幕上がる。この二重の上に、赤松四郞、上下にて坐りゐる。下手に役人、兩人扣へゐる。時の太鼓にて道具とまる。

四郞　コリヤ〳〵、侍ひども、申し付けし通り、着船の女ども、キツと詮議いたしよからう。

役人　畏まつてござります。

ト浪頭になり、橋がゝりより田村甚藏、船頭の形にておきよを船に乘せ出で

甚藏　ハア、申し上げます。先達て仰せつけられました、杢之進が娘おきよ、召捕つて參りました。

四郞　ナニ、杢之進が娘、召捕つて參りしとな。出來した出來した。して、杢之進の娘に相違ないか。

甚藏　某、家中にありし時より、よく存じて居りまする。

四郞　其まゝ木崎が端へ、舟を漕ぎ寄せ、赤石の上に打上げ歸れ。

甚藏　畏まつてござりまする。

ト舟を漕ぎ出さうとする。

きよ　ア、申し〳〵。マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。この舟に乘つて、わたしは、どこへ參りますのでござりますえ。

甚藏　ハテ、知れた事。この木崎が端にて、龍神へ生贄に上がるのぢや。

きよ　エヽ。

甚藏　それゆゑ騙かつて、連れ參つたのぢやい。

きよ　ア、コレ〳〵、マア、待つて下さりませ。わたしは、大事の逢はねばならぬ人があつて、參じたものを、御城內へ連れて行てやらうと云うて、無理に舟に乘せ、生贄に上げるとは、そりやあんまり胴慾でござります。わたしの身は、大切なる大事を抱へし者。どうぞ、その用事をしまひますまで、お待ちなされて下さりませ。お侍ひ樣、どうぞお願ひ申します。

四郎　ムウ、女心に歎くは道理ながら、とても叶はぬ。汝が年は巳の年、巳の月揃ひしを、因果と思ひ覺悟いたせ。我れとても、不便には思へども、この度、當所木崎が端にて、數多の大船破損に及び。それゆゑ博士に占はせたるところ、龍神の咎めあり、これをなだめんには、巳の年月揃ひし女を生贄に上げれば、早速靜まるとの事。それゆゑの計らひ、汝の命一つ捨つれば、この後、何萬人の助けともならん。この理を聞き分け、この役目、相勤めてよからう。

きよ　成る程、御尤ものお詞でござりますけれど、さらさらわたしは、左樣な年度ではござりませぬ。そりや定めて、お聞き間違ひなりや、參つても、役に立ちませぬ事。どうぞお情にて、お助けなされて下さりませ。

四郎　ヤア、詞甘く申せば附け上がり、うぬが年度は、とくと相糺しある。甚藏、早く。

甚藏　ハア。

　ト漕ぎ出さうとする。

きよ　イエ〳〵。どうあつても、わたしや生贄に上がる事は、否でござりますわいな。

　ト泣く。甚藏、困つたこなし。奧より關屋、走り出で

關屋　娘。

　ト行かうとするを、四郎とめ

四郎　すさつて居らう。

きよ　ようマア、無事で居て下さつたなア。

四郎　ヤア、大事の生贄、時刻が過ぎる。早く〳〵

きよ　申し、母樣、わたしや生贄に上がらにやなりませぬ

わいなア。
關屋　ヤア、義理あるお前は、どうもやられぬ。生贄とありや、この關屋が。
きよ　イエ〳〵、お前はわたしに成り代り、大事の事を、どうぞ本望遂げて下さりませ。
關屋　イエ〳〵、それはお前に頼む。生贄には、相應なわたしが役。
四郎　ヤア、年度も合はぬに、小癪な邪魔立て。ヤア、誰れかある。此奴を引立てい。
瀨平　ハア、、、。
　ト瀨平、出て
ヤア、うぬは、おれが預かりし女郎め。ちやつと、逃げうとは太い奴。サア、うせう。
關屋　イエ〳〵、娘と一緒に。
瀨平　なにを。
四郎　早く〳〵。
　ト甚藏、舟を漕ぎ出す。
きよ　そんなら、母樣。
關屋　おきよ。
　ト行かうとする。

瀨平　うせ居らう。
きよ關　ハア、。
　ト泣く。一セイになる。甚藏、舟さしゐる。おきよ、川へはまらうとするを、止めながら花道へ入る。瀨平は、關屋を引立て入る。侍ひも附いて入る。後に四郎こなしあつて
四郎　ムウ、これで何かの手番ひ……よし〳〵。
　ト奧バタ〳〵。こなしあつて、ちよつと小隱れする。
　ト奧より浪平、後より滿月、前の形にて附いて出る。里姬も出る。
滿月　コレ、浪平どの。待つて下さんせいなう。
浪平　其方は滿月。
　ト繩を解き
合點のゆかぬ、この體は。
滿月　サア、樣子云ふ間も心が急く。一時も早う、爰を立退いて下さんせいなア。
浪平　其方が體といひ、爰を立退けとは。
滿月　樣子と云ふ元は、みんなあのお姬樣めゆゑ。年もゆかぬに厚かましい、浪平どのに難儀をかけ、まだその上に附け廻つて、憎らしい。あの姬面を捨てゝ、爰を早

う。サア、ござんせ〱。

浪平　イヤ〱、某は。

滿月　ハテマア、ござんせいなア。

ト無理に引立てろ所へ數馬出て

數馬　待つた、若殿。その女を召連れられますまい。

滿月　ナニ、浪平どのを、若殿樣とは。

數馬　これこそ、誠綱干の血脈たる土岐之助さま。

滿月　ヤア〱、そんならお前の事を、お前が尋ねて歩いて居やしやんしたか。お前が若殿樣なら、わたしは奥樣。こんな嬉しい事はないわいなア。

數馬　ヤア、奥とは何事、お側へも寄る事は叶はぬ下賤の女。すさりをらう。

滿月　浪平どのが若殿なら、わたしは側へも寄ろ事はならぬとは。

數馬　素情知れざる守、氏系圖なき臍の緒。さるによつて下賤の女、大國の若殿の側近く、差寄せること罷りならぬ。

ト四郎聞いて、こなしある。

滿月　そんなら、その守で。ハア、。

ト泣く。

四郎　イヤ、下賤でない。その女の氏素性は、知れてある。

數馬　知れてあるとは。

四郎　その傾城こそ某が娘、慥かな證據は、その守と、この守と引合はせて見よ。

ト守り袋を出す。滿月、取上げて見て

滿月　ほんに、こりや、わしが守と同じ事。そんならお前が

四郎　日頃、尋ねた娘であつたか。

滿月　アノ、父さんでござりましたかいな。

數馬　さてこそ〱。大弼が家來と僞はりしは、赤松が殘黨。

四郎　なにが、なんと。

數馬　赤松より外に、所持ある事なき三光裂れ。汝が素性明白なり。

四郎　すりや、某が素性を探らん爲であつたよな。

數馬　イデ、この事を御上使へ注進せん。イザ、若殿、姫君。

ト兩人を無理に舟へ乘せる。

滿月　わたしも一緒に。

ト行かうとする。數馬、後より舟に乘り、舟より滿月

を櫂にて當てる。滿月、ウンと反る。四郎、ヤアと寄る。この間に舟、花道へ行き

四郎　一大事を知りし上は。
ト側なる種ヶ島に火をつけ構へる。

數馬　かゝる事もあらんかと、鐵砲は悉く、玉を拔きあるを知らざるか。

四郎　ヤア。
ト見て

エヽ、いま〳〵しい。
ト打ちつける。

數馬　ハヽヽヽ。
ト笑ひながら舟さし、向うへ入る。ト滿月心附き

滿月　ヤア、そんなら浪平どのは。
ト川へ飛び込まうとするを、四郎とめて

四郎　コリヤ、娘、云ひ聞かす事がある。

滿月　イエ〳〵、のめ〳〵姫と添はさうか。例へこの身は、底の藻屑となるとも、跡を慕うて。
ト無理に振りきり、川へ飛び込む。水煙り立つ。一セイになり、滿月、向うへ泳いで入る。四郎、呆れしこなして、打眺め

四郎　エヽ、是非もない。
ト合ひ方になる。奥より大弼出て

大弼　四郎どの、して、彼の女は。

四郎　杢之進が娘を連れ參り、疾に舟にて、彼の所へ。

大弼　それは重疊。併し、油斷のならぬ今宵の仕儀。

四郎　ナニ、油斷のならざるとは。

大弼　右兵衞が兄、傳內と云ふ奴、一癖ある面魂ひ、事の樣子を氣取つた詞。彼奴が入込みゐるからは、滅多に油斷する隙なし。
ト此うち、臆病口より、橋がゝりへ、苫舟、流れ來て、東西にとまる。

四郎　すりや、これより身共は調伏の祈り。

大弼　某は、國次の刀を手に入れる手配り。

四郎　事の一擧は今宵の三更、呪ひ唄の終りが合ひ圖の狼火。

大弼　先づ上使より討取つて

四郎　直ぐに都へ攻め上らん。

大弼　萬事の手番ひ。

四郎　幸先よし。

大弼　出船の用意。

家來　ハア、。
　ト舟漕いで出る。四郎、乘り移り
大弼　然らば直ぐに。
四郎　追ツ付け吉左右。
大弼　必らずともに
四郎　油斷は致さぬ。
大弼　四郎どの。
四郎　おさらば。
　ト浪頭にて、四郎向うへ、舟さして入る。大弼、見送り、こなしあつて
大弼　ムウ、これでよし。この上は、ソレ。
　ト一セイにて、奥へ入る。ト合ひ方になる。ト東西の船、苫を上げる。上手、傳內、簑笠にて、下手、金十郎、同じ形。兩人、キツと向うを見て、互ひに顏見合はす。傳內、顏にて、行けとする。金十郎、ハツと舟を廻し、向うへ漕いで入る。波頭になり、傳內、舟漕ぎよせ、龕燈をさゝげ、あたりを窺ふ。ト奥より捕り手一人、窺ひ出で、ツカ〳〵と下りて
捕手　曲者。
　トかゝるを、見事に川へ打込み、龕燈にて、キツとあたりを窺ふ見得。一セイにて返し。
　造り物、見付け奥深に、浪幕、眞中に岩の洞口、前二間の二重舞臺、岩の書割り。この二重の上に、おきよ、白補の形にて髮さばき居るを、四郎、脫ぎかけ白髮、大童にて、おきよを引きつけてゐる見得。風の音、浪頭にて道具とまる。
きよ　そんなら、どうでも殺すかいなう。
四郎　オヽ、生贄と云うたは僞はり。斯く人なき所へ連れ來り、汝が生血を取つて、この簱に塗りつけ、武將の調伏。こま言云はずと、くたばつてしまへ。
きよ　さう聞いたら、なんの死なう。滅多に死んでよいものか。
四郎　なにを。
　ト刀拔かうとする。おきよ、逃げうとすること、いろいろ、ひやいな立廻り。一セイにて、花道より滿月、泳ぎ出て、岩へ取りつき上がり、この體を見て、駈け上がり、この中へ入り、支へる。
四郎　ヤア、おのれは娘。邪魔ひろぐな。
　ト引きのけうとする。滿月、枷になり、いろ〳〵あつ

て、立廻りの後、滿月を一かせ切る。ト旗に仕掛けにて血汐かゝる。トどろ〳〵にて、上より銀の雨下ろす。雨車。

四郎　ヤア、いま切つたは、うぬであつたか。

滿月　コレ、父樣、辰の年のわたしを殺し、あの御旗に血汐のかゝりし上は、お前の大望はなるまいがな。

四郎　ヤア、小癪な支へ立て。そこ退き居らう。

ト引きのけ、及び腰におきよが髮摑んで、引きつける。この中へ、滿月分け入る。始終ドロ〳〵雨車。

滿月　コレ、お前は、あの雨が、目にかゝらぬかいなう。コレ、お前の祈りは、もう利かぬわいなア。

四郎　ヤア。

ト四郎、初めて雨に心附き

さては、うぬ、親の大望の妨げひろぐな。

滿月　この役目、仕負ほせたら、謀叛人の血筋でも、未來を添うてやらうと、殿樣の云ひ付け。

四郎　エ、、殘念や。すりや、計られたるか。この上はモウ。

ト滿月を切り倒し、おきよを切らうとする。滿月、よろぼひ留めるを、切り殺し、おきよも危ふき所へ、花道より金十郎、舟にて漕ぎつけ、この體を見て、直ぐに飛び上がり、おきよを圍ひ、キッと見得。

きよ　ヤア、金十郎どの。

金十　すりや、怪我はなかつたか。エ、、忝ない。

四郎　ヤア、邪魔せずと、そこ退け。

金十　なにを。

トまた立廻りになり、おきよ、あちらこちらへ逃げ廻る。

ア、、危ない〳〵。どうぞこの舟で、早う〳〵。

きよ　それでも、舟に乘つては怖いわいなア。

金十　エ、、怖いどころか……サア、四郎、持つてゐる龍の旗を渡せ。

四郎　なにを。

ト立廻りのうちに、金十郎、いろ〳〵ひやいがる所へ瀨平、裸にて泳ぎ來て、この體を見て駈け上がり

瀨平、コレ、爰は打捨て、女中を連れて、この場を早う。

金十　イヤ、龍の旗は、おれが手に入れる。その人を連れて、この場を早う〳〵。

瀨平　そんなら、ござりませ。

トおきよを舟に乘せようとする。

きよ　イエ〳〵、お前は、最前、母様を。

瀬平　オヽ、あの敵役は皆を勞はらん爲。誠は、姫の家來主計が中間、有田瀬平と云ふ者。氣遣ひなしに、サア、早う〳〵。

きよ　そんなら、金十郎どの。

金十　瀬平、頼んだ。

瀬平　合點ぢや。

ト一セイにて、花道へ、おきよを乘せ、漕いで入る。此うち、金十郎、旗を引き合ひ、四郎を切る。切られながら、取りつく。金十郎、旗を引ッたくる。

金十　龍の御旗、これで一つの功。忝ない。

四郎　それを。

トよろしく立廻りにて、返し。

淺黄幕になり、舞臺、花道の浪下りる。ドンチャンにて、捕り手大勢、瀧六、脱ぎかけ大童にて立廻り、いろ〳〵あつて、皆々を追ひ込むところへ、丈助、凜々しき形にて、兩人、鎗の立廻りあつて、よろしく追ひ込む。ト返し。

舞臺前、花道、一面の廻廊セリ上がる。但し金燈籠、火をともし、所々に瑠璃燈つり、大概上がる時分、淺黄幕切つて落す。

造り物、見付け二重舞臺、神前の體。東西、廻廊中堂、所々に橘の紋付きの提灯立てあり、大篝數多焚き、右の二重の上に、大弼、脱ぎかけにて、刀を構へ、立つてゐる。兩方より、關屋、おきよ、脱ぎかけ白裝束、玉襷、鉢卷にて詰めかけてゐる。侍ひ大勢、棒突き、大勢並びゐる。大太鼓入り、早き神樂にて、道具とまる。

大弼　ヤア、この大弼を、敵などゝは小癪な奴の。

關屋　如何やうに陳じても、遁がれぬ證據は、こなたの口より最前の白狀。

きよ　斯くなる上は、遁がれはあるまい。サア、尋常に

二人　勝負。

大弼　ヤア、例へ某、敵にもせよ、國次の刀の在所も知れねば

きよ　敵討は叶はぬとな。

大弼　ハヽヽヽ、ハテ、不便の有樣。紛失の國次の刀、滅多に手に入らうか。覺悟して、くたばつてしまへ。

ト切らうとする。兩人、キッと留め

兩人　滅多に返り討には、なりますまい。
大弼　すりや、刀を出すか。
二人　サア。
大弼　勝負するか。
二人　サア。
大弼　サア〳〵〳〵。なんと。
ト宮より傳內。
傳內　いづれも待つた。國次の刀、これにあり。
トばた〳〵にて、傳內、麻上下にて、御書を持ち、後より瀨平、刀を持ち、金六、大小にて附添ひ出る。
大弼　ヤア、うぬは紛ひの金六、足輕の瀨平、こりやどうぢや。
瀨平　足輕となつて入込んだは、弓削主計が家來、有田瀨平。
金六　この金六も、疾に國次の刀は、傳內さまにお渡し申して置いたわやい。
大弼　それに又、この神前にあると云うたは。
傳內　それこそ汝をこの所へ誘き寄せ、斯く勝負いたさせん爲。最早、遁がれぬ大弼、尋常に勝負いたせ。
ト云ひ〳〵本舞臺に來る。上手より、繼橋、衣裳襠裲。
浪平、長上下。里姬も出る。
瀨平　イザ、國次の刀、お受取り下されませう。
浪平　出來した。慥かに受取つた。
繼橋　流石は、父上の家來、天晴れ〳〵。
傳內　弟嫁が今際の賴みも、もだし難しと云へども、遁がれがたきは、謀叛人の荷擔人。それゆゑ管領家よりのこの御書。
大弼　ナニ、管領よりの御書とは。
つぎ　一つの功の立つ上は、姬君との御祝言あつて、當家の治まり。
傳內　その上、敵討も御免とある、松倉內記さまの、お取次の御免の御書。
大弼　ヤア、謀叛とは何が謀叛。その上、一つの功とは、何が一つの功。それ見よう。
傳內　ヤア〳〵、金十郎、參れ。
金十　ハア、。
ト白旗を持つて出る。後より丈助、四郎の首と、瀧六が首を持ち出で
一つの功は、武將調伏をもどき、手に入れたこの白旗。
丈助　汝が荷擔人の赤松四郎も、まツこの通り。

大弼　ヤア、すりや四郎も、最早亡びしとな。チエ、口惜しや。
傳内　斯くなる上は、最早遁がれぬ唐橋大弼、潔よく、敵討の勝負々々。
大弼　ムウ、是非がない。敵討の勝負してくれう。
關屋　清水本之進が妻、關屋。
きよ　同じく、娘きよ。
丈助　家來、丈助。
三人　サア、尋常に、勝負々々。
大弼　うぬら一々、返り討ぢや。覺悟せい。
三人　なにを。
ト誂らへの神樂にて、いろ〳〵立廻りあつて、トゞ、大弼を切り倒し、三人打寄り
關屋　夫の敵。
きよ　父の仇。
丈助　主人の敵。
三人　覺えたか。
ト止め刺す。傳内、皆々を煽ぎ立てゝ
傳内　オヽ、手柄々々。
浪平　敵討成就の上は、おきよ傳内、祝言あつて、清水の家再興。
きよ　エヽ、有り難うございます。
傳内　これよりは、お國の治まり。先づこの由を、御上使へ注進いたさん。めでたい〳〵、先づ〳〵この場は、お立ち〳〵。
ト打出し、
幕。

當英名輝伶人報讐
お贔屓のいさほしに
舞樂執頭の　淺間左衞門
呂律則　虛空を
貫ぬく越　天　樂
御贔屓のおめぐみに
再度歸參の　富士右門
調子則　巖石に
ひゞく還　城　樂
室町殿管絃催榮

敵討高音鼓

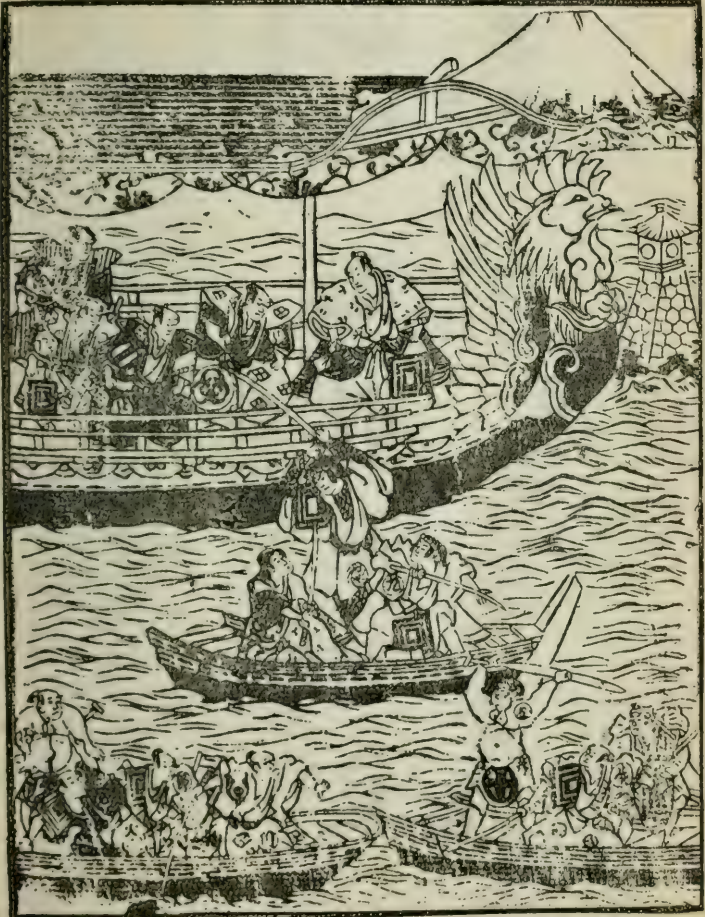
七幕

表のカタリは、この狂言を天保九年七月の河原崎座で上演した時のそれである。

下掲の凸版もその時の櫓下番附である。

復讐高音鼓

三保明神の場
三保の浦の場

口明

役名——足利義滿。今川了俊。今川上總之助。金貸し、赤目の字助。人買ひ、府中の五四郎。傾城乙女太夫。海女、小磯。梶田十藏。靈龜の精。富士右門。淺間左衞門照行。

造り物、見附け淺黃幕、所々に松の立ち木。上手、陣幕、高張り提灯、今川家陣所の心。本釣り鐘。了俊、上總之助、大名四人、並び居る。下がり葉にて幕明く。

了俊　この度、武將足利義滿公には、某が領分、駿河の國
上總　富士山御遊覽とあつて、遠路の御下向
大名　我れ〳〵は隣國の諸侯
同　その外譜代、外樣の面々、義滿公の御出迎ひ
皆々　伺候いたしてござりまする。
了俊　方々には、御苦勞千萬に存じまする。悴上總之助は御馳走役
大名　我れ〳〵は、詰め切りの役目なれば
皆々　伺候仕りませうな。
了俊　某は、陸路警固の役目。
皆々　然らば御前へ、了俊どの。
了俊　いづれも。
皆々　上總之助どの、後刻御意得ませう。
ト上手へ入る。
了俊　悴、用意調へば、早速御前へ。最早、晨鐘に程もあるまい。遲參いたすな。
トよろしくあつて上手へ入る。
上總　さて〳〵、どいつも堅い奴ではある。これから我れ等が趣向。ヤレ〳〵、向うへ、乙女太夫が來るワ來るワオ、イ〳〵。
ト唄になり、向うより、乙女太夫、禿、遣り手、太鼓持ち白八附いて出て、舞臺へ來り
乙女　殿樣、先度の約束ゆゑ、爰で逢はうと思うて、最前から來てゐるに、遲い事でござんすなア。

上總　今まで堅藏どのに取卷かれ、とつくりと痺れが切れた。して、今日は、辻止め、そこをばどうして通つたのぢや。

白八　イヤ、その智惠者はこの拙れ。なにか今日は辻止めと聞いて、なんでも夜のうちにと出かけたが、矢張り備が、凜と構へて居て、ヤイ〳〵、この女は通さぬと云ひ居つた。某ぬからぬ顏で、今川上總之助妹八重梅、罷り通りますと云うたれば、皆々が、主人の御息女、シイシイと尻もツ立てる。いづれも御苦勞、姬君には先づ先づお通りと、摺りぬけて參りました。なんと、きついものでござりませうがな。

上總　イヤ、天晴れ粹め。太夫、其方は上氣もせず、ようおぢやつたなう。

乙女　サイナア、來る事は來ても、白八さんのてんごう口に、ハラ〳〵思うて來たわいなア。

上總　我れ等が役は、まだ間もあり、向うの茶屋で天津乙女と時雨の床入り。其方の所持の羽衣を、この白龍が取りにける。

　　トしなだれる。

乙女　また惡い事ばつかり。そんならわたしや、先へ行て

上總　待つて居や。

白八　旦那、後より。サア、ござりませ。

乙女　サア、羽衣おぢや。

禿　アイ。

　　ト唄にて、この同勢、橋がゝりへ入る。向うより、小磯、網六出て來て、花道

網六　小磯さん、こなさん何ぞ樂しみが、出來たな〳〵。

小磯　なに云はんすぞいなア。三保の浦の明神さんへ、日參するのぢやわいなア。

網六　それは、よい穴が出來て、おめでたう存じます。

小磯　よい穴とはえ。

網六　明神さまの堂の後は、そこらあたりを盆屋だらけぢや。

小磯　惡い事、云はしやんすな。もう先へ行かう。

網六　オツト、先へやつては、爰まで連れ立つて來た甲斐がない。一緒に行かうわいなう。

　　ト兩人、本舞臺へ來る。

上總　コレ〳〵女中、お待ちなされ〳〵。

小磯　ハイ。

　　ト上總之助を見て、思ひ入れ。

綱六　これは又、どうしたものぢや。爰へ來ると、氣が長うなつた。サア〳〵、行かんせ〳〵。
小磯　もう、こちや參らいでも大事ない。
綱六　エ、。
小磯　お前は・勝手に行かしやんせ。
綱六　サア〳〵、大事になつて來た。ア、、さては狐が取り附いたわい。
小磯　エ、。
綱六　眉毛の數をよまれぬうち、ドリヤ、粹を通して・小磯さん、化かされさんせ。
　ト橋がゝりへ入る。
上總　ほんに、氣さんじな人ぢや……ナニ、女中、參詣かな。
小磯　アイ、ちつと明神樣へ、立願がござりまして、日參を致しまする。
上總　ムウ、その願ひは、戀ぢやな〳〵。
小磯　アイ……イ、エ。
上總　イヤ・さうであらうがの〳〵。
小磯　色々の事仰しやる。わたしや存じませぬ。
上總　御存じなくば、敎へてやらう。

小磯　そりや、何をえ。
上總　願ひ事の叶ふ拜みやうを。
小磯　どう拜みまするのぢや。
上總　サア、もと神樣は、鶺鴒と云ふ鳥を御覽あつて、交りをなさつた。それぢやによつて、我れ等も又、鳥を替へて、鶴か・イヤ〳〵、鶴でない鳩。その神めが、お娘の足を目がけるのぢや。
　ト小磯に戯むれる。
小磯　惡い事なされますないなア。
上總　どこに惡い事。鳩は正八幡の使にしめ、心願の事あらば、おれを拜むぢや、
小磯　あなたを拜みますと、願ひが叶ひますかえ。ハイハイ。
　ト手を合す。
上總　これはしたり、其やうな遠方では、願ひが聞えん。もつと近う寄つて。
小磯　ハイ〳〵……さうして、なんと云うて拜みますのぢやえ。
上總　オ、、可愛い。
小磯　オ、、可愛い。

ト小磯を引寄せる。此うち乙女太夫出かけゐて
乙女　殿さん。
トこれにて上總之助、惘り。
上總　ヤア、其方は乙女、いつの間に。
乙女　いつの間に來やうと、構うて下さんすな。さうして
今のは何でござんすえ。
上總　ヤア、今のは、オヽ、さうぢや、拜みやうを敎へて
ゐたのぢや。ナウ、お女中。
小磯　アイ、それで側にゐたのでござります。
乙女　ほんに、よい拜みやうを敎へてもらうてぢや。厚か
ましい、娘らしい、あんまりの事で物數云はれぬわいな
ア。殿さん、ちよつとござんせ……あんまりでござんせ
う。あのやうな惡性な事をさんして、濟むかいな〳〵。
小磯　殿さん、ちよつとござんせ……ツットモウ、解らん
わいなア。いま敎へて下さんした事は、ほんまでござり
ますかえ。
上總　なんの僞はり云うてよいものか。
ト乙女また來て
乙女　そんなら、わしに云はしやんした事は、嘘ぢやな嘘
ぢやな。
上總　なんのマア、嘘云うてよいものか。わが身より外に
心は變らぬわいなう。
小磯　殿さん、わたしが事を。
乙女　イヽエ、此方の殿さんぢやわいなア。
小磯　イヽエ、此方へ。
乙女　イヽエ。
ト兩方より引ッ張り合ふ。トヾ上總之助、眞中へへた
り
上總　アヽ待つてくれ〳〵。さう引ッ張られてといふも
のは、目が舞うてなるものぢやない。もう堪忍してくれ
くれ。
乙女　イエ〳〵、堪忍ならぬわいなア。
上總　こりや、術ない……オヽ、よい事がある。二人が斯
う半分づゝ、可愛がつたら、兩方得心ぢやあらう。
小磯　そんなら、わたしを可愛がつて
乙女　心變りは、ないかいなア。
上總　心が、變つてよいものか。
兩人　エヽ、嬉しうござんす。
ト侍ひ一人出て來り
侍ひ　ハツ、若殿樣へ申し上げます。大殿樣より只今、お

越しあれとの儀でござります。
上總　また堅藏の所へ行くのか。こりや又、否な事てはあるぞ。
ト明け六ツの本釣り鐘鳴る。
ありや、もう東雲。
侍ひ　サア〳〵、ちやつとお越しあられませう。
遣手　殿さん、まだ話したい事があるわいなア。
上總　サア、それは後で、間を見合せて。
侍ひ　サア〳〵、お越しあられませう。
ト上總之助を連れて入る。
乙女　エヽモウ、あの侍ひが、いとしぼさうに、無理に……どうぞして、殿さんの側へ行く思案はござんせぬかいなア。
小磯　よい事がござんす。今日はわたしに、御前へ出て、富士の由來を話せとやら。いつそわたしと一緒に、御前へござんせいなア。
乙女　エヽ、そんならどうぞ一緒に御前へ。
小磯　サア、わたしに附いて、殿さんに逢はしやんせ。追ツ付け、北の方、乙女の前さま、襠裲立派に、斯う參りや。

兩人　ホヽヽヽ。
小磯　サア、ござんせ。
ト兩人、上手へ入る。返し
造り物、正面、浪幕。東西、葭原、磯邊浪打ち際の蹴込み。眞中に右門、着流し、腰簑、笠を着て、石に腰掛け、釣り籠、釣り竿を持つてゐる見得。一聲コイヤイ、浪の音にて道具納まる。
右門　アヽ、誠に一炊の夢、東雲の東風、定めなき浮世の樣。我れも代々に傳はりて、忝なくも、天下の伶人と名たれし身をも、世に連れて故郷を離れ、仇に過ぎ行くこの年月。されども、捨てざる樂器のつれづれ、磯邊に遊ぶ鱗屑の、釣りに臨んで鬱氣の樂しみ。ハテ、さま〴〵の有樣ぢやわい。
ト釣り竿取つて、餌をさし、浪打際へ打込み。
ハテ、心得ぬ。沖は平浪なるに、只この磯邊に限り浪打寄するは、ハテ、審かしやなア。
トどろ〳〵にて上手の葭原より、龜の精、黑絲縅しの鎧、金入りやうの直垂にてせり上がる。
眼前遮ぎる異形の出立ち、窺ひ出でしは害せん爲か。イ

デ、正體の顯はすまいか。

ト薄どろ／＼、燒酎火を燃す。

龜精　汝を見かけ、頼み度き一儀あり。我れも得たる術あれど、仔細あつて遁がれ得ぬ急難、目前に差かゝれぬ。汝、これを助けくれなば、子孫に傳へ、幸ひの道を開かん。必らず後に試し見よ。右門知之。

右門　ムウ、何か心に當らねども、時に至らば計らひ得させん。

龜精　頼もしゝ／＼。シンヲクオアンシテシゼチリワキヤウ／＼。

ト薄ドロ／＼にてセリ下がる。

右門　形は武具に見ゆれども、着たる模樣の龜甲形。さては三保の浦浪に、幾年を經る靈龜にて、急難、爰に來るを以て、術に及ばぬ願ひ事。ハテ、奇瑞を見る事ぢやよなア。

ト向うより、子役六人、大きなる龜を繩に縛り附け、引ッ張つて出て

子役　よい／＼よいやなア。

ト本舞臺まで來る。

松吉　ナア、土松、珍らしいこの大龜、どうぞ仕樣はあるまいか。

土松　オヽ、皆寄つて叩き殺し

梅吉　この甲を舟にして、磯邊を乘つたら面白からう。

竹松　そんなら、寄つて叩き殺し

鶴三　脊中と腹と二つに放さう。

歌吉　オヽ、殺せ／＼。

ト殺さうとする。

右門　コリヤ／＼、子供等、さりとては要らぬ殺生、殊に稀れなる科ない大龜、放してやれ／＼。

土松　イヤ／＼、此方の父さんの、大事の網を破り居つた。

松吉　みな引出したら

歌吉　睨み居つたわい。

鶴三　それで、こちらが

竹梅　殺すのぢや／＼。

右門　成る程、それなれば尤も。併し、龜は神靈の精、よく存亡を見、吉凶をしるすなりと。サ、斯樣な事を申すとも、解りはせまい。鳥目を其方等にくれる。この龜を、我れにくれよ。

ト錢百文出して見せる。

土松　その錢、此方へ下さるなら

皆々　龜は助けてやりませう。
右門　それは重疊。それなれば、引替へにこれを取れ。
ト錢を渡し
この汀へ、此まゝに。
皆々　こちらも寄つて、逃がしてやらう。
ト子役、龜を磯邊へ持ち行き
土松　龜よ、禮をせい。
皆々　三遍浮かべ〱。
ト踊りながら下手へ入る。行き違へて宇助出る。
右門　宇助どのでござりまするか。
宇助　右門どのか……コレ、貴樣はようも、スツペリ、ヌツペリして居るな。おれも山では潰されぬ赤目の宇助、貴樣が母親の病氣、人參代に金五兩借してくれいと、樂器とやら、秘事とやら、結構な卷き物を、おれに突きつけ泣き愁歎、そんな物に望みはなけれど、その卷き物取つて、大枚の金五兩貸してやつたも、貴樣のお娘、小雪が望み、廿日、三十日と約束しながら、今日で幾日になると思やるぞ。
右門　御尤もでござりまする。
宇助　措いてくれ、何が尤も。無理でも、もう堪忍袋の破れかぶれ。戻さにや娘の小雪、此方へおこすか、金戻すか、二つに一つの返事。右門、どうぢやぞい。
右門　サア、取敢へず返濟と思へど、甲斐なき母が殁り、何か手纏れ、大きに延引。併し、この上は、今日は。
宇助　ア、もう云ふな。小雪を內へ連れて去ぬ。さう思うてくれ。
右門　イヤ、さうあつては、拙者めが。
宇助　エ、面倒な。
トせり合ふ。此うち五四郎、橋がゝりより出て、宇助を投げる。
右門　ヤア、あなたは。
五四　大事ないものでごんす。
宇助　どえらい目に會はしをつた……ヨウ、うぬマア、どこから湧いてうせた。なんでおれを投げやがつたのぢや。
五四　投げは致さぬ。時の挨拶、氏神の三保の明神へ、久久の參詣、通りかゝり、口論の樣子、おなだめ申さん爲に、ちよつと出ましたのでござります。
宇助　ハテ、口論ぢやない。借りた物を返さぬによつて、催促をしてゐるのぢや。

五四　サア、その借用の金、手前取替へて返濟いたさうと存じて。
右門　アイヤ、これまで親しう御意得申さぬ御方。
五四　イヤ、わしや別府の町で、五四郎と云うて、鎌倉通ひの商人。久し振りで戻り、今日で七日ばかり逗留。
右門　成る程、昨日ちよつと見受けました、アノ角家の御老母は
五四　ありや、わしが母で、これも長の病氣ゆゑ、何かの心勞。
宇助　エヽ、おきアがれ。うぬらが話し聞く耳はないわい。サア、右門、受取らうか。
右門　でも、今と申しては
宇助　ないか。
五四　イヤ、ある。手前がお取替へ申す。
右門　おやと申して。
五四　ハテ、いらぬ遠慮。
宇助　借りて返すか。
右門　サア。
宇助　どうぢやぞい。
右門　あなたのお情、宇助どのゝ御催促、少し心に思ふ仔細、何分にも、暮れ六ツまで、心の極め、返答申さう。
五四　ムウ、此方は見兼ね、用達つ金
宇助　戻さぬゆゑのこの催促
右門　サア、借り受けるとも、返すとも
五四　心の濟んだその上で
宇助　金に娘の替へ事するか
右門　御無心申して、秘書を得るか。
五四　二つに
宇助　一つの
右門　返答は、暮れ六ツ
五四　必らず共に
右門　お待ちなされて下さりませ。

ト宇助は向うへ、五四郎は、ソツと釣り籠取つて、ツイと橋がゝりへ入る。

一旦の間を合はせし五兩の金子、延引なすは不實の至り。元は大事な樂器の秘書。いづれ取り得て叶はぬ品。ハテ、どうがな。

ト橋がゝりより十藏、木綿やつしにて出て平伏する。
右門見て、行きかける。

十藏　ア、イヤ〳〵、お待ち下されう。御家來、梶田十藏

めでござります。
右門　イヤ、梶田十藏と申す家來、我が世にありし砌り、忠なる者と目をかけしが、奥が召遣ひ、よしと申す女と不義し、出奔なして行くへ知れず。
十藏　成る程、不義露顯に及び、お怒りもあるべきを、御子息富士太郎さまのお執成しにて、その座は遁がれ、云ひ譯なきまゝ、國遠いたして、樣々の憂き艱難。備前の國、石成坂にて賤しき業の馬追ひ商賣、主人のお目を掠めし罪と、夫婦諸とも、悔み泣かぬ日とてもござりませぬ。
右門　まだしも、それで人間の誠。時節を待つて、歸參を願ふか。
十藏　何卒不義のお詫び申し、歸參の上にて以前に増し、厚く忠勤を勵まんものと、津の國へ立寄りしに、御行くへも定かならず、やう〳〵詳しき便りを聞いて、一昨日この地へ着き、尋ね廻りし今日の仕儀。何卒この身の罪をお免しあつて、元の主從となし下さるやう、ハツ〳〵、偏へに願ひ奉ります。
右門　生得、汝が忠義の魂ひ、承知いたせど、一旦の越度。いづれ一つの功を立て、後日の願ひは、我が宅へ。
十藏　功になるべき事あらば
右門　その時こそは
十藏　以前の如く
右門　結ぶ主從
十藏　三世の奇緣。
右門　先づそれまでは、十藏、さらば。
　ト橋がゝりへ入る。
十藏　何を云うても、この身の越度。併し、一つの功を立て、詫びせよとは、まだ御不便のかゝるお詞。なんでも急ぎ、功になるべき工風が肝心。さうぢや。
　ト急ぎ思ひ入れあつて、上手へ入る。返し

造り物、うしろ一面の浪幕、高二重の大座船、東西とも浪の打寄せ。船の前、浪打際の書割り。船の中に義滿、烏帽子裝束にて眞中に坐りゐる。上手に今川了俊、下手に上總之助、後に東西に分かれ、大名二人づゝ並び、淨瑠璃にて道具とまる。

〽元弘建武の世の亂れ、足利三世の將軍、前左大臣源義滿、天下一統の功なつて、富士山遊覽あるべき爲、濱出の御遊び、三保の海岸を盡せし大小名、數艘の船に居

並びしは、目覺ましかりける次第なり。我が君、仰せ出さるゝは。

ト合ひ方になり

義滿　世も治に返るは方々の、方々の、忠勤ゆゑ、義滿が今日の富士詣でも。方々の奔走、祝着に存ずる。

了俊　ハア、我が君の仰せの如く、四海糸の如く亂れしも足利の武威に伏し

上總　今日の御遊覽は、太平の世にしろしめし給ふ御勳し

大名　當國の領主、今川どの御親子

同　隣國の我れ〳〵に至るまで

同　鎖さぬ御代は千代八千代と

皆々　御祝ひ奉りまする。

〽皆々、渇仰なしにける。了俊重ねて。

了俊　それにつき、この浦の漁師どもに申しつけ、魚の獻上…ソレ、悴、申し付けよ。

上總　ハア。漁師ども。獻上の魚、持參いたしてよからう。

漁皆　ハア、、

〽御諚を受けて、所の漁師、釣りなす魚屑、我れ先に。

ト濱唄になり、橋がゝりより、漁師大勢、めい〳〵魚を持ち、乙女、小磯も出て

漁一　鼻に角ある金がしら

漁二　おめで鯛から鰹傳ひ

漁三　心も鱸の生魚。

漁四　かれ鰤いはずと、この大蛸

皆々　差上げますでござります。

〽ござりまする手柄顔、爭ひ出して獻じける、中に交りて傾城乙女、小磯と共に安則に、目ませ、仕方を存み込んで、わざと三つ指、咳拂ひ。

ト女形二人心意氣。上總之助、思ひ入れ。

上總　ホウ、それ〳〵の獲物、大儀々々。兼ねて、申し置きし富士の因緣、名所の由來、義滿公への御馳走に語られよ。

乙女　ハ、ア。

〽と怖づ〳〵出れば、武將を始め、滿座の諸侯も目を放さず、見つゝ見られて恥かしき、まだうら若き菊桔梗、いはれを語り始めける。

ト二人、眞中へ出て

小磯　殿さんのお詞の、嬉しいやら、有り難いやら、聞き覺えたあらましを、ナア。

乙女　お許しうけて時知らぬ、富士の因縁
小磯　名所のいはれ
乙女　鹿の子斑らに
小磯　話しませう。
　ト合ひ方になり
乙女　駿河の富士とは申せども、四州に跨がる山續き
小磯　ソレナア、未申は駿河に屬し
乙女　丑寅の隅は、相摸の御領。
小磯　關八州より見上ぐれば、いづれも異なる御山の形。小裏は脚長く、南は嶮しき千尺の、甲斐より登るを吉田口。
乙女　駿河は大宮
小磯　相模は須走。
〽はんかいせいてう凡そ九里、雲を貫くその高さ、ほんにそれ／＼、孝靈天皇五年の夏、お生れなされた蓬萊山、近江には湖、一夜の間に兩國一緒に、出來た話しも空事の、雪は六月に消えて、その夜に積る不死仙境の尊き山。オ、不死とも、不二とも二つなき、文字に分けてはいろいろに、書くも文者の智惠比べ、天地分れしその時に、神さびて、高く尊き駿河なる、富士の高根の天野原、宿禰のお歌を聞くからは、孝靈さまの御時代に、出來た山とも思はれず、社を山の頂きに、建てるは役の行者さま、佛像數多造りしは、空海大師、淺間は富士の一名なり。これ高山は目のあたり、木枯しの森、賤機山、異なる澤は僞はりの、橋と申せば我れ／＼に。
　ト兩人、よろしく振りあつて
兩人　なに、嘘をつかうかいなア。
〽虛言は更に申さじと、上總之助を尻目にかけ、臆する色なく語りける、諸事は眞顏の上總之助、外らさぬ體にて。
上總　オ、、出來た／＼、君にも御滿悅。親人にも大慶、褒美は追つて、伴の茶屋で、扣へて居らう。
兩人　畏まりました。そんなら必らず。
〽お出でをと、目の内に君を松ケ枝海女乙女、色を含んで立ち歸ろ。義滿、御感斜めならず。
　ト漁師、乙女、小磯、よろしくあつて入る。
義滿　實にも女が申せし如く、淺間は富士の一名なるを。信濃路の淺間ケ嶽にけおされて、近世かゝる故實を知らず、賤が女の物語りにて、予も一首を得たり……「昨日まで、富士の高根に見し雪の、袖にも移る田子の浦浪」

了俊　ハア、、天晴れの御秀逸。かゝるめでたき折柄なれば、いづれも、舞樂の用意々々。

ト内にて大勢

大勢　畏まつてござりまする。

〽命に應じて淺間左衞門照行、伶人の司と聞えしその骨柄、太鼓の役にぞ參りける、堂下の舞曲は雪の袖をひるがへし、弦魚官の聲は、三保に二度天人の、舞樂を奏するかと疑はれ、曲半ばに過ぎざるうち、左衞門、急に四方を見渡し

ト左衞門、裝束にて出て、いろ〳〵あつて、上手を見て

淺間　ハテ、心得ぬ。音律濁れば調子も亂るゝは、察するところ、吉野の殘黨、君を討たんと、窺ふ者ありと覺えたり。警固の衆中、蘆原を御吟味あれ。

〽御吟味あれと淺間が下知、畏まつたと近習の面々駈け出す、御舟諸將も擬勢あり、心ゆるさぬ茂みより、狩り出したる破れ竹笠、釣竿提げし浪人族り。

ト家臣、走りよつて蘆原より右門を引出す。

家臣　さてこそ〳〵。ソレ、いづれも。

皆々　腕、廻せ。

〽押ッ取廻せば人々も、淺間が舞樂の顯然に、アツと感ずるばかりなり。

淺間　ヤア、潜まり居るは、烏滸の奴。

臣一　眞直ぐに白狀せずば

臣二　火水の拷問。

皆々　サア〳〵、なんと。

〽なんと〳〵とひしめいたり、此方は刀投げ出し、飛び去つて、うづくまり

ト右門、よろしくあつて

右門　御尤もの御疑ひ。義滿公の御船、爰に止め給ふとは知らず、釣りなせしが思はずも、御座寄せ給ふに、何無三寶逃げんと存せしに、道遮ぎられ、隱れ所なく、この蘆原に屈み居たるを御咎め、申し譯の詞もなし。御仁君の御惠みを以て、御免し下さらば、有り難う存じまする。

淺間　ヤア、紛らはしき言語。斯う見た所が、舞樂による人とも見えず。吉野の浪人と見た目は違はず。心に思ひなき汝ならば、音律狂ふやうやあらん。遁がれぬ所ぢや白狀いたせ。

右門　ハア、、左樣に御意なさるれば、申し上げねば遁がれぬ身の上。當時これより程近き、茨村に住める。富士

右門と申す者、親々より傳はりて、身不肖ながら、音樂の道に達せぬと申すにもあらず。恐れながらお見知り置き下さるべう存じまする。

〽詞の端々、御大將聞し召され、右門に向ひ

義滿　ムウ、して、先祖は如何なる者ぞ。

右門　ハア丶、恐れ多き御上意。拙者の先祖は住吉の伶人富士右京之進知親と申せし者なりしに、天王寺の伶人、淺間照蔭、正しく富士が從弟たりしに、攝政公へ讒言なし、遂には富士を退け、淺間を召され、淺間は益々威勢に募り、上意を僞わり、高音と號せし太鼓も奪はれ、無念積りて病に伏し、歿り給へば、我が父右近有知も、母諸とも住吉を去つて、身の營ひもこの駿河、無念の月日も一片の煙りと相成り、せめて先祖へ孝道と、受け傳はつたる音律も、佛事の爲に世を過す、身の成果てを、御推量下さりませ。

〽御推量をとばかりにて、涙と共に語りける。

義滿　ホ丶、ウ、艱苦の中にも音律の、道を忘れぬ神妙さ。聞捨て難き彼れが素性。左衞門には遁がれぬ一家、事を糺して、よきに計らひ遣はすべし。

淺間　ハア丶、畏まり奉ります。イヤナニ、右門どの、淺間左衞門照行、只今聞けば、二代三代過ぎたる、昔語りは、先祖の恥辱、その身の不調法を隱さん爲、讒言などゝは、隙ある仲のよまひ言。その上、舞樂の道に達せしやうに云はる丶が、よもや、さうではあるまい。この後は扶助してくれん。猿眞似の音樂は一家の恥辱、御前體よく披露せん。御免を受けて歸宅せられよ。

右門　田夫野人の身を以て、申し上ぐるも恐れありと、此まゝ去らば、僞わりの罪遁がれ難し。只今も仰せらる丶音律の亂れしを以て、我れ、彼所にあることを知りたりと仰せらる丶が、忍び聞く者、音律を知るにあらず。五音も又亂るべからず。五音の變ぜしを以て、聞く人ありと知るは、聊か珍らしからず。君子は道を得ん事を樂しみ、小人はその歎きを得ん事を樂しむ。直ぐならずして奏し難し。

淺間　へ丶、。たとへ火を水に消さんとするとも、天王寺の伶人は、太子の御時、六時堂の前の鐘、寒暑によつて上り下りあるを以て、聖靈會までの中間を指南す。我が家には、迦陵頻迦の秘曲を傳授す。さるを汝知るや。なんと。

右門　ホウ、本朝の樂は神樂を始めとす。迦陵頻迦は梵語

にして、鳥の名なり。神曲の古實に依らば、日本の御神、岩戸に立籠り給ふ時、八百萬の神、舞樂を奏し給ふに、諸行無常の調べを以て、本意とせず、まつた我が家には樂器のうち、太鼓を第一とす。

淺間　ヤア、云ふな。その太鼓は某しが家の業、紛らはしき申し條。

右門　ハヽヽヽ、太鼓は一名をふんと云ひ、又つゝみを訓と申す。樂行はれてより、細腰鼓に太鼓、小鼓の名あり。太鼓は亂世にこれを打つて勢を集め、治る上には時を知らす。某が申す所の太鼓は、秦陽の樂器なれば、第一の傳とす。申す所に僞はりありや。

淺間　サア、それは。

兩人　サア〳〵〳〵。

右門　御返答は、なんとでござる。

〽なんと〳〵と詰め寄る右門、拳を貫く憤怒の息ざし、義満公、眉目麗はしく

ト淺間左衞門、詰まりし思ひ入れ

義満　双方ともに理に叶ふ。この上は水魚の交り。我れは吾妻に遊び富士を見て、富士を得たり。最前海女の女が、淺間は富士の一名と云ひしも、一家の盡きせぬ緣。杯事は都の館、富士は後より上洛を。

〽松風の音、夕日陽炎、照行は赤面に、物も岩戸や音樂の、出世の門出に、ようそろ〳〵、舟唄の聲、櫓拍子に君が榮えも萬歳と、拜する海上路になし、我が家をさして立歸る。

三重にて、皆々引張り、よろしく　　幕。

二つ目

茨村右門内の場
駿州山中の場

役名――富士右門。同悴、太郎。同娘、小雪。右門女房、三雲。金貸し、赤目の宇助。娘、櫻子。人買ひ、府中の五四郎。同、播磨の五四郎。大羽軍平。木村三木之進

造り物、平舞臺、向う見附け赤壁、納戸口。上手、折り廻し障子屋體。下手、板塀。いつもの所に門口。葭の内より富士太郎、打網をつくくり居る。在郷唄にて幕開く。

太郎　ヤレ〳〵、ひょんな漁師の業に入つて、仕馴れぬ事

の情なさ。網のつゞくりに、ホッとした。ドレ、一休みせうわいの。

ト小雪、振り袖にて、奥より茶を汲み出て

小雪　兄さん、出花ぢや。一つ呑まんせ。

太郎　オヽ、妹、よう氣がついた。ほつこり氣の盡きた所ぢや。

小雪　どうで仕つけぬ手業、精が盡きませう。わたしが手傳ひませうわいなア。

ト網をつゞくりにかゝる。三雲、着流し、菊の花を持つて、橋がゝりより出て

三雲　いま戻りましたぞや。

太郎　オヽ、母様、お歸りでござりますか。

小雪　きつう、お早うござりましたなア。

三雲　父上は、まだお歸りないかや。

太郎　ハイ、まだお歸りはござりませぬ。

小雪　母様、奇麗な野菊を、摘んでお歸りなされましたなア。

三雲　サイナウ、お寺參りの歸り道、野邊に亂菊のこの見事さ、摘んで歸りましたも、明日は姑御の一周忌、佛様へ供へやうと思ひまして。

太郎　それは、何よりの御馳走でござりまする。

三雲　馳走の次手に、もう晝飯たべやつたか。

小雪　イヽエ、お二方のお歸りを、待つて居りました。

三雲　それこそ要らぬ御遠慮ぢや。父上の程は知れまい。わしはまだ欲しうない、二人ともに、マア先へ。

小雪　お花も上げて、左様いたしませう。

太郎　そんなら、母さん。

兩人　お先へたべまする。

ト太郎先へ、小雪、菊の花を持つて、納戸へ入る。唄になり、向うより五四郎、釣り籠を持つて、門口へ來て

五四　右門さまとは、内方でござりまするか。私しはツイ府中の町の者、まだお歸りはござりませぬか。

三雲　まだ夫は歸られませぬ。

五四　御免なされませ。

トずつと通る。

三雲　なんぞ御用あつて、お出でなされましたか。

五四　私しは京の五條に暮らして、古手商賣、府の町の二三五といふは、わしが弟、今度、母者人を京へ呼び迎へんと來たところが、中風の病ひ。所で今日、御亭主に

逢つてよく見れば、昔、住吉に居られた時の大懇ろ。久久にて逢つたところが、右門どゝの難儀の場所、宇助といふ人に借りられた五兩の金。

三雲　左樣なら、宇助どのが。

五四　サア、そこに又喜ばす俄かの出世。今日義滿さまとやらのお舟に召され、樂の事からお見出して、急に東へ連れらるゝと云はれたところが、舞樂とやらいふ大事の秘書、持つては行きたし、金は無し、そこでわしに五兩の無心。尤も用意はあるけれど、サア、何十になつても背かれぬ母の詞、金を出せば、それだけの價があるかと、流石女子の小料簡。そこで聞きや、妾にお娘御があるげな。それを嫁に貰うた代り、樽代ぢやと云うて、母者人へ附きつける氣、それも妾の逗留二三日だけ、介抱旁々おこして下さらば、旅立ちの時、ソツと戻し、母への手前はよいやうに、そりや胸にあると、右門どのに云うたれば、早速承知、あの五兩の金を持つて、宇助どのゝ方へ、巻き物取りに行かれましたわいなう。

三雲　それはマア、喜ばしう存じまする。

五四　ところで、右門どのが云はれたは、歸りがけに內へ寄り、この釣り籠を目印しに、連れて去んでとおこされた。それでわざ／＼來ましたてや。

ト小雪、覗きゐる。

三雲　イヤ、とても事、夫の歸りを待つた上で。

五四　こりや尤もぢや。一歸り去んで、出直して來る分の事。

三雲　ならう事なら、どうぞ左樣に。

五四　心得た。そんなら追ツ付け歸つたら

三雲　樣子も聞いて

五四　その上で

三雲　五四郎さま

五四　後に逢ひませう。

ト思ひ入れあつて、橋がゝりへ忍ぶ。合ひ方になり、右門、走り出て來り、內へ入り

右門　いま歸つたぞ。

三雲　オヽ、お歸りなされましたか。

ト太郎、小雪奧より出て

太郎　只今でござりますか、

小雪　さぞ、おひもじうござりませう。

三雲　早速ながら、樣子を聞かねば。

右門　ムウ、成る程。ナニ、兄弟の者、いま身共、歸りがけ、

漁師どもが申すにはこの富士の兄弟、仲間に入つて間もないに、働らきに不精なと怒りをつた。一渡り顏出ししてお來やれ。
太郎　左樣なら行て參じませう。
小雪　わたしも一緒になア。
三雲　それがよい。
右門　イヤモウ、何するのも暫しの渡世ぢや。
太郎　左樣なれば父上。
小雪　母樣。
太郎　どうか、樣子の
右門　ヤア。
太郎　ドリヤ、參りませうか。
ト思ひ入れあつて、兩人向うへ入る。
三雲　右門どの、思ひがけない、耳寄りな樣子の段々。
右門　されば、今日將軍家の咎めに逢うたが、この身の出世。樂器の道より御意に叶ひ、昔に歸る富士の家、近々上洛せよとの仰せ付けられなれども、樂器の秘書、御覽に供せんも、人手にあつては儘にもならず。先づこれを取り得たく、また早うわれ達に喜ばせたく急ぎしに、よくよく思へば兄妹の者、大切の品を質物に差入れし事聞くならば、末に至つて彼の秘書、無略に存じ居らうと、それゆゑ、わざ〳〵出し拔いた。云ひ聞かすには折もあらんが、兎に角、大事のあの一卷。
三雲　サア、その事に附いて。
ト橋がゝりより侍ひ出て
侍ひ　お頼み申さう。富士右門どのゝお宅はこれか。主人今川上總之助より、火急の用事、直さま同道いたせと使ひの趣き。イザ、お越しなされい。
右門　これは御苦勞千萬、然らば參上仕らん。刀を出しやれ。
三雲　ハイ。
ト納戸へ入り、刀を持つて出て、右門に渡す。
何かは、お歸りあつた上。
侍ひ　イザ、お越しなされ。
右門　御免下されい。
ト侍ひ先に立ち、右門向うへ、三雲は奥へ入る。橋がかりより、小雪、走り出て、内へ入る。
小雪　最前、五四郎さまとやらが見え、始めの程は聞かねども、わたしを連れて去ぬるのと、金の樣子は：：慥かに大事の卷き物を、人手に渡してあるとやら。大切ない

ものが戻る事ならば、どうぞさうしてお二方の、お心が休めたい。ア、どういふ譯か、詳しい事、聞きたいなア。

ト五四郎、橋がゝりより、ツッと出て、門口にて足音する。小雪、上手の障子屋體へ入る。

五四　お内儀、主はまだ戻らずか。

ト奥より三雲出て

三雲　五四郎さま、たつた今、歸られまして、話さうと思ふうち、今川さまより急のお召し。

五四　オヽ、そりや、明日早々上洛せいに違ひはない。いま噂を聞いて來た。時に娘の事ぢや。母者を云ひ紛らし金の代りはこのお娘と、見せたら直ぐによいやうに、くろめて來よう。ちよつとならば、來てもよからう。

三雲　オヽ、それしきの事は、何はさて、あの子供に、その話しを。

小雪　そりや、聞いて居りまする。

ト上手より出る。

五四　お娘か。

小雪　様子を聞けば、あなたのお世話。わたしや、附いて參りませう。

三雲　そんなら、ちよつと行てたもるか。

五四　直ぐに連れて戻りまする。

小雪　そんなら、母さん。

三雲　早う戻りや。

五四　サア、ござれ。

ト五四郎思ひ入れあつて小雪を連れ橋がゝりへ入る。向うより、太郎戻り

太郎　母様、小雪は戻りましたか。

三雲　戻りました。

太郎　海邊で見失ひ、それでウカ／＼。して、父上は。

三雲　ちよつとした所から呼びに見えて、もそつと先に。

太郎　そりや侍ひやうな人が、呼びに來たのぢやござりませぬか。

三雲　ムウ、さうぢやわいなア。

太郎　いまチラリと見たが、それなら、なんぞ氣遣ひな。

三雲　ヤア。

太郎　わしは、ちよつと。

ト表へ出て

あれは、慥かに

三雲　なんぢやいなう。

ト向うより家來大勢、右門の前後を取巻き、後より、

大羽軍平、野袴、鞭先にて附き出て

家來　歩め〳〵。

ト本舞臺へ來て

軍平　われが内はこれか。

右門　ヘイ。

家皆　動くな。

太郎　アイヤ、お待ちなされ。

三雲　見れば、夫右門どのを

右門　兩人ともに氣遣ふな。今朝、將軍の御前に於て、近きうちに上洛せよとあつて、立歸つた後で、我れを嫉む逆意の仕業。

軍平　御若年の我が君、一旦御意に叶ひしが、お糺しあれば、吉野方に心を寄せし富士右門、遂には君へ仇をなさん、敵の末は根を斷てと、以ての外の御怒り、家内も共に搦め來れと、主人の仰せ。サア、うぬら、腕廻せ。

ト三木之進、家來を連れ出て窺ひゐる。

太郎　これは覺えもなき

三雲　無實のお咎め。

右門　ハテ、差當りしお上の御威勢、申し開きの立つべき所で、相立て見する。扣へてゐやれ。

軍平　ソレ、忰めから引ッ縛れ。

ト家來、バラ〳〵太郎にかゝる。ちよつと立廻つて

太郎　非道の繩目、かゝりませぬぞ。

右門　コリヤ、惡しく手向ひ仕り、理あつて罪に落入るか。

太郎　ぢやと申して。

右門　親に任せ、堪えて居れい。

軍平　憎くき手向ひ、一度にかゝれ。

三木　イヤ、さうはなるまい。

軍平　ヤア、こなたは。

三木　軍平どの、君よりの御意の下らぬお役目。

軍平　なんと。

三木　イヤ、私しの宿意を以て、權威に任せ、僞はり表裏、只今、君の御意下り、急ぎ右門を上洛させよと、主人今川承はり、斯く使ひを蒙むる某。

軍平　ヤア。

三木　跡方もなき罪を拵らへ、富士親子を失はんとする、この企みは、慥かに淺間…サア、淺き手段。但し、御上意に相違なくば、なんぞ證據でもあつての儀か。

軍平　サア、それは。

三木　由なき事に荷擔たし、あたら命を失ふ所存か。
軍平　ムウ。
三木　この旨、一々言上せうか。
軍平　サ、その儀は。
三木　合點參らば、早く歸られよ。
軍平　然らば、此まゝ。
三木　お引きなさるか。
軍平　エ、、思へば。
三木　なんと。
軍平　家來、參れ。
ト軍平こなしあつて、家來を連れ、橋がゝりへ入る。
太郎　先づ〳〵
三人　あれへ。
三木　御免下されい。
ト上座へ直る。
右門　近頃以て、御苦勞の御入來。
三雲　殊に雜儀を遁がれしも
太郎　あなた樣の御厚意。
三人　有り難う存じまする。
ト三木之進、百兩包みを出し

三木　早速ながら、いよ〳〵明朝、君のお立ちに附添うて上洛のあるべきやう。尤も、主人の指圖にて、御子息までのお身のまはり、諸式の道具、皆城内に取揃へ、御家來まで兩三人、讓り申して、道中使ひ。殘る方なき御拵らへ、有り難く思し召されよ。
右門　ハ、、こは恐れ入つたる御惠み。
三雲　これも偏へに今川さまのお執成し、如何ばかりか、有り難う
三人　存じまする。
三木　お喜びは、さこそ〳〵。これに又、金子百兩、外に手元の拵らへ、火急の段は氣の毒ながら明朝
右門　取敢へず、直ぐさま出立。
三木　某も心急き、はやお暇
三雲　この上ながら
太郎　萬事、よろしう
右門　お役目、御苦勞。
ト三木之進は向うへ入る。暮れ六ツの鐘鳴る。宇助出て
宇助　サア、約束の暮れ六ツぢや、金返すか。小判を渡すか。

右門　オヽ、よう來て下さつた。金渡さう。シタガ、彼の品は。
宇助　爰にある。
　　ト袱紗包みの卷き物を出す。右門、百兩の封を押切つて、五兩の金を出し
右門　長々の延引、御禮はゆる〳〵。極めの利足に、ちと多けれども、金子六兩、お受取り下されい。
宇助　こりやいつの間に金が出來たか。ならう事なら、矢ッ張りお娘が望みぢや。
右門　イヤモウ、金の代りに娘を渡して、この右門が立ちませうかい。
太郎　誠に嬉しさに紛れましたが、この妹は、母樣、どれへ參りました。
　　ト三雲、思ひ入れあつて
三雲　南無阿彌陀佛。
　　ト右門の刀にて自害せうとする、
太郎　ア、コレ、待つた。
右門　ヤイ、かゝるめでたき折柄に、何ゆゑの自害なるぞ。
三雲　云ひ譯もなき、あの小雪。最前、五四郎といふ人が見え、右門どのが秘書を取り得る金五兩、あだては母の手前、委細の事は右門どの承知の事と、目印しに釣り籠持つて、親身の話し、連れて去んだら引返し、送つて來る筈。この事あなたへ話さうと、思ふ間もない今日の體裁、聞けば聞く程紛らはしい、娘小雪を五四郎に、奪ひ取られしは、母の誤まり。どうぞ死なして下されい。
右門　ムウ。
宇助　最前、女子を馬に乘せ、滅多に走つた横顏は、慥かに小雪、おれが望みも邪魔する人買ひ、追ッ駈けて……さうぢや。
　　ト向うへ走り入る。太郎も行かうとする。
右門　ヤア、悴、どこへ行く。
太郎　五四郎とやら、追ひ駈けて、
右門　心はやるは尤もなれども、方角知れず、時も過ぎ、殊さら先の面體も知らず。
太郎　エ、。
右門　サア、急かずと、とつくり思案を致せ。
太郎　チエ、、父上
右門　悴
三雲　なんとせうぞいなう。

ト泣き落とす。侍ひ一人走り出て

侍ひ　ハツ、右門さまへ、主人の仰せ。我が君、只今御出立、直さまお越しあれと、急ぎのお迎ひに、参上仕つてござりまする。

右門　ヤア〳〵、最早我が君の

太郎　お立ちとな。

侍ひ　急ぎ、御用意。

右門　心得ました。

侍ひ　おぬかりあるな。

ト云ひ捨て、走り入る。

右門　思ひもよらぬ、今日の出世。

太郎　喜びあれば

三雲　悲しみの

右門　あるも定まる世の因果。

太郎　とはいへ、妹の

三雲　生死の程が

右門　ハテ、滿つれば缺くる道理。

兩人　でも

右門　公事を娘に替へられうかい。

ト三人、よろしく思ひ入れ。返し、山幕を冠せる。

造り物、山幕、雨車。雷の鳴り物にて道具納まる。

ト向うより、五四郎、鎧簑、ばつてう笠にて走り出る。上手より宇助、俵をかぶり、走り出て、本舞臺にて突き當り、兩人こけ

五四　ヤレ〳〵、どえらい雷ぢや。これでは、馬も動き居るまい、ドレ、ぼツ附かうか。

ト行かうとする。

宇助　コリヤ、待ちやアがれ。

五四　うぬ、どいつぢや。

宇助　今日三浦で逢つた赤目の宇助ぢや。われが連れてふけつた小雪、おれに寄越せ。

五四　わりや、どうしてそれを知つた。

宇助　オ、、右門が所で知れたゆゑ、山は手のもの、追ツ附いたのぢや。

五四　うぬが相手になる隙はないわい。

宇助　行くへを云はぬか。

ト兩人、立廻り、宇助を蹴倒し

五四　そんなぢやないわい。

ト上手へ走り入る。宇助、立ちあがつて

宇助　どつちへうせた。なんでも、おのれ。

ト上手へ入る。山幕切つて落す。返し

造り物、正面、二重の高土手、板松遠見、浪の打寄せ、岩など見せかけあり、本釣り鐘にて道具納まる。ト鳴り物になり、花道より右門、着附け野袴、鞭先、大小、菅笠。富士太郎、同じ拵らへ、後に駕籠舁き家來、附添ひ出て

右門　太郎、あの鐘は六ツであらうな。
太郎　左樣でござります。
右門　もう、明けるに間もあるまい。併し、今の時雨には困つたてや。
太郎　併しながら、さつぱり晴れましてござりまする…イタヽヽヽ。

ト爪づいて足を押へる。

右門　なんとした〳〵。
太郎　爪を石にて怪我しました。
右門　歩みならはぬ旅路、道理〳〵。駕籠の者、先の宿へは、はや如何ほど。
駕舁　もう、五六丁あるでござりませう。
右門　ムウ、その駕籠は先へやつて、よき茶店を起し、休んでゐやれ。
駕舁　すりや、お駕籠は先へ。
右門　オヽ、サ。
太郎　コレ、駕籠の衆、母樣がお休みなら、ソロ〳〵と頼みます。
駕舁　そんなら先へ。
右門　早く〳〵。

ト駕籠舁き、家來、下手へ入る。花道より播磨の五四郎、駄賃馬の上へ、櫻子を振り袖で縛りて、深き三度笠を着せて、坊主合羽にて、姿を隱し、馬方を連れて出て

馬士　なんと、五四郎、夜道といふものは、なか〳〵いけるものぢやないなア。
五四　オイヤイ、この人買ひは何がならうぞい。
馬士　中でも、この馬方は辛い役ぢや。
五四　何するも、商買ぢやわやい。女郎よ、追ツつけ、お山に賣つたら、旨い物は喰はし、よい衣服着せるワ。サア、吠えずとうせう。
馬士　ほてツ腹め、歩まないか。

ト行きかける。右門、太郎に囁き、ズッと出て

右門 五四郎、待て。
兩人 なんぢやぞい。
右門 樣子は殘らず聞いた。
太郎 人買ひの五四郎め。
右門 娘を返せ。
兩人 それ知つたら。
ト切つてかゝる。右門、太郎、立廻つて、トゞ馬士を切り、五四郎をちよつと當て、櫻子を下ろし、合羽笠など解くと、遠見の岩の間より、朝日出る。鷄笛になり、右門、五四郎を見て、恟り思ひ入れ。
右門 すりや、五四郎と云うた汝は。
五四 播磨の五四郎。
太郎 妹、小雪と思うた其方は
櫻子 櫻子と申しまする。
右門 そんなら互ひに、
太郎 きつい間違ひ。
五四 ヤア。
ト かゝる。右門、ポンと切る。
兩人 ヤ。
右門 コリヤ。
ト押へる。太郎、あたりへこなし。右門、刀を拭ふ。櫻子慄ふ。この見得、よろしく幕。

三つ目

作吉神社舞樂の場
合邦ケ辻の場
富士右門屋敷の場

役名――大内權太夫義弘。赤松上總之助義則。室積平馬。村主兵助。奴、團平。大島隼人。熊毛主計。北村玄蕃。住の江守。萩原左膳。岩田平馬。赤瀨和泉。富士太郎。小原女、お京。右門妻、三雲。娘、櫻子。富士右門利之。淺間左衞門照行。

造り物、見附け淺黄幕。上手、茶見世。臆病口、葭簀、半暖簾を掛け、下手、松の立ち木、櫻の吊り枝、床几に長太、作内、文治、軍兵の拵らへ。あたりに鉢肴を並べ、長太、瓢簞を叩き、作内、文治と茶碗にて拍子取りゐる。おばな、茶屋女にて酌してゐる。壬生囃子にて幕開く。
作文 瓢簞、賴むぞ〳〵。
三人 瓢簞おやく〳〵。

はな　お銚子、替へませうか。
三人　コリヤ〳〵、お娘、一つ合ひをしろ〳〵。
はな　わたしや不調法にござります。
長太　不調法なら、教へてやらう。
　ト しなだれる。
はな　アヽ、申し、悪い事なされずと、村外れの壬生狂言、御見物なされませぬか。
文治　なんだ、狂言。
はな　アイ、紅葉狩ぢやの、二人聟のと、むづかしい狂言をいたします。
　ト 捨ぜりふにて、酒事になる。向うより、おはし、おつち、お京、小原女にて葱の籠を持つて出て
お京　マア。行かんせいなア。
きよ　なんでも、さうに違ひないわいなア。
はし　恰好が違うてあるわいなア。
つち　マア、茶店で一休みしてから、また尋ねて見る。待たんせいなア。
　ト 無理に、お京を連れて、本舞臺へ來る。
作文　ヤア〳〵、女ども、姦ましい。
三人　下がれ〳〵。

女三　ハイ〳〵。
長太　我れ〳〵が酒宴の場席も構はず、慮外を働らく女郎ども、そこ動き居るな。
作内　長太、待て〳〵。形は賤しい女郎なれど、あてやかな者だぞよ。
文造　イカサマ、素直者だて。
長太　えいワ、器量に免じて料簡いたすワ。爰へ來い。
三人　ハイ。
はな　なんにも怖い事はござんせぬ程に、行かしやんせいなア。
はし　わしが腰骨に引ツ附いて、二人ながら、お出でお出で。
　ト 側へ來り
三人　ハイ、なんでござんす。
長太　なんで彼奴は器量がよいのぢや。仔細を云へ。
はし　サア、その子の産れ付きのよいのが、持合ひの根元でござんす。
三人　とは又どうして。
はし　今年の春、あの大阪から、此方の里へござんした優しい男、フトした縁で、この子の内へ掛り人、たにが互

ひの浮氣盛り。
お京　ア、コレ、そりや何をお云ひぢやぞいなア。
はし　ハテ、話しするのも、便りを聞く種ぢやわいなア。
作内　さうして、後は
二人　どうぢや〳〵。
はし　わしも初めは、法界悋氣、この子の所へ走つて行て
　胸づくしを斯う取つて。
　ト長太の胸倉を取る。
長太　こりや、何をする。
はし　わが身ばかりよい事して、近所の娘の鼻明かし、そ
　れで濟むか〳〵。
　ト長太の胸倉取つて、突き放す。床几より落ちる。
はな　オヽ、滅相な。
お京　どこもお怪我はござりませなんだか。
長太　イヤ、そもじが手を取り起してくれたので、痛みが
　早速とまつたやうだ。して、その男の仕廻りは、どうぢ
　や。
お京　お恥かしい事ながら、フト内を出やしやんして、今
　に行くへが知れませぬわいなア。
長太　氣遣ひ致すな。おらが尋ね出してくれう。今宵は三
　人とも、屋敷で一宿せい。
お京　イエ〳〵、それでは。
長太　ハテ、身共に任せい……なんと兩人、三人を連れ歸
　り、惡方果報の鬮引きは、どうであらう。
作文　こりや好からう。
はし　定まらぬ鬮取るより、いつそ、わたしはお前に隨は
　う。
長太　エヽ、なにさらすぞい。
　ト突き飛ばす。おはなは兩人に逃げいと囁く。兩人、
　行かうとするを
兩人　コリヤ、逃がさぬワ
長太　待ち居らう。
　ト追ひ廻しの立廻りになる。向うより、室積平馬、着
　込み、腹巻き、金入りの野袴、武者草鞋にて出で、本
　舞臺へ來て。
平馬　鎮まり居らう。
　トこの聲に驚ろき、お京、おはなは茶店、おはし、お
　つちは橋がゝりへ逃げて入る。
平馬　ヤイ、われ達は、なんと心得をる。この度、足利ど
　のゝ厳命によつて、某が主人、赤松上總之助義則公、ま

つた大内權太夫義廣どのと、吉野の臣、山名氏淸を討ち亡ぼすと雖も、その殘黨、諸所に埋伏、油斷ならず。當所に陣を張り、毎日近在を詮議の時節、女童を捕へての酒興。言語道斷、不敵の體裁、憎くき奴等め。

長太　不屈きの段、眞平

二人　御免下さりませう。

平馬　以後はキツと嗜なみをらう。

三人　ハア、。

平馬　と申すは表向き、申さば陣中の鬱晴らし。其方達に申し附けた、あの富士が娘櫻子、先日チラリと見請け、身が宿所の伽にと思ひの外、今朝聞けば右門が實子、富士太郎と申す者と、近々婚禮の由。さあれば我が望みは叶はぬ道理。只今これへ參る道筋、慥かにそれと見た目は違はぬ。是非この道へ參るは必定。長太、文治はこれに殘り、櫻子が親子參るを待ち受け、此方の手に入るやう、合點か。

作内　何がさて、主人の御意。

文治　追ツ附け吉左右、お聞かせ申すでござりませう。

平馬　出かす／＼。淺間照行に密談の仔細もあれば、作内、來やれ。

ト唄になり、作内を連れ、向うへ入る。

長太　なんと文治、戀と云ふ奴は廢らないの。併し、もう一杯引ツかけやうか。

文治　オ、サ…コレ、お娘よ、酒だ／＼。

トおはな、徳利持ち出て、酒事になる。向うより、村主兵助、着附け木綿、紙子の繼ぎ／＼、手に鼓を持ち、編笠を着て、一本差し、子役、三四人附いて出て

子供　コレ／＼、鼓の小父さん、鼓を叩いて見さんせ。

同　おりや謠が面白い。早う始めて

皆々　見さんせ。

兵助　いつもの所へ見世出して、それから始めて聞かさう程に、おれに附いて、ござれ／＼。

はな　オ、、鼓さま、今ござんしたか。敷き物は爰にあるぞえ。

長太　娘、ありやア何者だ。

はな　お鼓を打つて、謠を謳うて、合力を受くる人でござんす。

長太　品のよい乞食だな。

文治　りやんこの果てか。

兵助　これは有り難いお見立て。浪人體などとは、忝なう

ございます。元は大和の浪人、三津山の何某と云はれし町人の倅でございますが、なにが色めに打込んで、家もその色めが二人で、月と花とに有頂天。親の身代遣ひ果し、二人の太夫も行くへ知れず、親の内は不首尾になり、太夫を探しにと出ましたが、糧に盡きて、今ではこの形、後悔先に立たずと、ほんに夢が覺めました。

子役　小父さん、始めさんせい。

皆々　コレ〳〵。

兵助　サア、今打つぞ……お聽き辛うはございませうけれど、惡いも却つてお笑ひ草、御酒の興にもなりませう。お聞きなされて下さりませ……「そも〳〵大和の國、三津山物語り、世も古への奈良の榮えや、柏手公成と云ふものあり、又その頃、桂子、櫻子とて二人の遊女ありしに、彼の柏手公成に契りを籠めて玉手箱、二道かゝるさかにの、いと淺からぬ思ひ妻、月の夜風に行かう住家は畝傍みゝなし、山里も二つ釆女のきぬ、花よ月よと爭ひしに。」

ト この謠に大小をかり、向うより三雲、着流し、櫛出し帽子。娘櫻子、奴忠助、附添ひ出て

三雲　ナア、櫻子、彌生に近附き、行きかふ人の賑はしき心も春に浮き立てば、其方も心が勇んでゐやらうの。

櫻子　母樣の御意の通り、御恩も深き私しが身の上、殊に知一さまとの御取結びは、この身の納まり、お嬉しう存じます。

三雲　娘と定め、その上に、倅が嫁と定むるも、これ皆因緣事。富士太郎が元服も、婚禮の下拵らへ。それゆゑ今日の神詣りは、吉事を祈る爲でござるわいなう。

櫻子　父上にも今日は、大切な樂のお役日。お留守中の事なれば、富士太郎さんにも、さぞお待兼でござんせう。

もうお歸りなされませぬか。

三雲　最前から餘程の道、向うの茶店で、ちよつと休んで歸りませう。

ト 皆々本舞臺へ來る。

兩人　イヤ、けうとい〳〵。マア、息つぎに一杯呑め。

忠助　南無三、最前の茶店で、お莨入れを取殘しましたさうな。一走り取つて參りませう。

三雲　そんなら、さうして下されい。

忠助　ネイ〳〵。

ト 向うへ入る。

長太　イヤ、富士右門どのゝ御内證、親子連れで、いづれ

へお越しなされた。
三雲　さう仰しやるは、どなたでござりまする。
長太　我れ〳〵は、室積平馬の下の者ども。
文治　其許のお出でを、先程より相待ち居つた。
長太　仔細と申すは、息女櫻子どの、主人平馬、兼ねての懇望、我れ〳〵を以て云ひ入れます。早速請けられ、櫻子どのを。
三雲　ア、モシ、それは有り難い儀でござりますれど、この儀ばかりは
長太　なりませぬか。
三雲　アイ、大内さまの指圖によつて、近々富士太郎と祝言させるこの櫻子。
長太　ならずば、いつそ手短かに。
文治　合點ぢや。
ト兩人、櫻子が手を取らうとする。
三雲　こりや、なんとなさる。
文治　主人へ連れ行く
兩人　櫻子、來い。
ト引立てる。三雲支へる。立廻りのうち、兵助、兩人を投げる。
兩人　アイタ、、、……ヨウ、うぬは最前の物貰ひめ。
文治　武士たる者を
兩人　なぜ投げた。
兵助　なんの投げませうぞ。
長太　投げぬものが、なんで爰へ出しやばつた。
兵助　お爲を存じて。
兩人　なに、爲とは。
兵助　先程より承りますれば、主あるお人を無理口說き。それでも武士と云はれますか。
兩人　や。
兵助　サア、お爲と云ふは爰の事。但し、命が無うても、不義不道をする御所存か。
兩人　イヤ、それは。
兵助　訴へて、褒美にせうか。
兩人　サア。
三人　サア〳〵。
文治　七面倒な。
長太　邪魔するうぬから。
トよろしく立廻つて、兩人、逃げて入る。
兵助　ハテ、馬鹿々々しい。

三雲　これはマア、急難を遁がれましたも、あなたのお庇
櫻子　なんと、お禮を申さうやら。
兵助　イヤ、お禮仰しやるやうな者ではござりませぬ。姫君、お懷かしうござりまする。
ト笠を脱ぐ。
櫻子　ヤア、其方は兵助、思ひがけない。
兵助　よう御無事で居つて下さりました。
三雲　そんなら兼ねて噂を聞いた
櫻子　家の臣、村主兵助でござりましたわいなア
兵助　思ひ出すも便なき次第、父御は正しき南朝の臣、橋本治部之丞祐近さま、世の亂れに悲しくも、我れ〳〵夫婦がお供申し、落ちんにも當途なく、さまよふ折しも、あなたの御病氣。
櫻子　其方が藥を求めんと、行きやつた後へ、途中の狼藉、お孃を切り伏せ、自分を奪ひ、立退く曲者、いづくともなく伴はれしが、不思議に天下の御伶人、富士右門さまに助けられ、命長らへあればこそ、今の對面。
兵助　殊に主從、緣の盡きざるところ。先刻より承はれば、どうか御親子の間。
櫻子　サア、お二方のお情にて、父上の菩提、母樣の弔ひ、それに富士太郎さまといふ、それは〳〵立派な御實子と
兵助　アノ、緣組みでござりまするか。
櫻子　オイナウ。
兵助　重々の厚き御懇情、エ、、奧樣、有り難うござります。
三雲　なんの禮に及ぶ事。聞けばこの子も、恥かしからぬ父の素性。見ればこなたも、流浪の樣子。
櫻子　聞きたいは、お孃の身の上、話して聞かしや。
兵助　ハツ、拙者その節、藥を求め、松原まで歸り見れば、人影だにも嵐吹く松の木影、尋ね廻れどその甲斐なく、道行く人の噂には、廿三四の女一人、痛手を負うて眞南へ、いま駈りしと聞くや否、行きかゝるうち、二八餘りの女を捕へ、猿轡をはめ、縛つて行きしは、不便な者やと云ふも耳寄り、さてこそ姫君、して、連れ行きし方角はと尋ね聞きしは、海道の西南、女房如きは死なば死ねと、追ひ駈けしかば、はや時過ぎ、姫君を奪ひ取られし不忠者、申し譯に切腹と、刀の柄に手は掛けたれど、姫君の御先途も見屆けず、此まゝ死ぬは重なる不忠と、命限り根限り、尋ね廻つてお行くへ求め、父上樣の御筐の金子の包み、お手渡し申さいではと、國々をさまよひ

歩き、斯く成り果て候へども、矢張りお金は封印の儘、肌に附け、朝夕拜して袖乞ひの營ひ。昔を今に三津山の諺も名にし櫻子と、ある名を呼ぶも姫君の、便り求めんとの心念、願ひ通じ、御顏を拜す事、拙者が喜び、生々世々、奧樣、姫君、御推量なされて下さりませ。

三雲　聞けば聞く程、忠義の臣。この後は、悴富士に、なんと仕へてたもらぬか。

兵助　ハツ、姫君のお側に置いて下さりませうなれば、御恩あるお家、猶忠義の勵みたき、拙者が望み。

櫻子　オヽ、出かしやつた。然し、父上の思し召しが。

三雲　そりや、氣遣ふに及ばぬ事。只さへ慈悲心深き夫、共に喜び給ふであらう。

兩人　エヽ、忝ない。

ト兵助、櫻子に金を渡す。向うより、津守國平、忠助出て

國平　忠助、よい所で逢うた。して、奧樣のござる所は。

忠助　あの茶店の內に。

國平　サア、參らうか。

ト本舞臺へ來て

忠助　お眞入れを取つて參りました。

三雲　國平ではないか。

國平　ハツ、奧樣、これにお渡りでござりますか。親旦那より急のお使ひ、樂家より取つて返せば、御他行のよし。お跡を慕ひ參る道にて、忠助に逢ひ、早速參上。イザ、お文、御覽あられませう。

三雲　それは大儀、

ト文を見て

娘、喜びや、大內さまの仰せには、日柄もよければ明日の夜に、婚禮の取結び、用意せよとの父御の御文。

櫻子　エヽ、それはマア、お嬉しい事でござります。

兵助　すりや、明日、御祝言の取結び。

三雲　サア、お上の仰せ、早う歸つて何かの用意。

國平　奧樣、この仁は。

三雲　サア、この者は、仔細ある家來。屋敷へ歸つて詳しう話しませう。

兵助　朋輩になれば、以後は入魂に

國平　何がさて、忠義は同じ。

三雲　妾は直ぐに

兵助　お屋敷へ。

國平　下郎はこれより樂屋へ歸り

三雲　そんなら、此まゝ
國平　お別れ申す。
兵助　サア、お出でなされませ。
　ト皆々入る。國平殘つて
國平　旦那もさぞお待兼ね、樂屋へ引返さうか。
　トお京、茶店より出かけゐて
お京　逢ひたかつた、逢ひたうござりましたわいなア。
國平　思ひがけない、どうして爰へ。
お京　サア、お前、いつぞや所を立退かしやんしてから、都は元より、この大阪へ搜し參れど、便りも知れず、振捨てられたわたしが身の上。まだしも神樣のお庇にや、今朝チラリとお姿を、見附けたも深い緣。斯うお目にかゝるからは、早う戻つて女夫になり、一緒に暮らして下さんせいなア。
國平　假かに所を立退いたも、故鄕津の國、住の江に歸り、主取りせしは、家名を引起さん我が心願。成就いたさば呼び迎へん。それまでは、國へ歸り、吉左右を待つて居や。
お京　イエ〳〵、そりや聞えませぬ。折角逢うてまた別れいとは、あんまり胴慾ぢやわいなア。

國平　サア、何事も思ふに任せぬ、主あるこの身。聞入れて、立歸つてたもいなう。
お京　そんならちよつと、あの葭簀の內へ。
　ト文治、長太、出かけゐる。
國平　滅相な。御用先といひ、殊に晝中。
お京　大事ないわいなア。
　ト長太、文治ワアイと云うて中へ入る。兩人、悄りして
國平　あなた方は。
長太　奴め、ちと遠慮ひろいだがよい。その女郞めは、最前から、おらが見初めて置いたに
文治　ヤイ、女郞め、斯うなつたら、此方へ來い。
國平　ハテ、臂張りな雜兵達。見初めたとあるからは。
きよ　わしを捕へてじやら〳〵と、それから後で、お前の御主人へ無體の狼藉。
長太　したらたんぢや。兼ねて淺間照行どのと、不和なる右門が身內の下素め。
文治　ぶツ放して女を奪ひ取れ。
兩人　覺悟ひろげ。
　ト文治、お京を、無理に引ツ張り、向うへ入る。長太

支へ、立廻つて國平を當て、向うへ走り入る。國平、起きあがつて、

國平　うぬ、いづくまでも。

ト向うへ走り入る。神樂にて返し、

造り物、奥深に金具張りの大門。平舞臺、立派なる石壇、東西、築地塀、上手、下馬札、禪の鳴り物にて道具納まる。

ト向うより赤松義則、陣羽織、胸鎧。次に淺間左衞門。後より藤馬、和泉、大貳、袴。軍兵大勢、附添ひ出る。平馬出迎ひ

平馬　御前には、存じの外なるお早きお歸り。併し、先刻より義弘公にもお尋ね。それゆゑ、途中までお迎へ奉らんと、只今參る折柄でござります。

義則　この度、某發向せしは、遠江の城主、山名氏淸、將軍義滿公を恨み奉らん企て。さるによつて、斯くいふ赤松義則、大内など討つに手間隙入らず、難なく亡ほせしは我が軍略。山名が殘黨、當浪花に埋伏のよし。根を斷ちくれんと、當地に滯留も、申さば繁華、少しは軍氣の鬱散旁々。然るに、昨日物見が訴へに、東に當つて怪しき雲氣。大内を抜けかけ、參つて見れば、案に違ひ、これ幸ひに若江、澁川近邊より、小堀江まで歸る野面を見晴らし。斯樣の儀なれば、酒筒を持參にも及ばんものと、それのみ殘念にて、立歸つたてや。

平馬　こは、よろしき御鬱散。樂人、淺間どの御同伴遊ばされしは。

淺間　イヤ、先刻より、御挨拶と存じたれども、差扣へありましたが、誠にこの度、我れ／＼が大慶は、御兩所樣、當所の御社へ御祈願あつて諫めの樂器。即ち、住吉は富士右門、某兩人に仰せ下り、昨朝より用意萬端、はや御前へ上がる折柄、お姿を見付け、お供仕つてござりまする。

義則　して、樂の場所は、しつらひ置きつるや。

平馬　今朝より急ぎ申し付け、飾り置きましてござる。即ち、富士右門も疾に參り、なにか大内へ媚び諂ひ、うぬ一人が樂人づら、胸惡しく存じますて。

赤松　ア、匹夫の彼れ等に、目をかけるは、胸の器が小さい／＼。淺間とても左やう心得、花は櫻木、人は武士、樂人の達人より、劍術の手練に及び、武家に身を寄せ、日の本に名を上げる名將になるも一生

淺間　御意の通り、某兼ねて武に心を寄せ、劍術、體術を以て、閉口させる折もがなと、心掛け罷り在ります。
藤馬　我れ〱とても、淺間どのを師と賴み、樂の道に入りながら、君の御威勢を見ましては
和泉　下拙等も、同じ大小差すならば、勇々しき武士になりたいもの
大武　殊更以て義則公のお勢ひ、お供の道筋三人とも
藤馬　恐れ入り
兩人　奉ります。
平馬　將軍のお膝元には、諸士大名ありといへども、分けてこの度の御兩所、其うちでも御主人、臣下たる某まで、おのづと尊き身の威勢。
義則　ハテサテ、益なき廣言、未熟の至り。
淺間　尊き者は、自然と尊く、夜の星に顯はるゝとも、その道理二つとなきと、恐れながら、左衞門、承知いたして居りまする。
　ト門の内より、住の江守、袴羽織にて出て
住の　淺間左衞門さまへ申し上げまする。師たる右門、先刻より貴公さまの御入來を、相待ち居られまする。イザ、神前へお入りあつて、然るべう存じまする。

淺間　ナニサマ、急がるゝも、老人の御尤も。
義則　時刻も餘程。平馬、用意よくば、急ぎ神樂を奏してよからう。
淺間　然らば、君にも
義則　直さま、假屋へ
淺間　イザ、御入り
皆々　あられませう。
　ト義則に平馬附き添ひ、門内へ入る。
淺間　住の江守、富士どのも、今日は御苦勞。某も、追ツつけそれへと、達してくりやれ。
住の　畏まつてござります。
　ト門内へ入る。
藤馬　今朝、先生御他行の節、平馬さまお越しあつて、右門が一件、外に手段もあるべき儀か、密々に御意得んと御傳言。疾より申し上げんと存じたれども、君の御前、差扣へ、平馬さまにも、御面談あられませう。
淺間　年月、意趣ある富士右門、彼れ、足利に目見得て後諸大名の舞樂にも、我れを召されず、剩さへ、彼の高音と號する太鼓、富士に返したれば、今日も高慢に、その太鼓を持參に及ばん。御前に於て恥面與へ、後にて太鼓

取返し、是非に及ばゝ絶命と、待ち設けたる今日只今。

和泉　平馬さまにも、富士が娘、櫻子とやらに、兼ねての執心。

大貳　この儀も、先生にお頼みあらう。

淺間　右門をなくしたその後では、如何やうとも心の儘。

和泉　然らば、平馬さまに

大貳　いま一應。

和泉　御内談ある、富士が一件

藤馬　仕舞ひも附けるは

淺間　コレ……イザ、參りませう。

ト淺間先に、三人門内へ入る。下手より國平出て

國平　淺間といひ、門人が詞の端、主人富士を恨むる樣子、油斷ならざる今日の仕儀。とあつて、門内へ入る事叶はず。ハテ、心ならぬ事ぢやなア。

トお京、出て

お京　ハイ、御免なされて下さりませ。

國平　何者ぢや。

ト顔見合せ

お京　國平どのか。また方々尋ねたわいなア。

國平　コリヤ、そこ所か。此方には、一大事に及びさうなハテ、どうがな。

お京　どうあつても一旦、國へ。

國平　エヽ、そこ所ではないと云ふに。

お京　それまでは、お前は

ト平馬窺ひ出て

平馬　憎い兩人、動きやアがるな。

國平　こは、何事でござりまする。

平馬　慮外な下郎め。當所に於て、神諫めの樂器始まるその折柄、門前に女を捕へ、不義の仕業、神前の穢れ。

國平　イヤ、全く不義にあらず、この女は拙者が妹、故郷より親どもの使ひによつて

お京　アヽ、なんの、さうでは

國平　ハテ、女の差出る場所ではないぞ……しかも、血を分けた眞實、眞身の

平馬　ハテ、あでやかな妹ぢやなア。ナニ下郎、身が頼むべき一儀、取持ちいたせ。

國平　そりや、なにを。

平馬　アノ女、身が伽に。

兩人　エヽ。

平馬　身も兼ねて、心がけてゐる一女ありと雖も、今に於

て心に任せぬ。然るにその者、心に叶うた。口說き落して隨はせろ。

國平　これは、存じも寄らぬ賤しき者を心入り。先づ一應尋ねし上にて。

お京　否ぢやわいなア。

平馬　得心の致さずば、僞はりの同胞、不義の死罪に行はうか。

國平　イヤ、その事は。

平馬　同胞なれば、取持ちいたせ。

國平　サア、それは。

平馬　隨はせるか。

國平　サア。

兩人　サア〱〱。

平馬　エヽ、面倒な。

　ト平馬、お京を追ひ廻す。下手よりおつち、おはし出で

つは　コレ、見附けた。

　トお京を捕へる。國平、お京を無理に連れ行く。平馬、支へる。蛇の子取りになり、トヾ國平、平馬を突き倒し、四人下手へ逃げて入る。

平馬　うぬ、やるまいぞ〱。

　ト追ひかけ入る。返し

　造り物、三間の間、高二重。見附け唐紙、大襴間、白張りの幕を掛け、大内の紋、赤松の紋付き。下手、折り廻し庭の書割り。二重に義弘、義則、後に隼人、主計、小姓一人、太刀を持つてゐる。眞中に、三方土器、長柄の銚子。平舞臺の上手に、淺間、素袍、掛け烏帽子。藤馬、和泉、大貳。下手に右門、烏兜、樂裝束、後に樂太鼓を据ゑ、住の江守、隼人、主計、左膳、烏兜、樂人の拵らへにて、並びゐる。白囃子にて道具とまる。

隼人　今日の樂は、山名氏淸、退治の喜び、これ卽ち當社の神力。

主計　逆意の輩、討ち亡ぼせしも、全く神の勳ほし

隼人　神を諫めの催し、首尾よく納まり、我れ〱までも

皆々　大悅至極に存じ奉る。

義弘　元弘建武の亂より、藩屬の爭ひ止む時なく、數十年にして和田楠も、山名氏淸が爲に遂に落城。

赤松　然るに山名、要害に誇り、義滿公へ敵せん有樣、こ

の度の討手は家門の臣、郎黨も盡く空しくなし

義弘　つれ〴〵の鬱胸を晴らさばやと、舞樂の次第。

義則　當國、天王寺の樂人には淺間左衞門照行

義弘　まつた、住吉にも富士右門知之

義則　誠の音律、感に絶えたり。

義弘　酒宴の催ほし、勞を晴らせよ。

義則　役儀の者ども

兩人　大儀々々。

淺間　こは有り難くも御意に叶ひ、祖父たる淺間照蔭より、今に傳はる舞樂の古實、斯くの如きめでたき折にも、召しに應ずる先父の滿足、身の大慶。

右門　冥加に餘る只今のお詞。某とても正平年中、祖父にて候ふ富士左京之進知之より、有知に傳はりしが、不慮の儀につき、さまよひゐたり。然るに義滿公、富士山御遊覽の時に到つて、以前に返る身の面目、足利家の御厚恩、廣大無量と、恐れ入り奉りましてござります。

淺間　ナニ、右門どの、かゝる席にて申すは異なれど、我が先祖は、樂人の筋、殊に御邊は太鼓の家と日頃の廣言、樂の道は尊くとも、やゝもすれば蜂の如く、逆人起るこの時節、期に望んでは樂人たりとも、戰場にて鉾も交へんも計り難し。その折柄には、老より若きが、勢ひ勝るが理の當然。

藤馬　こりや、先生の御意の如く、右門どのは、年久しく駿河にあつての御浪人

和泉　漁師でもなく鋤鍬仕事

大貳　武の道の心掛けは

三人　何として〳〵。

淺間　各々、そりや何事でござる。右門どのも某も、樂道に賜はる御扶持なりや、あながち武藝は要らざる業。富士どのゝ思し召し、扣へられい。

義則　イヤ、照行、倭唐とも陣中に、舞樂を奏するもの例し多し。就中、漢楚、鴻門の會は、項伯莊劍を舞して壽きなす。項伯莊は楚王の臣なれども、忠義の爲には、伶倫の業を辭せず、いづれ祿を食む者は、誰れも斯くこそあるべけれ。いま音律の家に生れ、武藝を内に諳んず者、淺間照行、汝より外にあるまじ。但し富士にも覺えあるや、聞かまほし。

右門　神樂に劍を用ふるは、惡鬼を拂ふ謂れなり。本朝の武藝といふは、弓、馬、劍術、槍、棒、柔術、水練の七種、その外極意の妙劍十字、手裏劍等も法あるべく、弓は六

藝の一つにして、百千の敵を防ぐべし。これを以て武士を弓取りと名けたり。匹夫の勇は勝に誇り、變に應せず、機に臨まず、兵法は形を則とし、心を師とす。既に形は心より成るものなれば、一心定まるその時は、金石の敵を碎くに、何に恐れん劍術手練。

義則　ヤア。

右門　とサア、申すも匹夫の烏滸がましく、伶人たりとも、事に望まば、また御用に立つべき事なきにしもあらずと、憚りながら存じまする。

義弘　ナニサマ、建武の亂には、山門の淸衆戰うて、貞寂を潔よくす。然るに淺間照行が、莫大なる我慢の廣言。ヘ、、、。

淺間　名玉磨かざれば瓦同然、武術鍛練せば、貴人の宴會その術を顯はし見やれ。

右門　我れ〳〵は樂器の役儀、劍術立合ひ御所望にもあるまじ。されど辭すれば臆する理り。併し、世話に申す生兵法、道なき業に大疵なし、その身を果すも又、呆痴の第一。

淺間　呆痴とは誰が事。いらざる舌の根動かさば、御前とて容赦はないぞ。

右門　そりやハヤ、容赦にあづからずとも、さして恐るゝに足らざる儀、是非とも優劣糺す心か。

淺間　おんでもない事。

右門　何を小癪な。

義則　兩人扣へい……富士が詞も床しければ、淺間が怒りも一理あり、酒宴の興に義弘どの、二人の試合ひ、見物に及ぼうではござるまいか。

義弘　由なき論とは存ずれども、時の一興。

義則　兩人、立合へ。

右門　御諚なれば、否み難し

淺間　望む所の優劣ためし。

右門　取敢へず立合ひ

兩人　仕るでござらう。

右門　併し木刀、竹刀の用意もなく

義則　なにサ〳〵。互ひに白刃を以て

義弘　それは餘り短慮の仕業。殊には神前、生血の穢れ、ハテ、何をがな。オヽ、それよ、槍の穗を拔き取り、蛭卷の上へ布を以て、鞠の如く括り用ひなば、卽ち時の長柄。用意いたせ。

右門　ハツ、御諚を返すに似たれども、年頃手馴れしこの

義弘　撥の、業くれも時の興。
義則　面白い。いづれとも、心に任せよ。
平馬　ソレ、玄蕃、急ぎ、手鎗をしつらへい。
義則　イヤ、室積平馬、委細承りましてござりまする。
平馬　然らば、用意。
義則　ハア、。
平馬　双方、支度。
義則　畏まつてござりまする。
兩人　ト兩人、身拵らへにかゝる。鎗の穗、拔かずに卷きたるを、平馬持ち出て、淺間が前へ出し
平馬　申さば兩人、曠れの試合ひ、グツと合點か。
淺間　淺間が覺えの手練の早業、受けてお見やれ。
右門　受けるは老が握りし撥、去らば勝負の決してくれう。
兩人　サア〳〵。
　トこれより誂らへの鳴り物、面白き立廻りあつて、トド左衞門の鎗を右門叩き落し、撥にて打つ。
平馬　ちよつと加勢に
　ト刀を拔き、切つてかゝる刀を、右門取り、背打ちにする。門弟三人寄らうとする。右門キッと見得。

右門　身動きなさば、命がないぞ。
義弘　天晴れ手練。
右門　ハツ。
義弘　ホ、、出來した〳〵…義則公にも御加勢かな。
赤松　ナニ、彼れしきに…免しもなきに臣たる平馬、未熟の武藝、主家の耻辱。イデ、手討ちに。
義弘　イヤ、平馬が加勢は一家の照行、後れし意恨を救はんと、共に打ちたる白刃の背打ち、これらも以後のよき見せしめ。
義則　とはいへ憎き。
義弘　サア、生は得難く、捨つるは易し。義則公、マヽ、御宥免。
義則　ハテ、命冥加なうぢ蟲め。
義弘　當座の褒美、ソレ、隼人、劍殿にかけし鎗、持參せよ。
隼人　ハツ。
　ト奥へ入る。
義則　右門、其方、家に傳はる秘書は如何なせしぞ。
右門　富士家に傳はる舊記樂、譜笛を記せし秘書、義滿公へ上覽の後、他出いたせば、肌身離さずこの通り。

ト これにて敵役、思ひ入れ。隼人、鎗を持ち出る。

義弘 身命を擲つて、我れ〳〵を慰めし恩賞、遣はすは淺間照行、鎗の銘は筑紫信國、永く家に傳へよ。

ト藤馬、受取り、淺間に見せる。置けと仕方する。

義則 同じ興を催ふせし、富士への褒美はこの太刀一振り、作は長船、銘は備前光忠。

ト玄蕃取つて右門に渡す。

右門 冥加に餘る御賜物、有り難く頂戴仕つてござりまする。

ト時の鐘鳴る。

義弘 酒宴の興も早これまで。

義則 方々、退出。

右門 御兩所には、先づ

皆々 入らせられませう。

ト義則、義弘に家來附いて入る。誂らへの鳴り物。

右門 ナニ、守、左膳には、大切なる高音の太鼓、頂戴の劍諸とも、我が宅へ持參なし、やがて歸ると告げて置きやれ。

二人 畏まつてござりまする。

ト二重の太鼓を手舁きにして、左膳は、太刀を持つて下座へ入る。

右門 上を欺きし長柄も、その甲斐なく、不覺の有樣。又これ眞劍鋭き穗先も、誠の手者に向うては、ゆかぬぞよ。以來、業を愼しみ居らう。

ト平馬、門弟三人、柄に手をかける。

なんぢや〳〵。兩刀にて知行を取れど、富士に打たれ、さぞお腰が痛み申さん。師たる淺間は、耻面かゝされ、われ達も、無念に思ふか。ムヽヽ、助け置けば仇なれども、一家のよしみ、心魂に應へたであらう。

四人 ムウ。

右門 不便な奴の。

ト向うへ入る。平馬、淺間の側へ行き

平馬 無念な、口惜しい〳〵ワ。お身はなんともないか。イヤサ、右門が恐ろしいか。エヽ、いづれも來やれ。

ト平馬三人行かうとする。

淺間 待つた。いづれへござる。

平馬 ハテ、知れた事、右門めに

三人 追ツ附いて

淺間 イヤ、ゆかぬ。一應にては、なか〳〵及ばぬ。

四人 ムウ。

淺間　ヘテ、討取る工風は身共に任しやれ。
四人　すりや、先生も、
淺間　樂譜の秘書、高音の太鼓諸ともに
平馬　オ、サ、手次手に戀の意趣、富士太郎も打ち放し、
櫻子を奪ひ取り、日頃の本望。
淺間　富士が歸りは、合邦ケ辻、有無を云はせず、たんだ
一討ち。
平馬　夜陰の勝負は長柄が屈竟。
淺間　此まゝ行かば悟るは必定
平馬　二手に別れて
淺間　ぬかるな。
四人　合點ぢや。
淺間　行け。
四人　ハツ。
ト四人、向うへ走り入る。雨の音。
淺間　頃は黄昏、雨夜も屈竟。ソレ。
ト鎗をひしごき、キッと見得にて返し。
造り物、平舞臺、眞中に閻魔堂。東西、葭原、うし
ろ黒幕。すべて合邦ケ辻、閻魔堂の體。本釣り鐘、
雨車にて道具納まる。
ト蛙の聲、蟲笛の合ひ方。向うより右門、後より國平、
松明の消えしを持ち出る。
右門　思ひがけなき雷の有様、困つた天氣ではないか。
國平　左樣でござります。只今の降出しに、松明をしめら
し、暗くて旦那のお足元が。
右門　大事ない／＼。只心急きは、明日の祝言。
國平　サア、お越しあられませう。
ト本舞臺へ來る。雨車になる。
右門　また降り出した。オ、、幸ひのこの辻堂、雨舍り致
さう。
國平　暫らく爰にお待ち下され。雨具を調へ參りますでご
ざりませう。
右門　大儀ながら、さうしてくりやれ。
國平　ドリヤ、行て參りませう。
ト引ッ返して入る。
右門　心は急けど、時雨の妨げ、莨をくゆらせ、蟲の音で
も聞くが一興…香爐に線香の類ひはなきや…ない筈
ない筈。爰は昔、聖德太子、守屋を討つて天王寺を建立
し、石を以て佛像の數、六萬體を作り給ふ。この閻魔堂

も、その一つ、古へ、此あたりに覺授院あるゆゑ、これを以て覺授が辻を、諸人誤まつて合邦ケ辻と唱ふるも癖言。然るに數度の兵火に、この堂に限り遁がれて、百年を經ると聞く。地氣濕して塞せき自ら焔硝を生じ、火もしその地に落つる時は、忽ち燃移る事を恐るゝを以て、閻魔堂とも線香堂とも、これを唱ふ。爰に宿るも他生の緣。

ト此うち東西より、淺間、平馬、三人、葭原へ忍ぶ。今まで鳴きつる蟲、蛙、殺伐の音聞ゆるは

ト淺間、窺ひ寄る。蟲の音止む。

さてこそ、物音。

淺間　覺悟。

ト鎗にて突いてかゝる。平馬諸士三人、探り〳〵切り結ぶ。作内、火繩振り廻し、下へ落すと仕掛けにて線香臺燃える。淺間、上手の松へ登り、上より鎗を突き出す。煙にむせびて、右門よろめく所を、滅多切りに四人切り、左衞門、飛び下り止めを刺し

まんまと止め。

三人　天晴れ〳〵。

淺間　大儀々々。

平馬　して、この上は。

淺間　コレ。

ト平馬に囁く。平馬より段々に囁き

平三　然らば

淺間　ござれ。

ト平馬三人、下手へ入る。淺間、右門の一卷を取る。人音するゆゑ、後へ隱れる。向うより太郎走り出て、死骸に爪づき、恟りして香爐臺の燃えさしを取る。焔硝燃え上がる。この明りにて死骸を見て

太郎　ヤア、親人か。

ト呼び返し、懐中へ手を入れ

ヤゝ、こりや樂譜の秘書も

ト後より平馬、切つてかゝる。立廻りあつて

これこそ必定、敵の手掛り。

ト平馬を見事に投げ、鎗を見て、キツと見得。返し。

造り物、二重。見附け貼交ぜの襖。上手・中二階。下手、忍び返し附きの塀、二階を見せ、いつもの所に門口。上手二階に三雲、樂太鼓の前に、太刀を拔き見てゐる。二重の上に、金網の河鹿、蒔繪の臺に

の載せあるを、櫻子見てゐる。二重の下に兵助、若黨の拵らへ、刀を杖に突き、腰の痛むこなしにて見てゐる。上手の二階は燭臺、二重は雪洞、櫻子、兵助は手燭を持つてゐる。少し小凄き雲氣やうの合ひ方にて道具納まる。

三人　ハテ、訝かしい。

三雲　心よからぬ義則公より、夫に賜はりしこの太刀。

櫻子　父上、常々御秘藏の河鹿、常に見馴れぬ色替り、悶え苦しむその有樣。

兵助　夜陰に音を發する不思議。

三雲　銘は長船、鑢の相違。

櫻子　すべてその主の凶實知らすが、河鹿の德。

兵助　何にもせよ

三雲　心ならざる

三人　有樣ぢやなア。

ト鉢の中の河鹿の死骸より焔硝立つ。

櫻子　そんなら河鹿は

兩人　ムウ。

ト國平、向うより走り出て

國平　若旦那、御加勢々々々。

櫻子　母樣々々。

三雲　加勢とは、何事ぢやぞ。

國平　ハツ、只今、御前より歸り道、合邦ヶ辻にて俄の時雨、下郎が傘を求めに參りし後、何者か多勢の刃音、親旦那樣に限り、幾十人集まりたればとて、事ともしたまふ御氣性にはあらねども、夜陰の働らき、萬が一と、危急を見捨て御注進。下郎はこれより引返さん。急いで御加勢々々々。

ト逸散に向うへ入る。

三雲　最前、門弟の守、左膳の兩人、舞樂終つて太鼓持參の折柄、我が夫、やがて歸宅と聞きしに

櫻子　大方、富士太郎さまも、御加勢なされてござらうが

三雲　もしや道など違ひはせぬか……ア、早う安否が

二人　聞きたい事ぢやなア。

兵助　搗てゝ加へてこの疝癪。主人の御用に遲るゝ不忠。エ、腑甲斐ない。

櫻子　オヽ、其方の氣質では、さう思やるも道理々々。

三雲　イヤ、氣遣ひしやんな。我が夫に限つて、高の知れた無法者。また悴や國平も、大方加勢しやるであらう程に、マア、氣を靜めてゐや。

ト下手の見越しの松より、淺間、頬冠りして登り、障子を明けて下へ下り、上手の二階へ上り、太鼓のあるを見て頷づき、障子をさす。

櫻子　あの人影は

兵助　うぬ、盗賊。

ト淺間、二階の灯を消す。兵助、上がらうとする。淺間、一かせ切る。櫻子、淺間の足を抱き下ろす。三雲、手早く太鼓を打つ。戸屋の内にて、大勢人音する。淺間、三雲を當て、奥へ忍ぶ。太郎、鎗の穂尖を持ち、走り出て

太郎　母人、いづれにござる。

櫻子　富士太郎さまか。

兵助　若旦那、親旦那は如何でござりまする。

太郎　ヤア、兵助は。

櫻子　ヤア、母様が。

太郎　ナニ、母人が……水々。

櫻子　アイ／＼。

ト水を三雲に呑まし

太郎　母人々々。

櫻子　母さんいなう／＼。

ト三雲、氣が附く。

三雲　オヽ、富士太郎か……我が夫の安否はどうぢや。

兩人　どうでござります

太郎　チエ、。

三雲　エヽ、何事ぢや、心元ない。

兵助　申し、若旦那、詳しい仔細

櫻子　云うて聞かして

兩人　下さりませ。

太郎　某、親人の御歸宅、例の如くお迎へ申さんと、歩むに從ひ胸騒ぎ、合點ゆかず。程なく天王寺・假屋へ走せ附け、勤番の諸士に問へば、はや歸宅と承り、さては道こそ違ひぬれと、淸水坂を西へ下り、合邦ケ辻へと來かゝりし所、いづくともなく焔硝の香ひ、よく／＼見れば、火氣に倒れる閻魔堂、こなたに人影、餘火に移してとつくと見れば、紛ふ方なき親人。お痛はしや、止めを刺し、兼ねて御所持の巻き物もなく、然るに、思はず拾ひ取りたるこの穂先、無念ながらも、その場を見捨て、飛んで歸る折柄、遠音に響く、早太鼓、心も空に我が家の門前、百姓まで重なり、亂入せんとひしめく所へ、某が駈けつけ、皆々を止め、駈け入れば、この體たらく。

家内の騒ぎは兎も角も、只残念なは親人様、無念ながら立歸つた富士太郎が胸中、御推量なされて下さりませ。
櫻兵　ハア、。
　ト一同大泣き。
三雲　筑紫信國所持の銘は、大内義弘。
太郎　信義五常の義弘さまに限り、よもや左様の
三雲　悴、喜びや。敵は知れたわいの。
太郎　ナニ、敵が
三人　知れましたとは。
三雲　サア、最前、門弟中の話しを聞けば、兵法立會ひの御褒美として、夫へは赤松どのよりこの太刀、まつた義弘公より鎗一筋、淺間照行へ下し給ふと聞く。
太郎　ムウ。すりや、打負けたるを遺恨に思ひ
櫻子　父上を害せしは
三雲　疑念に及ばぬ
三人　淺間照行。
　ト下手より、長太、文治出で
長文　櫻子、うせう。
　トかゝるを、富士太郎、立廻つて投げろ。兵助もよろぼひながら、文治を投げる。この立廻りの間に、淺間、奥より出で、差し足にて門口へ出る。櫻子、手燭を出す。
皆々　慥かに淺間。
淺間　エイ。
　ト手燭を、手裏劍にて叩き落し、走り入る。
皆々　ムウ。
　ト皆々向うを見込む。この途端よろしく、拍子幕。

四つ目

遠里小野の場
富士太郎内の場

役名――富士太郎知一。同母、三雲。同女房、櫻子。人買ひ、府中の五四郎。盜賊、牛頭八。同、馬頭六。照行母、卯原。靈龜の精。軍平實ハ庵原主膳。上總之助妹、八重梅。

造り物、見附け黑幕、板松、同じく吊り枝。すべて遠里小野、松原の體。葬禮の模樣、影燈籠持ち一人、白張り提灯持ち二人、天蓋持ち一人、伴僧雲床、乘り物その外、いろ〳〵仕出しゐる。鳴り物にて幕開

く。

仕出　イヤ、申し、雲床さま、お前の馴染みの葛川ども吉、生れ年は五十三歳、惜しい事を致しました。

雲床　さればいなう、この住吉の遠里小野に、芝居が出來れば、いつでもキツとした立女形であつたが

仕出　今は冥途の旅芝居へ初下り、雲床さまはお力落し。

雲床　イヤモウ、推量して下され。マア、いづれも大儀ながら

皆々　サア、參りませう。

五四　待て。

雲床　ヤア、誰れやらん呼んだぞよ。爰は名に負ふ狐原、葬禮をちやつと、やらつしやれ。

皆々　心得ました。

ト府中の五四郎、閻魔の姿にて、牛頭八、馬頭六を連れて出て

五四　待て。

雲床　ヤア、お前は閻魔樣ぢやござりませぬか。

五四　オヽ、閻魔とも〳〵、そのども吉が近附きの、閻魔屋の平十郎ぢやわい。

雲床　その閻魔屋平十郎さまが、なんで爰へはお出でなされた。

五四　ヤア…オヽ、いま爰へ顯はれたは、アヽ、いかう地獄も衰微ぢや。

雲床　左樣でござりませう。

五四　所で、田舍の振附け、葛川ども吉、近附きの顏を幸ひ、どうぞ地獄へ來て、三十日ばかり助けてもらはうと思うて來た。幸ひ死骸を連れて行きたい。

雲床　これまで娑婆で惡い事、した事もないども吉を、地獄へ落すとは、御無體でござります。

五四　地獄の飢饉にや替へられぬ。ソレ、牛頭馬頭の鬼ども、あの死骸を受取り、無間地獄へ連れて行け。

牛馬　ハア、。

雲床　マア〳〵、待つて下さりませ。今日の佛を地獄へ落しては、逢つて來たこちらが迷惑。殊に馴染みのども吉、どうぞ御料簡下さりませぬか。

馬頭　イヤ、閻魔樣が料簡せいと云はしやれても

牛頭　鬼仲間が料簡せぬのぢや。

雲床　これは又情ない…どうぞ、わたし等を裸にして、亡者はお免し下さりませ。

皆々　ハイ〳〵、わたし等も脫ぎます。どうぞ御料簡を賴

みます。
五四　其方達が殘らず脫いでも、一人前三百か五百の質種なれども、志しが優しい。その着物で亡者は、免して遣はさう。
雲床　エヽ、忝なうござります。なまいだんぶ。
皆々　なまいだんぶ。
ト皆々裸になり、葬禮を送つて入る。
五四　ハヽヽヽ。牛頭八、馬頭六、皆々も大儀ぢや。
馬頭　お頭が閻魔の思ひつきに、葬禮を持つて來たとは
兩人　氣の利いた今の奴等。
五四　閻魔で嚇して追剝ぎとは、なんと趣向が新らしから
う…アレ〳〵、向うへ人が來る樣子、皆々、ぬかるな。
皆々　合點ぢや。
ト小隠れする。向うより富士太郎、浪人の拵らへ、樒の枝に火繩を括りつけ出て
太郎　もう日が暮れた。火繩があれば、道も急がぬ。ゆるゆる歸らう。
ト本舞臺へ來て
よい所に腰掛け石、暫時お慈悲にあづかりませう。誠に木石とは云へ、諸人の足を助けるは、矢ツ張り有情。人間に生れ、父たる人に孝道を積まずば、木竹に劣りし非情のこの身。親人、お免されて下さりませ。
ト橋がゝりより八重梅、足の痛むこなしにて出て
八重　あの子の云ふ通り、提灯を持つて參じたら、物に爪づきはせまいに…申し、そこにお出でなされますは、どなたでござりますえ。
太郎　これは女中、名を尋ねて何にさつしやる。
八重　ちと尋ねる人と申しますは、それ〳〵、道連れ、此あたりで見失うたゆゑ、もしやと尋ねまして、お聲を聞いて、お嬉しう存じます。
太郎　ハヽヽヽ、イヤ女中、何を云はつしやるやら……ドリヤ、歸宅いたさう。
八重　アヽ、申し、わたしや、あなたに御無心がござりますて、有やうは、疾からお歸りを。
太郎　待つてゐやしやつたか。
八重　アイ。
太郎　そりや、どういふ譯で。
八重　ハイ、ツツトモウ、惚れました。
太郎　これは、いかな事。併し、少しこの身に望みもあれば

八重　聞かれませぬかえ……さうぢや。
ト自害せうとする。
太郎　ア、コレ、待たつしやれ。
八重　イエ〳〵、姫御前のあられもない事云ひ出し、叶は
ぬ時には、兼ねての覺悟。
太郎　ハテサテ、短氣千萬。如何にも承知いたした。
八重　エヽ、そんなら、御得心で。
太郎　サア〳〵、よくござる。
ト懷劍を納めさす。
八重　エヽ、嬉しうござります。
ト五四郎、皆々出て
五四　ソリヤ。
牛馬　動きやアがるな。
太郎　其方達は。
五四　ヤイ〳〵、太い奴ぢや。觀念ひろげ。
ト刀を拔き見せると、太郎倒れる。
なんぢや、脆い奴。刃物を見せたら倒れ居つた。とんと
此奴は、只取りぢや。
八重　ア、コレ〳〵、目を廻してぢや。なんとせうぞい
なう。

五四　めろ〳〵吠えても、もう叶はぬ。引ッ剝いて仕舞へ。
兩人　合點ぢや。
ト太郎が着物を剝がうとする。向うより奴國平、旅の
拵らへにて出て、皆々取つて投げ
國平　ヤア、旦那樣でござりませぬか。旦那さま〳〵。
太郎　國平か、よい所へ來てくれたなア。
國平　私しが參りましたからは、お氣遣ひはござりませ
ぬ。
兩人　奴め、覺悟。
ト打ちかゝる。立廻つて、見事に投げ
國平　こりやアうぬ等、なんとする。
牛頭　イヤ、なんともせぬ、閻魔の堂の建立、その着物
馬頭　殘らず脫いで、置いて行け。
國平　ハヽヽヽ、おらを誰れだと思ふ。富士右門が家來、
津守國平、うぬ等が手にあふ者ぢやない。道、押ッ開い
て早く失くなれ。
五四　疊んでしまへ。
皆々　合點ぢや。
ト皆々かゝる。八重梅、太郎、逃げて入る。國平、立
廻りあつて、皆々を追ひ散らし

國平　旦那さま、どつちへお出でなされた。エヽ、心掛りな

ト橋がゝりより、太郎走り出で

太郎　アヽ、免せ〳〵。

國平　旦那樣か。

太郎　國平か。

國平　早速ながら、彼の手がゝりなりとも求めんと、都は元より近國を馳せ廻はりましたところ、彼れが門弟に、出ツくはし、餘所に紛らし承はれば、西國に由緣のあつて、即ち書面を出せしゆゑ、まんまと奪ひ取り、虛實の程は、御賢慮にあづからんと、立歸りましてござります。

ト書面を渡す。

太郎　ムウ、西國とばかりで住所知れず。

國平　然らば、拙者は西國へ

太郎　直さま參り、事の實否は

國平　書面を以て、お知らせ申さん。

太郎　出かした。行きやれ。

國平　してこいな。

ト向うへ入る。

太郎　ハテ、勇ましい。

ト思ひ入れある。橋がゝりより、八重梅走り出て、行き當り、兩人透かし見ろこなし、よろしく返し。

造り物、見附け赤壁、納戸口。上手、障子屋體。反古貼り。下手、一つ竈などあり、いつもの所に門口、借錢乞ひ立ちかゝり、三雲、櫻子、挨拶してゐる。在郷唄にて道具とまる。

皆々　聞かんぞ〳〵。

勘兵　コレ、三雲どの、味噌屋勘兵衞を覺えてゐやるか。この鬼味噌を、泣き味噌で弱らし、なぜ住吉を夜拔けした。かけた錢は、三貫三百三十三文、サア、今寄越せ寄越せ。

作兵　この酒屋作兵衞も、五貫六百七十八文。

古八　この古手屋は、六貫九文、今日は居催促。

長兵　米屋の長兵衞も、八貫七百、いま受取らう。

三雲　御尤もでござります。夜拔けしたのではござりませぬ。右門どのが死なれ、打續いて兵助が最後で、嫁が姙娠も物入り續き。

長兵　コレ〳〵、阿母、その因果話し、聞きには來ぬぞや。

皆々　マア、息子どのに會ひませうかい。
櫻子　こちの人も一心寺へ參られまして。
皆々　留守なら、戻らるゝまで居催促ぢや。
櫻子　さうなされて下さりましては。
長兵　否なら借金、拂やるか。
皆々　どうぢやぞいなう。
ト此うち卯原、食籠を袱紗に包み出て
卯原　ソレ、拂ひの金。
ト金二兩抛り出す。
皆々　これは。
卯原　金さへ拂や、云ひ分はござんすまい。
三雲　イエ、申し、この金をお前に拂はしては。
卯原　ハテ、時の用には鼻とやら、わたしが惡うは致しませぬ。
長兵　わしらが掛け、四人締めて十二貫餘り
勘兵　そこへ二兩貰ひまするど、少し釣が參じますれど
作兵　遲うなりました代りに、私しどもが貰ひます。
勘兵　ヤレ〳〵、來世の金が蘇生つた。
皆々　ハイ、お有り難うござります。
ト皆々橋がゝりへ入る。

櫻子　ほんにマア、只今のお世話、お嬉しう存じます。
卯原　なんの〳〵、淺間は一家の親しみありしを、遠つ親の確執より、互ひに吳越の形となりしが、右門どのゝ御立身、餘外事とは思はず喜びしを、悴左衞門、これを嫉み、高音の太皷を遺趣にして、討つて立退く義理知らず。さぞ、この身をも、憎しと思し召されう、三雲どの。
三雲　なんのいなア。惡人の親なりとて、必らず惡人であらう筈もなし、その氣兼ねはござんせん。
卯原　三雲どの、命長きは
三雲　恥多しとは
卯原　よう云うた事でござんすなア。
櫻子　只今のお志しは、夫富士太郎、歸り次第、キツと申まするでござりませう。
卯原　マア、なんのいな。せめてが悴が罪滅ぼし。さうして、明日は七七日の忌日、このお萩は、婆が手づくり、御佛へ供へて下さりませ。
ト袱紗取ると、餠一つ轉げ出る。
これは〳〵、麁相な事、併し、土に穢れたこの餠は、佛には上げられぬ。幸ひ道に寢てゐる犬。
ト抛りやる。犬來て喰ふ。

三雲　アレ、見なされ、嬉しがつて尾を振るワ。ホヽヽヽ。数々のお志し、佛にも喜ばせ、太郎にも喰はせませう。

卯原　それは忝なうござんす。わたしは、もう歸りませう。

三雲　そんなら、歸らしやんすか。

卯原　嫁御、阿母様に、氣を附けて下さんせ。

兩人　ようござんした。

ト卯原、向うへ入る。

三雲　人の心は、上べに知れぬものでないかいなう。

櫻子　左様でござりまする。敵淺間に引きかへて、阿母様の御深切、父上には非道の事、なされぬお生れ付き、善を積めば幸ひありの本文も、僞りではござりますかいな。

三雲　さう思やるも尤も。併し、喜びあれば悲しみある浮世の習ひ…嫁女

櫻子　母様

兩人　味氣なき、世の成行きぢやなア。

ト是より淨瑠璃になる。

〽されば浮世の舍り、定めぬ諸國行脚の僧、いづくをさして行くぞとも、たどりて爰へ岸野なる、人家を目當に立ち休らひ。

ト向うより靈龜の精、僧形にて出で

靈龜　いま唱ふる鐘は、淺澤の寺にも住まず、里にも、國國所々を巡る身の、一所不住の沙門とは、ハテ、面白の境界ぢやなア。

〽心に何か頷きて、軒の扉に、鉦打ち鳴らせば

ト舞臺へ來て、門にて鉦を打つ。

三雲　表に聞ゆる鉦の音。ソレ、報謝入れてたも。

櫻子　ハイ。

〽ハイと娘がかい立つて、僅かに入れる一錢もこれぞ千金、後の爲、差出す顏を打ち詠め。

ト靈龜、櫻子を見て

靈龜　お若きに似合はぬ志し、厚く回向の致し申さん。

櫻子　それは、忝なうござります。

靈龜　その志しに甘へての御無心、今宵一宿のさせては下さるまいか。

櫻子　それは、お易い事なれど

靈龜　一人旅は御法度かな。

三雲　イヤ、隨分苦しかるまじ。殊には御僧、幸ひ今宵は佛の爲、夜すがら御回向頼みたし。サヽ、これへ〳〵。

霊亀　然らば、許さつしやれ。

〽此方も幸ひ、笠を脱ぎ、草鞋とく／＼上がり口、流石出家の氣散じは、世を捨て人の所行なり。

ト霊亀、草鞋を脱いで二重へ通る。

〽折から歸る富士太郎、一心寺の戻り足、心息せき門の口。

ト富士太郎、向うより出で

太郎　母人、只今歸りました。

三雲　オヽ、太郎、歸つたか。

櫻子　こちの人、待ち兼ねたわいなア。

太郎　申し母人、あの坊様は。

三雲　お宿の無心とお出でなされたを幸ひ、お泊め申して今宵の追善。

太郎　それは、好い思し召しでござります。

櫻子　あなたにお話し申さうと存じましたは、卯原さまが見えまして。

太郎　卯原さまとは。

三雲　仇たる淺間が實母、卯原どの、思ひがけない所へ來合はせ、掛乞ひ衆の金取替へ、それは／＼深切な。

太郎　ハテナア……眼前、敵の淺間が親、たとへ一家の端たりとも、今の親しみ、その意を得ず。

霊亀　ナニ、老母、それにござるは御子息ぢやの。

三雲　ハイ、左様でござりまする。

霊亀　お話しの卯原とやらは、愚僧、これへ參る時分に、歸られた老母かの。

三雲　ヘイ。

霊亀　その老母なら極めて惡人、隨分ともに、ぬからぬが專一でござるぞや。

太郎　私しも左樣に存じます。

三雲　それでも差當つた難儀を救ひ、連合ひの忌日も知り、佛前へお供へとて、コレ、此やうなお萩までを。

太郎　イヤ、渴しても盜泉の水を飲まず、これを父に供へん事、何とやら心がゝり。

霊亀　この供物、彼の老母が持參とな。

櫻子　ハイ、持つて見えたその時に、思はず一つ落し、庭の犬が尾を振りまして

霊亀　その餠を食ひましたか。

太郎　して、その犬は

三雲　何氣なう、其まゝに

太郎　行きましたか。

三雲　オイナウ。
太郎　ムウ。
靈龜　こりや、其まゝに行きさうなものぢや。
　ト初夜の鐘鳴る。
櫻子　ありやモウ五つ。
太郎　御僧さまには、御苦勞ながら
靈龜　佛間へ參つて、御回向いたしませう。
三雲　サア、斯うお出でなさりませ。
　〽もてなし伴ふ一間の障子、明けて佛間へ行く折しも、息せきと駈けくる娘、富士の家居に會釋なく、門の戶叩けば。
　ト三雲、靈龜を案內して奧へ入る。向うより八重梅出て門を叩き
八重　ちと、お頼み申しませう。惡者に出合ひ、難儀いたします。どうぞお助けなされて下さりませ。
櫻子　それはお難儀でござりませう。マア、お入りなさりませ。
八重　有り難うござりまする。
　ト內へ入り、富士太郎を見て
ヤア、あなたは。
　ト太郎恟りして、氣を變へ
太郎　惡い〳〵……サア、惡者に出會うたとは、きつい難儀でござりませう。諸事は
　〽と仕方に呑み込む娘
　ト太郎、思ひ入れ。
八重　アイ……イヽエ、私しは……道通りの者でござりますが、大勢の惡者、手籠めにせうとするを騙してやうやく、その場を拔け、思はず爰へ參じましたのでござんす。どうぞ暫らく、どこへなりと隱まうて下さんせ。
　ト奧より三雲出て
三雲　見れば若い女中樣、それは〳〵御難儀なされましたなア。ひよつと又、惡者が跡追うて來まいものでもない。櫻子、此お方を、暫し奧へ連れましたがよい。
櫻子　アイ……女中さん、サア、ござんせ。
八重　エヽ、嬉しうござんすわいなア。
　〽娘は喜び限りなく、勝手へこそは入りにけり、折しも表に人の音、奴仕立ての一本差し、一節ある骨柄、いづれの家來か、門口にズツと入り。
　ト櫻子、八重梅を連れて奧へ入る。
　ト向うより軍平出て

軍平　頼まうぞ〳〵。
太郎　なんの御用でござります。
軍平　只今これへ、十七八の女子が參つた筈。出しておくりやれ。
三雲　左樣な女中は、此方へは參りませぬ。門違ひでござりませう。
軍平　默らう。門違ひか、門違ひでないか。家搜しせん。
〽と駈け込む向うへすつくと太郎
太郎　なんの僞はり申しませう。匿まうた覺えはござりませぬ。
軍平　アノ、これでもないか。
ト白刃を拔く。太郎、慄へて倒れる。
〽引拔く白刃に慄へる太郎、前後正體倒れる有樣。
コリヤ、恐ろしいか。その性根では敵を討ちに出ぬも尤も。ハテ、難症もあればあるものぢやなア。
〽刀を鞘に納むれば、嬉しく出づる娘櫻子、太郎が側へ走り寄り。
ト櫻子出て太郎を介抱し
櫻子　申し、太郎さま、太郎さまいなう。
太郎　面目次第もござりませぬ。

〽何氣なき體、母は不審に詞を潜め。
三雲　敵討を御存じなされし、お前樣は。
軍平　大内權太夫義弘が、草履摑みの軍平と云ふ者。
三雲　アノ、あなたが。
軍平　富士淺間、近しい一家でありながら、遺恨を挾む淺間左衞門、富士右門を討つて樂譜の一卷奪ひ取り、その場を立退き行くへ知れず。この事、上へ聞えなば、家の瑕瑾、親を討たれ、寶を奪はれながら、仇を報はん所存もなく、樂譜の一卷、詮議もせず、この所に引籠り、月日を送るは合點がゆかずと、主人の疑ひ、其方參つて見屆け來よと、お指圖受けし奴が役目、出立の延引は道理こそ。主人の館へ同道して立歸る。直々云ひ譯いたされよ。
三雲　コレ〳〵、富士太郎、卑怯の病を立て直し、家を立つるが誠の孝行。
櫻子　イエ〳〵、母樣、太郎さまが、他國へお出でなされては、あなたのお力もござりますまい。どうぞ、お延し下さりませ。
軍平　無益の論議。サア富士太郎、立ちやれ。
太郎　左樣なれば、御前まで。

三雲　妾も附いて行きたけれど、代りには嫁の櫻子。
太郎　イヤ、それには。
三雲　ハテ、義弘公を重んじて、母が名代、ソレ、袴も着けて。
櫻子　アイ〳〵……これも父御のお筐なれば
　ト袴を着けさせる。
三雲　大事に思うて着けて行きや。
太郎　左樣なれば、兎も角も。櫻子、支度しや。
太郎　有り難うござります。
軍平　サア、夜が更ける。早く〳〵。
櫻子　母樣、ツイ行て參じます。
太郎　サア、御家來樣。
三雲　ようお出でなされました。
　〽挨拶しか〴〵急き立つて、太郎夫婦を伴ふ奴。
軍平　サア、行きやれ。
　ト軍平二人をせり立て、三人向うへ入る。
　〽大内が館へ出て行く、影見ゆるまで見送り〳〵。
三雲　右門どのが死なしやつてから、思ひもよらぬあの臆病、櫻子一人が心遣ひ。それにつけても思ひ出すは、妹の小雪、どこにどうして暮らすやら、父御の最期も知りやるまい。ア、浮世ではあるわいなア。
　〽又さめ〴〵と袖の海、乾く間もなき風情なり。
ア、我れながら未練な嘆き、ドレ、寢て二人の歸りを待たうか。
　ト上手へ入る。
　〽涙とゞめて奧の間へ、入る月の鐘、皎々と、既にその夜も更け渡り、人も子の刻過ぎる頃、牛より黑き大男、閻魔の形を其まゝに、吠えつく犬を追ひまくり、門の戸こぢて内に入り、老母が襟髮引ツ摑み、刀拔き持ち破れ鐘聲。
　ト五四郎、牛頭八、馬頭六、出で來り、思ひ入れあつて忍び入り、白刃を拔き上手より三雲を引立て出る。
五四　サア、婆ア、金があるなら早く出せ。次手に飯も食ひたい。
牛頭　なんぞ旨い菜はないか。
　〽睨みつけたるこの世の地獄、三雲は躍る胸撫でおろし。
　ト思ひ入れあつて
三雲　見れば、皆冥途のお方々、金を取つて何になさるゝ。
五四　今は貯へはござりませぬ。
五四　イヤ、地獄も今年は旱魃、この閻魔も食ふや食はず。

牛頭　今では餓鬼にも負けにやならぬ。
馬頭　鬼に金棒も、力が無くて弱り山伏。
五四　サア、ちやつきり、ちやつとある所を吐かせ。但し胴腹に風穴明けようか。
三雲　サア。
四人　サア〱〱。
〽どうぢや〱と責め折檻、もしもの事ある時は、悴太郎が嘆きをばと、思ふは老の一思案。
ト三雲を叩く。三雲、思ひ入れあつて
三雲　成る程、斯く成り果てし家なれど、ほんの家内が着るきそげ、それなと集めて去んで下さりませ。
五四　エヽ、しぶとい女郎。ソレ、牛頭馬頭。
兩人　合點ぢや。
〽心得二人が細引取出し、がんじがらみに縛り上げ。
五四　二人とも、有りたけ淩へ。
兩人　オヽ、合點ぢや。
ト合ひ方にて三雲を蹴飛ばし、牛頭馬頭は奥より葛籠その外を運び出して五四郎に渡す。暗き思ひ入れ。奥より靈龜の精出て、品物を一々五四郎より取つて奥へ入れることよろしく
兩人　なんと頭、ようござんすか。
五四　オヽ、よい〱。併し、ようないは腹鹽梅、わい等は、どうぢや。
馬頭　イヤ、もう後へ寄つてゐる。
牛頭　爰に櫃がある。
ト此うち靈龜、以前の重箱をソツと出す。
五四　そりや、明きがらぢや。
馬頭　この重箱は慥かに牡丹餅。
牛頭　こりや、まぶぢや。
五四　これも、符牒は三ツ割りぢや。
〽銘々かつ〱摑み喰ひ、咽喉を通れば、こは不思議や、一人が豌けば三人とも、手足を縮めて四苦八苦。
ト三人、牡丹餅を食ひ、直ぐに苦しみ出し
五四　ア、ラ、訝かしや、今この牡丹餅、咽喉を過ぐるや否や、俄かに腹が强張るは。
兩人　ヤア、苦しい……こりや、堪らぬ。
〽のたうち廻つて三人が、血嘔吐にまみれて死したるは、心地よかりし有樣なり、太郎、櫻子は途中より胸騷ぎして歸り來る、門の戸明けて不審顏、又も驚ろく家內の樣子。

ト三人、血を吐いて倒れる。向うより太郎櫻子、捨ぜりふにて早足に歸り來り、内へ入つて驚ろき

太郎　こりやなんぢや、血まぶれ……ヤア、母人を何ゆゑに

〽滅相なと母が繩目、解くも遲しと取縋り。

三雲　オヽ、二人の者か。

太郎　何ゆゑの、この有樣。

三雲　さいなう。盜賊が三人忍び入り

櫻子　エヽ。

太郎　その盜賊の、この有樣は。

三雲　オヽ、不思議なは、卯原どのゝ贈られし、萩の餅を取出し、喰ふと其まゝ、血を吐いたは

櫻子　慥かに毒藥。

太郎　さてこそ、心よからぬ淺間が母、我れ〳〵親子を計らんと、思ひの外に盜人めが、代りに喰ひ相果てしか。

三雲　それに、犬に與へし餅は

太郎　油斷させんその爲に、一つの餅には仔細なく、殘りに仕込みしこの鴆毒。

三雲　危ない事で

三人　あつたよな。

ト三雲、五四郎が顏見て

三雲　この者は、娘小雪を誘拐かしたる、慥かに五四郎。

太郎　縡きれたれば、妹が詮議もならず。エヽ、殘り多い。

三雲　して、其方をお召しは。

櫻子　サア、その事は。

太郎　サア、おれが話す。默つて居ようぞ。

三雲　して、その樣子は。

太郎　敵の樣子、在所でも求めたかと、お尋ねなさつたまでの事。

櫻子　イヽエ、明日直ちに出立を

太郎　ハテ、要らざる、差出、扣へてゐよ。

三雲　アイた、、、。この中からの積氣の痛み、今のどさくさで。

櫻子　お痛みは、お道理さま。

太郎　御介抱して、直ぐにお寢間へ。

三雲　アイヤ、ツイ直らう、これから夜とともに、父御の回向しますわいなう。

二人　そんなら母樣。

三雲　二人は休みや。

〽互ひに晴れぬ胸の雲、心殘して母親は、奥の一間へ入

る、後に櫻子は夫の側、不思議の思ひ消えぬ胸。

ト三雲は奥へ入る。

櫻子　太郎さま、現在お上のお許し受け、敵討の出立、母樣にもお聞かせ申し、共に喜びと思ふに引替へ、今のお詞。

太郎　サア、それには、深い仔細あつて。

櫻子　イヽエ、仔細であるまい、お前の臆病。

太郎　なんと。

櫻子　父樣の御最期の後、お氣顚倒して、お前の御卑怯。

太郎　ヤア。

櫻子　刃を見れば、五體を竦め、正氣を失ふ眩暈病。ほんに思へば腑甲斐ない、なんとして、其やうな心になつて下さんしたぞいなア。

ト取りつき歎く不便さに、今更なんと富士太郎、思はぬ未練の業病も、思へば何の因果ぞと、夫婦は顏見合して、かこち歎くぞ道理なり。

ト奥より靈龜の精出て

父母に不孝の富士太郎、生きて甲斐なき娑婆ふさげ。

太郎　なんと。

靈龜　役に立たずば、討ち殺せと、母御より愚僧へ賴み。出家の身なれど道理に服し、いま手にかける。覺悟せい。

ト旣に討たんとその有樣、なう哀しやと取附く櫻子、引退け、すはと刀拔く。ハツと恐るゝ富士太郎、猶も日光へ突付けるは、白刃にあらぬ、ひつそぎ竹、覺えず病氣に取亂し、逃げる太郎が襟際を、しつかと取つて。

この竹光でも恐るゝか。白刃に性根を取亂さば、眼中とても濕むべき筈。富士太郎、ハテ、心勞の至りよな。

太郎　かゝる虛病も、尊き御僧の御覽の上は、御承知ある筈。兎角に卑怯の淺間左衞門、片時も早く本望遂し、父への供養と思へども、折しも一人の母が病苦。まつた某が臆病も、敵に油斷させんが爲、一旦退いたる淺間なれども、當地に住居の實母あれば、これに便りて來りもせん。もしやと窺ふこの月日、富士太郎が心の內、御推量下さりませ。

靈龜　かゝる因緣、聞き得るも、誠に他生の結ぶ緣。その孝道の二つを立つる敵討、眼前爰に有りあふ淺間。

太郎　ナニ、淺間が

櫻子　爰に

兩人　あるとは。

靈龜　その照行は、コレ爰に。

ト以前の太皷を持ち出て
形は直ぐに立ちながら、表は矢張り丸からぬ、内に色ど
る三つ巴は、唐土の眉間尺、爰に表はす三つの頭、四方
に火焔の勢ひ鋭どく、一旦の理非は立てど、やがて亡ぶ
る天の誡しめ。昔右門が改易の折柄、淺間の家に奪ひ取
り、照行永く持ち傳へし太皷、打つて今の恨みを晴らし、
父が今宵の佛事供養、目前の孝な。
〽心得たるかと敎への詞。
太郎　云ふにや及ぶ、古へ晋の豫讓は
櫻子　敵の衣を裂きたる例し
靈龜　急ふれ、兩人。
兩人　心得たり。
ト富士太皷、謠の合ひ方になる。
靈龜　かねてより、斯くあるべきと思ひなば〳〵
太郎　望まれしより仇となり、只恨めしきは太皷なり。
櫻子　さあれば親の敵ぞかし。
靈龜　討てや兩人イザ〳〵。
謠〽討てや〳〵責め皷。
太郎　父の敵。
櫻子　當の仇。

ト兩人して、よろしく太皷を打つ事。
靈龜　富士が恨みを晴らせば、涙こそ上なかりけり…オ
オ、出來た〳〵。
太郎　今宵の供養に當然の
櫻子　父上の仇、討ちたる嬉しさ。
太郎　これも偏へに御僧の恩。
兩人　エヽ、忝ない。
靈龜　喜びもあれば、悲しみもある習ひ。この儀もとくと
心得て、必らずその時定業と諦らむべし。その後に至り
二度の難生ぜん。死すと思へば必らず死なん。死せずと
思うて討られよ…こりや、當の敵淺間より、母卯原へ
送りし書面。
櫻子　どうしてあなたの。
靈龜　先刻來る途中にて、老母が落せしその密書は、紛ふ
方なき淺間が自筆。
太郎　さてこそ淺間が通路の樣子。
靈龜　母を住家へ迎ひの一書。奥にあり〳〵敵の在所
太郎　こりや、コレ播州、室積平馬が館に忍ぶとある文體。
靈龜　はや出立に及ぶべき、時節も二日に餘も過ぎし。身
を全うし本懷達し

太郎　不思議の御縁に、今宵の高恩。
櫻子　してあなたは
兩人　いづれの何人
靈龜　忘れても、淸見が關の淺間より、霞みて見えし三保の浦邊に。
兩人　なんと。
靈龜　重ねて逢ひませう。
〽暇乞ひ、二人は禮の詞さへ、只伏し拜む、こなたも目禮、これぞ靈龜の化身とは、見えず形は失せにけり。
ト靈龜の精、思ひ入れあつて外へ出で、ドロ〱にて消える。
太郎　心有りげな旅僧の
櫻子　今の一首。
〽更に不思議も晴れやらぬ、時にこなたの一間なる、障子の內に聲あつて
八重　ヤア、富士太郎知一へ、上總之介安則、對面せん。
〽對面せんと呼はつて、障子をサツと押開けば、一間の內には以前の娘、打つて變りしその粧ひ、木綿布子に引替へて、錦の直垂、折り烏帽子、欣然と上座にかゝりし有樣、奴も變じて美々しき上下、數多の腰元、太郎見るより飛びしさり
ト障子屋體あける、內に八重梅、烏帽子直垂。軍平、上下。腰元大勢附添うてゐる。
太郎　思ひがけなき御粧ひ、如何に〱。
〽とばかりにて、夫婦は呆れて居たりけり。
軍平　ホ、ウ、不審な尤も。これに渡らせ給ふは、今川上總之助安則公の妹姬、八重梅さま。
八重　賤の女となつて入込みしも、戀に事よせ、其方が心を引き見ん爲。卽ち父上了俊さまの仰せにて、兄上、上總之助來る所なれども、傾城乙女太夫と國遠なし、お行くへ知れぬそれゆゑに、兄樣の名を名乘り、今川上總之助安則。
軍平　まツた某は、家老庵原主膳といふ者。奴となつて來りしに、感じても餘りある汝が心底。わざと詞荒々しく罵りし、後より裏に忍び入りしに、思ひもよらぬ最前の仕儀。この上は、一時も早く、出立の用意。
太郎　ハツ、忝なく存じますれど……エ、敵も討ちたし、母が病床も離れ難く、望みは二つ、身は一つ、兩刀帶せし身なれども、この儀に於ては、どうござつても。
〽思ひがけなき襖の內、わつと魂ぎる母よりも、驚ろく

夫婦が駈け寄つて

ト一間の障子明ける。内に三雲、自害してゐる。

太郎　ヤア、母人。

櫻子　母さん。

太郎　母人イなう……申し、何ゆゑの御生害でございます。

櫻子　ひよんな事をなされましたなア。

〽嘆けば母は顔を振りあげ

三雲　めでたき門出に歎くは不吉。今川さまより御厚情の、御意下りしに猶豫の體は、母に心引かれし未練者。只ならぬ身の樣子も、行くへの知れぬ小雪が事も、案じはせぬ。母が非業の死をするも、元の起りは皆照行。母が祝うた門出の血祭り、仇に返すな、いづれも、さらば。

〽さらば〳〵の一聲も、次第に弱る老女より、太郎夫婦が引入る思ひ、見聞く人々、口に唱名、顔背け、この世の別れぞ果敢なけれ。

ト三雲、よろしくあつて落入る。

軍平　ヤア、未練なり富士太郎、跡萬端は主膳が計らふ。心殘さず、出立々々。

太郎　重ね〳〵の御高恩、仰せに甘へ、あれなる高音の太鼓の儀は、淺間左衛門、目を掛くれば、何卒敵討濟みて歸國までは、今川家にお預かり下さらば、この上の御高恩と、有り難う存じます。

軍平　ホヽウ、高音の太鼓は、この主膳、主人にキツとお預け申さん。心殘さず出立しやれ。又この一振りは、相州正宗、門出の餞別、納めてたもれ。

太郎　ハヽヽ、有り難く頂戴仕つてござりまする。これより直さま、發足せん。

〽と立ち上がれば

八重　ヤレ、待て太郎。

〽と呼び留め

敵は淺間、業ある曲者。其方は舞樂の家

軍平　敵を狙ふ出立に、手練が見たい。なんと〳〵。

太郎　御尤もの仰せ。舞樂の家には育つれども、君に仕ふる身にあれば、少しばかりの心掛けは。

軍平　ホヽウ、さもあらん。ソレ、腰元ども。

四人　ハアヽ。

〽下知の下より、侍づく四人、兼ねて用意やしたりけん。紅葉の枝をてんでに携へ、太郎やらぬと、取巻いたり。

ト腰元四人、枝を持つて取卷く。

太郎　こは優しき御相手。大人氣なけれど某が。

照葉　サヽ、それが不覺、女と心得

三人　油斷して怪我さしやんな。

太郎　例へ相手は鬼神なりとも、この富士太郎が一心にて。

四人　その廣言を

〽その廣言をと打ちかゝるを、右往左往へ打ち拂ひ、むら〱ぱつと稻妻の。

照葉　照葉が正眼、受けて見や。

太郎　照葉とあらば、陽の構へ。

ト立廻つて

呉服　所を呉葉が

太郎　ドツコイ、呉葉なれば陰の構へ……眞向立ち割……これを左右へ

赤葉　所を赤葉が、騙すに手なし。

ト立廻りあつて

太郎　赤葉が散ります

赤葉　なんぞ云うてか……アヽ、皆行かしやんせ。

〽赤葉が下知に、殘りの女中、むらがり掛つて、照葉の顏、林に狂ふ里鹿の、諸葉と共に落ちにけり。

軍平　天晴れ手の內、先ツ斯うせば。

ト百兩包みを打ちつける。太郎、受け留め

太郎　ヤア、これは。

軍平　些少ながら、路用にしやれ。

太郎　ハアヽ、有り難う存じます。この上猶豫は恐れあり。

櫻子　そんなら直ぐに

太郎　出立せん。御身は家に止まつて、腹の子安く產み落せよ。

八重　オヽ、女子は女子相互ひ、あと氣遣はずと。

太郎　男子ならば、叡太郎と名くべし。

八重　して、敵を尋ぬるは

軍平　いづくを當に。

太郎　アヽ、イヤ、在所は疾より二通の書面、播州室積平馬が方に。

軍平　イヽヤ、さう思はせて、其方を釣り寄せ、討取るは平馬が助太刀、その當人は、播磨にあるまい。

太郎　もし照行、播州にあらずば、直ちにそれより船路にて、西は九州、筑紫潟。

軍平　東は敦賀、南は紀の路。

〽北は越後に佐渡ケ島、日の本のあらん限りをば、尋ね

求めて淺間が首、引提げ歸らん。
太郎　櫻子、さらば。
〽さらば〳〵と詞數、云はぬ心の暇乞ひ。
軍平　姫君のお立ち。
腰元　ハア、。
軍平　急ふれ太郎。
太郎　ハツ。
〽思ひは後に
惡者　うぬ。
ト切つてかゝるを、見事に切る。
太郎　門出の血祭り
軍平　見事。
トこの途端よろしく　幕。

五つ目

金谷宿隣同志の場

役名＝＝馬士、多次右衞門實は梶田十藏。同女房、およし。巴屋九郎八。同妹、おうめ。掛川貫藏。醫者、道養。子分、小助。同、江吉。同、どぶ六。妻、櫻子。村主兵藏。富士太郎知一。

造り物、三間の二重。見附け橋がゝり、落間。中庭の模樣、隣の塀を見せかけ、巴屋と書きし暖簾。上手は屋體、すべて旅籠屋の體。下女三人、役者の旅人を留めてゐる。在鄕唄にて幕開く。
下三　お泊りぢやないかえ〳〵。
旅皆　オ、泊めてくれるか。
下三　サア〳〵、お上がりなされいなア。
旅女　此方の供にはぐれたので、不自由でならぬ。女中さん、お頼み申すぞえ。
旅敵　エ、こちらのやうな旅役者が、人使うてよいものか。
立役　なんと、馬虹さん、今夜は貴樣の江戸駒で、おれが萬里と出かけたら、對な出ぢや。
敵役　何を云ふやら。中屋が長唄なりや、おりや淨瑠璃で押へてこますぞ。
下三　サ、マア、二階へ行かしやんせいなア。
立役　ドリヤ、風呂へ入つて休まうか。
ト皆々、奧と二階へ入る。向うより九郎八、口利きの

形、貫藏附いて出て

九郎　これは、よい所でお目にかゝりました。

貫藏　拙者も貴公の住家へ。

九郎　マア、ござりませ。

ト本舞臺へ來る。

下三　オヽ、旦那樣、お歸りなされませ。

九郎　客どもはあるか。

下三　たんと、泊めて置きましたわいなア。

九郎　そんなら、キリ〳〵風呂へぼい入れ、支度も腹のへらぬうちに、喰はしてしまへ。

下三　アイ〳〵。

ト奥へ入る。

九郎　時に、こなたの申されし、いよ〳〵主人淺間どのには、その富士とやらを討つて立退かれしとな。

貫藏　サア、貴殿は元、淺間の中間、勘當を受けて國遠、茲こそ貴殿が好い詫び所ぢや。

九郎　それは忝ない。して、詫びの種になる事は。

貫藏　富士の悴、富士太郎、敵を討たんと尋ね廻る由、こなたが宿屋商賣を幸ひ、心を付けて討つて捨てなば手柄となり、また身共が主人室積平馬どの、その富士が嫁の櫻子に大執心、連れて行けば褒美といひ、淺間どのには、主人が好きに申してくれるであらう、それゆゑ、元のよしみに參つたのサ。

九郎　ムウ。して、その富士と云ふ奴は。

貫藏　年の頃は廿三、色白なる男。

九郎　また櫻子は。

貫藏　年の頃十八九、四つばかりの子を連れ、富士太郎が行くへを尋ね、一昨夜、この後なる中山にて出會ひしところ、思ひの外に手剛き働らき。その中へ以前の家來め、邪魔ひろぎ、無念ながらも取逃がしたが、大袈裟に切りかけたれば、所詮敵ひはせまいと思ふ。

九郎　すりや、年頃は十八九、肩先より大袈裟に。すりやアノ奥の

貫藏　なんぞ、心當りがござるか。

九郎　サア、四つばかりの子供は居ねども、なんでも彼奴に違ひはない。また富士太郎と云ふは、隣りの病人の浪人。この間、多次右衛門めが、質に置いてくれと頼んだ相州正宗。

貫藏　それこそ今川より敵討の餞別に、彼奴が貰つた代物それぞ正しく

九郎　ハテ、何も慌てる事はない。どちらも病人。マア、奥へ行て、何かの相談。

貫藏　然らば伊藏、ではない九郎八。

九郎　お客、斯うお出でなされませ。

ト兩人奥へ入る。上手障子の内より、藪井道養、娘おうめを追ひ出る。

うめ　アヽ、惡い事さしやんすな。御仁體にも似合はぬ。又しても、措いて下さんせ。

道養　イヤ、措かぬ〳〵。ツイ得心さへしてくれたら、兄貴は金出しさへすりや遣らうと云ふゆゑ、直ぐに奥樣。どうぢやぞい〳〵。

うめ　兄さんが何と云はしやんしても、否でござんすわいなア。

道養　否と云ふ程、猶一倍、思ひが増す穂の薄ぢや。

うめ　アレイ、誰れぞ來てたもいなう。

道養　さりとてはやかましい。

トおよし、橋がゝりより出て、内へ入る。道養、取違へ、およしを捕へる。

よし　エヽ、主ある者に、何さんすのぢや。

道養　ヤア、こりや。

うめ　およしさま、先刻にから。

道養　ア、コレ、云ふまい〳〵……腹が痛いと云ふに依つて、撫でゝやらうと云ふに、仰山な。

うめ　アレ、あんな事を。

よし　深切なお方ぢやないかいなア。

うめ　イヽエイナア。

道養　それ〳〵兎角、云はぬは云ふにいや増る。お娘が腹にかゝつて、肝心の病人を忘れて居た。ドリヤ、見舞うて來うか。

トよろしくあつて奥へ入る。

うめ　ほんに又しても、否で〳〵ならぬわいなア。

よし　ハテ、年のゆかぬ時、誰れでも覺えのある事ぢやわいなア。さうして、呼びにおこしやんしたは、なんの用ぢやえ。

うめ　サア、その用は、あの病人は、どうぢやぞいなア。

よし　サア、お前がこの間、眞珠を下さんしたので、ちつとはよいけれど、とんと捗がゆかぬわいなア。

うめ　わしやモウ、とんと氣にかゝつて居るけれど、今日はお客が多うて行かれぬに依つて、呼びに上げたいわいなア。

よし　なんぢやいなア、
うめ　サア、昨日の事、云うて下さんしたか。
よし　サア、その事は、わたしが呑み込んで居るわいなア
あの方は、わたし等がお主様、思ひもよらぬ事でお前の
世話、仇に思ひはせぬわいなア。さうしてお前、どうし
て、あなたが此方の内に居てぢや事を知つてござんした
うめ　サア、ソレイナア……あの奥の二階に涼んで居た折
に、フツと見初めて、それからお目が悪しうなつて、や
つれなさつた程、痛いとしうなつて、お前の内へ行くの
も、あなたのお顔が見たいばつかり。
よし　ほんに、年もゆかぬに深切な志し。わたしが、キ
ツとお禮しますわいなア。
うめ　アイ、嬉しうござんすわいなア。
九郎　おうめ〳〵。
ト内より云ふ。
よし　ソレ、兄さんが呼んでぢやぞえ。
うめ　エヽ、まだ話したい事がある。今のお醫者さまを、
お前の所へやつて、あなたの病氣を。
九郎　おうめ〳〵。
よし　あのやうな悪性の人でも、療治はよいかえ。

うめ　そりや上手ぢやといなア。
よし　さうして、見舞うてくれてかいなア。
うめ　わたしが頼んで上げるわいなア。
よし　また、滅多な事しられなや。
うめ　なんの、阿房らしい。
ト九郎八出て、およしを後より捕へる。
よし　エヽまた、今の藪醫さんか。
九郎　イヤ、おれぢや。
うめ　兄さんぢやわいなア。
よし　エヽ、九郎八さんか。又しても、悪戯さんすわいな
ア。
九郎　イヤ、悪戯ぢやない、大真實……ヤイ、おのれは、
奥へ早うせあがれ。
うめ　サア、行くは行くけれど。
九郎　エヽ、うせやがらぬかい。
うめ　エヽ、行くわいな。
ト奥へ入る。
九郎　サア、もう今やそつとの事ぢやない。それで、われ
が顔を見ると、おりや、目遣ひばかりして居る。コリヤ
其やうにつれなうしたものぢやないわいやい。

よし　サア、そのお志しは嬉しいけれど、多次右衛門と云ふ夫の有る身ぢやゆゑ。
九郎　サア、さつぱりと去られてしまへ。女夫になりや、われもよし、おれもよし。素寒貧の多次右衛門めより、ズッと福人なこの九郎八、餘り憎うはあるまいがな。
トしなだれる。おうめ、出て來たり、およしを招き
うめ　それ程に心を盡すも、どうぞ叶へて欲しいばかり。
よし　サア、お前の事は、呑み込んで居るわいなア。
九郎　コリヤ、來い／＼…なんでもかでも、一口商ひぢや。應と云やよし、また否ぢやと吐かしや、多次右衛門めに仇するが、サア、どうぢや。
うめ　どうぢやぞいなア。
よし　お前の事は、よいわいなア。
九郎　サア、返事はどうぢや。
よし　よいと云うたら、よいわいなア。
九郎　アノ、よいな。
うめ　よいと云はずに、早う聞かせて下さんせいなア。
よし　それでも、主のある身で、どうもならぬと云ふのに。
うめ　そりやお前、胴慾ぢやわいなア。
九郎　よけりや、いま直ぐに。
よし　せわしない…エヽ、お前ぢやないわいなア。
うめ　そんなら、わたしは。
よし　呑み込んで居るわいなア。
うめ　そんなら、お醫者さんを連れて行かう。
ト奥へ入る。
九郎　サア、もう斯う云ひ出すからは、否でも應でも、聞いてもらはにやならぬ。
ト追ひ廻す所へ貫藏、旅人、奥より九郎八を呼びながら出る。九郎八、取違へて、捕へる。この間に、およし、橋がゝりへ入る。
貫藏　九郎八どの、これはいかな事。
九郎　エヽ、逃げやがつた、いま／＼しいわい。
貫藏　なんの事はない、狂人の沙汰…さうして、櫻子、富士太郎は、いよ／＼相知れましたか。
九郎　しつかりそれと知れてごんす。
旅人　わし等は、みな平馬どのゝ隠し目附け。今夜は、爰に泊り居れば。
九郎　この上は、戀の意趣を持ち込んで、あの多次右衛門め、流れの來た正宗も、彼奴の手に入れず、慌てさしてこますわ。

貫藏　して、櫻子は。
九郎　櫻子めは、こなたに切られた疵で、破傷風なれども手剛い奴が付いて居れば、滅多に手出しは出來ぬ。委細の事は奥の間で。
貫藏　九郎八どの。
九郎　お客衆、皆、ござれ。
　ト皆々入る。上手、障子屋體より、兵藏、道養、連れ立ちて
兵藏　これは段々御苦勞でござります。病體は、いよいよ夜前仰しやりました通りでござりまするか。
道養　サア、金瘡と云ふやつは、大破傷風になれば、なかなか事が六ケしいぢや。
兵藏　どうぞ、さうなりませぬうちに、あなたの御療治で
道養　癒すには、昨夜渡した藥に、男の生血を合して服ませば、忽ち本腹。愚老が請合ひ。
兵藏　外に、あなたの御療治は。
道養　なんにもない。どうぞ、生血を調へさつしやれ。ドリヤ、奥で休みませう。
　ト奥へ入る。兵藏、思ひ入れあつて
兵藏　一昨夜、思ひも寄らず巡り逢うた櫻子さま、敵の爲に金瘡のお痛み。その上、和子樣を見失ひ、お力落しに重なる御病氣。爰まで御同道はしたはしたけれど、何を云うても、生血が調はずば、本腹はないとの事。それゆゑ腹切つてお役に立てんと思ひしが、兄兵助は相果て、我れまた果てなば、お力になる者も無し。二つには、多吉が事、妹に告げ知らす者もなく、我れと心を取り直し、海道筋にさまよひ、道ならぬ事ながら、主人の爲に往來の者を手に掛けんと、刀に手を掛けたれども、罪無き者は手に掛けられず、すご／＼昨夜は歸りしが、破傷風となつてはむづかしく、と云うて誰れを切る當てもなく、御病氣だに直しなば、たとへこの兵藏があらずとも、甲斐々々しき櫻子さまなれば……ムウ、なんとしたものであらうなア。
　ト上手より、九郎八、窺ひ居る。この途端に顏見合せ九郎八、障子を閉めきる。兵藏、キツと見込み、返し
　造り物、平舞臺。見附け赤壁、納戸口、押入れ。上手、降り座敷の二階。この下より、大和葺きの屋體橋がゝり、搔垂れ塀門口。富士太郎、着流し、浪人の形、眼病の體にて、上手に坐り居る。下手に駕舁

き小助、江吉、どぶ六、やかましく云うて居る。眞中におよし、前垂れ姿にて、斷わり云うて居る。賑やかな鳴り物にて道具、納まる。

駕三　聞かんぞ〳〵。

よし　其やうに云はずと、暫らくの所でござりますわいなア。

どぶ　その暫らくも久しいものぢや、こゝな多次右衞門の大盜人め。三吉が盆へうせて、一文なしに組みさらし、友達のよしみぢやと思うて、七貫五百文、貸してこました。

小助　おれも六貫倒された。

江吉　おれも又、盆たびに貸したおんづもり、丁度十貫五百文。

どぶ　それから內へ來れば留守、外で逢へば內へ來いと、引摺りあがつて返さぬ横着者。

よし　サア、尤でござんすけれど、今は、こちの人が居やしやんせぬゆゑ。

小江　ムウ、留守でも大事ない。貸した代りに、內の物持つて去なうぢやあるまいか。

どぶ　さうせう。行け〳〵。

ト富士太郎、探りながら出て

太郎　最前から聞いて居れば、皆こなた衆が尤もぢやが、拙者は此のやうに眼病にて皆目見えず、マア〳〵、多次右衞門が歸るまで、お待ちなされて下さりませ。

小助　ならんぞ〳〵。

どぶ　サア、皆、來い〳〵。

二人　合點ぢや〳〵。

トおよしを引退け、太郎の前を通るを、一々投げる。此うちおうめ、上手より出掛け見て居る。

三人　コリヤ、おいらを投げたぞよ。

太郎　素町人の分際で、事を分けて賴むに、狼藉働らかば、手は見せぬぞ。

三人　なんぢや〳〵、怖い事はないぞ〳〵。

うめ　マア〳〵、皆やかましう云はずとも、よいわいなア。

三人　ヤア、こなたは、頭の妹か。

うめ　いま聞けば、お錢の事ぢやさうな。わしがどうなりして置かう程に、明日でも、わしに取りにござんせいなア。

どぶ　こなさんが物云はんす事なら、一番聞かにやならぬ

江吉　サア、皆來い〳〵。

ト三人、橋がゝりへ入る。
よし　ほんに、おうめさん、又してもく、お前のお世話になりまして、お氣の毒に存じます。申し、眞珠を下さんした、隣のナア、兼ねくお話し申した、おうめさんでござります。富士太郎さま、お禮を仰しやれく。
太郎　さてはおうめさまでござりますか。御覽の通りの眼病、お心に掛けられ、眞珠を下されし上、只今の御厚情千萬有り難う存じます。
うめ　ハイく、お禮ではわたしや、辛氣千萬に存じます……エヽモウ、あのやうに慇懃に云うてぢやと、物が云はれぬ。どうぞ、お前が、エヽ、どうぢやぞいなア、
よし　サア、呑み込んで居るわいなア。申し、若旦那樣、改まつた事なれども、わたしは甲枝と申しまして、腰元奉公、あの多次右衛門どのは徒歩中間、若氣の至り、不義のお咎めで、既にお手討にもなるべきところ、あなたがお助け下されし上、お金まで下され、それゆゑ女夫の者が寢ましても、上方の方へは足も向けました事はござりませぬ。それに、計らぬ今度の騒動。夫があなたを連れ立つて歸られましての御眼病。眞珠の才覺に心を痛める折に、幸ひ、此おうめさまが、あなたに、サア、死ぬほど思つてござるゆゑ、頼まれましたも、お爲を思うてでござりまする。この間の眞珠と云ひ、お醫者樣まで寄越して下さんす心意氣、女子のわたしさへ惚れましてござんす。どうぞ、優しい詞を掛けて下さりませ。
太郎　サア、この間より其やうに聞けど、大望あるこの身殊に眼病。
よし　サア、それぢやによつての、お頼みでござります。
太郎　サア、其やうに申すならば、マア、如何やうとも。
よし　サア、側へ行きなされ。
　ト　おうめを突きやる。
太郎　何にも云はぬ、嬉しうござるぞや。
　ト　おうめ恥かしきこなし。
よし　もう、こちの人も戻られさうなものぢやが。
　ト　道養、上手より酒に醉うて出る。
道養　鳥は宿す池邊の樹、僧は敲く月下の門。エヽイ。
よし　危ないわいなア。
うめ　オヽ、道養さん、よう來て下さんしたなア。
道養　そもじのお頼みなら、唐までも行くぢや。して、御病人はどれぢや。
太郎　これに居りまする。

道養　御免下され。下拙、少々酩酊いたして居る。ドレ、見て進ぜう。
ト脈など、いろ／＼見る事ありて
これはむづかしい。餘程、心勞召された病ひぢや。
兩人　エヽ。
道養　隨分、癒る藥もある。さぞ痛むであらう。
太郎　一向、夜に入りますと、切なうござります。
道養　その痛みは、針で留めて進ぜう。
太郎　それは御苦勞に存じます。
ト隣より、下女一人、走り出て
下女　おうめさん、旦那さんが呼んでぢや。
うめ　ツツトモウ…道養さん、頼みましたぞや。
道養　込んで居る／＼。
下女　サア、お歸りなさりませいなア。
ト下女附いて、おうめ、上手、切り戸へ入る。向うより、多次右衞門、馬士の形にて、質屋の手を引ッ張り出て
多次　さうされては濟まぬ。此方へ來てもらはう／＼。
質屋　でも、わしぢやてゝ、どうするものか。
多次　ハテ、此方へ來てくれ／＼。

ト内へ入る。
よし　こちの人、とこへ行かしやんしたいぞいなア。
多次　サア、正宗の事に付き…この人の所へ行たが…あなたは誰れぢや。
よし　結構なお醫者樣ぢやゆゑ、おうめさんが引合はして下さんしたのぢや。
道養　御亭、お歸りか。ア、この病人は十日捨て置くと心血を吐いて卽死ぢや。まだ好い時分に見せたなう。
多次　そりや捨て置かれぬ。どうぞ好い仕樣は。
道養　あるとも／＼。併し、滅多に云はれぬ、他聞を憚る奇藥でござる。御病人、この針を打つて、どうぢや。
太郎　一向に、堪え憎うござります。
道養　痛い筈ぢや。心の臟の釣りが、切れかゝつてあるわい。
兩人　エヽ、
質屋　コレ、多次右衞門どの、あの相州正宗。
多次　コレ。
質屋　サア、あの代物は、隣の九郞八が手から受取つた物ぢやが、こなたに渡してくれなと云うたによつて、どうもならぬわいなう。

多次　成る程、尤もぢやが、さうしられては、どうもならぬ。何分、後金拵らへて、九郎八を連れて行く程に、外へは遣らずと、留め置いて下され。あれを流しては……サア、とうも濟まぬによつて、くれ〴〵も頼んだぞや。

質屋　そんなら、二人連れでござれ。ヤレ〳〵むづかしい質請けぢや。

ト向うへ入る。

多次　若旦那の病は、どういふものでございます。

道養　この病は、即ち、水亡眼と云ふ。水が盡きると、心火破れ出て、五臓を燃やし、即死々々。

太郎　人間は病の器、死ぬる事はいとはねど、望みあるこの身なれば。

多次　アイヤ若旦那、何も仰しやりますな。イヤ、ちと我れ〳〵は望みある身、何卒、若旦那の御病氣平癒のお藥が

道養　あるとも〳〵。我れ等が家の秘法。女の生血を合はして服ませば、立ち所に癒るぢやて。

兩人　すりや、そのお藥を。

道養　ドツコイ、こりや廉い藥ぢやないぞや。よう似た事もあるものぢや。隣の病人も人の要る藥、二十金に賣りました。この藥も二十金ぢやが、合點か。

兩人　その金は。

太郎　命に替へる寶はない。こりやコレ相州正宗、大切の刀なれども、差當る金の代りに。

ト刀を出す。

多次　エ、……イ、ヤ、こりやお離しなさりましてはなりますまい。

太郎　でも、差當る藥の價。

よし　さうでござりまする。マア、御病氣さへ本腹なさりましたら。

多次　何を、おのれが、知つた事。

よし　それでも。

多次　譯も知らずに……イヤナニ、お醫者樣、後方までに、キツと藥禮は、調へまするでござりませう。

道養　そんなら、隣の病人も受取つて居れば、隣にて待ち合さうか。然らば御免下され。

ト隣りへ入る。

太郎　長の年月、寒さ暑さに苦しみて、引出せしこの病、所詮本腹思ひもよらぬ。

多次　お氣遣ひなさりますな。金子も血汐も調へ、御本腹、

させまする。
よし　それ〳〵、まさかの時は、隣の九郎八が口説きを幸ひ、道ならぬ事ながら、騙かつて金を取る分の事。
多次　私し女夫が居るからは、本腹させまいでは、御恩送りがどこでなりませう。
太郎　たとへ藥は手に入つても、女の生血が手に入らずば。
多次　それも心當りがござります。女房ども、ちよつとおぢや……いよ〳〵、隣の九郎八が口說いて居るぢやな。
よし　アイ、最前も無理に捕へて。
多次　よし〳〵、およし、主夫の爲めには、われが命、くれるであらうな。
よし　改まつた事云はしやんすな。なんの命を惜しまうぞいなア。
多次　出かした……若旦那、キツと御病氣は平癒させまする……女房に惚れて居るこそ幸ひ、非道ながらも間男にして藥代。
太郎　して、女の生血は。
よし　その時は、わたしが命。
多次　すりや、得心か。
よし　お役に立てゝ下さんせ。
太郎　イヤ〳〵、およしをさうしては。
多次　本望遂げず、犬死がお望みか。
太郎　ぢやと云うて。
多次　脊に腹は替へられませぬわい。

ト向うより、どぶ六、江吉、小助、九郎八、出て

どぶ　頭、いま立場の婆の所で云ひ合はした通り、
小助　おいらも、えらい目に逢うたざぶめ。
江吉　尻持つて下んす氣か。
九郎　オヽ、行け〳〵。

ト本舞臺へ來て

三人　多次右衞門、內に居るか。
多次　オヽ、何しに來た。
よし　最前、おの人さん方が、あんまりやかましう云はんすので、それであなたがツイ
多次　ムウ、よい〳〵。
どぶ　イヤ、貸した物も返さず、取つて投げたり、眉間に疵を附けられたので
小助　おいらが堪忍しても、頭が聞かぬ。
江吉　それで、せりふに來たのぢやわい。
多次　へ、、、よう來たなア。さうして、頭は。

九郎　オヽ、爰に居るわい。
よし　お前は九郎八さん。
九郎　お内儀、コレ、人に辛ければ、人またわれに辛しぢや。それで、かけ構はぬ事ながら、皆の奴の尻持つて來たのぢや。
多次　九郎八、わが身に折入つて賴みたい事がある。
九郎　刀の事か。
多次　サア、その刀、今日中に請けねば、流れる代物。貴樣でなけにや渡さぬと云ふによつて。
九郎　オヽ、賴むとありや、賴まれてやらうが、マア、こいつ等に賴まれた、仕返しをしようかい。
太郎　多次右衞門々々々々々、最前、無體をするゆゑ、ちよつと支へしを根に持つて、ねだり込めば容赦はない。其方も武士の果、ソレ、これで譯を立てい。
　ト刀を出す。
九郎　なんぢやい〳〵。刀を出したかて、なんの別に怖い事はないぞ。エヽ、慄へずと、おれに引附いて居い。
どぶ　なに云はんすやら、こなさんが
二人　慄うて居てからに。
多次　サア、九郎八、われが手先の者を、打擲したは腹が立たう。サア、おれを……イヤサ、おれが相手になつて、撫切りぢや。
四人　ムウ、そんなら。
多次　サア、存分に……イヤ、するのぢや。
よし　コレ、こちの人、お前、なんで。
多次　やかましい。默つて居れ。
よし　エヽ。
多次　默つて居てくれい。
よし　そんなら。
太郎　多次右衞門、其方が猶豫せば、某が意趣なれば、眼病ながら立合はうか。
　ト皆々、逃げうとする。
多次　イヤ、あなたのお手に掛けるまでもない。
太郎　ぶち切つてしまへ。
多次　ハツ……サア、何も怖がる事はない。コレ……この刀、ナア、刀で。
九郎　そんなら、カウ。
　ト多次右衞門を叩く。
三人　おいらも、カウ。
よし　アレ。

多次　さうぢや、それで…そんな事でゆくのぢやない。おのれ等、これでも謝まらんか。

ト四人、さん〲多次右衛門を打擲する。およし、行かうとするを留める。

太郎　多次右衛門々々々々々。

多次　ハツ。

太郎　如何いたし居るぞ。

多次　イヤ、こりや…この通りに致して居りまする。

太郎　早う片付けい。

多次　ハツ。コリヤ、これでは存分で…云ひ分はあるまい。

九郎　イヽヤ、まだ

太郎　云ひ分あれば、某が。

多次　ハテ、もう弱つて居ります。

九郎　コリヤ、その云ひ分は。

ト刀にて多次右衛門の眉間を割る。

多次　刀の極印。

よし　お前の額に。

多次　オヽ、眉間を割つたら、もう存分で…ナア御主人。

太郎　よきに計らへ。

多次　これで、ちつとは胸が落ち付いたわい。

九郎　オヽ、これで此方の云ひ分も

三人　濟まさうわい。

多次　ちつと、さうもあらうかい。

九郎　多次右衛門、仕返しが濟んだ上は、おれも男ぢや。われが頼みの…オヽ、その正宗…キツと頼まれた。その代り、此方も望みがある。

多次　そりや、後の事。

九郎　ムウ…皆の者、サア來い。

ト皆々、花道へ入る。およし、泣く。

多次　ハテ、掛け構ひもない餘所の事を。女子といふ者は、氣の弱い者ではある…もう初夜でもござりませう。およし、奥へお供しや。

よし　アイ。

多次　エヽ、早う奥へ、お供申して行け。

よし　アイ…富士太郎さま。

太郎　コリヤ、多次右衛門、今の奴等を打擲の様子、この富士太郎、目は見えねども心地よい。また寶は身の差合はせと云へば、たとへこの相州正宗は紛失いたしても、質物に差入れても。

兩人　エヽ。

太郎　サア、本腹してから、本望遂げさへすりや、その事には構ひはない。必らず短氣な事のないやうに、心急がず、療治も頼んだがよい。

多次　畏まりましてござります。

太郎　サア、およし、案内。

ト太郎、およし、奥へ入る。あとに多次右衞門、思ひ入れあつて

多次　チエ、口惜しい。富士太郎さまの徒歩中間、梶田十藏とも云はるゝ者が、斯く成り果つるのみか、御主人に憂き目を見する口惜しさ。今のお詞では、何にもかも御存じの樣子。貧苦の中の御介抱、手詰めになつて、現在、主の刀を質に、當座遁がれの遣繰りも、罰が當つて今の難儀。その刀の事といひ、價の高い彼の藥。女房と相對で、道ならぬ不義をさして、この身の忠義を立てるといふは、腑甲斐ないこの體。

ト愁ひのこなし。およし、出掛け居て、思ひ入れあつて外へ行かうとする。

コリヤ、どこへ行く。

よし　アイ、構うて下さんすな。

多次　構ふなとは。

よし　愛想が盡きた。

多次　ヤ。

よし　サア、あんまり、お前に甲斐性が無いので、去られて行くのぢやわいな。

多次　待て。

よし　イエ／＼、放さんせ。

多次　コリヤ、勤め奉公に行く氣なら、とつくりと暇乞ひして行きやれ。

よし　エヽ。

多次　それを隱してくれる、われが心。恨めしいわい／＼。

トおよしも思ひ入れあつて

よし　そんなら樣子を。

多次　九郎八に仕掛けても、とても刀の質請けの金がないと思うて、勤め奉公に行くとは、何にも云はぬ、これぢや／＼。

ト手を合せる。

よし　エヽ、滅相な。何をするも、お主の爲。機嫌よう、やつて下さんせいなア。

多次　サア、これが否さに、一昨日の夜中、山で駕籠舁き

どもが、六つばかりの子が金持つて居ると云ふを、取らんとする所へ走せ付け、駕籠舁きどもを追ひ拂ひ、藪の内へ連れて行て、金を渡せと云へば、たゞ父樣に逢ひたいと財布を放さず、鬼になつてその子を殺し、持つて戻つたその財布、明けて見れば露金二つに錢三文、する事なす事、斯くなるも、一旦お主の目を掠めし罪。それから夜も晝も、足手かいさまに歩いても、出來ぬものは金。手詰まりになつて、今日の切端。富士太郎さまに何も角も悟られ、口惜しいわいやい〳〵。

よし　さう云ふ事なら、この間から、なぜ打明けては下さんせぬ。あんまりわしを思うて下さんすが、今では結句涙の種。

多次　およし。

よし　こちの人。

　ト手を取交して思ひ入れ。

泣いて居る所ではない。一時も早う金を調へて……こちの人、行て來やんせう。

多次　待て。行くには及ばぬ。

よし　及ばぬとは之れ。

多次　サア、よく〳〵思案をして見れば、まだ十日も大事ない富士太郎さまの御病氣。其うちには、又よい思案も出やう。また刀の事は、富士太郎さま、あのやうに仰しやるし、いらくら云ふは質屋の癖、また利上げと云ふ事もあるもの。思ひ詰めれば詰まり、また緩めて云うて居れば、なんでもたい事。

よし　それぢやというて。

多次　ハテ、一寸延びれば尋とやら。それよりは富士太郎さまが、右の樣子を御存じ、此方が苦勞するを思ひ、我が身の病を苦に病んで、どんな事があらうやら心元ない。そちや、奥へ行て、氣を付けて居い。サア〳〵、早う〳〵。

　トこれにて、およし頷き、泣く〳〵奥へ入る。あとに多次右衞門、思ひ入れ。

コリヤ、およしよ。いま云うたのはみな嘘ぢやわいやい。われが勤め奉公に行て、金が調うても、とてもあの九郎八め、直ぐでは刀渡すまい。また血汐がなければ御本腹もなし、最前、醫者の話しを聞けば、隣の女子の病人、其奴を殺して生血を役に立て、路金を取つて藥代。刀は九郎八めが命づく。それを云うたりや留めるであらうと、隱したのぢやわい……邪魔の入らぬうち、さうぢ

や。
ト思ひ入れあつて灯を吹き消し、隣の内へ入る。表より兵藏、ソツと出て
兵藏　いま醫者が話では、この家の内に、命危ふき病人ありとの事。これを殺して櫻子さまの本復の、合ひ方の生血。幸ひの暗がり。ムウ、よし〳〵。
ト思ひ入れあつて奥へ入る。直ぐに隣の切り戸より、多次右衛門、櫻子を追うて出る。
櫻子　こりや、狼藉な、なんとする。
多次　われを殺して、入用の藥に使ふのぢや。
櫻子　夫に巡り逢ふまでは、滅多にや死なぬ。
多次　なにを。
トよろしく立廻り。奥より兵藏富士太郎、同じく立廻りながら出て
兵多　サア、生血を取るのぢや、觀念せい。
太櫻　滅多にや死なぬ。
トこれにて双方思ひ入れ。
兵藏　今のは櫻子さま。
太郎　ナニ、櫻子。
櫻子　富士太郎さま。
兵藏　ナニ、富士太郎さまとは。
多次　櫻子さまとは。
ト奥よりおよし、手燭持つて出る。皆々顔見合せ
よし　ヤア、お前は兄さん。
兵藏　妹、およし。
多次　そんなら、あなたが
太郎　櫻子。
櫻子　わが夫。
よし　思ひも依らぬ
兵藏　一家の寄合ひ。
多次　さうとは知らず
太郎　櫻子もろとも
櫻子、切られうとは
よし　御病氣癒さん
兵藏　互ひの忠義も、
多次　危ふい事で
皆々　あつたよなア。
太郎　して、其方は。
兵藏　櫻子さまの家來、村主兵助が弟兵藏。
よし　わたしが爲には、兄さんでござんす。

多次　そんなら、大阪を出る時厄介頼んだ兄貴かいなう。
兵藏　サア、厄介につき話しもあれど、また思ひ出しなされては。
太郎　して櫻子、出立の節、みごもりありし、嬰兒は如何に。
櫻子　八重梅さまの御介抱受け、安々と蓬み落したは男の子にて、仰せの通り叡太郎と名け、今年で六つになり、あなたに逢ひたい〳〵と。あんまり慕ひますゆゑ、お跡を慕うて尋ね來る道、一昨日の夜、吉備の中山といふ所にて
太郎　ナ、、、なんと致した。
櫻子　追手に出會ひ、難儀の場で、見失ひましたわいなア。
太郎　すりや、忰叡太郎は
多次　吉備の中山にて
よし　お見失ひなされたとな。
多次　ホイ。
よし　もしや最前お前の話しの。ナア、こちの人。
多次　もう、これまでぢや。
ト刀を腹へ突ッ込む。
皆々　これは。

よし　コレ、こちの人、お前、なんで死なしやんすぞいなア。
太郎　仔細は如何に。
兵藏　樣子はなんと。
皆々　サア、どうぢや〳〵。
ト多次右衞門、苦痛の思ひ入れ。
多次　これが死なずに居られうか。忠義と思うてなせし事は、みな不忠となり、大切な正宗の刀、質に入れたが身の不忠、何卒して取返さんと、心を盡す折柄、一昨日の夜、吉備の中山で、六つ位の男の子、金を持つて居ると聞きしゆゑ
皆々　ヤア。
多次　殺しましたわいなう。いま櫻子さまのお話しでは、正しく叡太郎さま。如何に知らぬ事なればとて、現在の主殺し、この身の罪は逆磔刑。竹鋸にも引かるゝところ、腹切つて相果つるは、まだしも、武運に盡きぬ十藏。富士太郎さま、櫻子さま。何事も、お免しなされて下さりませ。
ト皆々愡りこなし。
よし　エ、、たとへさうでも、間違ひ事。ひよんな事して

下さんしたなア。
　ト兵藏こなしあつて
兵藏　エヽ、こりや皆、間違ひぢや〳〵。
多次　間違ひとは。
兵藏　一昨日、吉備の中山で、殺されたのは叡太郎さまぢやない。
太櫻　ナニ、叡太郎でないとは。
兵藏　サア、ありや、こなた衆二人の仲に出來た、多吉ぢぢやわいなう。
兩人　エヽ。
兵藏　恂りは道理々々。最前云はうと思ふたれど、御夫婦の前で歎かすまいと、云はなんだがおれが誤まり。早まつた事して下されたなう。
よし　さうして多吉は、どうして殺されたのぢや。サア、云うて下さんせ〳〵。
兵藏　サア、こなた衆二人が大阪を立退いたは、六年前の事。水子の多吉をおれに預けて、行くへ知れず。それから育てゝ置いたれど、おれにはなんで父樣がない、母樣に逢ひたいと、夜も晝も泣いて頼むがいぢらしさ、西國筋と聞きしゆゑ、こなた衆女夫を尋ねんと、彼奴を連れて旅の道、殺さうと思うて、連れては來ぬわいの〳〵。蟲が知らしたか、死ぬ前の日から、無性に逢ひたい〳〵とせがむゆゑ、庭瀬の立場で駕籠を借り、急ぐも矢張り吉備の中山。
多次　アノ、殺したは。
兵藏　オヽ、多吉ぢやわいやい。
　トこれにておよし、ワツと思ひ入れ。多次右衞門もこなし。
多次　そんなら、叡太郎さまではなかつたか。エヽ、有り難い。とは云ひながら、兵藏、折角、今年まで育てゝ連れてござつたを、現在親が手に掛けては、腹が立たう。堪えて下されや。
兵藏　それと云ふも、おれが不調法。堪えて下され堪えて下され。
　ト多次右衞門、財布出して
多次　因果の種はこの財布、子供心に露金を、金と云うたが、彼奴が不運。
よし　エヽ、この財布が多吉の財布かいなう。コレ、多吉產れ落すから、人手に掛けた、胴慾なこちらを、ようマア慕うて來てたもつたなう。

多次　殺さうとした時、父様に逢ひたい、母様に逢ひたい、コレ小父さま、情ぢや、慈悲ぢや、助けて下されと、手を合して拝み居つたに、知らぬ因果の寄合ひ同士。主人の爲とむごたらしい、いま息引取るまで、父様、母様、逢ひたいと云うたのが、目先へ見えるやうで、おりやモウ、早う死にたい〳〵。
ト身を悶え
コリヤ、多吉よ、父も後から追ッ付いて、三途の川も賽の河原も、おれが負うてやらうぞよ。
よし　如何に知らぬと云ひながら
兵藏　慕ひ慕ふを、その親が
多次　手に掛けて殺さうといふは
三人　如何なる前世の惡業ぢや。
ト皆々嘆きのこなし。太郎も思ひ入れあつて
太郎　コリヤ、十藏、汝が忠義、天晴れ過分。愁傷の程、察し入る。
多次　エ、、忝ない其お詞。せめて今際の忠義には、この血汐を、早う櫻子さまへ。
兵藏　イカサマ。
ト兵藏、茶碗を取つて來る。二階を明けて、おうめ、聞いて居る。
櫻子　わたしが病氣癒つても、あなたの病氣が癒らねば。
よし　さうぢや。
ト死なうとする。兵藏、留めて
兵藏　コリヤ、其方はなんで死ぬる。
よし　夫や子に離れ、生き甲斐のないこの身、せめてお役に。
太郎　しつかり留めよ。
兵藏　ソレ、お留めなさるゝ。マア〳〵待て。
よし　イヤ〳〵、殺して下さんせ。
うめ　南無阿彌陀佛。
トおうめ、懐劍を突ッ込む。
太郎　ヤア、あの聲は。
兵藏　隣の二階。
よし　お前は、おうめさん。
うめ　およしさん、何にも彼も、みな聞きました。奥様のあるお方とは知らず、惚れたわたしが因果。たとへさうでないとても、あなたの敵の家來の妹、とても叶はぬ戀ゆゑに、せめてあなたのお役に立つて死んだなら。
よし　アイ、未來の事は、わたしが頼んで上げるわいな

ア。
兩人　そんなら、あなたに。
太郎　おうめとやら、過分〳〵。長い未來を、待つて居やうぞ。
うめ　エ、、嬉しうござんす。
ト扶り死ぬ。仕掛けにて、二階より、血流るゝ。
多次　サア〳〵、二人の血汐を、早う〳〵。
よし　さうして、あなたのお藥は。
道養　イヤ、そりや爰に持つて居ります。
ト道養、奥より出てくる。
多次　サ、、早う〳〵。
よ兵　サア、、申し、一心の藥。
櫻太　エ、、重ね〴〵の心遣ひ。
ト兩人藥を服む。ウンと倒れる。
兩人　この體は。
道養　ちつとのうちぢや。慌てまい。
ト切り戸より、九郎八、小助窺ひ出て
九郎　覺悟。
ト太郎に切つてかゝる。太郎、ムツクと起き、九郎八を引廻す。小助、切つてかゝる。櫻子、立廻つて

太郎　この刀は相州正宗。
兵藏　ナニ、正宗とな。
櫻子　申し、富士太郎さま。
太郎　そんなら、其方は本腹いたしたか。
櫻子　あなたはお目が見えますか。
太郎　今まで見えざる兩眼の、明らかに見え、心も晴れ晴れと爽かなるは。
道養　それこそ我れらが家傳の利き目。なんと、ひどいものでござりませうがな。
兵藏　ソレ、兩方の價の四十金。
道養　エ、、忝ない。
太郎　不便なは多次右衛門。
多次　お構ひなくとも御發足。
櫻子　とは云ひながら。
道養　ハテ、後は下拙が呑み込みました。
兵藏　妹は後の問ひ弔ひ。我れはこれより、お供して直さま出立つ。
太郎　何かは道にて云ひ合せん。
小助　富士太郎、覺悟。
ト切つてかゝる。立廻り、ポンと切る。

ト多次右衞門落入る。皆々合掌する。よろしく幕。

六つ目

阿彌陀寺開帳の場
赤間ヶ關千歳屋の場

役名——傾城、浪路實ハ小雪。同、浪江。同、浪門同、浪崎實ハ乙女太夫。同、浪花實ハお京。千歳屋金兵衞實ハ村主兵藏。奴、國平。奴、三平。兒、花若丸。千歳屋女房・おつる。今川上總之助安則。掛川貫藏。信樂傳平。蛇の目の八。紙子の長藏。仲居、おたけ。同、おうめ。淺間左衞門照行。

造り物、見附け淺黃幕。板松。開帳の立て札、阿彌陀寺開帳と記しあり。茶店床几二脚、仕出し、腰掛けて居る。淸搔にて幕開く。

仕出　なんと、阿彌陀寺の開帳は、えらい評判ぢやないかい。

同　それ〳〵、造り物の說法が、いつちよいげな。

同　そんなら、一緒に參詣しませう。

同　サア、ござれ〳〵。

ト皆々、上手へ入る。向うより、田舍侍ひ、大きなる胴亂を提げ、ヒョロ〳〵して來る。巾着切り、附いて出て、胴亂を取つて走り入る。これを知らずに本舞臺へ來て

侍ひ　なんぢや〳〵。身共に突當り、無禮をする。この刀が目にかゝらぬか。白痴者め、憎い奴の。

ト上手へ入る。巾着切り、下手より出て

巾着　ハヽヽヽ、餘ツぽど其方が白痴ぢや。併し、この胴亂、なんぼ程あるか知らん……いま〳〵しい、錢が二百入つてある。もつとよい仕事にかゝらにやなるまい。

ト入る。上手より、浪路、浪崎、浪花、いづれも傾城姿、仲居大勢、禿、太鼓持ち附いて出て來り

仲居　マア〳〵爰へお出でなさりませ。この阿彌陀寺へ、傳さまが餘所行きの御趣向はよけれど

太鼓　あの無理酒には、ほつと困りでござりませう。

禿　ほんに、爰らはよい風ぢや。

同　酒の醉ひ、醒ましやんすがよいわいなア。

浪路　他所行きはよけれども、あの意地惡の傳さん

浪崎　ほんに遠慮も會釋もなう

浪花　金で高振るは、餘ツぽど念の入つた

皆々　野暮ぢやわいなア。
仲居　ほんに、浪路さんが、無理に酒を強ひられさんしたが、醉醒ましの藥を上げませうかいなア。
浪路　イエモウ、否ぢや〳〵と思ふゆゑ、無理な酒も醉ひませぬわいな。
ト子役の順禮、柄杓を持ち出て
順禮　順禮に御報謝。
仲居　エ、モウ、藪から棒に、悄りするわいなア、併し、可愛らしい順禮ぢや。ドレ〳〵、遣りませう。
ト柄杓にて戴き、入る。遣り手、出て
順禮　忝なうござります。
遣手　オヽ、太夫さん方、爰にかいなア。傳さんがどこへ行たと云うて、怒つてぢや。また例の肝積が出ぬうち、來て下さんせいなア。
浪路　わたしや否ぢやわいなア。
遣手　さう仰しやらずと、行ておくれいなア。
皆々　太夫さん、マア、行て上げさしやんせいなア。
浪花　成る程、他所行きの事なれば、困らんすも無理ならず。わたしも一緒に行く程に、浪路さん、行てやらしやんせいなア。

浪路　オヽ、せわしやなう。
皆々　サア〳〵、ござんせいなア。
ト橋がゝりへ行かうとする。唄になり、橋がゝりより淺間左衞門、出て來り、行き違ふ、この時、浪路の袖淺間の刀の柄にかゝる。淺間、笠の内より浪路を見て互ひに心意氣あつて
太夫さん、早うござんせいなア。
浪路　オヽ、辛氣やの。
皆々　サア、ござんせいなア。
ト皆々、下手へ入る。淺間、床几へかける。
茶女　ハイ、お茶あがりませう。
淺間　オヽ……よい天氣ぢやなう。
茶女　左樣でござりまする。
遣手　ほんに、この他所行きはよけれども、太夫方の遊び事には困るぞ。世話やの〳〵。
淺間　コレ〳〵。
遣手　ハイ。
淺間　お身に尋ねたい事がある。
遣手　なんでござりまするえ。
淺間　いま爰に居つた太夫は、いづれの揚屋、名はなんと

申すぞ。
遣手　あの太夫さまは、千歳屋の全盛、浪路、浪江さんと云ふ太夫衆でござんすわいなア。
淺間　フム、あてやかな者ぢやなア。
遣手　そんなら、あの浪路さんを…申し、お大盡さま、お心がござりまするならば、お立寄りなさりませ。
淺間　成る程、尋ねて參らう。その節は又、お身を頼むてあらう。
遣手　イエモウ、太夫さん方を、遣繰りするは、わたしが役。どのやうな事でも致しませう。必らずお待ち申します。
ト上手へ入る。
淺間　今の太夫は千歳屋の浪路…ドリヤ、參詣いたさうか。
ト上手へ入ろ。向うより、髪結ひ國平、出ろ。
三平　オ、イ〳〵。
ト後より奴三平、月代のばし、鎗擔げて出て
オ、イ〳〵。
國平　三平さん。まつと歩かんせぬか。
三平　されば〳〵、病氣はすつぱりとえいが、まだ足が引き憎い。時に、今日から出勤して、お道具を擔ぐとは云ふものゝ、この通りの長髮。なんと剃つて結ひ直してくれまいか。
國平　そりや易い事ぢや。爰はおれが近附きゆゑ、大事ない。佐七、內に居るか…どこへぞ出たさうな…オ、幸ひ、湯も沸いてある。サア、揉まんせ〳〵。
三平　合點ぢや〳〵。
ト頭を揉んで居る。浪花、走り出て
浪花　こちの人ぢやないか。
國平　さう云ふはお京。イヤ、浪花太夫。この間はお目にかゝりませぬ。
浪花　お目にかゝらんどころか、いつから逢はずと思はんす。お前と云ひ交して、大坂を立退き、九州三界へ附き歩くも、皆お主の爲。
國平　ア、コレ、何を云やる。側に三平さんが居てぢやわいなう。
浪花　サア、お前の爲に廓に勤めも、お主さんの爲ぢやぞえ。
國平　ヘテサテ、知れた事。
浪花　その深い女夫ぢやないか。なんで鶴菱屋の寒菊さん

と、あのやうな事さしやんしたえ。
國平　おりや、そんな事は知らぬわい。
浪花　この狀見やしやんせ。屆けてくれと、なんでわたしを賴まんしたえ。
國平　それを、おれが知つた事かい。
浪花　イヤ、こなさんは。
三平　コリヤ〳〵、女夫喧嘩は尤もぢやが、マア、剃つてしまうてから、せり合やいなう。
國平　ぢやと云うて、あんまりでござりまするわい。
浪花　樂みを拵らへて置いて、なんでわたしがあんまりぢやえ。
三平　サア〳〵、尤もぢや。尤もぢやが、月代剃る者の身にもなつて見い。
ト向うより花若、兒の形にて走り出て、三平に突き當り、ペツタリ坐る。
浪花　誰れやら走つて來て、目を廻さんしたぞえ。
三平　行倒れ〳〵。
國平　見れば、寺のお兒さうな。呼び起しや。
三平　見さまいなう〳〵。
ト呼び生ける。花若心附き

國平　氣が付きましたか〳〵。
花若　どなた樣かは存じませぬが、だん〳〵のお心附け、お嬉しう存じまする。
浪花　さうしてマア、なんとして爰へお出でなされました。
花若　よう問うて下さりました。何を隱さう私しは、この山寺の兒小姓、花若と申す者。この頃寺へ尋ねてござんした、上總之助さまといふ、お大名の御子息樣、師の坊とは伯父甥のよしみ、わたしが方丈に獨り花を生けて居る所へ來て、あのゝものゝと、つい一睡の嬉しい逢ふ瀨。ところに、その若殿は書置を殘して、寺を出やしやんした。和尚樣よりわたしが仰天、行く先は慥かに知れず、あちよこちよと、やう〳〵爰まで來たのでござんすわいなア。
浪花　ほんに、いとしい事でござんすわいなア。
花若　併し、もう嘆くは愚痴。わたしもこの事に尋ね歩いては、咽喉が干上がる。どうぞ寺へ去にたいと思うても去なれはせず……お前、髮結ひさんと見た。どうぞ、わたしを法體さして下さんせいなア。
國平　成る程、尤もぢや。尤もなれど、それは惡い思ひ付

き。

花若　ぢやと云うて、食へぬが悲しい。

三平　こりや尤もぢや。いつそ、あの輕業太鼓の拍子に合して、女夫仲直りに、二人して剃つてくれぬか。

國平　こりや面白い。サア、喧嘩は後へ廻して、マア、商買が肝心ぢや。其方はお兒さまを剃つてたも。

ト兩人、月代にかゝる。

浪花　こちの人、剃つてしまうて、後でどうする。待つて居やしやんせ。

國平　何も、われに苛なまれる覺えはない。淸淨な男ぢやわい。

浪花　その口が憎いわいなア。

國平　おのれ、憎いとて、なんとせうと思うて。

ト また女夫喧嘩になり、トゞ國平、花若を引寄せ、剃り下げる。浪花、三平を引寄せ、坊主にする。

浪花　サア、よいか。

國平　隨分と際を立てゝ剃り下げた。そこな鏡で、見やんせ。

三平　おれも、これで心持ちがようなつた。

ト花若、兩面鏡にて見て

花若　ヤア、こりや剃下げになつたわいなア。

三平　ヤア、この三平を坊主にしたぞよ。

國平　ほんに、こりや間違うた。

浪花　拍子に掛つて、堪忍して下さんせ。

花若　只さへ愛想の盡きた殿さん、この剃下げを見やしやんしたら、いとゞ愛想が盡きやうもの。こちや、いやいや。

三平　ヘテ、貴樣は又、坊主になられうが、おれがのは急に生えぬ。生えねば知行に有付かれず。サア、元の通りに生やして戻せ。

花若　早う、法體さして下さんせいなア。

ト上手より代官、捕り手大勢、連れて出て

代官　ソリヤ。

ト國平を取卷く。

國平　こりや何ゆゑの狼籍ぢやなア。

代官　ヤア、うぬは富士太郎が家來國平。さては、其方の男が富士太郎よな。

花若　エヽ、滅相な。わたしや兒の花若。

代官　そのまた兒の頭が剃下げとは。

花若　サアソレ、あんまり阿房らしうて云はれもせぬ。

代官　云ひ譯なくば、家來、繩打て。
皆々　腕廻せ。
花若　こりや堪らぬ。
ト逃げるを、立廻りにて、皆々を追ひ込む。子役の順禮、逃げ出る。田舍侍ひと巾着切り、子役を捕へ
侍ひ　ヤイ、びつちよめ、うぬ、形に似合はぬ太い奴ぢや。サア、白狀して、きり／＼そこへ出してしまへ。
トこの時淺間、出掛け居る、
巾着　惡く意地ツ張ると、子供とて容赦はないぞ。
順禮　何にも取つた物はござりませぬ。
侍ひ　取らぬわれが、懷中に紙入れが、どうしてあつた。
順禮　その紙入れは、拾うたのでござります。
侍ひ　小太い小びつちよめ、痛い目さしてやらう。
巾着　うぬがやうな奴は、斯うして。
ト叩く。
順禮　痛いわいなア。アレエ／＼。
巾着　サア、痛くば出せ。エヽ、いつそ。
ト淺間、兩人を取つて投げる。
兩人　アイタヽヽ。
巾着　腰の骨が、折れたぞ／＼。

侍ひ　ヤア、コレ、侍ひ、盜人の吟味をして居る身共を、なんで投げるのぢや。
淺間　投げても大事ない。
兩人　大事ないとは。
淺間　小兒、童を捕らへて、荒くれの詮議呼ばり。手が廻り相果てなば、その時、御身はなんとする。
侍ひ　ヤア。
淺間　たとへ慮外いたさうと、高が子供、おてまへは武士ぢやないか。
侍ひ　サ、それは。
淺間　云ひ譯でもござるか。
侍ひ　サア、それは。
兩人　サア／＼／＼。
侍ひ　ムウ、云ひ譯はない。
巾着　なんの事ぢや。
侍ひ　どは云ふものゝ。
淺間　何がどうした。
巾着　エヽ、お侍ひさまの御挨拶ぢや。免してこますぞ。
侍ひ　ハテ、よいわい。いかいお世話さん。
ト兩人、橋がゝりへ入る。

淺間　ハ、、、、他愛もない奴ぢや。コリヤ、小兒、どこも痛みはせぬか。泣く事はない。サア、早く行け早く行け。

ト泣く／＼子役、向うへ入る。

世には狼藉者もあればあるものぢやなア

ト浪路、仲居太鼓持ちを連れ出て、右の有樣を見て、いろ／＼思ひ入れ。淺間、下手へ行くを、浪路、袖を扣へる。

そちや、先程の傾城浪路どのか。

浪路　あなたは、どうしてわたしの名を。

淺間　知らいでならうか。出雲の神を恨みんばかり。

浪路　イヽヤ、そりや嘘。その思ひがあれば、身に引受けて里の意氣張り。

淺間　義を變せぬが武士の魂ひ。

浪路　伊達や手管を取措いて

淺間　すりや、敵を惱ます謀り事。

浪路　深い緣に

淺間　アノ、かくる所存か。

浪路　コレ、必らず

淺間　通はにやなるまい。

浪路　嬉しうござんす。

皆々　そんなら、太夫さん、・・・サア、太夫さん、日が暮れる。戻らしやんせぬかいなア。

ト浪路、花道へ行き、鏡袋より鏡を出して映す。

淺間　庾嶺雪深うして、花梅を吐く、

浪路　誰が知らぬ佛山の春霞、引く甲斐あればほだしともなれ。

皆々　サア、行かしやんせいなア。

ト浪路、皆々、向うへ入る。淺間、ウツトリとなつて居る。門弟四人、出て

門四　先生、お迎ひ。

ト淺間、扇を落すを木の頭、向うを見込み、よろしく、早幕。

造り物、平舞臺。見附け長暖簾。上手、折り廻し障子屋體。橋がゝり、茶屋格子。いつもの所に門口、掛け行燈、千歳屋と書きあり。上手に傳平、貫藏を留め居る。下手に、紙子の長藏を、蛇の目の八、留めて居る。藝子小糸、仲居、おたけ、おうめ、太鼓持ち定八、皆々、留めて居る。酒肴、銚子、鍋など

貫長　並べあり。騒ぎ唄にて幕開く。
貫長　ヤア、聞かぬ〳〵。
皆々　マア〳〵、ようござりますわいなア。
傳平　コレサ、貫藏どの、高が彼れら風情を捕へて、大人氣ない。誰れあらう、當國の大守赤松義則公の御寵臣、この廓の奉行たる室積平馬どのゝ身内の貴殿が、心掛けられし浪崎も、爰には居らぬ。抛つて置かつしやれ〳〵。
長藏　コレ、あの頬桁を。
蛇八　ハテ、よいわい。赤松であらうが、猿松であらうが、なんぢやらうと、おのれが惚れた浪崎、力づくで買うて見い。
貫藏　まだ、あの如く。
傳平　ハテ、よいと云ふに。
うめ　なんぼう其やうにせり合うても、肝心の太夫様が見えませにや、分りませぬぢやござりませぬかいなア。
たけ　太夫さんがござんしてから、互ひに達引して。
貫藏　然らばさう致さうわい。命冥加な奴ではあるわい。
傳平　ハテ、仔細は身共が胸にある。
蛇八　おのれ等が酒喰ふのを、見ても居られまい。
長藏　料理場へ行つて、喜助を苛めて、一杯呑まうかい。
蛇八　サア來い。
　ト兩人、入る。
うめ　コレ、仲居、小糸さん方は、太夫さんを迎ひに。
たけ　そんならわたしらは、道まで迎ひに。
小糸　行て來ようわいなア。
　ト門口へ出る。
うめ　サア〳〵、一つ上がりませ。
小糸　アレ、向うから太夫さんが見えるわいなア。
兩人　ト浪路、浪江、浪崎、浪花、浪間、皆々道中姿。さしかけ傘、遣り手、禿、附添ひ出て
浪路　さゝれつゝ、千歳が元に押し寄する
浪江　寄る邊定めぬ流れの身。
浪崎　岩にせかるゝ物思ひ。
浪花　行くへも知れぬあだし緣
浪間　月に漂ふ
浪路　浪路。
浪江　浪江。
浪崎　浪崎。
浪花　浪花。

浪間　浪間。
浪路　皆々打揃うて
皆々　來やんしたわいなア。
兩人　サア〱、ござんせいなア。
　ト皆々、本舞臺へ來る。
定八　ヤア、これは打揃うて、容顏美麗、やつちややつち
や。
うめ　太夫さん方、お大盡樣がお待兼ねでござんすわいな
ア。
浪路　小糸さん、賴んで置いた事はえ。
小糸　サア、ねつから便りがござんせんわいなア。
浪江　おうめさん、昨夜の山さんわえ。
うめ　奧二階で、居續けでござんすわいなア。
浪江　オヽ、嬉し。
浪路　妹女郎さんはこの間から、何やら嬉しさうな樣子。
浪江　サア、一昨日の夜から、あのお侍ひのお客さんが、
　どうした事か……後に云はうわいなア。
浪路　わたしも、お前に賴みたい事もあり、後に逢はうわ
いなア。
浪崎　浪路さま、昨日わたしが賴んだ事。

浪路　ヘテ、呑み込んで居るわいなア。
浪江　浪花さん、昨夜の事もわたしが、氣を付けて世話す
る程に、落ち付いて居やしやんせ。
浪花　ア、嬉しうござんすわいなア。
傳平　ヤイ〱、うぬ等、大切の金銀を出して、身體髮膚
を賣買して置きながら、おのれ等が內證話しして、客
をもてなさいで濟むか。遊女が座敷で、餘所の話しする
は第一の戒め、生得は客を三文とも思はぬゆゑ、それで
は身共が武士が立たぬ……とサ、腹を立てる所なれど
も、それでは又、相の山の三味線を、綿打ちのやうにし
られては詰まらぬ。コリヤ、太夫、どうぢやぞいやい。
貫藏　貴樣がさう出かけると、身共もモウ堪えられぬ。
　ト兩人、浪路浪崎にしなだれかゝる。
浪崎　エヽ、暑くろしいわいなア。
小糸　あなた、其やうになされずとも、マア、花車さん
に、太夫さんの事を賴ましやんせいなア。
うめ　さうでござんす。さうするが廓の習ひ。ほんに粹な
あなた樣にも似合はぬ事。
傳浪　ムウ、成る程、理窟ぢや。して、花車はいづれに。
つる　イヤ、それへ參つて、お目にかゝりませう。

ト出て來る。

皆々　おつるさん。

つる　皆さん、ようござんしたなア。

傳平　ナニ、花車、委細は聞いて居たであらう。

つる　成る程、承りました。わたしも千歳屋のおつると申して、人に立てられ、又あんまり惚れ手が多うて、喧嘩の絶える間のなく、氣の叶はぬ男は、戀ひ焦れて死ぬる可哀さ。後家で居ては殺生と、この春から金兵衛どのを婿に入れましたが、まだ青いゆゑ、達引はわたしがせにやならぬ。太夫が事も、わたしが呑み込みました。マア、落ち付いて居やしやんせえ。

浪路　おつるさん、それでもわたしに

つる　ハテ、こちの人の妹同然、悪うは思ひはせねど、あのお客も振り、このお客にも逢はぬでは困るわいなア。こちの人が贔屓すると云ひ、氣の迫る事もあれど、そりや胸の捌けたわしぢやもの、そんな事はとつと思やせん。それぢやによつて、この客は、わしが顔立て、逢うてもらはにやならぬ。また逢て否ぢやと云やると、どうやらこちの人と譯でもあるやうに、サア、思やせぬけれど、氣が廻るといふものぢや。サア、疑ひ晴らしに、逢うて下さんせ。

浪路　サア、お前のお詞、無理な事はござんせんけれど、この事ばかりは、マア、兄さんにも尋ねてから。

つる　イヤ、尋ねる事はならぬ。又しても、しく／＼泣いたり、その顔が氣に入らぬ。

浪路　それぢやというて。

浪江　ハテ、浪路さん、もう云はしやんすな。親方の意に任せぬが太夫の習はし。又、おつるさんも、折角云ひ出しやさんした事を、反古にもなるまい。こりやわたしが預かつて、とつくりと後に返事せうわいなア。

つる　そんなら、大盡さん、奥へござつて。

貫傳　返事を待たうかい。

うめ　サア、太夫さん方。

皆々　行かうわいなア。

ト皆々、奥へ入る。花道より上總之助、夜番の形にて出て

上總　火の廻り／＼……ア、、騒ぎ居るな／＼。三味の音色は更に變らねど、變つたはおれが身の上。太夫に逢はうと思つても、今は夜番の淺ましさ。ア、、どうぞ逢ひたいなア……火の廻り／＼。

たけ　アレ、彌七どんがござんしたわいなア。
うめ　サア、ござんせ。
　トおたけ、おうめ出て
たけ　コレ、彌七どん、もう何時ぢやえ。
上總　されば、おれも晝から番部屋に寢て居たれば、知らぬが。
うめ　お前は、何が役ぢやいな。
たけ　それに、時知らいで濟むかいなア。
上總　されば、そこが故實ぢや。廓の初夜は町の夜半。そこで夜番までグツと寢て、町の夜半を聞くと、初夜を打ち出すぢや。先づ大事は、限りの太鼓。何かしつぽりと睦言の最中、滅法彌八と打てば、去ぬる氣になる。そこを離れ憎いやうに、掠めて、ドン〳〵〳〵、客の心がグニヤ〳〵となつて、つい朝まで。これが傳授の太鼓は浪の音、火の廻りの水調子、陽を沈める利劍。なんと夜番の口傳は、むづかしいものであらうがな。
たけ　あんな、よい口な事ばつかり。
うめ　そのお前が粋なので、惚れ手が多うて、わたしや氣にかゝるわいなア。
上總　あんまり弄つておくれな。シタガ、惚れ手があれば、この彌七、ちよんの間は辻の番所、揚げ詰めなりや、値は負けて置きます。
うめ　そんなら、わしや今夜行くぞえ。
たけ　オヽ、滅相なおうめさま、この彌七さんは、わたしが疾から、惚れて居るわいなア。
うめ　イエ、わしが先ぢやわいなア。
　ト二人、一緒に側へよる。奥より浪崎出て分ける。
兩人　お前は、浪崎さん。
浪崎　ほんに、お前方も厚かましい。夜番の彌七どの、人が知らぬかと思うて、きつい機嫌ぢやなア。府中から爰へ來て、チヨロ〳〵顏を見ると思や、もう惡性。どこの寢間番してぢやえ。
上總　コレ〳〵、太夫樣、そりや皆お前の事。晝も寢、夜も寢るのがお前の商賣。我れらは、夜番の悲しさは、寢るが最後足上がり。ア、なんとせう、落ちぶれた身の因果。それも誰れゆゑ、お傾城のぬめたゆゑ、隨分、お樂しみなされませ。
浪崎　そりや、誰れに云ふのぢやえ。
上總　おのれに云ふのぢや。
　ト上總之助、有りあふ物を投げる。浪崎、投げ返す。

たけ　コレ、危ないわいなア。
浪崎　イエ〳〵、抛つて置いて下さんせ。
上總　その口を。
　ト八、出て、側へ來るを、上總之助叩く。
蛇八　アイタヽヽヽ、こりやどうする。
上總　オヽ、違うた。
蛇八　なんぢや、人をくらはして、違うたて、それで濟むか。
浪崎　マア、聞いて下さんせ。夜番に似合はぬ、惚れ手が多いので、氣が揉めるわいなア。
蛇八　どんと、おれと一緒ぢや。
上總　一體、彼奴が惡性から起る事ぢや。
蛇八　そんな顏付きぢや。
浪崎　さうして、女子さへ見ると、他愛がないわいなア。
上總　マアちよつと、下に居て下され。サア、一體、彼奴は古狐ぢや。
浪崎　こなさんは、古狸ぢやわいなア。
上總　なにを、鼬め。
浪崎　犬め。
蛇八　ヤア、評判の燒き餅は、爰ぢや〳〵。
浪崎　もう料簡がならぬぞえ。
上總　おれも斯うする。
皆々　マア〳〵、よいわいな。
浪崎　イヤ、聞かぬ〳〵。
　ト八をさん〴〵にして、皆々奥へ入る。
蛇八　なんの事ぢや。酷ひ目に合はし居つた。
　ト貫藏、奥より出て
貫藏　蛇の目の八か。
蛇八　貫藏さま。
貫藏　コリヤ、謀し合す事がある。我れ〳〵は平馬どのゝ隱し目附け、夜番に姿をやつせしは、上總之助安則。まつた傾城乙女は、彼奴を尋ねる爲。斯く馬鹿となつて入り込みしも、それと悟られまい爲。奥へ行て、傳平にも逢うて、何かの話し。
蛇八　左樣なれば、貫藏さま。
貫藏　蛇の目の八。
蛇八　先づ、ござりませ。
　ト兩人、奥へ入る。奥より傳平、おつる、浪路、仲居出る。
傳平　聞かぬ〳〵。

皆々　マアく、よろしうござりますわいなア。
傳平　コリヤヤイ、この間より、武士のあるまじき廓通ひ、鼻毛も三丈四尺二分五厘延ばして居るぞよ。それになんの彼のと、エ、モ、料簡ならぬく。
つる　御尤もでござりまする。わたしがキッと申し付けませう。暫らくお待ちなされて下さりませ。ソレ、お寢間を取りや。
兩人　ハイ。
つる　エ、、キリくとさらさぬかい。
　ト　おたけ、おうめ、不精々々に蒲團を敷き、枕直し置く。
傳平　ムウ、然らば、相待ち居らうわい。
　ト　襦袢になり、大小差し、蒲團の上へ坐る。此うち、浪路は煙草のみ居る、
つる　サア浪路、最前も云うた通りぢや。この客を勤めにや、いよく\わしが疑ふ。コレ、まだ愚闘々々云へば、この箒の背打ち。否か應か、返事はどうぢや。
傳平　ア、、退屈な。まだかく。
つる　ハイく、それへ遣はします……サア、浪路、返事はどうぢや。

浪路　どのやうに云はしやんしても、否なお客に逢はれるものか。アイ、否でござんす。
つる　エ、、さう云やモウ。
　ト　箒にて打つてかゝる。傳平、慌て、浪路を圍ふ。浪路と思ひ、打たうとして、おつる氣が付き、引退け、打つてかゝる。金兵衞、出て、箒を引ッたくり、傳平が手を捻上げ
金兵　コリヤ、何さらすのぢや。
　ト　傳平を見事に投げる。
つる　ハテ、こちの人、奉公人の折檻するを、なんで支へさんすのぢやえ。
金兵　おれが爲には妹同然、勤めはさゝぬ。座敷ばかりの附合ひならばと、約束して出してあるわいなう。それになんぢや、抱いて寢ようの、客ぢやのと吐かすは、おのれかい。
傳平　ハイ、左樣でござりまする。
金兵　その態なんぢや、ひが左衞門めが。
傳平　拙者、ひが左衞門とは申さぬ、信樂傳平と申す。
金兵　才七めが。
傳平　ソレ才七、お呼びなさるぞよ。

金兵　エヽ、やかましいわい……この太夫はおれが妹。足元の明いうち、出てうせい。
つる　コレ／＼、こちの人、云はしやんすな。知つて居る。妹ぢや／＼と云うて可愛がり、コッソリ呼び出して、なんぼもあるやつぢや。サア、折檻するが氣に入らずば、あれ置いて出て行かんせ。
金兵　さう云ふわれから出て行け。
つる　わしが内に、小糠三合で入つて居て、出て去ねとは、なんでわしが出て行くのぢや。
金兵　千歳屋金兵衞と、名前を切り替へたりや、この身上はおれが物。すツ込んで居れ。浪路を賣る事はならぬぞ。見れば、端近う蒲團を敷きさらして、何奴も此奴も、おれが詞用ひぬ奴は、逐ひ出すぞ。
つる　エヽ、ひよんな事して、名前を切り替へた事ぢや。
　コリヤ、女子ども、火入れに火がない。茶も汲んでうせ居れやい。
たけ　アイ／＼。
金兵　コリヤ、肩を揉めやい。殘りは臺所へ行て、酒の燗して、持つて來い。
たけ　ハイ。

つる　コリヤ、火を入れぬかい。
たけ　ハイ／＼。
金兵　肩を揉み居らぬかい。
たけ　ハイ／＼。
　ト傳平、金兵衞の後へ廻り、肩を揉み、おたけに奥へ行けと仕方する。おたけ、火入れを持つて入る。
つる　アヽ、僅か百兩の敷金を喜んで婿にしたが、今では口惜しいわいなア。
　トおたけ、火入れと茶を汲んで出て
たけ　ハイ、お茶上げませう。火も入れてございまする。
　ト茶と火入れを取違へ呑む。
つる　こりや、なんとするのぢや。
たけ　お前さんの麁相でござりまする。
傳平　さうした所は、とんと灰猫ぢや。
つる　おのれが、猫にしをつたなア。
　ト皆々を追ひ廻し、奥へ入る。
金兵　ハテ、騒々しい奴ではある……小雪さま、さぞお腹も立ちませう。惡者五四郎に誘拐かされ、この廓の憂き勤め。あなたは御存じはござりませぬが、私しは富士太郎さまの嫁御、櫻子さまの家來、兵助が弟でござりま

方（ほう）す。また、私しが妹お吉めは、あなた様の腰元ゆゑ、方とあなたを尋ねましたが、この家に勤め奉公と聞くより、やう〳〵金子百兩拵らへましたところ、三百兩ならば身請けと申すゆゑ、是非なくその百兩にて、入り婿になりましたも、あなたのお身を大切に存じますゆゑ。この後ともに、必らず富士のお娘御とは、お隱しなされて下さりませ。其うちには、富士太郎さまに巡り逢ひ、敵

浪路　エヽ。

金兵　イヤサ、何かを御聞きなされたら、その悔りなさる事は、富士太郎さまのお目にかゝりましてからの事に仕りませう。

浪路　ほんにモウ、心遣ひ、嬉しうござんす……さうして、悔りする事とはえ。

金兵　サア、その事は、何も、其やうに申しまする程の事でもござりませぬ。これは又、追つて申し上げます。この上とも、心置きなう。御用がござりますれば、仰しやつて下されませ。

浪路　云ひ憎い事ぢやが、一昨日の晝、阿彌陀寺で

金兵　阿彌陀寺で。

浪路　エヽ、ツツトモウ、辛氣な事ではあるいなア。

金兵　辛氣な事とは。

浪路　見合してから、見合してから、云はうわいなア。

金兵　私しも、見合してから、話しを致しませう。ヤア、部屋へ行つて、お休みなされ。

浪路　それでも、わしや、爰で待たねばならぬ人もあり。

金兵　ハテ妹、マア、來い。

ト兩人、奧へ入る。向うより國平、旅裝束にて出て

國平　思ひがけなく夜を更かしたは、殊さら裝ふ旅裝束、詮議の場所はこの遊所。浪花にも逢うた上、何は兎もあれ、一宿を賴んで見ん……イヤ、ちよつと賴みませう。誰れも居らぬか。賴みたい〳〵。

浪花　アイ〳〵、仲居衆、誰れも居てぢやないかいなア。

ト出て來り

ヤア、お前は。

國平　オヽ、其方は、お京ではないか。

浪花　よう尋ねて下さんしたなア。

國平　今さら、改めて云うではないが、御主人右門さまは非業の御最期。小雪さまのお行くへも尋ねたし。また、富士太郎さまは、敵淺間がこの西國筋に行たと聞き、お出でなされしとの事。若旦那様に廻り逢ひ、共々敵の行

くへを尋ね、本望遂げんと遍歴いたすうち、先達てより
この地に留まり、旅の出立ちも敵をば探らん爲。

浪花　サア、わたしもお前に話しを聞き、心に少しも油斷
せず、廓は諸人の入込む所なれば。

ト金兵衛、出かけ、樣子を聞き居て

金兵　さうぢや。キツと詮議をしたがよい。

國平　さう云ふ、其方は。

浪花　金兵衛さん、

國平　最前からの樣子をば。

金兵　とつくり聞きやんした。

國平　それ聞かれたら。

ト切りかけるを

金兵　ハテ、こなさんに切られるやうな者なら、聞いたと
云うて出はせぬわいの……最前から聞けば、外ならぬ……
……イヤ、外ならぬ抱への太夫、近附きのこなさん、いま
云はんした事を引受けて、世話でもせうと思うて。

國平　すりや、其方が賴まれて。

金兵　如何にも。この金兵衛が引受けたりや、落ち付いて
逗留して、委細の樣子窺はんせ。

國平　すりや、身共を。

金兵　この浪花が揚げの客。

浪花　そんなら、わたしの客にして

金兵　いつまでなりと、居續けさんせ。

國平　重ね〴〵の志し。

浪花　そんなら、お客さん。

國平　然らば、亭主。

金兵　早う、奥へ。

ト兩人、奥へ入る。

あの奴も、富士太郎さまの由緣の者。吉備の中山にてお
別れ申してより、富士太郎さまは、どこにどうしてござ
るやら。折角小雪さまに巡り逢うたれど、富士太郎さま
と一つにあらば、今でも敵に出合うても……ハテ、どう
したら、よからうな。

ト奥にて笛の合ひ方。

あの笛の音は奥二階、合點のゆかぬ、あの調べ……そ
れ、天王寺の樂はよく弔ひ、調べ合せて、六時堂の前な
る鐘の聲、應鍾調の最中なる、この一調子を以て、いづ
れの聲をも調ぶと云ふ。正しくあの笛の音は……ハテナ
ア。

トよろしく思ひ入れあつて、返し。

造り物、二間の屋體、二階の體。見附け金襖、附け屋根にて、これに玉簾を掛け。東西落ち間、塀の上ばかり、植込みの上ばかり見せ、すべて二階座敷の模様。淺間、前に行燈を置き、狀見てゐる。禿、坐り居る。琴唄にて道具納まる。

淺間　あの琴の唱歌と云ひ、この文と云ひ、ムウ……一昨日阿彌陀寺にて歌を送りし女。今夜忍ぶとこの文體。ナニ、寄るべ定めぬと書きしは……ムウ、この文の主は、浪路と云ふか。

禿　ハイ、お返事なされて下さりませ。

淺間　ムウ。

ト右の狀を笛に入れ

斯うするが直ぐに返事……この笛を浪路どのへ、吹かれて見られよと、渡してくれ。

禿　ハイヽ。

ト奥へ入る。

淺間　この間、當所阿彌陀寺へ參詣の折柄、向うより來る浮かれ女、別れし時のあでやかさ。跡にて名を尋ねしところ、赤間が關の千歳屋の、浪路と聞きしゆゑ、直ぐさま爰に來つて呼び寄せしところ、使ひせし者、浪江と云へる傾城を伴ひ來たりしゆゑ、違ひしと云へども、たとへ名は違うたりとも、來ること緣深しと、餘儀なき頼みもだし難く、たゞ一夜と契りしが、また昨夜彼れより忍び來り、今宵こそと思ひしを、彼れが支へて浪路に逢はさず、物思ひのつれ〴〵に、最前調べし笛の音に、組を合はして恨みを添へ、持たせし文は兼ねての約束。斯程までに思ひ居るその仲を、逢ふに逢はれず、今宵で三夜さ……ありやはや二更。最早、月の出……月花とは、よい詠めぢやなア。

ト浪路、忍び來る。

浪路どのか。

浪路　アイ、逢ひたうござりましたわいなア。

淺間　オヽ、逢ひたいとは、我れも同じ事。この間、阿彌陀寺にて

浪路　云ひ寄る緣もなきまゝに

淺間　もつるゝ袖の振り合はせ

浪路　鞘に掛かりしお咎めも

淺間　女と思ひ、行き過ぎしに

浪路　ヂツと留めし、その時に

淺間　誰が知らぬ、俤山の春霞

浪路　引くかひあらば、ほだしともなれ。
淺間　サア、その歌に引かされて、直さまその夜來れど
も、浪江、浪路の間違ひにて。
浪路　それとは知らず待ち暮らせしに、聞えぬは浪江さん、
如何に間違ひなればとて、人のお客を寢取るとは、あん
まり胴慾なと思うても、恩のある姉女郎さん、どうも仕
方もなく、泣いてばつかり居るうちに、最前あなたの笛
の音にそれと知り、今宵忍ぶと書いたれば、文を其まゝ
笛に入れ、人を呼ぶ子の御返事、やう／＼忍んで參りま
したわいなア。
淺間　賢くも悟りたり。我れも思ひに堪え兼ねて、竹にて
それと云はせし時、琴に合して持たせし文の、返事書く
間も浪江を恐れ、時に取つての譬への返事。
浪路　思ひに思ふその仲を
淺間　仇な緣に隔てられ
浪路　お側へ來る事さへならず
淺間　竹と
浪路　琴とに
淺間　語り合ひ
浪路　忍ばにやならぬと云ふ事も

淺間　これも因果の
兩人　緣ぢやなア。
　ト浪江、聞き居て
浪江　浪路さん。
淺間　ヤア、其方は。
浪路　浪江さん。
浪江　エヽ、お前はなア。ほんに突出しのその時より、わ
しは姉女郎と名が附けば、何かに付けて引廻し、立居振
舞ひ八文字、口舌手管も敎へ込み、やうやう一人捌きも
出來、マア嬉しやと喜ぶのも、妹と思ふゆゑ。それに殿
御を寢取るとは、ほんに恩知らずぢやわいなア。
浪路　サア、その恩は忘れねど。
浪江　イエ／＼、畜生に交す詞はない。
浪路　云ふまいと思へども、それ程に思うて下さんすお前
が、何ゆゑ妹女郎の客を取らしやんした。
浪江　なんでわたしが、こなさんの客を取つた。
浪路　はしたなう云ふも恥かしいが、抑もこの廓では、浪
江、浪路の全盛、そのマアお前に似合ひませぬ、浪路と
云うてござんしたを、ようマアお前は逢はしやんしたな
ア。

浪江　たとへ名ざしは間違うても、先に逢うたらわしが客。それを忍んで逢はうとは、ほんに間男同然。外への見せしめ、以後の爲。

ト立ちかゝる。

淺間　浪江、何をする。

浪江　徒ら者に姉女郎が躾。

淺間　イヤ、折檻に及ばぬ。惡性するが客の習ひ。

浪江　それでも。

淺間　ハテ、彼れに科はない……其方と寢ればよいではないか。

トおつる出る。

つる　何事ぢやぞいなう。

浪江　浪路さんが、わたしのお客を取らしやんしたわいなア。

浪路　イエ〳〵、これは。

つる　イヤ、吐かすな。おのれなりや、その筈ぢや。最前もおのれゆゑに、痛い目に合うて居る。これから又、おのれを責めて、最前の腹癒せ。

淺間　コリヤ、花車、これは浪路の罪にあらず、みな身共が。

つる　イエ〳〵、彼奴が罪に違ひない。達てお前ぢやと仰しやれば、廓の法で、大門口にて二人ともに、晒さにやならぬ。構うてやらずと、サア、彼方へお出でなさりませ。

浪江　サア、山さん、ござんせえ。

つる　女郎、覺えて居れ、人の男を……イヤサ、人の客を取る科は、外の女郎への見せしめ。明日はこの廓の法の成敗、大門口で眞裸にして、晒さにやならぬ。

淺間　最前合はせし相夫戀の、心をとくと思ひ出し、必らずともに……浪江、おぢや。

つる　サア、ござんせ。

ト浪江、淺間、おつる、皆々入る。

浪路　ハア、。

と唄になる

〽憂き中の習ひと知らば斯くばかり

浪江さん、胴慾でござんすわいなア。人のお客を取りながら、理を非に枉げての姉女郎、如何に恩ある仲ぢやとて、恥かゝしたその上に、見せ付けて連れて行くとは、エヽ、お前は胴慾ぢやわいなア。

〽花の夕の契りとなるも、初めの情、今の仇。

又おつるさまの胴慾な。この上にどのやうな、酷い目に合はうやら。それにいとひはなけれども、大門口で晒されて、なんと生きて居られうぞいなア……いとしいは浪崎さん、わし一人を杖柱と思うて居やしやんすのに、死んだ跡では泣かしやんせう。一筆殘すが跡での云ひ譯、合點がいたら、せめて水なと手向けて下さんせう。とは云ひながら、これ程まで思ひ思はれ、一夜さの契りも結ばず死するとは、どうした因果の縁ぢやぞいなア。今夜忍んで來なんだら、この悲しみはあるまいに。

〽いつそ逢はねば、斯うした事もほんにあるまい、よしなや、つらや。

その上、金兵衞さまの心遣ひ、忘れは置きませぬ。情次手にこの文を、わたしが親里へ屆けて下さんせ。

〽仇に暮らせし月日の程も、云はて思ひの涙の雨に、いど〻朽ちなん四つの袖。

ト此うち書置を書いて

さうぢや。

ト死なうとする。淺間出て、留めて

淺間　コレ待つた。死ぬるに及ばぬ。

浪路　それぢやと云うて。

淺間　コレ。

ト懐劍をもぎとる。

浪路　申し。

ト物の云へぬこなし。淺間、胸にあると云ふこなし、双方途端にて、返し。

造り物、二間の二重。見附け塗り骨障子。橋がゝり二階。この下、竹の垣。臆病口、落ち間、筋違ひに切り戸口、植込みなどあり、金兵衞、狀を讀み居る合ひ方にて、道具納まる。

金兵　いま二階より落ち散つたこの狀。こりや浪路が手跡今宵忍ぶと書きし文、また最前の笛の音も二階、正しく彼奴こそ。ムウ、こりやちつと手懸りに取り付いて、面白うなつて來たわい。

ト國平、出で

國平　すりや、詮議の綱に取り付かれしよな。

金兵　こなたは最前のお侍ひ。某も、富士太郎さまには由緒ある者。心を合し、互ひに詮議。

國平　心得てござる。

金兵　あの人音……この内へ暫らく隱れて、何かの事を。

國平　すりや、この内へ。
金兵　窮屈ながら、暫しの間。
ト長持へ入る。切り戸より、長蔵、八、傳平、上總之助、貫藏、浪崎、出て來て
上總　こりや、私しをなんとなされます。
傳平　ヤア、うぬは今川上總之助に相違ない。また、此方の浪崎は、府中の傾城乙女太夫。兩人とも馬鹿となつて入込みしは、うぬらを詮議の爲。平馬どのへ連れて行く
ソレ、貫藏どの。
貫藏　心得てござる。
上總　イエ〳〵、そんな者ぢやござりませぬ。世に似た者はたんとあるもの。後で後悔なされますな。
傳平　慮外の過言。ソレ、貫藏どの。
ト兩人、切つてかゝり、立廻りのうち、傳平、浪崎を捕へ、刀を差しつけ
手向ひ致さば、此奴を芋刺し。
上總　コレ、早まるまいぞ。
貫藏　うぬは乙女、吐かせ。
浪崎　知らぬわいなア。
傳平　エ丶、しぶとい。

ト淺間、出て兩人を見事に投げる。
ヤア、其方は。
淺間　上總之助さま、この場にあつては、危ない〳〵。一時も早く、落ち延びさつしやれ。
上總　それでも一人は。
淺間　拙者は後より追ひ付けん。早う〳〵。
上總　サア〳〵、行くわいの。
ト花道へ行きかける。
浪崎　そんならわたしも。
上總　一緒に行くのか。
八長　さうはさゝぬ。
ト切つてかゝる。淺間、見事に投げ
淺間　旅は道連れ。
上總　して、道筋は。
淺間　若松より、へさきの渡しへ。
上總　重ね〳〵の志し、太夫、おぢや。
ト上總之助、浪崎、向うへ走り入る。
傳貫　ヤア、淺間どの。
皆々　何ゆゑ、我れ〳〵を。
長八　うぬ。

ト切つてかゝる。

淺間　同士打ちするか。斯く致せしは、我が計略。

兩人　ナニ、計略とは。

淺間　平馬どのゝ心を掛けし傾城乙女、上總之助へ實心に見せ、この所を落せしは、渡し場にて平馬どのへ、引立てさせん爲。傳平どの、貫藏どのは、後ぼつかけて。

長八　して、我れ〳〵は。

淺間　この家の亭主金兵衞と云ふ奴。正しく富士の由緒の者。コレ。

ト囁く。

兩人　心得ました。

ト兩人、走り入る。

傳平　然らば拙者は。

貫藏　へさきの渡しへ。

淺間　一時も早く。

傳平　貫藏どの、ござれ。

ト兩人、向うへ入る。

淺間　これでよし〳〵。

ト長持の中の國平と顏見合せ、國平、ピッシャリ蓋をする。淺間、長持の側へ行かうとする。金兵衞、出て

金兵　こりや、なんとなされます。

淺間　イヤ、あの長持を。

金兵　イヤ、太夫の夜具長持、どんな手道具が入れてあらうやら。

淺間　サア、そこを見たいが客の癖。

金兵　ハテ、見せともないが、太夫の樂屋……ハテ、埒もない物。

淺間　すりや、どうあつても。

金兵　見せます事は、マアなりませぬ。

淺間　身請けせう。

金兵　なんと。

淺間　あの長持の主は太夫、身請けいたさば、身が所持の手道具。

金兵　あの長持は、浪花が夜具なれば、太夫ととつくり話した上。

淺間　して、その返事は。

金兵　古いやつぢやが、夜中の鐘。

淺間　して、その價は。

金兵　富士が秘藏の樂書の一卷。

淺間　ヤ、なんと。

金兵　最前聞きし笛の呂律。
淺間　すりやアノ、それを。
金兵　正しく淺間……イヤサ、淺ましい廓の者、よい物欲しいと思ふが病。
淺間　イカサマ、身請けさへ濟まば、與へてくれう。
金兵　殊なう手筈は、横笛の
淺間　なるか
金兵　ならぬは夜半の鐘まで。
淺間　奥で返事を、待つて居るぞよ。
ト双方、心意氣あつて、淺間、奥へ入る。
金兵　正しく彼奴は。ムウ。
ト長持より國平、出る。
國平　さてこそ淺間。
金兵　コリヤ、血相變へて、どこへ行くのぢや。
國平　ハテ知れた事。奥へ踏ん込み、只一討ち。
金兵　こなたが討つて、富士太郎さまは誰れを討つぞ。
國平　ヤ。
金兵　彼れが所持する樂書の一巻。破却したらなんとする。わざと詞を荒立てぬは、事なく一巻取り受くる爲。
國平　して又、こなたの心底は。

金兵　これより奥へ參り、小雪さまにお目にかゝり、この事、詳しうお話し申す。
國平　サア、その小雪さまは、淺間と忍び合ひ。
金兵　なんと。
國平　奥にて浪花の話しには、浪江、浪路の爭ひのありし元は笛の音。
金兵　すりや、推量に違ひなく。あの淺間と。
國平　それぢやによつて。
金兵　それなれば、猶ならぬ。もし荒立てなば、小雪さまのお身が危ない。又その樣子なら、小雪さまを連れ、立退くは必定。こなたは道にて。
國平　そんなら先へ。
金兵　我れも後より。片時も早う。
國平　合點ぢや。
ト向うへ入る。
金兵　思ひもよらぬ、小雪さまと左衛門が……エ、、云はざりしは我が誤り、なんにもせよ。
ト奥へ行かうとする。蛇の目の八、紙子の長蔵、兩人「うぬ」とかゝる。立廻つて、兩人を投げ
さうぢや。

ト身拵らへする見得よろしく。返し。

右の道具、上手へ引き、正面に二階を見せ、竹垣、見越しの松、板垣、一面に見せ、下手、奥深う浪幕舞臺先へ、浪の打寄せるを見せる。踊り三味線にて、道具納まる。

ト爰に淺間、浪江を引つけ、刀振り上げてゐる。

浪江　そんなら、とうでも殺すのぢやの。エヽ、胴慾ぢやわいなア。

ト淺間、物云はず殺す。浪路、出る。

淺間　浪路か。

浪路　山さん。

ト兩人、模樣取りよろしくあつて、兩人トヾ塀より下りる。金兵衛、窺ひ出て「ソレ」と淺間を留める事あつて。だんまりやうの面白き立廻りあつて、トヾ兩人向うへ入る。金兵衛、透かし見て、キッと見込む途端よろしく　幕。

大詰

室積平馬屋敷の場
鵯胸峠隱れ家の場
室の津仇討の場

役名――富士太郎知一。同妻、櫻子。一子、叡太郎。兵助妻、信德尼。奴、岡平。女房、お京。室積平馬。母、卯原。淺間女房、お浪實ハ小雪。靈龜の精。淺間左衛門照行。

造り物、二重。上手、障子屋體。下手、屋敷塀、切り戸。眞中に襖。爰に喜兵衛、香具屋の形、奴四人取卷き居る。白囃子、バタ〳〵にて幕明く、

奴四　動くな。

喜兵　こりや。なんとなされます。

奴一　なんとするとは、この庭を、へちまひ歩く素町人め

奴二　何用あつて、爰へ參つた。

皆々　詮議するのだ。キリ〳〵吐かせ。

喜兵　成る程、私しが大きな麁相。イヤモウ、結構なお座敷ゆゑ、この先を見たい〳〵と、お庭とも存せず、これへ參りました。何事も、お免し下さりませ。

奴一　イヤ、さうは拔けさせぬ。

奴二　なんでも曲者。

奴三　先づ、お頭へ。

四人　さうだ……お頭〳〵。

國平　エヽ、面白う夢を見て居るに、あつたら所をやかましい。

ト奧より國平出てくる。

奴一　イヤ、奧を目掛ける曲者ゆゑ

四人　詮議せうと思うて。

國平　ハテ、待てやい。見りやア、高が町人。

喜兵　左樣でござります。お臺所まで參る小間物屋、お勝手を存じませず、ツイうか〱と、この奧庭まで。

國平　お臺所まで來ると云へば、お出入りも同然。表御門からお玄關先、麁相のないやう敎へてやれ。その代り、おらが部屋に酒があるから、行つて呑めサ。

奴一　そいつは有り難い。案内すべい。

奴二　町人、おい等と一緖に。

四人　サア、斯う來やれ。

ト奴四人先に、喜兵衞、上手へ入る。

國平　ハテ、現金な奴等。シタガ、町人の身を以て、奧の樣子を窺ふは、慥かに味方。エヽ、何やかや話し合ひだらけ。なんとしたものであらう。

呼び　お客人のお歸り。

國平　ナニ、客人のお歸り、ムウ…ドリヤ、部屋へ行て休まうか。

ト下手へ入る。向うより門人四人、乘り物を舁き出る奧より平馬、腰元、奧より出て

平馬　これはお客人には、早いお歸り。乘り物のまゝ、奧座敷へ。ソレ、腰元、御案內。

腰元　サア、お客人樣。

同　御案內いたしませう。

ト乘り物を門弟四人、手舁きにして、皆々奧へ入る。引き違へて門弟四人出て

平馬　各々にも草臥れたであらう。打寛ろいで話し召されい。

門一　先づ以て、先生の儀に付き、我れ〱までも御厄介。

門二　その上、先生の男が好いから、兎角女が惚れ、騷々しい事でござる。

門三　赤松公のお指圖を以て、淺間どのに附けられたる助太刀の我れ〱。

門四　ほのかに承れば、富士太郞、當地へ入込みしとやら。

平馬　その儀は少しも氣遣ひ召さるな。富士太郞、當地へ入込めば、某、支配の役目でござれば、仕樣はさまざ

ま。また鳩胸峠には、淺間どのゝ母卯原、高燈籠を吊り置き、富士太郎を始め、餘類の者ども來るを合ひ圖に、切つて落せば、走せ參つて討ち殺す兼ねての手筈。

門一　天晴れの御計略。それ聞いて我れ〳〵も安堵。

門二　太郎さへ消してしまへば、舞樂の達人淺間どの、只お一人、直に主人の執成しにて、足利への歸參の手積り

門三　さうなつたれば、我れ〳〵も

門四　その尾に付いて立身出世。

平馬　高燈籠の落つるを合ひ圖に

四人　惣がゝりして富士太郎を。

ト國平、切り戸より立ち聞いて居て、皆々と顏見合せちやつと隱れる。

平馬　いづれも、今のを御覽じたか。

四人　如何にも、壁に耳。

平馬　切り戸の物云ふ今の時節。

四人　いつそ我れ〳〵だ。

平馬　アイヤ、お構ひなくとも、マア奧へ。

四人　然らば、平馬どの。

平馬　先づ、ござりませ。

ト平馬、侍ひ四人、奧へ入る。切り戸より國平、上手障子よりお京、出る。

お京　こちの人、國平どの。

國平　女房お京、して、なんぞ心當りは。

お京　サイナア、合點のゆかぬ奧の客人。

國平　サア、某もさう思ふゆゑ、立ち聞けば、敵左衛門當地に入込みある樣子。

お京　その上、鳩胸峠に、高燈籠の合ひ圖の樣子。

國平　直ぐにこれより、鳩胸峠の實否を糺して、富士太郎さまへ。

お京　そんなら、早う。

國平　合點だや。

ト行かうとする。家來大勢、出て

家來　動くな。

トお京、國平、大勢を相手に立廻りあつて、トゞ皆々を上手へ追ひ込む。これにて山幕を冠せ、山颪にてツナギ、道具出來次第、山幕を切つて落す。

造り物、松の立ち樹、同じく吊り枝。うしろ山の遠見。山颪、ドン〳〵にて道具納まる。

ト上手より國平、お京、大勢を相手に立廻りながら出

て來り、立廻りあつて、東西に別れて追ひ込む。薄ド
ロドロになる、信德尼、走り出る。後より狼、叡太
郎を追うて出る。立廻りあつて、信德尼・珠數にて拜
む。狼、恐れ、駈けて入る。信德尼、叡太郎を抱き
走り入る。國平、大勢を相手に立廻りながら出て來り、
立廻り見得よろしく留まる。返し。

造り物、一面に岩窟。正面、納戸。上手、折り廻し
障子屋體。丸木の本緣付き。高二重、枝折り門、こ
の側に高燈籠。後に火を入れ、切り落す仕掛けあり、
在郷唄、コイヤイにて道具納まる。

〽鳩胸の峠に怪し一構へ、柴の扉はさながらに、鬼の住
居と云ひつべし。折しも戻る母卯原。

ト向うより卯原、出て來り

卯原　定めて嫁が待つて居やう……いま戻つたぞよ。

ト奥より小雪、出て

小雪　オヽ、母さん、お早いお歸り。この暑さのおいとひ
もなう、どこへお出でなされました。

卯原　それ詮議して、其方、どうする。云ひ付けて置いた
袷の縫ひ直し、定めて出來たであらう。

小雪　サア、縫ひ直して置かうと存じましたが、何やかや
隙が入つて。

卯原　それ見や。我がすべき事さへ出來ぬ甲斐性なし。ふ
みづを使ふより、針仕事の稽古でもさつしやれ。

小雪　わたしも左やう存じまして、稽古も致しますれど、
生れ付いての不器用者、見てござつては、猶よう縫はぬ
でござります。

卯原　そんなら、奥へ行て休んでやらう。針仕事もキリキ
リ片付け、足撫りに來て、茶の下も焚き付け、日が暮れ
たら、お御燈火、勝手の灯から高燈籠を忘れぬやう。ア
ア、世話やの〳〵。南無阿彌陀佛。

〽念佛數ほど云ひ付けて、納戸へこそは入りにける、小
雪は一人あたふたと、習はぬ業も生れ付き、器用の針手
縫ひくゝり、昔床しき表にも、佛果の爲の尼姿、泣き入
る幼な子透かしつゝ、馴れし柴の戸押し開き、入る間ひ
やいに跡ぴつしやり、こなたも悔り不審の小雪。

ト信德尼、叡太郎を抱きて、切り戸の中へ入る。

小雪　あなたは尼御の修行者さん。見れば幼な子を抱きか
かへ、お顏の色も違うてあるは、どうした譯でござんす
え。

信徳　ようお尋ね下さりました。毎度お門へ參り、お志しを受け申す、信徳尼と申す者。今日、城山を通りかゝれば、一つの狼、この子を咬へ、まつしぐらに行く先に立ちふさがりまする。驚ろいて念珠を投げつけ、佛の經を唱へましたら、諸佛の功力にや、幼な子捨てゝ狼は逃げ、この子は一つの疵付かず、助くる事は助けても又も後より追ひ駈け來るかと、嶮しき道をこけつ轉びつイヤモウ、ひやいな事でござりました。

小雪　お話しを聞いてさへ、身に冷汗。さうして紅染の頭巾をきせ、顏に出ものゝ四つ五つ、疱瘡と申すものではござりませぬかえ。

信徳　ほんに、心急くまゝ氣も付かず、可哀や誰れ人の子なるか。定めて親も泣き愁歎。

小雪　狂人のやうになつて居やしやんせう。所書きのやうな物はあるまいかいなア。

信徳　臍の緒が入つてござります。羽衣明神と住吉のお札もあり、爰に何やら書いた物が。

　ト見せる。小雪取つて

小雪　なんぢや、「明德元年申八月、戌の日戌の時誕生、攝州淺澤の住人、富士太郎知一が悴叡太郎」……富士太郎が悴とは。

　ト恟りする。

信徳　淺澤とは攝州住吉、如何ほど猛き獸物でも、翼なければ、よも爰まで。

小雪　成る程、旅のお人の途中をば、心なげに畜生めが。

信徳　さすれば、近邊の宿屋を尋ねなば、知れさうなもの、お預かり下さりませ。

小雪　お心易い事なれど、夫の留守、その上に、姑御も御寢なつてござれば、わたしが儘にはなりませぬ。御苦勞ながら、抱いてござつて下さりませ。

信徳　サア、それはさうなれど、日當もない尋ね者、日足は傾むく、山坂越えて、この子の介抱心元なう存じます。お慈悲深いお志しある姑御さまと、聞かねど知れた門の燈籠、闇を照らす一燈は、亡者の爲とは淺はかな事。夜山を越え。道に迷ふと云ふ事なき日前の功德、かゝるお家に、この子を預けるは尼の安心、是非お願ひ申し上げます。

小雪　それと云はれぬ姑御のお心。アヽ、辛氣な事でござんすわいなア。

卯原　お浪や。嫁女や。

ト奥より出る。

小雪　アイ〳〵。

卯原　ブツ〳〵と、なんでござる。

小雪　オヽ、お目が覺めましたか。常にござんす修行者さま、この子が狼に喰はるゝ所を、助けておやりなされたれど、乳のない幼な子、とても事に親達の、宿々を尋ぬるうち、この子を暫らく預かつてくれとの、お頼みでござります。

卯原　オヽ、心易い事ぢや、この婆が預かりました。

小雪　そりやお前様、眞實かえ。

卯原　ハテ、尼御になんの嘘をつきませう。尋ね出して連れてござれ。何をするも後世の爲。お茶でも參つてござりませ。

信德　ハアヽ、有り難い其お詞で、力を得ました。嫁御にもいかいお世話。

小雪　尼御さまにもいかい御苦勞。ならう事なら、お早うお出でなさりませ。

信德　心得ました。行て參りませう。

〽參りませうと云ふ聲に、虫が知らすか泣き出す幼な子聲を後に尼君は、功德の爲の燈籠と、一心念佛狼の、危難を救ひし跡ながら、後の門や虎の尾も、知らず山路を出でゝ行く。いつになく卯原はにこ〳〵。

卯原　オヽ、よい子やの。見れば疱瘡して居る樣子。なんぞ藥を服ましてやりたいものぢやなう。

小雪　子供持たねば、小兒丸一服なし。

卯原　イヤ、室へ一走り行て、買うて來てやりませう。

小雪　アヽ、滅相な。お年寄りの餘程の道。わたしが參りませう。

卯原　イヤ、其方は添へ乳が肝心。俄に出來た孫のやうな氣になつて、心がイヤ〳〵するわいなう。

小雪　左樣ならお召し物。お怪我なされて下さりますなえ

卯原　辷りこけうが、孫ゆゑなれば、いとひはござらぬ。ひよつと親達が尋ねて來ようと、わしが戻るまで渡す事はならぬぞや。

小雪　畏まりましてござります。

卯原　尼御前でも、孫のやうに世話する、藥まで買ひに行きましたと云うて、渡す事はならぬぞや。

小雪　なんのお詞を背きませう。早う戻つて下さんせえ。

卯原　オヽ、合點ぢや。

〽合點ぢやと裾引ツからげ、心の思ひ押隱し、室の津差

して急ぎ行く。物憂き秋の定めなき、空に色増す紅葉とも、身に降りかゝる獨り言。

ト卯原入る。小雪、子を抱いて思ひ入れ。

小雪 ほんにこの子が身の上も、わたしが昔の身の上も、思ひ廻せば味氣ない。誘拐かされて長の年月。便りもせねば生死も知らず、この子が守り袋に富士太郎の子とあつた、所書きは攝州淺澤。わたしが生まれは駿河、世にも似た名もあるものと、思へば寢顔の兄さんに生寫し。三代先の祖父さまは、佐吉の伶人とあれば、もしや御歸參でもなされたゆゑ、わたしが在所を尋ねて下さんすのか……ア、イヤ／＼疱瘡子までも連れ歩き、お尋ねなさるゝやうもなし。行き逢ふ事は叶はずとも、便りが聞きたい、逢ひたうござりますわいなア。

〽逢ひたいわいなとばかりにて、過ぎ越し方を思ひ出し守と共に稚子を、ひしと抱きメめ抱きメめて、袖くひしばる忍び泣き、聲に目覺ます叡太郎。

叡太 乳が呑みたい、母樣いなう。

小雪 誰がよ／＼、可哀さうに／＼……ヤ、日が暮れた ドレ、燈籠に灯を灯して見せませう。

〽火打ちかち／＼火を打つて、高燈籠に燈したて、灯影も明日は我が魂を、祀ると知らぬ佛の供養、幼な子抱いて入りにける。

ト小雪、子を抱いて上手一間へ入る。本釣り鐘。

〽既に夜も更けゆく闇の山道も、勝手知つたる我が家の内。

ト卯原出て、思ひ入れ、内へ入る。

〽奥より取出す出刃庖丁、錆び附く邪慳も白髪の卯原、蒲團をさつと幼な子の、首筋取つて鷲摑み。

ト一間より叡太郎を提げて出る。小雪、支へ出る。

卯原 ヤア、仰々しい、その面なんぢや。その餓鬼渡しや

小雪 ハイ、放しますは放しますが、母さんはマア、いつの間にやら、戻つたとも云はず、その子を取つて、どうなされます。

卯原 エヽ、どうの斯うのはない。その倅をたつた一突き

小雪 エヽ。

卯原 イヤ、呪ひおやわいなう。疱瘡のよい呪ひを聞いたゆゑ、爰へ連れてござれ。爰へ／＼。

〽庖丁持つ手に小手招き、轟く胸の早鐘に、お浪は膝もわな／＼聲。

小雪 申し、母さん 呪ひは聞えましたが、お前のお手の

出刃庖丁、それをお放しなさりませ。

卯原　サア、切れ物が惡魔の咒ひ　邪魔しやろと、これが參るが合點か。

小雪　マア、この子を一突きとは、どうした咒ひでござりますぞいなア。

卯原　咒ひの譯聞いたら、その子を此方へおこしやるか。

小雪　アイ。

卯原　オヽ、さう云やれば、もう隱さぬ。我が悴は四天王寺の樂人、淺間左衞門照行と云ふは、こなたの夫の本名でござるわいの。

小雪　エヽヽ。

卯原　オ、愕りは尤も。此やうな所に引籠るも、住吉の富士右門、同じ舞樂の遺恨に因つて討ち果した。

小雪　エヽヽ。

ト大愕り。

卯原　でも仰山な驚ろきやう。今この播州に隱れ住むを、右門が悴富士太郎、父の敵を討たんと、當國へ入込みしと聞いて、心も心ならざる折、屈强のこの人質、情らしう預かり、早速淺間に物語れば、七歲に足らぬ疱瘡の出揃ひまでの子、血汐を取つて秘藥に合せ服む時は、忽ち髮の毛白く、相好變れば、仕官の有りつき心のまゝ、また二葉にて根を斷てば、斧を用ゆる憂ひなし。急ぎ血汐を取つてくれよと聞いて嬉しさ。立歸れど、こなたの前を計りかね、最前からの猶豫。サア、夫が出世の血祭り、ともぐに手傳うてくりや。それがならずば年寄り役、芋刺し料理、サアぐ、どうぢや。

〽始終の樣子聞くに付け、さてはさうかと狂亂の、お浪は悲しさ恐ろしさを、泣きも泣かれぬ甥の大難、悟られまじと喰ひしばる、顏を卯原は差覗き。

何が悲しうて泣くぞ。夫の事は思はず、この餓鬼が可愛いかいやい。

小雪　イエぐ、左樣ではござりませぬ。

卯原　そんなら、なんで泣くぞ。

小雪　さうしたお方とは露知らず、これまで肌觸れたのが

卯原　ヤア。

小雪　サア、勿體なうござります。

卯原　大事ない。免すぐ。サア、得心が行たら、退きや

叡太　アレ、怖いわいなう。

小雪　ア、この子がおびえます。今宵一夜さ、抱かして寢さして下さりませ。

卯原　ならぬわいなう。
小雪　すりや、どのやうに申しましても。
卯原　世の中に我が子ほど、可愛い者はござらぬ。
小雪　エヽ、お前はなア。
卯原　その面、なんぢや。姑なら、親ぢやぞよ。親を睨んだら、比良目になるぞよ。邪魔せずと、そこ退け。
小雪　マア〳〵、待つて下さんせいなア。
卯原　エヽ、退けと云ふに。
〽肩口取つて引きつくる。振り亂したるさらば髮、三途の川や八寒の、地獄も斯くやと恐ろしゝ。
トよろしく立廻つて、卯原、小雪を當て、一間へ押入れ、叡太郎を引きつけ、出刃を振りあげ、キッと見得。
〽斯くとも知らず富士太郎・櫻子もろとも來かゝる門先
それと見るより手練の一打ち。
ト此うち向うより富士太郎、櫻子、高燈籠を目當にせし心にて來かゝり、門口にて中の樣子を見て、手裏劍打つ。卯原の腕に當り、出刃を落す。兩人、飛び入つて叡太郎を抱き上げる。卯原切つてかゝる。よろしく立廻り。
〽脚骨打つて倒れしは、心地よかりし有り樣なり。

ト卯原、當てられて倒れる。
叡太　ヤア、母樣か。
櫻子　叡太郎、ようマア、無事で居てたもつた。
太郎　老母は正しく淺間が親。この所に居るからは、すりや、この家こそ淺間の隱れ家。日差すは一間、ぬかるな櫻子。
櫻子　こちの人、早う〳〵。
太郎　左衞門はいづくにある。名乘り合うて、尋常に勝負せよ。
〽駈け行く向うへ突き出す切尖、透かさず摑んで、引き戻し、突ッ込む拔き身にたまぎる聲、立ち蹴に蹴放す隔ての障子。
ト一間より銛を突き出す。其手許へ引いて富士太郎、直ぐに白刃を突ッ込む。小雪、手負ひになつて出て
小雪　なう珍らしや兄樣、妹の小雪でござんすわいなア。
太郎　誠に、先年誘拐かされし小雪。
櫻子　常々お話しのあつた、お妹樣かいなア。ひよんな事して下さんしたなア。
〽介抱おろか淚ぐむ、富士太郎、眉に皺寄せ。
太郎　その妹が今の穗先。我れと知つてか、また知らずか

様子はなんと。

小雪　さればいなア。五四郎に欺むかれて、この長門の國へ賣り渡され、父母の事、お前の事、泣いて明かさぬ夜すがもなく、夜毎に替る仇枕。便り求めて文をばと、筆取る甲斐も親方の、責め折檻に隔てられ、浪路と呼ばれし全盛も、いま山中の隱れ家で、不思議に逢ひし叡太郎が、臍の緒にて素性を知り、兩家の成行き、詳しい事は老母のお話し、聞いて生きた心もなく、お前の刃にかゝれば本望、惡人でも我が夫と、呼べば操も捨てがたく、貞女と孝に一つの命、死するを不便と思し召し、逢ふは始めの兄嫁御、兄さんへ、お執成し頼みます。

〽拜む手に涙の玉、櫻子は正體なく

櫻子　ア、申し、勿體ない。わたしも同じ人買ひに、危ふき難儀を右門さまが、お助けなされて下されました、御恩さへ送る間も、情ない御最期を、夫は敵の跡を追ひ、旅立ち給ふ便り無さ。母樣も世を見限つての御最期。八重梅さまにお暇願ひ、夫の跡をと、この子を連れて憂き旅路、重なる難儀に疱瘡の、悲しき中へ平馬が追手、支へるうちに叡太郎の行くへ知れず、さま〲と尋ねるうち、盡きせぬ縁の我が夫に、行逢ふ嬉しさ悲しさも、夫婦一緒に子の在所、無事を喜ぶ甲斐もなく、名乘り合ふさへろく〲に、成らぬはどうした薄い縁、必らず死んで下さんすなえ。

太郎　某とても、殘念さは如何ばかり。今日の參會、敵ぞと切り込みしは、淺間にあらで血筋の妹。その健氣さ、この世にて、兩親のお目にかゝるならば、さぞお喜びなされんに。

小雪　父の仇、共にと云ふに云はれぬ因果。知らぬ事とは云ひながら、現在敵を我が夫と、交す枕の一夜妻。思ひ廻せば恐ろしい、この世の夢は覺むれども、未來は罰で地獄に行き、鬼の責苦を受けますわいなア。

〽取亂したるいぢらしさ。

太郎　父と云ひ、母と云ひ、其方も同じ刃の最期。

櫻子　東西分かぬこの子まで、いかい苦勞をかけますわいなア。

〽可哀の者やと三人が、しがらむ涙一時に、血汐あやなすから紅ゐ、浪ほとばしる如くなり。

ト三人愁ひの思ひ入れ。この時、卯原氣附き、門口へ出て高燈籠を切つて落す。法螺の音。

卯原　叡太郎を餌にしたも、おのれ等釣らん謀り事。兼ね

での合ひ圖、燈籠を切つて落すが最後、平馬どのが助太刀の大勢を連れ、今この所へ。追ツ付け命の根腐り時。

太郎　小癪な一言。何にもせよ。

〽支へる老母を突き退け刎ねのけ、外面に立てる一本の松、これ幸ひと攀ぢ登り、四方をキツと打詠め

ムウ、さてこそ〱。室の沖まで甍を欺むく松明、提灯。某一人討たんとて、卑怯未練の淺間左衞門。たとへ幾萬騎來るとも、何程の事あらん。イデ切り散らして、本望遂げん。

〽大地へヒラリと飛び下るれば

小雪　コレ〱兄さん、穽し穴やら吊り石やら、爰で防ぐは危ない〱。この山手の小道から、左へ取つて行く時は、海邊の拔け道。早うこの場を。

太郎　おやと云うて、敵の來るを見捨てゝは。

櫻子　でも、爰では足場も惡しく、お妹御のお心遣ひ。

太郎　そんなら、この場は。

小雪　早う〱。

卯原　ヤア、動かしてよいものか。

太郎　ヤア、うぬから先へ、覺悟。

小雪　コレ、わたしが爲には大事の姑、止め刺さぬが妹へ追善。

櫻子　爰構はずと、こちの人。

太郎　行け……妹、去らば。

小雪　おさらば。

〽後に見捨てゝ急ぎ行く。

ト富士太郎、櫻子、叡太郎を連れて入る。

卯原　ヤア、富士太郎を逃がしたな。

小雪　それを云うて下さんすな。お慈悲でござりますわいなア。

〽しや面倒なと強氣の卯原、立ち上がれども急所の痛手こなたも今が四苦八苦、既に斯うよと後の方。

淺間　母人、お待ちなされい。

〽一間の內より立ち出づる、淺間が出立ち、伶人の裝束烏兜。

ト淺間、伶人の姿にて出る。

卯原　其方のこの出立ちは。

淺間　今日只今、富士太郎をぶち放し、直ちに赤松公へ仕ゆる所存。

卯原　その富士太郎はたつた今、女郎が指圖で小道から。

淺間　何もかも存じて居る。裏道より忍び來て、親子三人

討ち放すは易けれど、平馬どのを始め、助太刀の手前もあれば、この場を落し、華々しく返り討。

小雪　エ、、たつた一人を、大勢して、返り討とは、卑怯なお心。

卯原　わしが事を案じずとも、子倅も忘れぬやう。

淺間　成る程、萬事の手番ひ。

卯原　そんなら照行。

淺間　母人、おさらば。

ト淺間、思ひ入れあつて向うへ入る。

卯原　ヤレ〳〵、健氣な悴の有樣ぢやなア。

小雪　ハア、。敵の餘類、覺悟しや。

〽親子は忽ち修羅道の、切つつ切られつ、くる〳〵〳〵めぐる因果ぞ。

ト兩人、切り結び、卯原が腹へ懷劍を突き立て、抉る。これにて淺黃幕を冠せる。上下より國平、お京、出て來り

お京　國平どの。

國平　お京、して御主人は。

お京　サア、室の沖にて、淺間の爲に、お果てなされしとの事。

國平　イヤ、我れに靈夢のお告げもあれば、なんでも駈け付け：：女房、來い。

ト下手へ入る。淺黃幕を切つて落す。返し。

向う、一面の浪、二段の手摺り、浪の書割り。ドンチャン、浪の音にて、道具納まる。富士太郎、櫻子大龜に乘り、橋がゝりより出て

太郎　ヤア〳〵女房、氣を付けい。あれに見ゆるは慥かに湊、危ふき命助かりしも、靈龜の奇特。喜べ〳〵。

櫻子　龜の精が奇瑞にて、入水の難は遁れても、方角知れぬ海の面。

兩人　應護のまなじり垂れ給へ。奇妙頂禮々々々々。

ト大ドロ〳〵にて、龜の口より異人、セリ上がる。

異人　ヤア、歎き給ふな、富士太郎。我れは先年三保の浦にて、右門どのに助けられ、その恩義を報はん爲め、また叡太郎を預かりし、庵の尼こそ信德尼とて、兵助が女房なれば、氣遣ふ事なし。舞樂の一卷、平馬が首もろとも、國平夫婦が持參せん。黑崎の湊へ、只今淺間を誘き出し、華々しき敵討。我れも影身に附添ひ居れば、心易く討取るべし。見よ〳〵今こそ靈龜の案內。見よや太

郎。

ト大ドロ〳〵にて消える。これにて居所返しになる。

造り物、浪打寄せ磯馴れ松、松の吊り枝、浪の遠見すべて室の津、濱邊の體。富士太郎、櫻子、大龜に乘つたまゝ、ウツトリとして居る。浪の音にて、道具納まる。

ト兩人、心付き

太郎　嬉しや、無事に陸地に着きしも、靈龜の情。

櫻子　夢ともなく、現ともなく、今の告げ。

兩人　忝なや、有り難や。

ト大龜、海の中へ入る。上手より淺間、物に引かれる心にて、走り出て

淺間　ヤア、うぬは慥かに太郎、櫻子。

太郎　ヤア〳〵、淺間左衞門、父母、妹、家來の敵。

櫻子　わたしが爲には舅、姑、小雪さんの敵、家來の仇。

兩人　遁がれぬ所だや、覺悟々々。

淺間　ヤア〳〵、うぬは最前この沖にて、平馬どのゝ助太刀にて、討ち果せしに、こりやどうぢや。

ト異人、出て

異人　淺間左衞門、遁がれぬ所。ヤア〳〵、國平夫婦、信德尼、叙太郎を伴ひ、早く參れ。

皆々　ハアヽ。

ト國平お京、信德尼出て

國平　ヤア〳〵、其方が力と賴む、室積平馬が首討つたり。

お京　舞樂の一卷も奪ひ返した。イザ、お受取りなさりませう。

太郎　出かした〳〵。最早、遁がれぬ淺間照行。

皆々　覺悟々々。

淺間　うぬら一々撫切りぢや。覺悟。

ト兩人、立廻りあつて、トゞ淺間を切り伏せ、皆々、寄つて止めを刺す。

異人　オヽ、天晴れ〳〵。敵討相濟む上は

皆々　再び御歸參。

異人　めでたい〳〵。この場は、お立ち〳〵。

トよろしく、打出し。

解說及年表

渥美清太郎

敵討天下茶屋聚（かたきうちてんがちややむら）

林重次郎、同じく源次郎の兄弟が、家臣鵜幸右衛門の助力を得て、父玄蕃の敵、當麻三郎右衛門を討つたのは、慶長十三年三月三日の事であつた。林一家は浮田中納言秀家の家臣で、敵討の免狀を受けて出立したのだが、敵を探して數年流浪のうち、主家は關ケ原の役に會して沒落してしまつたので、兄弟は後に京都へ上つて公卿へ奉公したといふ說が傳はつてゐる。この事實は、いはゆる實錄本で、坊間に流布され、廣く喧傳されてゐたが、天明元年十二月になると、大坂の角中兩座で、この仇討を材料にした狂言を競爭で上演した。中座の方は「連歌茶屋譽文臺（れんがぢややほまれのぶんだい）」といふので、奈河七五三助（しめすけ）の作、角座の方は「大願成就殿下茶屋聚」といふので、七五三助の師、奈河龜助の作であつた。流石師匠だけの事はあつて、この競爭は見事角座の勝利に歸し、「大願成就」の方はその後も度々上演され、今日まで脚本も殘つてゐるに引かへ、「連歌茶屋」の方は初演きりで廢滅し、脚本も一向傳はつてゐない。成る程、「大願成就」の方は今日讀んでも、なか〳〵面白い、正に龜助の傑作ではあるが、この人の癖で、脚本が無暗と長い。それに天明調は矢張り天明調で、ズツと後になると、內容も當時の看客にピツタリと來なくなる。そこで文政頃に改訂されて、現時も上演される「敵討天下茶屋聚」が出來た。初世淺尾工左衛門が柴崎林左衛門と改名して、中心人物をやつたが、何分、濱芝居の事なので記錄が殘つてゐない。

大坂には、俗に濱芝居と稱される劇場が二三あつた。今日で云へば小劇場であるが、俳優も作者も、隨分と腕達者を揃へてゐたものだ。濱芝居から出世して大芝居へ出た俳優もあるし、大芝居から濱芝居へ落ちた作者もある。小劇場ではあるが、いはゆる勉強芝居、大衆本位であつただけに、通し狂言の新作で、非常に面白い見附け物も澤山上演された。改訂「天下茶屋」も、その一つであつた。だから、龜助の「大願成就」を、何といふ作者が改訂したのだか、ハツキリ解つてゐない。

濱芝居の「天下茶屋」が好評だつたので、大芝居でもこれを上演する事になつた。初めて大芝居で上演したのは、天保三年八月の中座で、名題は「繪本天下茶屋聚」であつた。この時は、濱芝居の脚本を、座附作者の奈河一泉（篤助）が更に改訂したのであつた。本卷に收容したのは、この時の脚本である。江戸なら「駄三ツ目」とも云はれる、

發端の「倫伽山の場」などといふ、珍らしい、併し不用とも思はれる幕が附いてゐるが、其まゝに收容して置いた。現時上演される「天下茶屋」は、この脚本なのである。

この狂言には、背景に大坂城の葛藤を使つてある。併し德川期である。德川に關係の深い大坂城の人達の名を正直に使つたら最後、忽ち上演禁止である。そこで前例に依つて、「近江源氏」の世界を假用してある。片岡造酒頭は片桐且元、大江入道は大野道犬、三浦之助は木村重成、の當込みである事は勿論だ。

改訂者、奈河篤助の小傳を記して置かう。彼れは元、泉州で一向宗の僧侶であつたが、若くして還俗し、大坂へ來て奈河七五三助の門弟になつた。初めは十九助といひ、後に篤助と改めたが、寛政の頃から作者として認められ、後には多く近松德三と組んで、合作ばかりやつてゐた。文化七年、四十七歲の折、三世歌右衛門に招かれて江戸の中村座へ下り、二三年居据つて相當に數も作つた。同十年には大坂に歸り、十一年にはまた江戸へ戻り、十二年には又大坂といふ風に席溫まらず、十三年には大坂で二世奈河龜助を繼ぎ、十四年には江戸の桐座へ下り、文政二年には舊名の篤助で大坂に現はれ、翌三年には又江戸へ來てゐる。作者としては珍らしく東西を繁々往復してゐる。彼れは狷介不屈の性格であつたから、それが原因で斯うまで芝居が變つたのであらう。彼れは別に一洗とか一洗堂とか云つてゐた。これは三世歌右衛門から初世の俳名を貰つたのであつたが、後にはこの歌右衛門とも喧嘩して一洗の名を返し、濱芝居へ入つて金鶴堂一泉と稱したが、これも長續きせず、晩年は東山の眞葛ヶ原へ茶見世を開き、一服一泉と改名し、天保十三年二月三日、七十九歲で歿した。

彼れは脚本の朗讀が巧みで、晩年は京都で脚本の披講をやつたこと、達筆で當意即妙の才があつたこと、頭髮が赭かつたので猩々の篤助と綽名されてゐた事などが逸話として殘つてゐる。

彼れの作は、東西を繁く往復した所爲か、江戸の作には上方狂言の臭味あり、上方の作には江戸狂言の味が勝つてゐるが、大體に素直なサラリとした書きぶりで、京坂の作者としては嫌味のないのが特徵である。

左に、この狂言の重なる興行年表を揭げて置く。

○天保三年八月、中の芝居「繪本殿下茶屋聚」

彌助、萬助（坂東壽太郎）岸の頭、元右衛門（淺尾工左衛門）染の井（岩井紫若）伊織、幸右衛門（嵐璃寛）造酒頭、操、久七（市川助十郎）おとく（中山南枝）大藏、牛藏（坂東國五郎）お吉（嵐德三郎）腕助、妙珍（中村友三）三浦之助（嵐吉三郎）源次郎（中山みよし）秀秋、庄三郎（坂東彦三郎）三郎右衛門（淺尾與六）お時（澤村國太郎）

玄蕃、刑部（片岡仁左衞門）

○天保六年七月、中村座「松主殿下茶屋聚」
玄蕃、伊織、幸右衞門（坂東彦三郎）彌助、左門頭（市川高麗藏）岸の頭、元右衞門（大谷友右衞門）源次郎（岩井粂太郎）大藏、鈴太夫（中島勘左衞門）操、おとく（小佐川常世）葉末（松本にしき）刑部、庄三郎（中村芝十郎）萬助（坂東三津五郎）染の井、お時（中山みよし）腕助（中村千代飛助）伊三郎、久七（市川麗五郎）お吉（中村駒次郎）新十郎（坂東三木藏）牛藏（中村森五郎）三郎右衞門（松本幸四郎）

○弘化四年七月、中の芝居「繪本殿下茶屋聚」
伊織、萬助、三浦之助（賓川延三郎）葉末（嵐三右衞門）彌助、造酒頭（市川市紅）秀秋、庄三郎（淺尾與六）大藏（賓川菊藏）おとく（賓川勇次郎）源次郎（尾上芙雀）お吉（藤川八藏）林平、伊三郎（三桝藏之助）妙珍、善八（中村歌四郎）操、新十郎（小川吉太郎）玄蕃、元右衞門、久七（片岡市藏）岸の頭、牛藏（市川市友）腕助、大江入道（中村友三）染の井、お時（中山南枝）三郎右衞門、刑部、幸右衞門（三桝大五郎）

○嘉永元年四月、河原崎座「音聞殿下茶屋聚」
三郎右衞門、彌助、萬助（松本錦升）操、おとく（市川新車）源次郎（坂東竹三郎）腕助、妙珍（大谷廣右衞門）鈴太夫、善八（澤村宇十郎）大藏、牛藏 坂東善次）お吉（尾上梅三郎）新十郎、傳吉（坂東佐十郎）伊三郎（幡谷七左衞門）葉末（市川團之助）造酒頭、刑部、庄三郎、久七（淺尾爲十郎）岸の頭、元右衞門（大谷友右衞門）染の井、お時（尾上梅幸）玄蕃、伊織、幸右衞門（坂東彦三郎）

○安政元年六月、河原崎座「會稽殿下茶屋聚」
三郎右衞門、彌助、久七（市川小團次）伊織、幸右衞門、三浦之助（嵐璃寛）源次郎（坂東竹三郎）岸の頭、刑部（淺尾奥山）秀秋、萬歳（嵐和三郎）腕助（松本國五郎）大藏、牛藏（坂東大次郎）伊三郎、傳吉（坂東佐十郎）お吉（坂東佳好）造酒頭、庄三郎（大谷友松）操、おとく（市川團之助）玄蕃、元右衞門、萬助（大谷友右衞門）染の井、お時（坂東しうか）新十郎、葉末（河原崎權十郎）

○萬延元年四月、市村座「名高殿下茶屋聚」
伊織、久七（河原崎權十郎）三郎右衞門、彌助、萬助（關三十郎）葉末（中村歌女之丞）造酒頭、新十郎（關花助）岸の頭、腕助（松本國五郎）牛藏（市川米五郎）伊三郎（坂東三八）玄蕃、刑部（市川米十郎）お吉（姉川源之助）妙珍、鈴太夫、善八（坂東村右衞門）操、おとく（吾妻市之丞）大藏、庄三郎（市川白猿）染の井、お時（岩井粂三郎）元右衞門、幸右衞門（市川小團次）源次郎（市村

羽左衛門）
この時は默阿彌の思ひつきで、伊織の夢に「戀闇忍常夏」といふ清元淨瑠璃を附けて、稍色氣を添へた。

○慶應三年四月、守田座「九字成帶錦新模」
彌助、一番目の東間（中村芝翫）伊織、おとく（澤村訥升）庄三郎、久七（坂東太郎）腕助、新十郎（中山現十郎）元右衛門（大谷友右衛門）伊三郎（坂東鶴藏）お吉（岩井米次郎）大藏（市川利根藏）操（岩井しげ松）妙珍、善八（中村雁八）葉末（嵐德之丞）源次郎（松本錦升）刑部、萬助（中村仲藏）染の井、お時（岩井紫若）幸右衛門、二番目の東間（坂東彥三郎）

○明治八年六月、新富座「復讐殿下茶屋聚」
彌助、萬助（市川左團次）操、お時（嵐大三郎）源次郎、新十郎（市川小團次）妙珍、善八（坂東喜知六）庄三郎、伊三郎（大谷門藏）お吉（尾上梅三郎）腕助、牛藏（尾上梅五郎）葉末、おとく（中村喜世三郎）三郎右衛門、刑部（中村芝翫）染の井（坂東秀調）元右衛門、久七（尾上菊五郎）伊織、幸右衛門（坂東彥三郎）

○明治二十二年七月、春木座「敵討天下茶屋聚」
元右衛門、久七（市川猿之助）彌助、幸右衛門（中村駒之助）染の井、お時（中村梅太郎）伊織、萬助（中村芝鶴）源次郎（市村竹松）三郎右衛門（坂東家橘）

○明治二十七年六月、春木座「復讐天下茶屋聚」
伊織（市川八百藏）染の井、岩井松之助）庄三郎、久七（市川右田作）源次郎（中村芝雀）伊三郎、おとく（吾妻藤藏）三郎右衛門（中村芝翫）幸右衛門（中村雀右衛門）傳吉（中村梅樹）大藏（中村七嘉助）葉末（中村芝童）お吉鈴太夫（淺尾關十郎）腕助（市川宗三郎）元右衛門、萬歲（中村勘五郎）お時（中村富十郎）彌助、萬助（中村駒之助）

○大正三年七月、歌舞伎座「敵討天下茶屋聚」
庄三郎、幸右衛門（中村吉右衛門）伊織（坂東三津五郎）源次郎、久七（守田勘彌）彌助、萬助（中村東藏）染の井、お時（尾上芙雀）葉末、おとく（河原崎國太郎）腕助（中村秀助）三郎右衛門（尾上榮三郎）伊三郎（尾上菊三郎）傳吉（市川新十郎）お吉（坂東玉之助）

花菖蒲浮木龜山

龜山仇討といふのも事實あつた出來事で、元祿十四年五月九日、勢州龜山の城下で、石井兄弟が亡父宇右衛門の仇、赤坂水之助を討つたのであるが、翌十五年早速「道中評判仇討」といふ淨瑠璃に仕組まれた。これを初演として、同じ材料が歌舞伎に淨瑠璃に、隨分數多く脚色されてゐるが、その中で最も喝采され、上演度數の最も多いのは、寛政二

年八月、大坂中座に書きおろされた「敵討千手護助劍」といふので、明治になつてからも隨分上演された脚本だ。この「花菖蒲」は即ち「千手護助劍」である「花菖蒲」といふのは、文化二年、江戸での初演の時の名題である。原作も殘つてゐるのだが、特にこの「花菖蒲」の方を採用したのは、割合ひ巧みにアレンジされてゐるし、文化以後は何れもこの臺本に依つて上演したからである。

「花菖蒲浮木龜山」のうち、「府中質屋の場」は、この時新作された場面で、「千手護助劍」には無い、併し、あまり面白い幕でもないので、この場だけは一度ぎりで廢滅してしまつた。そして、この幕のあるが爲に、原作の「島田宿新關の場」が省かれてゐる。併し、この新關の場は全曲中での愁嘆場だけに、京坂は勿論、江戸でも最近までいつでも上演されてゐる。必要な幕なので、本卷には特にこの「新關の場」だけを「敵討千手護助劍」から拔いて、「府中質屋の場」の次へ挿入して置いた。その結果、中野藤兵衞の女房が變つた名で双方の幕へ出て、筋が多少こんがらがる憾みがあるが、右の譯であるから、お讀み分けを願ひたい。

「敵討千手護助劍」は近松徳三の作である。近松徳三は寛政の末から文化へかけては、京坂で鳴らした作者で、生れは大枡屋といふ大坂伏見町の遊女屋であつた。幼名を勝助といひ、若い時から芝居が好きで、遂に近松半二の弟子となり、淨瑠璃から歌舞伎に轉じ、近松徳三と改め、寛政初年から認められ、四十四歳で立作者となり、以來澤山な脚本を書いてゐる。「伊勢音頭」「大川友右衞門」「樽屋おせん」「稻妻表紙」なぞは彼れの傑作である。後には徳叟の名を用ひた事もあつたが、文化七年八月二十三日、五十九歳で死んだ。

左にこの狂言の重なる興行年表を揭げる。

○寛政二年八月、大坂中の芝居「敵討千手護助劍」
兵衞、十左衞門(尾上新七)藤兵衞(三桝大五郎)兵助(中村京十郎)又四郎(姉川新四郎)兵次(坂東岩五郎)彌十郎(山村儀右衞門)水右衞門(山村友右衞門)おらい、岡野(吾妻藤藏)狹衣、おくら(山下八百藏)

○寛政三年三月、京都龜谷座「敵討千手護助劍」
水右衞門(片岡仁左衞門)兵衞、十左衞門(市川團藏)

○文化元年五月、大坂中の芝居「敵討千手護助劍」
岡野(中村君助)半次郎(藤川勝次郎)由兵衞、兵次(中山文五郎)兵助(淺尾爲十郎)藤兵衞(藤川八藏)水右衞門、彌十郎、又四郎(中山新九郎)おらい、狹衣(芳澤いろは)兵衞、十左衞門(尾上鯉三郎)

○文化二年四月、市村座「花菖蒲浮木龜山」
兵衞、十左衞門(助高屋高助)おらい、藤兵衞女房おせん(小佐川常世)兵助、多門之助、關助(澤村源之助)八

九郎（嵐新平）おさこ（桐島儀右衛門）撫子姫（市川瀧之助）藤四郎（市川鶯藏）助太郎（桐山紋次）おとき（中村春之助）次太夫（富士川國藏）由兵衛（市川七藏）左京之進（市川門三郎）八之丞、彌左衛門（嵐冠十郎）美の尾（山下萬作）與助、又四郎（澤村東藏）岡野、おしづ、おくら（瀨川路之助）半次郎（市川團十郎）藤兵衛、水右衛門（松本幸四郎）

○文化八年七月、大坂角の芝居「敵討千手護助劍」

水右衛門、又四郎、兵次（大谷友右衛門）八之丞（淺尾奥山）十左衛門、彌十郎（嵐吉三郎）藤兵衛（嵐來芝）兵衛、由兵衛（中山來助）兵助（尾上新七）狹衣（中山よしを）おくら（叶珉子）おらい（澤村其答）岡野（中村粂太郎）おとき（嵐福松）

○文化十四年五月、中村座「忠孝菖蒲刀」

水右衛門（松本幸四郎）彌十郎、兵助（尾上菊五郎）左京之進（中村七三郎）關助（坂東彦三郎）藤兵衛女房おりつ（中山龜三郎）みの尾（坂東三津三）次太夫（市川宗三郎）八之丞（松本小次郎）由兵衛（市山七藏）兵衛娘おとせ（松本よね三）半次郎（坂東簑助）兵次、又四郎（市川友藏）岡野（山科甚吉）兵衛、多門之助、藤兵衛（關三十郎）おらい、おくら（中村大吉）十左衛門（坂東三津五郎）瀨平（中村傳九郎）

○文政八年九月、大坂角の芝居「敵討千手護助劍」

十左衛門（坂東壽太郎）兵衛、藤兵衛（嵐橘三郎）おとき（中村琴糸）狹衣（嵐富三郎）八之丞、兵次（淺尾奥山）半次郎（淺尾與三郎）兵助（市川市藏）由兵衛、岩倉主膳（市川助十郎）又四郎（淺尾國五郎）おらい、おくら（中村歌六）水右衛門、彌十郎（市川鰕十郎）岡野（中村歌路之助）

○天保十年五月、市村座「花菖蒲浮木龜山」

おらい、おくら（岩井杜若）水右衛門、彌十郎（嵐吉三郎）半次郎、岡野、おりつ（坂東玉三郎）瀨平（市川升五郎）次太夫（坂東又太郎）八之丞、權太郎（惣領甚六）左京之進（中村鶴五郎）おとき（吾妻橋之助）由兵衛（大谷萬作）兵次、關助、又四郎（嵐冠十郎）十左衛門、兵衛（市川九藏）兵助、藤兵衛、多門之助（市村羽左衛門）

○弘化三年七月、河原崎座「御誂龜山染」

多門之助、兵衛、藤兵衛（坂東彦三郎）岡野（小佐川常世）半次郎（尾上松助）由兵衛、關助（淺尾爲十郎）次太夫（大谷廣右衛門）八之丞（市川團八）撫子姫（尾上榮次郎）瀨平（橘谷七右衛門）おとせ（市川團之助）左京之進、兵助（中村芝雀）十左衛門（澤村宗十郎）兵次、又四郎（大谷友右衛門）おらい、おりつ、おくら（尾上菊次郎）水右衛門、彌十郎（市川團十郎）

○安政二年七月、河原崎座「蝶衛鶴山染」十左衞門、兵助(片岡我童)兵衞、多門之助、藤兵衞(嵐璃寛)左京之進(河原崎權十郎)由兵衞(淺尾奥山)半次郎(片岡待之助)次太夫(坂東大次郎)八之丞(嵐冠五郎)岡野(嵐橘蝶)瀨平(嵐德藏)みの尾、おとき(中村喜千三)關助(嵐和三郎)おらい、撫子姬(市川團之助)兵次又四郎(大谷友右衞門)水右衞門、彌十郎(嵐吉三郎)おりつ、おくら(中村大吉)

○安政二年八月、大坂中の芝居「敵討優曇華鎚山」由兵衞、兵助(實川延二郎)狹衣(中山一蝶)半次郎(實川延太郎)兵次(淺尾爲十郎)水右衞門(市川海老藏)おらい(中山登美二)兵衞(市川助壽郎)又四郎(中山文五郎)十左衞門、藤兵衞(三桝大五郎)彌十郎(市川團藏)

この時は院本の筋と揚交ぜになつてゐた。

○文久二年五月、市村座「菖蒲合仇討講談」彌十郎(河原崎權十郎)藤兵衞(中村芝翫)おらい、おくら(市川新車)由兵衞(關花助)八之丞(坂東三八)水右衞門、兵次、又四郎(關三十郎)半次郎(市村竹松)關助(中村兒雀)おりつ、岡野(中村歌女之丞)兵衞、十左衞門(市川團藏)兵助、多門之助(市村羽左衞門)

○明治四年六月、守田座「元祿曾我金瓶山」十左衞門(中村翫雀)藤兵衞(市川左團次)岡野、おりつ(河原崎國太郎)半次郎(市川子團次)由兵衞(中村翫太郎)兵次(中村鶴藏)次太夫(山崎巴多右衞門)八之丞(山崎國五郎)左京之進(市川桃猿)瀨平(山崎幸升)みの尾(岩井しげ松)多門之助、兵助(嵐璃珏)兵衞(關歌助)水右衞門、彌十郎(河原崎權之助)

昔語黃鳥墳

鶯塚の仇討については別に實說らしい事實も傳はつてゐないが、佐々木源太左衞門といふ同姓同名の善惡二人の人物が現はれたり、全體にわたつて鶯がいつも禊になつてゐたりする點など、仇討狂言としては頗る變つてゐる方で、何か據り所があつたのであらう。これを初めて脚色したのは、文化九年で、竹田の芝居らしいが、「長柄長者黃鳥墳」の名題で、市川團三郎が河内の源太左衞門と源之助を勤めたとばかり、詳しい事は解らない。この時の作者には、奈河九二助、奈河十八助、井筒一齋等の名が見えてゐるが、眞の作者もハツキリしない。その後も、濱芝居でぼかり行はれてゐたのを、初代澤村訥升(現宗十郎の祖父)が、濱芝居に出てゐたところから覺えてゐて、江戶へ落ちついてから天保二年五月、「昔語黃鳥墳」と題し、河原崎座で上演したところ、江戶では初めてゞ珍らしいので無暗と歡迎されて大入を取つたので、その後訥升も二三度出し、遂には紀

伊國屋のお家藝と鑑定が附いて、代々の宗十郎が必ず演じるまでとなり、今日に傳はつてゐる。

本卷に收容したのは、天保三年、江戸での初演脚本である。原作を捨てゝこの方を採つたのは、「敵討千手護助劍」を捨てゝ「花菖蒲浮木龜山」を採つた理由と全く同じである。

左に年表を掲げて置く。

○文政八年十月、京都北側芝居、及同年十一月、大坂堀江市の側芝居「長柄長者黄鳥塚」

作左衞門(淺尾額十郎)與三右衞門、十三郎(小川吉太郎)長者(櫻山四郎三)しがらみ(渚の役。藤川友吉)幾代(嵐かのふ)藏之進(十左衞門の役。大谷紫友)源吾、玉木(嵐舍丸)梅ヶ枝、八重機(澤村國太郎)多賀源太左衞門、忠太夫(大谷友右衞門)河内源太左衞門、源之助(市川團藏)

○天保三年五月、大坂堀江市の側芝居「長柄長者黄鳥塚」

作左衞門(市川白藏)作内(市川團三郎)幾代(中山南枝)梅ヶ枝(藤川友吉)與三右衞門(中山文七)藏之進、忠太夫(小川吉太郎)源吾、大仁坊(坂東國五郎)多賀源太左右衞門、玉木(大谷友右衞門)河内源太左衞門、源之助(市川團藏)

○天保三年五月、河原崎座「昔語黄鳥塚」

河内源太左衞門、源之助(澤村訥升)梅ヶ枝、八重機(嵐龜之丞)作内、十三郎(市川高麗藏)渚(叶みんし)玉木(尾上梅五郎)清三郎(中島勘藏)勝介(澤村銕之介)長者、次郎太夫(松本たい助)櫻木(澤村東藏)十左衞門、忠太夫(嵐七五郎)幾代(瀬川路之助)辨次(澤村紀次)源吾、大仁坊(大谷友右衞門)與三右衞門、作左衞門(市川壽美藏)左門之頭、多賀源太左衞門(松本幸四郎)

○天保六年九月、大坂角の芝居「裲袍黄鳥塚」

河内源太左衞門、源之助(中村芝翫)藏之進(實川八百藏)幾代(嵐璃光)梅ヶ枝、八重機(中山南枝)作内(中村鶴十郎)玉木(中村蘭九郎)長者、源吾(中村東藏)渚(嵐かのふ)十三郎、忠太夫(小川吉太郎)多賀源太左衞門、大仁坊(淺尾工左衞門)作左衞門、與三右衞門(實川額十郎)大内記(左門の頭の役。中村歌右衞門)

○天保八年九月、森田座「増補黄鳥塚」

河内源太左衞門、源之助(澤村訥升)渚、幾代(小佐川常世)源吾、大仁坊(大谷友右衞門)忠太夫、十三郎(市川清十郎)辨次(澤村紀次)玉木(片岡虎五郎)作左衞門、與三右衞門(坂東彦三郎)作内(坂東佐十郎)次郎太夫、長者(松本たい助)清三郎(山科甚吉)櫻木(澤村仲之助)梅ヶ枝、八重機(坂東玉三郎)多賀源太左衞門、十左衞門(坂東三津五郎)

○嘉永元年九月、大坂中の芝居「長柄長者黄鳥塚」
源之助(實川延三郎)作左衞門(尾上松壽)十三郎(市川市紅)作内(三桝源之助)長者(坂東大六)渚(實川勇次郎)幾代(中村大吉)多賀源太左衞門、藏之進、忠太夫(片岡市藏)源吾、大仁坊(市川市友)玉木(中村友三)梅ヶ枝、八重機(中山南枝)河内源太左衞門、與三右衞門(三桝大五郎)

○嘉永四年五月、河原崎座「鶯塚長柄故」
多賀源太左衞門、十左衞門(市川海老藏)與三右衞門、源吾(關三十郎)忠太夫(市川男女藏)作内(尾上梅助)幾代(市川團之助)玉木(澤村宇十郎)十三郎(澤村鈫次郎)作左衞門(尾上新七)長者、辨次(松本國五郎)勝介(市川猿三郎)櫻木(坂東佳好)清三郎(市川猿藏)大仁坊(淺尾奥山)渚、梅ヶ枝(尾上梅幸)河内源太左衞門、源之助(澤村長十郎)

○明治三年五月、守田座「花菖紀念畫双紙」
作左衞門、與三右衞門(中村芝翫)幾代、渚(澤村其答)十三郎(中村芝歙之助)勝介(澤村米助)櫻木(尾上多賀之丞)清三郎(市川小團次)長者(中村翫太郎)辨次(中村鶯助)源吾、左門之助、忠太夫(市川左團次)十左衞門、作内、玉木(坂東太郎)多賀源太左衞門、大仁坊(中村仲藏)梅ヶ枝(岩井紫若)河内源太左衞門、源之助(澤村訥升)姉織江(土手場の渚の代り。澤村田之助)

○明治七年二月、澤村座「河内國名所鶯塚」
忠太夫、十左衞門(中村壽三郎)作内、玉木(大谷門藏)作左衞門(市川照藏)櫻木(坂東吉彌)大仁坊(市川荒次郎)與三右衞門(坂東太郎)長者(澤村い十郎)梅ヶ枝(坂東佳志久)源吾(澤村しやばく)渚、幾代(澤村千鳥)源之助(澤村訥升)

○明治十四年一月、市村座「新賀初音鶯」
多賀源太左衞門、與三右衞門(片岡我童)渚、幾代(河原崎國太郎)大仁坊(片岡市藏)櫻木(岩井松之助)長者(中村相藏)清三郎(片岡仁三郎)次郎太夫(中村成藏)作左衞門、作内、多門の頭(片岡我當)忠太夫(市川新十郎)源吾、玉木(中村時藏)梅ヶ枝(澤村田之助)河内源太左衞門、源之助(助高屋高助)

○大正二年四月、帝國劇場「鶯塚」
源之助(澤村宗十郎)忠太夫(尾上松助)源吾、大仁坊(尾上菊四郎)渚(初瀨浪子)梅ヶ枝(佐藤千枝子)幾代(村田嘉久子)玉木(藤間房子)長者(澤村宗五郎)與三右衞門(澤村宗之助)櫻木(小林延子)

敵討浦朝霧

明石の殿樣、松平兵部大輔齊宣が切捨て御免といふ暴君

振りを發揮し、獵夫源内に狙撃されたのは、文化元年六月にあつた事で、それを材料にしてこの狂言が出來たのであるが、別に那智山の女順禮殺しも、當時あつた事實を書き込んだのだと云はれる。作者は奈河晴助で、文化十二年九月の大坂中座が初演である。江戸では只の一度きりしか上演してゐないが、京坂では、なか〱歡迎された狂言なのである。主人公の傳内を勤めた二世嵐吉三郎は、男前もよかつたが、辯舌が非常に爽かであつた爲、いつも作者に依頼して筋を思ひ切つて複雜にしてもらひ、看客を煙に卷いて置き、後に性根場へ行くと抑揚自在の長ぜりふで、疑問の事件を片端から解決してゆくのが、得意であつたと傳へられてゐる。成る程、この脚本の「笹屋の場」などで見ると、それが事實であつたらしい事が解る。

奈河晴助は鶯助の門人で、京都に生れ、宮島屋嘉兵衛といつたが、素人俄が好きなところから劇場へ入り、京都の小劇場で筆を取つてゐたが、西澤一鳳の父に勸められて大坂へ行き、多くは吉三郎の爲に脚本を書いてゐた。後には豐晴助と改め、文政九年正月二十九日、四十五歳で死んだ。彼れの作には、この「浦朝霧」の外に、「朝顔日記」「永井源三郎」等が有名である。

「箱根山の場」は三世瀨川如皐が、「忠臣藏後日達前」の中へ、潮田又之丞遺族の役名に直して書きこみ、また默阿彌は「狹間軍紀成海錄」桶狹間合戰を增補した時、南岩寺松原の場へ趣向の一部を書き入れ、共に今日まで殘つて、原作の俤を幾分でも見せてゐる。

左に興行年表を附けて置く。

○文化十二年九月、大坂中の芝居「敵討浦朝霧」

右兵衛之助、傳内(嵐吉三郎)大弼、巖山(嵐冠十郎)松兵衛、半兵衛之助(淺尾工左衛門)杢之進、勝野、數馬(中山文七)浪平(中山來太郎)軍八、雲生寺(嵐團八)内記(嵐猪三郎)里姫(尾上鯉三郎)繼橋(中村里好)滿月、おふさ(中村歌六)おきよ(叶珉子)關屋(芳澤いろは)お須磨の方(澤村田之助)

○文政五年九月、市村座「敵討名歌曙」

杢之進(市川男女藏)浪平(坂東彥三郎)大弼、長九郎(淺尾友藏)關屋(市川おの江)松兵衛、雲生寺、半兵衛(澤村四郎五郎)土岐之助、數馬(市川茂々太郎)繼橋、おふさ(吾妻藤藏)軍八、巖山(大谷馬十)お須磨(岩井かほよ)内記、勝野(市川雷藏)おきよ、滿月(市川門之助)右兵衛之助、傳内(市川團十郎)

○文政九年正月、大坂堀江市の側芝居「けいせい浦朝霧」

おきよ(嵐小六)右兵衛之助、傳内(嵐橘三郎)里姫(中山由男)繼橋(山下富三郎)軍八(中山文五郎)主計(水木卯左衛門)土岐之助(市川三十)杢之進(嵐松之助)岩

平、巖山、與五助（三桝松五郎）雲生寺、鈍願（澤村長四郎）關屋（山下八百藏）滿月（市川門之助）浪平（嵐三五郎）お須磨、おふさ（嵐璃光）大弼、半兵衞（淺尾國五郎）松兵衞、數馬（嵐來芝）勝野（中山喜樂）

○天保三年九月、大坂中の芝居「拂曉浦朝霧（ほのぼのとうらのあさぎり）」

勝野、半兵衞（坂東壽太郎）松兵衞（淺尾工左衞門）お須磨（岩井紫若）右兵衞之助、傳内（嵐璃寛）里姬（中村歌妻）李之進、内記、數馬（市川助十郎）巖山（淺尾爲十郎）土岐之助（嵐小七）繼橋（片岡松江）岩平、與五助（三桝松五郎）磯浪、鈍願（澤村長四郎）關屋、おふさ（嵐德三郎）軍八、雲生寺、長九郎（中村友三）滿月（中村歌女）おきよ（中山きよし）浪平（坂東彦三郎）大弼（片岡仁左衞門）

○天保十三年九月、大坂角の芝居「敵討浦朝霧」

右兵衞之助、傳内（尾上多見藏）李之進（中山文七）滿月、おふさ（中村巴枝）里姬（中村梅花）おきよ（中村富十郎）軍八、磯浪（淺尾奥山）關屋（淺尾彌太郎）内記、勝野（中山新九郎）鈍願（中山半蝶）浪平（尾上登龍）主計（中村市藏）岩平（淺尾淺五郎）繼橋（瀨川路之助）巖山、與五助（中山文五郎）お須磨（山下金作）大弼、半兵衞（淺尾與六）土岐之助、數馬（中村歌七）松兵衞、雲生寺（淺尾工左衞門）

敵討（かたきうち）高音鼓（たかねのたいこ）

謠曲の「富士太鼓」を原にして、曲亭馬琴が小說「三國一夜物語」を著はしたのは、文化三年であつた。敵討物全盛の當時であつたから、これは非常に行はれた。文化五年八月、大坂角座では、これを脚色上演した。「敵討高音鼓」がそれで、作者は奈河篤助であつた。當時京坂では小說の脚色が非常に流行したので、興行主の需めに應じて「三國一夜物語」を見出したのだつたが、淺間左衞門の徹底した强惡振りが面白いのと、樂人の仇討といふ目先の變つてゐる點とが看客に受けて、その後も度々上場された。

本集へ收錄した臺本は、後に濱芝居あたりで手を入れたものらしい。あまり上手な直し方ではないが、小說の本筋へは、却つて忠實になつてゐる。

年表は左の通りである。

○文化五年八月、大坂角の芝居「敵討高音鼓（かたきうちたかねのたいこ）」

右門、富士太郎（嵐三五郎）三雲、浪路（中山富三郎）櫻子（澤村田之助）浪江（芳澤いろは）卯原（淺尾奥山）五四郎（中山新九郎）淺間（片岡仁左衞門）

○文政元年九月、大坂角の芝居「敵討高音鼓」

右門、富士太郎（嵐三五郎）義春、國平（市川市鶴）浪江（佐の川花妻）櫻子（市川門之助）卯原、五四郎（淺尾國

五郎）三雲、浪路（中村松江）兵助（富士松山十郎）淺間（市川鰕十郎）

○天保二年九月、中の芝居「復讐高音鼓」
富士太郎（市川團藏）五四郎（市川新四郎）三雲、浪江（澤村國太郎）兵助（小川吉太郎）櫻子（中村梅花）平馬（嵐舍丸）國平（市川重太郎）義春（市川虎藏）卯原（淺尾國五郎）右門（淺尾額十郎）浪路（中村松江）淺間（中村歌右衞門）

○天保九年七月、河原崎座「晴鼓雲井曲」
櫻子、浪江（尾上榮三郎）卯原、五四郎（大谷友衞門）義春（市川門藏）國平（市川三藏）三雲、浪路（淺尾勇次郎）右門、富士太郎（市川九藏）淺間、兵助（市川海老藏）

○天保十年九月、大坂角の芝居「復讐高音鼓」
淺間（中村芝翫）富士太郎（片岡我童）三雲（嵐かのふ）浪江（中山一德）義春（淺尾友藏）兵藏（市川新十郎）國平（中村壽郎）卯原（淺尾工左衞門）平馬、五四郎（中村友三）櫻子、浪路（中山よしを）右門、兵助（市川助壽郎）

○弘化三年七月、大坂角の芝居「内百番富士太鼓」
右門（市川三猿）富士太郎（嵐璃珏）國平、兵助（澤村源之助）浪花（中村琴三郎）三雲、浪江（叶雛助）櫻子、浪路（中村歌六）義春（市川猿藏）五四郎（中山文五郎）卯原（中山文七）淺間（市川海老藏）

年表作製に際しては、山形の秋葉芳美氏に多大の御援助を受けました。末筆ながら謝意を表します。

編輯校訂　遲美清太郎
責任　鈴木　侃

日本戯曲全集・第十九巻
歌舞伎篇・第三回配本

編纂者検印

禁無断上演

昭和三年六月二十二日印刷
昭和三年六月二十五日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
四四一五
振替東京　一六一七

製版所　東京市小石川區久堅町・共同印刷株式會社

小石川區・久堅町・共同印刷株式會社印刷